THE CENTRAL REVIEW

中央公論

二月號

第三十八年　第二號　第四百八十號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



今や社會はあらゆる方面に
健腦の人を要求す
故にあらゆる腦神經病者は
腦病良藥 健腦丸 を要求す

醫科博士證明
腦病良藥
健腦丸
KENNOGWAN

主効

腦充血 神經痛 頭痛 眩暈
腦膜炎 腦貧血 耳鳴 健忘
逆上症 卒中 中風 便秘

特長

逆上を引下げ、便通をよくし怖るべき中風卒中を未發に防ぎ腦充血を快治し記憶力を増進す。

改正價樂

五回分	參拾錢
四日分	六拾錢
一週分	壹圓
二週分	壹圓八拾錢
三週分	貳圓六拾錢
五週分	四圓
十週分	七圓

全國各藥店に取次す

本舖 大阪市順慶町 東京市[illegible]屋町 丹平商會藥房

卑猥なる廣告の申込みは謝絶す　中央公論社

宮内省藏版
文部省發行
印刷局印刷

明治天皇御集

十二月一日發行　十二月五日發賣

明治天皇が歌聖にましまして御製の數も非常の多數に上つてゐる事は、我々臣民の間でも夙に傳へ承つてゐる所である。宮内省では大正五年十月二十一日旨を奉じて臨時編纂部を設け、部長に入江子幹事に故近藤久敬顧問に故山縣公、故德大寺公、故黒田子委員に井上通泰、長谷信成、東坊城德長、坂正臣、池邊義象、大口鯛二、千葉胤明、佐々木信綱、故須川信行を任じ其他書記、囑託若干名を置きて御集編纂の任に當らしめられ、同八年十二月二十日編成を奏上せられた。此御集は幾萬の數多き御製の中から千六百八十七首を抄され、明治天皇御集と題し、若干部を印刷に附して先般夫々の向へ御下賜になつたのである。御集は實に金玉の響で國民一般が天皇の御盛德を仰ぎ奉る資料として、又日常修養の鑑として最も適當のもので、六千萬國民が日常謹誦すべきものであるから、宮内省と文部省と協議の結果、印刷局で印刷の上文部省で發行し、當會から發賣すること、なつた。

此御集は木版本と活版本との二種であるが、其内容には少しも變りはない。木版本は專ら宮内省所藏の木版本を紙型に取り、御下賜のものに擬して裝釘しつとめて原本の體裁を存することを目的としたもの、活版本は文部省で變體假名を普通のものに改め、濁點を附し、更に卷末に索引を添へられたもの〻極めて價格を低廉にし廣く普及せしめることを目的としたのである。希望の向は本會に申込まれたい。

木版本
美濃版形和紙和裝
上、中、下 全三册 二百四十五枚
一部定價 十圓
送料 内地 十八錢（臺樺 四十錢 鮮、關 五十五錢）

活版本
菊版形和紙和裝
全一册 三百十四頁
一部定價 一圓五十錢
送料 内地 十二錢（臺樺 三十錢 鮮、關 四十五錢）

御集發行に付 文部大臣の辭

今回宮内省に於て明治天皇御集の編纂成り、思召を以て夫々へ下賜せられたり。此の御集は、明治天皇の御盛德を仰ぎ、御仁慈の大御心を偲び奉るに最も適當なるのみならず、又實に國民にとりて修養の鑑たるべく、教育上にも極めて有益なるを以て、宮内大臣と協議の上、刊行して廣く之を頒布することとせり。此の御集が普く國民に捧讀せられんことは予の切に希望する所なり。

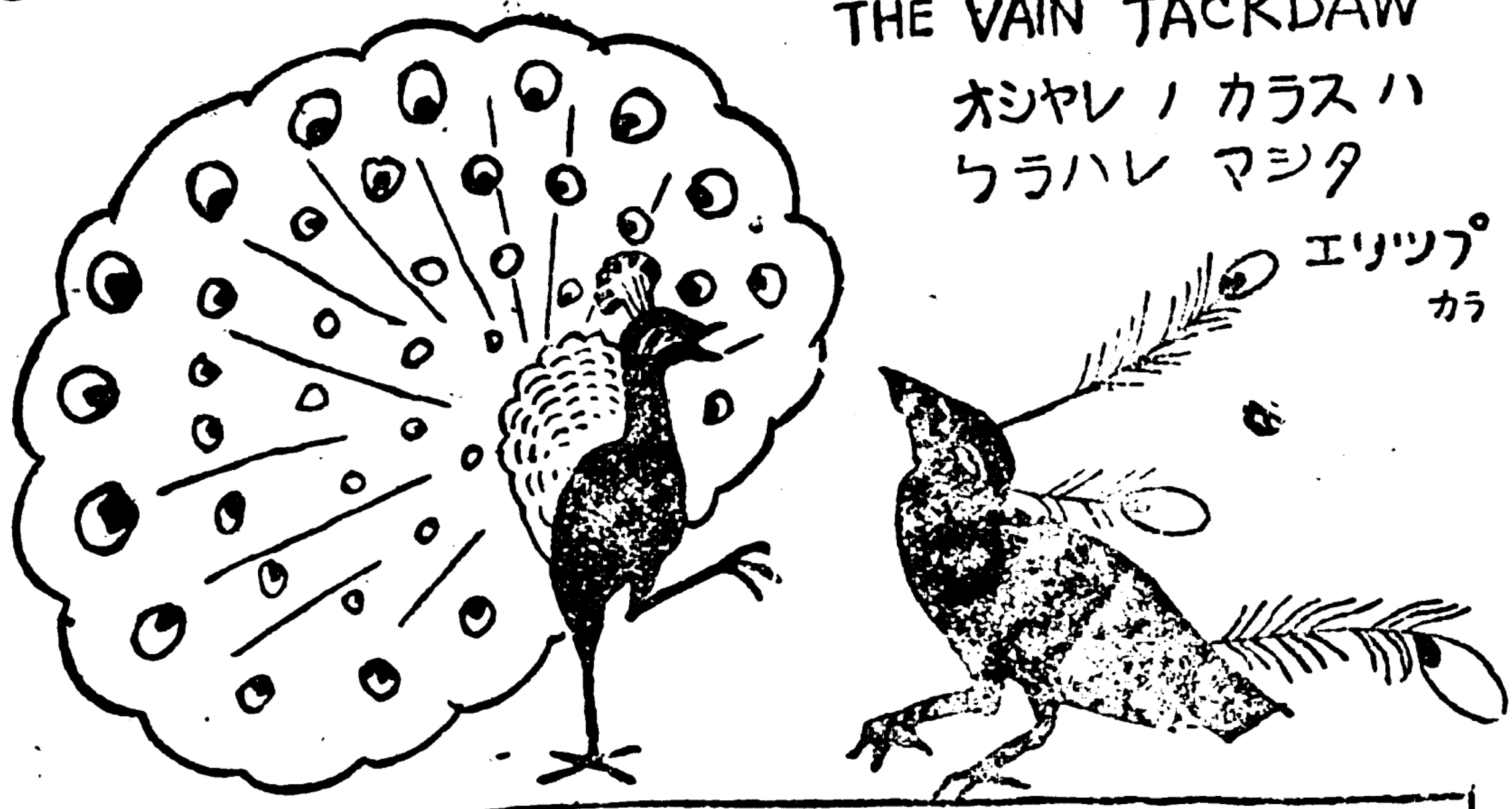
大正十一年九月
文部大臣 鎌田榮吉

發賣所
印刷局内 朝陽會
振替口座東京四三六〇五番

内地各官報販賣所及全國著名書店にて販賣す

THE VAIN JACKDAW

オシヤレノ カラス ハ
ワラハレマシタ



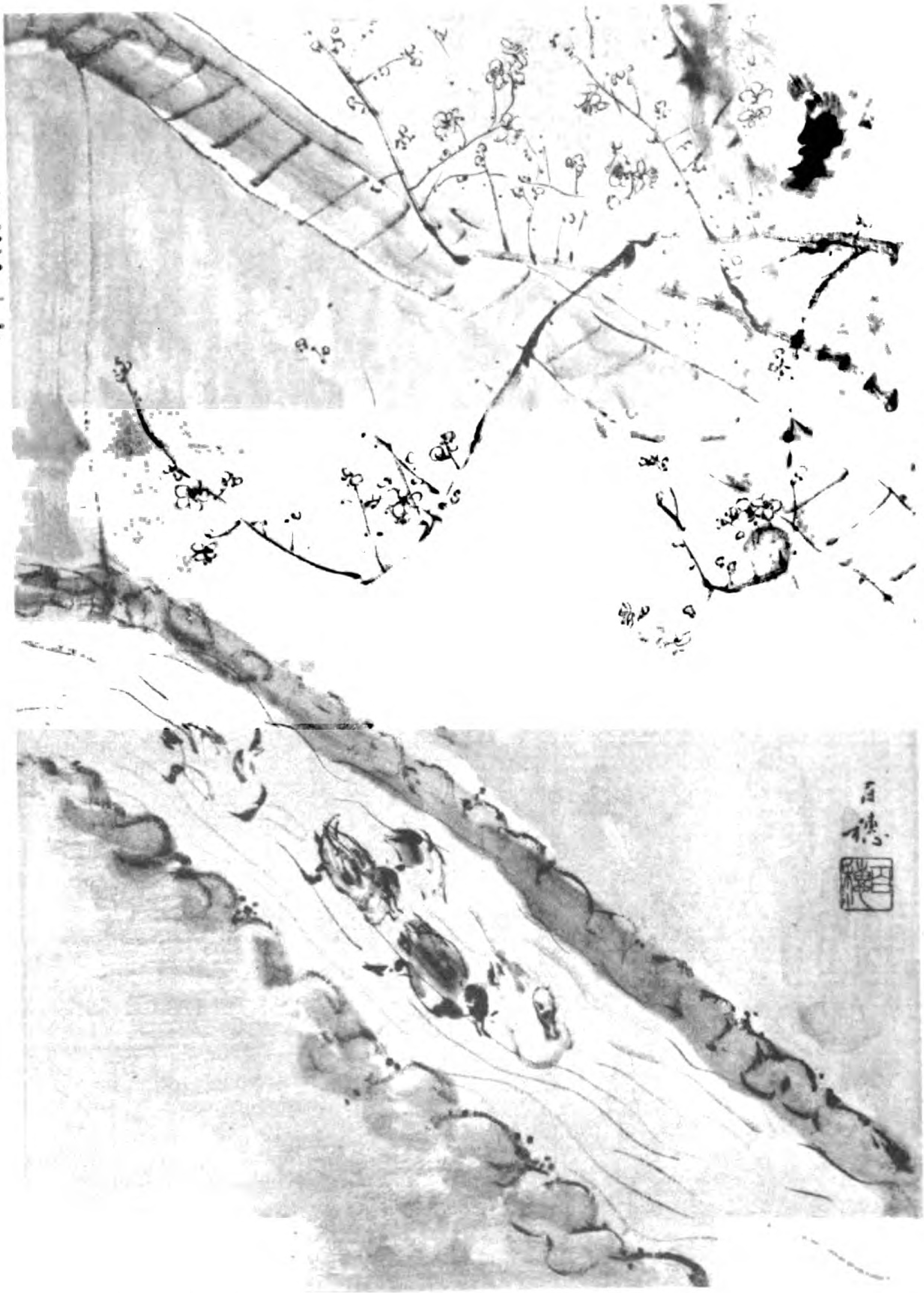
冬の化粧水は
オイデルミン
クリームは
コルードクリーム
カンフアアイス
スムーシンクリーム
油は花椿
フローリン
石鹸は資生堂青石鹸

東京 資生堂 銀座
大阪市東區南久寶寺町四丁目

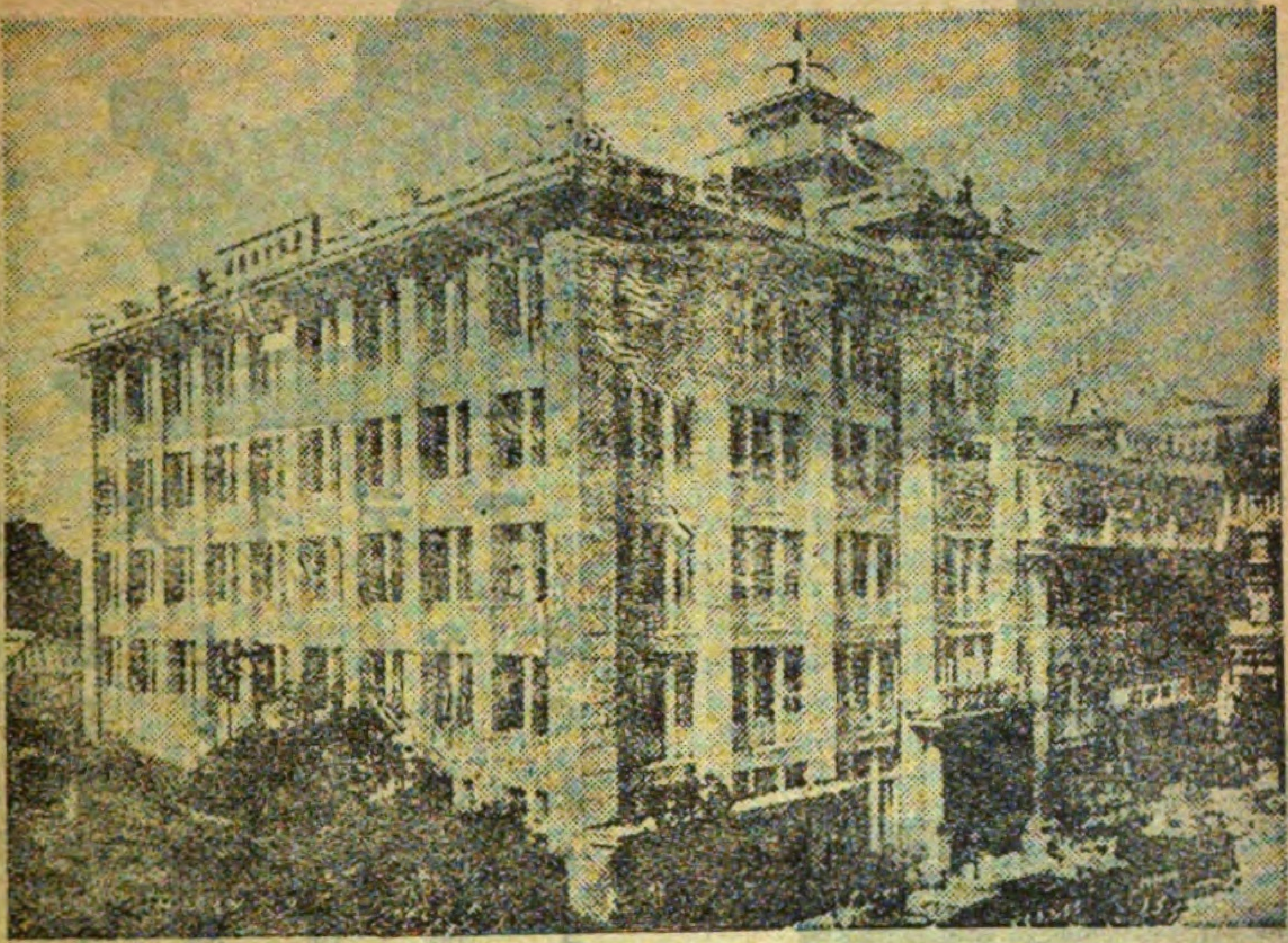

帽子は季節により
それ〳〵適當のものを冠らねばなりません
もう此頃は冬の帽子が去つて、春の帽子
にうつらうとしてをります
純品質主義
鷹印帽子
御承知の如うに鷹印帽子は帽子として
の趣味から見ても紳士階級の生活として
の意義から考へても諸氏の御滿足を得るた
めに全力を捧げてをります帽子は鷹印と御決
定を願ひたう御座います
大阪 株式會社 高橋製帽所



御撰擇が肝要
結局…一番確かな
プラトン萬年筆
プラトンインキ
万年筆用
學生用



春　　平福百穂筆



報道本位にしてしかも讀者の智識と趣味とを反映し、世界精神を貫いてしかも日本國民性を失はざる文化的新聞を見よ。記事の正確と迅速、批判の穩健と犀利はわが「東京日日」の

東京日日新聞

特色である。最新式高速度輪轉機、無線電話等現代文明に適應せんとして新聞界を聳動せる設備をなしたのもわが社の敢へて誇りとするところのものである。

一部金四錢
郵送一ヶ月一圓
三ヶ月二圓九十錢

東京丸の内 東京日日新聞發行所

振替口座東京
二八〇〇番

大正十二年

中央公論

二月一日發行

二月號

第卅八年第二號

第四百十八號

人類の文化開展に於ける種子・地盤・光熱の三要因

樹を植えて良き實を結ばしめんが爲には種子と地盤と裕なる光熱と三ツの條件が揃はねばならぬ。文化の發展乃至價値の創成にもまた同じ様なことが云へる。

地盤が惡るければ折角の良種も伸びやうがない。御天道様も畢竟無駄光りだ。故に良農は先づ地の肥瘦を吟味する。外に仕様が無いとなれば施肥に依て土質の改善をさへはかる。而して是れ取も直さず現代に於て社會改造の大に叫ばるゝ所以ではないか。

現代のやうな悪組織の社會を地盤として立派な人文的果實の結成を期待す可らざるは言ふまでもない。從て現代に在てかの所謂社會改造は實に焦眉の急務だ。此點に於て吾人は世上多くの社會運動家等の努力を多とするものである。けれども若し當代の文化運動は所謂社會改造に盡くと爲す者あらば吾人は殘念ながら其識見の淺劣なるを咎めずに居られない。

地盤は畢竟生命發育の條件だ。斷じて其の原因ではない。原因は實に種子其者の中に潜在するのである。而して這個生命の潜在原因を促して自發的に發芽生長せしむるものは、固より地盤の能くする所ではない。この第二段の而してより根本的な働を司る者は實に太陽の光と熱とでないか。換言すれば萬物の化育を司る自然の溫情ではないか。この自然の裕なる溫情に觸れて始めて死者の如く頑ななりし種子は、自らの生活力を意識して自ら其本質を發展せんとするの意思を喚び醒さるゝ。人類愛の宗教的情操の人生に於ける文化的意義は主として茲に在ると思ふ。

人類愛と社會改造とは文化開展に於ける二大要因だ。宗教と科學と提携すべきものなるが如く、愛の宣傳は社會改造の運動と互に相排斥してはならぬ。兎を追ふ者は山を見ず。自己の立脚する處に狹く觀點を局限し、一面の姿相を以て全斑を推さうとするときに、ともすると悲むべき破綻は起るものだ。世上幾多の奉仕獻身の士よ。諸士は今この大局に眼を投じて實質的協力の途をもつと明に觀るの必要を感ぜぬか。

地盤と光熱との問題に次いで起るのは種子そのものの問題だ。種子の問題になるとこゝに自然的觀察と理想的觀察との岐れ目が注意さるる。動植物の種子は進化論などの示す如く何處までも自然科學的因果律の支配を

脱し得ない。悪種より良果を得るの見込は絶對にないから、良果を穫んとするものは常に良種の選擇に注意する。加之これは畢竟人類の用を爲すものに過ぎず、其自身に目的を有するものでないから、質の良否に由て選擇を嚴重にするは差支なき事でもあり又必要な事でもある。之と同じく、昔人民は國王貴族の用を爲す者と考へられて居た時代には、恣に民の部族を分ち其間に待遇の厚薄を附せられたことがある。併し乍ら今日は最早四民平等の世の中となつた。すべて人は其自身目的の主體であると決められた。質の良否を分劃して之を遇するの道を異らしむることは許されない。强き者にも弱き者にも各々其處を得しむるが是れ近代デモクラシーの一特徴だといふは實に玆處から來る。

更にも一つ突き進んで考へねばならぬことは、現代の思想は何故に質の良否に由て人を分劃するを許さぬかの點である。そは外でもない。人類に在ては他の自然物の如く遺傳其他の自然的因果律に支配さるゝ方面よりも、彼は單に人類なるが故に本來無限に向上發達するの可能性を具有すとされ、この可能性を有するの點に於て萬人は平等と認めらるゝからである。地盤が悪い爲に又光熱に浴するの薄かりしが爲に、人類の中には十分伸び得ずして終るものはあらう。併し彼は其環境さへ順當のものであつたなら、必ずや人類としての本來の面目を發揮し得た筈だ。自然物の如く親が乞食であつたから忰はどうせ碌な者にはなれまいと云つた樣な因果的約束に縛らるゝものではない。人格的本質に於て甲乙優劣の差ある筈なしとするのが即ち當代の理想的人生觀だ。故に此立場よりすれば、假令人類は其自身目的の主體でないとしても、質の良否を分劃選擇するの必要はないことになる。必要なるは唯地盤の良否を吟味することである。豐裕なる人類愛的溫情を潤澤に流れしむることである。

理想主義の立場を社會改造運動の邪魔物・考ふることの如何に淺果敢なものであるかは此上說明するまでもなく明白であらう。理想主義の立場は人類のすべてに謂はゞ佛性を認め、而して其の本質的發展の礙げらるゝは一に物的環境に在りと爲すのだから、それ丈け社會改造の急務を感ずるものではないか。社會を改造したつて裕なる光熱の放射がなくば芽は出まい。而してこの人類愛の溫情はすべての人皆佛性ありとの信仰を背景としなくては容易に生じ得ないのではないか。

理想主義、人類愛、社會改造。協戮は生命の發育だ。劃據は人生の破綻だ。近代文化の諸問題は結局根本に於て這般の點を如何に觀るかに歸すると思ふ。

中央公論



第卅八年第二號
二月號
第四百十八號

社會觀の基礎概念と純人生理論

杉森孝次郎

一　社會的または人生的事實を對象とする研究に於ける規範的認識の可能と方法

最初にことばありきと使徒ジョンはいふた。けれども、もしも、われらが、そのことばの意義を、ある明確なる觀念を生命とし、本質とし、中樞要件とし、乃至唯一の存在理由とする音聲または形象にかぎるならば、かれがさういふたのはかれの過失であつた。われらがその過失に氣づかないならば、それはわれらの蒙昧だ。

ことばに於ける觀念的要素としての意味は、生具でなく、獲得だ。ことばの歴史には、意味以前の時代がある。多少

盲目的な行動がその時代を形成する。純眞なる作詩の過程に於いてこの法則は殊に顯著だ。純眞な　作詩の過程に於いては、各瞬間の現實は、比較的に感情だ。觀念はその感情に胚胎されて存在するにすぎない。しかるに感情は觀念に比してはるかに餘計に行動だ。およそ、行動の一特徵は、獨自性にある。觀念は再産される。行動はその場かぎり、その時かぎりだ。それゆゑに、觀念は科學に、そして行動は歷史に、それ〴〵別のしかたに於いて代表される。歷史の第一特徵は決してくりかへされないにある。科學の第一特徵はいくらでもくりかへされるにある。普遍妥當が科學の必要だ。特殊妥當が歷史の必然だ。情意またはそれの外觀としての行動に支配的位置を與ふる近代の人格說が、個性說と完全に相理解するのはすこしも偶然でない。最初にことばありきと、われらが眞實にいひうる場合は、最初に行動ありきと、われらが、一層用心深い表現としては、いふべき內容をそれが帶びる場合にかぎる。最初の存在としてのことばは、意味としてのことばでなく、行動としてのことばだ。

考へるためには在ることが必要だ。しかるに在るためには、單に在るためには、考へることは必要でない。在りかたにもよる。ある在りかたには考へが必要だ。實は、考へそのものが一種の在りかたにほかならない。考へることは、それみづから、在ることの一態だ。かつて地球は考へなかつた。すなはち人類や生類をのせなかつた。しかし、その當時にも地球は在つた。いつか人類はなくなるだらう。宇宙は、しかしながら、在りかたの上に多少の變化を持つても、要するに、なほその以後にも在りつゞけるにきまつてゐる。在ることは、考へることよりも基礎的なことがらだ。プレトオ及びその他のある古代ギリシヤ系の人人が、あらゆる意味に於いて、理知が存在の先位に立つやうに思うたのはまちがひだ。

最初に行動ありき、そして、恐らくはまた最後にも行動があらう。しかし、そのあたりの問題は別の場合の考察にゆ

づり、問題を眼前具體の範圍に局限して考へるに、洗錬されたかたちの理想または規範意識こそ、いつでも行動に先驅するが、素朴な樣式に於ける理想または規範意識は、行動とともに、それのある要素として、多少その全體的行動の無組織、不統一をしめすかたちに於いて存在する。

たとへば、洗錬されたかたちの國際聯邦は、現代のある少數者の理想または主張として存在するにすぎない。しかしながら、國際聯盟と華府會議とは、それぞれに、多少不完全ながら行動としての國際聯邦だ。國際聯盟と華府會議とが理想でなく行動であることは、あるひは、理想であるよりも餘計に行動であることは明白だ。兩現象ともに、最も代表的には、また直接的には、政治家殊に責任政治家の仕事だからだ。ここで責任政治家といつたのは、立法及び行政の制度的責任位置にある人人をさしたのだ。

一八五〇年ごろからの、通商及びその他のかたちに於ける國際的社會の發達は、理想にさきだたれた行動ではなく、理想にさきだつた行動であつた。交通手段の科學的、技術的發達、それを利用する經濟的、文化的、及びひろく人間的眼前卑近の興味の超國境的伸展、これらが最近代に於ける國際的社會の發達の內容だが、生活に於ける直接の必要と利益と興味とがその內容の主特質だ。崇高なる理想主義の自覺はそこにない。

歐洲戰が機會となつて、國際主義の理想が燃えてきた。けれども、歐洲戰以前からして、近代諸國民は、行動に於いては、かれら自身が意識的に承認した程度にくらべては、はるかに餘計に國際主義者であつた。現今に於いても、わが國及びその他の各國に攘夷主義者はすくなくない。しかし、それらの攘夷主義者も、かれら自身が意識しないだけであつて、行動に於いては、隨分と國際主義者だ。どうしてかといふに、かれらは、自働車にも好んでのる。汽車旅行をも好む。行燈よりは電燈をたつとぶ。病んだり、怪我したりすれば、近代式醫療に信頼する。かれらは、行動に於いては、

むしろ贅澤すぎるほどにも國際主義者だ。ただかれらの理想はあまりに吝嗇なる國際主義だ。理想に於いて、あまりに吝嗇に國際主義者であるがゆゑに、かれらは、行動に於いても、あまりに吝嗇に國際主義者である部面と場合を澤山に持つ。しかし、かれらが、もしも、かれら自身の行動を、それの全體を、組織的に、統一的に認識する努力をさへ拂ひうるならば、かれらは、それをなし得た瞬間に於いて、かれらが、あまりに吝嗇に國際主義者であつた生活を全然過去に望み、もはや將來に望まなくなるにきまつてゐる。

規範的認識は、記述的認識のそとには存しない。規範的認識は、記述的認識のうちに、それの完全態の一特徴として存在する。われらが、もしも、意思を本質とする存在、事實、現象にむかつて記述的認識を完全にする努力を拂ふならば、われらは、その存在、事實、現象にむかつて規範的認識をせずにはすまない必然性と十分なる理由とを持つ。社會も、一層包括的な人生も、しかるに、意思を本質とする存在であり、事實であり、現象である。十分なる記述的認識は、それの對象が意思を本質とする種類のものである場合には、規範的認識をそれの延長下におよぶ。善、惡、正、邪に對する一人の完全なる認識は、その人をして、善、正を選び行なひ、惡、邪を選び避けしめ、もしくは選び去らしめる必然性を具ふと觀じた古人も、全然あやまれる主知主義の俘囚ではなかつたのだ。勿論、善、惡、正、邪は、それ自身、すでに規範的認識がはたらいた結果だから、もしくは、規範的認識に屬することがらだから、善、惡、正、邪の概念を完全に持てば、その人は、爲善し、去惡し、顯正し、破邪するほかなくなると說いても、その判斷が妥當である部分は歸納的發見でなく、演繹的再認だ。

現代にも、非科學的もしくはむしろ反科學的信仰主義者と目すべき男女がすくなからず生存する。いはゆる文字ある人人のなかにも澤山にある。いはゆる科學者のなかにさへもある。これらの男女の位置は、行動が理想にさきだつ一例

だ。行動の方が理想よりも進んでゐる場合に屬する。これらの男女が、祈禱主義、精神療法主義、エッヂー夫人主義に多少凝り固まつて、かれらのいはゆる靈山に參詣することがある。その歸路としての下山に際して、かれらは、一見不思議にも、危うき懸崖を踏みはづさない。重力の法則や引力の關係を打算し、且つ打算しつゝかれらがその一歩、一歩をはこぶからだ。行動に於いては、かれらも科學的信仰主義者であるのだ。かれらが、かれら自身の現在の行動を、かれらの良心と理性とにしたがつて組織的に、統一的に認識する聰明と勇氣をさへ持つならば、かれらは、その瞬間に於いて、一層完全なる科學的信仰主義者となるにきまつてゐる。强度の近眼鏡をはめて、西洋文明の有害無用論、日本文化やアジア文化の萬全諸能論を草する志士も現代にありうるが、かれらもまた、下山の惡神秘主義者同樣に、行動に於いて賢明であり、理想に於いて愚昧であるかず多き例のなかの一例だ。

かくの如き行先知後の原則を背景として、いく多の種類の一見不思議な可能と現實がある。制度は、殊にも厲嚴なる制裁力を背後にひかゆる法律としての制度は、行動中の行動の一にかぞへられる。社會的行動の第一位に立つものの一は疑ひもなく制度だ。デモクラシイが發達した社會に於いては、よき制度は、いつでも、その制度を使用する。すなはちその制度に支配される全民衆の完たき輿論が準備されるを待つてのみ創設されべきであるかと考へるに、さうではない。社會的行動としての制度が、社會的理想としての民論を喚起し、觸發し、養成する可能がある。過去に於いて近代の多くの國民は廢藩立國した。無論その當時には、デモクラシイの發達は幼稚ではあつたが絶無ではなかつた。廢藩立國及びそれに伴うたいろ〱の制度上、習慣上の廢棄、變改、新設を、その當時の多くの個人は反理想的事實だと觀じた。しかし、かれらのその觀じかたは、時が進むにつれて薄らいだ。そして、次第に、いつとはなしに、新制度に對する信用が民衆に深く、廣く持たれてきた。その原動力は、すくなくとも直接には、適當の早期に敷設された制度であつた。人

類は、かれが有する多くの特質の一として、かれ自身にとつて有害である程度にさへも怠惰であり、怠惰にもとづく保守的傾向を有するがゆゑに、よき理想の現實化としてのよき制度が、よき制度としてのよき行動が、時あつてか、敢然として、頭數的意義に於ける民衆の理想のさきにあゆむ必要が、社會及び廣く人生の進歩のためにある。

陽明が、夫れ道は必らず體してのちに見ゆ、すでに道を見てしかるのちに道を體するの功を加ふるにはあらずとのべ、また、知の眞切篤實なるところ即ちこれ行、行の明確精察なるところ即ちこれ知とものべ、その他なほいろ／＼のしかたに於いて同樣の觀念を表現したことは、現代にとつて稀れに貴い價値を有するわけでは決してないが、規範的認識と記述的認識との間の關係は、古くして新らしい一問題であり、且つ頗る多角多面の一問題であることを例證する一材料だ。

心理學的、生物學的に考察しても、本能、衝動、感情、意思といつた部類のちからまたは實在が、觀念や知識よりも基礎的であり、且つ支配的でもある。生きんと欲する意思、力づよく生きんと欲する意思等の表現が、人、生物、萬有、宇宙の本質の記述として、ある人人によつて選用されたのは、全然失敗ではなかつた。在りかたの完成、これが、これこそが、規範と理想のすべてだ。したがつて、完全なる記述的認識、すべての規範的認識はそれのうちだ。

告白と主張が觀察中の觀察だ。主觀的、當事者的思想が思想のなかの思想だ。詩が科學だ。いかに完全な、忠實な記述的認識も、その記述的認識の對象自身に比しては、十分に比較された十分以下だ。それは、目的への接近であつて、目的の到達ではない。規範的認識の論理は、この點をも相當に注意する。

二　社會の完全なる概念

社會の完全なる概念は、社會の完全なる定義だ。それには二た通りありうる。その第一は廣義の社會を內容とし、

その第二は狹義の社會を內容とする。いふところの廣義の社會は、いふところの狹義の社會を、それの全部を、自身の一部分として含むがゆゑに、その廣義の社會の概念は、その狹義の社會の概念を包括して、なほあまりある或るものだ。

廣義社會の完全なる概念はなにか。それは、次ぎの表現を幸福に許容する性質のものだ。いはく、社會は意思に原因を有する協力を中樞條件として認識された複數人だ。廣義社會の定義はこれに代表される。

なぜ、單に協力といはずに、意思に原因を有する協力といふたかといふに、單に協力といへば、その表現の妥當範圍は全宇宙だ。自然界の全部も、それの各部も、協力を一特質とする。因果律自身が一協力だ。しかしながら、因果律としての協力は、意思に原因を有しない協力だ。吹くこがらしにさそはれて梢頭の枯葉が舞ひ落ちる。協力にはちがひが、意思に原因を有する協力ではない。

兩軍しのぎをけづつて相たたかふ。しばらくにして一方が勝ち、他の一方がまける。その勝敗は、一見、意思に原因を有する協力の結果または延長としての現象だと考へられるかも知れん。どうしてかといふに、たたかひは、意思が極度にはたらく一機會だからだ。あるひは、むしろ、さうする一形態、一様式、一方法だからだ。しかしながら、戰爭は、敵、みかたを總統した一全體としては、意思に原因を有する協力ではない。戰爭にも、意思に原因を有する協力としての部分はある。敵同志內またはみかた同志內の關係、すなはち敵同志またはみかた同志のそれぞれの內的關係がそれだ。敵とみかたとのあひだの關係は、意思に原因を有する或るものではあるが、その或るものは、協力ではない。それは競爭だ。敵、みかたのあひだの關係は、意思に原因を有する協力ではなく、意思に原因を有する競爭であるのだ。

意思に於いて、最も樞要なる一條件は目的としての觀念だ。これを缺けば、意思は意思でなくなる。それは意思でな

い、單なる自然力だ。われらは目的觀念を具備する力を意志と呼び、目的觀念を具備しない力を自然と呼ぶ。いま敵、みかたの關係に立つて相たたかふ兩軍を見るに、その各軍の意思に於ける目的觀念は、自軍の勝利だ。恐らくは自軍の犧牲絶無の全勝だ。しかるに、結果は、すくなくともその一方に於ける結果は、自軍の敗北だ。これ以上に詳察しなくても、勝敗が意思に原因を有する協力の結果でないことはあきらかだ。意思に原因を有する競爭は、意思に原因を有しない協力の一可能、一樣態だと見ることも出來る。あるひは、自然界をば、意思に原因を有しない協力及び競爭と見、敵、みかたの關係に支配される世界をば、意思に原因を有する競爭と見ることも出來る。用語の意味次第でだ。

宇宙から、意思に原因を有しない協力としての、もしくは意思に原因を有しない協力及び競爭としての自然界をのぞき去り、同時に、もしくは、その殘餘から、意思に原因を有しない協力の一形態としての、もしくは、意思に原因を有する競爭としての鬪爭界をものぞき去り、なほ或るものが殘るならば、その或るものは、われらが、社會といふことばで呼ばんと欲する當體だ。社會の特質は、意思に原因を有する協力だ。廣義社會の定義として、わたくしは、社會は、意思に原因を有する協力を中樞條件として認識された複數人だとのべたが、その中樞條件の代はりに、特質といふてもいい。あるひは代表的特徴といふてもいい。いふところの狹義の社會は、しかるに、この代表的特徴を唯一の、もしくは、全的内容とする。すなはち、狹義社會の定義としては、意思に原因を有する協力だけで足りる。廣義社會の定義に於ける「を代表的特徴とする複數人」といふだけが、狹義社會の定義に於いては不用だ。過分としての意義に於いて餘分だ。狹義社會の定義は、社會は意思に原因を有する協力そのものだといふにある。そして、この狹義社會の概念の内容としての意思に原因を有する協力そのものは、實に、われらが、社會組織の名をもつて呼びうるところのものにほかならない。社會組織は、形式的には、組合、制度、習慣、無組織的個人際協力關係の四要素の一複成體だ。同じ社會組織

け、機能的には、政治、經濟、教育、宗教、家庭及びなほその他のあるものだ。

狹義社會の概念にとつてすべてであるところのものが、廣義社會の概念にとつてはいくらかだ。なぜかといふに、意思に原因を有する協力そのものは、狹義社會の概念の全內容だが、廣義社會の概念の內容に於ける代表的特徵にすぎない。「複數人」そのものは、意思に原因を有する協力と同延でも、同深でも、同高でもない。意思に原因を有する協力そのものは、その複數人の一作用であり、一發表であり、一性質であり、一形態ではあるが、その複數人そのものではない。全體としてのその複數人ではない。社會組織と、その複數人そのものとの間の關係は、眞に、社會組織と、それの原因、所在、及び目的との間の關係以下の事柄ではないのだ。

三 意思に原因を有する協力の種類及び樣式

意思に原因を有する協力の種類には、直接と間接との二大別がある。直接協力とは、いはゆる知人交友間の協力が例示する如き性質の協力だ。協力各員が、大體に於いて、協力全他員の顏を知るとか、名を知るとか、あるひはそれら以上の意義を有するある特徵を知るとかいふことが、直接協力の一條件たりうる。普通の、實際的意味に於いての交際範圍及び取り引き關係範圍が、まづ直接協力の範圍を指標する。直接協力の範圍は、いく多の事情によつて狹い。その事情のうちにかぞへられるあるものは、およそ一人が、他人の顏、名、その他の特徵を記憶しうる能力には、きわめていちじるしい限度があるといふ事實が暗示しうる種類の心理的性質のものであるし、また、人には「わたくし」すなはち英語でいふプライヷシの本能、衝動、興味が、深く根を張り、永く生きのびるといふ事實が暗示しうる種類の、同じく心理的性質のものである。一人の高等女學校長が、その生徒を個人的に知りうる限度は五百人以上ではないと、マンチ

エスター高等女學校長バーストール女史は『英國の高等女學校』のなかでいふ。前世紀のなかばごろに、一人のクリスト教社會主義者が、ロンドンはオクスフォード街の、新式鋪道が設備された部分を、かれを乘せてゐた乘合車が通過した際に、乘客のすべてが振りむいて談りあうたのを注意した。新式鋪道は、車輪のきしる音をへらすやうに出來てゐたのだ。かれはこの經驗にもとづいていふた。この分だと、オクスフォード全街が新式鋪道に改設された曉には、乘合車は一種絶妙の自由クラブとなるだらうと。その後數十年を經たる今日、ほとんど全ロンドンの道路は猶一層の新式に改設されて、乘合自働車の屋根上の乘客は、ささやき聲をさへお互に聽き取れるやうになつてゐる。けれども、よくよくの變災でも起こらない限り、袖觸れあうた隣席間の會話などはあるべからざることとなつてゐる、また諸種のクラブが今日成功を見つつあるわけも、すでに相識の間柄でない以上、やたらにはなしかけてはいけないといふ不文律が、ほとんど例外なしに採用されてゐればこそだ。私本能に關するこの二例話は、グラハム・ワラス氏の『政治に於ける人間本性』のなかからだが、人に、さびしさをにくむ本能と共に、いはば遠心的傾向と共に、切實なる求心的傾向が存することとは、一通則的事實であつて、この事實が、またいはゆる直接協力の範圍を制限する一勢力たる可能も容易に考へられる。

　意思に原因を有する協力の全範圍としての眞範圍は、またこの眞範圍としての社會は、しかしながら、現代に於いては、すくなくとも國際大だ。もしくは人類が住みひろがつてゐるだけの廣さを占める。社會の内容は、直接及び間接の兩種協力から成る一全體であるのだ。現代に於ける間接協力の範圍が、國境によつて代表される程度を遙かに超越したことは顯著だ。國際貿易、國際金融、國際旅行、それから、科學、藝術、教育、思想、道德、宗教等がそれぞれに徴示する各種文化機能に於ける國際的自由交通、及びそれらの實質的國際社會を原因ともし、また目的ともすべき位置にあ

る國際政治の不完全ながらの發達が、取りもなほさずそのことを顯著にする。大、公使館や、領事館を置きあつてゐることだけでも、その各國間に協力が通則的に、公式に承認されてゐる證據だ。勿論、國内的には、立法機能と行政機能を共通に所有し、維持し、それらに對して義務と權利を共通に自認してゐることが、すでにその國民の全員間に於ける間接協力の發達を談る。

想像力の微弱が多くの反社會的主張や行動の原因だが、現代の諸國民、諸民族の社會盲は、想像力の微弱に歸すべきよりもさきに、現實眼の淺、近、粗に歸すべき事柄だ。實に、現代に於いては、科學が詩を遠く追ひ越したのだ。交通手段が國際的人類的社會に誕生を與へたが、交通手段自身には意識なく、意識ある人間は、その新生兒をわが子だとみとめ、愛する感覺と感情を缺く。かへつてそれをまま子扱ひする。交通手段の原因としての科學をば自己が産み、大協力としての大社會をばその交通手段が産んだのだが、その大社會は、すでに現代人によつてかれの自己の延長としては認識もされず、自覺もされないのだから、現代人の偏狹なる國民主義と民族主義は、現實の世界のはてから理想の世界のはじまりへ飛ぶ想像の翼の缺乏によりも、現實の世界の全圓を、それの中心から周邊にまで見はるかす單なる視力の缺乏に出來すると判斷される。

次ぎには協力の樣式だが、それには明確に二た通りある。一は同質協力であり、他は異質協力だ。

同質協力の一例は道路開設にもある。多くの土工が大體に於いて似た作業に從事しつつ、やがて、個人力では到底出來ないはずの大工事を仕上げる場合はこれに屬する。舞臺面に於ける合唱、連踊もその一例だ。あるひは、一組合の內的關係を代表する性質もまた同質協力の一樣式だ。どうしてかといふに、一組合に組合員として關係してゐる各人は、その組合員としての資格に於いては、要するに、その組合の存在理由としての目的を共通に所有する。たとへば、義務教

育年限延長期成組合に屬する各人は、義務教育年限延長期成を同樣に目的とする。その各人間の關係は、かくして、同質單位の數量的協力だ。

異質協力の例は、これを舞臺面に求めるならば、ある人人は彈奏し、ある人人は歌唱し、ある人人は舞踊し、さらにまた他のある人人はこれらの演藝を觀聽する。しかもこの全景が偶然の發現でなく、計畫の遂行である場合はその一だ。またこれを組合に求めるならば、一社會內に當然存在すべき多くまたはすべての組合間の關係としての各組合の外的關係はこれに屬する。どうしてかといふに、一社會內に同時に存在理由を確保する二乃至それ以上の複數組合間の關係は、根本的生存競爭としての鬪爭であつてもならず、また重複であつてもならん。鬪爭は社會にとつて破壞であり、重複は社會にとつて浪費だからだ。鬪爭でもなく、重複でもない多數組合間の關係といへば、それは、一男一女の間に發現しうる性的協力のごとくに、異質個性間の相互補成といふ意味に於ける質的協力でなくてはならん。たとへば、生產組合と消費組合とが綜合的經濟目的を共通に所有する機能別にすぎざるべきがごとくに、また、經濟組合と他の文化組合とが、綜合的生活目的を共通に所有する機能別にすぎざるべきがごとくにだ。

四　社會組織の形式的特徵についての考察

社會組織とはなにか。それは、意思に原因を有する協力そのものだ。それは、いはゆる狹義社會の概念の全內容であり、廣義社會の概念に於ける複數人の特徵だ。意思に原因を有する協力は、實に、組合、制度、習慣、及び無組織的個人際協力關係の四方法に於いて可能だ。社會組織とは、要するに、この四方法の多少完全な、すなはち多少不完全な一複成體にほかならない。

われらの考察は、先づ組合から進む。社會組織は、一全體として、それの原因をも、目的をも、また現在のあり場處をも人に持つ、そして人以外のなにものにも、どこにも持たない。一全體としての社會組織が有するこの關係は、その一全體に於ける一要素たる組合にも、制度にも、習慣にも、無組織的個人際協力關係にも、それぞれのしかたに於いて分有される。

組合の本質及び價値を知るためには、一組合と、その組合に、最も完全なる興味と理解と責任とを具備して、組合員として關係してゐる一人との本質及び價値の比較を企てることが捷徑だ。

一とつの組合は、それの一組合員との比較に於いて、質的價値に於いてはその組合員以下だ。いひかへるならばその組合員以内だ。どうしてかといふに、その組合にとつて質的價値のすべてであるところのものが、その組合員にとつてはかれが有する質的價値のすべてではなく、ある部分だ。組合にとつては唯一の存在理由である目的が、組合員にとつてはかれの生存理由の一部分を形成するにすぎない。たとへば、普選期成組合の目的は普選期成に盡きてゐる。その目的が達成されるまでその組合の存在すべき理由はあるが、その目的が達成されると同時にその組合は非存在に歸へるべき理由を持つ。しかるに、普選期成組合員は、普選期成を唯一の生存目的とはしない。かれは、普選期成を目的とすると同時に、その目的と背反しない、かへつて兩立しまたは協力しうる他の目的をも持ちうる。かれは、また、普選實現後にも生存の望みをかけうる。勿論、普選期成は、かれの生存目的のそとでは決してなく、全然それのうちにある事柄だから、かれが普選期成組合員としての資格に於いてその組合に對して有する關係は眞實には、かれがかれ自身のある一部に對して有する關係だ。その關係は、それゆえに、時として實にかれの生存目的の全部を支配するかの如き程度にさへ達しうる。けれども、かかる場合に於いてさへも、なほかつ、もしも一人が、一組合に殉死するならば、それは、かれの全人の無自

覺を意味する現象であるか、さもなければ、一組合の目的の達成が、かれによつて、かれの全人の目的の達成を綜合的に意味するとは解されなかつたが、それを選擇的に意味すると解されたことを示說する現象だ。

組合は、それの本質に於いて、すでに一派生的事實だ。組合は、その組合以外の社會との關係に於いては、根源的であり、獨自的であり、創造的でありうるが、その組合內の關係に於いては、もつと根源的な、もつと獨自的な、もつと創造的なあるものから派生された實在だ。そのあるものは、しかるに、組合ではなく、人だ。ヤソ及びかれの少數共鳴者に發源した思想、感情、及びある精神的生命が最初の教會を形成するに及び、その教會が、また感化、宣傳、布教の一社會的中心となつたと、無理なしに想像しえられるやうにだ。あるひは、日露戰後まもない頃のレーニン氏及び氏の少數共鳴者から成つた結社は、當時に於けるその結社以外の社會に對しては、またその後の社會に對しては、一創造源的位置を有したが、氏及び氏の少數共鳴者に對しては、創造の原因ではなく、創造の結果としての位置を有したがごとくにだ。

組合は、すくなくとも二人がある目的を共通に所有することを、それが成り立つための一必要條件とする。しかるに、人の本質は、二人でなく、一人だ。人は、一人として最も完全なる實在だ。二人としての人は、すでに、各一人としての二個人の全部からでなく、ある部分から成り立つ。組合は、ある平均人を內容とする。しかるに、各人は、決して平均されてゐない。また決して平均されない。組合が有するすべての獨創性は、組合員に負ふ。組合員の獨創性を完全にみとめれば、組合の獨創性は、それの一部的內容としてみとめられたのだ。組合員の獨創性は、組合の獨創性からいふと、それ以前であり、それ以奥である。組合の獨創性は、組合員の獨創性を實とする影のごとく、組合員の獨創性を幹流とする枝流にほかならない。組合は、それの最根柢の本質に於いては獨創性を持たないのだ。人は、かれの最深奥の

本質に於いては、いはゆる天才以外のなに人でさへもが、獨創性そのものともいふべきあるものだ。

二人乃至それ以上の數の人が、同時に同樣の獨創性を示す場合はしば〳〵だ。しかし、これは、その複數人が、複數人としての資格に於いてさうするのではなく、各個人としての資格に於いて完成する事實の複數的發現の一態にほかならない。その場合に、實在としての過程は單數の作用だ。複數はそれの現象にすぎない。

組合と人の間には、かくの如き本質上の差別あるがゆえに、組合がいかに多く集まつても、質的價値に於いては、それは一全人の總價には達しない。一人が一時に合理的に組合員として關係しうるかぎりのすべての組合に關係した場合に、彼の組合員としての資格の總計は、かれの一全人としての資格の總計大であり、もしくはそれ以上であるかといふに、それ以下だ。組合は、質に、個性の獨創を社會の全圓に輸送するために、人間が發明して使用する精神的一媒介器に他ならない。それは導管ではあるが泉源ではない。泉源は人だ。各全人としての各一人だ。

量的價値に於いては、しかしながら、一組合は、それの一組合員よりも餘計だ。千人の組合員を有する組合は、量的價値に於いては、それの一組合員の千倍だと略算される。組合そのものの代表的存在理由は、それの量的價値にある、組合の天才は量に存するのだ。量は人の天才だからだ。質に於いては、組合は、人との比較に於いて凡才だ。獨創に對比された受け賣りだ。しかしながら、量に於いては、個人は侏儒であり、組合は巨人だ。超個人だ。

人間關係に於ける力の科學及び技術は、次第に、個的形式から團的形式を取るやうに進んで來たが、組合は、質に、その進化の道程を代表する。社會進歩の質因は人であり、社會進歩の量因は組合であると明言される。けれども、社會にとつて、質は目的であり、量は條件であるから、人のための組合であることが組合の當然態であつて、組合のための人であることは、人の不當然態だ。劣質が優質をきかすために量的に組み合ふことは、組合の可能の惡用だ。いはゆる

人種運動、民衆運動、無産階級運動等にも、この惡用の混在はありうる。

社會組織に於ける他の一要素としての制度については、及び習慣についても、かつて本誌上に發表した「個性主義の社會的徹底」(『社會人の誕生』收錄)にゆづつて、いまは加説しない。

もしそれ社會組織に於ける最後の要素としての無組織的個人際協力關係に至つては その無組織に即した短處と長處を持つ。その短處は、量的價値に於ける小だ。その長處は、質的價値に於ける大だ。

無組織的個人際協力關係には、經濟的性質のものもある。科學的性質のものもある。無論、藝術的性質のものも、教育的性質のものも、道德的性質のものも、宗教的性質のものもある。しかし、そのいづれもが、いはゆる無組織的個人際協力關係の稱呼を適當に値ひするものであるあひだは、社會的勢力としては大でない。その點に於いては、組合にも、制度にも、習慣にも劣る。けれども、それが無組織的であるところに、それが一層深く、近く、社會進步の源泉としての個人の獨創性そのものに接してゐるといふ長處がありうる。無組織的個人際協力の層をめくつて、一層の基底にうがち進めば、「わたくし」が存在する。個性中の個性である私生活に行きあたる。組合も、制度も、習慣に至つてはなほさら、私生活から遠距離にある。それだけ獨創性に缺ける。無組織的個人際協力關係は、それゆゑに、社會組織中の、善惡兩樣の意味に於いてどん底だ。その惡意義に於けるどん底をば十分に注意しないまでも、その善意義に於けるどん底をば、社會は、努力して注意すべき理由を持つ。實に、過去に於ける、また現在に於けるいかなる組合も、制度も、習慣も、それの比較的初發の時期乃至そのすぐ以前には、無組織的個 際協力關係にほかならなかつたではないか。

五　社會組織の機能的特徵についての考察

社會組織は、それの形式的特徴としては、組合、制度、習慣、及び無組織的個人際協力關係の四要素に識別されるが、同じ社會組織は、それの機能的特徴を持つ。たとへば、組合にしても、單なる組合は非存在だ。現に存在する、もしくは實に存在しうべき組合は、かならず、ある機能的特徴を帶ぶ。政府、議會、政黨等は、それぞれに一組合だが、いづれも政治的といふ社會機能を持つ。會社、工場、勞働組合、消費組合等は、經濟的といふ社會機能を持つ。學校は教育的社會機能を、教會は宗教的社會機能を代表する組合だ。制度にしても、制限選擧、普通選擧等は政治的であり、私有財產、共產等は經濟的だ。すなはち、社會組織は、それの機能的特徴にしたがつて考察される時には、政治、經濟、教育、それから、すくなくとも從來及び現在の場合についていふならば宗教、家庭、及びなほその他の社會機能として存在する。

政治について、この一文に於いて言ひたい事柄の殆んど全部は、去年十月の本誌上に發表した「政治の本質價値を考究して現代國家不安の將來を論定す」のなかに、あるひは說明され、あるひは暗意されてゐる。たゞ、ここで、さらに注意したく思ふ一點は、現代政治は、それの內包に於いて、もつと完全に、民衆の體驗に基礎を有する立法及び行政に進化すべき餘地を持つてゐることだ。いはゆる立憲代議制や、政黨制が發明されてこのかた、立法及び行政が、その以前にくらべては民衆の自治、民衆に對する爲政者の責任を實現して來たことはたしかだが、その新政治制が、早くすでに一種の專制主義に落ち入つたことも爭はれない。現代政治は、それの內包に於いては、政府と、議會と、それから政黨との、あるひは別働的、あるひは合働的專制と見られる一面の不完全を著大にし來たつた。政府、議會、及び政黨は、それの成員の頭數に於いてこそ少數なれ、組織されてゐるがゆゑに、人間力としては優越だ。殘りの民衆は、頭數に於いてこそ多數なれ、組織されてゐないゆゑに、人間力としては弱劣だ。優越力の所有者が、弱劣力の所有者に對して、多少專制的に傾むくことは、現代人の場合に於いても、すこしもあやしむに足らない。現代人は、往昔人に比して、力を、

より多く劇的形式に於いて信仰し、使用するやうになつたが、力の不信者、廢用者とはなつてゐない。歐洲戰爭が、その一證據だ。歐洲戰爭が終はらぬうちに始まつた階級鬪爭もまたその一證據だ。かくの如き心理的事情下に、民衆が自己を組織せずにゐるならば、制度上、名義上、道德上に於いては、民衆の延長であり、道具であり、方法であり、代理であるはずの立法者と行政者が、民衆の弱肉を食ふべく、すなはち民衆をエクスプロイトすべく、かれら自身の組織された力を使ふ氣にもなり、現實に使ふ動作にも及ぶことは、當然ではないが自然だ。

現代の民衆は、政府や議會や、及び政黨をさへも呪詛するにも、笑罵するにも、取り崩すにも及ばない。それよりもさきに、民衆自身の組織に着手すべきだ。またその組織の完成に鋭意すべきだ。職業別、地方別、及び問題別すなはち問題の選擇と、問題に對する態度の選擇とを大體の標準とし、條件として、それぞれの組合を形成し、發達させることが、民衆自身の組織の方法だ。

勿論、政府も、議會も、政黨も、意義に於いては民衆自身の組織のそとにあるべきでない。しかし、それだけでは民衆の組織が不充足であり、不完全であるのだ。その虛に乘じて政治職業者の專制が行なはれるのだ。政府、議會、政黨と職業別、地方別、問題別及び對問題的態度別の組合とは、同一社會の機能別として協働しうべきだ。

職業別、地方別、問題別の組合を民衆の直接自治組合と名づけ、政府、議會、政黨を民衆の間接自治組合と呼ぶならば、その直接自治組合の發達は、その間接自治組合の當局者を、力の關係によつて專制不可能にみちびくのみならず、知識の供給によつても有責任にする。現制下にあつては、政府、議會、政黨の當局者は、たとひ善意の持ちぬしであつてさへも、民衆の體驗から遠ざかつてゐる。たとへば勞働者の體驗も、小作人の體驗も、小學敎師の體驗も、學者の體驗も、藝術家の體驗も、婦女の體驗もかれらには缺乏してゐる。しかるに政治は、爲政者自身のための立法、行政であ

るべきではなく、爲政者自身をも例外とはしない全民衆のための立法、行政であるべきだ。體驗なき立法、行政は、たとひ善意であつてさへも無智ゆゑの不適切をまぬかれない。いはゆる直接自治組合は、民衆自身の體驗と意思の組織的發表だ。これによつて、政治職業者は、わがままを制せられるばかりでなしに蒙を啓かれる。政治職業者の惡意と無智とが、それによつてあはせ救はれる。

經濟についても、わたくしは、この一文に於いては、わたくしが從來殊に最近の著作に於いて說述した內容以外につけ足すべき事柄を見いださない。それから、教育及びその他の社會組織機能については、省說して置く。

六　純人生理論

人の概念としては、客觀的見地から企てられたものと、主觀的見地から企てられたものとの二種がありうる。しかしながら、いはゆる主觀的見地から企てられたものは、いはゆる客觀的見地から企てられたものを、意義に於いて內包すると同時に、可能に於いて條件とする。いはゆる客觀的見地から企てられた人の概念は、いひかへれば、科學的または記述的興味にしたがつて企てられた人の概念だ。いはゆる主觀的見地から企てられた人の概念は、いひかへれば、倫理的または規範的興味にしたがつて企てられた人の概念だ。

人の科學的概念はなにか。いはく、人は、最も高い程度に於いて成長力ある、かつ自己決定力ある一複雜體だ。わたくしは、ここでは、この定義の說明を概ねはぶく。ただ、最も高いといつたのは、人以外の生物すなはちいはゆる動植物から識別した程度だ。人が知るかぎりに於いて、人よりも高い程度に成長力及び自己決定力を有する存在はない。ついでながらにことわつて置くが、わたくしは、あるかたちの神をば、すなはちあるかたちの人格神ともいふべきものを

ば、あるかないかわからないものだとは考へずに、ないものだと、いまなほかつての如くに、考へかつ信ずる。勿論、あるかたちの靈魂不滅論をも、むかしから、なげき、笑ひ、いきどほり、はぢ、かなしむ。

それから、一複雜體といつたのは、人は、人格的同一の本能信、體驗知を有することによつてすでに指標されてゐる通りに一だ。しかしながら、その一は、科學的興味及び活動をも、藝術的興味及び活動をも、またいふまでもなく經濟的興味及び活動をも、なほその他ほとんど限りもない種類の興味及び活動をも胚胎し、表出する一だといふ事實をさしたのだ。自己決定力の別名は意思だ。

いまのべた科學的概念の內容としての人には、自己決定力といふ性質が多少明示してゐる通りに、自覺力がある。科學的概念の內容としての人が自覺したかたちが、いはゆる倫理的概念の內容としての人だ。それは、三通りの要素に識別されうる一複成體だ。複雜的一全體だ。その三通りの要素とは、自治主義、責任主義、及び創造主義だ。勿論、この三主義が、客觀的に別存するわけではない。一全體としてのみ可能であるところのある實在または價値を、それの多少の特徵的殊差にしたがつて、われらが、その三通りに識別しうるにすぎない。

自治主義は、直接には、自己決定力が自覺したかたちだ。この自治主義は、社會的に發現しては權利觀念をも構成した。宇宙的乃至全人生的に發現しては神以上の神をも構成する。あらゆる社會組織の權威も、したがつていかなる組合、制度、習慣等の權威も、各人の自治主義以下であつて、以上ではない。いかなる創造神も、いかなる主宰神も、各人の自治主義によつてさらに改造され、さらに決定される。深いほこりが自治主義の心理的一特徵だ。シーザアも、天父も、祖師も、聖賢も、歷史も、自然も、民衆も、すべては各人の自治主義以內の價値としてのみ正價を持ちうる。各人の自治主義は、實に、すべての理想の總關門だ。その自治主義に成長力が結合して自覺されたかたちに於いては、各人は、

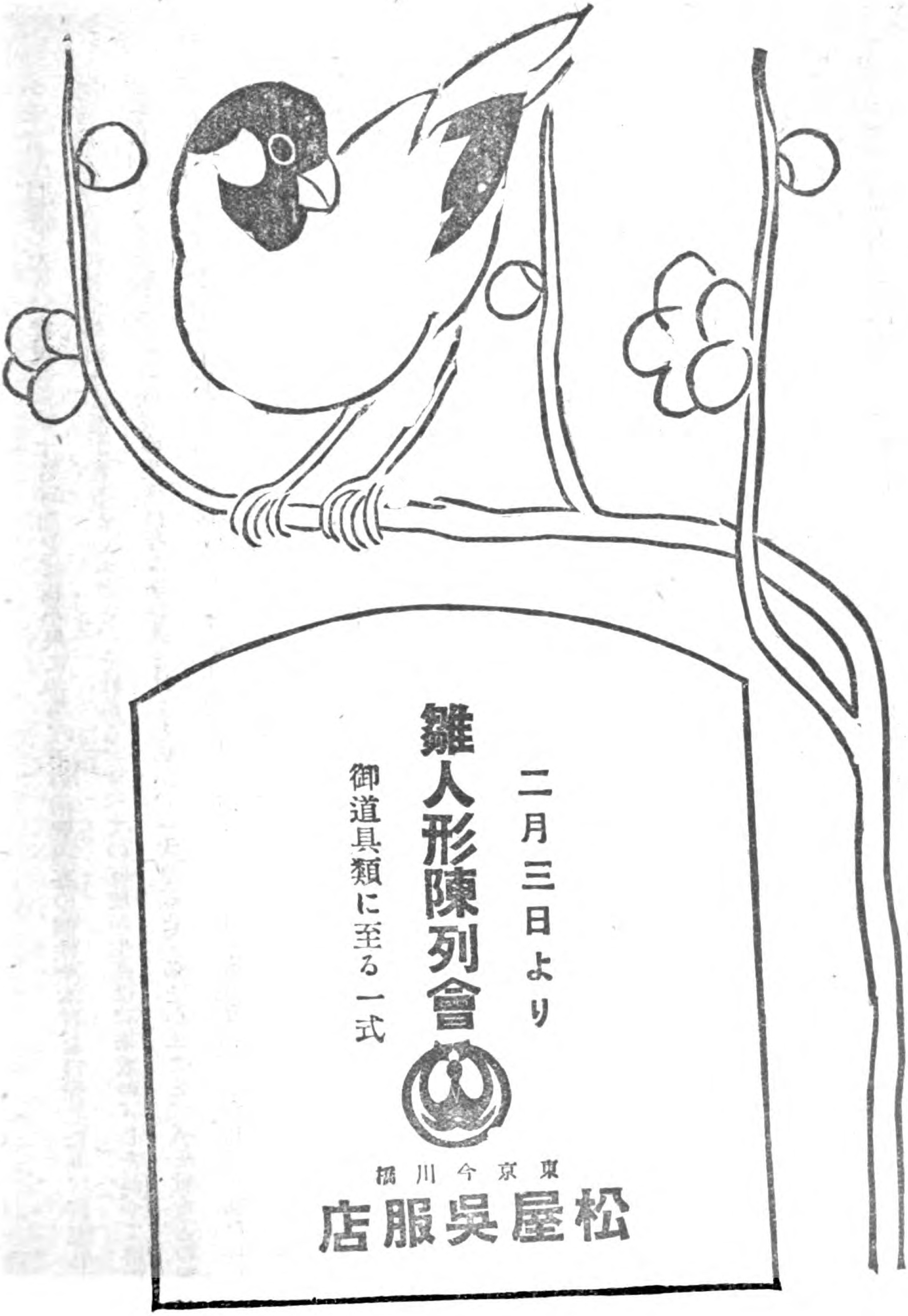
社會と宇宙の各部と全體に對する立法者だ。かつその法の執行者だ。人は、實に、最も正しい意味に於いては、自己と神にあはせつかへることはできないのだ。

責任主義は、自治主義の一延長に他ならない。自己が意思したありかただ。そのありかたの延長、連續、結果をも、その自己は意思したわけだ。これが責任の內容だ。責任は、かくして、行爲と、それの結果との間の十分なる關係だ。みちばたの枯れ枝が、風に吹き落とされて往來の善人を打撲しても、責任問題は、その枯れ枝を直接の相手としては成り立たない。枯れ枝には意思がないからだ。行人が、杖をふりあげてその善人を打撲した場合には、かれの責任が問はれる。責任主義の社會的發現は、從來のいはゆる義務によつても不完全ながら例示される。責任主義の全人生觀的發現は、あるひは宇宙的發現は、すべての反理想的事實を、その事實の認識者が、また評價者が、その認識、評價をなした瞬間に於いて、救濟し、完成し、理想化する責任を自己に負ふといふかたちを必然取る。このかたちの責任主義は、ある意味に於いては、愛以上の愛だ。愛の完成だ。

責任主義は自治主義のそとでなく、具體的には、また論理的にも、うちだが、その兩主義は創造主義を冠德とする。創造の一可能的別稱は生產だ。發明だ。そして、この創造主義が、成長力を內容とする自己決定力の自覺したかたちであることは、多く考へて見なくてもあきらかだ。自己の成長力になるべく十分な機會を與へるやうに自己が自己を決定する、これが創造主義だからだ。

わたくしは、かつて、本誌上に於いて「正及び善の原則」を論じた(『新社會の原則』收錄)、また本誌のその後のある號に於いて「一人の生產と彼自身」を發表した(『社會人の誕生』收錄)。創造主義としての生產主義について、わたくしが、この一文に於いて言ひたい要點は、ほぼその二發表につくされてゐる。ただ、消費生活に於いては、人は、かれの個性

や本質を自覺したり、實現したりする可能性をば極小限に持ち、その消費内容の個性や本質を自覺したり、實現したりする可能を極大限に持つ傾向と必然があるといふこと、それから、すべての既成の生産は、未成の、したがつて將來の生産を目的とする意義を、その既成の生産自身の全意義とはしないが、一大意義とするといふこと、人と社會との對立關係に於いては、人は生産を目的とし、社會は、人の究極的生産を目的として、人をして準備的消費を自由に可能ならしめることを直接の存在理由とするといふこと。普通にいはゆる利己主義と利他主義との難問も、また一人のなかの結果主義と手段主義との間の爭ひも、生産主義としての創造主義によつて、創造主義としての生産主義によつて、最も滿足に解決されるといふことを、選擇的に、指標的に摘錄する。


二月三日より
雛人形陳列會
御道具類に至る一式
東京今川橋
松屋呉服店

子孫崇拜論（續編）

過去と現在とは全て、未來の爲めの奉仕なり。
子は親よりも敬ふ可く、門人は師よりも尊かるべし。

小野俊一

以上に說き來りたる所は何れもみな主として生物の種屬を絕滅せしむ可き外因に就てゞあつた。然らば或る生物の種屬の滅亡といふことに際して、其の生物自身に起因する內因ともいふ可きものは全くないのであらうかといふに、其れに關する筆者の考へは大略次ぎの如くである。

（一）一種族（Race）の特性とは、最初若干數の個體に新らしき變異として現はれた性質が、特に生活の環境に適應してゐたるが爲め、自然淘汰によりて篩ひ殘され更らに次第に助長され擴張せられて、終ひに或る時代を經過したる後に、さういふ一般的なものにまで普遍し確定された所のものである。

（二）筆者は既に前にも述べたるが如く、一と度び種族の特性といふところまで、遠い過去の時代から次第に進化し完成されて來た樣な全ての形質は、たとひ別の環境に育つた別の生物の立場からはそれが如何にグロテスクに見えやうとも其の生物の棲む從來の環境に或る程度を超えて甚大なる變動の起らざる限りは今後も益々、大體として其の同一なる方向に形及び實質的內容の完成の度をば進めて行くのみであつて、其の形質故に其の生物の種族が絕滅するといふ樣なことは決して有り得ない。もしも種族が絕滅に終つたならばそれは常に外的環境に起つた變動の直接或ひは間接なる結果であつて、急激に起つた所の外界の變化の度が、其の生物の順應性移變性の度を遙かに超えてをつた爲めであると考へてよい樣に思ふ。

（三）然し生物の一世代每に現はれる變異の方向は多種多樣であるのだから、其の中には勿論、與へられたる環境下の生活に不適當であり好ましからぬ樣な形質も出て來、また早晚必ず滅

亡の内的素因となる樣な變異も現はれて來るだらう。けれども其れ等の形質は、彼れ等の不適當さに反比例して、一世代或ひは數世代の、小さな範圍に屬する少數の個體の死滅と共に消え去つて行き、決して其れが廣い範圍に於ける種屬といふ樣なものゝ一般的特性として擴張され助長せられ普遍的に進化を完成して行く樣なことはないのである。言葉を換へていふならば、滅亡の内的素因といふものは、たゞ空間的にもまた時間的にも小範圍内にある個體に於てのみ認めることが出來る。けれども大きな範圍に亘つた種屬といふ樣なものの死滅に對してはたゞ廣義に處ける外的誘因あるのみであつて内因ともいふ可きものは存在しない。さうして前者の場合に於てすら滅亡を惹起する條件の半はやはり外的環境にあるのであつて、其の事實は自然のまゝに打ちすて置けば忽ち其の特質を失ふか、或ひは早晩必す絶滅してしまふ樣な變種をも、人類が其の智識によつて種々なる人工的環境の下に保護する時は、別に大なる差し支へもなく其の不適當なる形質を保持し或ひはなほ一段と進展せしめつゝ增殖すらなさしめ得る所の幾多の實例に照して察することが出來るだらう。例へば現今の家蠶の如き、其れが年々吐く糸の重量のみにても五萬封度を超え、我が日本内地のみにても一年に飼養（即ち虫の方から云へば繁殖）する頭數八—九億、繭の總計約七百萬石に達するといふ盛況であるが、もしもあの家蠶を、突然、野天に放し飼ひにして見たとすれば、いま彼れ等の持てる形質を以てしては到底滿足に生活することが出來ず、忽ちにして絶滅の運命に瀕する事であらう。然し自然は、斯かる滅亡の内的素因ある生物の種屬を、はじめから決して永存せしめぬのであつて、人工的に保護されたる變種の場合を例として生物界一般の原則を論じ得ざることは言ふまでもない。

讀者は以上に筆者の述べて來た所によつて、自然界に於ける生物の種屬滅亡の現象をば專ら其の種屬自身が持つた内的素因のみに基くのであるとし、而して滅亡の内的素因となる所の形質は最初その生物種屬を繁榮せしめた長所そのものであると考へ、斯くて其の「假說」をば恰かも全生物界を通じて動くことなき根本律なるかの如くに信じて我れ等人類の未來に關じ唱へられたる丘博士の悲觀說は、たとひ其れが一部の眞理や人生に對する教訓を含むにしても、理論としては極めて獨斷的のものであり、また事實的基礎の薄弱な臆說であるといふことを、不充分乍らも推察し得らるゝことゝ思ふ。博士は其の近著『最新遺傳論』を出さるゝに當り其のはしがきの中に「遺傳は元來生物學上の問題ではあるが、其の關係する所が頗る廣く、農業、牧畜、醫術、教育を始め貧民救濟、社會改良などに至るま

で、何れも之と直接の交渉を有する。隨つて、此れ等實地方面に新に考案を廻らす場合には、遺傳の原理を基礎として論を立てねばならぬことが屡々ある。然るに其の際、國內に行はれて居る遺傳學者が、悉く現時相鬪ふて居る二つの學說の中の唯一方のみを代表して居ては、讀者は其の側の說のみを知り、相手の側の議論を聞く機會が無いために、鬪論は已に終結したかの如く誤解して、其の上に自分の說を築かうとする虞れが生ずる。著者は此の意味に於て本書の出版を一層必要であると思ふた。」といふことを述べて居られるが、筆者が日本に於て自己の最も親しくなつかしき先生であり、ともだちの一人であると考へて居る博士の所論に對し、實に身の程をも省みず敢て自己の所信から反駁の論に筆を執るのも、また全く、これと同じ主意であるに外ならない。何故なれば、「人類の將來」といふ問題、人類終局の運命が、（人類それ自身として、或ひは更らに其れが產み出す他の何者かとして）、向上であるか？それとも沒落であるか？　といふ問題は、勿論確實なることは何人にもわかる筈なくたゞ推察し得るのみなのではあるが、其の單なる推察だけでも、光明であるか？　暗黑であるか？　といふ感じ、考へ、心の態度といふものが、我れ等の現在に於ける生活の上に重大なる交渉を有すること、決して一遺傳問題の比ではないのでもあるから。——遺傳の根本原理に關する說としては、筆者は丘博士が勇敢に、從來多くの學者によつて惰性的に踏襲されて來た所の『新獲性質非遺傳說』が理論として全く成立せぬことを指摘し、また『遺傳單位不變說』の不合理なることをも明かに言ひ切り、さうして今までに得られた所の Data が許す範圍內に於て、冷靜にして公平なる判斷の下に、一步々々理窟の糸をたぐつて自家獨特の考へを組み立てゝ居られるに對し絕大の敬意を捧げる者である。勿論、博士自身の「與り知られぬ所」ではあるけれども、大體に於て筆者もまた氏の說かれる所を正しいと認め、氏の立論の整然さを嘆稱し、さうしてあの書によつて敎へらるゝ所の多かつたことを告白する。此の稿の中にあらはれてをる筆者の遺傳に關する卑見の中で、もし氏の說と一致して居る部分があつたら、それは筆者が氏の說を受け賣りしたのであると考へられても一向差し支へない。——（日光や空氣などと、同じく思想の共有といふことを信ずる筆者に取つては發生地の如何ははじめから大した問題でなく、其の意味に於て此の稿の內容全部もまた受け賣りであると考へられても差し支へない。自分の書いた言葉に對し、自分が文字に表はした考へに對して、勿論筆者は責任の全部を負ふ者ではあるけれども。）——筆者は丘博士の「最新遺傳論」に大なる敬意を拂ひ、讀者の

一人でも多くの方が其れを一讀せられむことを希望する。けれども其の中に唯一ケ所だけは、だうしても筆者の同意し得ぬところがある。其れは即ち、はしがき並びに卷末の『人種改良』といふ一節の中に於て、氏が人類の將來に就て自己の意見を洩して居られる部分であつて、此れ等の部分だけは、他の多くの論文中に表はされて居る氏の人類觀と同じく、如何にしても筆者の理性が肯定し能はざる所であり、また筆者の心の中の或るものが同感し得ざる所である。さうして筆者は私かに訝る、一方に於て氏が、ヴァイスマンの『生殖物質說』や近時流行の『遺傳單位不變說』等、凡そ如何なる姿の『前成說』にも賛成することが出來ず、其れと『新生說』との優劣をば批判して「前成說の根抵には、物は何時までも變らぬといふ思想が潛んでをる故、新たな物が生ずるのを說明するには不適當である。此の說に從へば、天下に新しいものは決して無い譯で、新しいと見える物はたゞ古い物の組合せが變つたに過ぎぬ。されば今日人間の有する種々の性質も、みな昔、アメーバの如き原始動物の持つてゐた諸性質の組み換へによつて生じたと論ぜねばならぬ。前にも云ふた通り、新生說は見えただけのことを見えたゞけとして論ずる故、目前の現象を說明し得ぬといふ大缺點はあるが、誤りに陷る虞は餘程少ない。之れに反して、前成說は、想像によつて若干の事實を面白く說明し得るが、長時間に起る漸々の變化を考へると、その誤りなることは明に知れる。著者は誤つた面白い說明よりも、誤りを含まぬ不審の方を採ることに躊躇せぬ。」などゝ云つて居られ乍ら、何故、他方に於ては「歷史は繰り返へす」といふ樣な諺を恰かも眞理であるかの如く肯定して、一言にして云へば「中生代の爬蟲類も滅びた、第三紀に於ける獸類も亡びた、故に今日の人類もまた必ず滅亡しなければならぬ」といふ如き人類未來觀を抱かなければならぬのであらうかと。則ち氏は幾度びも繰返して言ふ、

「化石學上の例の示す所によると、一時地球の表面に優勢の位地を占めてゐた動物種屬は、何れも初め其の種屬をして他の動物に打ち勝つて、優勢の位地に達せしめた其の同じ性質が、やがて却つて禍をなして、そのために悉く亡び失せてしまふたが、さて人類は如何であらうか。人類だけは獨り他の動物とは全く違つて、人類をして、今日の優勢なる位地に達せしめた腦と手との力に依り、言語と器械とを使用して、今後も永久限りなく益々榮え行くであらうか。將また他の動物と同一の法則に從うて、昔ては人類をして他の動物に打ち勝たしめ、文明人をして野蠻人を征服し得せしめた其の腦と手との働きが、やがて却つて禍をなして人類をして恰も空に向うて投げた石が降ち來るときの如きパラボラ線を畫いて一刻每に速度を增しつゝ滅亡の運命に向うて進ましめ居る如きことは無いであらうか。」

さうして氏の結論は、只單にいつか遠い將來に於て、人類が其れ等の內因の爲めに亡びることがあるだらうといふのではなくして、いま現に我々自身が、既に肉體的にも精神的にも、其の滅亡に向ふ坂を下りつゝあるのだといふのである。『進化と人生』や『煩悶と自由』の中の諸論文に於て、氏の掲げて居られる材料だけによつて氏の述べられる所の說に耳を傾ける時、其の說明はまことに面白く、また其の議論は極めて整然たるものであつて、我々は恰かも全ての事が（過去も未來も）みな悉く說明し盡されてゐるものかの如くに感ぜしめられる。然し乍ら此の時、我々は恐らく、氏の斯かる人類觀に對して、上に氏自身が書いて居られる『前成說』に對する批評の言葉と同じ樣な辭を呈す可きではないのであらうか？　古生物學者中の何人と雖ども、化石時代の生物絕滅の原因が、今日既に明かに理解し得られたなどゝは思つてゐない。けれども、此の稿の中に筆者が述べたゞけでも其の一斑を窺ひ得る如く、滅亡の原因は時代によりまた生物の種屬によつて極めて多種多樣であつたらしく、不幸にして其れ等のすべてをば丘博士の簡明なる法則によつて一括することは出來ないのだ。例へば博士は、シャミセンガイ（女冠者）の如き動物は體も小さく且つ簡單であり、「何處の隅に生きて居るか分らぬ程の微々たる生活を營んでをるので、却つて古生代から今日まで引續いて細長く生存してをるに反し、一時急に盛んになつて、暫くは絕對に優勢を保つてゐた樣な動物は、悉く次ぎの時代に滅び失せた。……云々」といふ樣に述べてをられるが、之れなどは實に曲言も甚だしいのであつて、成る程シャミセンガイの屬する腕足類は今でこそ種類も百ばかりに過ぎず、「何處の隅に生きて居るか分らぬ程の微々たる生活を營んでをる」が、然し其れは古生代の寒武利亞紀にはじめて現はれて以來、「一時急に盛んになり、」殊に其の次ぎの志留利亞紀といふ時代の末葉には實に空前絕後の大發展をなして地上の到る處に蔓つたのであつて、志留利亞紀は一名「腕足類の時代」を以て知られてをる位である。其れが石炭紀二疊紀に至つて次第に衰へ、中生代に入つて益々下り坂となり、現今に於ては纔かに其の名殘りを留めて居るに過ぎぬこと、中生代の爬蟲類、第三紀の獸類よりもなほ微弱なるわけであるに過ぎない。さうして其の絕滅の原因は何であるかと云へば、勿論ハッキリとはわからぬがやはり外圍に起つた大變動であつたらしい。――シャミセンガイの對象として、反對に、體が大き過ぎたり、また複雜し過ぎたりした爲めに、一時代だけで忽ち亡びたのであると丘博士の說いてをられる巨大なる爬蟲類や獸類が、如何なる外的の原因によつてそれ〴〵亡ぼされたのであつたらうかと

いふことに就ては既に相當に說明し辯駁する所があつた。氏は「體が大きく力が强ければ其れだけ食物も多量にいる」と言つて滅亡の內因の一つとして擧げられる。然し、さういふ巨大なる動物の發生し得られた場處には、環境に大變動さへなくば、食物に不足はないのである、象は南北アメリカ大陸また我が日本などに於ては、最新世の或る時代（何十萬年か前）に既に根こそぎに滅ぼされてしまつたけれども、印度やアフリカの森林には現にまだ夥しく棲息してゐるではないか。また他の內因として「體が大きければ動作の敏捷を缺く」ともいはれる。けれども鯨の類は一時間約三十哩の速力をも出し得るし、象は密林の中を一日に何十哩も行くことが出來る、山猫と虎とどちらが果して敏捷であるかは判斷がつかないだらう、さうして大きな面積全部に亘つて、馬の如く羚羊の如く兎の如く敏捷なるものまでがやはり死滅した事實のあるのを如何にするか。博士はまた「體が大きければ生長に多くの年月がかゝり蕃殖が遲い」ともいはれる。けれども生物の各世代の壽命とか、生長を完成するに要する年月の長さとか、また產出までに子供を發育させる期間の長短とか、乃至蕃殖の度數とか、……いふ樣なことは、地球上に生物の棲み得る環境が種々樣々であり、氣候に、食物に、さうして其の生物の生活の形式（卽ち安全さ危險さ等）に千差萬別

がある如く、種々樣々なる複雜な事情によつて定められるのであつて、たとひ獸類と鳥類、鳥類と兩棲類、兩棲類と昆虫類などゝいふ樣に互ひに異なつた部類の動物を比較せず同じ哺乳類だけに就て較べて見ても、必ずしも一概に、體の大小とか力の强弱とかいふことのみによつて論ずるわけには行かないのである。例へば人は九ケ月間姙んで一尺內外の子供を產むが、鯨の大なる種類のものは生れ出た時から卽に二十尺前後の體長を持ち、さうして懷胎の期間も一年と少しである。野猪は四ケ月間姙み、一年半にして成熟を遂げ、（家畜とされた豚に於ては、食物等の關係で既に生後八ケ月にして生殖する、そうして一回の產兒の數もまた、乳の數は六對のみであるに、十頭から時には二十頭にまで達するのだ。）そして二十年乃至三十年生き得るが、猪とは緣の近いもので然かもあの偉大なる體軀をもつた河馬は、七―八ケ月間姙み、僅か二―三年にして成熟し、約四十年間生きる。然るに河馬よりも遙かに體の小さい牛や馬が、それ〴〵九ケ月（牛）に十一ケ月間懷姙し、成熟に二―三年（牛）及び三―四年を要し、牛は二十年から二十五年位、馬は四十乃至五十年の壽命を保ち、更らにまた馬よりも一層形の小さな驢馬が、十二―三ケ月間姙み、成熟に二―三年を要し、さうして馬と同じ位生き得る。（また一般に肉食獸は懷姙の期間が比較的短かく、獅子の如き大獸に於て

すら僅かに三ケ月であり、犬、狼、狐、は約二ケ月、猫は八週間である。然しまた壽命も草食獸に比すれば、概して短かい樣に見える。）……胎内にて二十ケ月半育てられ、成熟に二十年乃至三十年を要し、一回に一子だけを産み、約九十歳になるまで生殖しさうして百五十年乃至二百年の壽を保ち得る今日の象と、さらぬだに強大なりし蕃殖力を人に飼はれてなほ一層強め、懷胎二十八乃至三十日にして四乃至十二頭の子を産み、生後五ケ月乃至八ケ月にして成熟したる後、殆ど年中五週間毎に其れを繰り返へして五年乃至七年の壽命を保ち得る家兎とは、恐らく獸類の中での蕃殖力の兩極端であると考へることが出來やう。けれども其の象の蕃殖の緩慢さを以てしても、鮮新世及び最新世の環境の下にあつては、一方でそれ程急速なる蕃殖力を有する兎やネズミの如き齧齒類よりも却つて急速なる蕃殖を遂げて、アフリカ、ヨーロツパ、アジア、アメリカの四大陸に跨つて非常なる繁榮を極めることが出來たのであつたのだ。蕃殖の速度や一世代の長短のもつと極端なる例を擧げれば、一方には二三千年の齢をも保ち得る幾多の大木があり、また地方には分裂によつて増殖し同時に世代を新たにするに一分もかゝらぬ樣な細菌などもあるが、然らば、其れ等の微生物はどこまでも限りなく蕃殖して行くことが出來るか？ さうして大木の爲めには地上に存在の餘地が全く無くなつてしまふか？ といふに決してさういふわけではなく、幾多の外圍の狀況によつて各種の微生物もそれ〴〵其の蕃殖に制限を受けると同時に、地上には依然として 外の植物には利用し得られぬ樣な深い處まで地中に根をひろげ高い空間にまで枝葉を擴げるところの大木の育つ餘地も殘されるのである。其の他一度に數十萬數百萬の卵を産出する魚類其の他の海産動物と一回に一頭の子を胎生する巨鯨などゝが、共に或るバランスを保つて同じ海洋中に生存し居る如きも、また同樣なる事情に基くに外ならぬ。筆者は此處にも繰り返していふ、たとひ我れ等の地球は、もし之れを太陽に比し、また無數の太陽系ある全宇宙に較べるならば、勿論、渺たる蒼海の一粟たるに過ぎぬけれども、然かも、生物の個體に取つて其れは實に大なる天地であつて、其れは殆ど無限に多種多樣なる生活の環境を有し、また未だ利用せられざる無盡の物資とエネルギーとを包藏して居るものであると。さうして其れ等地上の多種多樣なる環境は時を同じくして多種多樣なる生物を存在しせしめ得るのだ。勿論、生活の苦難は全てのものに對してそれ〴〵に與へられてゐるのであるが、其の苦難に試練せられつゝ全ての生物の種屬は次第に外圍に對する適應の妙を現はして、各自それ〴〵の方向に其の進化をすゝめて行き、斯くして少くも過去に於て生物

界は時と共に進展し、複雜となり、向上して來たのである。——諸ての環境が常に幾分の波動を描いて推移しつゝあることによつて、個體は淘汰せられ、種屬は次第に變移した次第に分枝する。さうして其れ等環境の小變動以外に、地球の過去の歷史には、既に生物の出現後にも、何十萬年或ひは何百萬年かを距てゝ、地表の全部或ひは一部分に非常なる大變動の起つたことが稀でなく、爲めに幾多の生物は、種屬は愚か、『目』、『綱』と云はるゝ如き大群の全部が根こそぎに滅ぼされて消え去つたこともあつた。けれども一旦其れ等の變動がすみ、舞臺の場面が一變された後には、また更らに生物の新しい發展や進化が見られ、さうして長い間に於ける其れ等の變遷の模樣を調べて見るに、其の時起つた變動が如何に劇しいものであり、其の破壞の跡が一時如何に慘澹たるものであつた場合にも、結局のところ、其れは生き殘りたる生物にいつも溌剌たる活氣を與へ、其れをば殆ど飛躍的に一段と高く向上し進化せしめて居るのだ。中生代の幕が下され爬蟲類の大部が滅された時、新しい舞臺の上にははじめて溫血動物があらはれ、また胎生動物があらはれた。さうして胎生し哺乳する獸類ばかりではなく、卵生する所の鳥類に至るまでが、今までの爬蟲類の樣に卵を產み放しにする樣なことをせずして、みな多少乍らも子供の世話をする樣になつた。新生代の第三紀の間にも幾多の大變動によつて舞臺の場面は幾度びか變へられてゐる。けれども其の變動が繰り返されて場面が變つて行く每に、例へば哺乳動物だけに就て云つても其の上にあらはれて來るものゝ體制は益々完備してより合理的のものとなり、(上述の馬の例の如き)同時に彼れ等はみな次第に智能の發達したものとなつてゐる。(今日生存する哺乳類の如何なるものと雖　もし其れを鮮新世時代の祖先に比ぶるならば普通六倍乃至十倍の腦の大きさを持つてゐるのだ。)かくて大旱魃、寒氣、濕潤、氷河、大洪水——等の苦難によつてもまれつゝありし間に、終ひに今より約五六十萬年前第三紀の終末に當つて、我れ等人類の『人らしき祖先』も創造し出されたのであつたのだ。けれども、此れ等の變動やまた長い間の時間の經過によつて起された所の變化は、只單に眼に著しく映ずる哺乳動物や人類の出現のみではない。我々は一方に於て斯くも著しき變化を誘起せしめたる原因が、同時に他方に於ては、一見不變に見ゆる如き生物界の部分にもやはり、何等かの變化を起したに相違ないことを考へなければならない。少くも其れは生物間相互の關係に於てさうである。個々の場合に於ては其れが滅亡の原因となつたこともあるだらう、或ひは今後滅亡せしむ可き原因を形成してゐることもあるだらう、けれども全體としては生物相互間

の關係も、(恰かも爬蟲類の天下が去つて哺乳類の天下を現じ出したるが如く、)やはり進化であり、向上であり、完成であつたことを信じないわけには行かない。たとひ一木一草と雖ども、否、最も原始的にして進化の度低しと云はるゝ一つのバクテリア、アメーバの如き生物と雖ども、(而してたとひ其れ等の生物の實質に、昔と今と何等の變りなき樣な場合であると假定しても、)地上に哺乳類出現前のそれと、既に出現後のそれとではまう決して全く同じものではない。人類出現の以前と以後とでは、たとひ彼れ等自身の形質に毫末の變異をも生ぜざりしとするも、(さうしてそれは全く不可能なることなのであるが)まう決して同一なる生物であるといふ事は出來ない。時と地球上の生物的環境とが異つてゐるからである。即ち、言葉を換へていへば、內容に於て人類の如きものを出現せしめたる時の生物界は、同時に其の全體としてのオルガニザチオン(各生物間の相互的關係等)に於ても、やはり、著しき進展をなしたものと考へざるを得ぬのであつて、進化の舞臺が變る時、全ての生物は(大なるも小なるも、所謂進化の度低きものも高きものも、)何れもみな新たなる意味を持ち、新たな〻役目をもつて、其の進化劇に參與するのであると考へるのだ。さうして、實にさういふ『相互關係的進化』、『全一的進化』によつてこそ、今日我れ等が見る如き生物界のハーモニイは實現されたのであると思ふ。

——無機物を同化し太陽のエネルギーを捕捉して貯へる所の綠色植物があると、それをば食物にする菜食動物がある、植物は時に刺などを生じて濫りに食はれることを防ぎ乍ら、一方ではまた喜んで美しい花を飾り、甘い蜜などを用意して、幼虫の時代には葉を食つて害をした蝶々や其の外の昆虫に受精の手傳ひをさせたり、味のよい果實を提供して鳥や獸に種蒔きの役を賴んだりしてゐる。(だから一見したる所、動物は無慈悲に植物を利用ばかりしてゐる樣ではあるけれども、實は隨分と助けてもゐるので、もしも、擬人法を以て云ひ表はし、動物が全て遠慮深いものゝみであつたら、奇麗な花をつける植物や、美しい果實を結ぶ植物などゝいふものは、最初からまるで地上に發生することが出來かなつた筈なのだ。)植物を食つて肥つた動物を今度は肉食動物が襲撃して餌とする、或ひはまた同じ肉食動物の中でも弱いものを强いものが捕へては食つてゐる、然し其の食はれる危險あることが、實は多くの動物に孤獨生活を廢して團體生活をなさしめ、社會といふものを作り出
互扶助的精神(や本能)を發達せしめ得た最初の原因なのだ。さうしてまた食ふ方の動物にも食はれる運命の動物にも、食ふ爲めに、或ひは食はれぬ爲めにあらゆる工夫を凝らす可く、次第に多くの智慧(或ひは本能)を授けたのであつた。動物の死

屍、植物の枯れた幹や枝葉、さては幾多の動物から排泄する所の糞尿等は、何れもみな其れ等を主食物とする動植物が寄つて來て片附けてくれ、殊に其の總ての後始末は、全部、腐敗バクテリアといふ奴などがゐて其れ等をキレイに無機物に分解し、緑色植物か根から吸收し得られる樣に處理してくれる。もしも此の腐敗バクテリアがゐなかつたとしたら我々は忽ち動物植物の祖先の死體の中に埋まつて終はなければならず、もつと正しく云へば、我々が此の地球上に於て流用し得る物資の大半が、丁度水が氷河の中に吸ひ込まれてしまつた時の樣に其の不斷の循環系統の埒外に除かれてしまふ爲め、忽ち物資不足となつて恐らくは既に遠い昔に、生物は早くも全部死滅してゐたであらう。何故なれば我々は實に我々の動植物的（人類をも含む）祖先の屍を間接に食ふことなしに、一日と雖とも生きて行くことの出來ぬ運命にあるのだから。またバクテリアの中には大氣中の遊離窒素を取つて複雜な含窒有機物を合成する種類があり、土壤の中にもをればまた豆類等の根の組織内には共生もしてゐる。――試みにレンゲやウマゴヤシの花が一面に咲き亂れた春の野を想ひ浮べて見るに、其の無數の花が種子になるのはみな昆虫のお蔭であり、營養の半分は葉綠體の働きによつて太陽と空氣から、また半分はいま述べた硝化バクテリアの助けを借りて地中から　てゐるのであるが、其の土地はまた到る處に棲む多數の蚯蚓が地中で泥を食つては糞として地表に排泄することによつて、斷えず反覆上下に耕されやはり植物の發育を助けてゐるのであつて、其のウマゴヤシ等を我々が牛や馬を飼ふ飼料とし或ひは田畑の肥料として用ゐるといふ事は、要すに我々が昆虫や、硝化バクテリアや、蚯蚓等とも、識らず識らざる間に共同生活を行つてゐるわけなのである。さうして更らに人間の牧場や家に養はれて、乳や肉や毛皮や勞力やを供給する所の家畜や家禽、或ひは田畑に栽培せられて菜や果實等を供給する各種の栽培植物、更らにまた山野に茂つて居る森林の樹木、……といふ樣なものと我々人類との關係を精細に考へて見る時、要するに彼れ等もやはり我々と共同生活を營んでをる者であることを、認めぬわけに行くまい。成程、人類は全然利己的に從來彼れ等を利用して來た。けれどもそれでさへ彼れ等もまた、公平に考へて、人類の勞に負ふ所決して少くないのである。さうして我々が更らに動物と植物との間の酸素相互補充の現象を考へ、或ひは生物界に於ける窒素の循環系統（"Nitrogen cycle"）の微妙なる關係等をも考ふるならば、我々人類が自ら利用する意圖なき生物間にも如何にまだ多くのものが事實上緊密なる交涉を我々に持つてをるかを悟り、實に有害なるものは容赦なく

根絶せしむ可きであるとしても、其の他の多くのものとは其の相互に有利なる共同生活の實を、今後は益々合理的に確立す可きであると悟るであらう。彼のバクテリアの如き進化の度最も低き生物の一群すら、全生物の存在竝びに進化向上の爲めには、是非とも缺くことの出來ぬ要素であり、役廻りである。人類の進化は、勿論、人類それ自身の進化でもあるけれども、また同時に全生物界の進化でもあり、其の始め地上に出現したる原始生活物質の究極的發展でもあるのだ。終ひに人類をして今日の處まで向上せしむるに至つた過去の生物進化劇の中に於て、其の場面々々の舞臺となつた所の外的環境の効果はいふまでもないが、其の時代々々の人類の祖先と共に同じく役者として舞臺の上に立ち各種の役割りを演じたる種々なる生物の種屬は、何れもみな其の資格に於て、また其の貢獻の大いさに於て、全く同一と認む可きである。實に彼れ等は最初同一なりし原始生活物質の一部が、各々異なりたる地位に置かれ、異なりたる役割りを演ぜしめられしが爲めに、千差萬別を生じたるものに外ならない。人類が劇の主役を勤むる樣になり、人間らしき姿を以てはじめて舞臺に現はれたのは、まだ五―六十萬年前からのことであるが、今は丁度彼れの意識が眼覺めかけ、彼れが『已れ自ら』といふものを知り、宇宙に於ける生物進化劇の意味、同役たる他の種々なる生物と自分との本來の關係などをば、既に不充分乍ら悟りはじめた所である。之れより以後の場面は、其れが爲め、次第に、整然さを増して行くことゝ思ふ。

――誰れもが承認する如く、人類は最初、手と頭腦との力によつて次第に他の動物よりも優勢の地位に進んだのだ。比較的に優秀だつた其の頭腦を以て、物を扱ふに都合よき手を使つて彼れは種々なる器物を造つたり其の使用法を工夫したりした。さうして其のことが更らにまた頭腦を發達させる原因ともなつた。けれども兎に角、體力は貧弱な動物であるので、たとひ簡單な器具位は出來ても到底大した仕事は出來ず、猛獸の襲撃を防ぐ爲めに、或ひはまた積極的にこちらから巨な大る野獸を獵する爲めに、彼れ等は次第に孤獨なる生活を棄てゝ團體生活をやりはじめた。手と、智力と、社會生活、此の三つが人類の進化を齎した最大なる原因であり要素であるといふことには決して誰れも異存はない。――團體生活は彼れ等の間に次第に言語といふものを發達させたが、それが後には文字といふものによつて終ひに完全に記錄し得る樣になり、或る程度まで時間と空間とを超越したる意志傳達の方法ともなり同時にまた記憶を貯藏する爲めの手段ともなつた。また他方に於て手が其の後、はじめて火といふものを發明して其れを智慧を絞つて種々樣々に

使用することにより、最初、木片や石や貝殻製の簡單な手道具などに過ぎなかつた器具は、青銅時代、鐵器時代を經て、終ひに今日の鋼鐵時代に入り、廣義に於ける我れ等の『文明の利器』の數々を産み出したのである。また人類が營んだ團體生活の單位は、はじめは恐らく血族の集つた大なる家族であり、次ぎに部落となり、村となり、村の集まりとなり、小さな國となる、といふ様にして……つひに一種族或ひは數種族をも包含したる大小様々の國家といふことにまでなつて來たのであるが、其れ等の社會は最初から所謂『階級型』のものであつて、或ひは家長とか長老とか酋長とか國王とかいふ様なものを頭に戴き、また團體の次第に大きくなるに及んではそれに正比して主腦者以外に其れを輔佐する人間の數も殖えて所謂『統治者階級』を形成し、多數の『被統治者階級』の上に權力を振つたのである。最初『物々交換』でやつてゐた經濟組織に貨幣といふまるで新たな要素があらはれ、それを取扱ふ事が『要領よくて』上手な人間は所謂『金持ち』となり、取扱ふ事の下手な連中は所謂『貧乏人』となつたのであつたが、金持ちは其れが統治者階級から出た場合にも、或ひはそれと關係なく『立身出世』したる場合にも、いつも結局はやはり一種の特權階級として一般の被統治者階級の上に臨んだのであつた。――最初人類が團體生活を營むに至つた本來の動機が、他の獸類に對する鬪爭に於て其の能率を上げ様といふことにあつたのだから、其の當時の人間の頭が、いはゞ"Might is Right"といふ様な思想を基礎としてゐたからといつて、決して少しの不思議もない。自然、家長とか長老とか酋長とかいふ地位は、それ〴〵其の團體中で、最も經驗を積み最も智識を多く持つた最も體力の强い男によつて占められたのであらうが、然し其の經驗とか智識とかいふものも、勿論只、鬪爭本位の經驗であり智識であつたに違ひない。主腦者が年寄り且つ弱くなつた時、他の中老にして强き者がそれを退けて代つた様なことも稀ではなかつたらうが、然し未開盲昧なる時代には迷信も行はれ易くて、たとひ酋長が死んだ後でも其の魂は依然として部落の中に留まつて一同を守つてゐるかの如くに考へ、或ひは考へさせ、それをば神として祭つたり祭らせたりして、二代目の酋長の位には『神の子』であるといふ其の息子を立てることが多かつた。『祖先崇拜』といふ事も最初の起原は大體こんなものであり、さうして統治者の門閥世襲制といふ事が最初から其れと密接な關係を持てゐたのである。尤も如何に戰爭が上手だつた酋長の子供でも必ずしも勇者であり智者であるとは限らぬこと言ふまでもなく、門閥故に酋長の位にはつけられ乍らも、さういふ時には單なる飾り物と化し終は

り、實權は其れを輔佐するもの、手に握られたわけであるから、さらぬだに一夫多妻制の爲め多く産れた酋長の子供の中から後繼ぎを立てる際には屢々騷動なども起つたのである。さうして只單に斯くの如き政治上の統治權ばかりではなく、一部の人間が私有財産として貯め込んだ『富』といふものも、其の所有者が死去する時はやはり同じく世襲的に其の子供に傳へられる樣になつた。――武器と智慧と團結との力によつてだうやら周圍の獸類を壓伏し得たる後、人類は、今度は、互ひに人間同志で鬪ふ事をはじめ、部落と部落と間には頻繁に戰鬪が繰り返へされた。然し、他の人間の部落を對象としたる場合にも戰鬪の動機は、全然、獸類を對象としたる時と同じだつたのであつて、則ち、他を襲ふて勝つた時には、敵の男子を鏖殺し、或ひは女子や子供等と共に捕虜として携へて歸り彼れ等を奴隸として使役することもあれば、また殺して食ふことさへ稀ではなかつた。人類自身の實力がまだ餘り猛獸等の上に出てゐず、猛獸からやられたる時の慘酷さを、自分等が他の人間の部落を征服した時には自ら恣に行つて快としたのであつて他の動物に對すると同じく、征服された弱者に對する道德などはまだ全くなかつたのだ。戰鬪時に於ける行爲は兎も角もとし、日常の生活を營むに當つて、（可成りに小範圍の原始人類の社會にも捕虜が奴隸として使驅されてゐたことや、また他種族から奪はれて來た女が妾妾となつてゐたことは事實であるから、）社會を構成してゐた人間と人間との關係が相互扶助的精神に滿ちて平和であり特にその結果として戰鬪に際し一致團結が保たれたのであるとはだうしても考へられない。肉食獸から襲撃せられる危險は、馬や、野牛や、猿や乃至は象の樣な大獸にまで團體生活を營ませ、さうして彼れ等の社會には、實際に相互扶助的なる、強者が常に弱者を保護し勞はる所の、精神を生ぜしめた。けれども之れは、其れ等の獸類が何れもみな菜食性のもので、彼れ等の戰鬪力がたゞ自衛的防禦的にのみ用ゐられゐたる爲めであつて、肉食動物にも蟻の社會の如き例があるにしても、寧ろ狼の集團生活にも似たる人類の原始的社會の場合とは全く別にして論じなければならぬことゝ思ふ。

――化石時代の動物滅亡の問題から出發し、今日の人類が既に退化の途上にあるといふ結論の理由として、丘博士の說かるゝ所は大略次ぎの如くである。(1)原始人類の團體と團體との間に鬪爭が行はれた場合、團結力が强く共働的精神に富んだもの程、他のものを打ち負すことが出來、從つて共働一致的並びに指揮者に對する服從的精神は自然淘汰によつて次第に完全なるものとされて行つた。則ち其の當時の優勝的社會にあつては、

社會を構成する個人的分子の間には普く相互扶助的精神が行きわたつて居り、統治者として仰ぐ所の酋長はすべてのものから神の如くに尊敬され、總ての人々は其れによつて發せらるゝ命令のまゝに唯々諾々として行動し、從つて如何なる場合にも共同的動作に不一致を來し矛盾を生ずる樣なことはなかつたのである。(2)然るに人類は互ひに戰ふに當つて道具を用ゐるが、(團結心の強弱といふこと以外）其の武器の優劣といふことがまた、更らに新らしい勝敗決定の標準となつて來た。さうして通信や交通の機關が完備して來るに從つて、一つの社會の大きさといふものは限りもなく擴げられて行つた。(筆者曰、これは既に工業時代にでも入つてからのことをいふか？）(3)さうして一旦、社會團體の大いさが增した以上、其れ等の大團體の間の鬪爭といふものは、まう昔の小團體間に行はれ得た如く徹底的には行はれず、たとひ一方の民族が敗けて征服されても、被征服者の大半は殘存して征服者同族に子孫を殘すことが出來た。斯くして自然淘汰の働きは鈍り、終ひには全く終熄し、さうして其の時以來、いままで自然淘汰によつて維持されて居つた社會內部の團結心や統治者に對する服從心といふものは、次第に退化しはじめたのであつた。(4)團體が大きくなると共に、社會には一人の主腦者以外に一つの統治者階級と、其の殘部の被統治者階級とが出來た。然し社會內部の共働的精神が旺盛であつた間、階級の間の不和などといふ事は少しも起る心配がなかつた。何故なれば統治者階級は社會全體の爲めにならぬ樣な命令などは最初から出す筈がなかつたから。(5)共働的精神が衰へて來た時、統治者階級ははじめて其の特權を濫用して人民を己れ等の利益の爲めに使役せむとして壓迫をはじめた。さうしてまた人民の方も、或る程度以下に服從心を失つて來た時、はじめて上からの其の壓迫を感じて、終ひには「自由」を叫ぶ樣にもなつたのである。(6)此の見地から見る時、人類の過去の歷史は一つのパラボラに似てゐる。團體の單位が小さくて自然淘汰が斷えず働いてゐた間、それは次第に向上して行つた、然し一旦、社會の單位が大きくなつて自然淘汰が働かなくなつたと同時に、それは次第に下降しはじめた。(7)現代の人間は此の人類の向上時代に發達した性質と降下時代に發達した性質とを二つ乍ら持つてゐる、卽ち利他主義は前者であり、利己主義は後者に屬する。さうして今日の人間の行動に無數の矛盾撞着が見られるのも全くさういふわけによるのである。(8)以上の如き精神上の方面ばかりではなく、人間の肉體的方面もやはり、彼れが手と腦とを除り過度に働かせ過ぎた結果として、斷えず、弱められてゐること衆知の事實である。(9)故に、上述の如き推理に基いて、曾て人類をし

て他の全ての動物に打ち勝つて地上に覇を唱へしむるに至つた彼れの手と腦とは、今や却つて人類を肉體的にもまた精神的にも、下方に向つてひき落しつゝあり、さうして曾て人類の向上が其の頂點に達したる時に、其れが有しゐたる如き社會內部の團結共働の精神といふものは、まう再び回復せしむ可き望みがないと結論せざるを得ない。………

筆者が此れ等の諸點に對して言ひ度いと思ふことは、先づ(第一)に丘博士が(1)に記して居るゝ如き相互扶助的精神が發達して、社會全部が常に一心同體の如く行動して生活してゐた社會などゝいふものは恐らく人類の原始時代に決して見られたことはないであらうといふ事だ。前にも記した通り、原始人類の社會は本來、自衛と征服との爲めに營まれたもので、殺されるか、殺すか、掠奪されるか、掠奪するかといふ戰闘に際しては、さらぬだに熱狂し易い蠻人のことゝて強い團結も見られたであらうけれども、例へば、愈々敵の部落を滅亡させ獲物や捕虜を携へて歸つて來たといふ時其れ等の獲物の分配の事に就て何等の行き違ひも起らなかつたか、また戰闘のない平生の生活の間に萬事が無事平穩に相互扶助的にのみ行つてゐたかだうかは、頗る怪しい事と思ふ。現時の蠻人社會の生活を見て直ちに原始時代の我れ等の祖先の社會生活に比することは出來ぬかも知れぬが、兎に角、其の當時から今日までも未だにさういふ部落的小團體間の闘爭を繰り返へして居る種々なる蠻人の社會を見ても、決してそれ程理想的に精神的統一のとれた團體であるとは思へぬ。他の種族の部落を敵と思ふ念の強いことだけには同部落の頭がみな一致してゐるにしても、いざ戰ひといふ時には平生の內輪同志の生活のことなどはだうであらうと、やはり武器の優れたのを持ち、性質が慓悍であつて、然かも人數が多い種族の方が勝つといふだけに過ぎぬらしい。さうして勿論、闘爭の結果全滅の悲運に遭はされる樣な部落もないではないが、どちらかと云へば、未開なる蠻人の間にあつては、疫病だとか飢饉だとかいふ樣な天災の爲めに、死滅する團體の方が却つて多くはないかと思はれる。筆者をして云はしめるならば、今日の未開人種或ひは半未開人種にも比すべき原始人類の成した社會などゝ云ふものは、(質樸とか小兒の如き無邪氣さとかはあつたかも知れないが)、要するに不完全極まるものであつて、決して我々が羨むに足る樣なものではなかつた。彼れ等の社會制度などは何れにしても五十歩百歩のもので、決して其れを自然淘汰の主なる標準として考ふることは出來ず、全體として彼れ等は非常なる天然からの壓迫の下に生活し、其の外圍の壓迫(氣候の激變、飢饉、疫病……等)の爲めに死滅し淘汰された場合

の方が恐らく遙かに多かつたであらう。――(第二)、もしも社會團體間の自然淘汰といひ、優勝劣敗といふことを說き度いならば、其れが爲めにより適當なる實例は既に有史以後、即ち我れ等が東西兩洋の歷史の中に却つて多いだらう。其れは既に人類が不充分乍らも手と頭腦と社會生活の力を以て或る程度まで天然からの壓迫に反抗する力を得、然る後、更らに個々の民族とか國家とかいふ社會團體が、それ〴〵自己に特有なる何等かの文化的特長を產み出し得たる後のことである。或ひはギリシヤ・ローマによる異邦の征服、サラセンや蒙古民族のヨーロツパ侵入、或ひは支那といふ舞臺の上に起つた古今の興廢の跡、乃至は我が日本の歷史の中からでもよい、例はまことに枚擧に暇なきほどである。其れ等の國家と國家、民族と民族、或ひは封建時代の封土と封土、乃至は源平の如き氏族と氏族とが、征服したり征服されたり、亡ぼしたり亡ぼされたりしたに就ては何れもみな征服者には征服者としての或る長所があり、滅亡したる者には滅亡するだけの或る短所があつたのであつて、其れに自然淘汰が働いたのである。然し如何なる場合にも一方の人間がみな悉く死滅したなどゝ云ふ樣な事はない。否、其の結果は却つて兩者の密接なる接觸の原因となり、甲と乙との文明が合體され、時には却つて被征服者の方が征服者に大なる感化を與へる樣なことすらあつた。東西兩洋の文明をはじめて融合せしむる機緣をつくつたアレクサンドル大王の印度遠征、ローマに對するギリシヤ文明の感化、さては東ローマ帝國に對するビサンチンの影響、…………等みな悉く其の多き實例中の一小部分である。「異民族はすべてみな己れ等と差別的なるものであり、己れ等よりも一段乃至數段下等なるものである……」といふ、蠻人の部落時代からの惰性的思想が、いつも主なる原動力となり、其れをば支配者の功名心や或ひは己れ等の征服欲、掠奪趣味が率ゐた時に、すべて此れ等の戰ひや征服は行はれたものであつたけれども、其の結果はいつも却つて、異民族間の差別を少しづゝ撤廢することに與つて力があつた。もしも少しく誇張して言ふならば、今日の世界主義的思想、世界や人類を單一なるものと見、四海みな同胞なりと信ずる思想は、諸民族諸國家の間に從來繰り返へされたる戰爭の賜物であるといつても差し支へない。例へばaがbを征服してAとなり、cがdを征服してCとなり、AとCとが互ひに相爭つてゐた時突如Eなる强民族が現はれてAとCとを兩つ乍ら併呑してFとなつたが、其のFが、また或る時間を經て瓦壞しa、b、c、d、e、となつたといふ樣な時に、其れ等のa、bやc、d、の間の互ひの敵愾心とか民族的偏見とかいふものは、餘程以前よりも薄

くなるのが常であつた。戰爭や征服は、幾多の弊害や犠牲を作つたけれども、其の結果から見れば、地上の小さなる異分子を互ひにこね混ぜて、最後に一つの均一なる一體として練り上げる爲めの豫備的手段とし、方法として、演ぜられたる芝居であると考へ得る場合も實際に少くないのだ。――(第三)、盛者必滅といひ、榮枯盛衰は世の習ひであるといふ。生物の一個體が生れて生長し、發展し、活躍し、終ひにまた衰へて死んで行く現象なども、確かにまた其の一例である。古から以來、地球の上には幾多の民族が勃興したり、衰褪したりした。種々樣々なる國が建てられたり倒されたりした。其れは丁度世の中に昔からいろ／＼な人が生れて、生きて、死んで行つたのと同じ樣にも見える。さうして、小兒の生長が身體內部の或る生理的素因によるのであり、老人の衰へるのが同じく內的素因に由來するのである如く、民族が興る時には其處に興る可き相當の內因があつたのであり、また國が倒れる時にはやはり其處に倒る可き內因が存在してゐた爲めであるに相違ない。小兒をして生長し發育せしむる內因と老人をして死滅せしむる內因とは、根本に於ては互ひに相通ずる所があるかも知れないが、それは如何に言葉の上で巧みにこぢつけやうとも、斷じて全然同一のものではない。もし同一のものであるとすれば、一方は確かにプラスの其れであり他はマイナスの符號が附いたそれである。丘博士の用ゐられた比喩と同じことを例として言ふならば、平家が源氏の爲めに滅亡の憂き目にあつたのは確かに平家それ自身の內部に既に滅亡を誘起す可き內因が釀されてゐた爲めであるに違ひない。けれども其の內因たるや、決して最初、平家をして日の出の如き勢を以て興隆せしめた時の內因と同一なるものではなく、一言にして云ふならば、平家は當時文弱に流れて地方の鼠賊に對してすら施す術を知らなかつた藤原氏が統治者階級として立つてゐたに際し、其の武を以て天下の政權を握り得たのであつたが、然し一と度び權勢にあり付き一族を擧げて榮華を極め得るに至りし後は彼れも僅かの間に早くも再び藤原氏の轍を蹈んで文弱に流れ、所謂「六波羅風」の優雅さを見せ、同時に全軍水鳥の羽音に驚いて逃げ歸る如き腰拔け武士となり果てゐたが爲めに、一と度び關東の野に裸馬を走らせゐたる如き荒武者共に押し寄せられては、日に照されたる朝露の如くに消え失せなければならなかつたのである。もしも平家が其の勃興したる時と同樣に引き續いて、武の方をも練つてゐたとしたら、決してあんなに脆い亡び方はしなかつたに違ひないのだ。事情はそれ／＼の場合によつて種々樣々であるだらうけれども、全ての過去の歷史を通じて一と度び全盛を極め得たものが

後に衰へて滅亡するといふことは、最初勃興したる時に有力だつた內的素因が微弱となつた爲めであるか、乃至は外部の事情がもう其の內因では役に立たぬ様に變つてしまつたかによるのである。さうして我々今日の人類が、今後なほ益々向上し發展し得るか、それとも次第に滅亡に向つて坂を下つて行かなければならぬかと云ふ問題なども、此の見地に立つて篤と吟味して見なければわからない。――（第四）、筆者の信ずる所によれば、一つの社會を形成する個人的分子の間に團結力が弱まり一致共働の精神が薄らいで來た様に見えるのは、決して社會の單位が大きくなり過ぎた爲めなどではなくて、人間の智識が進み、理性が段々と目醒めて來た爲めである。人間が無智であつて、事物の理を自己の理性によつて判斷することなくそのまゝ無條件に盲從し得られた限り、或ひは理性そのものがまだ極めて幼稚であつて、幾多の迷信をば認容して行くことが出來た間は、非常に大きな頭數の人間が（さうして屢々同一なる社會の內のみでなく幾つもの別々な國家といふ様なものに屬する人間までが）互ひに强く團結し、身命を賭してまで一致の行動に出る事も出來たのだ。例へば、彼の十字軍といふ様なものゝ起されたのも、或ひは後年新教が出來た時に新舊兩教徒の間の戰ひが繰り返へされたのも、乃至は今現に近東から印度にかけて所謂「汎イスラム運動」のはじまりかけてゐるのも、もしも其れ等の騷動を起させた所の宗教的信條といふ様なものを、絶對の眞理であると認めぬならば、僅かに小さな一つの迷信だけによつても如何に多くの人間がいのちを懸けて團結し力を協せて働くことが出來るかといふ事を示してゐる。けれども人間の理智が段々と進んで來れば來るほど、今まで彼れ等を團結し一致共働せしめ得た幾多の迷信は次第々々に其の數量を減じて來、從つてもし新たに、人間が其の時有つ理智の「明るさ」が容認し滿足し得られる様な他の新しき信條の現れ出でざる限り、人々の行爲は次第に散り々々とならざるを得ないのだ。――既に上にも述べたるが如く野獸との鬪爭といふことにその端緒を發し、次いで部落と部落との殺し合ひ掠奪し合ふことを共同の目的として出來たる人類の社會生活の制度といふものは、最初は如何にしても "Might is Right" といふことを肯定する様な內容や性質のものとならざるを得なかつた。（今日存する蠻人社會の制度なども充分に此の事を裏書きしてゐる。文化の度が低く誰れもがみな天然の壓迫や苦難に惱まされてゐたのであるから、弱者に對する憐愍の情などはまだどうしても起り得なかつたのである。他のものに對する同情心とか、戰鬪時以外、日常平生の生活の間に於ける相互扶助的精神とかゞ發生したのは、人間

の文化の度がまう少し進んで、彼れ等の生活にもつと餘裕が出來てからのことであつたらう。所謂、恒産なければ恒心なしの理である。）――戰爭を本職とする武士の階級（即ち多くの場合に於ける統治者階級）と一般人民との關係であらうと、或ひは既に平和的なる農業時代に入つてから以後の地主と農民との關係であらうと、乃至は近世の工業時代以後の大資本家と勞働者との關係であらうと、一般に廣義に於ける貴族と平民、富者と貧者との階級の間の關係は、何れも曾て被征服者の肉を食ひ骨をしやぶり、捕虜としたる男女を奴隷として使驅することを當然なりと心得た彼の原始時代の社會に於ける『力の權威を肯定した制度』の發展であり、また惰性的遺物たるに過ぎなかつたのだ。

斯くして其の初め極めて簡單なる『階級制度』として現れた人類の社會制度は、其の後次第に其の複雜さを加へつゝも頭初の主意をば少しも變ずることなくして、今より約百年前まで幾多の消長を描き乍ら其の發達を續けたのであつたが、然しその階級制度の存在とは關係なしに、人類の理智は全體として、或る時は徐々に或る時はまた急速に、次第に進歩し發達して來たのであつた。最初人間の智力は、手を用ゐて各種の器具を製作し、また農耕、牧畜、狩獵、戰爭……等原始時代の日常生活を營む方面にのみ使はれたのであつたが、然し時が經てば經つ程、さうして智力が使はれゝば使はれる程それは次第に多くの新しい事實と事物の底に潛んでをる新しい眞理とを發見し、さうして同時にまた、人間に、彼れ等がまだ知らぬ外の多くの眞理をも發見し度き欲望を生ぜしむるに至つた。之れは人類の階級的社會制度に取つては、實は致命傷だつたのであるけれども、それはどうも如何とも致し方ない。正しい理窟を見付けて、其の理窟を應用するに非ざれば、戰爭にも勝つ事は出來ず、また有用な器物を造ることも、土地からの收穫を增すことも出來ないのだから。統治者階級、特權階級の人間達は、最初から自分等の利益を永久に擁護出來樣るな國法を制定し、道德を製造し、さうしてそれをば一般の人間にも堅く遵守して假りにも背く樣なことがない樣にと小兒の時から嚙んでふくめる樣に敎へきかせ諭し込んだのであるが、都合よき事に一般の人間が無智であり迷信深くあつたので、祖先の神靈化といふこと、並びに祖先の靈魂の崇拜といふことにかこつけて門閥や私有財産の世襲制度の基礎を確固にし、また宗敎の敎理なども大半はその方に都合よき樣に、即ち人民の理智がなる可く覺醒せぬ樣に、さうして特權階級を神々との仲介者としていつまでも敬ひ、何でも其の命令には盲從する樣に、而して出來るだけ多くの義務を喜んで持

つて來る樣に……………と云ふ樣に巧みに仕組まれてゐたものなのだ。――人間の子供が此の世に生れて來る時、彼れは自分に死んだ昔の人間の墓番をして一生を送る樣なことがあるかも知れぬなど、は全く夢にも豫想してをらず、生命のない『神樣』に仕へなければならぬといふ覺悟なども少しも持ち合はせては來てゐない。だから人の子をして甘んじて祖先の墓番をもなさしめ、喜んで死せる神々にも仕へる樣にさせる事を希望する人々、自分等の地位や利害のいつまでも安全である爲めに、さういふことを必要と感ずる樣な階級の人々は、洋の東西を問はずまた僧侶や神官たると政治屋や軍人たるとを問はず、いつも子供達にさういふ二次的本能を植え付ける爲めに日夜心を勞したのである。さうして悲しい哉、人間の子供の柔かい心は、吹き込まれ方次第によつては、一生、鰯の頭をも祖先の靈魂であると思ひ、かたじけない御神體であるとして心から禮拜する樣にもなるのである。――けれども人間の理智が進み、日夜見ること聞くことを其のまゝ無條件に受け容れることが出來ず其の奥に潛み底に流るゝ眞理を究めずしては止み難い習慣がつくと、『鰯の頭』は忽ち其の化の皮をあらはし死せる『神々』は其の權威を失墜することにもなる。

此の稿のはじめの方に書いた猶太敎のエホバの敎へなどもやはり幾分さういふ樣な宗敎であつた。其れは宇宙の創造主として唯一の神を認めたのではあつたが、然し其の神は、猶太民族だけを特別なる選民として他の諸の異邦人をば悉く差別的に取り扱ひ、復讐心を是認し、犧牲として殺生し流血することを要求し、奴隷制度を公認し、女子の從屬性を說き、さうして此の世の位階と財寶とからまだ脫却することの出來ぬ敎へであつた。『キリスト』と稱するナザレのイエスの出現は實は猶太敎の敎理の根本的なる覆滅であつたのだ。筆者は思ふ、もしもイエスがあの時の猶太に生れなかつたとしたら彼れは決してエホバなど云ふ神に拘泥して其の敎へを說かなかつたであらうと。聽衆の大部分が猶太人であつた爲め、彼れは方便として猶太敎を其のまゝ承け繼いで說いた、けれども其の下らぬ部分はみんな彼れによつて骨拔きとされてしまつてゐる。

彼れは猶太人と全ての異邦人との間の差別を徹廢し、選民としての前者の特權を否定してゐる。其れは卽ち猶太民族の太祖としてのハブラハムの神格をば地の低きにまで引き下したることであり、狹量なる祖先崇拜や愛國心やの排斥であり、さうして實に此の地球上に於て發せられたる世界主義・四海同胞主義の最初の宣言であつたのだ。彼れは如何なる形に於ての復讐といふことをも許さず、汝の敵をも愛せよといふ、實に空前なる敎

へを説いた。もし丘博士などの信ぜらるゝ如く人類の原始的時代には、徹底徹尾、相互扶助的精神や已れを捨てゝ他人及び全社會の爲めに盡す愛の精神の瀰漫してゐた社會が實際に存在してゐたのであり、それが、智識の發展や器械の進歩等の爲め社會の單位が大きくなるに及んで、次第に利己的精神を生じ、同情や相愛の代りに憎惡や復讐の心を生じたのであるとするならば、我々は其の時に、今更ら「敵を愛せよ」などゝイエスがわざ〳〵説法しはじめたる事を、既に世が末になつて人心が次第に荒んだ爲めであると考へてよいかも知れない。然し、事實は、地上に生物の發生して以來、また人類か出現して言葉といふものが出來てきて以來、未だ曾て敵までを愛せよなどゝいふ言葉は大氣に響いたことがなかつたのである。其れ以前は『神の言葉』ですら、エホバの復讐を是認する既に前に述べたあの文句の如きものであるに過ぎなかつたのだ。

「目にて目を償ひ齒にて齒を償へと言へることあるは爾らがきゝし所なり。されど我れ爾らに告げむ、惡に敵すること勿れ、人なんぢの右の頬をうたば、また外の頬をも轉らして之れを向けよ。爾を訴へて裏衣を取らむとする者には外衣をもまたとらせよ、人なんぢに一里の公役を強ひなば之れと偕に二里ゆけ、爾に求むる者には予へ借らむとする者を郤くる勿れ。爾の隣りを愛しみて其の敵を憾むべしと言へることあるは爾らがきゝし所なり。されど我れ爾らに告げむ、爾らの敵を愛しみ、爾らを詛ふ者を祝し、爾らを憎む者を善視し、なやめ迫害する者の爲めに祈禱せよ。かくするは天に在す爾らの父の子とならむが爲めなり。それ天の父は、其の日を善き者にも惡しき者にも照し、雨を義しき者にも義しからざる者にも降らせ給へり。爾ら、おのれを愛する者を愛するは何の報いかあらむ、稅吏も然かせざらむや。安否を兄弟にのみ問ふは人より何の過れたる事かあらむ、稅吏も然かせざらむや。是の故に天に在す爾らの父の完全きが如く、爾らも完全くすべし。」(馬太・五章)

彼れは犠牲とか煩雜なるすべての祭典とかいふ一切の形式を無視し、或る時の如きは、神殿の内に入つて賽錢の兩換をする者の臺や、犠牲とする爲めの鳩を賣る者の椅子などを打ち倒し、彼れ等を悉く逐ひ出して「我が宮は萬國の人の祈禱の宮と稱へらるべしと錄されたるに非ずや、然るに爾らは之れを盜賊の巢となせり」とさへ叫んでゐる。嚴しい法度であつた、十誡の第四たる彼の安息日の律をすら彼れは平氣で犯して、安息日は人の爲めに設けられたもので人が安息日の爲めにつくられてゐるのではないと喝破し、同じく「汝の父と母とを敬へ」とあるに對して「地に泰平を出さむが爲めに我れ來れりと思ふ勿れ、泰平を出さむとに非ず刄を出さむ爲めに來れり。それわが來るは人を 其の父に背かせ女を其の母 に背かせ媳を其の姑に

背かせむが爲なり。人の敵は其の家の者なるべし。我れよりも父母を愛しむ者は我れに協はざる者なり。我れよりも子女を愛しむ者は我れに協はざる者なり。その十字架を任りて我れに從はざる者も我れに協はざる者なり」(馬太・十章)と說いた。猶太人は、今日でもさうだが、極めて家族制度といふものに執著してゐる民族だつた。けれども祖國といふものだけに特別に熱い感情を持つことを正しとしなかつたイエスは、家とか親とか兄弟姉妹とかいふものに就てもそれだけに對して特別なる愛や親さを持つことを正しとしなかつた。彼れが人々に說教して居る時、彼れの生母と兄弟とが彼れに何か言ふことがあつて外までやつて來たので、或る人が、「爾の母と兄弟なんぢにもの言はむとして外に立てり」といつたに對し、彼れは卽座に答へて、「我が母は誰れぞ、わが兄弟は誰れぞや、是れわが母わが兄弟なり」と、手を伸べて自分の弟子達を指さし、「そは、すべて我が天に在す父の旨を行ふ者は、是れわが兄弟、わが姉妹、わが母なればなり」と全人類を一家族なりと見ての思想上の親子兄弟姉妹の愛を說いてゐる。(馬太・十二章)微に入り細に亘つてエホバが、舊約の出埃及記以下に錄しある如く、命じて居る所の誡律や犧牲に關する命令などを全部根こそぎに拔き去つて、彼れは何人に對してもただ「己れ自身」といふものの全部を神への供物として、起つて、十字架をとつて、自分に從つて來いと說いた。ポーロは其の意味をローマ書に書いて(十二章)「されば兄弟よ我れ神のもろ〳〵の慈悲をもて爾らに勸む、その身を神の意に適ふ聖き活ける祭物となして神に獻げよ。是れ當然の祭りなり。」といつてゐる。貧しきやもめの投げたレプタ錢二個に對する言葉(馬太・十二章)にても知らるゝ如く、イエスは種々なる機會に、所謂「長者の萬燈よりも貧者の一燈」といふ特な意味を說いてもゐるが、然し『自己てふものゝ一切』を捧げるといふことを外にして、彼れは物質的供物の何物に就ても教へてゐない。況んや犧牲の殺生流血の如きをやである。

全ての人類を一視同仁に考へたと同じく、彼れは動物や植物をも、全く人間と同じ樣に神の手によつて創造せられ神の權能によつて地上に生かされて居る所の近親者だといふ感じを以て眺めてゐる、たゞ人間の方が一段と尊い創造物であるといふだけの差である。

〔彼れは肉食を避けよなどと一度も言つたことなく、從つて今日に至るまでキリスト教の方には『殺生』といふことに對して佛教徒ほどに考へを廻らした人々が少なくて、依然エホバ流の考へが一般には勢力を占めてゐる樣だが、然し近年になつてトルストイなどが唱へ出し、ロシヤなどに於ては可成りに多くの共鳴者並びに嚴正なる實行者を出した「菜食

主義」（Vegetarianism）の思想や態度といふものは、全くイエスの說いた博愛主義を動物にまで及ぼしたものであつて、同志の者の便宜や主義の宣傳の爲めに國內の多くの都會に、百を以て數ふる位にまで菜食のみに限つた共同食堂や料理店の設けられてゐる（革命前）ことによつても、それは我が國今日の佛教徒が、羊羹で鮪の刺身の模造をして食つたりする如き既に形式の末に流れた菜食主義に比して、遙かにより徹底したるものであることを附記して置く。」

「二羽の雀は一錢にて售るに非ずや、然るに爾らの父の許しなくば其の一羽も地に隕つることあらじ。爾らの頭の髮また皆かぞへらる。故に懼るゝ勿れ爾らは多くの雀よりも優れり。」（馬太・十一章）

「爾ら天空の鳥を見よ、蒔くことなく、刈ることをせず、倉に蓄ふることなし。然るに爾らの天の父は之れを養ひ給へり。爾らは之れよりも大いに勝るゝものならずや。爾らのうち、誰れか能くおもひ煩ひて其の生命を寸陰も延べ得むや。また何故に衣のことを思ひわづらふや。野の百合花は如何にして育つかを思へ、勞めず、紡がざる也。われ爾らに告げむ、ソロモンの榮華の極の時だにも其の裝ひこの花の一つに及ざりき。神はけふ野に在りてあす爐に投げ入れらるゝ草をもかくよそはせ給へば、況して爾らをや。嗚呼信仰うすき者よ。」（同・六章）

筆者は敢て、まう誰れもが知つてゐるだらうと思ふイエスの此れ等の言葉をも、爰に掲げさせてもらつた。其れは此れ等の言葉が實によく、筆者が此の稿の上段に說いた「地球上の環境は多種多樣であり、物資とエネルギーとは未だ無盡藏であつてそれは多種多樣なる生物（巨大なるものにも、微細なるものにも、所謂『強者』にもまた『弱者』にも、）同時に而して平等に、生存することを許してゐる……といふ樣な考へを、表はしてゐるからである。我れ等は一羽の雀、一本の百合の花といふ樣に個體といふものを單位とし、生物の營養經濟といふ立場から生物學者的に、此れ等の言葉を批判す可きではなくて、我れ等はそれを生物の種屬といふものに對して適用す可きである。幾多の猛禽が棲んでゐる、然かも雀の樣な小鳥にも生存して行く余地は與へられて居る。他に樣々な雜草が蔓つてゐる、然かも其の中にも百合が根を張り、地下莖に養分を貯へ、莖を延し、葉を擴げ、さうして年々、美しい花を咲き匂はせるだけの余裕は與へられてゐる……といふ樣な意味に、解す可きだと思ふ。さうして人間生活の天地に於ても、理窟はやはり同じであるといふのだ。

――筆者は余りに岐路に入つてバイブルの中の文句を書き過ぎたかも知れない。けれどもそれは決して讀者にキリスト教主義を宣傳しやうなどとしての行爲ではないのだ。自分は只、最近の千九百年の間人類の歷史の中に於て、人類の原始的祖先から承け繼がれた獸性が其のまゝ主なる基礎となつて出來た所の

もろ〳〵の社會制度や、また其の傳統的社會制度を是認し肯定せむとする原人以來の暗き人心そのものを改造す可く、絶えず地上に働いて來た所の一つの大なる力の流れに就て、語り度いと思つたのみである。其の革命的思想の流れは、ナザレのイエスといふ一人の人間の心を其の泉源として湧いた。勿論彼れの非凡なる熱情が其れをば奔騰せしめたのではあつたが、然し其れは「四十日四十夜の斷食的瞑想」といふことによつて象徴せらるゝ冷靜なる理智的判斷の産物だつたのである。全ての眞理の發見と同じく、其れは『疑ふ』といふことを覺えた人類の頭腦が産んだ、事物の眞相に就て語る所の、新しい布告であつたのだ。さうして彼れの大膽に發表したる此の布告ほど、未だ曾て祖先といふものに對し傳統といふものに對して、大なる反逆であり、抹殺であり、破壞であつたものはなかつた。實に人類の歴史あつて以來、キリストといはるゝ彼のナザレのイエス程の偉大なる革命家はなかつた。さうして既に其の後二千年近き今日の世に於てさへ、極東の君子國に於て、同じく一つの熱烈なる民衆的革命家として始終した日蓮に『何とか大師』とかいふ肩書をつけて嬉しがる樣な人間の階級崇拜心は、事實、名もなき一勞働者の子なりしイエスにもアブラハムの裔にしてダビデ王の裔といふ如き勿體をつけ、また彼れの教理を取次ぐ總本店の總支配人たるローマ法王は一時ヨーロツパの天地に王者以上なる權勢を振ひ富貴豪奢を擅にし、中世に於ては彼の『Inquisition』(『宗教裁判所』)を設けて人類の自由思想並びに眞理の追究に非常なる壓迫を加へなどしたが、然しさういふ所謂「教會」とか「キリスト教」發展史とかとは別々に、此の約千九百年の間を、一と度び彼れによつて發せられたる革命的思想の流れは、或ひはあらはに、また或ひは暗々裡に、人類社會到る處に流れ入り滲み入つて、日夜其の働きを續けてゐたのであつたのだ。それは十八世紀の終りに當つてフランス革命の烽火をも擧げた、——また、なさけなき人間の奴隷根性がナポレオン皇帝といふ樣なものを現出させる、——然しまたそれを第二第三の革命によつて共和制に造り直ほさす——するとまた工業の發達と共に資本主義が起り幾多の黄金王が現出する、——然しまた勞働者にストライキをやらせ、組み合ひを作らせ、終ひに今度の世界大戰を機としてロシヤ・ドイツ・オーストリー等の大帝國をも覆滅して、一歩々々自由の道に近づく改造を、いま現に行はせてもゐる……實に「死せる孔明、生ける仲達を走らす」どころの比ではないのである。……

筆者は、人間の理智が目醒め、『疑ひ』が起り、ものごとの底に横はる眞理をさとつて心が迷信や偏見から解放されて行つ

たといふことが、ウヤムヤにして盲目的なりし團結の力を弱め、愛と、利他の欲望と、正義を求むるの心とを生じ、其の愛と理智故にこそ、地上に存する幾多の不合理に屈從し續くることを廢めて、全ての傳統に反抗する樣になつたのであると說いた。さういふ理智の目醒めは人類社會のいろ／＼な處に、さうしていろ／＼な時期に、いろ／＼な形に於て起つた。ナザレのイエスが出て猶太教を革命したことも勿論その一つであれば、また何不自由なき王者の皇太子と生れたる釋迦が、家を棄てゝ衆生の中に入り、所謂『佛教』の開祖となつたことなども同じくそれであり、其の他支那に於て老・莊・孔・孟……等の所謂諸聖諸賢が世に出でゝ各々其の道を說きたる如きもまた其れである。尤も、惰性因襲の力は強くして、未だ今日と雖ども原人そのまゝの心理に支配されてをる人々も少くないのであるが、それは丁度、古生代の頃に全盛を極めたるシヤミセンガイの類などが、場處により環境によりては、今なほ地球上に生き殘つてをる樣なものであつて、今少しく環境に大なる變化の起る時、彼れ等は終ひに絕滅するか乃至は子孫といふものの著しい適應性によつて漸次より高きものにまで變移し行くの外ないのである。キリスト、釋迦、老子、孔子、……等は既に數千年前に出現したる人間思想上の著しき『突然變異』であるとも考ふ可きものである。」

丘博士は、階級制度の衰萎し、自由思想の擡頭するは、服從心の退化に基くのであると說かれる。さうして人類の如く（一般哺乳動物と同樣）出生後の經驗によつて次第に賢くなる動物の社會に於ては、生れ乍らにして個體毎に、驚嘆す可きほと完全せる本能の具はつた、彼の蜂や蟻に見らるゝ如き『平等型』社會組織は採用することが出來ず、是非とも『階級型』の組織を制定して賢明なる指導者の貴重なる智識經驗を其のまゝ全てのものが最も廣く利用し得る樣にする外ないと說かれる。社會團體の單位が小さくて團體と團體との間にはげしく自然淘汰の働いた間は、それによつて一社會內部の個體間に强大なる一致共働的精神を喚起せしめ、爲政者は常に一般人民の、而して社會全體の、福祉といふことのみを念として統治に努力し、さうして相互間に一致團結の力が强かつた人民は、同樣にまた極めてよく發達してゐた長者に對する服從心の爲めに、いつも爲政者の命に從つて少しの不平不滿を起すこともなかつた。然るに『階級型』の社會より外に組織し得ぬ人類に、一致共働の精神と長者に對する服從心とが衰へて來、さうして其れをば回復する道がどうしても存在せぬ以上（上記、丘博士の議論要旨(3)乃至(7)）人類の衰亡は如何にしても免れることが出來ない

といふのである。成る程、十何億かある所の現時の人間が、もしも各自に異つた不平不滿を持ち、それ〴〵に自分勝手なことばかりをやらうとし、何人をも尊敬せず何人にも服從することがなかつたとしたならば、恐らく人類は滅亡しなければならぬかも知れない。けれども問題は、教へたり指導したりする爲めには、必ず、冠をかぶつたり、金ピカの着物をきたり、爵位を持たりしてゐる者でなければならないのか？　さうして服從といふことはたゞ所謂『下』のものがさういふ『上』のものに從ふ時だけに限つて有意義なのであるか？　といふことだ。

「自ラ反ミテ縮カラズバ、褐寛博（賤民ノコトダ）ト雖ドモ吾レ惴レザラムヤ。自ラ反ミテ縮カラバ、千萬人ト雖ドモ吾レ往カム。」といひ。或はまた「天下ノ廣居ニ居リ、天下ノ正位ニ立チ、天下ノ大道ヲ行ク。志ヲ得レバ民ト與ニ之レニ由リ志ヲ得ザレバ獨リ其ノ道ヲ行フ。富貴モ淫スル能ハズ、貧賤モ移ス能ハズ、威武モ屈スル能ハズ、此レヲ之レ大丈夫ト謂フ。」と嘯く彼の孟子の言葉の如きは、確かに『不良性不從順性』を含むこと頗る大なりといはなければならぬけれども、然し其れ等は同時にまた或る絶對的なる忠良さと從順さとを有してをる。

即ち其れはあらゆる不合理に對しては何處までも反抗するが然し其の反對に一と度び理に合つたことであると思ひ、正しいと信ずることでさへあれば、其れはいつでもおとなしく無條件に頭を下げて、命ぜられるまゝに唯まう從ふのだ。其の際それは、奴隸的だつた人間の『服從心』がたす樣に、決して命令がどちらの方向から發せられたのであるかといふ事などを顧慮した後、はじめて態度を決める樣なことはしない。其れは時によつては世の中全體に對しても反抗する、然し如何なる場合にも其れは自己の信念に對して絶對的に忠實であり從順であるのだ――かういふ理智の目醒めが社會の主腦者として立つ者の心に起つた時、それは例へば彼の儒教によつて理想化して傳へられた所謂『先王の道』といふ樣なものになつてあらはれる。また實際にも堯とか舜とか禹とか云ふ帝王はさういふ自己の信念に忠實な人だつたのであらう。丘博士がいはれる樣な理想的主腦者や、統治者階級を持つた社會團體が、實際に今までの人類の歷史にあつたかだうかといふ議論は別として、歷史上、死後に至るまでも賢帝であつたとか聖天子であつたとかいはれて全ての民衆から慕はれた樣な少數の主腦者達は、多少に拘らず何れもみなかういふ素質を備へてゐた人達であつたのだらう。けれども一と度び主腦者の心が斯くの如く理智に目醒め、正義を求め、利他を欲する時、それはまう只單なる命令者として留まる

ことを、自ら肯んじない。それはまう決して、奴隷に對する主人といふ如きものではなくて、同じく民衆の一人であり、友達であり、兄弟であり、父である。さうして全ての事を民衆と偕に一緒になつて行はうとする。自分の所信をもいつも率直に打ち明けるが、然し正しいと感じさへすれば、民の中の最も小さく最も低しとせらるゝものゝ意見にも服從して、其れを衆と共に喜んで行ふのだ。斯くの如きであつてこそ、眞に一個の社會團體に對しての主腦者であり、指揮者であり、さうして（もしも其れに帝王といふ名を冠することが必要であるならば）斯くの如き自由人にして、はじめて眞の帝王なりと稱することが出來るのだ。何故なれば、人類が他の哺乳動物と同じく生れて以後の經驗のみによつて其の智識を認め得るものであればある程如何に賢明なる指揮者を以てしても、一人乃至少數人の智識經驗のみを以て總ての事に當るには不充分であるといふことは、極めて當然のはなしである。人生は複雜である、さうして往々にして地上には、未だ何人も經驗したることなき事變が、決して稀ならず起り得るのであるから。けれども一國の『帝王』が眞の帝王である場合、彼れは民衆と共に傳統的なる階級制度の爲めに、さうして種々なる因襲の爲めに、いつも非常なる苦しみを受けなければならない。何故なれば、形式の上だけでの、『君主』飾り者だけとしての『帝王』を必要とする様な階級の力は、君側に於て何處に於けるよりも最も濃厚であり、さうして其れ等の勢力は、勿論死力を盡して、帝王を自由の身とし、金銀寶玉の鎖から脫せしむるに反對するからである。歷史を讀む時、賢帝といはれ聖天子といはれた人々自身が最も惱まされ苦しめられたものは、彼れをば玉座の上に坐る可く生みたる所の階級制度そのものであつたことを示してゐる場合は頗る多い。例を我か國の歷史から取るならば、自らは帝位につかれなかつたけれども、推古帝の攝政として親しく萬機を總攬せられた彼の聖德太子の如きも確かに其の一人であつて、其の『憲法』十七條の第十及び最後の條に

「忿りを絕ち瞋りを棄てゝ人の違へるを怒らざれ。人みな心あり、心各々執あり。彼れ是なれば則ち我れ非なり、我れ是なれば則ち彼れ非なり。我れ必ずしも聖に非ず、彼れ必ずしも愚に非ず、共に是れ凡夫のみ。是非の理、誰か能く定むべけむ。相共に賢愚なること環の端なきが如し。是を以て彼の人瞋ると雖ども、還つて我が失を恐れ、我れ獨り得たりと雖ども、衆に從ひて擧へ。」といひ、また「夫れ事は、獨り斷むべからず、必ず衆と論ぜよ。少事は是れ輕し、必ずしも衆とすべからず。唯、大事を論ずるに逮びては、若し失あらむこ

とを疑ふ。故に衆と相辨ふるときは、辭則ち理を得む。」といはれてをる如きことを見ただけでも、如何に從來の囚はれたる階級的觀念から徹底的に解脫して居られたかといふことが察せられるが、然しその結果はだうだつたかと云へば、實に我か國に於て空前絕後ともいふ可き燦爛たる文化を築き上げられたにも拘らず、やはり因襲と傳統とを重んずる人間達の爲めに、一と度び太子の沒せられたる後は、忽ちにして其の御遺族全部の鏖殺といふ樣な悲慘事にまでなつたのである。また後に天智天皇となられたる中大兄皇子が藤原鎌足と共に成就せられた、『大化の改新』といふのは、人も知る如く朝廷が率先して土地をば國有となし、其れを天下の公田として主として農民自身の間になる可く不公平なき樣に分配し貸給す可く定められたる實に世界にも類なき國家社會主義的なる革命であつたのだが、然し其の事の企てられる爲めには、先づ豫め傳統的大勢力だつた蘇我氏を亡ぼして置くことが必要だつたのであり、また其の『大寶令』の發布に際しては、種々なる特權階級の叛亂を豫期して、相當の武力的準備をも必要としたのであつたのだ。大日本史孝德天皇（中大兄皇子攝政時代）の條を見ると

「（大化二年）二月十五日戊申、天皇、宮の東門に御し、右大臣石川麻呂をして詔を宣べしめて曰く、朕聞く、明哲の民を馭するや、鍾を闕に懸けて百姓の憂を觀、屋を衢に作りて行路の謗を聽き芻蕘の言と雖ども親しく問ひて師となせりと是に由り、朕、前に詔を下して曰く、古の天下を治むるや、朝に進善の旌、誹謗の木あり、以て治道を通じて、諫者を來せるは皆廣く下に詢ふ所以なりと。管子曰く、黃帝、明堂の議を立てしは、上、賢に觀んとしてなり。堯、衢室の問ありしは民に聽かんとしてなり。舜は、告善の旌ありて、主蔽はれず、禹は、建鼓を朝に立てゝ、訊望に備へ、湯は、總術の庭あつて、以て民の誹を觀んとし、武王は靈臺の囿ありて、賢者進めり。此れ古の聖帝明王の、有ちて失ふことなく、得て亡ぶことなき所謂なりと。云々」といふ樣な爲政者の哲學までが書いてあつて、似て非なる今日の所謂『立憲』政治下に年々歲々ただ版で押した如き政黨の宣言文などを讀まされてゐる我々などに取つては、殆ど夢の世界なるかの如き感がある――我が國の帝王道の素地が如何なるものであるかといふ問題は別として、上の數例によつても窺はるゝ如く、其れが儒教や佛教の道德から大なる影響を蒙つたものだといふ事は誰れもが認めることだらうと思ふ。即ち、まう少し突つ込んで冷靜に事の眞相を觀ずるならば、究極する所、帝王道といふものにも地方別による所の特殊性などは決して無い。其れは全世界普遍的のも

のであり、さうして要するに、聰明なる理智を基とし、利他の慾望や正義を欣求するの心を源として、衆と苦樂を借にし、一致し共働する道の、一つの現はれであるに過ぎない。さうして其の道は、帝王自身の目醒めたる理智が、も早や傳統的なる階級といふものを肯定し得ず、他のものゝ服從を豫期するの心が彼れの胸中に消滅したる時に、はじめて燦爛として其の光りを現はすに至るのである。孟子が「民ノ樂ヲ樂メバ、民モ亦其ノ樂ヲ樂ム。民ノ憂ヲ憂フレバ、民モ亦ソノ憂ヲ憂フ。樂ムニ天下ヲ以テシ、憂フルニ天下ヲ以テス。然而シテ王タラザル者ハ未ダ之レ有ザルナリ。」と功利的に齊の宣王を說き、或ひはまた「人皆、人ニ忍ビザルノ心アリ。先王人ニ忍ビザルノ心アレバ、卽チ人ニ忍ビザルノ政アリ。人ニ忍ビザルノ心ヲ以テ人ニ忍ビザルノ政ヲ行ハヾ天下ヲ治メムコト之レヲ掌上ニ運ラス可シ。」といひ、また梁の襄王から何人によつて天下の統一さる可きかを問はれたる時、其れに答へて「人ヲ殺スコトヲ嗜マザルモノ能ク之レヲ一ツニセム」と言ひたる如き、何れもみな同じことを意味するのである。――理智の目醒めは已れの見出したる全ての不合理をば何處までも除かうとする。已れの身命を賭しても其れをそのまゝにして置くことは出來ぬと感じる。けれども其の理智あるが爲めに、さうして利他の欲求あるが爲めに、其れは決して未だ眠れる人々を惡まうなどはしない。惰眠に耽つてゐる人々、病氣に罹つてゐる人々のあることを其れは心から悲しむ。さうして一人でも多くの人達が、一刻でも早く惰眠から醒め、病氣から回復する樣にと心の中に祈る。機に應じて、威嚇することがあるかも知れない、或ひはまた其れは時に多少の荒療治をも必要と考へて、暴力を用ゐることすらあるかも知れない。けれども其の時、其れは心の中でさういふ必要の起つたことを泣いてはゐやうとも、決して、微塵も怒つたり憎んだりしてゐることはない。例を孟子に取つて言へば、彼の千古の金言たる「恒產無クシテ恒心有ル者ハタヾ士ノミ能スルコトヲ爲ス、民ノゴトキハ則チ恒產無ケレバ因リテ恒心無シ苟モ恒心無ケレバ、放辟邪侈、爲サヾルトコロナシ。已ニ罪ニ陷ルニ及ンデ、然ル後、從ツテ之レヲ刑ス。是レ民ヲ罔スルナリ。焉ンゾ仁人位ニ在ルコト有リテ、民ヲ罔スルコトヲ爲ス可ケムヤ。」といふ理窟は、實にトルストイ等の先驅として「罪人」に眞の罪なきことを喝破したのであるとも稱す可く、また例をキリストに取つて言へば、たとひ彼が屢々「地獄の苦難」『地獄の刑罰』、「地獄の盡きざる火」……といふ如き言葉を以て「天國」の對照となしたとは云へ、其れは只單に人々を一日も早く「悔い改め」に導いて地上に天國を現せむが爲めの方便

だつたのであつて、彼の迷へる羊の喩へ、放蕩息子の譬へ……等、其の暗示は實に到る處にあらはされてゐる。弟子が彼れに「主よ、幾たびまで我が兄弟の我れに罪を犯すを赦すべきか？七たびまでか？」と問ひたるに對し彼れは「爾に七たびとは言はじ、七たびを七十倍せよ」と答へてゐるのを見ても、彼れが罪人があり、刑罰があり、地獄があるなどと考へてゐたとは思へない。天國にも階級あることゝ考へた樣な周圍の連中が、地獄といふ世界をも次第にスバラシいものに造り上げ、さうして更らに後世となつては、其の怖ろしい所へ行くのがいやならば罪業消滅の爲めにお賽錢を出せなどゝ云ふ樣になつたのである。イエスの心の中では、世に地獄といふものは全然なかつた。たゞ、百匹の羊の中、一匹だけでもが迷つてゐる間は、まだ天國は決して來ないものと實際に感じたまでゝある。――

蟻には蟻の道があり、猿には猿の道があり、狼には狼の道がある。故に蟻には蟻の社會を、猿には猿の社會を、さうしてまた狼には狼の集群をつくらせて、生かせて置けばよい。我れ等は其れを羨む可きでもなければ、また決して眞似ることをも要しない。人類には人類として生く可き道があり、さうして人類として組織す可き社會がある。それが所謂平等型式のものであらうと、それとも「階級型式」のものであらうと、或ひは小さくあらうと、大きくあらうと、其れ等は全て表面にあらはれたる形の問題であつて、學者の與へむとする名稱の如き、我れ等の關知する所ではないのだ。我れ等は只其の內容を見詰む可きである。形を眺めずして心を吟味す可きである。道に適ひたる心の生じたる時、其の時はじめて最も合理的なる形も自ら造り出さるゝであらう。――其の心とは即ち、人生の現實相をば現實そのまゝに認識し、さうして其處に顯ぜられたる諸の不合理なることをば、一つでも多く、また一刻時も早く、除き去らむと願ふ心である。人類の智識が聰明になればなるほど、さうして我々の理性が敏感になればなる程、我々は勿論、次第により深く且つより廣く、實相の如何なるものであるかをハツキリと知ることが出來、同時に新しき不合理の數をも見出すであらうけれども『明日』のことは、また『明日』にな てから、考へればよいのだ。『今日』の理智の明かさを以てしても疑ひもなく、不合理である事を我々は先づ除き去られねばならぬと考へるのである。それはまた全てのものを人類の全部の共有物であると信ずる心である。もしも眞•善•美と名付く可きことがあるならば、其れが物質であると或ひは無形の特性であるとに論なく、其れをば人類全ての共有する眞•善•美であると考へ、もしも、

僞・醜・惡といふ事實があるならば、其れもまた人類全ての共有であると考へる。されば一切の罪障はみな全て人類の連帶責任に屬すべきものであると同時に、一切の功德もまた全人類に屬すべきものであつて、共に少數個人の單なる私的功罪に歸すべきものではなく、もしも地獄の刑罰があるならば、人類は全體として其れを甘受す可きものであり、もしも極樂の應報があるならば、同じく人類は人類全體として、（一人の落伍者もなく）其れを受く可き筈であると考へる。斯くして其れは、賢・愚・美醜・健・病・强・弱・貧・富・貴・賤・老・若・男・女……一切の差別の平等であり、一切の特質が全ての共有であり廻り持ちであることを信ずる心である。一人の個人共のものに屬するものとしては實に何物もない。――人々が生れ乍らにして有つ才能も、生れたる後に獲得する特質や財物も、何れもみな、宇宙・生物・人類の進化劇を演ぜむが爲めに。それ／＼の個人に一時貸し與へられたる衣粧や道具たるに過ぎずして、決して彼れ等自身のものではなく各個人は各自の與へられたる所を以てそれ／＼に何等かの役を勤めてゐる。――我れら自身も或る役を勤む可く命ぜられて、我れらの持てる衣粧を與へられてゐる。――それは何であるかはよくわからぬが、然し兎に角、今眼に見ゆる如き種々なる不合理は一刻も早く除かなければならない。我々は我々の生れたる時の舞臺を、もつと美しく、もつと樂しく、もつと合理的なものと改めた後に、次ぎの場面へと移らせなければならない、……と感ずる樣な心である。――かういふ心持ちが人類社會の内容として次第に其の量を增して行きさへするならば、たとひ一見したる所、人間相互の間の團結力が鈍り、服從心が衰へ、さうして世の中に不和や騷擾が殖えて行く樣に一時は如何ほど感ぜられ樣とも、人類は益々向上しつゝあるのであり、社會は人類に適はしき、人類獨特の理想的なる型を現はす可く一歩々々造り改められつゝあるのである。さうして筆者は、今も現に、人類が斯くして向上しつゝあることを確く信じて疑はない。――

理智の目醒めは、既に數千年前『突然變異的』に釋迦、キリスト等少數者の心に起つて、上述の如き所謂『宗教道德』的なる形に於て人と人との合理的關係の如何なるものであるかを闡明したわけであつたが、更らに後年に至り、同じく傳統的勢力から屢々流血的迫害を受け乍らもそれは自然科學發達の形式に於て、なほ一層明確に、『人類』の本體が抑々何であるかといふことを人類自身に示した。我々は今日、我れ等の地球が、ほゞ如何にして太陽から生じたかを知つてをり、さうして其の地球の

上に、大略如何にして生物が發生して來たかをも知つてゐる。また其の生物が如何なる經路を辿つて次第に進化し、今日如何なる動物や植物の種類にまで發展して來たか、さうして其の中の一種なる我れ等人類と他の動植物との相互關係は如何なるものであるかといふ樣なことをも可成り精細に知つてゐる。また我々の地球が自轉しつゝ他の諸遊星と共に如何に太陽の周圍を運行しつゝあるか、さうして其の太陽からの輻射エネルギーによつて地上のあらゆる生物が如何に養はれつゝあるか……といふことをも知つてゐる。我れ等はまた一方に於て、我が太陽系以外に殆ど無限數の他の太陽系――實に一秒に七萬五千里なる光りの速度を以てしてもなほ、地球まで達するに數千年を要するほど、遠い〳〵世界のあることを知つてゐる。然るにまた他方に於ては、我々は近年X線、ラヂウム等の發見によつて、從來物質窮極の最微粒子なりと考へられゐたる原子(Atom)の內部構造すらを知りつゝある――此處に記されたる「。」の內容を充たすだけの水素の小容積中に1,000,000,000.個以上含まるゝ程に小ちき其の原子の一つ一つ（ヘリウムの原子は只一つの黑點・を橫切つて約五百萬個だけ數へることが出來る）が更らにそれ自ら太陽系の雛型とも云ふ可き構造を有し、其の中心には核となつて存する所の陽性の荷電體（Proton）あり、而して其の周圍に遊星にも比す可く若干數の陰性荷電體（Electron）が非常なる速度を以て盛んに運動しつゝあるのだ。（さうして一つの電子の質量は水素原子のそれの千八百四十五分の一と稱せられる）我々は更らに從來不變なりと考へられたる化學元素が一つのものから他のものに變移し行くを知りまた無機物から如何にして有機の化合物が合成せらるゝかを知り、生物が食物として攝りたる『死』物を如何にして消化し、吸收し、同化するかをも知る。我々は一つ一つの細胞が如何なる構造や機能を有するかを知り、さうして高等なる生物の體が如何にして簡單なる生殖細胞より發生し、複雜なる組織構造を有するに至るか、また身體の各部諸器官の生理的關係が如何に微妙なるものであるか、さうして如何なる時、如何なる事情によつて其のハーモニイが破れて病氣となり、更らにまた如何にせば其の病氣をも豫防し治療することが出來るかといふこと……などを、みな相當にハッキリと知つてゐる。此れ等の劃世的なる新智識は何れもみな、傳統と諸ろの因襲的なる權威に盲從せず、寧ろ疑ひの眼を以て自然を其の實相のまゝに認識せむと努めたる人達が人類全ての爲めに贏ち得たる獲物であつたのだが、一つの新しき眞理の人生の戸口に現はれ來る每に、幾つかの偏見や迷信は晩かれ早かれ否應なしに、他の戸口から影を消さなければな

らないのだ。――

キリストや釋迦や孔子の理智は天に在す『神』の前に全ての人間の平等たる可きことを主張した。然しダーキンの進化論は、單に人間のみならず全ての生物が、本來、平等なる可きことを說き、また天文學は我れらに天も地も畢竟する所同一なることを敎へて、地上をも「神」の臨場と化した。一本の草の花にも、また葉末にかゝる露の玉にも『神』の攝理藏せらるとは、從來ただ詩人の言葉のみに過ぎなかつたが、近代に於ける物理化學の進步は我れ等の宇宙觀を更らに新たにして、我れらは今一片の土塊にも、最初、生物を、而して後に人類を、出現せしめたる天地創造力の一部がそのまゝに潜めるをさへ考へ得るに至つた。我れ等は自己と自己の兩親並びに祖先との關係の眞相をば悟り、自己の子孫に對する意義をも明確に知ることが出來、さうして今日の我々は、まう言葉そのまゝに、地球上の人類全てを一つの家族と見、全ての生物を已れ等の仲間と考へ得るに至つた。――過去に於て『宗教』と『科學』とは一時互ひに他を敵として相對立した。けれども今や我々はそれをば全然同一なる眞理の異なりたる表現の形式であると考へ得る。科學は精密に而して適確に記錄せられたる散文であり、宗教はを表象主眼とした所の繪であり、詩であり、また題字である。地球をば生物（而して我れ等人類）を生みたる母であると考へさうして太陽をば更らにまた其の地球を産みたる我れ等の祖先なりと考ふることは、生物並びに宇宙の進化に關し、我れ等が今日持てる科學的智識と一致する所であるが故に、もし然かすることとが必要であるならば、古代の種々なる民族が信じたる如く我々が太陽をば我れ等を生みたる祖先の女神なりと考ふることも決して不合理なることではない。但し此の場合に言ふ「我れ等」とは、どこまでも全人類を（乃至は全生物をも）意味するのであて、決して某々國民、某々種族ばかりといふ様に特に限つて考へるわけには行かないのだ。

丘博士の如き一部の論者は、天文學者の與ふる空間の距離や天體の積量を表はす數の限りもなく大なるを見、或ひはまた我れ等の棲む地球すら實に數億年の歷史を有するものなるをきいて、曾て人間が、天・地・人を三才などゝ稱し、天と地と人とを同格なりとしたる事を、人類が誇大妄想の極であるといふ樣に說く。けれども我々は決してさうは考へない。成程、宇宙には我が太陽と同じ樣なる恒星の數が二三千萬もあるかも知れない然し乍ら我々人間の身體は約四百兆の細胞の數から成つてゐる（それは一秒に一個づゝの割りで數へても約千三百萬年を要す

る數である。）然るに其の一個の細胞はまた實に無數なる生活物質の單位から組み立てられてをるのであり、更らに其の單位の一つ々々が複雜なる構造を有する多くの分子から、また其の分子の一つ々々が（例へば澱粉の分子に於ては約二萬五千といふ如き）多數の原子から、而して其の原子の一つ々々が既に前にも述べたる如く各自に太陽系の雛型の如き構造を有し、其の內部に含まれたる無數の電子は殆ど光りの速度にも比す可き急速さを以て絕えずその原子の內部に運動して居るのである。我々は斷えず空氣を呼吸する。然るに其の空氣の三分三厘立方の小箕の內にすら約 1,000, 000, 000, 000 × 30, 000, 000 個の酸素窒素炭酸瓦斯……等の分子の數が含まれてゐるのだ。斯くの如き電子、原子、分子乃至は細胞の世界より見る時、小さき我れ等の身體と雖ども其の廣大無邊なること、我れ等の身體を單位として全宇宙を見たる時と、少しも疑りなきことゝなる。

實に今日の物理學及び化學が開拓しつゝある新智識は我れ等をして將に全宇宙の一元的構成をも信ぜしめやうとする。八十幾種かある全ての化學原素も（從つて其の種々な結合によつてなれる無機有機のあらゆる化合物も）或ひは全宇宙に漲漫して全ての空間を滿しつゝある所謂『エーテル』も、乃至また電氣磁氣、光、熱、運動、化學的エネルギー等もすべて或る一つの究極的『一元』の異なりたる現はれであり、相であるに過ぎず、さうして同じく其の最も複雜にして神秘的なる組み合せとして生物も地球上の或る時代に所謂『無生』の物質より出現し其の後今日までに漸次益々進化して來たものであると考へるのだ。斯かる見地に立つ時、宇宙の大は最早や人間の小さきことを意味しない。太陽、地球等の年齡が如何に古くとも、また生物發生の時が人類出現のそれに先だつこと如何に遠くとも、其れが爲めに人類を卑下す可き理由は少しもない。何故なれば、今日地上に凝つて我れ等人類として現はれ居る物の全てが曾て如何に廣大なる宇宙の空間內に漲漫してゐたかも知れず、また太陽地球、全生物の過去の歷史は卽ち直ちに我れ等人類の過去であり歷史でもあるのだから、斯く觀じ來る時（さうして其れは決して筆者の單なる空想ではなくて、科學的理智による推論なのであるが）我々は天地人を三才と稱することなどにも少しの不都合をも認めず、寧ろ全宇宙を構成せる『一元』の最高なる現はれとして、さうして全ての生物中より選び出されたるチャムピオンとして全宇宙進化の先頭に立つ者であるといふ自覺を持つ可きであるのだ。さうして此稿の中に述べたる種々なる事柄に基いて筆者らは今日の人類が既に滅亡に向つて坂を下りつゝあるといふ說に對して何等同意す可き理由をも認め得ざる者である。

結論

一、凡そ『現在』てふものに滿足し得ざる人々には大別して二つの部類がある。則ち一つは『過去』を以て『現在』に優れるものとし、或ひは優りゐたる所決して尠からずとなし、其の『過去』の美點長所が次第に沒却せられたることに因つて『現在』のあらゆる悪徳と缺陷とは生じたのであると言ひ、從つて『未來』といふものはたとひ益々暗黑の度を増すことはあらうとも、決して(少くも人間の住む此の地上に於ては)光明を期待し希望を繋ぐには足りぬものであると信ずる人々である。

然るに之れに反して第二の部類に屬する人々は、『現在』は其のあらゆる悪徳と缺陷とを以てするもなほ『過去』といふものに比しては優れりとなし、其れ等『現在』の悪徳缺陷は何れもみな『過去』の悪徳や缺陷を除去することをなさずして今日まで發育せしめゐたる結果であると信じ、從つて理智と眞劍なる努力とを以て其れ等を滅却することによつては、地上にも光明を『未來』にもたらすことの可能なるを信ずる。否、たゞ其の『未來』のみが實に彼れ等の希望であり、憧憬であるのだ。

二、甲が『過去』に執着するに反して、乙は『過去』に執着しない。甲が『傳統』を重んじ『祖先』を敬するに反して、乙は『傳統』をも重んぜず、また必ずしも『祖先』をも尊ばない。甲の部類に屬する人々にも、細目に亙つては種々なる相違があるだらうし、また乙の部類に屬する人間にもいろ〳〵なる變種があるだらう。筆者等は乙の部類に屬する人間である。だから乙の一變種を代表して、以下に自分等の意見の大略を結論的に述べて見る。

三、我れ等は時と共に全てのものゝ發育し且つ變移することを認める。宇宙の一部に我れ等の太陽系が出來、地球が出來、さうして其の地球の上にはじめて生物の産れた過去の事實にも、我れ等は明かに發育と變移との現象を認める。さうして其の後何億年かの長い間に、其のはじめ濕地の上に生じた黴の如きものから種々なる動植物を生じ、終ひに人類といふ如きものを出現せしめた其の發育と變移との方向が、退化には非ずして進化であり、降下には非ずして確かに向上であり發達であつた、といふことを認める。——幾多の天變地異的大變動も起つた、幾多の無慘なる殺戮も斷えず行はれた、然し其れによつて、人類からトカゲを生じたのではなくて、トカゲから人類を生じたのである。——さうして我々は、人類が人類として出現後の過去

の歴史にも、同様にして進化と向上とのみを認める。

四、然らば其れ等の進化向上は如何にして起つたか？

一言を以てすれば、其れは『子供』の中の或る者が常に全ての『親』及び『祖先』に優つてゐたが爲めである。――時間の延長といふことと其れ自身が同じ環境下にあつても向上の原因をなし得るのか、或ひは環境の斷えざる變移がかゝる進化を促すのであるか、我々は知らない。けれども現はれたる事實的原因は全ての『祖先』よりも優れたる『子孫』が斷えず何處かに生れ出たといふ事である。

もしも外觀に囚はれて、生物の一世代々々々々といふものを、さうして一つ々々の個體といふものを、個々別々に獨立したものと考ふるならば、優秀なる『子孫』が繁榮し、劣れる『子孫』と『祖先』の全部とが亡び去るといふことは、前者に對する後の兩者の敗北である。けれども、もしも全生物といふものを（或ひは範圍を限つて全人類といふものを）時間と空間とを通して前後左右、上下縱横に連綿として續いて居る網の如き共通全一なるものであることを認めるならば、それは只全體としての『移行』であり『生れ變り』であるといふことに過ぎない。

五、宇宙の古きこともまた廣大にして無邊なることも、我れ等の新しく而して小さきことを輕んぜしむる何等の理由とはならない。況んや人類出現後の『傳統』の如きに於てをやである。何故なれば宇宙創造の昔より（もしも曾て創造といふ樣なことがあつたものとしたならば）我れ等は常に其の存在を續けて來たものであり、宇宙と共に發育し、變移し、而して今や其の向上進化の先頭に立つてをるものであるに外ならぬのだから。實に筆者をしていま思索し、記述せしめ、また讀者をして讀み且つ批判せしむる所の神經細胞も、曾て太古の水底に虚足をのべて匍ひゐたるアメーバの如き原始生物の體の一部が、たゞ長年月の間に變移して生じたるものに過ぎないのだ。此の科學的事實の基礎の上に立つて我々は信ずる、全ての『祖先』なるものゝ內容は（幾多の變移こそは行はれたれ）みな悉く我れ等の内に含まれてゐるといふことを、さうして地中や岩石の中に埋もれたる人類の直系に當る種々なる生物の化石も、或ひは廣義に於ける『墓』の中に保存されつゝある我れ等の人類的『祖先』もみな曾て我れ等自身、或ひは我れ等の近親者が脱ぎ棄てたる拔け殼であり古着の如きものであるに過ぎないといふことを。

六、人類の過去の歴史とは、すべて我れ等自身の通り來りし足跡であり、祖先の爲し遂げたる功績或ひは犯したる罪過、何れもみな生れ變らざりし以前の我れ等が功績であり罪過である。

我れ等は我れ等が人類として、過去に於て贏ち得たる諸の眞・善・美なる特質業蹟を保持して、今後益々其れ等を發育し進展せしめて行かなければならぬと同時に、また我れ等が過去に於て未だ除去し得ざりし諸の僞・醜・惡なる特質や行爲をば一時も早く滅却することに、全力を盡さねばならぬ。——斯くの如き希望と決心とを胸に抱いて我れ等がましくらに前進し向上せむとするに當つて、我れ等が今日までの向上進化が如何にして爲し遂げられたか、さうしてまた如何なる障害や缺陷によつて其の進化が或る程度まで阻まれたかといふ事をシカと頭に入れ置くが爲めに、我れ等は時に過ぎこし方を顧みて熟慮することも必要であるだらう。けれども其の過去に偉大なる業蹟があつたからと云つて、我れ等は徒らに後を振りむいて我れ等の『祖先』といふものを拜んでゐるには當らない。我れ等はそのことによつて益々自重し『己れ自ら』を尊敬すると同時に、己が責任のいよ／＼大なることを感じさへすればよいのだ。また其の過去に幾多の恥ずべきことが行はれたからといつて、我れ等は我れ等の『祖先』を蔑視す可き理由をも必要をも持たない。全てはみな我れ等自身のやつたことである。再び恥づ可きことの繰り返されぬ樣に、決して後になつて悔むことがない樣に、己れ等自らを戒めさへすればそれでよいのだ。

七、或る意味に於て昨日は今日の『親』であり、明日は今日の『子』である。さうして我れ等は我れ等自身を犠牲することによつて、我れ等が一世代の間にも、なほ幾多の向上を遂げることが出來る。けれども環境は時間と共に刻々と推移して留らずさうして一と度び出來上りたる成體は或る程度を超えて變移し適應するの可能性を失ふが故に、我れ等は生殖といふことを行ひ、子孫を殘してなほ斯かる場合にも更らに生き延び樣とするのだ。其れはより優れたる特性を得て更らに向上せむが爲めの、さうしてより大なる範圍の環境に適應せむが爲めの『己れ自身の『生れ變り』を行ふことである。さうして、人類もさうである如く、雌雄兩性が一體となりてはじめて子孫を生じ得る場合には、配偶者の組み合せが如何に子孫の形質の上に大なる影響を持つ可きかといふ事は別に論ずるまでもない。——『結婚』が自己及び全人類の爲めにどこまでも嚴粛に考慮さる可き問題たる所以である。

八、人類の持てる理智は今日既によく此れ等のことを知つて居る。然るに世には依然として、或ひはたゞ原人時代よりの獸性に支配せられ、或ひは傳統的階級制度の惰力に屈從し、結婚の眞意を沒却して己れ自らを降下し退嬰せしめつゝある場合がまだ如何に夥しく見られるか!!!。さうして一時の肉體的連繫、或

ひは一代だけの立身出世、富貴榮達、――といふ様なことを目的としてなされたる婚姻の『結果』が、さらにまた産出せられたる後に於てもより高く向上すべき爲めの自己(及び祖先全部)の『生れ變り』として其れに適する所の對遇を受けず、或ひは徒らに親と家門との隷屬物として、或ひは飾り物としてまた玩具として、形式的に『教育』せられ、束縛せられ、『殺』されて居る場合が、まだ如何に夥しく見られるか!!!

九、言語、文學(或ひは音樂、繪畫、其の他の建設物)によつて、人類は他の動植物と異なり、たとひ肉體的に死滅したる個體と雖どもなほ思想により智識によつて自己を永存せしむることが出來る。思想もまた肉體と同じく、結婚し、交雜し、多數の子孫を遺して繁殖し、發展することが出來るが、また思想相互間の生存競爭により、或ひは環境に基く自然淘汰によつて衰退し絶滅もする。

人類が全體として生じたる强壯にして善良なる肉體的子孫、また聰明にして然かも健康なる理智と思想的の子孫、此れ等は全て人類の共有的なる最大最高の寶でありさうして人類今後の進化も向上も一つに懸つて此れ等の子孫の上にある。『過去』の全てが我れ等の『現在』に對する奉仕であつた如く、我れ等の『現在』もまた全て『未來』に對する奉仕でなければならぬ。何故なれば、其れのみが即ち我れ等自身が永遠に、(然かも時と共に向上し、次第により優秀なる者として)生き得る唯一の道なのであるから。

十、然らば現在の我れ等が『未來』の爲めに最も有効に奉仕し得る方法は何であるか? 答へは簡單である。我れ等が現在の冷靜なる理智的判斷に訴へて思想的にも物質的にも惰性によつて今の人類生活の中にまだ存在してをる不合理と信ぜらるゝこと、(たとひ其れが動物及び人類の過去の或る時代に於ては合理的のものであり有意義のものであつたとしても今では既に害あつて益なきこと明かなること)の數々を一つでも多くまた一刻時も速かに除き去ることである。――もし其の一二例を擧げよとならば人類の子孫の繁榮をば願ひ乍ら、一部少數の人間を肉體的安逸と精神的墮落の中に養はむが爲めに、他の大多數の人々を牛馬の如くに使驅して過勞に苦しめ、然かも彼れ等を其の子孫諸共に、身體並びに精神の營養不良に陥れ、或ひは死亡率高き不衛生狀態に放棄して置かぬことだ。さうしてまた一部の人間の功名心や贅澤品獲得慾を滿足せしめむが爲めに、折角の文明の利器を有し乍ら其の最大能力を擧げて、全人類の現在及び將來に取つて貴重なる人命の、然かも最も健全なる部分を殺戮し合ふといふ様なことをせず、今日我れ等の利用し得る理智と文化的

施設の許す限りに於て、如何にして全體としての人類の肉體をより强壯ならしむることが出來るか（卽ち營養及び衛生狀態改善の問題）また强壯なる、而して出來るだけ多數なる子孫の理智的能力をば、如何にせば最もよく啓發し增大せしむることが出來るか（卽ち廣義に於ける敎育普及の問題）等の最も合理的なる解決に努むることなどでもある。（但し筆者等がいふ所の醫術や敎育なるものは、發達し過ぎた爲めに却って人體を虛弱にし、普及し過ぎた爲めに、自殺者の數を增すといふ如き、不完全にして不合理なる『醫術』『敎育』を意味するのではない。）

十一、人類が其の手を腦髓と肉體生活との力によつて發展させ進步させ來つた文明の現狀は、まことに目醒ましいと稱す可きであるかも知れない。けれども我れ等がもしも今後、もし從來よりも更らにより合理的なる生活を次第に建設し得るならば、來る可き百年千年の發展に比較して、恐らく今日のそれは、まだ子供が片假名をうろ覺えたるほどの程度でもあるだらう。從來の文明は、理智、思想、道德……等の方面に於ても、また物質的なる方面に於ても、（其の建設並びに利用兩つ乍ら）極めて限られたる少數の人々の文明だつたのであつて、殘りの大多數は只皮相的なる交渉を持つてゐたに過ぎなかつた。人類子孫の一大飛躍を期せむと欲せば、我れ等は須らく先づ今日の少數者の爲めの文明をば、多數者（卽ち人類全體）の爲めの文明に改造す可きである。人は現代文明を以て、早くも人類による自然の征服なりと云ひ、其の進み過ぎたる文明の弊害故に人類は既に滅亡に向ひつゝありなどゝ說く。焉んぞ知らむ、眞に其『文明』の恩惠を享けつゝあるものは只々人類中の一小部分のみにして殘れる大部分は（その窮乏の中にあると宮殿の中にあるとを問はず）或ひは物質的に或ひは精神的に、原人時代乃至酋長統治時代の域を去ること遠からず、飢餓に、疫病に、而して幾多の迷信に、依然其の生死權を委ねつゝあることを。凡て少數者を基礎として立ちたるものは、其の倒壞もまた容易である（實例は歷史の中に枚擧に暇ない）我れ等は人類の多數者の肉體的且つ理智的なる健康を確保し而して其の上に新たなる文明を——今日の如く行き詰らざる文明を——建設す可きである。さうして理智の目醒めによる人と人との眞の團結、相互扶助及び尊敬服從の精神のみが、廣義に於て、『サボタージュ』なく『ストライキ』なき眞の文明の基礎となり得るのだ。

十二、日常生活のみに必要なる常識的智識の場合は兎も角とし、一般に思想上の『親』及び『祖先』を稱して『師』と名付ける。文字、音樂、繪畫……等を傳達の方法とし、我れ等は時間と空間とを或る程度まで超越して、我れ等が思想上の『祖先』

並びに『子孫』との交渉を持ち得る。さうして恰かも肉體的生命の永存及び發展が『子孫』の中に『祖先』よりも優秀なる變異の現はるゝことによつてのみ遂げらるゝ如く、此の場合に於てもまた、『師』たるものは己が思想上の『子孫』即ち『門人』の中に、己れよりも優秀なるものゝ現出することによつてのみ其の精神的生命を永存し發展することが出來るのだ。我れ等が『門人は師よりも尊かる可し』と記したるは、かゝる理由に基いて、我れ等が『門人』として思索する時の自尊心を保持すべく、また時に年少者に對したる時の自己の態度に過ちなからむことを願つての事である。

今の世に生れたる我れ等人類は自己が常に宇宙・及び生物進化の先頭に立ちつゝある事實を忘れてはならない、我れ等は物質的にもまた精神的にも、我れ等が『過去』と『祖先』との眞善美的要素を悉く貪り食つて其れをば我れ等の『自我』に同化し、而して其の極大度まで育て上げたる『自我』を以て新しき、一層より高く向上したる『自我』を生まむが爲めに、全てを獻げて『未來』と『子孫』とに奉仕す可きであるのだ。

十三、斯くして『生物』の定義をば假りに「食ふて、産んで、死ぬものである」とする時、今や筆者らは何等の躊躇もなく言明することが出來る。則ち『生きる』といふことは決して『食ふ』且つ産む』といふことのみを意味するのではなく、『食ふ』といふことは自己及び子孫の發展を質量的に勢力(ちから)づけむが爲めであり、『産む』といふことは己れ自ら若返へり且つ生き延びゐことであり、さうして舊き自己(則ち『祖先』及び『親』)の『死滅』といふことは新しき自我(則ち『子孫』)に奉仕して其れをばよりよく生かしめむが爲めの一必要條件であるといふことを。

我れ等が食はむと欲するは一瞬でも多く生き延びむが爲めであり、一瞬でも多く生き延び様とするのは只單に生を貪るのではなくして一歩でも先きに自己の向上や進化を遂げ、少しでもより多く完成したる宇宙を眺め度きが爲めである。我れ等は然し、一つの個體として向上し進化するの途が行き詰つた時、最も賢明に『死法』することを知らなければならない。舊い自己を以て徒らに新しい自己の育つ可き途をいつまでも塞いでゐてはならない。――以上筆者の說く所は餘りに理想に馳せ過ぎてゐたかも知れない。少くも目前の世の現狀に比べ合はす時、其れは餘りに理想に馳せ過ぎたる議論であるに違ひない。其れが、然し、筆者をして敢て『子孫崇拜論』を唱道す可く餘儀なくせしめた所以でもあるのだ。(了)

國際辯護士制度の提唱

――ジャパン・クロニクル所論の批評――

東大教授　高柳賢三

一

神戸の英字新聞ジャパン・クロニクルは嘗て我國に於て治外法權撤廢の議があつた際極力日本政府の味方となつて、我國の司法制度は既に治外法權と云ふ國際法上のアノマリーを必要としない程度まで完備したと宣傳して呉れた。それは日本國民の永久に同新聞に感謝すべき事柄であると私は考へて居る。治外法權撤廢に就てかく熱心に我が司法制度を辯護して呉れた新聞紙丈に、治外法權が撤廢された後にも同紙は我國に於ける裁判の實際に就て多大の興味をもち、我國で發刊される他の英字新聞と比較して遙かに法律、裁判に關する記事を豐富に掲載し、且つ可成り思ひ切つた批評を加へて呉れるので、私は隨分久しい以前から之を愛讀して居る一人である。

大正十一年十二月十四日の週刊クロニクルには、問題となつて居る辯護士法改正に就て二つの記事が掲載されて居る、一つは『辯護士法』(The Advocates Law, p. 766―7)と題する殆んど二頁に渉る記事であり、他は『外國人と法律的助言』(Foreigners and Legal Advice, p. 759―760)と題する社説である。兩者共に趣味深き所論である。兩者共に辯護士側から提議された法案が、外國辯護士で日本に事務所を開いて法律事務を取扱つて居る人達を排斥する結果に立至る事を指摘し、其不當である事を痛論したものである。私自身はジャパン・クロニクルと結論即ち外國辯護士を排斥する必要なしと云ふ點に就ては意見を同ふするものであるが、その議論中には感服出來ぬ點が可成り多く雜つて居る。そして結論に就てもクロニクルの様に日本の辯護士法改正のみの問題としないで、更に一歩を進めて國際辯護

士制度と云ふ世界的な一般的な問題として此處にその提唱を試みんと欲するものである。

二

クロニクルに右の「辯護士法」と云ふ記事の中に下の如く報道して居る。

「司法省は新しい辯護士法案を起草し、此法案は目下辯護士法改正委員會に附議せられて居る。此法案は辯護士の職務を下の如く定義して居る

辯護士ハ當事者ノ委任ヲ受ケ又ハ裁判官ノ命令ニ基キ法律ニ關スル職務ヲ行フモノトス

右の定義は現行辯護士法中の規定と異つて居る、現行法中の規定は下の如くである。

辯護士ハ當事者ノ委任ヲ受ケ又ハ裁判所ノ命令ニ從ヒ通常裁判所ニ於テ法律ニ定メタル職務ヲ行フモノトス但シ特別法ニ因リ特別裁判所ニ於テ其職務ヲ行フコトヲ妨ケス

現行法に從へば辯護士の職務は裁判所に於てその職務を行ふにあるのだが、改正案の下では職務の範圍は擴張せられて裁判所の内外を問はず一切の法律事務にまでも及んで居る。勿論、辯護士の職務に就てこの擴張された定義には異論ない。又現行法の狭い定義は實際上守られては居らない。只注意すべきは、現行法上辯護士は裁判所に於ける仕事の方は實際上獨占して居るのであるが、法律關係の事項であつても裁判所以外で處理せらるべきものに就ては、專占權をもつて居らない事である。從て辯護士でなくして事務所辯護士(Chamber Lawyers)の職を行つて居る者に對して法律上何等の故障又は禁止が從來もなかつたし、今でもないと云ふ事である。

日本辯護士協會は、司法省の作製した原案第二十四條に下の様な異常な追加をする事を既に提議したとか、又は將來提議すると傳へられて居る。

辯護士ニ非スシテ法律ニ關スル事務ヲ取扱ヒ又ハ其周旋ヲ爲スコトヲ業トスル者ハ一年以下ノ懲役又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

法律又ハ命令ニテ許サレタル場合ノ外、債權讓渡ヲ受ケ又ハ債權ノ取立ヲナスコトヲ業トスルモノニハ前項ノ規定ヲ適用ス

前二項ニ該當スル法人ニツキテハソノ代表者及ヒ之ニ關與シタルモノニツキ前二項ノ規定ヲ適用ス」

以上は大體クロニクルが攻撃の火蓋を切る前提となる事實の陳述である。此事實の陳述には正確を缺く點がある様である、

即ち例ば辯護士の職務を擴大せんとする案を司法省案である樣に述べて居るのは誤ではあるまいかと思ふ。又私は事實上日本辯護士協會からクロニクルの掲げた主旨の提案があつたかどうかを知らない。しかし是等は細かい附隨的な事實の問題で、こゝに問題とするに足りない。辯護士の職務を擴大し且つ辯護士以外のものがこの擴大された意味での辯護士の職務を行つた場合に、之に刑事的制裁を加へると云ふ法案は辯護士法改正法律案として第四十五回の帝國議會で衆議院を通過したのであるからクロニクルの攻撃の前提となる事實は枝葉の點は別として大體に於て根據あるものと見て宜い。

三

クロニクルは以上の事實を基礎として右の案を論評して居る。第一「法律ニ關スル事務」なる文字は曖昧である事、第二に「其ノ周旋ヲ爲スコトヲ業トスル」も「法律ニ關スル事務」なる文字と均しく曖昧である事、第三債權讓渡や債權取立を業とする者を罰するの愚なる事、第四當事者に對し體刑を課する事の殘酷且反動的である事、第五日本辯護士協會の提議した追加は畢竟辯護士の一部の人達の利己心から生れた事等を擧げて居る。以上に就ては勿論異論を挾む餘地が大にあらう。然し、それは私の上の諸點今論ぜんとする「國際辯護士制」から益々遠ざかる事になるから此處には論評を差しひかへよう。

四

明治三十二年條約改正前からして、渉外關係の法律事務が漸次增加して來たので、外國辯護士で東京や横濱や神戸などに事務所を置き、或は單獨に或は日本の辯護士と共同して、是等の渉外事務を取扱つて來た。現在でも是等の事務は幾つか存在して居る。是等外國辯護士は主として日本の法令を翻譯したり、事件を日本辯護士に說明したり、鑑定をしたり、契約書證書などを作製したり、會社の設立や登記の手續をしたり、外國辯護人の日本に於ける代理人となつて日本辯護士の取扱つて居る外國事件の監督をしたり、内外人又は外人間の爭の和解、仲裁などをして居つたのである。一二の例外を除いて皆立派な紳士で人格に於ても又學識に於ても日本辯護士に劣らない人達であつた樣である。

改正辯護士法案は是等の外人辯護士に如何なる影響を及すか。此點に就てクロニクルは下の如く說いて居る。

「改正案の結果として是等事務所辯護士は日渉外事件を委託された日本辯護士と相談し又之を助けると

云ふ範圍に於て訴訟に關與する事も出來なくなる。
(2)涉外訴訟事件に關して意見を述べる事も出來なくなる。
(3)自由に辯護士を紹介依頼する事も出來なくなる。
(4)和解、妥協等を助ける事も出來なくなる。
(5)仲裁者となつて活動する事も出來なくなる。
(6)以上に附隨的な他の諸種の行動も出來なくなる。
即ち是等の事務所辯護士は今までの活動を繼續する事が出來なくなり、その依頼人は大に不便を來す事となる。」

以上クロニクルの所説は正當である様に見える。改正辯護士法自身に於てか又はその他の法律又は命令で是等の外人辯護士を特に保護する規定を置かない限り、クロニクルの恐れて居る様な結果は當然生ずる事は疑を入れないと思ふ。

五

此種の外人事務所辯護士を排斥することは立法政策として妥當なものであらうか。クロニクルが之を不當とする理由は總合して見ると下の諸點に歸する様である。

(一)第一是等の事業に從事する外人自身に對して殘酷である。是等の人達は、日本法外國法を習得するために、多大の時間と金錢を費して居る。書籍や事務所の裝置などにも相當に資本を下して居る、又雇主や使用人などとも契約を結んで居る。改正法は是等の人達の職業を奪はんとするもので既得權の侵害である。

(二)第二に外人依頼者に不便を與へる事甚しい。在住外人は日本語に熟達せず、日本の風俗習慣を理解せず、日本の辯護士に直接依頼すると云ふ事になると非常に不便を感ずる。自國人たる辯護士に依頼し、訴訟になつた場合には日本辯護士に依頼せざるを得なくなるにせよ監視して貰へる便益がある。現に仍是等の外人辯護士が居なくなると非常な不便を感ぜさせられる。

(三)第三に是等の外人辯護士は日本辯護士の利益を不當に侵害して居るものではない。依頼人は外國人の場合が多いのであるし又是等外人辯護士の數であると云ふても僅か許りに過ぎないのであるから日本辯護士と競爭すると云ふ程度に至るものでない。それのみならず反て色々な點で涉外事件に付て日本辯護士を助けて居る。

(四)第四に是等の外人辯護士を排斥する事は日本國の利害から打算しても愚なる政策である。是等の外人辯護士は外國人の見方と日本人の見方とを理解し、外人依頼人に對し日本法の見方も必ずしも不當でない事を充分に說明してやる事が出來る。依頼者は成程と說得する。これは外國に對する日本の裁判の威

信を増す所以であつて日本の利益になる。且つ是等の外人辨護士は日本法を外國に紹介し、國際的智識を増し、國際的交際の圓滿を來す貢献がある。然のみならず外國辨護士排斥と云ふが如き事をやれば日本の内外に對する聲望を傷ける恐れがある。

以上はクロニクルにあらはれた二つの記事の諸所に散在する反對理由を私が意を汲んで總合したのであつて文句はクロニクル」にある處とは違ふけれどその主旨は誤り傳へては居らぬ積である。

以上四つの理由は大體に於て私も同感なのである、只第一の既得權の問題であるが、この點に就ては、私は若しも外人排斥主義が他の點に於て立法政策上正當であるときまれば――私は正當であるとは考へないが――將來に於て外人辨護士の法律事務を執る事を禁止する事は少しも差支ないと思ふ。只從來既にかゝる法律事務をとつて居つた人に對して丈特にその事務の續行を許しさへすれば「既得權保護」と云ふ「自然的正義(ナチユラルジヤスチス)」の要求は充される事となるであらう。

六

改正辨護士法案に於ける外人辨護士排斥主義は日本丈の現象であつて、英米にはないのであらうか。此點に就てのクロニクルの所説は頗るミスリーディングである様に見える。同誌は云ふ。

『アメリカ及びイギリスでは辨護士でないものも法律事務を行ふ事が出來る、只裁判所で事務を取扱ふには試驗を經なければならない、實際上に於て現行日本法と同様である』

私はこの陳述は明かに誤謬であると考へる。この記述に依ると日本人がニューヨークやロンドンで事務所を開いて業として法律事務を取扱つてもニューヨーク法又はイギリス法上何等差支ない様に推論される。これはクロニクルの所謂 Personal rights under Constitutional lawであつて、英米では之を禁止して居らない様に見られる。然し事實は果して左様だらうか。

アメリカでは殆んど全部(只インディアナ州丈は疑問かも知れぬが)の州に於て辨護士試驗を受ける資格要件として「米國市民」である事を要求して居つて、外國人には受驗資格が無い。又辨護士の資格なくして法律事務を取扱ふ(Practicing law)したものに刑事制裁を課して居る。そしてこゝに云ふ「法律事務を取扱ふ」と云ふことが裁判所以外に於ける法律事務を包含して居る事も亦明かである。即ち日本に於て外國事務所辨護士がやつて居る事も畢竟アメリカでは Practicing law と云ふ中に入る事は色々の判例から明かである(Savings Bank v. Ward

(7) 100 U.S. 175 In re Duncan, 83 S. C. 186) 從て日本人がニューヨークで外人事務所辯護士として事務所を開く事になれば訴追せられる事になるであらう。この點でアメリカ法の現況はクロニクルの云ふ様に現行日本法と類似したものでなく、むしろ改正案と類似したものである

然らばイギリスは如何であるか、イギリスではバリスターとソリシターと云ふ二階級の辯護士が居つて前者は上級裁判所で辯論する獨占權を有ち、後者は主として裁判所外の法律事務をとり只下級裁判所丈で辯論する權利を有するのである事は周知の事實である。そしてこの裁判外の法律事務は辯護士でないものでも自由に行ふ事を得るのであらうか。イギリスのソリシターはそれ程までにリベラルでない。イギリスでもソリシターになるのには三年乃至五年ソリシター事務所に articled clerk として事務を習修し二つの試驗に合格した上でソリシター名簿に登錄せねばならない。そして每年認可證(certificate)を得なければ法律事務を取扱ふ事が出來ない。素人が裁判所以外でも法律事務を行へば罰金を取られる。そしてソリシターになるのには「英國臣民」である事が要件であるから、日本人が——假令日本辯護士でも——ロンドンあたりでソリシターの事務所を開いたら忽ち訴追せられる事とたらう。

只バリスター丈は外國人でもなれる事になつてゐるのは英國の特例である。只此方は法廷を中心とする法律事務を主とするものであるから、問題となつて居る外人事務所辯護士と比較すべきものでない。又クロニクルの社說の方で「日本辯護士は自由にイギリスの辯護士となれる」(Japanese lawyers are freely admitted to the English bar) と云つて、日本の排外人辯護士案と對比して改正案を攻擊して居るが、日本辯護士は英國の一定の晩食を食ひ、二十日のバー、エキザミネーションに及第した上でコールされゝば、バリスターになれるが「自由」にはなれない。それ許りでなく、同社說がソリシターとの比較を全然しないのは公平な比較と云ふを得ないものであると考へる。

以上の様に比較法の上から改正案を攻擊するクロニクル所論の部分は誤謬であり、偏頗であり、公平を失して居るものと私は考へるのである。むしろこの場合の比較法論は外人事務所辯護士の辯論としては當事者に不利益な一點を提出したもので私はクロニクル紙の爲めに之を惜むのである。

七

以上私は眞理探究者の一人としてクロニクルの所論に對し可成り痛烈な論評を加へたのであるが、私は決して外人事務所辯

護士排斥に賛成するものではないのであつて結論に於てクロニクルの主張と其主旨を同うするものである。否更にその主旨を擴大して國際辯護士制度の提唱に及ばんと欲するものである。

日本に在住する外人にとつて其本國法と日本法とに通じて居り、且つ其本國語で話の出來る同國人の辯護士が居つて相談に與つて呉れゝば頗る都合宜い事は明かである。それと同じく在外日本人にとつて彼地の法律と日本の法律との兩者に通ずる日本辯護士が居つて相談に與つて呉れゝばこれ程便利な事は無い。處が此便利はイギリスやアメリカに在住する日本人には拒まれて居る。日本在住の外人には此便益が與へられて居るのだが將に奪はれるかも知れんと云ふ心配が發生して居る。

私は是等の外人辯護士の職を奪ふ事は愚なる企であり、況めどの小さい所置であると考へるのであつて、これ等外人辯護士が吾々の間に住んで居て呉れる事はむしろ日本の辯護士の頭を世界的にする一つの鎖であると考へて居る。辯護士側としてはそれよりは更に一歩を進めて、イギリスやアメリカの政府又は辯護士會と交渉して彼地の排斥主義を融和して、日本人たる國際辯護士がイギリスやアメリカにも事務所を開ける樣にしたら宜からう。その方が益々國際的にならんとする日本の利益にとつても又國際的了解の増進の爲めにもどの位役立つか知れない。又クロニクル紙もその結論に一歩を進めて私の提議を鼓吹する方にも努力して戴き度い。

イギリスやアメリカに日本人の國際辯護士が事務所を開く事は、排外的な獨占的な思想の可成り強い彼地の辯護士會で仲々容易には承知はせまい。然し努力して見る丈の價値は確かにある。

國際辯護士に就てはその資格を審査して免許狀を與へると云ふことも宜からう。又實際上はソリシター式の仕事丈に限るも宜からう。兎に角、私は我國に居る外國人辯護士は存續せしむべきもので之を廢止するのは國際的協力の大勢に逆つて揮すもので不都合であると考へて居る。

若しも英米の辯護士界が此國際的精神に共鳴しないで、依然その排外主義獨占主義を固執する場合、我國は相互主義をつかつて外人辯護士を排斥すべきであらうか？私はこの場合に於ても尚此外人辯護士制度を維持しつゝ、靜かに英米辯護士會の自覺と反省とを待つ方が賢明であると考へるものである。

銀行業者の不法背任行為を難ず

法學博士　堀江歸一

銀行の支拂停止

大正十一年の歳晩に臨んで、人々の心の次第に焦忙と爲つて來た際、東京、大阪、京都の三大都市を始めとして、其他の地方に於ける銀行中、預金の支拂を停止し、預金者に非常の損失と迷惑とを加へるもの丶少なからざるを見た。是等銀行の内には、貯蓄銀行もあつて、細民が一年間又は其れ以上に亘る勤勞の結果、剩し得た零碎の預金を拂戻さず、彼等をして年末に爲つたらば、迎年の準備にあ丶もしよう、こうもしようと、百方に繫ぎ來つた望みを一空に歸せしめたことの如き、悲慘の甚だしきものと云はざるを得ない。普通銀行にした所で、一回十圓の預金を受入れること、今日の如くである以上は、其支拂停止が社會に慘害を及ぼし、又中流以下の預金者を苦しめることは貯蓄銀行に比して、異なる所はない。而して支拂を停止した銀行中の或るものは、他の援助に依つて、小額の預金に限つて、年末に拂戻をしたとか、其後續いて整理の曙光を仰ぐに至つたとか云ふものもあるようであるが、尙ほ前途の暗憺たるもの少なからざる趣きであつて、預金者の立場に身を置いて考へたならば、新春を迎へて、殆ど年賀の氣分を感じないこと丶思はれる。銀行に若干の貯金を持つことは、必ずしも其人をして一個の財産家たらしめる意味でないとしても尙ほ自ら其れに賴る所あらしめる所以であるのに、一朝の銀行支拂停止に依つて、此賴む可き基礎が敢なく崩壞し、財産であつた預金證書なり、預金通帳なりが一片の廢紙に均しきに至るとすれば、財產保全の道は全然滅失したものと認めるの外はない。斯る急劇なる變動を經濟社會に齎す虞れある銀行の如きは、銀行の職務に於て大なる缺陷を現はしたものであつて、吾人の何としても匡救の道を工風しなければならぬ所である。

固より諸外國に於ても、銀行にして破綻を暴露することはあり、又支拂停止を演出することもある。千九百七年北米合衆國

に於て、恐慌の起つた際、紐育市のニツカーボツカー信託會社の銀行部が支拂を停止し、他の銀行亦預金者の取付を蒙つたが銀行の店頭には多數の預金者が幾重にも列を作つて、銀行の窓口に近づく順番の來るを待ち、警官が干渉して、秩序を保たせるのは勿論、閑人などは預金者でもないのに、何時間も前から此列中の人と爲り、餘程前列に進んだ時に、後から來つた眞實の預金者の爲めに、幾弗かの料金を以つて、此前列の席を讓り與へると云ふような一種の商賣すら生ずるの奇觀を呈するに至つた。現に合衆國の西部諸州即ちテキザス、オクラホーマ、カンサス、ネブラスカ、南デコタ諸州には銀行預金に對する保險制度の成立して居る事實に徴しても、預金支拂停止の危險と云ふことが或る程度まで平均を求め得られる位に、頻繁に發生する事柄であるかを知るに足るであらう。然しながら銀行の數が多いことに對照したならば、支拂停止の起る事例は、必ずしも多大なりとするを得ない。殊に英國の如き近年銀行の合同が盛に行はれ、小規模の獨立銀行は大銀行の支店に依つて、其地位を襲はれ、全體から云つて、銀行業の基礎が頗る鞏固と爲つた結果、營業の上に破綻を暴露することは、絶無であると云つて差支ないであらう。然るに我國に於ては、現今銀行界に不祥なる事件續出し、殊に大正十一年末に於て、世間を騷がしたような失態の醸成されるのは何故であるか、私は斯る失態を暴露した銀行の當業者を咎責する點に於て、一歩をも假藉せざるものであると共に、政府の經濟政策には勿論、其銀行政策にも大なる間違があり、又銀行と取引する世間公衆の心得にも足らざる所のあることを指摘しなければならぬ。

銀行の安全を脅す經濟政策

經濟政策の要訣とする所は如何なる邊に存するであらうか。是れは見る人の考に依つて、自ら異なる所があるであらうが、私は經濟社會に波瀾變轉を少なからしめることを以つて、最も重要なる點と信ずる。蓋し經濟社會の趨勢は之を自然の成行に任せたならば、經濟的順環に關する原則の支配を受けて、不景氣、景氣恢復、好景氣、投機熱勃興、恐慌と云ふ順序を經て、再び以前の不景氣に立ち戻るような工合に、常に幾多の道程を往來して、殆ど涯る所あるを知らない。唯好景氣から不景氣に爲るとか、不景氣から投機熱が勃興するとか、經濟社會の機運に劇變を來したならば、國民經濟の全體に如何なる龜裂を生じ又如何なる損傷を與へるか、測り知る可からざる次第であるから、國家は斯く經濟社會の機運に變轉を來す際に、之を利導して、急劇の異動なからしめることに意を致さなければならず、

此一事こそ實に經濟政策の一眼目を以つて、認められ可きものである。然るに最近數年間原高橋兩内閣の下に於て行はれ來つた經濟政策は全然如上の要訣に違反したものであつて、政略上の考から、人工的策略を到る所の方面に施して、好景氣の勢を煽揚し、其極投機熱が勃興しても、之を抑制することなく、寧之を甚だしきに至らしめる刺戟を與へた。斯くて此反動として恐慌が爆發することゝ爲つたのであるが、其以前に投機熱が昂進して居つたゞけ、恐慌の影響も亦强大であつて、爾來三年の歲月に亙つて、世人をして依然不景氣の嘆を免かれしめない。政友會は今日政局を去つたとしても、其在朝時代に經濟政策の方針を誤まつて、世間を擧げて、不景氣の慘狀に苦しましめつゝある結果に至つては、其跡を存して居るのである。最近我國に於て大小銀行に破綻を續出するに至つたことの如き、一面から見れば、誤まつた經濟政策の犧牲に爲つたものとも云へるであらう。即ち政府が經濟政策を以つて、極端なる好景氣を煽揚したかと思ふと、之を維持する力の盡きた場合には、極端なる不景氣を誘致して、顧みないと云ふ有樣であつては、其間に商工業を經營する者は九天の高きから、奈落の低きに突き落されざるを得ない。商工業者に破産者の出る如くに、銀行に支拂停止の看板を懸けるものを生ずるのも、必ずしも不思議の現象とするに足らないであらう。試に各種株式に就て大正八年中の平均相場と大正十一年十二月末に於ける相場とを比較すれば左の如くである。

	大正八年中平均	大正十一年十二月末
鐘淵紡績	三四三、二三一	二三七
王子製紙	二二〇、七五	七一
日清製粉	一一四、五二	八三、五〇
大日本麥酒	一六六、二七	一一八
大阪商船	一六六、一〇	四三
日本石油	一一六、六三	七一
東京電燈	七七、八〇	七〇
東京瓦斯	五五、二五	五七
日本郵船	二三八、八一	八八
明治製糖	一四七、五〇	七一

右は實例として、十種の株式を選んで、好景氣時代と今日との相場を比較したものであるが、之に依つて見ても、株式の市價は以前に比較すれば今日は三分の一にも、四分の一にも下落して居り、聊かながら時價の騰貴したものは、一の東京瓦斯のみに限られる。市價の最も確實である可き國債であつても、尚ほ右の期間に於て、數點の下落を示して居る。然らば右の如き有

價證券に資金の一部を放下したり、又は是等を擔保に徴して、資金を融通したりして居つた銀行は市價の低落に依つて、資金の回收に不能を告げるであらうし、又所有の證券を賣卸し、又は抵當流れと爲つた證券を處分するに當て、多大の損失を蒙つたことは勿論であつて、殊に株式市價の低落が銀行の取引先に損失を及ぼしたことに依つて、間接に銀行に迷惑を加へたことは少なからざるものと考へられる。即ち近年我國に於て行はれた經濟政策が亂暴のものであつて、意想外の波瀾を經濟社會に捲き起したことが原因と爲つて、銀行資産の安全を脅かし、銀行をして支拂停止の已むを得ざる境涯に陷らしめた事實は何としても掩ふ可からざる所であつて、若しも經濟政策が正しき道に就き、彼の如く投機熱を勃興せしめなかつたならば、不景氣も亦斯の如く劇烈ならず、銀行に睽違を加へる點も亦少なきを得たことゝと想像される。斯く論じて來ると、政府の經濟政策の濫妄であることが祟りをして、銀行に打撃を加へ、此事が薄々預金者に勘付かれて、預金の取付けと爲り、資金の固定と他の銀行に就て援助を受けるの不如意であることゝが重なる理由と爲つて、支拂停止を招いたものであることは、之を蔽ふを得ない。果して然らば銀行不始末の責任は或る程度まで政府に於て之を負はなければならぬ道理であつて、政府が破綻銀行の救援に力を致したのも、因果應報を以つて見る可き事相であらう。

我國銀行の投機的取引

然し經濟社會が幾ら政府の間違つた經濟政策の結果として、混亂に混亂を重ね、其犠牲と爲つて、銀行をして破綻を續出するに至らしめたとしても、總ての銀行が悉く不始末を演出した譯ではない、相當の打撃は蒙つても、之を裏面だけに止めて、表面に著しい瑕疵を現はさなかつたものもあるであらうし、又全然不利なる影響を免かれたものもあるかも知れない。其間に於て銀行中の或るものが支拂を停止したり、又支拂停止をしないまでも、取引先から銀行營業の安危を氣遣はれて、急劇なる預金の取付を受け、日本銀行其他の援助に依つて、辛うじて窮地を脱するを得たりしたものもあると云ふのは、信用を生命とする銀行業界の失態であつて、斯る失態を招いたことに就ては銀行業者自身にも負ふ可き責任がある。由來我國の銀行制度は英米諸國の亞流を汲んで、所謂預金銀行の組織を以つて、其根柢とし、又現に斯くして居るのであつて、獨逸流の所謂證券引受銀行とか、投機的銀行とか稱されるものとは、全然趣きを異にするのである。隨つて我國の銀行は株主をして資本金を拂込ましめるに當り、之を一部分に止める一方に、銀行の信用の增

進すると共に、此拂込資本金に幾倍する預金を公衆に負ひ、預金の大部分に相當する金額は貸付割引に供用する、而して斯る貸付割引には短期間に確實に回收されるものを選び流動的資産たるの質を備へしめると云ふのが、銀行制度の要件と爲るのであつて、假令ひ預金に對する支拂準備金の割合は左程までに强くないとしても、流動的資産さへ確實なものであれば、以つて銀行の安全を維持するに足る道理であり、殊に日本銀行に對する關係が密接であつて、同銀行に對する商業手形の再割引に依つて、金融の便を付ける道のある場合には、尙ほ更ら以つて然りと考へられる。

然るに我國の銀行界には兎角種々の惡風がある。第一は預金銀行を以つて、既に營業上に行詰つたものと考へ、營業發展の一策として、根本の組織は預金銀行の儘にして置きながら、投機的銀行の爲すと同一の方法を以つて、營業資金を運用しようとする一時である。殊に歐洲戰時數年間に於ける如く、商工業が非常に發展し、事業家が相集まつて、會社を組織さへすれば其發行する株式は恰も羽を生じて飛ぶが如くに、世間に歡迎され、株式の權利を賣買したゞけて、多大の利益を占められる一方に、既成の事業を經營する資本家も製品の價格騰貴や、販路の擴張に依つて、暴利を收めることを難しとしなかつた、斯くて事業界に無數の大小成金の發生しつゝあるに當つて、銀行業界の方を見れば、何時も同じく、貸出利子と預金利子との鞘間きで、若干の利益を生み出すだけであつて、多少貸出に對する請求が多くなり、資金貸出の高の增加し、利子步合の上進することに依つて、利益の增加を見るを得るとしても、到底成金世界から見離された人たるの嘆を免かれない。銀行業者が此場合に自己の職責を理解し、又其職務に伴ふ社會的價値を承認して居る人物であれば、如何に世間到所に、成金者流を見出しても、超然たる態度の下に、職分を遵守し、時に銀行の貸出方針に依つて、投機熱の昂進を掣肘するかも知れないが、我國に於ける銀行業者は多くは俗物の集團であり又近視眼者流の社會である。虚業者が笛を吹けば、必ず之に促されて、踊り出すのが彼等の常態であつて、事業家が投機熱の昂進に乘じて、暴利を占めれば、銀行は彼等に對する資金の融通を寛大にし、銀行自ら投機的事業の勃興することを奬勵して、虚業家と共に利益を頒たうとする。預金銀行が公衆から負うた要求拂の預金を斯る事業に供用する、事業が一旦左り前となつた場合に、貸出金が固定して、預金の拂戻に困難を訴へるのは、當然であつて、現に先年破綻を暴露した横濱の七十四銀行にしても、又今回同様の不始末を演出して、世間を騷がした諸銀行にしても、貸出金の

回收不能と爲つたことを以つて其原因とし、一方に貸出回收の不能は經濟社會の不景氣に基き、銀行が直接に專ら資金を供給した事業の不振に基くことを見ても、我國銀行界の病弊の如何なる邊に存するやを知るを得るであらう。昨年來朝鮮銀行や臺灣銀行が好景氣時代に不當の程度まで、不確實なる貸付を爲し、其或るものが回收不能と爲つたり、又他の或るものが固定したりした爲めに、營業上に容易ならざる困難を惹起し、日本銀行の援助に依つて、一時の難を凌ぎ得たことは、世人の知る所である。政府直轄の下に在る銀行であり、政府から特に任命された監理官の監督を受けて居る銀行であつて、尙ほ且つ斯る失態を演ずることは、驚く可き事實であるとしなければならぬ。畢竟斯の如きは我國の銀行業者が銀行業者として持つ可き自制的觀念に乏しい、又自身を一段高い處に置いて、事業界を監督し以つて銀行業者としての權威を揮うだけの見識を持たない結果であつて、銀行業者と事業家と相共に狂ひ廻るが如きは、我國經濟社會の醜態とせざるを得ない。

我國に於ける機關銀行の弊

第二我國の重なる銀行は今日多く株式會社の組織に依つて、成立して居るが、其株式會社たる、眞に多數の出資者から、株式の形で、資金を醵集して、銀行の大を爲さうと云ふ考へに基いて、出來たものばかりではない。時に所得稅法の關係から、又時に有限責任の便を利用することの關係から、一個の富豪が自己の金融機關に充てる爲めに、特に株式組織の銀行を起す場合がある。富豪は自己の經營する諸般の事業に要する資金を世間一般の銀行から借入れたならば、相當の利子を支拂はなければならないが、自己の設立した銀行をして貸出利子よりも當然低い預金利子を拂つて、預金を吸收させ、而して斯く吸收された預金を借入れて、營業に用いたならば、貸出利子と預金利子との利鞘を益することゝ爲る。事業を經營する我國の富豪が多く銀行を兼營する風の存するのは、斯る關係に基くのであつて彼等の立場から云へば、便利であるには相違ないが、社會公衆の見地から考へれば、斯の如きは、銀行をして營業資金を運用する場合に、適當なる方針を誤まらせ、極めて狹い範圍に資金を固定させ、或る方面に運用され可き資金の高に就て、適當なる範圍を超越せしめ易く、斯くて富豪の經營する事業の失敗は直接に銀行に致命傷を與へることを免れないのである。

或は富豪と銀行との間に、後者の組織に就て、前記の如き直接の關係はないとしても、銀行には通例大株主なるものがあり而して大株主を代表して若干名の重役の選出されることを常と

する。而して我國現行の銀行法規に於ては、銀行が其重役に對して貸出をすることに就ても、又或る特殊の人に過大の貸出をすることに就ても、何等の制限がないとすれば、銀行の重役は自己の關係する銀行に於て、我物顏に振舞つて、自己の爲めに又は自己の背後に在る大株主の爲めに、其必要とするに隨つて過大の貸出を强ゆるのである。而して斯く貸出を受けた者の事業が失敗したならば其失敗と共に、銀行の運命を危うするが如き事態の惹起されるのは、當然の道理であつて、此點に於ける缺點は上記機關銀行の弊害と共に、吾人の深く念頭に留めなければならぬ所である。

政府の監督信賴し得るや

我國に於ては今日銀行條例なるものが設けられ、大藏省の銀行局は地方官廳と協力して、銀行に監督を施しつゝある筈であり、殊に往年の改正に依つて「銀行の業務又は財産の狀況に依り、必要ありと認むるときは、其事業の停止を命じ、其他必要なる命令を爲すことを得」とか或は「銀行が法令定款又は大藏大臣の命令に違反し、其他公益を害す可き行爲を爲したるときは、事業の停止若くは役員の解任を命じ、又は營業の認可を取消すを得」と云ふ規定さへ追加された。然らば當局者が銀行條例を運用することに就て、巧妙なる手腕を備へて居つたならば破綻の暴露され可き銀行に對しては、事業の停止を命ずるなり、財産を保全す可き命令を下すなり、適宜の處置を施して、銀行自身支拂停止を敢てする以前に、預金者の利益を或る程度に保護するを得る道理である。然し今回の如き銀行破綻の續出したに拘はらず、大藏省が未然に事を處理した事例は一として之を耳にしない、銀行が支拂停止を公表してから、大藏省が始めて之を知る有樣であるやに見受けられる。而して此事たる、今回の破綻に關して然るばかりでなく、北濱銀行の如き、七十四銀行の如き、著明なる銀行破綻の場合に於ても、亦同樣であつた。即ち大藏省の銀行監督は單に外形を粉飾する申譯であつて、何等の實効ありと思はれない、世間に果して政府の銀行監督に幾何の信賴を置いて居る者があるであらうか、私の知るを得ない所であるが、假に預金者中、政府の監督に大なる効果のあることを信用し、斯る監督あれば、銀行は確實であると考へて、預金をしたのに、其銀行が破綻を生じて、預金の拂戻不可能と爲つた場合には、政府は破綻銀行の預金者に對して、少なくとも監督不行屆と云ふ點に於て、道德上の責任を負はなければならない道理である。今日の如く破綻銀行の續出に依つて、幾百幾千の預金者は重大なる損害を蒙り、泣きの淚に日を送りつゝあ

る者さへあると云ふ時に、監督の地位に居る官吏中、一人として、監督無能の故をつ以て懲戒された者のないと云ふことは、果して道理に適つた事であらうか、私の疑を挾む所である。

預金者の自省を望む

私は銀行の破綻に依つて、預金者が損失を蒙つた場合に、預金者の不幸に對して、大なる同情を表するが、同時に斯る不幸を招いたに就ては、預金者自身に負ふ可き責任の存することを認めざるを得ない。元來我國民の間には、銀行に對する正當なる理解が行はれて居らない。或る銀行が新設される、其れが如何に小規模のものであり、出資者や、業務經營者の間に、信用資力に於て見る可き人が居らないとしても、其銀行が開業の引札を撒布し、世間並みの歩合よりも、聊かでも高い預金利子を付けることを廣告すれば、忽にして相當の預金を吸收し得るが如き、常に現はれる事實であつて、我國の如く簡單に銀行の新店の起され易い所は他に比類を見ないだらうと思はれる。此事たる、要するに預金者が銀行界の事情に無智であり、又盲目であつて、自己の預金をす可き銀行を選ぶ場合に、其基礎の強弱とか、營業振りの良否とか云ふことには、少しも齊限せず、單に預金に對して高率の利子の支拂はれることを標準とする。基礎の薄弱な銀行であればあるだけ、預金利子を高率にするのが當然であり、又後に述べた機關銀行の如きは、其經營者が直接に自己の關係する事業に運用する目的を以つて、預金を吸收するのであるから、自ら預金利子の高かる可き道理である。然らば預金者が預金利子の高いことを唯一の目標として、預金をすると云ふのは、自ら危險の多かる可き所に預金を置き、危險の多いことに對する代償として、高率の預金利子を受取る次第である。經濟社會が順調に進行して居り、其行き先に暗礁もなく、波浪も起らなければ、預金者は常に高利を樂むばかりで、何等の危險をも感じない。斯くて薄資の銀行や機關銀行に對して、世人の持つ可き警戒の念を薄からしめるに至る次第であるが、世間は常に斯る平和の境地に安んじて、居るものでなく、時に狂瀾怒濤に襲はれることも少なからざる譯であつて、斯る危機に際會すれば、平生些細の利鞘に眩惑して、其基礎の薄弱なる銀行に預金した人は利子は愚か、元金までも損失するに至らざるを得ない。銀行を選ばなければならぬ理由は此一事に在るのであつて、銀行の支拂停止に依つて、預金者の損失を蒙ることの如き、其責は銀行の選擇を誤まつた預金者自身にも在するものと解されるのである。

小銀行叢生の弊

從來我國に於ては小規模の獨立銀行が全國に簇生し、互に相對抗して營業の領域を爭ふ傾向がある。大都會に於ては、近年銀行間に預金利子に關する協定が成立したが、果して協定が誠實に行はれつゝあるかどうか、一個の疑問とす可き點もあり、又實際世間から繋がれる信用の薄い銀行は高利を以つて、預金者を誘ふことに爲り、其之を誘はなければならないだけ、銀行は不信用なのであるから、誘はれた預金者の感ずる不安は自ら大なるものと爲り、其不安は遂に銀行の取付騷ぎと爲り、支拂停止となつて、破綻の頂點に達するのである。近來英獨兩國に於ては、大銀行支店制度の銀行組織は殆ど極度まで發展し、英國に於ては、ロイヅ銀行、バークレース銀行、倫敦ジョイント・シチー、ミツドランド銀行、倫敦カウンチー、ウエストミンスター、パース銀行、ナショナル、プロヴヰンシアル、ユニオン銀行が所謂ビッグ、ファイヴ(大なる五)として、銀行業の網を稱して居る一方に、獨逸に於てもダルムステーター、ナチョナル銀行、ドイチエ銀行、ヂスコント、ゲゼルシャフト、ドレスドナー銀行の四行が全國に廣く銀行網を張つて、金融上の實權を掌握する地位に立つ。而して上記の諸銀行、營業の實際に臨むに當つては、全國到る所に支店を開設し、一の都會に於ても、商業の相當に繁昌しつゝある區域には幾つとなく支店の設備を施して、公衆の便を舉げることに努める結果、小規模の獨立銀行をして存續し、營業する餘地なきに至らしめる、斯くて支店としては小なるものであり、又其小なる故を以つて、郊外であらうが、田園であらうが、如何なる處にも、其設置を見るを得る次第であるが、其小なる支店の背後には、大なる本店銀行があつて、本支店聯合の力に依つて、一切の責任を負ふものである以上は、銀行として其地位の鞏固なることは、小規模の獨立銀行と日を同じうして、語る可きものではない。英國に於ては、餘程以前から、獨逸に於ては、近年に爲つてから、相當の銀行にして、破綻を暴露したもの、殆ど絕無であると云つて、差支ない位に、銀行制度の發達を見るに至つたのは、一に大資本支店制度の銀行組織の然らしめる所としなければならぬ。而して斯る銀行組織の依つて生ずるに至つた原因は果して何れに在るであらうか。私の見る所を以つてすれば、此事たる法律の結果でもなければ、政府干涉の効果でもない、一に預金者の間に大銀行でなければ、信用を置くに値しないと云ふ自覺が起り、小規模の獨立銀行が幾ら存立を叫け、預金利子などを勉强することを公表した所で、誰れも真面目に相手にする者が

ない、隨つて小銀行で偶々殘つて居るものも、自然進んで大銀行に合倂されて、其支店と爲ることを辭せざるに至る次第であつて、此點に於ては些細なる利鞘に引付けられて、小銀行と取引を開く我國の預金者とは、全然心得方に異なるものがあるのである、斯の如く考へると、我國に於て銀行破綻の爲めに、損害を蒙つた預金者は政府の經濟政策に於ける間違に禍されたとも云へるが、同時に預金者自ら小なる慾に左右されて、大なる損害を蒙つた嫌ありとも見られるのである。何故に預金者たるものは、當初から取引銀行を嚴に選定し、一旦之を選定した以上は、自分の取引する銀行こそ大磐石の地位に居るものであると云ふ信用を與へないのであらうか。始め銀行の選擇を粗濫にした爲めに、何時までも其銀行は信用を置くことが出來ず、何か銀行に就て風聞でも耳にすれば、其虛實を確めるだけの餘裕を持つ暇なく、所謂風聲鶴唳に驚かされて、自ら取付の先驅けと爲り、斯くて他の人々をも導き、斯る事さへしなかつたならば、安全に過され可き銀行をして預金者の根も葉もない疑惑から窮地に陷らせ、預金者自ら銀行を打ち壞すが如きことをするのは、愚も亦極まれりとす可きである。

我國に於て銀行の合同を盛にし、銀行の支店制度に依つて、其基礎を鞏固ならしめようと云ふ意見は從來から行はれて居り最近支拂停止の續出した場合にも、之を以つて善後策の一に數へる論者も少からずあるやに見受けられた。現に私の如きも銀行合同を通じて、銀行の基礎を鞏固ならしめるの必要を信ずる點に於て、敢て人後に落ちざる者であるが、如何にして大銀行支店制度の實現を期す可きかと云ふ問題に對しては、矢張り預金者自身の覺醒に依らなければならないと考へる。或は法律を以つて、銀行の資本金を高い程度に制限し、今日其以下の資本金を以つて營業する銀行には或る期間を限つて、法定の資本金に達するまで、增資をさせるとか、又は他の銀行と合倂させるとかすることも、新設の許可を求め來つた銀行に對しては、政府に於て豫め資本金の最小限度を定めて置き、其以上の資本金を以つてするに非ざれば、設立の許可を與へないことゝするのも大銀行支店制度を助長する一策と爲るであらうが、最も有力なるものとしては、矢張り預金者の間に獨立の小銀行よりも、大資本を擁する支店組織の銀行を以つて、多くの信用ありとする觀念を養成するの一事を擧げなければならない。

銀行改善に關する他の諸策

若し夫れ他の方面に亘つて、銀行の基礎を鞏固ならしめる方法を求めたならば、私は左の數個條を擧げることに躊躇しない。

第一、銀行當局者自ら社會公衆の信任を受けて、資金運用の職を託されたものである以上は、其地位の重要なることを認め、着實を旨とし、苟且にも世間の虚業家と相結んで、浮華經佻の風に染る可からざること、

第二、預金銀行として、世間に立つた以上は、飽くまでも預金銀行の本色を嚴守し、預金銀行でありながら、獨逸流の投機的銀行を學んで、興業資金の供給を誤り、以つて銀行の營業資金を固定せしめる弊を避けること、

第三、貯蓄銀行と普通銀行との分界點は之を明にしなければならないのみならず、既に之を明にする必要ある以上は、普通銀行をして貯蓄銀行の領域を侵さしめるが如き所業は之を禁ずること。蓋し現行の法規に於ては、普通銀行にして一回十圓以下の預金を受取つたならば、貯蓄銀行法の規定を適用されると云ふ虞れがあるので、十圓以下の預金は受入れないであらうが、十圓以上の制限であつても、自然中流以下の人々換言すれば銀行の營業振りなり、其信用の高低なりを標別する能力を持たない人々をして普通銀行に接近させ、其れ等の人々の粒々辛苦を重ねて、剩し得た資金が普通の銀行に預入れられ、其營業法に制限ない結果として、投機的取引の渦中に投ぜられ、銀行の破綻と共に、無識の預金者に損失を蒙らしめる。此點から普通銀行をして特別當座預金の名義を以つて、貯蓄金の預入れを受けるが如きは、之を廢止しなければならぬこと。

第四、銀行が少數の取引先に過大の貸出を爲す弊を防ぐ爲め、一個の取引先に對する貸出高に對しては、資本金なり、又は當時の預金高なりを標準として、或る制限を設け、重役自身に對する貸出に就ても、或は之を禁止するなり、或は或る制限の下に行はしめることゝし、一方に一個の取引先又は重役が他人の名義を詐稱して、法律の規定に超過し、又は之に違反した融通を受けたならば、監督官に於て其事實を指摘し當事者に制裁を加へること。

第五、右と同一の趣意に基き、銀行が同一種類の擔保品に對して爲す貸出の程度に就ても或る制限を設けること。

右の内第四第五は所謂機關銀行の弊を防ぐ點から云つて必要であり、第二は投機的銀行の流風を絶つ上から見て必要であり、第三は萬一銀行に破綻が起つたとしても、其損害を貯蓄金に一身一家の運命を繋ぐ人々に及ぼさらしめることから考へて必要である。而して第一の件は銀行當業者の人格問題に外ならない。銀行業者が社會公衆の信任を負ひながら、營利の一點に沒頭するは勿論、公私の別を紊れ、公衆の資金を濫用して、自己の事

の利得を謀り、請託を容れて、銀行の利益を危うするが如き、破綻の生じた銀行當局者の素行調査に現はれる所である。偶々事の詐欺と偽り、背任と偽り、横領と偽つた者は刑事上の制裁を免かれないが、自己の不注意無能力に基く失敗に至つては、多く寛假されるようである。我國に於て責任觀念の幼稚であり又公德心の乏しい事も亦甚だしとす可きではないか。商業道德の重んぜざる可からざるは、今日に始まつた話ではない。然し種々の商業を通じて考へると、商人と取引を結ぶ相手方は常に其商人の行動を監視し、督勵し、其行動に多少なりとも不徳不確實なる嫌があれば、直に取引を絶つて、取引の相手方として蒙らんとする損害を回避することを難しとしない。然るに銀行と預金取引を有する數千數萬の人は果して斯の如く銀行の行爲に對して、嚴重なる監督を施し、以つて自己の利益を防衛することが出來るかと云へば、如何に人智が進歩し、又如何に銀行が或る程度まで綿密なる營業報告を發表したとした所で、到底其可能なることを望み得ない。斯の如き自家防衛の手段を施し得るは、特殊の聯絡があつて、銀行の内情を知悉する地位に居る早耳筋に限られ、他の人々は取付けの始まつた際に、後れ馳せに、銀行に驅け付けて、支拂停止の貼札に驚く連中である。銀行に對する公衆の監督の如き、甚だ結構の事であるには相違ないが、今日の人智の程度を以つてし、又往日其時の如く、多數の銀行の對立する場合に於ては、遂に其行はれて、誤まらざることを期し難い。隨つて銀行業者に向つて、道德的觀念の高かる可きことを求めると共に、政府に向つて、銀行監督の勵行を促さゞるを得ない。銀行監督の衝に當る官吏は監督官吏の不足を擧げて　監督不行屆の辯解を世間に試みて居るが、假に吏員の不足に依つて、監督が不行屆であつたとすれば、何故に充分なる監督を施し得るまで、充分なる員數の監督官吏を置くことを大藏大臣に要求し、更に大藏大臣をして議會に請求せしめなかつたのであらうか、我國官吏の職務に不忠實なること、斯の如くであり、一方に銀行當業者に道德的觀念の缺如して居ること、從來の如くであれば、將來に於ても、銀行破綻の頻出することは、今日に讓らないかも知れない。私が敢て銀行政策の確立を望むと共に、銀行業者自身並に銀行に取引を有する世間公衆の反省を求める所以である。

安價なる銀行救濟を排す

從來我國に於て銀行が破綻を暴露すると、直に之に對する救濟策が行はれ、救濟の結果、破綻の外形が補はれると、世人は之に滿足して、此以上に何等爲す可きもの〻あることを悟らな

い。私は之を以つて最も安價なる救濟策であるとして、其効果を認めないのである。現に今回の銀行破綻にしても、或る銀行は見殺し同樣にされたが、他の銀行は日本銀行に援助され、或は日本勸業銀行に依つて、擔保品の肩代りを受け、或は市中諸銀行の間に於ける申合せに依つて、窮地を脱するを得た。而して斯る援助の行はれた重なる理由は彼の銀行を潰したならば、災禍は如何なる邊までに擴がるかも知れない、彼れを援けるのは、自ら援ける所以であると云ふ事實に基くのであつて、一應の道理ありとも考へられる。他日は知らず、今日までの處で、銀行の破綻が一段落を告げて、他に其災禍を及ぼさゞるを得たのも畢竟如上救濟策の効果に之を歸せなければならないが、一時の救濟策と根本の改善策とは全然別個のものである。一時の救濟策に依つて、若しも斯る策が施されなかつたならば、當然倒壞す可き地位に居る銀行を助ける、助けた後には、特に之を盛立てゝ其基礎を鞏固ならしめる方法を講じない、所謂救濟の行ひ放しにすることは、却つて我國の銀行制度を脆弱ならしめる一方に、銀行業家をして萬一の際に救助を仰ひで、其運命を繋ぎ得ることに思を致させ、自己本來の基礎とす可き所を鞏くに怠らしめるの嫌を免かれざるに至るであらう。救濟策を行ふのは、國家的見地に於て、必ずしも不可なりとしない、唯救濟策に次で、永久に亘る可き銀行改善策の行はれないことは、我國年來の病弊である。斯の如くして百三十銀行は救濟された、北濱銀行も亦一時の窮を脱して、攝陽銀行と爲り、七十四銀行が横濱興信銀行として、存續するを得た。政府は之を以つて銀行救濟の効果を擧げ得たと信ずるのであらうか、果して然らば其輕卒も亦甚だしい。混亂に陷り、破綻を露した銀行の生命を繋ぐことゝ、銀行全體の基礎を堅實ならしめることゝは、全然別個の問題であつて、前者にばかり重きを置いて、後者を閑却したならば、益々我國銀行業界の病弊を大ならしめることを免かれない。此病弊が深く經濟社會に喰入つて居ればこそ、恐慌が起り、不景氣が迫るに隨つて、常に銀行に破綻を生ずるものを續出し、預金者を苦しめ、社會公衆を脅すに至るのである。銀行の破綻をして今度限りのものとし、未來永劫我國に此事なからしめるのは、我國政府の心す可き所である。

普選實行の曉に於ける我政界の新局面の豫想

普選實行の曉に於ける我國政界の新面目の豫想

法學博士　吉野作造

○

普選實行の結果として我國政界に生ずべき最も著しき現象は各政治團體に於て總選擧の結果につき丸で豫測がつかなくなるといふ事であらう。

○

從來の選擧に於てはどの黨派でも大抵の豫測は付いたものだ。各府縣に於ける警察部よりの報告に基く内務省の調査は固より、各政黨の時々發表する豫想なるものも、固より掛引の必要上外部に向つて多少誇大に吹聴するといふ嫌はあるが、實際のところは皆概略の見當がついて居り、而して結局の結果は之等豫想とあまり大差のないのを常とすると聞いて居る。

何故斯く事前に豫測が附くのかといへば、是れ畢竟從來の選擧は概して各政治團體の指定通りに運ばるゝからである。詳言すれば或る黨派の專屬的地盤たる處に在ては、黨幹部の公認候補者の指定に由て萬事がきまり、又二三黨派の勢力混雜の處に在ては、其優劣の大勢と政府側の手加減とで大體の見極めはつく。要するに各種事情の綜合の上に有利の地位を占むる黨派の幹部の指圖通りに選擧の結果が現るゝのである。斯くして概ね事前に結果の豫測せらるゝ所以は、畢竟選擧は政治各團體の幹部の支配する所たるが爲である。不幸にして今日の日本國民は未だ選擧を支配すべき積極的の主人公となつては居ない。殘念ながら我々はまだ〳〵選擧界に在ては政黨政派の奴隸なのだ。

○

抑も選擧の本來の要求が人民をして其の主人公たらしむるに在るは言を待たない。人民の意思と要求とが自然に政界を支配

する樣にならなくては立憲政治の實が擧つたとはいへぬ。此點からいふと、我國政界の現狀は正に憲政の逆轉である。而して我國の政界に對し内外各般の人々から指目せらるゝ所の流弊腐敗は實に玆處に胚胎すること、是亦僕の從來有らゆる機會に於て說いた所だから今また之を繰り返すまい。要するに選擧界の支配權を黨界策士の手から民衆に奪還することは何と云つても焦眉の急務である。

この急務は何によりて發端するか。選擧權の擴張の外に途はない。擴張といつてもいゝ加減の擴張では駄目だ。現に選擧權の資格を十圓から三圓に下げても、從來の流弊は更に熄まぬではないか。それは金高は十から三に低下したといへば大變の改革の樣だけれども、人數からいへば、二百萬が三百萬になつた位に過ぎぬからである。此位の小擴張では政界の魔手が直に毒牙を差し向けるに譯はない。だから擴張に由て問題となれる流弊を杜絶せんとせば、思ひ切つた極度の擴張をせなければならぬ。政界惡辣の魔手も面喰つてとても手の下し樣もないと云ふ所まで擴張しなくてはならぬ。普選の實行は多分斯うした點まて行くであらう。何となれば之に依て選擧民の數は今日の六七倍に增加する筈だからである。

選擧民がそんなに殖へても、從來の樣に買收に應ずるものもあらう、威嚇請托に良心の操守を持ち切れぬ者もあらう。併しそれは全體の數からは幾割にも當るまい。大勢を支配する多數は從來の選擧ブローカーとは沒交渉だから、彼等の指圖に從ふの緣因は先づないと見ていゝ。そこで選擧は黨員幹部の豫より見て全く分らないものとなる。斯の如きは去年の東京市會議員の選擧でも經驗した所である。

要するに僕は豫想のつかぬといふことを最も著しい新現象の一に擧げたい。而して同時に之をまた最も喜ばしい現象と爲し更に識者の努力を待つて之を切つ掛けにドシ／＼政界革新の步武を進めて往きたいと思ふのである。

○

普選實行の曉差當つて起る選擧界豫測の不可能と云ふ現象は誠に喜ぶべしとするも、之が何時までも續くか否かは分らない。選擧を黨界策士の支配に置く可からざるは云ふを待たず、從つて選擧界の豫測は何時になつても分らぬ樣にして置くことが必要だが、之には識者の努力が必要だ。民衆の訓練が必要なのだ。之なくしてはやがてまた政界の策士をして新事態に適應する新なる惡辣手段を成功せしめぬとも限らない。

普選實行の曉差當り選擧界の豫測のつかなくなつたのは、黨界策士の手が廻り兼ねたからである。彼等が從來の惡辣手段を

悔いたからではない。抑もまた選擧民が道德的に大に覺醒したからでもない。從つてやがて復び乘ぜらるべき間隙は大にある。そこを大に警戒する必要あることを忘れてはならぬのである。

從來は如何に政界の革新を叫んでも實行は困難であつた。道樂息子に金を預けて居つて改心を求むると同じ樣なものであつたから。普選の實行は謂はば道樂息子に金の自由を封じた樣なものだ。併し彼の遊蕩的素質は猶ほ殘つて居る。金の自由が利かたくなつた丈け改心の訓戒が入り易くなつたといふまでの話だ。彼を根本的に改善するのは之からの努力に待つ外はない。

○

孰れにしても普選の實行は政界革正の端緒として喜ぶべき事に相違ない。但我々はかゝる形式的制度の改革の價値や意義を過重視してはならない。其は只政界の順當なる發展の途上に横はる一大障礙物を除去したるに過ぎぬ。之を端緒としてこの平坦な途を民衆が喜び勇んで進むや否やは自ら別問題だ。

障礙の儼存は氣勇を沮喪し意氣を消沈せしむる。沮喪消沈し切つた意氣は障礙の取り去られた後でも容易に起き上らうとしないこともある。我國今日の民衆の良心は如何の程度に頽廢して居るやは分らぬが、普選實行といふ制度上の改變に由て直に昂進する程度に在らざること丈は疑を容れない。我々は制度の改變に伴つて更に一層の義務責任の加はるを覺悟しなければならない。普選實行の曉若し實際の結果に面白くないものがあつたとしたなら、それは普選其ものに罪があるのではなくして、之に伴ふ我々の努力が足りないか又は其の宜しきを得ないに歸するものと謂はなければならぬ。

組合主義に裏づけられべき普選

杉森孝次郎

普選が實施されたら、結果に於いて公的である選擧が、動機に於いても公的に、現在よりは近づく可能がある。情實主義、私利主義がいまほど支配的、普遍的には行なはれきれなくなるのだ。この一可能だけでも價値は大きい。戸別叩頭、買收、威嚇、脅迫等は、選擧運動の手段として代表的でなくなる必然性が、普選制には帶ばれてゐる。

およそ專制々、寡頭制の一弊は、その一人もしくは少數有力者の意思をさへ動かせば、公的問題が左右されるにある。制限選擧は、寡頭制の一形だ。普選となれば、多數、大多數、全數

の意思を動かすことが不可避にされる。どうしても、手段が公明に、正大にされる。良心よりも公的たものはない。普選制下に於いては、被選擧者も、選擧者も、比較的に、良心に信頼すべき圍境が準備される。

普選制下に於いては、無智の選擧人が澤山生ずる危險があると心配する人があらう。しかし、その心配は、大部分無用だ。特權を與へられれば、自重すべき、また政治を研究すべき理由と共に、さうする興味が民衆に湧きうる。また、一社會内に於ける比較的の識者、先覺者、有能者は、無形の感化、說得、すなはち廣義の教育のかたちに於いて、周圍の昧者の蒙を啓らく社會的責任を自覺すべきだ。この自覺さへ旺盛になれば、大多數者の無智は、獨立に作用せず、小數の智者、有德者の指導下に統率される。

しかしながら、いはゆる勞働者や無産者が無智であり、無德であると總括的にきめて考へることは無論早計だ。普選と共に、成年勞働者、成年無産者の教育の機會を增設し、新作する必要もあり、義務教育の年限及び範圍を延ばし擴げる必要もある。義務教育の範圍を擴げるといつたのは、職業的及び高等常識的補習教育の發達を、すなはちそれが指示する方途への経綸と實行とをさしたのだ。

現代に於いて當然發達すべき勞働組合も、あるひは小作農民黨の意義を有する政治的組織も、普選實現のあかつきには、發達を容易にされるだらう。

專制々の方が面倒はすくないだらう。しかし、時勢が進めば、すなはち民衆が自覺して來れば、專制では事實すまなくなる。面倒以上の破壊と損失が時代おくれの專制からは結果する。

男性普選が實施されたら、まもなく、女性參政が有力なる輿論となつて來るだらう。一體、男性も、女性も、日本では、參政權を理解しなさすぎる。結果に於いて自分達の實行が大いに支配される立法、行政、及び無論その行政に附帶しての條令の問題を、よそ事のやうに、かれらは、いまなほいにしへの如くに思ひちがひだ。封建制、またその後の專制下に庶民として生きて來た習性だ、無意識ながらかれらを政治に無關着にさせてゐるのだ。

勿論、現代政治を根本的に廢信し、したがつて廢用にしようといふ底意の人人もすくなかるまいが、その「根本的」が、隨分淺見的、無批判のものである場合が多いやうだ。多くの人人が根本的にどうかすべきだといきまく事柄は、實は、いくらかの改良といふことばで最も完全にいひ現はれべき事柄だ。

ただし、普選がどんなに完全に實行されても、普選だけでは

現代政治の內弊だけでもが決して偉大には救はれない。組合主義の發達が、普選の內包として必要だ。職業別、地方別、及び問題別にしたがつて、民衆が自己を組織するでなくては、立法も、行政も眞に民衆のものとはならない。現代政治の一代表的不完全は、實に、政府と、議會と、それから政黨とは、それぞれに、組織された力であるのに、殘りの民衆は、孤立せる、したがつて無力の雜群であるにある。かくの如き事情下に於いては、政府と議會と政黨とは、民意を代理せずに民意を壓制する可能がある、かつ、かくの如き事情下に於いては、立法も、行政も、民衆の體驗に基礎を持たず、それの知識なき、すなはち、たかだか、善意ある無智の立法とも、行政ともなる。

組合主義としての民衆の自己組織が、普選を有意義にする最先要、最根本の一社會務だ。

普選實行後の政界

法學博士　堀江歸一

普通選擧が實行されたならば、我國社會の基礎を撼搖させる虞れがあるとか云つたのは、故原敬氏の言であつて、今日でも政友會の內には迷信的に此言を信ずる徒輩があるかも知れないが、私を以つて見れば、斯の如きは政略家が一時の權略から割出して、唱出した賤む可き僻說であり蔑す可き邪論である。又普通選擧を實行するには、國民の知識を涵養しなければならないから、今日は尙ほ準備時代であつて、隨つて卽時實行の如きは、尙早であると云ふ說もあるが、是れ亦學制發布以來五十餘年を經過し、國民教育の普及されたことを考へたならば、其取るに足らざる議論であることを理解し得るであらう。

我國今日の議會が民意代表の點に於て、如何なるものであるかは其內容を一瞥することに依つて、之を知るを得るであらう。貴族院は有爵者、多額納稅者、國家に功勞あり、又學識ありと云ふ故を以つて、勅選された人々に依つて、組織される。是等は何れも國民全般に對して、直接の交涉を持たない階級に屬する者であり、又國民を代表する者でもない、寧ろ是等特殊の階級に行はれる思想感情を以つて、國民の國家に向つて、要望する所を沮止するような態度に出ることもあり得るのである。之に反して衆議院こそ民選議院として、民衆を代表する府とならなければならないものであるが、我國の衆議院は何としても從來の有樣であつては、民衆代表の府を以つて、之を目するを得ない。而して其重なる原因としては選擧法の不備と政黨の不

完全とを擧げなければならぬ。我國の衆議院議員選擧法は制定の當初から、國民の直接國稅納付額を以つて、選擧權分布の標準に充てた。此一事たる、一國の政治をして衆愚政治に流れしめざる用意に出たものであらうが、同時に政治をして有産者階級の支配下に立つに至らしめた。其後選擧權の分布を決する直接稅納付額は次第に低下されるに至つたが、此標準あるが故に、多數の國民は政治に參與する權利を持つを得ず、久しく政治圈外の人として、今日に至つたのである。

一方に帝國議會の回を重ねるに隨つて、政黨にも離合集散があり、種々の名稱を冠する政黨が世間に現はれるに至つたが、要するに何れの政黨にした所で、有産者の利害を代表するものに過ぎない。即ち我國の議員は多くは資産階級であつて、其受ける歳費は以つて一年の生活に費す所を充すに足らず、四年に一回又は其れよりも、頻繁に到來する總選擧に際しては、一度に數萬圓の運動費を要する以上は、有産者か、然らずんば有産者に接近して其補資を仰ぎ得るか、孰れかの者でなければ政治家としての生涯を送るを得ない。一個の議員既に然るが如く一個の政黨も亦多數の黨員を抱擁し、又成る可く多くの議員を黨員の内から選出せしめるには、素手で行はれる道理はなく、必ず若干の政戰資金を持つことを必要とし、其結果から金權と階級に接近し、彼等の利益を謀つて一方に、其利益の一部分を政黨に收用することに怠らざるに至るのである。

近年我國に於ては、純粹の政黨内閣の組織されるに至つたまで、政黨其のもの丶進歩したことが伴はれるようであるか。假に政黨内閣の組織を以つて、政黨進歩の證據であるとしても、政黨の實質なり、内容たりに幾何の稱揚す可きものがあるかと云へば、單に有産者や、金權者階級に隷屬して、其利益を謀ると云ふことの外に、何等の見るを得るものを知らない。年を逐ひ議會の開かれる度毎に國民の議會に對して懸ける望みの少なくなるのも、亦異とするに足らないであらう。

普通選擧が實行された曉に、之を小にしては議員の選出上に、又之を大にしては議會の素質を改善する上に、幾何の効果を奏するであらうか。固より効果の大なることは、之を望むを得ないかも知れないが、少なくとも現時の局面を一新するに於て、多少の力ありと考へられる。第一納稅額に關する選擧資格の要件が撤廢され、壯丁が壯丁である故を以つて、選擧權を持つに至つたならば、全國を通じ、又各選擧區を通じて、選擧有權者の增加するのは勿論であつて、斯く增加した有權者に對して、運動者に戸別訪問や、請託を以つてするが如きは、到底及ばざる所となる。隨つて勢、戸別訪問、買收等に代るに、言論を

主とする宣傳に依賴することゝ爲り、言論に伴つて生じた言責は兎に角或る程度まで議員の行動を支配する效果を生ずるであらうと思はれる。

第二納稅額の如何に拘はらず、選擧權の分布が決定されたならば、中產以下の階級に屬する者の有する投票數は必ず上中流階級に屬する者の間に分布される投票數に數倍數十倍する。工場主や地主の有する投票は一票に止まるが、一方に工場勞働者や小作人若しくは作男等の有する投票數は數十數百の多きに上であらう。然らば斯る階級の利害を代表する者が階級所屬者自身の內から、或は知識階級の內から、必ず選擧場裡に現はれ多數の投票を收めて、當選の榮を荷ふことも、亦實際にあり得る所としなければならぬ。

我國に將來勞働黨が起るかどうかは、時々世人の談話に上る問題であるが、要するに此事たる、普通選擧採否の如何に依つて決定され可き所であつて、選擧權が社會に於て多數を占むる下層階級に移り、而して勞働者が此階級に屬するものであるからには、必ず勞働者の利害を代表する者が議員に選出され、政治上に團體を組織することを以つて、自然の勢とするのである。唯我國に於けるが如く工業勞働者に相對して、農業勞働者があり、農業勞働者の外に、小作人がある場合には、勞働者の利害を代表する者の政見の單一でないことは、免かれ難き所であるかも知れないが、普通選擧實施の後に、勞働黨や勞働者議員の出ることは、當然の勢を以つて、目されるのである。

第三普通選擧實行の曉には、政治上の爭殊に選擧競爭は餘程眞面目のものと爲るであらう。恰も選擧權が擴張されて、新に選擧權を獲得した者は此權利を尊重視して、之を何人に投ず可きかに就て、正當の判斷を下すことに力を致す、所謂神聖なる一票と云ふ言葉が出て來る如く、普通選擧の下に新に選擧權を獲得した人も總て同樣の考を懷して、選擧場裡に臨んだならば選擧の嚴肅を加へることは、論を俟たない。唯此嚴肅味が何時まで續くかは、一個の問題であつて、之を續かせるには、普通選擧と相待つて、國民に政治教育を施すことを必要とする。固より普通選擧其ものが一の政治教育であることは、明白の事實であるが、或は新聞に依り、或は演說に依り、國民に政治の現實に對する理解を持たせることの必要は何人も疑を容れない所であらう。今日と雖も、概して之を見れば小作人は地主よりも勞働者は工場主よりも、進んだ知識を持つて居り、又政治慾をも備へて居る。是れが私をして普通選擧の急施を必要とし、又道理ありと認めしめる所以であるが、普通選擧實施の曉には、益々政治に對する國民の理解は正確なるものと爲るであらう。

第四斯る勢を以つて進んだならば、普通選擧後に於ては、從來の如き資本專制の經濟組織は必ず或る關係に於て修正され、改造されて、其面目を一新するであらう。即ち勞働者にして參政權を持ち、其代表者をして政治を支配し、又政權に與らしめる以上は、彼等は勞働者として生産に干與する場合に、單に資本家に隷屬する賃銀奴隷として滿足す可きものでなく、必ず或る形に於て産業の經營に、又其管理に參加する權利を要求しなければ已まず、斯くて普通選擧は資本家專制の經濟組織に終末を告げるに至らしむるであらう。諸外國に於ては、兩者の關係は餘りに密接でなく、普通選擧行はれて、尚ほ資本家專制の經濟組織の永く行はれるを見たが、斯の如きは道理に於て許され可き所でない。今や國民思想の急轉著しきことを考へたならば、普通選擧の實行は必ず或る影響を産業組織の上に及ぼすに至る可きものと斷定せざるを得ない。

民衆共存の理想と階級闘爭の事實との調和

永井柳太郎

普通選擧が何時實施せらるゝかといふ事は最早や興味ある問題でなくなつた。何となればそれは時の問題で、遲かれ早かれ實施せらるゝ事は明白だからである。それよりも更に興味ある問題は、普通選擧の實施後日本の政界はどうなるかといふ事である。普通選擧實施後の日本の政界の狀態に就いて二種の悲觀論がある。一は現在の特權者の悲觀論で、普通選擧が實施せらるれば有權者の大多數は勞働者乃至無産者となるから、議會は勞働階級乃至無産階級の代表機關となるに相違ない。さうなれば現在の特權者は如何なる復讐を受けるかも知れぬといふのである。第二は之れとは反對に勞働者乃至無産者の悲觀論であつて、普通選擧が實施されても、それと同時に選擧運動及び選擧費に關する現在の規定が無産者本位に大改革せられざる限り、選擧費用は現在よりも增加する事はあつても決して減少する事はあるまいから、僅かに勞働者乃至無産者の代表者を多數選出

する事は出來ないであらう。だから普通選擧の實施後も議會政治に多くを期待する事は出來ぬといふのである。私は此二種の悲觀論の是非を論ずるよりも寧ろ普通選擧が實施せらるゝまで勞働黨乃至社會黨の出現は不可能であるか、それとも可能であるかといふ事に就いて先づ考へて見たい。

私の考へる所では勞働黨又は社會黨の出現には普通選擧の實施といふ事が必しも絶對條件でない。同時に又選擧權が或程度に擴張せられざる限り其出現は殆んど不可能といふてよい。只其擴張の程度が普通選擧と唱へ得る程度のものでなくともよいと云ふ丈けの事である。千九百年二月に英國に於て勞働議員選出委員會なるものが組織された。これは當時の英國に於ける各方面の勞働團體及び社會主義團體の代表者約百二十名がロンドンに集會し、彼等の代表者を議會に選出する準備として組織したものであるが、此委員會の活動功を奏し、同年九月の總選擧には五十八名の候補者を出し、其中故ケーヤ・ハーディー他八名を當選せしめた。此事實は保守自由の二大政黨以外に經濟組織の大改造を目的とする第三黨の誕生として當時の英國人に非常なる感動を與へたのであるが、當時の英國には未だ普通選擧が實施せられてなかつた。只戸主參政權を原則として郡府の住民と都會の借屋人とに對して或程度の財産制限を加へたのであつた。

プロシヤに於ても社會民主黨はビスマルク時代より既に發生して居たに拘はらず。プロシヤの選擧制度は納稅額を標準として其有權者を出來得る限り制限したのみならず、更に其有權者を納稅額に基いて三階級に分類し、戰後革命の勃發迄斷じて普通選擧を許さなかつたのである。固よりプロシヤ議會に於ては千九百六年から殆んど年々普通選擧案が提出せられ、急進派の人々は年々其實施の爲めに奮鬪したのであるけれども、頑冥固陋なる政府及び保守黨の壓迫に依つて議會毎に破れ遂に革命に至るまで其目的を達する事が出來なかつた。

ロシヤも亦之れと同樣で、千八百九十年代からペトログラードやモスコーに於ては既に勞働階級の政治運動が起つた。殊に千八百九十八年プレハーノフ博士は其同志と共に社會民主勞働黨を組織し、專ら勞働者を率ゐて社會主義を行はんとし、農民勞働者は又別に社會革命黨を組織して盛に土地國有論を主張し、議會其物の未だ存在せざる時代から勞働黨及び社會黨の出現を見た。千九百六年初めて議會が開かるゝや此傾向は愈々著るしく多數の過激なる社會主義者が公然と議政壇上に現るゝやうになつた。茲に於て政府は大に恐怖し、引續き議會を解散し、總選擧毎に極端なる干渉を行ふたけれども此大勢を如何ともする

能はず、千九百十一年第三回總選擧の後には猶立憲民主黨五十三名、勞働黨十一名、社會民主黨十三名となつた。只社會革命黨のみは政府の壓迫に依つて一名をも選出する事が出來なかつたけれども、兎に角ロシヤに於ても亦普通選擧が實施せられず極端なる制限選擧と、過酷なる選擧干渉との間に於て猶且つ斯くの如き勞働黨及社會黨の擡頭を見た。

之等の事實に依つて見ても勞働黨又は社會黨の擡頭は普通選擧が實施せらるゝと否とを絶對條件とするのでなく、其社會の經濟組織に伴ふて發生すべき必然性を持つて居るやうに思はれる。歐米諸國を見るに産業革命はフランス革命がギロチンの脅威を以て破壊した貴族階級に代ふるに資本家階級を以てし、貴族對平民の階級鬪爭の慘禍に劣らぬ資本家對勞働者の階級鬪爭を發生した。科學の進歩が全産業を機械化すると同時に、産業は小數なる大富豪の號令に歸一せんとする傾向を生じた。此結果多數の勞働者は其生活上に多大の脅威と不安とを感ずる事になつたのであるが、此生活上の脅威と不安とから免れんが爲めに所謂勞働運動が擡頭し、之れが政治上に反映したものが即ち勞働黨又は社會黨の出現である。だから社會黨又は勞働黨の出現は選擧權が如何なる程度に擴張されたかと云ふ事よりも寧ろ其社會に於ける階級鬪爭の觀念が如何なる程度に蔓延し、階級的分裂が如何なる程度に深刻であるかといふ事に依つて決せらるゝといふべきである。

翻つて我國を見るに階級鬪爭の觀念は歐米諸國に於けるが如く普及して居らぬけれども、階級意識の盛になつた事は未曾有と云はねばならぬ。殊に世界戰後物價の暴騰に依つて勞働階級乃至無産階級の生活が著るしく脅威された事と、歐米諸國に於ける經濟革命の刺戟に依つて思想上に大變動を生じたが爲めとに依つて、險惡なる階級鬪爭の思潮が日々に深刻ならんとする傾向ある事は悲しむべきである。大正七年即ち講和第一年には日本全國に亘つて四百十七の同盟罷業が起り、約六萬三千の勞働者が之れに參加した。然るに大正九年には既に同盟罷業數千六十九、參加勞働者十二萬七千五百の多數に上つた。此傾向は啻に都會の勞働者のみならず、今や農村の勞働者にも波及し、帝國農會の報告に依れば大正十年産米期の前後に起れる小作爭議の件數のみにても四千百八十五の多數に達した。而も之等は總て表面に現れた數字に過ぎぬが、其未だ現れざるものを列擧すれば數倍の多數に達するに相違ない。斯くの如くにして我國に於ても亦既に階級鬪爭が事實に於て起つて居るのであつて、若し之を今日のまゝに放任して顧みる所がないならば、假令普通選擧が實施せられなくても勞働黨又は社會黨の擡頭を見る事は

免れないではないかと思ふ。現に單純なる經濟的目的を有するに過ぎぬ勞働團體の數のみを調査して見ても最近の增加は著るしく、大正七年末には約百であつたのが其後累年增加し、現在は三百を越えた。此階級意識が軈て政治上に反映するに至れば勞働階級乃至無產階級を代表する政黨の發生する事は自然と云はねばならぬ。

凡そ現代社會生活の理想は民衆共存である。各個人は其個性に應じて各々獨特の生活意義を有する。而て其個性を思ふ存分發揮し、眞に自己の生活意義を本位としたる新生活を創造する事が文化の本義であると同時に又大自然の要求である。故に近代國家は民衆全體の生活を保障し、其各個人の生活の要求を遂げしむるに必要なる環境を作るを第一義とすべきであるが、此民衆共存の社會理想と階級鬪爭の事實との間には大なる矛盾がある。此大矛盾を如何にして征服し、民衆共存の理想を體現する新社會を建設すべきかゞ現代日本の大なる煩惱である。

普選に反對するは愚

文學博士　三宅雪嶺

日本の民衆を譬へれば、淺瀬で泳ぎ、相應に腕達者であつて、泳ぎを好まず、泳ぐの機會も少く、どれほど泳げるか、隨分遠泳ぎし得さうに思はれ、或ひはさう行かず、うかと泳ぎ出して、飛んでもない災難に出逢ひはせぬかと恐れられるやうな姿になつて居る。概括して云へぬやうでも、東洋は歐米に較べて多數が政治に冷淡であり、日本も之を免かれて居らぬ。廢藩置縣までは政治は侍の事、素町人、土百姓の與り關する所でないとしたが、それで素町人どもが政治に働き得ないかと云へば、さうでなく、幕府でも長州でも、土民混淆で軍隊を造り、侍以外から政治家が飛び出したりした。後に伊藤公と云ふのは土百姓出である。それでも國會開設願望に關係したのは或る一部分であり、議會開設後も議會が何う成つて居るか一向知らぬ者が多く、選擧權の擴張を要求するなど、有るか無しである。政治に關係ある部分で選擧人の納稅資格を下げただけの事、選擧權無い者が權利を要求する運動が無い。

そこで民衆の要求無いのに、普選を實行するに及ばぬとするが、要求するのを待つて居れば何時になるか知れぬ。眞に要求するに至らば、それこそ大騷ぎになり、殆ど手が着けられぬであらう。要求せぬから選擧權を與へても、無益と云ふべきでなく、與へれば與へるで、相應にやつて行く事が出來る。與へても何程の効能無く、唯混雜が多くなるだけでないかと云ふが、既に議會を開設した以上、斷じてさういふ事を考へたり言ふたりすべきでない。何故に議會を開設したか、維新の誓詔によるとか、當局者の先見の明によるとか云ふが、詰り士族のみで事を爲さず、四民共々に事を爲す方が、國力を增進し得るからである。何にしても、多數が國事を念とする方、之を措いて問はぬ國よりも力を伸すべき勘定になつて居る。人類の上から云へば、公共事業に關係する範圍が廣くなつて居る。現在の支那又は印度のやうでは、多數が自ら生存するに專らであつて、公共的に努力する所が甚だ少い。若し其の多數が公共的に努力するならば、世界の進運に與かる事少くなからう。何分にもさう行かず、努力する者がなるべく努力するの外無い。

普通にその制裁が國力の如何に在るとし、東洋が歐米の勢力に支配せられるの已むを得ぬ所とする。日本では國が小さい爲め、且つ他に種々の事情があり、比較的民衆が公共的に活動するを得るが、更に幾許か活動し得る筈であつて、さうなつて居らず、苟くも刺戟を與へ得れば、出來るだけ與へるやうにせねばならぬ。泳げぬのでなく、泳ぐのを億劫がり、兎角泳がうとせぬ。いろいろの方法で奬勵し、遠泳ぎさすべきである。奬勵すれば必ず遠く泳ぎ出し、遊泳競爭に立派な成績を擧げる事が出來る。從來の例に徴して、其の疑ふべからざるを覺える。廢藩置縣後、二十年ならずして議會を開設し、それで歐大陸の或る國々よりも體裁好く事を運ぶを得た。何故に早く選擧權を擴張し、既に普選を實行するに至らなかつたか。三十幾年をも過ぎ、選擧人を六百萬に止め、英國の婦人選擧人よりも數が少いなど、寔に話にならぬ始末になつて居る。普選を實行すればするで、それだけの事があり、實行が後れれば、後れただけの事がある。實行して何の利益あるかと云ふは、議會を開設して何の利益あるかと云ふと同じく、憲政國と非憲政國と如何に違ふかを論ずべき事になる。憲政の必要あるとせば、普選の必要を當然認めずに居れぬ。憲政は何の利益を持ち來たさないと云へば格別、さう云はぬ限り普選の一日も早く實行せらるゝを望まねばならぬ。英國ではさしも盛んであつた自由黨が、勞働黨と取り換へられさうな勢ひになつて居る。自由黨の主張した所のものは殆ど悉く實行され、最早存在の意義無くなつたのに由

る。實に今はグラツドストンが唱へたよりも、より以上の事になつて居る。婦人が選擧權を得、愛蘭が自治になつた。日本では明治二十三年に議會を開設したのは宜く、其の以後に憲政上何の進歩を遂げたか。いくらか進歩しても甚だ少く、今尚ほ衆議院の多數が普選尚早を唱へて居る。普通の順序よりせば、衆議院の多數が普選を唱へ、貴族院で反對すべき所をば、衆議院からして普選を潰さうとして居る。如何に現議員の選擧地盤に差し響くとは云へ、心得違ひも餘りに甚だしい。

之れとて從來習慣が無いからであつて、遠くへ泳ぎ出すに及ばぬとしての事である。岸で泳いで居れば可い、何の弊害でも出來る。遠くへ泳いで出て危險を冒し、何の利益あるかと云ふて居る。岸で泳いで何でも出來るにせよ、遠くへ泳ぎ出すと云ふ勇氣を養ひ、突進力及び忍耐力を鍛錬せねばならぬ。難船を見て之を救はうとする場合、岸に泳いで居つただけでは足らず、遠くへ泳ぎ出して馴れて居らねばならぬ。其の爲めに危い事もあらう。災難にも會はう。然し危險を冒さねば、眞に身體を鍛錬する事が出來ぬ。殿樣藝當では、品が好くても實際の役に立たぬ。現在の制限選擧でさへ、選擧權の使用を誤る者多く、普選實行の曉、紛亂狀態思ひ遣られるとするが、今よりも手數が掛り、面倒が多いに相違ない。併しそれを恐れるならば、全く選擧を行はぬの簡短至極なるに越した事ない。まるで手數が掛らず面倒なしに憲政有終の美を濟さうなど、結構過ぎて此の世に有り得べきで無い。何でもそれ相當の代價を拂はねばならぬ。國民の多數をして國家を慮からしめるか、國家に冷淡ならしめるか。冷淡な者を熱心にするには容易の事でなく、多少の混雜を覺悟して掛らねばならぬ。

それで果して前よりも大騷ぎになるか。十分に覺悟して掛かるべきであつても、案外心配した程の事ないやうに思へるでないか。選擧人が善いとか惡いとか云ふても、一概に云へず、地方によつて違ひ、地方でも市と郡とが違ひ、市にもいろいろあり、郡にもいろいろある。混雜するらしく思はれるのは、初め一二回の事であつて、其の後は前と格別の違ひがなからう。雇主と雇人と同等に投票しては、始末に行かなくならうと云ふが、這の類の事は前にいくらでもある。肥桶擔いで市中に歩く者に選擧權あるのが珍しくなく、肥を取らす方で選擧權無いのが澤山ある。汚穢屋が選擧權あるかと驚くが、それで何か心配した程の事あるかどうか。旦那と云ふて頭を下げる者が投票に出掛けるのは、いくらでもある。僅かの給料で追ひ使はれる職工が、投票場に出掛けては、雇主の顏が立たなくなると憂ふるも、職工が投票するとせぬとで、何の顏にかゝる事あるか。處

によつては、勞働者が投票するとせぬで候補者に迫まらうが、多くの候補者中さまざまの人物がある。選擧の易しい處もあり難しい處もあり、一々心配したならば、之れまでの選擧も行ひ得べきでない。初め一二回は候補者に於いて手心が分らず、心配になる事が多からう。演說を主にする者は何處で何う人を集めて演說すべきか。買收に馴れた者は如何に買收すべきか。知事の諒解を得た者は何として之を振れ廻はさうか。從來の手で成し難い所がある。土地によつては前と少しも變りなく、若干運動員に運動費を握らせれば、それで何とか纏めて呉れやうが、多數の上で云へば、選擧人直接の利害に關する事は今日よりも減ずるであらう。一票五十錢で買ふのも、數が增してはさう行かなくなる。不平家も割合に多くなり、誰れ誰れが買收に來たと云ふ事が矢釜しからう。郡部の土地では政權も何もあつたものでなく、唯誰れそれが選べと云ふから選ばうと云ひ、續々出掛けたりするが、之は多く納稅する者が分り、少しく納稅し又は全く納稅しない者が分らぬと云ふのでない。都會に在つても、多くの貸家を有つて居る大家が、店子より分ると限らず、九尺二間に起き伏して居る連中で、大屋より時事に通じて居るのが何れ程あるか知れぬ。何の部分が割り合に時事通であるか、之を取調べれば可なりに面白い結果を得やう。車夫は或る點で最も下品とせられて居るが、議會の事に隨分明るく、道々議論し、玄人が閉口するやうなのがある。議員の車夫が懇親會を開くが、氣焰萬丈、それも出鱈目ばかりでない。車夫は其の筈であると云ふが、他にも誰が判つて誰が判らぬか。納稅だの身裝だので判斷し得べきでない。今の選擧人でさへ分らず、普選でどうなるか知れぬと云ふが、今の選擧人に割合分るのが多いでないか。普選にして分らぬのもあり、悪い事するのもあり、實に毛蟲同樣に視るべき者があらう。併し近年贈賄收賄で刑せられた者が何の連中であるか、大抵に知れるでないか。無產階級が勢力を得、何ういふ騷ぎを起すかも知れぬと云ふけれど、騷ぎを起すほどに群衆を纏め得る者は、何等かの力があり、一方面に當るに堪へると看做して差支へない。選擧人が多くなれば、或る部分を纏めるものあるの傍、之に反對する者も續出し、詰り好い加減の者が或る特別の事情で選出せられる比例が少くならう。下劣なる者の意を迎へねば當選し難く、何處まで品位を下げるか量り知れぬと云ふが、眞に必要の人物ならば、誰にでも賴み込ますとも、自づと選出せられる事になる。下賤視せられる者の中、熊公八公の外に知る所ないのがあるけれど、さう許りも云へぬ。口利きの中には隨分人物を知り、事情に通じて居るのがある。間違つた者もするが、多數の上で今日

より多く間違ふ事がなからう。大體に於て選出せられる人物が、今日と大きな違ひなく、何程か買收だの警察官の手心だのが效能を薄くし、言論の力を増す事にならう。

選擧取締法を改め、其の他種々改むべきであるが、大いに希望を囑するの、失望に終る恐れあると共に、今日よりも優るとも劣らぬだけの事を認めねばならぬ。纔かの事ならば、どうでも宜いではないかと云ふが、纔かの違ひとは、選擧の結果から云ふのであつて、普選の必要は選擧の結果のみに限らぬ。本來憲政國として成るべく多くが選擧に與るべきであり、自ら與るを欲しなくても、與からしめるに努めねばならぬ。人類の或る部分は、人らしく取扱ふの必要あるの外、國民の多數をして國事を念とし、國力を増進し、列國と共に世界の事を處置せしめるの必要がある。普選で何程の効果あるか、算盤で之を示す事が出來ず、明かに云ふを得ぬが、歴史の事實が之を示すとして可い。世界一般に憲政國と成り來つたのは、其の趨勢を示すに足る。普選實行に躊躇するのは、眼前の煩はしさを心配するのみで、他に落しの理由が無い。憲政そのものが疑問であると云ふが如き、憲政の實を擧げた後の事である。今は兎も角も早く憲政の實を擧ぐるに努めるを要する。憲政は空論から出たやうでさうでない。歐米人は空論で動くほど利害に淡泊な種族でない。今日普選に反對するほど間違つた事が無い。併し普選は範圍の明白を缺き、廣きに及ぼしては婦人を加へねばならぬが、今は衆議院に問題となつて居る程度に於いて說く。

支配意識の進化としての普選

長谷川如是閑

政治的現象は、それを直ちに社會的要求に基く運動と見るのが、今までの普通の見方である。普通選擧の運動が各地に起ると、それを社會的に普通選擧の要求が起つたと認められてゐる。これはさうである場合もあるが、さうでない場合も多い。社會的要求は生活の上の衝動である。政治的要求は、さうである場合もあり、さうでない場合もある。例へば明治の初年の民選議員の運動の如きは、立派な政治的要求であつたが、決して社會的要求ではなかつた。それは支配階級の一部に起つた支配意識の進化であつて、一般社會人の生活要求そのものではなかつた。當時の日本人の多數は、立憲政治が何であるか代議制が何であるか少しも知つてはゐなかつた。それを知つてゐたのは政治家即支配階級の一部に止まつてゐた。なぜそれが日本の國

運を支配する力として働き得たかと云ふに、その時代に於ける社會組織は、貴族の支配が崩れて、中間階級の支配が民族的に成立つてゐたからである。つまり中世紀式支配に對し近世式支配が建設されたからである。而かもこの近世式支配は、決して社會的の管理狀態ではなく、政治的支配の一形式であつたので、社會的生活を離れた支配階級の意識による數千年來の政治樣式であつたことに變りはない。この階級的意識による政治現象を、社會的のそれと混同する見地は、今日に於ても明かに矯正されてはゐない。で、政治的要求が社會的要求と混同されてゐるのである。今日の普通選擧の運動は、明治初年の民主運動よりは、社會的要素に富んで居ると見なければならないであらうが、然し今日の社會意識は一方で政治的意識の普遍化に影響されてゐると同時に、他方では政治意識と社會意識との乖離を感じてゐる強い傾向がある。換言すれば社會的意識によつて政治的意識を反撥する傾向が強い。それが爲めに政治的なるものと社會的なるものとが、次第に截然と區別される傾きを有ち出した。政治人と社會人とが別人になりかけた。かういふ現象は、今日までの社會では、事實に於いて存在してゐたが、この事實は意識されずにゐた。昔は社會人は政治人に無視されて、事實それが社會の中心であるに拘らず、意識の上では政治人が社會の中心であるが如くに思はれてゐた。今日はそのあべこべで、事實社會の中心であるところの社會人が、意識の上でもその社會的地位を認められかかつて來たのである。昔は貴族の牛馬に過ぎなかつた農民が、社會人として力強い地位を認められて來たやうに。

で、この社會意識の根柢に立つと、今日の政治的要求が、どれだけの社會的根據を有つてゐるかといふことが疑はれる。普通選擧もその一例であつて、それを支配意識の進化と見る時に、重大な意義のあることは確かであるが、さうして今日の社會組織では、明治初年と同じく、さういふ意識が社會管理の上で重大の力を有つのであるから、それは決して社會的に輕視すべきものではないが、然し一般政治現象と同じく、社會の上層に於いて、社會生活と懸け離れた特殊の『政治生活』といふものであることも亦疑ひない。

そこで普通選擧の運命は、一般政治現象の運命と共にすべきものであるといふことになる。政治現象は既に今日の社會に於いて生活管理の能力を疑はれてゐるものである。イギリスにしろ、フランスにしろ、イタリイにしろ、政治的支配の持續は、管理能力よりは寧ろ傳統的勢力と、それを軍國的に持續する武力とだけによつてゐることは明かである。イタリイのファシスチ政府の如く、それを極端に露骨に示してゐるものは少いまでも、事實の上では各國ともファシスチ的管理を政治の眞諦とし

てゐるのである。それでなければ政治的支配は持ち堪へられない。然し各國とも、さういふ眞諦の上に立つてゐると同時に、さういふ維持は、武門政府と同じく、不自然で、さうして一時的であるといふ無意識的自覺を有つてゐる。その自覺が即ち『政治の社會化』といふ自家調節となつて現はれてゐる。即ち政治的意識の階級的孤立を次第に社會化することによつて調和しようとしてゐるのである。ファシスチさへも、その政策を取るべく餘儀なくされてゐる。彼はイタリイの近時の政策が政治の社會化によつてその傳統的階級組織を脅かさるるに及んで、その防護者として起つたものでありながら、さすがに全然中世紀式支配に歸へることは出來なかつた。如何なる政治現象もその社會化によるほかは、今日に於いては自存の道がなくなつてゐる。普通選擧はこの過程に於いて、各國が採用しないわけに行かなくなつた政治的進化なのである。

だからそれは支配意識の進化である。一般人民の間にその運動が起つたといふことは、支配意識の普遍化に基因してゐるのである。それは社會的生活の上層に、生活そのものとは別に組立てられてゐる意識の世界の生活である。各人が普通選擧を叫ぶ時には、彼は政治的生活の憧憬者である

それ故に、社會管理を生活の本據に求めるものは。さういふ政治生活に興味を有つことが出來ない。のみならず、さういふ政治生活は恐く支配の生活そのものの組織的持續であつたことを知つて、それがどんな形で顯はれても油斷しないといふ態度を執つてゐるのである。で、一般人民の間に、普通選擧に對する根强い警戒が行き渡つてゐる。この點から云ふと、大きい望を普通選擧に置くことは出來ないやうであるが、然し政治意識の進化が實際の社會的生活を決定する重大の力を有つてゐることは拒まれない。故に生活を具體的根柢の上に置けば、現實の力を無視して、その運動方向を決定することは出來ない。人々がこの力に動かされて强い政治的要求を有ち出した以上は、その事實は必ず我々の生活に影響する。よかれあしかれ、この影響を無視して我々の生活を考へるわけには行かない。

この意味から、わたくしは普通選擧に反對する二つの傾向をともに排斥する。一つは傳統的階級組織の維持の爲めにするものであつて、他の一つは社會思想のイズムの根柢から反對するものである。思想の上で政治的意識を社會的意識と全然區別するわたくしは、特に政治的意識を排斥する道理を有つてゐるのであるが、然しさういふ道理の爲めの道理を主張するのは意義をなさない。生活の進化が何によつて持ち來たさるるかは、具體的の社會條件に依據する。目下の社會生活と、それに根す

る意識とが、わたくしたちの生活方向を決定する。即ち政治的支配意識の社會化の過程と見るべき現象は、それを促進することによつて、具體的の生活を進化に導くものに相違ない。政治的意識が、それ自らを社會化する過程を取るには、その理論的根據は必ずしも重大ではなく、その要求の衝動的の作用が重大なのである。普通選擧が政治的衝動である爲めに、それは社會的要求とは區別さるべき現象には相違ないが、それが現代に於いて重大の進化である以上は、或る期間、社會がその過程に依據しないわけには行かないのである。如何なる理想上の不滿を含むにしても、それは社會現象として實現される。さうして現在の形勢によれば、その實現は混沌たる經過の間に、自ら一定の進化を生み出す歴史的證蹟がある。

然しすべての政治的現象は、明治初年の文化現象のやうに、動もすれば國民の中の特殊の階級の世界たるに止まるやうな傾きがある。國民の多數が依然として在來の生活に立て籠つてゐるに拘らず、或る階級だけが鹿鳴館でパリ人のやうな生活をするといふ明治初年の有樣が、政治生活に伴ふ社會狀態である。普通選擧は、かういふ狀態をヨリ普遍的にしやうといふ運動である。從つてそれはいくら普遍化されても、矢張り生活を離れた支配現象となる虞れがある。然し日本の文明は、古代から支配階級の意識的企圖で組立てられるといふ經過を取つてゐて、而かもその企圖は、外國文明の攝取から成立つてゐたのであるから、今日の政治的進化も、その同じ歴史的事實が繰返され、そしてそれが民族的進化となるのである。

然しこの狀態は今日に於いては非常に困難な事情に際會してゐる。日本の外國文明の攝取は、今日に於いては截然と二つの方向に分れた。一つは既成文明の攝取であり、他の一つは、その既成文明が崩壞しつつある過程の傳染である。外來思想に根柢して出來上つた日本の支配者が、この頃外來思想を排斥しなければならなくなつたのは、その故である。普通選擧にもこの現象が作つて來る。普通選擧は民主的文明の攝取に伴つて入つて來なければならない過程であるが、他方に於いては、この既成文明の當然の順序に對する悲觀的事實が先進國に起つてゐる。その相反する二つの勢力が、日本を襲つたのである。

で、右のやうな外國の政治的進化をどう攝り入れるかは、日本の生活事實がそれを決定するわけである。而してそれは大化の革新當時、明治の革新當時ならば、支配の生活の事實がそれを決定したであらうが、今日では社會的生活の意識が、支配の生活の意識よりも強大となり、普遍となつたので、階級的支配意識だけでは決定されない。然らば普通選擧の場合に、その採

否を決する社會的根柢はどうなつてゐるであらうか。

元來支配の生活に依囑してゐる日本人の生活は、この點に於いて政治的意識の決定に依頼され易い。若し普通選擧が明治初年の急進的政治家の要求通り、早く輸入されたならば、いよいよさういふ結果となつたであらう、今日と雖も、政治的支配は絕對に普通選擧を持ち來すべき組織の構成を禁壓し來つたので、西洋で普通選擧が要求されるやうな政治的構成が、日本の社會では全然成り立つてゐないと云つてもいい。敎育だけはかなり普及したと云はれてゐるが、然しそれも普通選擧と相容れないやうな政治狀態の、民族的信仰を組立てるものであつた。勞働黨、社會黨、そんなものは無論禁壓された。普通選擧要求の根抵となるべき勢力は、今までの政治組織の上で綺麗に抑へつけられてしまつてゐた。さうして彼等は尙早であると云ふ。

政治組織が右のやうに普通選擧の根柢となるべきメカニズムを缺いてゐるといふことは、敢て官僚ばかりでなく、一般の普通選擧に關する悲觀材料である。然しこの場合にも、すべてが政治的に指導される日本人の生活を考へると、先づ政治的形式を先きに持つて來て、後からそのメカニズムを完成させるといふ歷史を、こゝでも繰返すことになるであらう。議會制度がさうであつた。從つてその延長である普通選擧もさうであるべき筈である。

而かもこの形式に應ずるメカニズムの構成は、今日に於いてはその機運が熟してゐると云へる。即ち普通選擧の主人公たるべき勞働者及び農民は、前述の如く、政治的壓迫の爲めに、組織的構成を有つことが出來ないに拘らず、それから自由にされれば、有力の運動の起るべき可能を示すに至つた。殊に小作人の生活狀態は、この要求を發生せしむる必然の狀態に差し迫つてゐることは、頗る注意すべきことである。

そこで若し普通選擧なる形式が、日本の歷史的習慣に隨つて、人民の上に天降つて來たとすれば、人民はそれを社會的進化の必然の過程として働かせる——ヨオロツパの人民が或る期間働いたと同じやうな作用——可能性を有つてゐることは確かである。『權力は上から降つて來るのを取るものではない、下から昇つて取るべきである。』といふのは事實であるが、日本人は途中まで昇ると、上から權利が墜ちて來るといふ歷史に慣らされてゐる。普通選擧もきつとそれを繰返すであらう。さうして機關はそれから完成するであらう。

この形勢から觀察すると、普通選擧の實施は、かなり有力な變化を日本人の政治生活に持ち來すに相違ない。然し議會が出

來ても、之を働かせるメカニズムが出來てをらず、出來てゐてもそれが人民の生活から生れたものではなく、政治階級の作意的構成たるに止まつてゐる間は、何等議會らしい働きをする可能性がない。現代の議會が今何ほさういふ範圍を脱してはゐない。それはつまり日本やイタリイには、イギリスのやうに議會制度を生み出した生活條件が具はつてゐないで、政治意識の思想上の傳染から、さういふ制度が持ち來たされたからである。この思想上の傳染は、政治意識の場合には、極まつて階級的である。政治に關與する階級だけが、その思想的傳染の主人公であつて、社會一般は埒外局外者である。政治は政治上の局外者な政治家か支配するといふ不自然な管理組織であるから、一部階級の思想傳染が、それと沒交渉一社會一般を支配するといふ結果を生ずるのである。政治的支配は、局外者を局外者か支配するといふ管理組織である。普通選擧はこの局外者同士の隔離を出來るだけ少くするといふ、一般の政治の社會化といふ現象の延長であつて、政治上の外國人同士を歸化させる一つの働きである。政治人と社會人とが、截然と區別されるやうになると、政治はいよいよその社會的性質を失ふことになるので、その社會化によつて、出來るだけ社會的性質を失ふまいとするのである。そこでかういふ結果になる。普通選擧は政治人を社會人にするのではなくて、社會人を政治人にする働きである。今まで政治的興味を有たなかつた社會人に政治的興味を有たせるに至るのである。而かもその政治的興味は、生活の興味とは別の、政治的意識である故に、如何にそれが社會化されても、本質的にそれは社會的生活の興味とは別である。議員になることは、よし勞働者もそれになれる、小作人も議長になれるとしても、それは米を作り、石炭を掘り、機械を造るやうな生活の衝動とは別物である。「人は本來政治的である」と云つたのは、政治的意識が普及した後の話であつて、寧ろ本質的には「人は元來手工者である」と、今のギルドマンの一人が云つたのが正しい。現代の社會組織は右の兩者の中の、ギリシヤの哲人のそれに根柢せずに、平凡なギルドマンのそれに根柢するところに意義があるのである。生活を政治に据けずに、生産的能力に据ける。この意味から政治意識の普及といふことは、今までの人々が考へた程、望ましいことではなく、場合によつては禍でもある。普通選擧は確かに政治的意識の普遍化である。だから、それが實行された結果、國民の生活上の意識が望ましい方向に――社會的に重大な進化を生み出す方向に――動くものとは云はれない。寧ろさういふ意識は、現代に起つた生活上の意識によつて何時かは取つて代はらるべき性質のものである。言ひ換へれ

ば、普通選擧は國民の上にいろいろと反社會的な混亂した政治的生活を持ち來すであらう。殊にそれと並行すべき政治的構成が不十分であつて持ち來たされた普通選擧は、恐らくその構成が整ふまでは、その當然の政治的効能をさへ、發揮することは出來ないに定まつてゐる。

然し普通選擧の實施は、その政治的衝動が、或る場合、生活の衝動を一致する點に於いて、重大な社會的意義を有つ。即ち普通選擧の有力な點は、(政治學が豫期するのとは反對に)そのモッブ的性質にある。モッブといふことを消極的にのみ觀察するのが優越者の習癖であるが、モッブは決して社會的無意義の具體化ではない。無論ノンセンスそのものであるやうな外觀を有つてはゐるが、然し有力なモッブは、その有力といふことの爲めに、ノンセンスでないことになる。米騷動もその一例である。なぜならば生活の衝動は、それを抑へ付ければ、またそのやうな形で出て來る。神は場合によつては惡鬼の形で現はれる能力を有つてゐる。モッブは生活衝動が平和な神の相で出られなかつた場合に取るところの惡鬼の姿である。普通選擧は或る場合に、このモッブ的運動に、秩序と力とを與へる可能性を有つてゐる。普通選擧を機械的に圓滿に働かせるメカニズムを缺いてゐる間は。往々このモッブ的精神が、普通選擧の樞軸を握るであらう。これは勞働黨やトレード・ユニオンが普通選擧を働かせるやうな、有識的に整然とした立派な作用とは、較べものにならない混沌狀態ではないが、然しこの混沌は普通選擧の場合には決して無意義、又は無力な現象ではない。勞働運動でも小作人運動でも、それを有機的に働かせる機關の構成が、政治的に壓迫されてゐる限り、さういふ有機的の作用を缺くところの力となつて働き出すことは已むを得ない。而してその場合に、普通選擧は有力な道具として役立つであらう。

モッブ的性質をなるべく普通選擧の上に働かせまいとするのが、普通選擧斷行後も、爲政者階級並びに資本家階級の努力する點であらう、而して目下彼等が普通選擧の實施を恐れるのも、主としてそこにあるのであらうが、然し有機的に働く機關を禁壓しながら、さういふ政治的不規則戰を恐れるのは、火を焚いて煙を恐れるやうなものである。そこで實際問題としては、現に普通選擧の實施が阻まれてゐる間に、その機械作用を有機的に――革命的にでなく――働かせる機械的構成を禁壓せずに、却つて奬勵することが、彼等の爲めに得策である。それは即ち今日選擧權を有たない多數人の、選擧權を有たないが故にモッブ的に働く外はないといふ地位を、機械的に打ち破ることである。即ち組合運動に對する禁止的態度を全然改めること

によつて、今日は有機的に働き出す力を有しない多數者を、有機的の集團に導く可能性が十分にある。組合組織が勞働者及び小作人の間に發展すれば。動もすれば反社會的に發動しようとする政治的衝動も、頗る社會的の樣式で現はれることが出來る。米騷動もあんなモッブ運動にならずに、堂々たる勞働組合の運動として現はれ得る。小作人も蓆旗を掲げずに、竹槍を振ぎ出さずに、その運動を起し得る。少くとも流行の暗殺のやうなものは必要がなくなる。運動が有機的に進展してゐるイギリスで、暗殺や暴動の少いのも理由は明かである。

普通選擧に於いて有機的の働きが可能でないとすれば、モッブ的作用に出るのが必然である。日本の場合に右の前者によることが出來ないとすれば、後者によつて能ふだけの働きをしようとするであらう。然しそれは一部の人が恐れてゐるやうに惡い現象ではない。今日のモッブは、そのモッブ的精神が政治的に現はれる機關を有つてゐない爲めに、銃劍によつてそれを規則立てることになつてゐるが、普通選擧は銃劍に代つてその運動を處理する道具となる。議員の選出、政策の採否、國家的方針といふやうなものが、普通選擧を通じてモッブ的精神の影響を受けることは疑ひない。それを非常に忌むべきこと、恐るべきことのやうに思ふのは、今日でも其實彼等優越者が、モッブ的精神の不規律の現はれに動かされてゐることを忘れてゐるのである。若しそれが彼等の憂ふる通り、國家的禍であるならば、それを有機的運動に導く團體的行動の自由を許すがいゝのである。

普通選擧の實施は、それ故に、何れかの決定を爲政者階級に迫つてゐるのである。有機的機構を促進して、その作用を規則立てるか、モッブ的混亂を通じて、次第に有機的構成を取るべく餘儀なくされるか。その前者によるのが、後者によるよりも望ましいことであるのは、云ふまでもない。

飛んでもない心得違ひ

林 癸未夫

豫め斷つて置くが、私は毛頭普選反對論者ではない。併し私が之に贊成するのは、茶が無ければ湯でも我慢するといふ位の意味であつて、決して普選熱に浮かされてゐる一部の政論家や政黨員などのやうに、無闇やたらに普選を難有つて、これさへあれば政界の廓清立ち所に成るべしと言つたやうな信仰を有つ

てゐるからでは少しもないのである。今日の思想から言へば、普選問題の如きは既に現代人の常識であつて、之に反對したり、時期尚早を唱へたりすることが非常識なのである。それは別段むづかしい政治論や法律論を擔ぎ出すまでもない。吾々國民一般の生命、財産、自由、あまつさへ思想までも強制的に拘束されたり、剝奪されたりする法律といふものを造る吾等の代表者を選擧する權利が、一度牛肉屋へ入つても直ぐ飛んでしまふ程の端した錢を、一箇年間に納めてゐないといふだけの理由で、吾々から奪はれてゐるといふことが、常識的に、直覺的に沒條理なのである。それは恰も就學兒童の辨當のおかずが毎日牛肉や玉子でないといふだけの理由で、其兒童から普通教育を受ける權利を奪つてしまふのと、同じ程度の沒條理であり、非常識である。最早普選問題は理論を超越してゐる。唯それは今日の政治屋なるものゝ常識の有無を檢定すべき試驗問題として殘されてゐるだけのものだと思へば、それで可いのである。

併しながら吾々勞働問題の專攻者から之を見ると、我國に普選が直に實行されたからといつて、別段産業界の狀勢に變動があらうとは思はれないのである。況んやそれによつて議會の內容が一新せられ、政界の積弊が一掃せられ、無産階級に有利なる法律が續々制定せられ、國民の社會生活が安定し、勞働問題が公正な解決を與へられるであらうと豫期する者があるならば、それは飛んでもない心得違ひである。普選は決して萬能藥でないのみならず、實は藥の交らぬ唯の水である。渇する者は水を求める。だから水を與へるがよろしい。併し水を飮んで渇が癒えたからといつて、其者の營養不良が癒されるわけでもなければ、病氣が快方に向ふといふわけのものでもない。普選は非常識を常識に改悛させるだけの効能はある。併し唯それだけのものである。等しく常識を備へた人間でも、十人は十色の考へを有ち、百人は百様の方向に歩む。利害も感情もすべてが異つてゐる。從て彼等が如何に判斷し、如何に決定すべきかは、誰にも豫想のできない別箇の問題として殘されるのである。

早い話が既に普選の實行されてゐる國々の成績を一瞥すれば直ぐ分ることである。何れの普選國と雖も、國民として普選を實行したことを後悔してゐるものは恐らくあるまい。それは渇者が水を得たことを後悔し非常識者が常識を得たことを後悔する筈がないのと同様である。併し普選實行の結果として、新に選擧權を與へられた一般有權者の投票が、制限選擧當時に於ける少數有權者の投票とは、全く別個の人格及主義を有する議員候補者に向つて與へられるかと言ふに、なか／＼さういふわけには參らないのである。言ひかへるならば、制限選擧を普通

選擧に代へたからと言つて、議員當選者の人格が急に革つて、清廉潔白の士が多く選出されるとか、又彼等の政治上の主義が急に新になつて、忠實に民衆の意志を代表する人々が增加するとかいふ豫想は、一向實現しないのである。普選を實行してゐる英米獨佛の各國に於ては、成年の勞働者は殆と全部が有權者であつて、其數からいふならば最初から優に議員の三分の一乃至二分の一を選出し得る筈である。けれども實際は彼等によつて寧ろ意外に小數の代表者しか選出されはしなかつたのである。最近に於てこそ英國の勞働黨は下院の漸く四分の一を占めるに至つたけれども、此程度の成績を收めるがためにも、勞働黨と勞働組合とが過去二十年間の間斷なき組織的な大努力を必要としたのである。獨逸の社會黨は今日議會の約半數に近い位の勢力を擁してゐる。しかも此勢力は約五十年間の選擧戰の經驗と、熱心な不斷の宣傳とを以てして辛うじて贏ち得た成果である、成程是等の國々に於ける政治の實體は、最近數十年間に徐々として進歩したことは認め得るであらう、少くとも幾分かづゝは民主的政策が實施されて、勞働者保護立法が制定されたり、所得税が增加されたりしたには相違ないであらう。併しそれが全部普選實行の效果だと思ふならば、誤解之より甚しきはない。普選實施以前に於ても是等の政策は既に發達の氣運に向つてゐたのである。

由來選擧は數學ではない。普選法によつて選擧權が勞働階級の間に撒布されたからと言つて、それだけ勞働階級の代表者が選出されると思ふならば、是亦飛んでもない心得違ひである。例へば前に擧げた英獨兩國の例に見ても直に領解されることである。是等二國の勞働階級が數十年の昔に初めて選擧權を與へられた當時に於ける有權者數の、勞働階級以外の有權者數に對する割合は、今日と殆ど相違はないのである。それにも拘らず彼等が實際選出し得た其代表者は、最初僅々數名に過ぎなかつたのである。それが爾來度々の總選擧によつて、徐々に增加し、漸く今日の多數を得るに至つたのであるけれども、現在に於てすら尚彼等の有する選擧權の數からすれば遙に少數の代表者しか選出されてはゐないのである。英國最近の總選擧の結果に徴すると、勞働黨候補者の得た投票の總數は四百二十萬票であつて、當選者は百四十餘名である。此成績は英國勞働黨に取つては空前の大成功であるけれども、しかも右の票數はトレード・ユニオン・コングレスの會員總數よりは約二割少く、總勞働組合員數よりは四割以上少く、英國の勞働階級及其家族の總數よりは恐らく六割以上も少いであらう。今日世界各國中英國ほど國民の政治思想が發達して居り、又選擧上の弊害が少い國は

無いのである。又英國ほど勞働組合の組織が發達して居り、社會主義者や勞働運動者の言論の自由が認められてゐる國も無いのである。その英國に於ては戰後數年間に空前の大勞働爭議が幾度も繰返へされて、所謂階級鬪爭思想は倍々濃厚を加へ來つてゐる今日である。然るにその英國の今日に於てすら、勞働黨の贏ち得たる議員數は僅に全院の四分の一にしか達せないのである。若し英國の今次の選擧に於て、勞働階級の投票が悉く勞働黨の候補者に集中されたならば、少くも今回の當選者の二倍以上が當選しなければならなかつた筈である。それにも拘らず、僅に此程度の成功を以て滿足せなければならぬといふは何たることであるか。其原因は何にせよ、由來選擧なるものはそれほど非數學的なものなのである。既に英國に於てさうであるとするならば、米國に於て到底勞働黨なるものゝ成立し得ないことも、佛蘭西に於て到底社會黨が志を得難いことも、獨逸に於て到底社會黨が單獨に權力を掌握し難いことも、決して怪むを要しないのである。

顧て我日本の現狀を顧るに、今日普選運動の中心は在野の諸政黨と、一部の操觚者に在るやうであるが、彼等はそも〳〵普選によつて何物を得んと欲してゐるのであらうか。彼等にして眞に我國の政治を革新して、國民の社會生活を安定し、勞働問題に根本的解決を與へるの志があるならば、先づそれに相當するだけの經綸を有ち、主義を明にし、且具體的な綱領を公にして、弘く之を天下に宣傳すべきである。普選は政治の實體ではなくして、單に其手續である。政治の實體としての主義綱領は、普選問題を超越して、別に存すべき筈のものである。從て制限選擧制の下に於けると、普通選擧制の下に於けるとによつて、政黨の主義綱領に異同のあるべき道理は少しもないのである。果して然らば彼等は今日有する所の其曖昧不徹底なる主義綱領を實施するために、普選實施を必要とするのであるか。若しさうだとするならば、普選によつて國民の實際享有し得べき福利は絕無か、或は極微に過ぎないであらう。或は又彼等は普選實施の結果に鑑みて、其主義綱領に根本的革新を施すつもりなのであるか。若しさうだとするならば、彼等の大部分が落選して、今少しく人格あり、節操あり、誠意あり、見識ある者が新に選出されなければ、できない相談である。日本の諸政黨が現在の主義綱領に執着してゐる間は、普選は國民に取つて無意義なる手續の變更に過ぎないし、又彼等が現在の主義綱領を革新しやうとするのならば、先づ彼等自らが政界から驅除された後でなければ、普選は其効果を舉げ難い。所謂新酒は古嚢に盛るべからずである、現在普選を主張しつゝある政黨員が悉く落選

し全く新しい議員が新しい政黨を組織して、新しい主義綱領の下に天下の輿望を收めて、議會に多數を制するか、或は少くも有力なる反對黨としての職能を全くし得る程度に發達した後でなければ、普選が政治の實體を革新する力とはなり難いであらう。しかもそれは果して何の日か。少くも借すに數十年の日子を以てしなければなるまい。我日本の國民よ、靜に急げ!

御心配御無用

水野廣德

○

苟くも文明國を以て自ら任じ、立憲政體を立てゝ代議政治を行はんとする國に於て、普通選擧が理論上正當にして、實際上必要なるは最早や議論の外である。世界三大國の一を以て自ら許す大日本帝國に以て今尚ほ普通選擧の行はれざるは、國家國民の耻辱蓋し焉より大なるは無いであらう。今日臆面もなく普通選擧に反對するものは、某花柳病藥の廣告ぐらゐに過ぎない。花柳病藥と普通選擧、共に腐敗墮落せる今の日本の社會と政界とを救ふに無くてはならぬものである。此の點に於て廣告主の皮肉に敬服する。

絕對多數の威力を藉りて國民の熱烈なる要求を無視し、年々の議會に於て普選の實施を阻止し來れる政友會と雖ども、最早や正面より之に反對するの勇氣を有しない。唯僅に尚早論の蔭に隱れて苦しき息をついて居る。抑も彼等の唱ふる尚早とは何ぞや。其の說く處を綜合すれば畢竟するに、法律に依つて自立自活し得ると認められたる丁年以上の日本男子少くも千五百萬人中、現在選擧權を有せる僅に三百萬人以外の大多數の國民は、國家の政治に參與するの資格なしと云ふに歸決する。自己の生活を支配すべき國家の政治に參與するの資格なき國民は、資格ある國民に比すれば劣等なる野蠻國民であると云ふことが出來る。現在世界の文明國とか一等國とか稱せらるゝ國にして、普通選擧に依り國民の大多數に參政權を與へざる國は、獨り我が大日本帝國あるのみである。之を以て我が日本國は他の諸國に比すれば野蠻國である。日本國民は他の諸國民に比すれば野蠻國民であると云はねばならぬ。吾人の愛する日本國と日本國民とは、不合理なる制限選擧に依りて自己の地位を保持せんとする一部の特權階級と、自己の利益を擁護せんとする一部の政治家と、傳統因襲に拘はれて進むを知らざる一部の保守的感

情家との爲めに、野蠻國野蠻國民であると、世界に向つて聲明せられをるのである。普選の實施が我が國に於て尙早であるか、將た既晩であるかは、要するに見解の問題である。國家と國民とは、一部の利己主義者や保守主義者の見解に依りて、而上に野蠻の刻印を打たれては溜まらない。日本國民にして野蠻國、野蠻國民たることを恥とするならば、是等利己主義者や頑冥者の謬見を打破し、自ら進んで參政權を獲得すべきである。

日本人は口癖の如く米國の排日を憤慨し、又近時頻りに人種平等を叫んでをる。吾人も亦米國の排日を惡み、人種の平等を主張するものである。併しながら翻つて自ら省みれば、我が國より米國に移住せんとする勞働者の大部分は、本國たる日本に於てさへ參政の資格なしとせらるゝ野蠻人である。然るに米國の市民は悉く普通選擧に依る參政權を有して居る。本國に於てさへ參政權を與へざる劣等人間に對し、外國に向つて市民權參政權を與へよと責むるは、餘りに我儘勝手なる要求ではないであらうか。素より米國の排日には政治的、經濟的、人種的等種々複雜なる因由がある。假令日本に於て普通選擧を實施したとて、之に依つて直に解決する問題ではない。併しながら物の道理として、排日抗議も、人種平等も、先づ日本自ら國民に參政權を與へ、人間平等を實行したる後にあらざれば、米國に對して文句は言へぬ筈である。

國家に奉仕することが國民天命の義務であるならば、國政に參與することは國民天授の權利であると云はねばならぬ。義務のみを課して權利を與へず、而かも利益は一部の特權階級に於て獨斷しながら、國民に向つて義勇奉公を強ひるは聊か蟲が良過ぎる。政治の眞の目的は、國際的にはヨリ善き國家生活、國內的にはヨリ善き個人生活を得んが爲めである。之が爲めには國民全體を基礎とし、背景とし、後援とする力强き政治が必要である。產業の發達も、教育の振興も、政界の革正も、扨ては外交の制限も、國防の充備も、煎じ詰むれば普通選擧に依りて國民を政治的に自覺せしむることに歸着する。權利無き處に責任は生じない。參政の權利なき者に對し、假令義務は强課し得るとするも、責任を自覺せしむることは出來ない。眞に國を愛する精神は傳統的迷信を離れたる理知的責任觀念に基礎を置かねばならぬ。

併しながら政體の根本に溯り、日本の國民性は代議政治に適せず、宜しく專制政治を布くを可とすと說く者あらば、現在の議會政治に愛想の盡きたる吾人は一考の餘地が無いでもない。但專制政治を行ふ爲めには先づ憲法を廢棄若くは中止したる後

で無ければならぬ。苟くも憲法政治を布く以上、否でも應でも議會に依らなくてはならぬ。今日若し普選を斷行する政治家あらば、其の官僚たると、軍閥たるとを問はず、國家將來の幸福の爲め一時の權宜として吾人は之を歡迎するに躊躇しない。

○

一部の頑冥なる特權階級が反對するにせよ、一部の利己的政治家が尙早を唱ふるにせよ、普通選擧の實施は今や唯時間の問題である。而かも極めて短き時間の問題である。具體的に言へば、一年の後か、五年の後かの問題である。如何に柔順なる、如何に辛棒强き、如何に無自覺なる日本國民と雖ども、最早や其れ以上、天授の權利の剝奪を認容せぬであらう。左れば條理明白なる普選の必要を繰り返へすよりも、普選實施の曉に於ける我が政界の新面目を豫想する方が興味多き問題である。

普選反對論者や、普選尙早論者が、其の理由として口にする處は、政治知識に乏しく、政治觀念低き一般國民に選擧權を附與する時は、所謂衆愚の輿論に依りて國政を左右せらるゝに至り、爲めに國家の堅實なる進運を妨げらるると云ふにある。流石は普選は階級破壞を企つる危險思想であるなどゝメイ論を吐く總理大臣は最早や居なくなつた。一體普選に依る衆愚政治を恐るゝ普選反對論者や尙早論者は、現在の政治狀態を何と見て居るのであらうか。少賢政治か、少愚政治か、二者其の一を出でぬであらう。如何に鐵面皮にして、如何に自惚强き彼等と雖ども、現在の議會と、現在の選擧界とを見れば、よもや少賢政治とは言ひ得ぬであらう。是に於てか現在の政治は少愚政治である

動物園化し、爭鬪場化したる現在日本議會の墮落は今更說くだけ野暮である。而して斯くの如き議會墮落の原因は歸する處選擧界の腐敗である。今の日本の選擧界には政治上に於ける主義もなく、識見もなく、唯「どうか一票やつて下さい」の投票乞食と「一票、三圓―五圓―七圓」の夜店賣買商人の集團である。之に加ふるに不法なる官憲の干渉脅迫もあると云ふことである。しかも斯くの如き墮落と腐敗とは制限選擧に伴ふ必然の結果である。議會の墮落、選擧界の腐敗は今や其の極點に達して居る。最早や此れ以上墮落腐敗の仕樣が無いであらう。現在日本に於ける議會政治の實狀を見れば、何人と雖ども議會否認論や、直接行動說に耳を傾けざるを得ないであらう。

衆愚政治と少愚政治と何れが優れるやは容易に斷定することが出來ない。併しながら立憲の精神より云へば、衆愚政治は少愚政治よりも合理的である。元來普選に依りて衆愚政治を出現するや否やは未知の問題に屬するも、少愚政治の弊害と墮落と

は既存の事實である、殊に現在の少愚政治は制限選擧の産物であつて、未だ必ずしも日本國民の政治知識の缺乏ゝ政治觀念の低劣に出るものとのみ速斷することは出來ない。故に普通選擧を實施すれば、制限選擧の通弊たる投票乞食と投票糶賣との弊を減少排除し、或は衆賢政治を實現することが出來るかも知れない。元來制限選擧に於ては有權者の數少なきことが、陋劣なる投票乞食と投票糶賣とを誘發する主なる原因である。抱負もなく、定見もなく、唯叩頭と金力とに依りて選出せられたる議員に向つて善良なる政治を望むは、夫れこそ木に緣つて魚を求むるよりも尙ほ無理な註文である。

之を以て吾人は普通選擧を實施し、官憲の取締を嚴正にせば、假令衆賢政治とまでは行かずとも、墮落腐敗の極にある現在の選擧界を革正し得ることを信じて疑はざるものである。政治を革正するには先づ議會を革正せねばならぬ。議會を革正するには先づ選擧界を革正せねばならぬ。而して選擧界を革正するには普通選擧に依る外、今日他に執るべき道はない。普選を實施するも尙ほ議會を革正し得ずとすれば、其時こそ、日本國民は自治制運用の能力無きものとして、憲法中止も可なり、議會廢止も亦可なりであらう。

○

然らば普通選擧を實施したる曉に於て果して如何なる新現象を我が政界に發生するであらうか。名は普選と稱するも、其實尙ほ幾多の制限を免れない。一躍して女子に參政を許すことも困難であらう。丁年未滿の者に投票權を與ふる譯にも行かぬであらう。左れば今假りに丁年以上の男子に選擧權を與ふるとせば、概算に於て千五百萬人、二十五歲以上とするも尙ほ千二百萬人を下らぬであらう。故に有權者の數は現在三百萬人の四倍乃至五倍に增加することゝなる。制限範圍を廣くし且つ各種の失權者を控除するも尙ほ三倍を下ることはあるまい。是に於て普選實施の曉に於て先づ政界に起るべき大波瀾は既成政黨の地盤爭奪並に開拓戰である。主義政策に於て特に異なる處なく、主として地方の利害と因襲と感情とに依つて集結せる日本の政界に於て、何れの政黨が普選に依つて最も大なる勢力を加ふるかは、吾人門外漢の觀測し得ざる處である。唯普選の實施に對して最も努力したる政黨が最も大なる利益を受くることだけは略ぼ想像するに難くない。此の點に於て政友會は最も不利の地位に立てるものである。同時に同黨が過去の行掛り上目下尙早論を唱へながら、內心自黨の手に依つて普選を實施せんと焦慮せる所以である。加之多年政權を握つて我意を恣まゝにしたる政友會は、比較的正義觀念に富みて未だ深く因襲に捉はれざる

地方青年並に知識階級の反感强烈なる爲め、果して現在の如き老大なる勢力を政界に維持し得るや否やは大なる疑問である。併しながら全國民の六割以上を占むる農民を基礎とし、多年有ゆる利權を餌として開拓したる同黨は尙ほ當分の間は依然として第一黨たる地位を失はぬであらう。但し同黨にして飽く迄普選を阻止するに於ては是れ明かに自殺である。新政黨たる革新俱樂部は青年並に知識階級の參加を得て憲政會と第二黨を爭ふに至るであらう。既に普選實施に伴ひ、新たに勞働黨、農民黨、社會黨等の諸政黨出現し、何れも議會に若干の議席を占め、新鮮潑溂なる血精を議會に注入するに至るであらう。要するに普選に依つて新に選擧權を得るものは、大部分貧民と青年とである。此の兩者の共鳴を得る黨派が將來の大政黨となるの運命を有して居る。而して現在の如く、主義もなく、政見もなく、唯利權漁りに沒頭せる所謂政治屋なる職業的議員の大部分は議會より驅逐せられ、實力ある新鋭の議員が議會に送くられるであらう。

以上の觀測は當るも八卦、當らぬも八卦である。要するに議會は現在の如き資本主義單一の色彩を脫して、有產無產の經濟的階級對立と、保守進步の思想的對抗とが明確となり、同時に政黨も亦從來の灰色的主義政策を以て世間を誤魔化すこと能はず、各黨特自の色彩を鮮明にするの必要を生ずるであらう。從つて利害と感情とに依つて集りたる朋黨的既成政黨は自ら分解作用を起し、新に主義政策に依る眞の政黨を促成するに至るであらうと信ずる。

普選實施に依りて衆議院の勢力は大に增大し、政府の基礎は確固となり、最早や議會を無視し、民意を蔑視し、二三元老の茶飲話に依つて內閣を製造する如き弊害は見られなくなるであらう。卽ち政界に於ける元老勢力の絕滅である。官僚軍閥內閣の絕滅である。同時に貴族院樞密院も亦姑小姑の燒き餅根性を以て內閣を意地目ることは出來なくなる。是れ貴族院や樞密院の頑固連が自己權勢擁護の爲め、極力普選に反對し、利權黨たる政友會亦彼等の鼻息を窺ふて尙早論を唱ふるものとの非難ある所以である。

○

之を要するに普選の實施に依りて直に堯舜の善政を望むことは、今の社會狀態に於て不可能である。併しながら反對論者の唱ふる如く、普選に依つて國政を混亂し、國家の進運を妨ぐると爲すは、自ら爲めにせんとする讒言にあらざれば、時代に盲なる杞憂である。或は一部特權階級の不當なる既得の利益を侵害することありとするも、一般國民の利益の爲めには之を犧牲に供するも亦已むを得ぬであらう。殊に普選に依つて政界を

革正し、憲法の裏面に跳梁せる不合理なる魔力を驅逐し、全國民後援の下に責任ある政府をして內外に對する政策を斷行せしむるを得ば、內には國民の幸福を高め、外には國運の進展を期することが出來る。

凡そ政治の要訣は「斷」である。今の日本の政界に於けるが如く姑小姑多くして、政府がアチラに氣兼ねし、コチラに遠慮し、所謂踏跙逡巡左支右吾して因循決せざる如きは、生きた人間を支配する政治には禁物である。政府をして能く斷ぜしむるには普選に依つて國民の大多數を後援とすることが必要である。現內閣が綱紀肅正、物價調節、財政緊縮を唱へながら、毫も其の成績の擧らざるは、諸方に氣兼遠慮して「斷」の力を缺ける爲めである。內外多事多難なる今の日本に必要なるものは全國民の自覺的協力である。國民をして自覺的に協力せしむるには、國政に對する責任を全國民に分擔せしめねばならぬ。今や日本國民中には政治の墮落に絕望して「勝手にしろ」と自棄するものが次第に多くなりつゝある。日本の衰退を救ふものは唯普選に依つて國民の心臟に新血精を注射するの一事あるのみと信ずる。加藤首相たるもの、十七年前日本海の海戰に於て、大膽不敵なる敵前回頭を敢行したる當年の勇と斷とを以て普選を斷行し、沈滯萎微せる日本帝國を世界の前に回頭せしむるの意氣は無いであらうか。加藤首相にして能く普選を斷行せば、唯此の一事のみを以て大正の大政治家として永く國民の欣慕を受けるであらう。どうせ永くもあらぬ內閣の命、玉碎を期して最後の花を飾つたら、どんなものであらう。(終)

普選に賴るは勞動階級にとつても賢明なる常道

安部磯雄

普通選擧が實施せられた曉には社會の各方面に大なる影響を及ぼすのは明かな事實である。第一に其影響を受けるのは政治上であり、又普通に云ふ社會上にも引いては經濟上にも普通選擧の影響が及んで來るに相違ない。之れを玆に一々述べる事は長くなるが、概括的に普通選擧の及ぼす影響を簡單に云ふならば、それの生ずる結果はデモクラシーの理想の實現である。即ち普通選擧それ自身がデモクラシーであるから、それが實現されるやうになれば社會の各方面にデモクラシーの思想の漲つて

來るのは當然である。普通選擧に於ては婦人を除いては總ゆる定年以上の男子が投票權を持つ。そこには何等の差別と云ふものがないので、如何に富む人、貧しき人と雖も、又如何に人々の間に智識上の隔りがあつても、誰れもが投票の事柄には同一の權利を有つのであるから、從つて總ての方面に平等の思想が盛になり、又同時にその平等が或程度までは實際に現れて來る事は疑はれない。併し今私は玆では普通選擧が實施された曉に、勞働運動の方面に如何なる新局面が展開されるかと云ふ事を主として考察して見たいと思ふ。

それには先づ出發點として今日の勞働運動は如何なる方向を取つて進みつゝあるかを考へる必要がある。換言すれば世界に於ける勞働階級は、無論日本の勞働者も同じ方向に進みつゝあるのであるが、彼等は何を希望し、要求して居るのであるか。彼等はたゞ資本家と衝突するといふ丈けで、階級鬪爭をやつて居ると云ふ丈けの事ではない。言葉は種々あるであらうけれども、結局彼等の眞に希望し、要求する所は勞働階級の解放(エマンシペーション)と云ふ事である。少くとも今迄資本家階級の下に於ける勞働階級の生活は一種の奴隷の生活であつて、それは奴隷制度の形を變へたものに過ぎなかつた。そこで勞働者の側から云へば勞働者は眞に解放された自由とならなければならぬ。それを實現する爲めには今日のやうに資本家に傭はれて賃金を貰ふやうな制度は廢さなければならぬ。彼等の言葉で云へば賃金制度を破壞せねばならぬ。それを破壞するのには何うするかと云ふと、自分達が生産機關を持たねばならないから、工場とか、機械とか、同時に原料を買ふ資本金を必要とする。そして自分が工場なり、機械なりを使つて自ら製造する。之れが農業であるならば自分が土地や資本を持つて始めるのである。一言にして云へば彼等は資本家といふ階級を必要としない。寧ろ資本家階級の存する事が彼等の今日の境遇を來して居る原因であるから、資本制度を廢して産業的デモクラシーを行ふ事が彼等の理想となるのである。之れを以て見れば勞働階級の目的は明白であつて、賃金制度の破壞、資本制度の廢止は今日世界に於ける勞働運動の大勢と云つても不可がないであらう。尤も中には無自覺な狀態に在る勞働者も少くはないし、保守的な考へを持つて居る者も隨分ある。獨逸に於ては舊教の信仰を持つ勞働者は極めて保守的で前に述べたやうな自覺を有して居ない。併しながら世界の大體の形勢を見れば勞働階級が今云つたやうな自覺と目的を持つ事、換言すれば彼等の中の大部分が社會主義者であり、又其中の幾部分が共産主義者である事は爭はれない。只之等の勞働者の希望が俄かに實現されるかどうかは自ら別問題であるが、併

し今日勞働階級の間に社會主義的思想の溢れて居る事實は打ち消す事が出來ない。外國は兎に角として、日本の勞働運動に携はる自覺せる勞働者に接觸して意見を聞けば、彼等の大部分は社會主義者か共產主義者であると信ずる。だから勞資協調とか、妥協とか云ふ事は今日の勞働者の耳に入る言葉ではない。彼等は勞資協調で勞働問題は解決出來ると考へて居ない。

以上述べた所が大體に於て今日の勞働階級の思想であるが、然らば彼等が普通選擧に對する態度はどうであるかといふに、寧ろ冷淡な態度をとつて居る。私から見れば勞働者の目的を遂行する爲めには普通選擧はなくてはならぬ準備行動と考へる。今でこそ勞働階級は普通選擧に對して冷淡であるが、若し普通選擧が無事に議會を通過すれば、日本の勞働階級も政治運動を重要視するやうになるであらうと思ふ。今の所では普通選擧に冷淡であるから政治運動を顧みないで、經濟運動で行かねばならぬと云ふ風であるが、只それ丈けで政治運動に見切りをつけて居るとは考へられない。然らば何故に勞働階級は普通選擧に對して冷淡であるかと云ふに、種々の原因もあるであらうが、其一つは今日の普選運動が一寸成功の見込がないといふ事、見込のないものに何時までも掛り合つて居るのは愚であるといふ彼等の性急な考へから寧ろ經濟運動に行つた方がいゝといふ事になる。直接行動に依つて、ストライキに依つても彼等の主張を貫徹する事が出來る。勞働階級が大なる團體を作るなら政治に依らず團結で彼等の目的が達せられるといふ考が、彼等に普通選擧に對して冷淡な態度を取らしめたのであると思ふが、普通選擧そのものに反感がある譯ではないから、愈々普通選擧が實施される事になれば勞働者の態度は違つて來るに相違ない。彼等にとつて有利な手段を無視する譯はないのであるから、彼等自身が普選運動の爲めに働く、働かぬは別として、既に他の力によつて普通選擧といふ一の關門が開かれた以上は、そこに或程度まで政治運動を認めるやうになるであらう。歐米に於ける彼等の運動を見ても分るのであるが、直接行動といふ事は云つて居ても、一旦選擧權を握るやうになれば或程度までは政治運動もやるのである。で、さうなれば結局はどうなるかと云ふに、愈々普通選擧が實施された曉に於ける政界の新局面は勞働黨の組織である。勞働階級が其代表者を議會に送る事になり、選擧毎に其數が增えて行くやうになれば勞働黨は益々盛になる。さうなれば勞働階級も興味を感じて來るであらうし、一方に於ては猶直接行動の目的は抱いて居ながらも、出來る丈けは政治運動もやる事になるであらう。周圍の事情が斯くの如くになれば日本の政治界は今迄の世態とは全く趣を異にするに至る

は明かである。今迄の政友會にしても、憲政會にしても、又最近に出來た革新俱樂部にしても、之等の政黨は皆資本家階級の背景の下に組織されたものであつて、政黨間に於ける爭と云ふやうなものも實際政治の大局に觸れない、只資本家丈けの間に於ける小競合に過ぎなかつた。若し普通選擧が實施されると、先づ打擊を被るのは之等の既成政黨であつて、既に之等の政黨に對しては今日國民が愛憎をつかして居るのであるから、其時になれば到底分裂は免れない。只之等の既成政黨が全滅して了ふといふ事は考へられないとしても、兎に角一方に在來の資本家的政黨に對立して勞働黨が擡頭して來る事は爭はれない事實である。今日普通選擧を唱へて居る憲政會、革新俱樂部に屬する政治家達も、普通選擧の實施後には其中の少數は殘るであらうが、多數は自滅するより外はないと見てよい。尤も彼等が舊來の政黨を脫して勞働黨に入る勇氣と見識があれば別であるが、さうでない限り今のまゝの彼等であつては再び議會に出る機會はない。斯う考へて來ると今日資本制度の擁護者が普通選擧に反對するのは當然と云はねばならない。自己階級の利害を度外視して、單に日本國家の爲めと考へるなら兎に角、現在の自分達の地位を思ふならば普通選擧に贊成する事は自らのために墓穴を掘るやうなものである。從つて現在の狀態に於ては勞資階級對立の形勢は少しも緩和されて居ない。勞資戰爭に於ては普選問題は天下分目の關ヶ原の戰爭である。關ヶ原の戰爭が天下の局面を一新した位には普通選擧も亦日本の社會の局面を一變するに相違ない。たゞ關ヶ原の戰爭の後で德川が直ぐ天下を取つたやうな譯には行かないであらうが、兎に角普通選擧が實行されゝば勞働階級の勝利であつて、軈て彼等の目的の遂行される第一階段であると考へざるを得ない。

併しながら以上述べた私の考へに對して、勞働階級の人達の間に於て私と同じやうな考を持つて居ない者も多いであらうと思ふから、私はもう一度玆に私自身の立場から其信ずる所を明にして置く必要を感じる。私は政治運動を無視する事が出來ないと同時に又經濟運動を無視する者ではない。たゞ順序から云へば政治運動は普通の道であり、經濟運動は特別の場合に行はれるものであつて、政治運動が所謂常道であるならば、經濟運動は變道であると云へる。今日勞働階級の間に於ても議會政策に依つて彼等の目的を達しやうと考へて居る者もあるが、又議會政策を排して直接行動に依らうとする者も少くはない。何故議會政策、卽ち政治運動を重要視しないのかと云ふと、其理由の一は、今迄の勞働者の政治運動は何時も結果が面白くなかつた。佛蘭西に於ても、英國に於ても、勞働者の代表者が內閣に

入つた例は少くないが、內閣に入つて見ると其以前には立派な勞働階級の代表者であつた者も去勢されて無氣力になつて了ふ者が多く、到底勞働階級の理想を實行する事は出來なかつた。で勞働階級はなまじい資本家の內閣に飛び込む事は不利益と考へるやうになつた。また投票に依つて多數を集める事は難かしい。英、獨、佛の各國に於ては普通選擧は長く行はれて居るけれども、勞働階級は其人數の多いのに比較して、議會に多數を占める事が出來なかつたので益々議會政策を重要視しなくなつた。更に此勢を助長したものは露西亞革命であつた。之れは議會政策に依らずして寧ろ直接行動に依つたものと見て差支へない。露西亞革命の起つた原因に就いては種々の見解もあらうけれど、兎に角革命が成就してから久しい年月が經つて居る。此例が眼前にあるために我國の勞働階級の間には益々議會政策に依る事を迂濶なりとし、もつとキビ〳〵した遣り方をしたいと考へる者もあるやうである。併しながら私の考へる所に依ると、議會政策と直接行動とを比較してどちらが可いか惡いか、どちらが有效であるか、ないかを定める事は困難であつて、譬へば露西亞や、獨逸や、英國を例にとつて見ても、勞働階級の目的を達した事に於ては露西亞が魁をしたけれども、併し今日の英國の勞働運動などを見ると英國は議會政策で行かうと考へて居るらしいのであつて、其英國の議會政策が失敗であるかどうかは今俄かに斷言する事が出來ない。早いと云ふ點から云へば勞働階級の目的を達した事に於て露西亞が一番早く、英國は立遲れの氣味であるが、併し之れも年月を經なければ分らない事であつて、丁度十哩や二十五哩のマラソン競走に於てスタート丈けを見て最後の勝利者を決められないやうに、今では英、獨、露の三ケ國がスタートを切り、露西亞が一番早いが、五年十年後に果して露西亞が最後の勝利者たり得るかどうかは疑問である。今普通選擧と勞働運動の關係を一層深くたどつて見るならば、議會政策と直接行動の是非優劣を定めるに當つて、我々は今少しく思慮深く之れを考へる事が出來るであらう。總ての者が選擧權を有した後、政治に對して興味を感じ、之れを研究するやうになると云ふ點に於て、普通選擧は國民に政治教育を與へる上に一番有效である。我々は二十年も前に普通選擧の行はれる事を當然としてこれを唱へた者であるが、今日普通選擧を唱へて居る政治家達の中でも、二十年前には之れに反對した、其反對の要點は、國民が普通選擧を要求して來るやうな形勢になれば、之れを與へてもいゝが、要求しない者に與へる必要はない、と云ふのであつた。それに對する私の答は何時も斯うで、普通選擧が政治教育に必要なるは恰も人間教育として義

務教育が必要なるが如きである。義務教育は國民が要求しなくとも國家が之れを授けて居る。國民が假令要求しなくとも普通選擧が政治教育に必要であるならば國家が進んで與へるべきである。若し普通選擧が實施される事に依つて勞働階級が今後五年なり、十年なり政治教育を受ければ彼等は政治を理解するやうになるし、又一方に於て彼等の勢力に依つて勞働組合が公認されるから其團結に依つて彼等が訓練される事は少くない。英國の議會に送られた百四十何人の勞働階級の代表者は、勞働組合に依つて訓練され、政治を解するやうになり、今では議會に於て資本家代表者と太刀打ちが出來るやうになつたのである。此點に於ては英國や獨逸が露國よりも遙かに優つて居るのであつて、英國人や獨逸人の長い間の訓練は尊いものでなければならない。此政治的訓練を有する者が自己の手で國家を經營するやうになれば從來よりも遙かに好結果を擧げる事が出來やう。露西亞に於てはレニンとかトロツキーとか純勞働者でない智識階級の人が牛耳を執つて居るが、若し英國に於て勞働階級が天下を取るやうになれば純勞働階級のヘンダーソンとかスマイリーと云ふ人達で國家を經營する事が出來る。彼等が斯くの如くにして今後の政治界に於て立役者の地位を占めるやうになる事が可能である事に鑑みるならば、今日世界の勞働運動に於て經濟運動のみを執つて政治運動を顧みない事は勞働階級の爲めに果して得策であるかどうか大に考慮すべき問題であると思ふ。

我々は日本の勞働階級に對して同情と期待を持つ者であるが、今日假りに日本の國家を勞働階級の手に渡したとしたならば、未だ其處に不安を感ぜざるを得ない。彼等が將來實際政治に携はる迄には猶多くの政治的訓練が必要である。私が今日本の勞働階級に希望する所は、政治運動と云ふ常道の存する限り之れを無視せず、出來る限り議會に勞働階級の多數を占める事によつて最後の勝利を得る方法を執る事である。併し若し茲に或特別の事情が起り直接行動に出る場合があるならば必しもそれは勞働者にとつて不利でないかも知れない。さう云ふ場合に直接行動を絶對に否認する事は出來ぬかも知れぬが、變道は非常の場合であり、常道のある限りそれを踏む事が賢明な途ではあるまいか。常道は政治運動であり、それが最も有効に行はれる道は普通選擧であるから、そこに多少の異論はあるにせよ、之れを無視する事は出來ない。此普通選擧の關門を越してから勞働階級は又大いに考へねばならないのである。

◇紳士學生其他何人にも必用の現代哲學の鳥瞰圖とも云ふべき書

渡部政盛著

最新哲學辭典

最新刊

（本書の六大特色）

（一）現代文化民衆の哲學慾を充すを目的として編纂したる事（二）文章平易記述繁簡宜しきを得一讀直ちに其の要點を捕捉し得る事（三）内容は哲學概論・東洋西洋哲學史・倫理學・東洋西洋倫理學史・倫理學・美學・宗教・社會哲學・經濟哲學は勿論・生物學・心理學・哲學藝術上の最近思潮等特に現代哲學の記述に萬遺憾なからん事を期す（四）所謂廣義の哲學以外現代の文學藝術社會問題經濟問題政治問題婦人問題等にも亘り其の重要なる記述は總てこれを收めた事（五）紳士學生受驗者の便をはかり重要なる史上の問題は詳述した事（六）文化生活へ奉仕として正價を最低至廉ならしめ其の普及を圖つた事等要するに本書は弊館が現代文化人に瞬刻も缺く可らざるものを最低安價で提供し推奬する所以である。

●菊判最上製美本全壹冊 背皮箱入紙數六百餘頁

正價金五圓八拾錢

送料廿七錢 滿鮮六拾錢

小林一郎新著

七部集連句評釋

（好評激甚）

大阪朝日批評

「芭蕉翁の一生」「奥の細道評釋」等を公にした小林氏が俳諧研究の初學者が最も難解とする七部集中の連句の意義とその作意等を一々平易通俗に講述した著である。卷頭には芭蕉と七部集との關係並にその門下との交渉などについて親切な紹介が附てある。初學者には有益のものである。

四六判最上美本 全一冊約九百頁

正價金參圓九拾錢

送料十八錢

◇◇發行 東京市神田區表神保町七

◇◇兌 振替貯金口座東京八七貳番

大同館書店

◇◇◇◇

文學博士 瀧精一著

文人畫概論

定價二圓 送料拾七錢

挿畫拾五葉 菊判上製

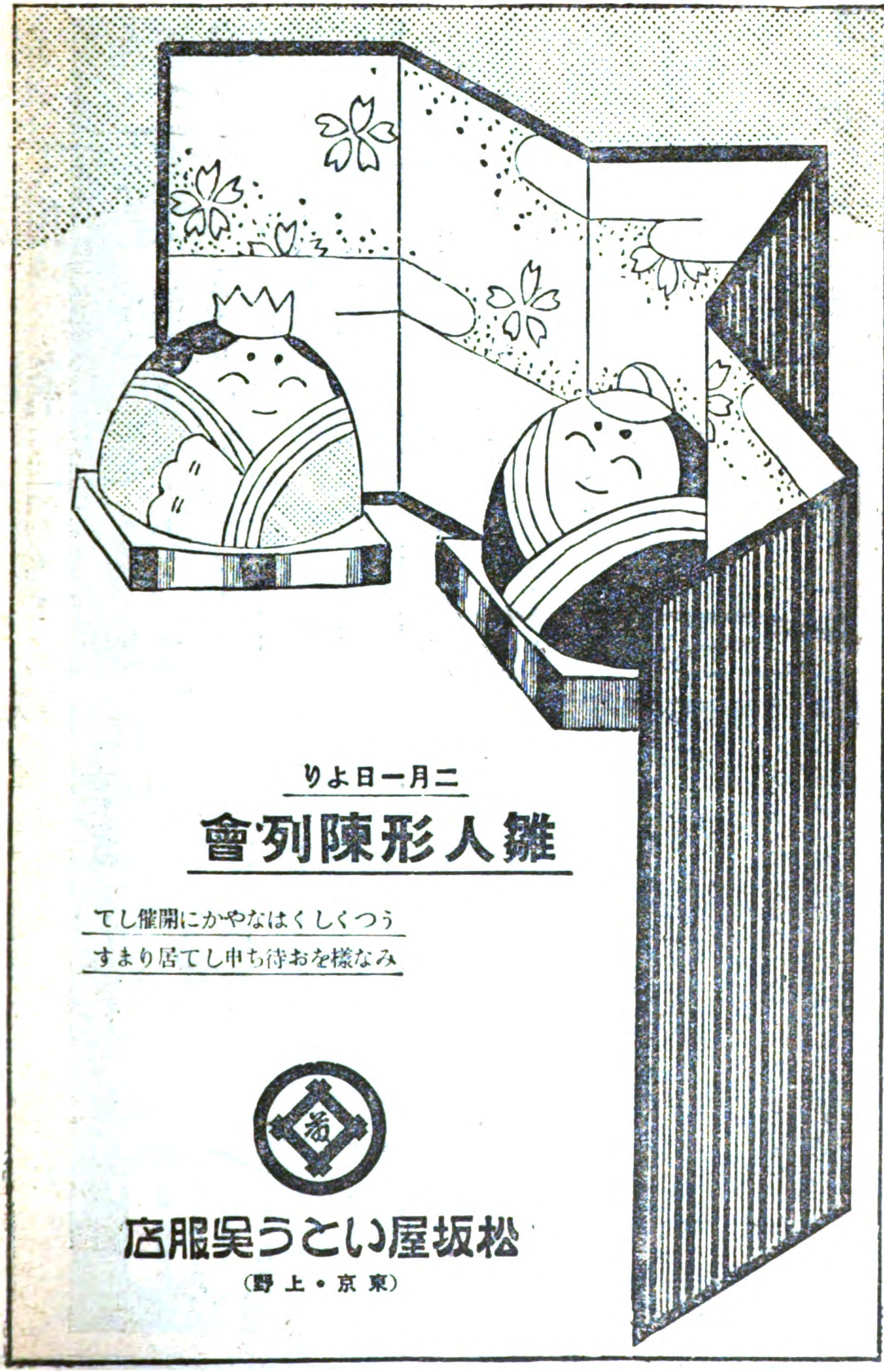
最新刊

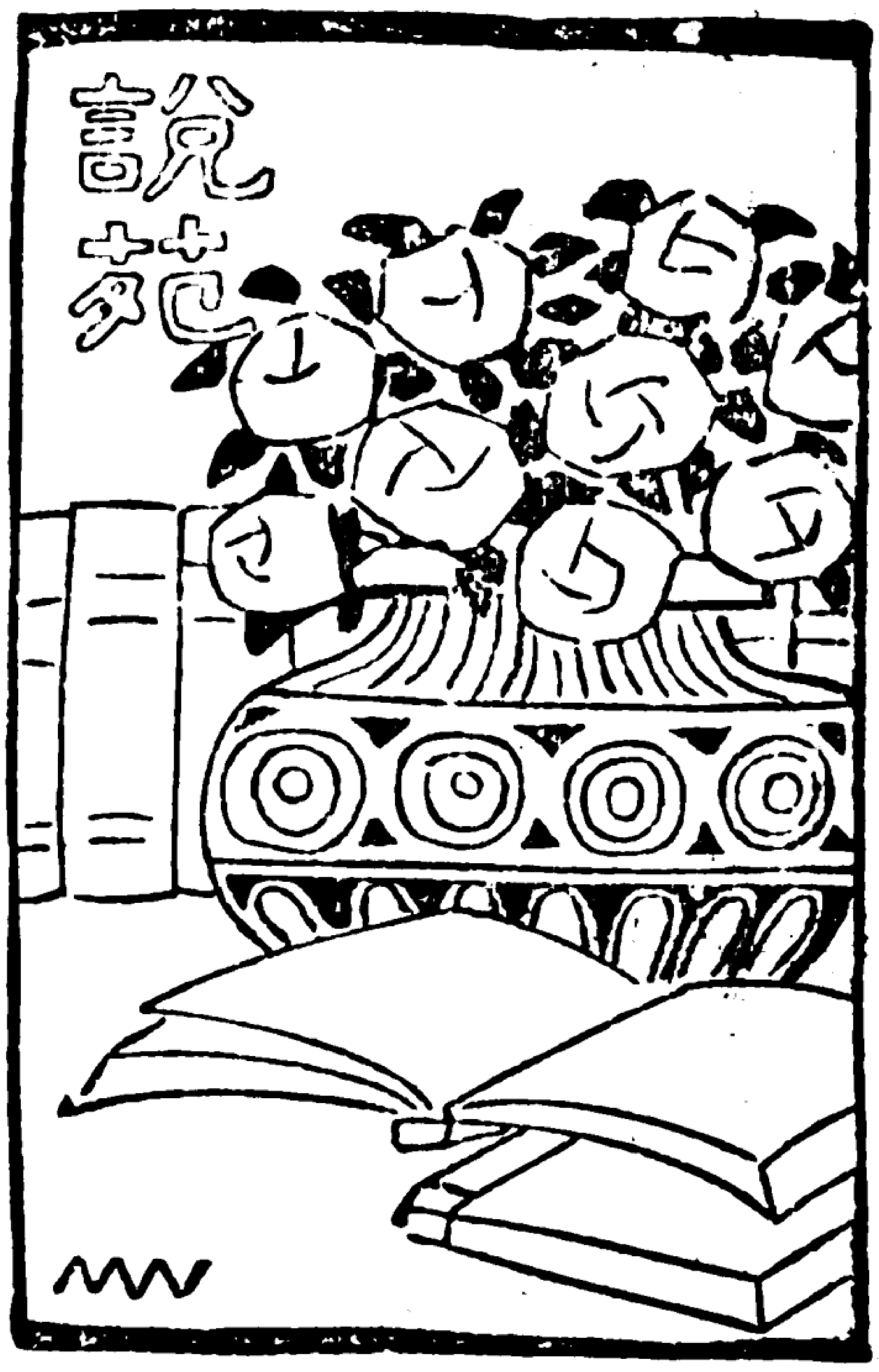
文人畫の流行今日より甚だしきはなく、またそれほど喜ばしく美はしきことはない、されど悲しいことには文人畫の概念を得るの一書だにないことだ、斯界の第一人者瀧博士は、深くそれ等の缺陷を遺憾に思ひ、本年東京帝國大學にて「文人畫概念」てふ趣味深き講演をなされた、此書は實にその講演を基礎として(一)文人畫の起源(二)文人畫の流派化(三)文人畫の原理(四)文人畫と南畫(六)文人畫の精華(六)將來の文人畫を說いたものだ、挿繪ゞ麗しきコロタイプ十五圖を挿入したれば、美術の國の人々が必ず一讀せではすまぬ含蓄多き著書。

谷崎潤一郎著 **愛すればこそ** (四十三版) 定價壹圓六十錢 送料十五錢

東京芝區愛宕下町 **改造社** 振替東京八四〇二

卑猥な廣告の申込みは謝絕す 中央公論社


二月一日より
雛人形陳列會
うつくしくはなやかに開催して
みな様をお待ち申して居ります
松坂屋いとう呉服店
（東京・上野）



續近世名匠傳

村松梢風

狩野芳崖

(一)

狩野芳崖が、郷里山口縣長府の家を畳んで、妻と共に上京したのは、明治十年十月のことであつた。文政十一年生れの芳崖は丁度五十歳であつた。

東京には、同藩出身の先進後輩が澤山居た。また、橋本雅邦をはじめ勝川塾當時の同門の友人も多少は殘つてゐた。が芳崖は、父狩野晴皐の門人藤島常興が、現在では商賣替へをして、京橋で敎育用の物理機械の製造販賣を營んでゐるのを賴つて行つて、一時其處へ夫婦で身を寄せた。それから間も無く矢張り常興の世話で、木挽町の裏屋にさゝやかな住居を借りて引き移ることになつた。

芳崖の上京の目的が、畫壇に志を伸べようとするのにあることは言ふまでもないことであつた。けれども、さういふ目的を遂げようとするのには、此の時代程不適當な時は無いのであつた。時勢は明かに一變してゐた。其の年の一番大きな出來事である西鄕隆盛の沒落は、維新以來引續いて行はれてゐた偶像破壞運動の大詰の一幕であつた。世は擧げて歐化主義に心醉してゐた。文明開化といふ新成語ほど人々の耳を快く刺戟する言葉は無かつた。西洋の物質文明は潮のやうに此の國へ押し寄せて來て、忽ちの間に社會の上下に亘つて浸潤してしまつた。世間は美術を顧みてゐるやうな餘裕を有たなかつた。殊に狩野派の

やうな傳統的繪畫に至つては、人々の興味から全く閑却されてしまつてゐた。さういふ時代であつた。

藤島常興は何彼につけてよく深切を盡して呉れるのであつたが、芳崖は自分の性格として他人の世話になる事が嫌ひなので何處迄も自力で生活する決心だつた。で上京匆々から生活の爲めに苦しまなければならなかつた。東京へ出て來るにも、夫婦の衣類を賣つて漸う旅費をこれらへたくらゐであつたから、無論貯へなどは一錢もありようはない。繪は幾ら畫いても一枚も賣れなかつた。忽ち米櫃がガラ〱になつた、細君が内職をして僅かばかりの金を稼ぐので、漸う空腹を盈すやうな有様だつた。

其の時分橋本雅邦は、狂人の妻を抱えて轉々して歩いた末に漸う山城河岸釆女町に住居が落ち付いて、其處から海軍兵學校へ通つて、製圖の仕事をして八圓の月給を貰つてゐた。だから芳崖の無收入に比べれば幾らか生活が樂なわけだが、其の代り狂妻が檻の中で暴れてゐるといふ始末なので、食ふ物の無い芳崖の家以上に慘澹たる光景だつた。雅邦は兵學校へ通ふ餘暇には、薄暗い汚い三疊の部屋で繪を畫いてゐた。

家も近いので二人は毎日のやうに往來しては、畫論を鬪はしたり、勵まし合つたりしてゐた。雅邦は芳崖よりは七つ歳下であつた。けれども勝川塾に入門した年代は殆んど同時で、どちらも塾頭の地位に昇つて勝川門下の二高足として早くから頭角を拔いてゐた。此の塾には源平繪合といふ事があつた。それには大勢の門弟が源平兩派に別れ、課題の繪合をして優劣を判斷するので、さういふ時二人は常に源平二氏の旗頭であつた。江戸兒の雅邦は淡白な性格の所有者であつたが、長州人である芳崖の性格は熱狂的であつた。畫風も、雅邦の靜的で溫健古雅なのに對照して、芳崖の畫は動的で、奇矯を極め、往々醜怪な世界に馳つた。

芳崖の性格は親讓りでもあつた。彼の父晴皐は毛利の支藩豐浦藩のお抱え繪師で、狩野伊川門下の高足であつた。人と爲り豪放磊落で、權門を惡み、任俠の風があつたので、常に貧乏してゐた。常に家財を賣つて米薪の料に替へる有様であつた。最後は家の中に一物も留めなくなつた。債鬼が日夜押し寄せて來た。それでも晴皐先生は平然として、酒を煽つては詩を談じ、天下國家を論じるのであつた。或る時は細君も餘りの事に愛想を盡かして、出て行くと言つた。

「出て行くも宜いが、一體何處へ行くつもりだ」と夫は言つた。

「何處へ行かうと貴郎のお世話にはなりません。交の梟の向いた方へ參ります」

と細君は憤つて答へた。すると晴皐先生は大口開いて笑ひ出した。

「お前の鼻は天上を向いてるぞ。鼻の向いた方なら天上だらうが、已は此の齢になるまで女の昇天する處を看たことがない、どれ／＼茲で拜見しよう」

細君も可笑しくなつて吹き出してしまつた。夫婦喧嘩はそれでお終ひになつた。

英米佛蘭の四國の聯合艦隊が馬關海峽に襲來したのは元治元年八月五日の事であつた。長州藩では、諸所に築いた砲臺の砲門を開いて應戰した。が戰は長藩に不利だつた。豐浦藩の長府砲臺も破壞されてしまつた。砲戰三日の後、長藩は到頭屈服して、外艦と和議を講ずることになつた。其の時藩を代表して行つた正使は高杉晋作、副使は杉德輔、渡邊内藏太、通譯が伊藤俊輔、井上聞多であつた。狩野晴皐も繪圖係として同伴された。

晴皐は英艦へ行つて、汽罐室などを觀て矢立の筆を取り出して半紙に寫生した。艦内の將士は珍らしがつて、大勢で晴皐を取り卷いて其のスケッチを眺めてゐた。談判が終ると食堂で饗宴を受け、それから雜談を交換した。此席上で晴皐は半紙を裂いて紙撚をひねつて見せた。英艦の將校達は面白がつて其の眞似をしたが、指先が思ふやうに働かないのでなか／＼紙撚がひねれなかつた。すると晴皐は、今度は紙撚を鼻の腔へ入れて嚏をした。將校達はそれを看て好奇の眼を瞠つた。晴皐は一人を麾いて自分の眞似をさせた。それから彼等は爭つて自分から其の紙撚を鼻の腔に入れて、順々に嚏をした。室中の將校で嚏をしない者は一人も無かつた。船室は割れるやうな笑聲で盈たされた。笑ひほど意志の疎隔を取り除くものは無い。一同顏の相恰を崩して嚏をして笑つた爲めに、其の場の險しい暗雲が忽ち一掃された觀があつた。

晴皐は天性器用で工夫に富んでゐた。何事にも凝り性で熱狂的であつた。餘技ながら鑄金も彫刻も巧みにやつた。就中刀劍を研ぐことにかけては名人で、一藩の子弟の刀劍を研いで遣つた。日常の行ひが頗る奇抜で、其の上機略に富み、奇計に長じてゐた。曾て晴皐は外艦の襲來を防ぐ計畧として或建言を藩に向つて上呈した事があつた。それは馬關海峽を閉塞しやうといふのであつて、其の方法としては、先づ藩内の墓石を運んで海中に投じ、それから山の上から棧橋をかけて土を運んで海を埋めるといふのだつた。藩内の人々は、それを例の晴皐の奇癖として一笑に附してしまつた。けれども、後世の戰術家はその話を聞いて、晴皐の卓見に驚嘆した。

芳崖の父はさういふ人であつた。芳崖は早熟の天才で、十三四歳位の時から上手に繪を畫いた。けれども父が貧乏なので江戸に遊學したくても學資が無かつた。それを見て父の友人である同藩の繪師某が同情して、藩の老職を說いたので、芳崖は十年間滯費を以て江戸に遊學させられることになつた。其の時彼は廿前後であつた。

芳崖は、幕府繪所の繪師狩野勝川院雅信の畫塾で繪を學んだ。其の塾は木挽町に在つた、芳崖の伎倆はメキ／＼と進步した。軈て塾頭とまでなつた。當時狩野家の塾頭となれば、もう立派な繪師としての資格を認められたことになるのであつた。併し、天才的の芳崖は、狩野派の繪を學び乍ら、しば／＼其の綱紀の外に飛び出すのだつた。此の時分の狩野家は因襲に囚はれ、探幽常信の粉本を模寫するばかりで自家の機軸を出すなぞといふ事は殆んど無かつた。さういふ事をする者があれば忽ち異端邪道視されたのであつた。然るに芳崖は古法を守らず往々自家の創造を試みるので、師匠勝川院の氣には入らなかつた。

或時勝川は下谷常樂院の依囑を受けて壁上に麒麟を揮灑した。芳崖は師匠の命令で助手として彩色をしてゐた。麒麟の腹の色は古法に依れば黄土を塗らなければならなかつたが、芳崖は配色上黄土では不調和だと看て、他の色を混じて塗つた。すると非常に調和が佳かつた。芳崖は大得意でゐると、やがて師匠がそれを看て、古法に違反してゐるので大いに怒つて、忽ち破門を言ひ渡された。が、同門の者が様々に詫びて呉れたので漸う免された。其の後も度び／＼同じ様な事があつて、其の都度破門をされかけたが、最後には勝川も芳崖の彩色が古法よりも優つてゐることを悟つて默許することもあつた。

當時勝川塾の仲間に三村晴山が居た。晴山は信州松代藩の繪師であつたが、同時に其の時代に於ける志士として廣く知られてゐた。芳崖は晴山に私淑して大いに啓發された。又彼は佐久間象山とも深く交はつたのであつた。

鄕里に歸つて、芳崖は樵龍和尙について禪を學んだ。樵龍は周防國吉敷郡秋穗村の生れで、後年黃檗山の法席を繼いだ一代の名僧であると同時に、幕末の動亂に當つては國事に盡瘁した愛國僧でもあつた。

父晴皐から享けた先天的狂熱の血と、それらの人々から與へられた後天的の影響と、それから其の時代の思潮とが、芳崖の性格に志士的氣分を濃厚に注入してゐるのであつた。彼は熱烈な勤王主義者で、其の精神には愛國の氣分が横溢してゐた。

芳崖は、十年の研學を了へ、畫家としては故鄕へ錦を飾つたわけであるにも係らはず、其の繪は少しも藩當局に歡迎されたが

つた。で、非常なる落魄の境遇に陷つた。其のうちに世は明治となつた。芳崖の繪の賣れないことは依然たるものであつた。彼は生活の資を得るために養蠶をしたり、それも失敗すると筆墨や紙類などの小商ひをしたりして辛うじて世を送つてゐた。さうした轗軻不遇の月日を幾年か送つた後、毅然として志を新たにして、今度の上京を決行したのであつた。

(二)

芳崖の貧乏は窮募るばかりであつた。繪は決して賣れなかつた。彼はよく人を訪問しては、雄辯滔々として一流の畫論を談じるのであつたが、併し其の說が奇拔に過ぎてゐるので、文人の雅邦以外には誰一人として耳を傾けて呉れる者も無かつた。其の上言語動作すべてが奇矯に走つてゐるので、しまひには大概の人が彼を見て一個の氣違ひ繪師だくらゐに思つて、相手にしなくなつた。

さういふ畫壇不振の當時でも、文人畫だけは不思議に流行してゐた。奧村晴湖が女の身で雄健な筆を揮つて、一代の人氣を背負つてゐた。文人畫全盛の頂點であつた。そこで狩野派や土佐派や四條派の畫家までが、多くは時好に投じるやうに南畫の筆致を摸倣してゐる有樣だつた。

或時藤島常興が芳崖の窮狀を見るに忍びなくて言つた。

「貴君のお說は眞に道理ですが、併し何と言つて見た處で時勢にあはなければ仕方がない。貴君としては不愉快な事でせうが、一つ文人畫を描いて見ませんか、さうすれば私がそれを表裝をして懇意な道具屋に頼んで、店に陳列させて見ますが」

芳崖は面白くなかつたけれども、相手が深切から言つて呉れることでもあり、それに全く困つてゐる際でもあるので、

「宜しい、描いて見よう」と答へた。

常興は早速唐紙を五十枚芳崖に贈つた。芳崖はそれを殘らず描いた。矢張り純粹の南畫ではなくて芳崖獨特の繪だつた。常興は全部表裝をして、神明前の道具屋の店頭にぶらさげさせた。處が、幾月經つても唯の一枚も賣れなかつた。道具屋も呆れて五十幅全部返して來た。常興も是れには弱つて、せめて一幅二十錢づつの表裝代だけでも取り上げたいものだと思つて、色々にして人を頼んで賣つて貰はふとしたが、どうしても賣れなかつた。最後に到頭見切つてしまつて、間合削りの道具屋に五十幅三圓で賣り拂つて、其の金を芳崖の處へ送つて寄越した。

芳崖は、繪では到底生活が出來ないので何か職を求め度いと思つてゐた。すると、赤羽橋の砲兵工廠の圖案課で雇員を募集するといふ話を聞いたので、早速出掛けて行つて試驗に應せ

ところが、落第してしまつた。其の後或人の世話で、和泉橋の側の精工舍といふ輸出品製造の會社へ日給三十錢で雇はれることになつて、陶器や漆器の下圖を描いた。けれども休む日が多いので生活は依然として困難だつた。

さうして職工同様に働いてゐた。すると彼は間もなく肺病に犯された。療養が出來ないので病氣は急激に昂進した。工場へ行つて働くことも出來ず、繪筆を執るのも苦しくなつた。芳崖は絶望悲哀のどん底に沈んだ。

細君はじつとして居られなかつた。そこで百方金策をして僅かばかりの資本を得て、芝公園の傍らに移つてさゝやかな荒物の店を出した。それで漸く芳崖は粥をすゝることが出來た。

其の頃、隣に住んでゐた人が他へ轉居することになつた。それ迄懇意にしてゐて、折り〱は厄介も掛けてあるので、此の際何か返禮をしたいと思つたが贈るべき物が無かつた。で止むを得ず、芳崖は一枚の半紙に獅子舞の圖を畫いて隣人に贈つた。

明治十二年になると、不遇な芳崖の身の上にもやゝ開運の芽がきざして來た。其の年明治天皇が島津邸へ行幸遊ばされた。其の時島津家では鎌倉流の古式に從つた犬追物を天覧に供し奉つた。此の盛典を紀念する爲めに同家では橋本雅邦に依囑して一大繪卷物を製作せしめようとした。すると雅邦は自分の代りに、芳崖を島津家へ推薦した。芳崖は月給二十圓を支給されて、毎日島津家へ出邸して、同家の故實秘傳に據つて犬追物の大作に從事することになつた。

島津公は繪畫の鑑賞眼を具へてゐたので直きに芳崖の手腕を認めて大いに重用してくれた。其の繪卷は、人物の身長僅か一寸三四分の細描だが、式典に參與した人々の似顔を以て畫いたもので、一見一々指摘することができた。

此の繪卷は三年の日子を費して完成した。島津家ではそれを宮内省へ献上した。

芳崖は三年間島津家の月給に有り付いたので稍生計に餘裕を生じてきた。

明治十五年に初めて内國繪畫共進會が開かれた。芳崖も出品したけれど、彼の繪は賞に入らなかつた。

明治十七年に第二回の共進會が開かれた。芳崖は、山水の圖と、櫻樹に駒の圖と二點出品した。此の會では彼も漸く褒狀を得た。雅邦は二回共銀賞を得てゐた。

芳崖は、自分の繪は到底世にあはないものだと思つて觀念してしまつた。

（三）

或日のこと、芝公園の芳崖の陋屋へ、突然一名の外國人が訪問して來た。そして、刺を通じて、主人に面會して畫論を聽き度いと言ふのだつた。這の外國人は、東京大學の教授として日本の新興哲學に多大の貢獻をしてゐるほかに、美術觀賞家としても識者の間に尊重されてゐたところの、アーネスト・フェノロサであつた。

フェノロサはスペイン種の米國人で、ハーバート大學に學んで卒業の時には九十九點の最高點を取つたほどの天才で、專攻は哲學であつたが、東京大學に招聘されて來朝して、哲學を擔任したほかに、政治學、經濟學をも敎授してゐた。

彼が日本美術の研究に着手した動機は、元來が日本固有の精神について非常なる興味を持つたことに原因してゐるのであつた。彼は、純粹の日本の傳統的繪畫の精神並びに價値を認識して、專ら其の方面の研究に沒頭した。狩野派の繪畫は、常に彼の研究の對照であつた。彼の審美學的天才と驚くべき熱心とが、數年の間に彼の鑑識を非常に高い處迄進歩させたのであつた。彼は全く日本畫の傳統に心醉してゐた。漢學思想から發生してゐる當時流行の文人畫は、美術として、彼の眼には全然無價値なものとしか映じなかつた。其の、彼をして言はしむれば、文人雅客の消閑の玩弄物に過ぎない文人畫のみが橫行跋扈して、眞の美術たる狩野土佐四條以下の諸流が全く世間から閑却されてゐるところの、日本の美術界は、眞に痛嘆すべき狀態であつた。フェノロサは慨然として起つた。明治十四年に有志を語らつて鑑畫會を起して、自費を投じて各派の畫家を集め、毎月會を開いて畫論を講じたり作品の品評をしたり、或ひは青年作家には課題を與へて製作をさせて褒貶したりなどした。フェノロサの鑑識は次第に斯道の大家をしのぐに至つた。鑑畫會では諸方の依賴に應じて古畫の鑑定までするやうになつた。狩野永眞はフェノロサに狩野永探の名前を贈つた。

さしもに全盛を極めた文人畫も稍下火になりかけて來て、日本固有の畫風が漸く識者の間に認められるやうになつて來た。明治十五年に佐野常民が龍池會を發會した事も、フェノロサの卓見に推服し啓發されたからであつた。其の第一回が開かれた時、フェノロサも臨席して「日本の美術工藝は果して歐米の需要に適すへや否や」といふ題で演説をした。彼は其の演説に於て日本固有の美術を奬勵し、美術家及び工藝家をして、裝飾的圖案を案出して美術品を製造せしめ、是れを海外に輸出する時には巨萬の富源を得る事は疑ひ無い、日本政府が此の事實に着

目しないことは、歐米の日本美術に傾倒する者の等しく惑ふ處であると言つた。然るに南畫には裝飾的要素が缺乏してゐるから、必竟文人の消閑の具以外に用を爲さないものだ、といふ論旨であつた。彼は美術を說くに當つて、愛國的精神と國利民福との二つを巧みに宣傳の具に供したので聽者に對して非常なる感動を與へたのであつた。

其の後もフエノロサは、絕えず括目して優秀なる畫家を物色してゐたのだつた。處が、十七年の繪畫共進會に於て、計らずも狩野芳崖を彼は發見したのだつた。芳崖の繪は二幀とも場內の隅つこにあつて、粗末な紙本で表裝もしてなく、誰も立停つて觀る者は無かつた。併しフエノロサは一見して其の筆法に驚嘆してしまつた。山水の圖と云ひ、櫻花に駒の圖と云ひ、筆力雄健で、意匠がまた新しく、他の人々の古名匠の粉本を摸したやうな繪とは全然比較にならない淸新な氣分が畫面の外まで橫溢してゐた。フエノロサは感激した。彼が待ちに待つてゐた偉大な藝術家が、突如として天の一方から出現して來たのだつた。それから間も無く、彼は芳崖を訪問したわけであつた。

が芳崖は相手の言葉を聞くとにがい顏をして

「私は何も話す事は無い、折角の御光來だがお斷り申す」と言つてにべもなく突つぱねてしまつた。

それでもフエノロサは是非と言つて頼んだ。すると芳崖は癇癪を起してしまつた。

「斷然お斷りだ。チヨツ、毛唐人に繪なぞが解つて溜まるもんか」

そんな調子なのでフエノロサも諦めて歸るよりほかに仕方はなかつた。芳崖はフエノロサの事を話に聞いても、毛唐人が半可通をり振舞はすくらゐにしか思つてゐなかつた。彼が日本美術の講釋をしたり、狩野永探などと署名をして古畫の鑑定をしたりなどするといふことを聞くと、片腹痛くもあれば、そんな者を相手にして有難がつてゐる世間の人間の馬鹿さ加減が腹立たしくも感じられた。處で今日は其の毛唐人を追ひ返して遣つたので、些か溜飮の下る思ひがあつた。

處が、其の翌日になると又もやフエノロサが遣つて來た。おまけに今日は狩野友信の紹介狀を持つて來て、頻りに美術談を懇望するのであつた。其の眞面目な熱心な態度が、少しづつ芳崖の感情を柔らげさせた。

「一つ此の毛唐人を試して見よう」

芳崖はさう考へ付いたので、日を約して、自分で案內をして舊藩主毛利侯の邸へフエノロサを伴れて行つて、古畫の鑑定をさせて見ることにした。するとフエノロサの鑑定は一々中つて

ゐた。最後に女中部屋にあつた屛風繪を取り出して見せると、フエノロサは非常に感嘆して眺めてゐた末に、「是れは蛇足軒である」と言つた。

「成る程、貴下もなか〳〵日本美術がお解りになる、これは話せる」と芳崖は手を打つて言つた。

芳崖は始めてフエノロサを信用して、問はれるまゝに諸派の長短などを說明した。其の後もフエノロサは芳崖の陋屋を訪問した。そして彼一流の奇拔な畫論を喜んで聽いた。或時フエノロサは言つた。

「現代の日本畫は殆んど滅亡に瀕してゐる。多くの畫家は何れも古人の粉本ばかりを模してゐるので私は大いに失望した。其の中で眞個の畫を描いて居られるのは先生ばかりです。そもそも私の觀る處では、二百年このかたの日本畫には見るに足りる物がまことに少い。それには他の理由もあるけれど、繪師の職が世襲になつた爲めに、唯々舊套を墨守して革新をはかるといふ事をしないのが、一番大きな原因だと私は思ふ。先生はそれほどの手腕を持つて居られながら、何故日本の畫界の爲めに振ひ起つて革新をしやうとはなさらぬのですか？」

芳崖は撫然として言つた。

「貴下のお言葉は尤もである。私も曾て勝川院の門にゐた時分には其の志を抱いてゐたのであつたが、國事多端の際に繪筆を捨て、今では又貧苦と病の爲めに交る〳〵惱まされてゐる有樣なので、到底夙志を成就することは出來なくなつてしまひました。けれども、自分だけの新らしい工夫は常に試みてゐます。それについて、近年東京へ來て多くの洋畫を見た。寫實といふことは洋畫の特長で、日本畫の及ぶ處ではない、また日本畫では到底洋畫のやうな設色を施すことは不可能だ。けれども、考へて見れば、どちらにしても同じく手でする業だ、私も亦人間だ、一本の毛筆で西洋人のする事をして見ようと思ひ立つて、いろ〳〵苦心した結果、漸く寫實の方法を完成することが出來た。又油繪に讓らぬ設色をも完成することが出來た。が、大體現今の我邦の人は南畫ばかり悅んで、一向私などの繪は顧みようともしない、だから實は餘り畫かないことにしてゐるのです」

するとフエノロサは大きな聲を立てゝ笑つた。

「先生にも似合はない事を言はれたものだ。日本人が悅ばないからと云つて筆を執らないのは餘り眼界が小さい、世界は廣い。五大洲の中に先生の畫を見る者が無いとは申されない。日本國中に一人も知己が無かつたら、何故世界にそれを求めようとはなさらぬのです？　先生の如きは、自分から眼を塞いで明

りが無いと言ふ者の流でせう」

フエノロサの言葉は大いに芳崖の心を感動させた。けれども自分は既に老いてゐる。それは一場の夢に等しい空想に過ぎないのだと思ふと、芳崖は反つて寂しい氣持になつた。

「成る程、貴下の海外に知己を求めよといふ說は大いに私の意を得た。私は初めて日本人が盲目ばかりなのを恨まなくなつた。唯私は老い過ぎてゐる、自己本來の面目を發揮しやうにも、肝心の勇氣が乏しくなつてしまつた」

「先生は歎くべき國を愛さない人である」とフエノロサは言つた。

芳崖は顔色を變へた。

「貴下は怪しからん事を言ふ。私は元來繪師ではあるが、曾て國步艱難の際には筆を捨てゝ志士の後に追従したこともあつた。今齡が老いて、見る影も無い生活をしてゐるけれど、一片愛國の精神は胸中から去つたことはない。貴下は何でそんな無禮た事を言ふのか、其の理由を聞かう」

芳崖は額に血を漲らせ、瘠せた腕をまくつて、語氣鋭く詰め寄つた。フエノロサは落ち付き拂つてゐた。彼は靜かに、曾て龍池會でした演說と同じ要旨で相手を說いた。日本の美術工藝は、一國の利福をはかる無盡藏の寶庫である。然るに之れを擲つて顧みないのは愛國者の爲すべき所でない。殊に先生の如き大手腕を有する人が、却つてそれに手を付けたいといふのは不仁も甚だしいことである」と言つた。芳崖は忽ち膝を打つて感心した。

「よく貴下は其の事を私に敎へて下すつた。私は今迄繪畫が國家の利福に關係を持つてゐるとは知らなかつた。貴下の說のやうならば、芳崖は斃れる迄は繪筆を離しますまい、今後も是非貴下の御指導を仰ぎ度い」

「先生に其の御決心が付いたのは日本の美術の幸福で、同時に日本の國の幸福でした。私も及ばず乍ら微力を盡しませう」

二人は、感激に熱して固く手を握り合つた。

（四）

芳崖は初めて自己の使命を明かに覺つた。今迄狹く暗澹として映つてゐた世界が、急に明るく廣々となつて來た。彼は幾許もない餘生を此の國の美術の爲めに捧げようと決心した。彼の精神は弓弦のやうに緊張して來た。

彼は、フエノロサに見せる爲めに、新らしい試みの繪を一枚畫いた。それは「柳下放牛圖」であつた。其の繪は主點に諸線を集合せしめんとしたものであつた。畫の中心は臥したがら草

な食つてゐる一頭の牛である。柳の枝葉でも、草でも流れの水でも、遠景の山でも、圖中の一切の物が其の牛を指してゐる。山の形は牛の形狀に似せてある。それは一種の傾向畫であつた。

「此の繪の目的は、草を食つてゐる牛にある。其の他の總ての點景物は、其の目的を助長する爲め以外には何の意味も無いのである」恁う言つて彼は自分の繪を說明した。

彼の作に「楠公父子別離の圖」がある。其の繪では、松樹の枝が悉くしなだれて泣いてゐる。

「繪には、常に一つの目的が無くてはならぬ。其の目的を現はす爲めには事實から離れても構はない。俳優の演技と同じで、事實其の儘では藝にならない」彼は言つた。

狩野尙信の傑作の一つに「富士見西行」の圖がある。其の繪を見て古來誰れも氣の付いた者は無かつたが、よく〱見ると背後へ廻して上躰を支へてゐる手の、親指が子指のあるべき處に付いてゐた。それを初めて發見した人が、尙信の誤謬として其の點を擧げて指彈すると、芳崖は大いに笑つて言つた。

「足下はまだ畫を論じる資格が無い、小兒と雖も誤らない指の位置を尙信ほどの巨匠がどうして取り違へようか。親指を外部へ現はしてあればこそ、上躰を支へる重みが其處に現はれてゐるではないか。此の畫の目的は其處にあるのである」と芳崖は言つた

彼は常に、配合調和といふことに留意して構圖の工夫を凝らした。古人が嘗て言つた虎溪三笑を評して、山笑ひ巖笑ひ水もまた笑ふと言つた其の言葉を籍りて彼は配合の秘訣を語つた。絹や紙に向つて、何の意味もなく樹木岩石を點綴したならば其の圖は支離滅裂にならざるを得ないのだと言つた。

フエノロサは芳崖と接近の度が重なるにつれて益彼に向つて傾倒してしまつた。そして芳崖の研究を助ける爲めに月々なにがしかづつ生活費の補助をすることになつた。

芳崖もまた、フエノロサの影響を多分に受けた。フエノロサの審美學的思想に依つて、彼は新らしい藝術の境地を開拓させられた。「地中海眞景圖」「西洋風林泉圖」等を畫いて彼は毛筆でも西洋の風景を描破しうることを證據立てた。

芳崖は神田淡路町一丁目へ越して來た。其の家は六疊と三疊位の二間きりの家であつた。けれども、芝の陋屋でうじ蟲のやうな生き甲斐の無い生活をしてゐた時に比較すると、彼は全く別天地へ生れ變つて來たやうに感じて精力を盡して繪を畫いた。有名な「伏龍羅漢圖」だの「仁王圖」等は其の時分の作である。

伏龍羅漢圖では、彼は例の割り間合に頗る苦心した。これは龍が羅漢の膝に凭れて睡つてゐる圖である。彼は龍の角を軟骨として畫いた。一番苦心したのは其の口であつた。彼はこれを牛が食物を反芻してゐる時の口に以取つて畫いた。

仁王圖は、明治十八年の初期から取り掛つた。縱四尺横二尺で、中央に仁王が突つ立ち、眼を怒らし鬼を摑んでゐる圖である。彼は此の畫に於て前人未發の彩色法を試みた。佛蘭西から粉繪具を取り寄せて使用した。芳崖の苦心は慘澹たるものであつた。フエノロサも絶えず遣つて來ては相談相手になつた。地色の如きは十一遍も塗り直した。二人は其の圖を横に倒して觀たり、逆様にして見たりして色彩の工夫を凝らした。芳崖が眼を眞赤にして繪を眺めてゐる側で、フエノロサは口笛を鳴らし乍ら室内をあちこち歩き廻つた。其の繪は滿三年の日子を費して、明治二十年の終りになつて完成した。

芳崖が畫作をする時の苦心は慘澹たるものであつた。殆んど寢食を忘れて熱中した。筆を執れば、額から脂汗がジリジリと滲み出た。

「繪かきが筆を握つて畫に向つてゐる時、若し人があつて刀を以て其の筆を兩斷したならば、必ず切り口から血が迸るやうでなければ不可ぬ」と彼は言つた。

フエノロサの工藝美術利用論は世間の反響を喚起した。政府でも美術を等閑に附して置く事の非であることを悟つて、明治十八年十一月、圖畫取調所を設けた。それには植物園の中にある建物を宛てた。芳崖は其の雇員に任命されて月給十圓を支給された。其の後美術教育事項を調査することになつて、芳崖を拔擢して其の事務を取らせた。彼は月給三十圓を支給されることになつた。

フエノロサの活動は眼覺ましいものであつた。明治十九年フエノロサは宮内省の命を受けて京阪地方の古寺社を巡回して貴重美術品の目錄を調製した。又、文部省宮内省の雇に任じ、帝國博物館御用掛、繪畫取調所員等となつた。同年門下の岡倉覺三と倶に美術取調委員として歐洲に派遣されたりした。彼は專ら美術の組織的教育の必要を說いて、美術學校設立の運動に沒頭してゐた。

芳崖の「仁王圖」は、池の端松源樓で開かれた鑑畫會に出品された。其の繪は畫界に一大驚異を與へた。沈滯してゐた日本の繪畫の世界に革命を起して、新興美術の先驅を爲したのが其の繪であつた。折柄來朝してゐた佛國の美術鑑賞家として名のあるパブロト博士は、芳崖の仁王圖を觀て、「私は世界を周遊して現代名匠の着色畫を澤山觀たが、此の圖に優る物を見なか

つた。私は此の圖を現代世界第一の彩色と稱するに躊躇しない」と言つた。

仁王圖は社會の評判となつた。伊藤博文が其の評判を聞いて、佐野常民の案内で來て觀た。伊藤は大いに感心して、芳崖に言を送つて、日を期して美術上の談話を交換しようと言つて來た。

芳崖は非常に喜んだ。元來から云へば伊藤も自分も同藩の出身である。が、彼は今は要路の顯官であり、自身は陋巷に埋もるゝ一介の畫工に過ぎない。舊縁を便つて顯門に俯仰するが如きは彼の潔しとしない處である。けれども、此の際芳崖が伊藤に識られたことを喜んだには別の理由があるのだつた。彼は、自分が伊藤を說いて美術學校を創設させようと考へたのだつた。美術學校を建てるといふ事はフエノロサが初めて唱道したのであつたが、芳崖は其の最も熱心な賛同者だつた。彼はそれについて斯う考へてゐた。

「自分は命の續く限り、國の爲め美術の爲めに盡す覺悟だ、併し自分の餘命はもう幾何もない、自分が死んだら誰が其の替りになるだらう。現在の畫家は何れも老朽で用に立たない、自分の死後に百千の狩野芳崖を造り出すことが急務である、それには學校を建てて、少壯の人間を澤山一度に教育して行くに越した策は無い」

芳崖は伊藤に會ふ前夜、學校創設、後進養成の大策を談ずる爲めに其要領を認めて置いた。

其の日になると、芳崖は早朝から伊藤の邸へ出掛けて行つた。折しも伊藤は馬車に乘つて外出しようとする處だつた。

「生憎今日は火急の用事が出來て外出しなければならないから此の次ぎにして貰ひ度い」と伊藤は言つた。

「いや、ほんの一寸で宜しいのです、お手間は取らせません、是非お話し申し度い事がありますから」

芳崖は斯う言つて、構はず玄關へ上り込んで、伊藤の手を取つてずん〳〵奧へ引つ張り込んだ。伊藤は笑ひ乍ら芳崖を應接間へ連れて行つた。

差對き合ふが否や芳崖は喋り出した。それはフエノロサ仕込みの工藝美術國利民福論から、美術教育の等閑に附すべからざる所以を滔々數千言を費して論じ始めるのだつた。一時間に亘つても、二時間に亘つても芳崖の談論は盡きなかつた。其の間伊藤をして一言も吐かせなかつた。彼は思ふ存分に自家の懷抱を吐き盡した揚句に、懷中から草稿を出して、

「只今お話し致した事の要領は玆に書いて有ります、どうか後で御覽を願ひ度い」

と言ふと、扇を執つて、朗々と謡ひながら、山姥を一さし舞つた。舞ひ了るが否や、さつさと挨拶をして歸つてしまつた。

それから二三日經つと、伊藤から畫の依頼があつた。芳崖は我が事成れりと喜んだ。そして伊藤の爲めに、仙人圖、鷲圖の二幀を作つた。鷲を描く爲めには非常なる苦心をして、門人岡不崩と共力して事に當つた。

伊藤は芳崖と數回會見するに從つて、彼が尋常の畫工でないことを識つた。美術學校の創設は急轉直下實現の運びになつた。

明治廿年十月勅令を以て、始めて東京美術學校が設置された。芳崖は繪畫科主任を拜命した。

（五）

芳崖は、平常絶やさず大蒜の汁を飲んでゐた。大蒜程人躰に大効のある物はないと彼は信じてゐた。彼が大蒜信者になつた動機は、犬追物の繪巻を畫きに島津邸へ通つてゐた頃、薩摩の習慣で邸内の人々が一週に一度宛必ず大蒜を食べるので、芳崖も試みて見た處が、肺病で弱つてゐた躰に急に元氣が付いて來た。それ以來彼は大蒜萬能主義者となつてしまつた。自分が良いと信ずる事は何んでも人に勸めなければゐられない性分なので、會ふ人ごとに大蒜の効能を吹聴し廻つた。客が來ると、大蒜を擂つて湯で溶いたのを茶の代りに出して、「さあ一杯お上んなさい」と言ふのであつた。住居の空地には大蒜が一杯植えてあつた。

「日本の美術家は、世界の大敵と戰はねばならぬから、大蒜を食つて大いに躰を強健にせねばいけない」彼は門人等に向つてしよつちうさう言つた

芳崖と對き合つて話してゐると、其の臭がプン〳〵やつて來るので、大概の人は辟易してしまつた。

芳崖は非常に芝居が好きであつた。赤貧洗ふが如き中でもよく芝居を看に行つた。芝居を看る事は、彼自身の繪の上の工夫にしば〳〵參考になつた。彼の説く處の畫の配合調和の如きは、舞臺のそれに依つて大いに教へられる場合が少くなかつた。

俳優では團十郎に一番感心してゐた。人に向つてよく「團十郎は己より藝が上だ」と言つた。けれども其の團十郎の藝でも、缺點があれば決して見逃さなかつた。或時團十郎が重盛に扮したが、其の花道の出に當つて頭がグラ〳〵動くので甚だ重盛の威嚴を傷けて見せた。彼は其の後で橋本雅邦の處へ來て其の談をして、

「何故頭がグラ付くのかと言ふと、足取りが惡いからだ。前屈

を地に付け切つてから後脚を上げるやうにさへしたらあんなことはない、つまり恁ういふ風に歩くのだ」

と言つて、尻を捲つて、歩き方をやつて見せた。

「團十郎に教へて遣り度いんだが、こつちが貧乏繪かきぢやあ相手にしまいからなあ」と芳崖は言つた。

其の足取りの講釋は能の素養から來てゐるのであつた。彼は若い時分から能を習つた。そして晩年は寶生金太郎について稽古した。一度、「一生の思ひ出だ」と言つて、七圓出して損料衣裝を借りて、自分がシテになつて舞つて見た。金太郎は後に芳崖の談をして、

「芳崖先生には私のはふが折り〳〵突つ込まれた。私のやる處を見てゐて、それはさうかも知れぬが、繪として見る時にはそれでは形が間違つてゐるなどと言つた。後で考へて見ると、そこは必ず私のやり方が惡かつた。言はゞ私の方が弟子だつた」

と言つた。

又ある時團十郎が渡邊崋山に扮した。崋山の畫家であり忠臣である點は殊に芳崖の意に適つてゐるので、彼は力こぶを入れて見物してゐた。處が、演技の半ばで崋山が扇に繪を畫く處があつた。團十郎は少し繪心があるので舞臺で何枚も扇の繪を畫いて、それを舞臺から見物席へ撒いた。それが客を引く人氣策になつてゐた。が芳崖はそれを見ると非常に腹を立てゝ「崋山は死んでしまつたぞ――」と呶鳴つてさつさと歸つてしまつた。

「團十郎程の藝人でも矢張り河原者根性が拔けないのだ」彼は家へ歸るとさう言つて憤慨するのだつた。

坪内逍遙は其の頃廿八九歳であつたが、讀賣新聞に文章を發表して社會に認められてゐた。或日突然其の家を訪れて來た老人があつた。「狩野某」と名乘つて、座敷へ通るが否や、十年の知己のやうな態度で逍遙の文藝論を褒め始めて、「實際お說の如く、觀音さまだ」「いや全くだ」と自分一人でのべつ幕無しに喋り立て、それから能の話芝居の話をして、團十郎の重盛の歩き方の講釋を始めると、起ち上つて座敷の内をあちこち歩き廻つて見せた。粗末な羽織袴姿で、腰には辨當箱がブラ〳〵やつてゐる。喋るだけ喋るとぷいと起つて歸つた。――其の客は芳崖であつた。植物園の圖畫取調所からの歸りに、眞砂町に住んでゐた逍遙を訪ねたのだつた。

辨當箱は、途中で寄つた處へ乾度忘れて來るので、往きも還りも腰へぶら下げることにした。扇子も忘れるので、是れは非常に長い紐を附けて年中羽織の紐へ結び附けて置いた。

或日のこと芳崖は、門人の岡倉秋水を伴れて植物園から歩いて歸つて來た。それは靜かな暮れ方であつた。柳町邊迄來た時

だつた。前の方から、スーッと風が吹いて來た。すると芳崖は「茲だッ」と叫んで、颯と扇を開いて、往來の眞中で舞ひ始めた。

（六）

芳崖は最後に小川町へ移つた。其の頃彼の妻が病沒した。芳崖の悲嘆は一と通りではなかつた。彼が生涯貧苦の中でも繪筆を捨てずに居られたのは、一面に於ては彼の妻の功勞であると言はなければならなかつた。それだけに芳崖の悲みは大きかつた。家計の事は常に妻に任せてあつた。

淡路町に居た頃の事、或時芳崖は細君に相談無しで、大枚七十錢を奮發して、內々で刷毛を一本買ひこんだ。すると後で細君がそれを發見して、大層憤つて、

「七十錢もする物をわたしに無斷で買はれたりしては月末の拂ひに困ります」と言つた。

芳崖は平身低頭して謝つて、漸う勘辨して貰つた。

妻の死後、芳崖は其の悲哀を忘れるために暫く奈良に遊んで、天平以來の多くの佛像や佛畫を觀た。彼はそれに依つて大いに得る處があつた。歸つてから彼は「慈母觀音圖」に着手した。

其の時分芳崖はいつも植物園の圖畫取調所の一室で畫作に從事してゐた。慈母觀音圖は、彼が數年前に佛國の博覽會へ出品するために畫いた圖を、今度更に新らしい工夫に依つて畫き改めたのであつた。それは芳崖の一生を通じての傑作であるとともに、宗教畫として世界に有名な繪畫の一つである。

足掛三年目の明治二十一年の秋になつて慈母觀音は完成した。けれども、畫作に心身を勞し過ぎた影響で、芳崖の健康は甚だしく衰へた。

或晩、明け方に彼は恁んな夢を見た。

彼はいつものやうに小川町の自宅を出て戸田伯爵邸の脇を通つた。すると、邸內では煤煙の掃除でもしてゐるのか屋上の烟突の處で一人の職人が何かしてゐる。と、烟を噴いてゐる其の烟突の中へ男が落ち込んだ。

「さあ大變だ、大火傷をしたに違ひない」

彼はさう思つたので、急いで家へ歸つてオトギリ草を持つて來て付けて遣らうと思つたが、高足駄を履いてゐるので走れない。早く〳〵と氣をあせつて、ふいと目が醒めた。全身汗みどろになつてゐた。

其の夢が何時迄も氣に掛つてゐた。夜が明けてから畫所に行つた、が何んだか體がぞく〳〵した。

圖畫取調所へ出勤したが、矢張り夢の事が氣に掛つてゐた。

役所には狩野友信や橋本雅邦が居たが、芳崖の様子が變だので、
「今日はどうかしましたか」と訊ねると、芳崖は夢の話しをして、
「今頃はあの職人は死んでしまつたらう」恁う言つて鬱ぎ込むのだつた。
「御病氣のせいでせう、今日は休んでお歸りになつたらどうです」
「いや何、大した事はない、それにもう少しで出來上るのですから」
恁う言つて芳崖は一室へはいつて、慈母觀音の繪に金砂子を蒔いてゐたが、暫らくすると一同のゐる處へ出て來た。
「どうも、熱があると見えて大儀でいけない。橋本さん、貴君なら大丈夫だから、砂子を蒔つて下さい、もう大抵は出來てゐるんですが」
「承知しました。併し大事にしなければいけないから、今日はお歸りになつたらどうです」と言つて雅邦は頻りに靜養を勸めた。
芳崖は、毛氈にくるまつて、俥に乘つて歸つた。家に歸ると、芳崖はどつと床についてしまつた。

病勢は一日二日のうちに進んで、所謂快復の見込は無いと醫者は斷言するやうになつた。芳崖自身も明らかに死を悟つた。
病室には、親族の者や、門人達が詰めてゐた。重い空氣が室内に盈ちてゐた。病人は苦しさうな呼吸をしてゐた。午後になつてから俄かに雨がやつて來た。氣候外れの雷を持つたやうな容様で、大粒な雨が盆を覆すやうに降つた。が、ひとしきり經つと忘れたやうに雨は止んだ。そして檐の雨だれの音ばかりが忙がしく傳はつた。
と、往來を、高い調子を張り上げて歌をうたつて通る者があつた。芳崖はにつこり笑つて門人の顏を見て言つた。
「あれだ、配合の妙はあすこにある。あの激しい雨には、今の聲でなければ配合しないのだ。お前達、よく玆を悟らなければいけない」
其の後で、彼は床に掛けてある古畫を指差して、其の配合調和の妙を說いて聞かせるのだつた。
それから二日經つて、芳崖は死んだ。明治廿一年の十一月五日の午後の事であつた。行年六十一歲であつた。

追　記

狩野芳崖の事を記した先蹤の著述は澤山ある。森大狂、横山健堂、二先生の筆になる傳記、岡不崩先生の「志乃布草」梅澤

和軒先生の「芳崖と雅邦」まだ此の外にも調べたら斷片的の材はあるだらう。私が讀んだのは、森先生の傳記と、梅澤先生の評傳だけである。梅澤先生の研究は堂に入つたもので、二人の畫家の生涯を知る以外に、維新以後明治中葉までの日本の繪畫界の情勢に通じようと思ふ人は是非共繙かなければならない好著である。私はそれら先蹤の研究を藉りたる外には、故芳崖の門人岡倉秋水先生を訪問してその直談を聽き、這の天才藝術家の風丰を腦裡に描きつゝ、一篇の讀物として筆を執つたのである。

木内喜八

（一）

佛の平助は波に千鳥の浴衣に、白木綿の三尺を横で結んで、近所で飲んだものと見えて啣へ楊枝で、自分の町内深川佐賀町を好い心持さうにブラ〳〵と遣つて來た。もう餘程前から片かげりになつてゐて、海に近い此の邊の町には日中の暑さを洗ひ去るやうな風が涼しく吹いてゐた。

平助は懐ろが温かなので何を見ても愉快に感じられた。彼には此の一と月ばかりといふものは、よく〳〵目が出て來たものと見え、何處の賭場へ行かうが不思議な程勝ち續けるのだ。

「佛の阿哥にやあ何か附いてるんぢやあねえか」なぞと仲間の者に言はれると、

「こう、冗談言ふねへ、己らだつてたまにやお芽をふく時もあらあな」恁う言ふのだが平助は得意だつた。

何んにしても懐ろに金があるので暢び〳〵した氣持だ。

「今夜も吉原の女の處へ行つて遊らうか？　それとも久し振りだから地で遊ばふか？」なぞと考へ乍ら平助は歩いてゐた。

寺の門前で子供が二三人何かして遊んでゐる。大きな銀杏の樹が一本立つてゐるので、其の木影は日中だとよく琵琶劇場だのじやうさい賣が荷を卸して汗を拭いたりしてゐる場所だ。子供は地べたへ蹲んで頻りに何かやつてゐる。それを見ると平助は子供を相手にでも何か言つて見度いやうな氣持になつて、

「おめへ達あ何をして遊んでるんだ？」と其の側へ寄つて行つた。

子供は慌てたやうに一旦遊び道具を隠したが、平助だつたことが判ると安心したやうに、

「何んだ、佛の小父さんか、それなら構はねえや」一人が恁う

言つて、懐へ隠し掛けた骰子を取り出して掌の上でコロコロ轉がして見せた。

「えらい物を持つてゐるぢやねえか、それでちよぼ一をやるのか？」

「うゝん、さうぢやねえよ、只轉がして遊んでゐるだけなんだよ」

「只轉がしたつて面白かあねへだらう、一つ張つて見ちやどうだ？」

「それぢやあ小父さん、お前から先きに張つて見ねへか？」

「生意氣を言ふねえ、小父さんはな、恁う見えても本職だあ、手前つちのやうな餓鬼を相手にやあしねへよ」

「さうかへ、でも小父さんが張れあ屹度取つて見せるんだがなあ」

「何んだと？　小父さんが張れあ屹度取つて見せる？　ほんとにさうか？」

「うん、屹度取つて見せるよ」恁う言つたのは、船大工の喜八の伜で友吉といふまだ七八つ位の小童だつた。

平助は、一寸暇潰しに子供を相手に遊ぶ氣になつた。

「それぢやあ小父さんが錢を賭けるからやつて見ねえ」平助は笑ひ乍ら懐ろから幾らかの小錢を出して其處へ置いた。

「小父さん、ほんとにいいのかい？」

「いいとも、さあ振つて見ねへ」

「ぢやあ振るよ、いいかい」

子供は骰子を振つて伏せた。開けて見ると平助が賭けた目は外れてゐた。

「おや〳〵、うまく取られたな。今度あ外しつこねえから、さあもう一遍やつて見ねえ」平助は又懐ろから錢を出して置いた。

「お止しなよ小父さん、駄目だから」

「いいつて事よ、今度あ大丈夫小父さんのものだから、さあ振つて見ねへ」

子供は前と同じ様な事をした。と、又今度も平助が取られた。それから何遍やつても平助が負けるのだつた。平助は變な氣持になつた。無論恁んな頑是もない幼い者を相手に本氣で勝負を爭ふ積りではないけれど、併しいくら小兒を相手でも恁う續け様に目を外したのでは何となく緣喜が惡いやうな氣持がして來た。で何時の間にか眞劍になつてゐた。最後に餘り續くと氣がついて骰子をこつちへ取り上げて改めて見ると、それは仕掛けのある骰子だつた。平助は腹が立つた。こんな小伜の爲めに折角芽を吹き始めたところの自分の運勢にケチを付けられたやう

に感じて忌ま忌ましくて溜まらなかつた。

平助は其の骰子を持つて船大工の喜八の處へ掛け合ひに行つた。

「お宅の息子さんにいかさま賽でひつ掛つた」そんな風にねぢ込んだ。

喜八は駭いて、悴の友吉を呼び付けて嚴しく問ひ糺して見ると、小供心からの悪戯には相違無いが、平助の言ふ通りだつた。しかも其の骰子は友吉自身がこしらへたと言ふのであつた。

友吉は六歳位の時から、深川八幡の祭禮などに萬燈や地口行燈などをこしらへて、大人も舌を卷くやうな手腕を發揮した子だつた。

平助には詫びをして事は濟んだが、喜八は我子の行末を考へて、房州白濱津の女房の里方へ友吉を預けることにした。

友吉は其處に一年餘り居た。が、母の里方でも此の子の腕白には持て餘してしまつた。其の家は農家だつたので　まだ十歳にも滿たぬ友吉は農業の手傳ひに追ひ使はれた。友吉はそれが厭なので、或時途へ肥桶を拋り出した儘江戸の方向へ向つて逃げ出したりしたが、其の時は途中で捕まつて引き戻されてしまつた。そんな事をした揚句に親の處へ歸ることが出來た。

(二)

喜八は悴を船大工にしやうとは考へなかつた。友吉が細工事にかけて天才的であることを認めてゐたから、何かさういふ方面の職人にしやうと考へてゐた。其のうちに或人の世話で、日本橋橘町の山田流琴師二代目重元平八の處へ、友吉を弟子入させることになつた。

初代重元平八は山田檢校の三男で、檢校好みの菖蒲形の琴を作つた名工であつたが、二代目は仕事は餘りしなかつた。そして初代の門人辰五郎といふ者が仕事が上手で、重元の家職は主に辰五郎が掌つてゐた。琴師仲間では辰五郎のことを名人辰と言つてゐた。

友吉が初めて重元へ行つたのは天保八年の夏で、彼は十一歳だつた。重元の家では、年少の弟子には仕事は仕込まずに走り使ばかりさせてゐた。友吉も矢張りそれを遣らせられたが、併し彼は使に出ても道草ばかり食つてゐた。大概佛師屋の店先などに立つて、佛師が仕事をしてゐる處などを眺めてゐて暇を潰して歸るのだつた。家に居る時は絶えず兄弟子と喧嘩をした。なりが少さくて齡も一番幼なかつたけれども、喧嘩をすれば三つ四つ歳上の弟子にも滅多に負けなかつた。彼は、喧嘩

を撫する時の用意に、平常爪を三角に取つて置いた。

重元のお内儀さんは劇作者鶴屋南北の娘であつた。其のお内儀さんは、友吉を氣性が面白いと言つて大變可愛がつて呉れた。

或時四谷の親類の娘が來たので、餅を燒いて御馳走するつもりで、友吉に餅を燒かせた。暫くしてお内儀さんが行つて見ると、友吉は餅を舐め〱燒いてゐた。そこで其の餅は弟子達の處へ下つた。

燒芋を買はせに遣つた。友吉は十六文の錢を渡されるなり驅け出して行つたが、芋屋で芋を渡す時「小僧さん風呂敷は？」と聞かれた。友吉は風呂敷を持つて來なかつた。で彼は其の芋を褌のミツへ入れて歸つて來た。此の芋も弟子達のはふへ下つた。

或時友吉は兄弟弟子と例の喧嘩をした。其の時友吉は鑿を持つてゐたので

「是れで斬るぞ」と言つた。

すると相手は子供のくせに肌を脱いで、

「さあ、斬れるものなら斬つて見ろ」と言つた。

友吉は困つて鑿を持つて立つてゐた。相手は益威勢を張つて

「さあ斬れ」と言つて益と體をすり寄せて來た。

「ほんとに斬るがいいか？」と友吉は言つた。

「くどいや、斬れるんなら斬つて見やがれ」

「よし、そんなら斬つて遣る」

恁う言ふが早いか友吉は相手の肩の處を鑿でガリ〱と引いた。相手は悲鳴をあげて逃げた。

師匠の重元平八は、喧嘩の相手の二人の弟子と、立會人として他の弟子を二三人庭さきの緣側の下へ座らせ、自分は御奉行樣のやうに高い處に座つて吟味をした。が、其の側に座つてゐたお内儀さんが友吉に贔屓をして、「全體自分から斬れなぞと言ふ者が惡い」と言ひ出したので、友吉は無罪になつた。

友吉は或る時佛師屋の前で大黑樣を見て來て、家へ歸つて同じやうな物を彫刻した。それを辰五郎が發見して驚いた。子供の仕事とは思はれなかつた。辰五郎はそれ以來友吉に見込みを付け、走り使を止めさせて彫の仕事を仕込んだ。友吉は驚くべき天才を發揮した。十三歲の時にはもう菖蒲形の彫を一手で仕上げるやうになつた、

友吉は十六歲の時迄重元に居た。其の年に名人の辰五郎が死んだ。友吉はもはや其處に居ても何も學ぶ事が無くなつたので無斷で師匠の家を飛び出した。併し、年期中に飛び出してしまつたので、彫師では何處へ行つても使つて貰へなかつた。そこで友吉は、今度は船大工にならうと思つて、築地明石町の十一

屋といふ船大工の棟梁の弟子になつた。船大工の仕事も直きに覺えてしまつた。二年目頃には優に一人前の仕事をしてのける程になつた。けれども棟梁は彼に對し一人分の手間しか拂はなかつた。友吉は不平だつた。彼は其の時分、品川邊りへ遊びに行くことを覺えた。間も無く其處も飛び出してしまつた。

　其の頃彼の父は死んだ。彼は父の跡目を繼いで名前も喜八と改めた。

　喜八は、一家を背負つて立たなければならない責任をかぶつてゐたが、併し格別仕事もせずに家でブラ〳〵してゐた。

　喜八は、是れ迄自分の修業をした仕事について、何となく不滿足な氣持を感じて來た。同じ物を造るにしても、もつと自分の氣持でどうにでもなるやうな物を拵らへて見度い――さういつた要求が心の中に芽をふいてゐた。

　金を持たせると直ぐに吉原邊りへ行つてしまふので、母親は決して彼に金を渡さなかつた。勿論生活にも餘裕は無かつた。母親が賃仕事をしたり、喜八の姉で番町の旗本屋敷へ奉公に行つてゐる娘の仕送りなどで、漸う暮しを立ててゐるのだつた。

　其の中で喜八はのらりくらりしてゐた。何時でも袢纏着で、よれよれの三尺を締めて、姉が置いて行つた女草履などを平氣で突つ掛けて、つまらぬ場所などをうろ付いてゐた。

　或る日喜八は紫檀を買ひ度いと思つて日本橋室町の木片の店へはいつて見た。さうしていろ〳〵出させて見たけれども、どれも高くて手が出なかつた。

「一體幾ら位のがお入用なんですか」と番頭は言つた。

「百位のを欲しいんだが」と喜八は答へた。

「御冗談でせう、百ばかりの紫檀があるもんですか」番頭は冷笑するやうに言つた。

　すると彼方で聞いてゐた店の主人が側へ遣つて來て、

「失禮だがお前さんは、紫檀で何を拵らへなさるんです?」と言つた。

「小細工を遣つて見度いんですが、實は百しか錢を持つてゐせんので」

　主人はしげしげ喜八の容子を見てゐた後で、

「さうですか、それ程やつて見度いといふのに木が手に入らなくちやあお困りだらう、番頭どん此の方にだけ特別に負けてお上げ」かう言つて相應な紫檀材を只のやうな値で百に負けて呉れた。

　喜八は喜んで其の木を家へ持つて歸ると、直ぐ様小細工を始めた。材料が高いのでなるべく小さい物をと思つて豆印籠をこしらへ始めた。重元に居た時分に、寄木、鼈甲張、象嵌などの

技術を學んでゐるので、極く緻密な細工を施してやつて見た。幾日か掛つて拵らへ上げて見ると我れ乍ら佳く出來た。其處でもう一個同じ物を拵らへた。別に賣るつもりで始めたわけではないが、かう出來て見ると、たとひ幾らにでも賣れる物なら賣つて錢にしたいといふ氣持になつた。喜八は二個の印籠を手拭にくるくるつと卷いて懐ろへ入れて、兩國橘町の一寸知合の小間物屋へ行つた。

「慰みに恁んな物を拵らへて見たんですが、一寸御覽なすつて下さい」喜八はさう言つて手拭にくるんで來た印籠を出して見せた。

主人はそれを手に取つてよく〱見てから驚いたやうな顏をして、

「是れアいい細工だ、實にどうも美事な作だ、が、お前さんが拵らへなすつたつて？」

「さうです」

「どうもお前さんはいい腕だ、賣物なら買ひませうが、二個で三兩位ではどうです？」

「結構です、有難う存じます」

喜八は夢を見たやうな、氣持で三兩の金を受け取つて出た。彼の足は譯もなく吉原の方へ向つた。

「細工物をするに限る」と喜八はそれ以來考へた。

弘化時代には、普通職人の工賃としてどんな腕の良い者でも一日一朱以上は取れなかつた。

(三)

嘉永六年亞米利加の使節ペルリが來朝した時、幕府へ獻上した品のうちに六連發の手銃があつた。松平下總守がそれを見て雛形を取つて置き度いと思つて、自藩の砲師松家定七に其の模造を命じたが、定七は自分の腕では到底其の役目は果せないので、それを喜八に頼んだ。當時喜八の名は細工人として江戸中の職人で知らない者は無かつた。喜八はこれを引き受けて美事な雛形を拵らへ上げた。

丁度其の頃の事、幕府では本郷の櫻の馬場に軍器製造所を新設して、江川太郎左衛門が其の奉行となつた。それを櫻の馬場の御小屋と呼んだ。さうして各藩から名工を集めて鐵砲其の他の軍器の製造を創めた。其の以前にも鐵砲師といふ者はあつたが皆和流で、西洋流の鐵砲を造り始めたのは此の時からだつた。處が、小銃臺師の棟梁たるべき人間が無いので困つてゐた。

其處で松家定七が喜八の處へ遣つて來て「お前さんを櫻の馬場の御小屋の、鐵砲臺師の棟梁にお世話をしようと思ふが、行

つて見る氣はないか」と言つた。喜八は、新らしい仕事が覺えられる事でもあるからはいつて見度いとは思つたが、何分經驗の無い仕事なので一旦は斷はつた。すると定七が「何、西洋流の鐵砲の事は誰も知らないんだから大丈夫だ、それでも不安心だと思つたら、はいる前に和流の鐵砲の臺の拵らへ方だけも一と通り見て置いたらいいだらう」と言ふので喜八も其の氣になつて、名前を變へて定七の世話で「棒清」といふ鐵砲の臺師の處へ仕事を習ひに行くことになつた。喜八は初めて棒清へ行つたが、仕事場にある道具を見ると餘り惡い道具なので、つい其の日は道具を直したばかりで家に歸つた。すると棒清が、其の晩松家定七の處へ遣つて來て、

「あなたの口入れだが、今日來たあの男は、私の處へ仕事を盜みに來たものに違ひないから、明日からはお斷りする」と言ふのだつた。

「どういふ譯でそんな事を言ふんです？」

「ほかでもないが、あの男は今日やつて來て、何もしないで道具を直して歸りました。私が後でそれを見ると、どうして凄い程の腕だ、乾度仕事を盜みに來た奴に違ひない」

恁う言つて棒清は斷はつて歸つてしまつた。で定七が其の事を喜八に言ひに行くと、喜八は聞いて笑ひ出した。

「仕事を盜まうつたつて、あんな惡い道具を使つてるやうなことぢやあ、盜むがもなあありやあしません。宜ろしうござんす、此の儘で行つて見ませう、どうかなるでせう」

改めて定七の世話で、喜八は櫻の馬場へはいつたのだつた。彼は少數人の臺師の棟梁となつた。彼は忽ち鐵砲に關する仕事の呼吸をすつかり吞み込んでしまつた。喜八の小屋から納めた品物だと檢査無しで通るやうになつた。銃砲の直し物を持つて來ると、喜八はそれを肩に當てゝ見るだけで、何處が狂つてゐるのかといふことを發見するのだつた。

棟梁となると、製造高に從つて歩金が貰へるので、喜八の收入は一ケ月に三十兩位にのぼつた。けれども身なりを構はぬ男で相變らず袢纏を着てゐたので、松平下總守の用人某が襦袢から着物までをすつかり拵へて着せて呉れた。夕方仕事が終ると、彼は駕に乘つて吉原へ走つた。金は一文も溜まらなかつた。初めてよい着物を身につけた喜八は、それを見せて遣らうと思つて或日姪の處へ行つた。姪とは云つても姉妹位の年柄だつた。

「おや大層いい着物が出來たんだね」

姪は恁う言つて駭いて、それから殊に其の下着を褒めたが、見ると喜八は冷飯草履を履いてゐる。

「そんないいなりをしたから冷飯草履ぢやあ可笑しいね。叔父

下駄を買つて上げよう」
姪は下駄を買つて來て與れた。喜八が喜んでゐると、姪は透かさず、其の拵りお前の下着を妾にお與れな」と言つて、下着は其の場で取られてしまつた。
併し、櫻の馬場の御小屋は間も無く閉鎖されてしまつた。喜八は再び家で小細工物を始めた。さうして横濱の森屋といふ家の注文を受けて唐木象牙細工の貿易品を作つてゐた。さうかするうち、幕府が瓦解して、明治の代となつた。
明治元年に喜八は江戸を去つて金澤へ行つた。それは櫻の馬場時代に懇意にした加賀の藩の鐵砲師に誘はれて行く氣になつたのだつた。何故彼は金澤へ行つたのかと云ふと、江戸には官軍が入り込んで大威張りに威張つてゐるので、それを見てゐるのが癪に觸つて溜まらなかつたからだ。「べらぼうめ、こちとらあ何處へ行つたつてお飯は食へるんだ」といふ氣持になつたのだつた。
金澤では刀鞘の製造に從事した。其のうちに喜八の獨特の考案に成るところの刳拔の鞘を作つたのが非常な評判になつた。やがて藩主の所望をうけ、鐵刀木二重の刳拔短刀鞘に白貝で白蛇を象嵌した鞘を作つて上つた處が、大層藩主の御意に叶つて賞賜を受けた。それ以來益評判が高くなつた。が喜八は、一三年金澤で暮すうちに江戸が戀しくて溜らなくなつた。で到頭明治四年の春頃江戸へ歸ることになつた。藩では彼を歸すことを惜んで碌を出して抱へるから金澤にゐてはどうかと言つた。
「百萬石貰つても金澤にあ居られねえ」
喜八は恁う捨科白を殘して江戸へ歸つた。江戸は東京と變つてゐた。軈て廢刀令が發布されたので鞘師の仕事は無くなつた。其の上世間の物情騷然として、工藝美術などは顧みる者は無かつた。横山町邊の問屋は門並み店を閉めた。併しどんな世の中が來ても、器用な喜八は生活に困るといふことはなかつた。其の頃削り掛の簪といふ物が流行つた。正月十五日に門へ掛ける削り掛の形を模した簪で、以前は仲見世邊りでちよい〳〵賣つてゐたのが、世間一般の流行となつたのだつた。喜八は此の削り掛の簪を一度に澤山拵らへる方法を發明して、養子の半五郎と甥の清三郎の三人で一日に千本の簪を拵らへ上げた。千本拵らへると其の頃の金で五兩になつた。

（四）

明治十年の第一回内國勸業博覽會こそは、喜八に取つて、多年蘊蓄の伎倆を顯はすべき絶好の機會であつた。彼は其の博覽會に、紫檀製寄木象嵌の香棚を出品した。其の精巧無類の細工

を觀て感心せぬ人は無かつた。彼は鳳紋賞牌を授けられた。

喜八の妙技は識者や好事家の間に喧傳されるやうになつた。内務卿大久保利通、品川彌二郎、杉孫七郎、小室信夫、西村勝三、福地源一郎等が後援して、喜八の作品を世に紹介することになつた。高貴縉紳の用命を頻繁に蒙るやうになつた。十一年に喜八は福地櫻痴等の勸めに依つて深川から向島の椰畑に居を移した。そして悠々として古美術の研究に沒頭することが出來た。正倉院御物の古風から、光悦、光琳、破笠などの遺風を景慕して、益技巧の錬磨を怠らなかつた。十四年の博覽會には、正倉院御物を模した木象嵌羅漢を出品して「妙技賞牌」を受けた。名工の名は益高くなつた。

晩年の喜八は、少壯時代の彼とは全く性行が一變してしまつた。禪に志して、白山龍雲院の南隱和尚に師事したりした。若い時から無慾ではあつたが、老後に及ぶと一層それが甚だしくなつた。一體彼は若い時分から、錢を勘定するすべを知らなかつた。手間賃を貰ふ時でも、自分が物を買つた時でも、相手が是れ丈になると言へば「さうですか」と言つて貰つたり拂つたりしてゐた。

或頃悴の半吉は養父の爲めに新らしい座敷を拵へてやつた。すると喜八は其の座敷にゐて間も無く病氣をした。それが氣になつたので懇意な疊屋の親方で八卦を觀る人に話すと、方角が惡いと言はれたので、それ以來どうしても其の部屋へ行かない。そこで半吉が、

「あれは私が磁石で見ると東へ外れてゐるから大丈夫です。それでも氣になるなら、觀音樣を信心したら斬られた首さへつながつたといふ話もある位だから、信心をしたら方角位何でもないでせう」

かう言ふと喜八も其の氣になつて觀音經を讀み始めた。其の後は病氣もしなかつた。それが動機となつて喜八は熱心な觀音の信者になつた。或時小室信夫から白檀の木を貰つて來て、それで數百體の白衣觀音を刻んだ。そして一體出來上る毎にそれを袂へ入れて家を出て行つては何處かで呉れて來た。

喜八の細工場へはいろんな人間が遊びに來た。紙屑屋、商人、羅宇仕替へ、山伏、萬歳、車力――何んでも來た。何處で懇意になつてゐるのか誰れでも慣れ〳〵しくやつて來て、面白さうに話し込んだ。

「紙屑屋さんが來たよ、いゝ方のお茶を入れて持つて來なよ」

喜八は細工場からさう言つて呼ぶのだつた。

彼は次第に金を取る仕事が嫌ひになつて、依頼れもしない仕事だと熱心にやつてゐた。或時福地櫻痴の家へ行くと、細君が

汁粉を拵へて呉れたりしたので緩り話し込んで御馳走になつてゐた。其處へ、櫻痴の親類の者で豫々喜八に仕事を頼み度いと思つてゐた人が、喜八が來てゐるといふ知らせがあつたので急いで遣つて來た。すると喜八は其の客の顏を見るなりそこ〳〵に挨拶をして歸つてしまつた。其の次ぎに行くと細君が、

「喜八さん、先達は何故あんなに逃げるやうに歸つてしまつたの？　あの時のお客様は、お前さんに仕事を頼みたがつてゐて態々おいでなすつたんだのに」と言ふと、

「どうもネ、私も一と目見た時から、仕事を頼みさうなお方だと思ふから、急いで逃げ出したんで」

　お寺やお宮を廻つて歩くのも彼の日課の一つだつた。出がけには廿錢宛賽錢を持たして遣つた。或時悴の嫁が廿錢銀貨で渡すと、翌日出がけに「昨日はお賽錢が無かつたから空詣りをして來た、だから昨日の分もお呉れ」と言ふ。「あれ、昨日廿錢銀貨で渡したぢやありませんか？」「うんあれは牛の御前でお賽錢に上げてしまつた」嫁はそれにこりて、其の後は必ず銅貨でばかり渡して遣つた。

　或日雷門の知合の處へ行くと言ふので、「俥に乘つて行つておいでなさい」と言つて嫁が俥代を三十錢渡した。上手と雷門の間は十錢が極りの丁場だつた。夕方喜八は戻つて來て家内の顏を見るが否や、

「どうも馬鹿に親切な俥夫(くるまや)だつた、俺が上手で降りると、何遍もお辭儀をして、御隱居さん、危ないから坂をお氣を付けなさいなぞと言つて、手を引いて呉れさうだつたが氣の毒だから斷はつた、どうも感心な俥屋だつた」

　何處から乘つて來たのかと訊くと、雷門から乘つて來たと言ふ。俥代は幾らだつたと訊くと、値はきかないが袂にあつた錢をみんな遣つたと言ふ。「それでは往きには乘りましたか」「いいや往きは歩いた」十錢の丁場で三十錢拂つてゐるのだつた。

　淡島寒月は當代の畸人である。向島牛の御前のほとりの寒月の書齋には、世界各國の奇物が蒐集されてある。其の座る場所もなく並べ立てた奇物珍物の中にうずくまつて、寒月は白髯をしごき乍ら、新智識舊智識を振り廻して物好きな訪客を煙に卷いてゐるのである。喜八は寒月とうまがあつて、毎日其の書齋を訪問した。知合になつてから六年間只の一日もそれを缺かしたことはなかつた。喜八が時に丁抹あたりの製作を模した物を作つたりしたのは、其處で得た智識であつたかも知れなかつた。

「私はたつた一遍藥の中で寢て見度い、悴がきいて呉れないでせうな、藥を山のやうに積んで其中へもぐり込んで寢て見たら、嘸好い氣持でせうがなあ」

或時喜八は突然思ひ出したやうに寒月に向つて恁う言ふのだつた。けれども流石の寒月でも墓の中にはまだ往て見たことがないので、「はア、さうですかなあ」と答へるよりほかになかつた。

其の寒月の處へも喜八は暫く顏を見せなかつた。彼は老病で床についたのだつた。

明治三十五年八月十五日に喜八は七十六歳で死んだ。本所林町の彌勒寺に其の墓がある。

追　記

私が木内喜八の名を初めて知つたのは、去年十一月向島の淡島寒月先生を訪問して歸りがけに「木内翁小傳」といふ小冊子を貰つた時からであつた。私はそれを讀んで少なからず興味を咬られてゐた折しも、高村光雲先生にお目に掛ると、翁が「木内喜八といふ細工人があつた。近世の名人である、あの人の傳記などを調べて見たら面白からう」と言はれたので愈早く氣になつた。で、寒月翁の紹介を得て一日小梅の木内家を訪れた。當主半吉翁は喜八の甥で養子になつた半五郎氏である。養父に劣らぬ名工として知られてゐる。其の子の省吉氏も亦父祖の業を繼いで、專ら古代工藝の研究に沒頭して居られる。現在父子共に宮内省へ出仕して正倉院御物整理掛に任じて居られるとのことである。喜八の遺作などが置いてある質素な二階八疊の座敷で、半吉翁は吃々とした調子で喜八の事を私に向つて話されたのであつた。

誤られたる親鸞・日蓮と忘れられたる法然

高須芳次郎

（一）文化史的考察と問題の宗教的偉人

すべて時代思潮を批判するに當つて、閑却することが出來ないのは文化史的考察である。私らが其の問題とする宗教を正

當に且つ公平に判定するには、一應比較、商量の資たるべき文化史的知識に照し合せて見なければ、獨斷に陷り易い傾きが多い。殊に過古の宗教及び宗教的人物の批判や考察は單にそれに向つて、自己の小主觀を土臺とした恣まな解釋を下すのみでは、往々判斷を誤り、眞相を掴み得ぬ場合が多い。何となれば、過古の宗教及び宗教的人物は必然、それ以前の歷史的關係を無視して現出したわけでないのみならず、時代の痛切な欲求や周圍の事情などに促されて現はれたからだ。それらの重要點を明かにして、其の思想や人物などを正當に理解しやうとすれば、一應、文化史的考察を加へて見なければならぬ。

勿論私は現代人が過古の宗教及び宗教的人物について、新しい解釋を下すことに反對するのではない。さうしたことも考察上の一方式であつて、極めて必要である。けれども自己が共鳴すべき點について、漫然として其の當對とする宗教及び宗教的人物を文化史的知識の商量、比較に俟つことなしに解釋するとの輕率だけは力めて避けたい。宗教及び宗教的人物の眞相は時代文化の背景を諒解しなければ掴み得ぬのみならず、時として曲解に陷り、妄斷に流れることさへも免れ難い。現に親鸞に對する解釋なども、往々親鸞の眞相を見誤つた點が少くないのは、文化史的知識の欠如を意味して居ると思はるゝ節が少くないのである。

大正十一年の思想界は一面に於て、濃厚な宗教的色彩を示した。親鸞を中心として各宗の祖師について、論述されたと同時に宗教問題が議せられたが、親鸞については概して曲解や誇張した鼓吹などが行はれた。勿論、作家として親鸞を描く場合には、ある程度までの自由を保留して、そこに新しい解釋を下すことは差支えないにちがいないけれども、さうかと云つて、親鸞を生んだ時代や當時の文化や宗教史上の關係や其の思想、教義などを輕視して、端的に親鸞を描くことは、やがて親鸞を誤る第一歩である。云ひ換へると、自己の小主觀を恃んで恣まに親鸞を描くことは、創作としては可能であつても、眞の親鸞はゆがめられ、曲解されざるを得ない。少くとも、文化史的考察をすべての宗教及び宗教的人物に加へやうとする私には、さう思はれる。現に倉田氏の親鸞觀はキリスト教的思想を以て單純に親鸞を解釋したものだ。親鸞本來の面目は多く逸せられて、キリスト教化した親鸞が出て居るのである。其の他石丸氏の『人間親鸞』の如きも、單に自己の小主觀を透ほして見た親鸞を描いた丈で、そこに親鸞の眞の姿が出て居ない。結局、文藝家の親鸞觀はたとひ其の解釋の上に新味があつても、其の皮相や外郭を描摩した形で、其の中核に觸れ得なかつたのに[illegible]得

ないことである。それは倉田氏以下何れも親鸞と稱する一人物を借りて、自己の思想を語らうとした結果から來て居ることである。

それに對して佛教家側から親鸞の眞相を闡明しやうと力めたものがないではなかつた。『親鸞教の現代的意義』を書いた遠山諦觀氏の如きは正に其の一人である。村上專精、近角常觀氏らも、親鸞本來の面目に就て述べた。私は新しい眼を以て、眞面目に親鸞を解釋しやうと力めた諦觀氏の著書を推重する。けれどもそれは餘りに親鸞を辯護することに傾いて、却て親鸞の眞相を朦朧化した欠點がある。絕體他力を標榜する親鸞の弱點をあらゆる美辭を以て辯護した如きは私が贊成し兼ねる點である。それでも、親鸞の皮相のみを揣摩して、此の偉人の面目を誤解し曲解しつゝあるものが極めて多い今日に當つて、諦觀氏が摯實な心持で、親鸞を論じたことは決して無意味だとは云へない。

親鸞が曲解されて居るばかりではない。日蓮についても、依然として正しい解釋を把持しない人々が多い。教判や組織の上に於て、比較的にわかり易い親鸞さへも、正しく解するものが少いのだから、教判、組織の點で多少わかりにくいところのある日蓮の深大な思想や超邁な人格は一層正當に解されて居ないのも無理ではない。けれどもいつまでも、さうした誤つた親鸞觀や日蓮觀などを其の儘にして置けないではないか。

私は宗教上に於て一個の門外漢に過ぎない。殊に佛教的知識に乏しい。私の見た親鸞。日蓮の二聖人は、主として文化史眼に映つた親鸞、日蓮である。けれども私は一應、此の二聖人について、其の思想、教義の大要をも味解した結果、今日の一般人に知られて居る親鸞、日蓮が、其の本來の面目を知られて居ないやうに思はれた。殊に此の二聖人の事業、思想を理解するには、第一に法然聖人の事業思想などを概略知つて置かねばならぬのに何故か世人は殆ど法然のことを閑却し遺忘してしまつて居る。僅かに『法然』と題した一篇の小説が遲れ馳せに出たのみだ。法然は鎌倉時代に於ける宗教改革の先驅者で、最初に純日本的とも云ふべき民衆的な新宗教を提唱した偉人である。此の人の思想、態度、人物などを研究することは今の時に當つて、必ずしも無意義ではない。殊に唯物的な社會改造を偏へに高調するものがある半面の欠陷を補ふために唯心的な社會改造を基調とした法然の歩いた道は現代人に有力な暗示を與へるやうに思はれる。

それに親鸞、日蓮らは、法然の出現によつて刺戟されて、彼等の新宗教を開創したのである。親鸞は法然の弟子で、其の淨土眞宗は法然の精神を一段高調したのであるから、どうして

も、親鸞を正當に理解するには、法然を知らなければならぬ。法然を知ることは、やがて親鸞、日蓮を知ることとである。それで私はこゝに主として、法然らを出した時代を語り、法然の思想、態度、人物について語り、進んで親鸞と日蓮との眞相を闡明したい。

（二）法然の出現した時代と其の出家

法然が出現した時代は、思想的にも社會的にも悲觀すべき狀態を示して居た。京都における公卿らの手によつて作られた貴族文化は既に行詰つて、爛熟し頽廢して居た。政權爭奪を主眼として度々繰返された遊戲政治は、社會の不安と動搖とを釀した。そこには道義の壞滅に伴ふ種々の悲劇が續々行はれた。保元、平治の亂は、正に當時の暗黑な世態を象徵した觀があつた。子は父を殺し、父は子と爭ひ、兄弟互ゐに敵身方となつて相戰ひ、血で血を洗ふやうな慘痛な場面を度々見せた。のみならす、群盜の跋扈や苛税の誅求や僧侶の鬪爭などがやまないために、多くの民衆は一日も安易な日を送ることが出來なかつた。佛陀が曾て豫言した「末法の世」が正に眼前に近付いて居た趣を露呈した。

法然が美作の押領使漆間時國の子として生れたのは、崇德天皇の長承二年四月の頃である。其の翌年には、洪水飢饉が續いて不安な空氣が民衆を脅かして居た。法然が漸く少年となつた時分は、叡山の大衆と奈良の僧徒とが始終鬪爭を續けて、佛法が既に地に落ちてしまつたやうな有樣を見せた。彼等は人心を善導すべき使命を丸で忘れてしまつて、唯だ爲に自派の利益を擁護し伸長するために殺生戒を破つて兵火の間に爭ふたのである。心あるものは、それを冷眼に看過することが出來なかつたにちがひない。北面の武士として弓術に達して居た佐藤義清が出家して、西行と稱したのは其の頃の事であつた。

法然の弟子聖覺の『黑谷源空上人傳』によると、法然が出家すべき動機は其の九歲の時に起つた。彼れの父時國は右大臣源光の末裔で漆間家の養子となつたのであるが、其の家は代々豪族として一鄉に重んぜられて居た。殊に時國は名門の出身だと云ふので自重した。それで彼れと同じく稻岡の庄に住んで居た有力者源定明を輕視したので、定明は深く時國を怨んだ。そして保延七年春、不意に時國に向つて夜討を仕掛けた。其の時、時國は重傷を負うて、到底助かる見込がなかつた。かうした悲痛な運命は、時國に淸い懺悔の心を起させた。

時國は、當時勢至丸と呼ばれて居た法然を臨終の枕頭へ招いて「私は今度思はぬ不幸に遭つて、地下へ赴くに當つて、少し

ばかり遺言したいことがある。よく心を落着けて聞いてくれ。私は自分の地位、家系を聊か誇つた爲めに定明の怨みを受けて禍された。それは如何にも殘念である。然し乍らそれでお前が復讐しやうと云ふことになると、また彼方の小供もお前を親の敵だと思つて狙ふやうにならう。さうすれば百年の後までも互ゐに咀ひ合はねばならぬ。それは私が好まないことである。だから、お前は今度の禍を先世の宿業だと思ひあきらめ、早く此の悲痛な人生を脱離して私の菩提をとぶらつて貰ひたい。」と告げた後、最期の呼吸を引き取つた。

かうした遺言は聰明な法然を強く動かしたにちがひない。年少で父を失つた悲み、兇猛な定明の行動に對する憤り、灰色に包まれた家庭の淋しさ、それらと共に「敵を忘れるが宜い。」と云ふ父の遺言から來た深い感激などが法然の胸に一時にこみあげたことであらう。そして彼れは、父の望み通り、出家の身となつて、菩提を弔つてゆかうと考へたであらう。法然の出家の動機は自發的でなくて他發的であつたが、人生の悲みを體驗した上から云へば、そこに深酷な沈痛な情想が流れて居た。

其の後、間もなく、法然は其の母の弟に當る觀覺得業と云ふ學僧に就て經書を學んだ。ところが、其の學才は非常に優れて居たので觀覺は「此の兒の器量は凡庸でない。いつ迄も片田舍に置いて修學せしめるのは策を得たものではない。一日も早く叡山に赴かせて、天下の學匠に仕立てあげるやうにしたい。」と思つた。それで觀覺は法然の母に其の事を勸めたが、母は唯ひとりの愛兒であるから、容易に手離さうとしなかつた。ところが、法然は叡山へ行きたいと云ふ切な望みを抱いたので、頻りに其の母の許しを求めてやまなかつた。

けれども母は「お前には觀覺と云ふ立派な叔父樣があるではないか。あの人の學問は非常に深いと聞いて居るから、もつと大きくなるまで、從學して居なさい。」と諭した。法然は勿論、母の心持を察しないのではなかつた。然しもう十三歳になつて、教學に對する熱意が内部から強く動いて居たから、どうしても片田舍に燻つて居たくなかつた。彼れが叡山に對する憧憬は深くなりゆくばかりであつた。それで彼れは極力、母の心を動かさうと思ひつめて「人はお父樣のやうに、いつ死ぬかわかりませぬ。だから、古語にも、朝に道を聞けば、夕に死んでも宜いと申して居ります。私とても、いつ迄生きて行けるか、自分でもわかりませぬから、呼吸のあるうちに、山門へ赴いて、有名な學匠たちの尊い教へを聞きたいと存じます。そして早く成佛の道を悟つて、御兩親の洪恩を報じたいと思ひます。暫くの間淋しい思ひを堪えて下さい。」と熱心に母を説得した。母も

法然の言葉に始めて心からの共鳴を感じたので、叡山に遊學することを許した。

法然は觀覺から紹介狀を貰つて、叡山に上り、西塔の北谷、持法房源光の許に身を寄せた。傳說によると、當時觀覺の手紙の中には「大聖文殊像一體を送呈する」と云ふことが書いてあつた。ところが、文殊像の代りに來たのが十三歳の一少年であつた。佛敎では、文殊菩薩を智慧の代表者であり、象徴であるとしてある。それで源光は早くも、法然が智慧の優れた少年だと察して、試みに佛教の哲理を話して、法然の答へを求めると、大人が云ふやうな立派な考へを述べたので驚かされた。「此の少年は、微力な私などの手で敎へてゆくことは、到底むづかしい。かうした秀才ならば、功德院の阿闍梨皇圓上人に托した方が宜からう。」と考へた。皇圓は椙生の皇覺の高弟で、日蓮が天台宗の要旨を學んだ俊範の師、範源と同學であつた。

法然は皇圓の許で十八歳まで佛學を修めた。其の間に彼れは天台の『法華玄義』『法華文句』『摩訶止觀』の三大部を卒業した。それは普通十三年掛つて、やつと體得することになつて居るのだが、法然は十六歳から十八歳までの三年間で要領を得た。此の勢で進むと、將來叡山第一の學匠となるであらうと云ふことは、皇圓にも直ぐわかつた。そして法然に對して、大きい望みをかけて居た。ところが法然は其の時分、强い心的煩悶に囚はれて內部に激しい動搖を生じて居たので、皇圓の許を辭去しようと考へて居た。

叡山に於ける五年の生活は、法然に取つて無意義ではなかつた。彼れは天台の要旨を諒解して、學的素養を深めることが出來た。けれども山上に於ける僧徒の腐敗や墮落は、法然を失望させた。元來、叡山の開祖傳教大師が延暦寺を山上に建てたのは、奈良に於ける平地の佛教が腐敗して居るところから、遠ざかるためであつた。山上に於ける幽靜、寂寞、孤凉、淸秀の空氣、情趣は、自然人を淸めて高い精神的飛躍をなさしめるであらうと云ふことを信じたからであつた。遙かに塵界や物慾のうちに浮沈する俗界を眼下に見て、靜かに佛陀の敎へについて冥想し研究すると云ふのが叡山に於ける思想生活の一特徴とされて居た。かうして傳教は日本に於て、支那の天台宗に日本的色彩を加味した宗法を大成し、宣布したのである。

ところが、傳教歿後の叡山は次第に俗化し始めた。勿論其の寺塔、學堂や僧徒などの方面では、慈覺大師の時から隆盛を加へたが、傳敎の眞精神は、半ば沒却されて、終に僧兵の跋扈を見るやうになつた。僧兵の發生は不安な社會生活に對する自衞のためであつたが、後には、それが惡用されて、延暦寺の山法

師と云へば、興福寺の奈良法師と共に殘虐の代名詞のやうになつてしまつた。かうして叡山の僧徒は兵火の巷に出入すると同時に、淫酒に耽り、色々の破戒を重ねて、其の大部分が墮落した。何か自派のために不利なことがあると、叡山では、興福寺が春日の神木を擁して朝廷へ嗷訴したやうに、日吉の神輿を奉じて京の巷を騒がした。法然が叡山で五年間の修學を續けた時分は、叡山が度々園城寺と爭うて、放火、殺傷を繰返して居たのである。それらの現象は、法然に不愉快な感じを與へた。「さうした殘虐と破戒とを重ねて、何の滿足があるか、何の安心があるか、何の光明があるか、私には丸で不可解だ。」と法然は痛切に思つた。先づ自己の内部に於ける滿足、安心、光明を追求しなければ、一日もぢつとして居られぬと云ふので、斷乎として、山徒との交りを絶ち、喧囂が頻りに留めるのも聞かないで、急に叡山の黑谷に居る叡空上人の許に赴いた。それは法然の精神生活に於ける一轉機であつた。

（三）　念佛宗の歴史と法然の新精神生活

法然が叡空から受けた感化は少くなかつた。蓋し當時の僧侶中、消極的に目ざめたものは南都北嶺の僧徒に對して深い反感を抱いて、獨善的に閑靜の境地に隱遁生活を送る風があつた。叡空は其の一人であつた。彼れは一面に於て、形式化した貴族的佛教を好まないで形式から解放された平民的佛教を愛した。此の點に於て、叡空は民衆的傾向を明かに帶びて居た。畢竟、叡空は戒律の上で獨善的であつたが、宗旨の上では民衆的であつた。

叡空は融通念佛宗の創唱者良忍の高弟であつた。良忍は行基、慈覺、教信（阿彌陀丸）空也、惠心僧都（源信）らの系統を追うて、二十三歳の時、大原山に隱遁し、日課として念佛六萬遍を唱へた人である。『行基年譜』によると、日本に於ける念佛宗の祖は行基であるらしい。行基は四方を周遊して、阿彌陀佛の大愛を話し、念佛を唱へた。其の後、佛教の法燈を繼いだ慈覺が支那へ赴いて、五台山の念佛三昧法を日本に招來した。『慈覺大師身行要略記』に其の事が出て居る。慈覺と略ば同時代に親鸞が『改邪鈔』に於て讃歎した沙彌教信が始終念佛を唱へて、阿彌陀佛の慈悲に浴し、極樂往生の一路を辿るべきことを人々に示したと傳へられる。

教信の一生は現代人に對して、力ある暗示を與へる點がある。彼れは元來、興福寺の僧徒中に居て、嶄然として頭角を現はし、唯識因明の秘奥を極めた英俊であつた。ところが一朝、美衣美色の夢から覺醒すると、一切の虚榮や奢侈を抛つて、興福

寺を去つてしまつた。彼れは誰れにも其の行方を告げないで、身を晦らし、西へ西へと歩を搬んだ。結局、彼れは播州賀古郡西野ロの里に草庵を結んで乞食同様の生活を始めた。そして其の日の糧を得るために、彼れは農家に雇はれて耕作に從事したり、旅人の荷物を擔いだり、死者を埋葬する役を勤めたりした。彼れは其の草庵のうちに本尊を置かず、手に聖經を持たなかつたけれども、朝から晩まで絶えず念佛を唱へたので、阿彌陀丸と云はれた。かうして彼れの生活は經濟と宗教との融合と一致とをさながらに實現して居た。親鸞が教信を讃嘆したのは、さうした純な聖貧生活、信仰生活のうちに、新しい感激を見出したからであらう。

教信に續いて、貧民の友となつて、童男や童女と共に歡喜、踊躍し乍ら、念佛を唱へた空也がある。彼れは、時として、市中を乞食して歩きながら、貧苦に悩む人々を救つた。それで空也は市聖と呼ばれ、彌陀聖と稱せられた。當時宮中に出入して居た園城寺の高僧千觀大德は、空也の教へを求めて、一切の名聞から離れた。

かうして高德の人たちが念佛を鼓吹するに當つて、其の教理をいくらか組織的に說いたのは、惠心僧都の『往生要集』である。『往生要集』は他力易行の道によつて成佛得道すべきことを始めて明示した重要な著書であつた。其のうちには「夫れ往生極樂の教行は、濁世末代の目足である。」と述べ、「一々の光明、遍く十方の世界を照して、念佛の衆生を攝取して捨てない。」と云つて居る。惠心僧都が、かうした自覺と信念とを得るまでには、一切經を閲讀すること、前後五回に上つたのみならず、全然、名利の巷から離れて、横川の草庵に閉ぢ籠り、一心不亂に出離の道を熱求したのである。かうして彼れが全身を傾倒して、人生に於ける新光明を憧憬した時、始めて彼れの心琴に戞然として觸れた微妙の音韻が、彼れに出離の要道を體得せしめて、『往生要集』の一卷となつたのである。それは、後に至つて、法然、親鸞の思想上にも強い影響を與へた。

惠心僧都の後には、叡空の師となつた良忍が出て、懸命に彌陀の淨土を慕つて、念佛を唱へると同時に佛典朗讀の上に一種悲涼な音聲を以て、幽妙な餘韻を搖曳するところの方法を創造した。彼れは「十界一念、融通念佛、億百萬遍、功德圓滿」と唱へて、一個人が稱名念佛する功德を衆人に融通し、衆人が稱名念佛する功德を個々人に融通して、互ゐに成佛の妙果を證得すべき所以を力說した。此の點に於て、良忍は法然のために豫め行くべき道を開いて居たのである。此の人の門下から叡空が出て、更らに其の門に法然が赴いたのは、自然に一種の默契が

成立して居たやうに見える。

法然が最初、叡空に逢つた時、衷心から述べたところは、深い哀世的感想と燃ゆるやうに胸中を往來した解脱追求の思ひであつた。源信(惠心僧都)や良忍が宗教界の新傾向を直觀して、形式に囚はれた佛教を自由な民衆の世界へ解放しやうと志した傾きは明かに法然の若々しい心の上にも動いて居た。「在來の佛教は全く行詰つてしまつた。そこには何の生命もない、光りもない。私は別に新しい世界へ出てゆかねばならぬ。」と法然は一心に思ひつめて、叡空の手に縋つたのである。其の時、法然は「私は五年の日子を叡山に送りましたが、今に至つて、信仰上何等得るところが御座いません。知識の泉はいくらか私の心を潤ほしてくれましたが、それは束の間の慰めに過ぎなかつたので御座います。私が眞に求めたところの安心は終に來なかつたのです。私は律師や法印などと呼ばれて、宮中に出入して、經文を講釋する光榮を得る前に、先づ私一個の安心を切に求めてやまないので御座います。それに此の世の中は何處を見ても悲痛な色を帶びて、盛者必滅の相を見ないところはありませぬ。朝の紅顏は夕の白骨と變る果はしい有樣を眼の前にいやと云ふほど見せ付けられて居りますので、速かに俗世から遠く離れて、靜かに行ひ濟ましてゆきたう存じます。」と述べた。

叡空は、ぢつと法然の云ふことを聞いて居たが、「君は今更、遁世するに及びますまい。叡山の秀才として、前途に大きい希望と光明とが君を待つて居るのに、其の幸福を打捨てゝ、遁世しやうとするのは、どうしても、私にはわからぬ。」と云つた。法然はそれに對して「御不審は一應最もに存じます。實は私は九歳の時、不幸にも、父を失ひ、其の遺言によつて、出家の身となつたので御座います。悲愁の影はいつ迄も私の周圍を取卷いて居て、九年間の修業も結局、私の厭世的感情を强めたに過ぎませぬ。露よりもはかない此の世に居て、名利のあとを追ひ廻はさうとする心持は少しも私に起りませぬ。それで貴下の御門下に加へて戴いて、淸い世捨人の生を送りたいので御座います。」と答へた。叡空はかうした決心を聞いて、法然の入門を始めて許した。そして法然は、其の時、叡空から、法然房源空の名を付けられた。法然は「法爾法然の聖、生れながらの世捨人の聖」と云ふほどの意味で、源空の名は、最初の師源光の「源」と叡空の「空」とを取り合はせたのである。

當時の黑谷の幽靜な有樣については、聖覺が『源空上人傳』に於て「谷が深うて流れが淸く、路が細うて其の跡が幽かだ。隱棲するには最も宜い場所である。それに法殿には聖經が滿ちて居て、修學するにも亦都合が宜い。」と云ふ意味を述べて居

る。其の代りに衣食の上では可なりに乏しかつたであらうが、それは素より法然の覺悟したところであつたらうから、只管向上の一路を辿つた。彼れは黒谷に於て、約八年間、專ら念佛を修して居た。

其の間、法然は叡空から修學上の指導を受け、また良忍から特に叡空に傳へた大乘戒をも授つた。ところが、彼れが二十五歳の時になると、更らに新しい疑問が生じて、彼れを苦めた。安心の光明は彼れが最初、黒谷へ來た時に豫期したやうに、彼れの心の上に遍照して來なかつた。それで彼れは嵯峨の清凉寺にある釋迦堂へ一週間、參籠して「私は佛教八宗の要旨を諒得した上、近世の上に十分の安心と滿足とを得たう御座います。」と祈つた。

其の後、彼れは間もなく、黒谷の幽棲を出て、奈良や高野山などに赴き、修學した。そして再び黒谷へ歸つて來て、經藏に籠り、度々一切經を閲讀した。彼れは日毎に朝から晩まで經文に對して、一分時も懈怠しなかつた。彼れが「智慧第一の法然房」と呼ばれるやうになつたのは、さうした努力の結果であつた。けれども彼れは尚ほ一膜を隔てゝ、物を見るやうな感じに囚はれて居た。そして尚ほ手當り次第に經典を渉獵してゆくうちに、彼れは善導の『觀經散善義』に手を觸れて、そこに始めて一心に彌陀の名號を專念して、淨土に往生し得べき信念を獲得した。其の際に於ける彼れの法悦は限りなかつた。彼れは『散善義』中にある會心の要句を聲高に唱へて、覺えず歡喜の涙を流したと傳へられてゐる。それは法然が四十三歳の時であつた。かうして彼れが專修念佛の信仰は、彼れの心に光明を投射した。彼れは勇んで黒谷を去つて、吉水と云ふところに草庵を結んだ。そこに法然に取つて新生が始つたのである。

（四）　末法濁惡の世と宗教改革の必要

以上は、法然が淨土宗を提唱するに至るまでの逕路を略叙したのである。それは内部から彼れを撥撫するよりも、寧ろ外部から彼れに觸れた氣味があつて、彼れの心的生活が未だはつきりしないやうである。更らに心的生活の上から考へると、彼れの思想は最初、叡山に於ける五年間の生活によつて、其の目睹耳聞から歸納したところに基づき、そこに佛陀の豫言した「末法」の感じを强め、第一に末法の世に對して、どんな宗教が士民に取つて必要であるか。適切であるかと云ふことを考へたらうと察せられる。勿論、それはひとり法然のみのことではなくて、禪宗の開祖と稱せられた榮西も、天台宗の創唱者傳教も末法到來の感想を抱いた。また法然の後に出た親鸞や日蓮も同樣

の感じを有つた。それは現代人が唱へた世紀末思想に酷似したものだ。此の一點に考へ及ばなければ、法然の思想を始め、親鸞、日蓮らの精神を理解することが出來ない。

佛教では、佛滅後に於ける時代を三つに分けて、正法千年、像法千年、末法萬年であるとして居る。正法の時代には人間が質朴で、よく佛陀の教訓を實行し得るのである。ところが像法の時代に入ると、世態が稍複雑になつて、人智も次第に進み、質朴な風が減少した結果、形式に流れ易くなるのである。それが一轉して、末法の時代になると、世間が繁雑を加へて、惡智が增加し、佛陀の教へを輕視して、懷疑的、神經質的になるのである。以上の正像末の三時を更らに細別したのが、『大集經』に於ける「五箇の五百歳」である。それは(一)解脱堅固の時代(二)禪定堅固の時代(三)讀誦多聞堅固の時代(四)多造塔寺堅固の時代(五)鬪諍堅固の時代などである。其の期間は各五百年づゝである。そして鬪諍堅固の時代からは「末法」の世となつて、一萬年間も、險惡な時勢が續くのである。

解脱堅固の時には佛陀の教へを固守して、解脱するものが多いのである。禪定堅固の時には、戒律が十分行はれなくなる代りに冥想や靜思によつて、佛道を修めるものが增すのである。讀誦多聞の時は冥想や靜思が衰へて其の缺陥を學問によつて補はうとするのである、多造塔寺の時は人々が不眞面目となつて學問や思惟を怠り、無暗に壯麗な寺塔などを作つて、現世の幸福を念願するのである。それが鬪諍の時に移ると、すつかり堕落して、僧侶や俗人が自家の利益のために干戈を執つて、血の色で寺塔を汚すやうになる。此の時は佛法があつても、其の功果が極めて薄いのである。所謂「末法」の世である。これを國史の上に照らし合せて見ると、奈良時代は多造塔寺の時代で、平安末期から鎌倉時代へかけては鬪諍堅固の時代である。平安初期に出た傳教は『守護章』に於て「末法甚だ近きにあり。」と告げた。『扶桑略記』には、永保元年に於ける延暦寺と三井寺との爭鬪の光景を叙して「今年末法に入つて最早三十年を經た」と感慨を洩らし、『神明鏡』には、永承六年頃の事を記して「此の時、末法に入つたので、惠心僧都は泣かれたさうだ。」と云つて居る。惠心僧都の『往生要集』は彼れの所謂「濁世末代」の意識によつて生れたのだと云へよう。其の他『玉葉』や『中古記』などを見ると、僧徒の暴狀を詳記して、或は「佛法破滅」の聲を揚げ、或は佛教界の墮落を悲泣して居る。

かうして「今は末法の世だ。」と云ふ意識は、當時の知識階級や心ある宗教家の胸を強く搖がした。法然も亦此の意識を把持して、宗教改革の聲を揚げやうと決心したのである。彼れは末

法の世に於ける人々の氣根が下劣になつたことを思つた。そしてさうした時代に適切な教へを弘めやうとした。それと同時に、在來の僧侶が主として貴族を對照としたのに對して、主として、庶民を對照とし、無意義な祈禱、修法に附纏ふところの一切の形式や虚飾などを一氣に打破つて了はうとした。それらは、どの方面から見ても、明かに有意義な宗教改革であつた。

當時の貴族は尚ほ舊時代の夢から醒めないで、舊宗教の殘骸に固着し、寺塔建造の功德を信じ、祈禱、修法を莊嚴することによつて自家の幸福を得べき最勝の道だと考へて居たけれども、新興の武士階級や「凡下」と稱せられた民衆は貴族の夢みる形式佛教を好ましく思はなかつた。寧ろ其の煩はしさと虚飾とを呪つた。法然はよくそれを知つて居た。

また當時の貴族は專ら理智的に佛教を研究することの可能力を信じ、形而上學的に觀法し、思索して、自家の哲學を築きあげることに力めたものがあつたけれども、武士階級や一般の庶民は、理智的に佛教を研究して行く能力を有しなかつた。のみならず、彼等は形而上學的に佛教について觀法し冥想して、自家の哲學を打建てるなど云ふことを全然夢想だもし得なかつた。彼等は民衆的なわかり易い新宗教を切に求めて居た。ある意味に於て、複雜なよりも單純な宗教、理智を主とした教へよりも情感を主とした教へを熱望して居た。法然はよくそれを知つた。

以上の如き新趨勢は、法然が出現した以前に徐々として仄かに現はれつゝあつた。敎信や空也や良忍や惠心僧都などは、逸早くさうした新趨勢に應じてゆかうとした人々であつた。敎信の如きは、最も早く形式佛教を打破して、民衆的な教へを信じてゆくことを彼れの一身上に明示して居た。けれども敎信は其の思想や教義を單純に組織化してゆくことをしなかつた。惠心僧都に至つて、敎信らの考へが、始めていくらか組織化された傾向を示すやうになつた。けれども『往生要集』には尚ほ佛教に於て必要とされて居るところの教判を缺いて居た。また修行の方法についても、純一、無雜と云ふことにまで考へ及ばなかつた。そこに尚ほ物足らぬところがあつた。それでも『往生要集』は偉大な力を有して居た。法然に對しても、強い影響を傳へた。

(五)　法然が提唱した新宗教

法然が吉水の草庵に於て、人々に宣傳し始めた思想、教義は、必ずしも彼れの獨創から生れたものではなかつた。それは主として、支那の善導らの思想を參酌したものに過ぎなかつた。けれどもさうした先哲の思想中に新しい光りを見出した先驅者は

法然其の人であつた。蓋し彼れは「智慧第一の法然房」と稱せられて在來行はれた八宗の教義に通達して、其の方面の碩學さへも壓倒し去るほどの鋭さを有したのであるから、若し華嚴宗のやうな幽奥な佛教哲學を打建てやうとするならば、其の方面に於ても、ある程度まで、必ず通徹し得たであらう。けれども法然は、さうした幽奥な佛教哲學を創建して見たところが、それが民衆と沒交渉のものであると、丸で無意義だと云ふことを痛感した。彼れ自身は智慧の絶頂に近いところに起ち、思索、推究の喜びをも知つたが、結局、理知から理知を追うて進んだところが、論理的遊戯の繰返しに留つて懐疑的に煩悶するものが多いであらうことを自ら先づ體驗した。彼れは人々が成佛得道するについて、難行道に行くことを避けて、易行道に行くことを勸奬しやうとしたのは、それがためであつた。

　それで法然が提唱した淨土宗の教判は、極めて簡單なものであつた。彼れはすべての佛教を聖道門と淨土門とに二大別した。そして彼れの出現以前に行はれた八宗（天台、眞言、律、法相、成實、華嚴、倶舍、三論）及び禪宗などを聖道門に屬すべきものだとした。此の門を通つて、自力によつて極樂淨土に往生することを求めるのは、末法の世の人たちには不可能であると法然は主張した。蓋し法然の所謂聖道門に屬する教へは、一番單純に見えるところの禪宗さへも、相當の學的素養と理智、氣力の働きが強盛でなければ、悟道の域に入り難い。殊に他の八宗になると、其の教義が深遠で戒律が嚴で、組織も複雜であるから、一層深い學的素養と非凡な思索力、解剖力、忍耐力、精力などを要する。それは心が純一でなくて、氣根の薄弱な末法時代の人々に取つて堪え難い重荷だ。殊に學的素養のない士民には一段の困難事だと法然は見たのである。

　さうしたことから當然必要となつてくるのは淨土門の教へである。淨土門は惠心僧都以來唱へたところで、專ら阿彌陀如來の願力に縋り、彌陀の名號を稱念して、淨土に於て快く往生することを主眼とする。阿彌陀如來は宇宙の本體乃至眞理の極致を人格的に象徴したものであり、淨土は佛心所證の國であると共に佛心を具現した境地である。けれどもさうした高遠な妙理は到底當時の士民に理解せらるべき可能性がなかつたから、假りに阿彌陀如來を人格的に存在したものと見做し、佛土に居られると説いた。かうした淨土門の教へは極めてわかり易く、入り易かつた。何等の學的素養がなくても、自ら努力精進しなくても、またどんな平凡人や惡人であつても、唯阿彌陀の本願――南無阿彌陀佛と稱念するすべてのものを淨土に於て往生せしめると云ふ誓願――を信じて、其の大悲の手に縋り、稱名念佛す

れば悉く救はれるのであるとした。そして法然は特に稱名念佛の上に主點を置いたのである。

法然の思想を結收した『選擇集』を見ると、「末法萬年の時代には、他の聖道門に於ける諸宗の修行によつては、到底一人の得道者をも見ることが出來まい。それだから、先づ自力修行の心を捨てねばならぬ。禪定觀法などの門を閉ぢなければならぬ。一切自己の心的工夫は擱いて、すべての知識をも抛つて、只管稱名念佛の一行に歸しなければならぬ。」と云ふ意味が述べられてある。畢竟、法然は「いくら自分らが懸命に知識を求めても、知識の窮極に到達することが出來ない。徒らに懷疑を増すばかりだ。また如何に學問を永く續けても、學問の奥妙な絕對的境地に達することが出來ない。唯物知りになるばかりだ。そこに何の安心があらう、慰めがあらう、淨樂があらう。だから、凡人は知識や學問を抛つて了ふ方が宜い。」と信じたのである。此の點は、ある意味に於て、近代文明の病弊をも鋭く穿つて居るやうに思はれる。

法然が稱名念佛の一行を特に重視し、勸奬したことは、當時の士民にも行ひ易い成佛の方法だと痛感したからであるが、一面から見ると、當時の僧俗を通じて、念佛宗を信ずる人々の間に或は眞言を唱へたり、『法華經』を誦したり、冥想や靜思を凝らしたり、戒律を固く守つたりして、一直線に極樂淨土に往生し得べき捷徑を辿るものがなかつたからだ。善導大師は、それらを雜行と稱して斥けた。そして一直線に淨土往生を實現すべき正行を勸めた。法然も亦善導の說によつて、斷乎として雜行を排し、五種の正行を修すべきことを强調した。それは(一)讀誦(二)觀察(三)禮拜(四)稱名(五)讃嘆供養などである。それは淨土宗の所依の經典だとしてある『無量壽經』『觀無量壽經』『阿彌陀經』の三部經を讀誦すると同時に、彌陀を憶念し、觀察し、禮拜し、稱名し、供養し、讃嘆すべきことを必須の行だとしたのである。そして法然は以上五種の正行について更に正業、助業の區別を立て、稱名念佛を以て正業とし、其の他を助業としたのは、修行の單純化を欲した爲めであり、徹底味を重んじたからだ。これほど單純な、わかり易い、行ひ易い敎へはない。

法然は稱名念佛を行ふについて、純な至誠を以てする必要を明かにするがために、三心具足を說き、(一)至誠心(二)深心(三)回向發願心と云ふことを列擧したが、結局それは、阿彌陀如來の本願を信じ、心から南無し、歸命することを高調したのである。こゝ迄、單純に簡易に組織的に佛敎を民衆化した敎へは、他になかつたのである。

（六）浄土宗に於ける缺點と矛盾

法然の浄土宗の提唱は、自力を主とし、理知を倚ぶものゝ眼からは甚だ慊らぬところが多い。既に法然がそれを唱へた時分に「彼れは凡衆を教化する一方便として、左様なことを云つて居るのだ。彼れの眞意は恐らく言外にあるのだらう。もつと深奥な意義と理趣を有するのだらう。」と解するものが少くなかつた。また他面では、淺薄、低劣なものとして非難する舊佛教の人々が多かつた。それらの解釋や非難は必ずしも不當ではなかつた。けれども佛教哲學の論理的遊戯と煩瑣な形式とを尊重して、時代の趨勢を知らぬ舊佛教徒とそれらの下に呻吟する民衆を救ひ出すには法然の行き方が必ずしも不當ではなかつた。それは大膽な宗教改革の叫びであつた。

彼れの浄土宗の提唱によつて、在來の僧侶や寺塔は無用の長物となつてしまつた。この一事は、既に宗教改革の一要素である。破戒に墮した僧侶、形式に囚はれた供養、それらがなくても、俗人の儘で至心に稱名念佛さへすれば救はれる。どんな惡人でも、罪人でも何等の差別なく救ひ上げられると云ふ新しい福音は、煩はしい戒律の無用であることを明かにした。そして一切の佛教を南無阿彌陀佛の下に包括してしまつた。これほど大きい心的革命はない。果然、浄土宗は新しい時代の要求に當てはまつて、上下の區別なく、一世を舉げて、法然の教へに隨喜し渇仰する有様になつた。

法然の宣傳方法は極めて穩かであつた。彼れは他宗に向つて、攻撃を加へるやうなことをしなかつた。若し人が自力を恃んで聖道門に於て、成佛の道を求めやうと云ふならば、彼れはそれに反對しなかつた。けれども自力を疑つて、他力本願の信心によつてゆかうとするものには、浄土門に歸入すべきことを說いた。さうした點は極めて自由であつた。それでも、彼れが敵を作つて、晩年流罪に處せられたのは、彼れの門下が好んで他宗を誹謗したり、自己の破戒を辯護したりした事が、浄土宗の隆盛と共に南都北嶺に於ける舊佛教徒の憎惡と反感と嫉妬とを挑撥したからだ

要するに、法然は親鸞、日蓮らの先驅者として出現して、宗教改革の一半を實現し得た巨人である。其の人物、風格の俊敏、穩雅な點、凡人の心境を察して、自ら進んで、心から凡人を切愛した點、自他の非力と弱さとを自覺して、眞理の本體に歸入し、其の力に縋らうとしたところなどは、何人にも親み易い心持を起させる。當時上下の人々が彼れの「凡人浄土」の思想に強く共鳴したのは當然だと思はれる。

けれども彼れの思想、教義は今日から見ると可なりに不滿な點が少くない。それは現世を穢土と觀じて、來世に於ける淨土往生を宣揚したなどは、餘りに厭世的であり、小乘佛教的であることだ。大乘佛教の見地に起つならば、現世即淨土、極樂即現世でなくてはならぬ。必ずしも、淨土往生を故らに來世に期待すべき必要がないのだ。勿論それについては、法然の開教弘通の時代が保元、平治の亂を始め源平二氏の興亡を見た無常悲哀の世であつたから、自ら現世を穢土とする方便說を生んだのであると解釋するものがある。そして法然が『選擇集』に於て、「稱名念佛に專心する人々は、始終彌陀の攝取の光りに遍照されて、法悅に輝いた生を送ることが出來る。」と云ふ意味を述べて居るのを說くものがある。それらを肯定したとしても、現世穢土說と光明攝取說とは、互ゐに矛盾し、背離することを免れない。

それに法然の對照とするところが貴族よりも、より多く武士、凡下らの一般民衆にあつたとしても、人間智力の範圍を限定して、心的活動の靈妙を認識しようとしなかつたのも一つの誤つた見方である。佛教の長所は、一面に於て、西歐科學などの影響を待たずに心理學的に超邁な發達を遂げたところにある。それは單に小乘佛教の一部に觸れてもわかることだ。天台の三大部を夙に學得した法然は一念三千の妙理をも知つて居たであらうから、人間智力の範圍を狹く、淺く、低く限定したことは、矢張方便としても、一つの矛盾である。

次ぎに法然の教判に於ては、單に宗教哲學的、心理學的考察の一部に觸れた丈で、進化學、民族學、社會學などの方面から、佛教界の狀態や社會の有樣を考察しなかつたことも亦物足りない。畢竟、法然其の人の理智は發達して居たとしても、立宗の結果は、其の單純な教判から來た影響として、センチメンタルな傾向を生じ、いくらか詠嘆的となり、理性的分子が稀薄になつた傾向を示した。そして稱名念佛の度數が多ければ多いほど宜いとしたところは、尙ほ仄かに形式に拘泥した跡を留めて居た。

かうした缺點はあつたが、法然の新宗教が厭世、悲觀に傾いて居た末法の世に慰安の光明を投射したことや、枯死した宗教界に新しい生命を附與したことや、思ひ切つた心的革命を勇敢に決行したことなどはいつまでも記憶せらるべき功績だ。私は彼れが八十歲の臨終の床で書いた遺訓を泌々讀み返して、彼れの俤を偲ばうと思ふ。

もろこし我が朝にもろ〳〵の智者達の沙汰し申さるゝ觀念の念にも非ず。又學文をして念の心を悟りて申す念佛にも非

す。たゞ往生極樂のためには南無阿彌陀佛と申して疑なく往生するぞと思ひとりて申す外には、別の子細候はず。但三心四修と申す事の候は、皆決定して南無阿彌陀にて往生するぞと思ふ内に籠り候也。此外に奥深き事を存ぜば、二尊のあはれみにはづれ、本願にもれ候べし。念佛を信ぜん人は、たとひ一代の法を能々學すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらに同して、智者のふるまいをせずして、只一向に念佛すべし。

此遺訓は法然の主要精神を結晶したものだ。かうして法然は、其の高弟法蓮房に向つて「私の歿後、決して寺を建てるな、念佛の聲するところに私は居るのだ。」と云つて、靜かに瞑目したのである。そこに宗教改革者としての面目が輝いて居る。彼れの門下から多くの有力の高弟を輩出し、眞宗の開祖親鸞を出したのは偶然でない。而も世人が、殆ど法然を閑却して、親鸞のみを高調し、讃嘆することに傾いて居るのは一種の忘恩だ。法然は鎌倉時代に於けるすべての新興宗教の陣頭に起つた人だ。淨土宗の源流だ。親鸞の眞宗は其の一支流だとも云へる。宗教に志ある人々はもつと法然を回顧し、研究すべき必要がある。ここから何等かの新しい暗示が得られるにちがひない。

（七）親鸞の出現した時代と現世的傾向

親鸞については、近時多くの著作が續出した。私は眞宗について多くを知らぬ上に必ずしも親鸞の共鳴者でなく、また讃美者でもないが、大體に於て、それらの著作が、親鸞の眞相を得て居ないやうに思はれる。勿論、一々それらの著作を精讀したのでないから、積極的に斷言することを差控へたいが、唯親鸞の門下を以て自任する人々は親鸞の短所、缺點をも美化して論述し、また親鸞を文學的に眺める人々は、自己に都合の宜いやうな解釋を下して、何れも偏したところがある。これだけは、こゝに確言することを憚らぬ。

直言すると、親鸞の思想、教養、人物は日蓮の思想、教養、人物よりも遙かに解し易いところがある。それは親鸞の思想、教養が日蓮のよりも單純で、情感本位であると同時に其の人物も圓滿で穩雅で柔か味があつて、親み易いからだらうと思はれる。それで文學者のうちにも、親鸞に共鳴して、近代人の眼に映つた親鸞を端的に表現しやうとするものが輩出したわけでもあらう。勿論、其の素地を作つたのは、倉田氏の「出家とその弟子」や西田氏の一燈園生活及び其の宣傳などであらう。また精神的に動搖し、煩悶しつゝある若き人々が、一個の心的偶像

を渇仰して、そこに安心と慰めとを得やうと焦慮したことも、親鸞文學の流行を刺戟すべき一因となつたであらう。かうして親鸞文學が先驅として、次ぎに宗義上から見た親鸞論が續いて出た。けれども其の割合に、一般人は親鸞の眞相を知らないやうである。旺んに親鸞を話題として、色々の感想を述べる若き人々の間にも、親鸞について、はつきりした輪廓を掴み得た人が少いやうだ。畢竟、流行を追ふところの雷同者流が多いのである。

それで私は文化史的考察の上に見た親鸞の眞相について語つて見たい。勿論、私は佛教知識に乏しいから、私の見た親鸞は或はより多く其の眞相を逸して居るとの非難を蒙るかも知れない。けれども私は親鸞の美所を誇張したり、缺點を純化したり、或は自己表現のために親鸞を假用することだけはしない。それだから、此の事は、親鸞の眞相を闡明すべき一要素とならぬとも限らないのである。

親鸞を解するには、先づ彼れが出現した時代を見なければならぬ。彼れは高倉天皇の承安三年四月一日、皇太后大進日野有範の子として生れた。法然が片田舍で生れたのとはちがつて、京の貴族の家から出たと云ふことは注意すべき一要點である。彼れの運命は必ずしも祝福されては居なかつた。四歳の時、父を失ひ、八歳になると、母を失つた。爾後、彼れは孤兒となつて、伯父若狹守範綱の許で育てられた。聰明な彼れは、かうして早くから悲痛の生を味ひ、孤獨と寂寥の味を知つた。

親鸞の青少年時代は世相の上にも悲愁な影が漂つて居た。彼れは全盛の春を誇つた平家の人たちが夜嵐に見舞はれて散りゆく櫻の花のやうに、はかない末路を示したのを目撃した。凱旋將軍の勢威を見せて、花々しい功勳を誇つた義經が頼朝のために悲しく亡びたのを知つた。それらは、親鸞に對して深い哀痛の影を投げかけたにちがひなかつた。それに當時は爛熟した平安文化が行詰つて、それらが烈しく破壞されるべき趨勢を示して居た。そこに不安や動搖や慌しさがあつた。さうした狀態も亦親鸞に落着きを與へなかつた。要するに、時代の空氣は、彼を樂天的ならしめるよりも、より多く厭世的ならしめ、感傷的ならしめたことは云ふまでもないのである。

親鸞が出家したのは九歳の時であつた。其の動機は人生の無常を早く感じた爲めだと傳へられる。爾後、彼れは慈圓法印に從學して、十歳の折叡山に上り、十八歳までに華嚴、天台の要旨を諒得した。それから奈良に遊學したり、横川飯室の妙學坊に籠居したりして、學的造詣を深め、二十五歳になると、學解非凡のために少僧都となり、聖光院の門跡になつた。其の後も

各宗の要義を極めて、向上の一路を辿つたが、二十九歳の時、彼れの心内に大きい動搖を生じた。

それは法然の煩悶と略ぼ同樣のものでなかつたかと思はれる。二十年間の學問は親鸞を博識の人としたか知れないけれども、彼れに何等の安心も光明も與へなかつた。彼れは、それが堪らなくなつて、百日間、六角堂の觀世音菩薩に參籠して祈願した。そして滿願の日に觀世音の告げによつて、吉水に法然聖人が居ることを知つて、急に法然を訪ふたのである。

彼れは法然に對して、自己の心胸を語つて其の教へを請ふた。其の時、法然は親鸞が聖道門の自力難行によるとの不可を說いて、淨土門の他力易行の法を示した。それによつて親鸞は今まで心付かなかつた新しい光明の世界があるとを知つて、僧都や門跡の榮職を惜し氣もなく捨てゝ、隱遁生活に入つた。其の時、彼れは法然から綽空の名を貰つて、新生に入つた。そこに親鸞が如何に熱烈なる求道の心を抱いて居たかが察せられる。それは彼れの第一轉機である。

(八) 親鸞の第二轉機と其の教團

彼れの第二轉機は法然が他宗から咀はれて土佐へ流された時、彼れも亦連座して、越後の國府へ流された際にある。京の貴族の家に生れて 比較的に赤裸な貧人生に接する機會がなかつた彼れは、始めて北國の曠野に放浪して生の苦慘を泌々體驗した。彼れはそこで勞働の尊貴を知つた、聖貧の禮讃すべき所以をも知つた。そして彼れの貴族的な氣習の上に民衆的な傾向を加へ、優しい氣象の上に一味豪健な分子を添へるに至つた。此の時代の素養が親鸞に力を與へて、東北、關東地方に淨土宗を宣傳せしめたのである。

彼れが常陸稻田に草庵を構へて、教化に從事する間に眞宗建設の基礎が成つた。其の思想を結收したのが五十二歳の時に出來た『顯淨土眞實教行信證』六卷である。それは法然の『選擇集』に比すべき重要の著作で、親鸞の獨創的見地を示したものだ。彼れが眞宗の開祖としての地位を確實にしたのは此の書あるためだと云つて宜い。

それと前後して、關東地方に於ては、親鸞教團の興起を見た。此の教團の組織は、フランシスの教團に似て居た。親鸞教團の人々は門侶、等侶、同行同朋などと呼んだ。それはフランシスの教團に於て、Frate や Suora などの語を用ゐたのと似て居た。眞宗の交名帳を見ると、親鸞から直接教へを受けた門侶が各地にあつて、常陸に二十人、下野に六人、下總に五人、岩代に六人、武藏、陸中、越後に各一人宛あつた。また晚年、親鸞

が京都に在住したので、同地方に八人ばかりの門侶を生じた。それらの門侶が各地に於ける小團體を組織して、それを門徒と稱した。眞宗の信者を門徒宗と呼ぶのはそれがためだ。門徒の中心人物を先徳と稱したが、それはフランシスの教團に於ける修道院の監督をVicario と稱したのと似て居た。

當時親鸞教團に於ける門徒は彼等の集會すべき道場を共有して居た。そこへ本尊を置いて、法然の命日に當る二十五日に毎月一回集つて、互ゐに稱名念佛して、其の信仰を話し合ひ、彌陀を供養し讃嘆した。親鸞示寂の後は、毎月二十七日——親鸞が入滅した前日——に集會した。かうして親鸞教團の組織は民衆的で極めて簡易なものであつた。いくらか原始的な俤さへもあつた。

親鸞は其の晩年を主として文書傳道に捧げて、九十歳の高齢に達して示寂した。其の思想、教義は今日、或は曲解され、誤解され、若くは勝手な自由解釋が下されて居る。親鸞の眞相が、はつきりしないのは主として、それがためであらう。元來、親鸞の思想、教義は法然に負ふところが少くない。親鸞が法然に傾倒して居た度合は非常に深かつた。思想的方面ばかりでなく、實生活の上に於ても亦法然に私淑した趣が見えた。彼れは「彌陀の本願まことにおはしまさば、釋尊の説教虚言(きよごん)なるべからず、佛説まことにおはしまさば、善導の御釋虚言したまふべからず。善導の御釋まことならば、法然のおほせそらごとならんや。法然の仰せまことならば、親鸞の申すむね亦以て、むなしかるべからず候。」と云つた。

また親鸞は『高僧和讃』に於に、「本師源空世にいでゝ、弘願(ぐがん)の一乘ひろめつゝ、日本一州ことごとく、淨土の機縁あらはれぬ。智慧光のちからより、本師源空あらはれて、淨土眞宗を開きつゝ、選擇本願のべたまふ。善導源信すゝむとも、本師源空ひろめずば、片州濁世(ぢよくせ)のともがらは、いかで眞宗をさとらまし。」と歌つて、法然を讃嘆した。かうした關係であるから、親鸞の本意は、法然の宗旨以外、別に一派を起てやうとしたのではなくて、寧ろ法然の眞意を祖述し弘通し、且つ部分的に補修を加へやうとしたものと見て差支えあるまい。手短かに率直く云へば、親鸞は、法然が打建てた他力易行門中に一段易行的な道を開いたのである。それは親鸞の思想を解する上に於て一個の重要點である。

(九) 法然が親鸞に與へた影響

親鸞と法然との思想上に於ける關係は右のやうであるが、實生活の上に於ても、親鸞の行き方は、法然に似たところがあつ

た。法然は其の宗旨を宣傳するについて、力めて他宗と爭ふことを避けた。それは法然の有名な七個條の起請文に於て、(一)未だ一句の文をも窺はざるに眞言止觀を破し、餘の佛菩薩を謗し奉るを停止すべき事(二)無智の身をもて有智の人に對し、別行の輩に遇ふて、好んで爭論を致すことを停止すべき事(三)別解別行の人に對し、愚痴偏執の心もて、當に本業を棄置すべしと稱へて、强ゐて之を嫌嗤することを停止すべき事などを列擧して其の門下を固く戒めたのを見てもわかる。親鸞は此の起請文の精神を守つて、他宗と爭ふことを避けた。そして他宗のものが眞宗に向つて攻擊を加へても、それと爭はないで唯靜かに「親鸞にをきては、たゞ念佛して、彌陀にたすけられまいらすべしと、よきひとの仰せをかうふりて、信ずるほかに別の子細なきなり。」と述べた。

法然が僧俗の區別などに拘泥しないで、無用に近い戒律を打破した行き方は、親鸞の上にも鮮明に現はれた。それは親鸞の肉食妻帶したことが最適例だ。法然が僧俗の區別に囚はれない行き方は、當時に於て、非常な卓見であつた。法然と其の法弟禪勝房との問答は殊に法然の自由な、超邁な心持を明示して居る。今左にそれを引用する。

禪勝房問ふて曰ふ「持戒の者が少しく念佛申すのと、破戒の者が多く念佛申すのと、どちらが上等の往生を遂げますか。」

法然は坐つて御座る疊を指して曰ふ「疊があつての上で、破れたとか、破れないとか云ふことも出て來るぢや。疊がない場合には 破れたも無ければ、破れぬも無い。其れと同じく、今の時は、最早持戒と云ふこともなく、破戒と云ふことも無い。全く末法無戒の世で、在るものは只名字ばかりの比丘ぢや。此の事は既に傳教大師も末法燈明記に書ひて御座る。されば此の上は、持戒ぢや破戒ぢやと申す沙汰は無益の業で、全く此の凡夫衆生の爲めに起し給ふた彌陀の御本願であつて見れば、只だ急ぎに急ひで念佛申すことが肝腎ぢやわい。」

一、禪勝問ふて曰ふ「後生の義は、彌陀の本願を頼みまひらす上は、往生聊か疑念御座りませぬが、偖て此の現世の所をば如何に計らいて過ごしたもので御座りませう。」

法然答へて曰ふ「左樣、現世の身すぎは、只だ念佛のしよい道を取る外に致し方は無い。若し念佛の故障になるものがあつたらば、止めにするまでのことぢや。一つ場所に居ては念佛が致しにくければ、廻國修行に出るが可い。廻國修行が都合惡しければ、一つ場所でやるが宜い。僧で居ることが不都合なりや、俗家へ返へるが可い。俗家で都合が惡い人は出家遁世して申すが可い。一人で居るのが不都合なりや諸人

と一所にやるが可い。食ふ物がない爲に念佛が申されぬとならば、他人の御助力を受けて申すが可い。人に食はせて貰ふて居ては念佛に都合が良くないと思ふたなりや、自分で稼ひで食ふたが可い。妻子も眷族もつまり我が身の念佛を助けて貰へるから有難いのぢや。若し念佛の障はりになるようなりや、女房も持たず、子も生まず、家も何も造らぬが可い。知行も財産も念佛の助業となるなりや大切とも言へる。若し妨げになるなりや、捨てゝ仕舞ふが可い。つまる所、我が身安穏で念佛往生が出來るなりや、何事も皆な念佛の助業ぢや。世間を見やれ。お互に此の地獄の惡業の體軀さへ、皆捨てがたさに一生懸命養ふて居るでないか。まして往生する身の念佛の爲めなれば、如何ようにもして、養ひはぐゝむが可い。皆な念佛の助業ぢやわい。」

法然は、かうした見解を實生活の上に於て把持して居たから、關白九條兼實が、往生の上に僧俗の差別がないことを證據立つるために法然に向つて「何卒、御弟子のうち、一生不犯の聖僧一人を私の女婿に賜つて、實證を拜見いたしたい。」と要求した時、法然は言下に快諾して、親鸞を兼實の女婿に勧めた。それは一見、專斷的であり、破戒を奬勵するやうな意味にも取れるが、當時の舊宗教の徒が、表面に嚴かな戒律を守るやうに見せて、内實女色に耽つたり、美少年を愛したりして、邪淫を恣まにして居る僞善の假面を一氣に剝脱しようとしたのだ。

思ふに、親鸞も法然から關白兼實の女婿となるべき旨を傳へられた際、當時三十一歳だつた彼れは、非常な驚きに打たれにちがひない。ところが法然は「凡夫往生の手本を先づ示されるが宜い。」と云つたので、親鸞は終に決心して、兼實の季女玉日姫を娶つた。姫は十八歳で、白菊の花のやうに美しかつた。親鸞の岡崎の草庵は急にそれがために明るくなつた。かうして親鸞は自發的ではなかつたが、他發的に先づ僧俗の區別に拘泥する舊形式を現實生活の上で打破した。此の事は當時にあつて最も重要視すべき出來事の一つで、形式宗教乃至形式道徳に對する痛烈な挑戰であつたと同時に、精神本位の宗教乃至道徳を打建てゝゆく新傾向の表示であつた。そしてそれは一面に於て、法然の指導、暗示、影響などに俟つところが多かつたのだ。

以上述べたところを見ても、親鸞が思想の上に、實生活の方面に何れも法然に負ふところがあることを確かめ得るわけである。私が法然を解することは、やがて親鸞を解することだと云ふ所以はそこにある。或意味から云へば、法然は親鸞よりも、いくらか其の輪廓が偉大である。親鸞の先輩であり、恩師であるがために立ち優つて居ると云ふわけではなくて、實質的にい

くらか親鸞よりも大きいところが見える。そして戯曲や小說の題材とするにしても、法然には適當な場面や出來事が少くない。世の雷同者流が徒らに親鸞を戯曲化することのみ知つて、法然を戯曲化し、若くは創作の題材としないのは、蓋し法然を知らないからである。或は知つて居ても、何等の諒解がないからだ。

（一〇）思想上から見た親鸞の眞相

親鸞の思想、教義を解するには、先づ彼れの教判を見る必要がある。彼れの教判は、法然の教判よりも複雜で巧妙で、よく纒りが付いて居る。彼れは大乘教を頓教、漸教に二大別し、漸教には（一）難行聖道權教（二）易行淨土要門の二つがあるとし、頓教にも（一）難行聖道實教（二）易行淨土實教があるとした。そして彼れは頓、漸二教中、共に易行に就くことを說き、共の易行中でも亦頓教中の易行淨土實教に卽いて、卽得往生の要道を得べきことを高調した。此の點に於て、法然よりも一層純なところを示して居る。

法然の思想に可なりに舊形式の殘影と矛盾とが附き纒うて居ることは、既に指摘したが、尙ほこゝに其の一二について親鸞が修正を加へたところを擧げて見たい。法然は先驅者の地位にあつた上に舊時代の空氣をより多く呼吸した爲めに、其の新宗教の內容を純一ならしめやうとしながら、尙ほ雜入物を混じて居た。舊佛教の形式主義を打破するに力めた傍らに於て、念佛一萬遍を唱へるとか、「阿彌陀經」を一生のうちに十萬卷讀誦するとか云ふやうなことを功德多きものだとした。また法然は持戒、破戒の區別を撤しながら、『百四十五問答』の中で持戒の德を嘆美し、大乘戒の旨をも傳へた。それに現世祈禱は、當然彼れの形式打破主義の上から一排しなければならぬのに、津戶三郎に與へた手紙の中では、神佛に對する祈禱を許容した。かうした矛盾や、雜入物は、親鸞によつて悉く打破られた。親鸞は「今生に祈なし」と云つて、現世祈禱を斥けた。また「念佛は信が主である」として、經文を多く讀んだり、念佛を多く唱へたりすることの必要なき旨を論じた。持戒についても旣に彼れ自身の肉食妻帶で、法然の矛盾した行き方を除いてしまつた。畢竟親鸞は舊佛教に於ける形式主義を一切破壞して、精神主義の新佛教を鼓吹したのである。そして彼れが往生の直路として、特に重きを置いたのは稱名念佛と信心とである。自力を捨てゝ只管心から彌陀に歸命して、稱名念佛するならば、其の唱へる度數は唯一度でも差支えない。疑ひなく、往生するとが出來るとした。そして平生、彌陀の本願を信ずる一念を把持して居れ

ば、必ず彌陀の光りのうちに攝取されて、此の世に於て淨土往生のことを決定し得るとした。

親鸞は法然に比して、其の機鋒が尖銳であつた。彼れは「善人なをもて往生をとぐ。いはんや惡人をや。」と云ひ、「親鸞は父母の孝養のためとて、念佛一返も、まうしたること未だ候はず。そのゆへは、一切の有情は、みなもて世々の父母兄弟なり。」と云ひ、「念佛はまことに淨土に生るゝ種にてやはんべるらん、また地獄に落つるべき業にてやはんべるらん。總じてもて存知せざるなり。たとひ、法然上人にすかされまいらせて、念佛して地獄に落ちたりとも、さらに後悔すべからず候。」と云ひ、「親鸞は弟子一人ももたず候。その故は、わがはからひにて、ひとに念佛申させ候はゞこそ、弟子にても候はめ。ひとへに彌陀の御もよほしにあづかりて、念佛申し候ひとを、わが弟子と申すこと、きはめたる荒涼のことなり。」など云つた。さうした言葉を正面から解釋すると往々誤解し易い。親鸞が肉食妻帶したからと云つて、性慾を肯定したと考へ、「善人さへ往生するから、惡人は一層よく往生する。」と云つたによつて、罪惡是認の心を持つたと思惟し、他力本願を高調するのを見て、感傷的に安價な救濟を求め得べきものだと思ひ込むなどは、何れも親鸞の本意を知らぬものだ。「宇宙の絕對眞理を象徵するところの彌陀に對する金剛堅固の信心を把持しなければ、無限慈悲の光明に浴して、生死を超越することが出來ない。」と云ふ意味が『歎異鈔』中にある以上は、親鸞の思想をそこに味つて、正しく、彼れを解すべきである。彼れが人々の罪業を咎めないで、それを許し、彌陀の光明のうちへ導かうと力めたことは、彼れ自ら其の一身に十方衆生の罪業を負うて起つ大慈の心によるので、必ずしも、罪惡を是認したり、性慾を肯定したりしては居ないのだ。それを知らないで、漫然として、彼れが凡人であるかのやうに安易な見方をすることは、一種の冒瀆であり、潛慢でなからうか。勿論、親鸞には、人間味が多くて、凡人と共通した情感を見出せるけれども、それであるが故に、凡人的に扱ふのは不當でなからうか。

然し乍ら私は全然、親鸞の思想を合理的に完全なものだと云ふのではない。親鸞の教へは情感本位である。理知本位ではない。彼れは凡夫に罪業が多くて、而も無力であることを極言して、彌陀に對して絕體に歸命すべきことを力說して居る。そして彌陀を讃嘆し、憶念すべきことを強調して居る。單にそれだけのもので、其の社會觀、國家觀、政治觀と云つたやうなものはわからない。畢竟、それは情感本位で、主觀的色彩が勝ち、個人救濟が眼目となつてゐるのではなからうか。日蓮が「一理の一念

三千」に對して、「事の一念三千」を打建て、高調したやうな佛觀は、親鸞教の中に求めることが出來ないのを遺憾とする。

（二）日蓮に對する誤解に就て

親鸞について一言した序に私は日蓮についても所感を述べて置きたい。今日の日蓮觀は一部の人々に於て、徹底的に正しさを保たれて居るが、矢張、日蓮の眞相を理解しないものが少くないのである。それは前に述べた通り、日蓮の人物、思想、教義は親鸞の人物、思想、教義よりも、理解し難い點を有して居るからだ。其の人物は親鸞が詩的哲人の趣を備へて居るのにくらべると、遙かに複雜である。日蓮には英雄的なところがあると同時に詩人的、哲人的なところがある。大きい知性、大きい意志、大きい感情が合體的に日蓮の一身に具現せられて居る。それがため、時に惡魔を叱咤するやうな烈しさが見えるかと思ふと、名もなき一莖の野の草花に涙を注ぐやうな優し味が見える。人情美、自然美を謳歌する詩人のやうな風懐を示すかと思ふと、深奥な佛教哲理の幽微を闡明する學者のやうな趣を示すところがある。彼れの新宗教を宣傳するため街頭に起つて叫ぶ時は、猛烈な戰鬪的意氣を發揮するが、退いて庵室のうちに靜思する時は、平和な哲人風を帶びて見える。かうした複雜な人物は、稍もすると、皮相を撥撫した丈ではわかり兼ぬるのである。

日蓮の思想、教義も亦淨土眞宗などよりは餘程複雜である。鎌倉時代に於ける最後の新宗教として、時宗なるものが現はれたが、それは念佛宗の一分派たるに留つて居た。これに先立つて出た日蓮の宗教が後陣を固めたわけだ。此の期の宗教は一樣に民衆的であるが、日蓮の宗教は、法然、親鸞の宗教が他力易行を主としたのに對して、自力難行を主とした。前者が淨土門に立脚して、釋尊以外に阿彌陀佛に渇仰したのに對して、日蓮は聖道門に立脚して、阿彌陀佛や眞言の大日如來などに就くよりも、直ぐに「釋尊に歸れ！」と叫んだ。そして釋尊の本懐が『法華經』のうちに説かれてあることを高調した。云ひ換へると、佛教の支流から離れて、本流に歸らうと力めた。それがために、日蓮は『法華經』の中に包有されて居る三大秘法や一念三千の深奥なる哲理を説いた。かうした哲理は端的に諒解し難いため、日蓮の思想が、いつ迄も其の皮相を撥撫されつゝあるやうな形になつて居る。

殊に日蓮を遠くから眺めて居るものは、先づ其の四箇格言の叫びを聞いて、一概に日蓮を排他的、唯我的、鬪爭的、潛慢的な人であるかのやうに解釋する。皮相的に見ると、さうした感じが起るのだが、實際、日蓮が出現した佛教界の形勢に考へ及

ぶと、彼れが他宗に向つて、猛烈な折伏を加へたとの甚だ合理的な所以を諒解し得る心持ちがする。「親鸞は弟子一人も持たず候。」と云ふ態度にくらべると、日蓮の態度は一應、排他的。唯我的に見えるけれども、日蓮の内部精神に味到するならば、彼れの四箇格言が寧ろ大悲大慈の心のうちに醸し出されたものと見ることが出來よう。

そこで、日蓮を理解するには、矢張彼れが出現した時代を見る必要がある。彼れは貞應元年二月十六日、安房東條郷小湊に居て村人の師範と漁夫の生活を兼ねて居た貫名次郎重忠の子として生れた。彼れが出生の前年には承久の亂があつた。そして彼れが三歳の時に北條義時が死んで、泰時の民政的手腕を示す時代に入つた。それは貴族の手によつて作られた舊文化、舊社會が殆ど破壊されてしまつて新文化、新社會が生れかけつゝあつた希望多き新興時代であつた。一方に於て、異常の天災地變が續いた上に北條氏を中心として、種々の陰謀と血の慘劇とが繰返されたが、他の一方に於ては、時代改造の黎明色が生々と動いて居た。法然が出現した時代のやうに丸で厭世、悲觀、絕望に包まれて居なかつた。親鸞が出現した時代のやうに淋しさや悲みや慌しさが大分無くなつて居た。約言すると、日蓮の出現した時は、新文化建設の時代であつたのだ。日蓮の宗教には、さうした時代の新しい空氣が背景となつて居た。

日蓮は十二歳で清澄山に登つて佛學を修め、十六歳で出家、十七歳から鎌倉、叡山、奈良などに遊學して、三十二歳の時まで研鑽を續けた。かうして彼れは其の新宗教を提唱するために約二十年間を修養のうちに送つた。彼れが、かうした修養は畢竟、當時に於ける佛教の紛亂と國家に於ける北條氏の下剋上の態度に不審を生じたからである。そして彼れは此の謎を解かうと努力したのだ。結局、佛教の紛亂を靜めて、佛陀の本旨を明かにするには「諸宗何れの宗なりとも、偏黨執心あるべからず。いづれも佛說に證據分明に、道理、現前ならんを用ふべし。論師譯者、人師等にはよるべからず。專ら經文を詮とせん。」と彼れは決着した。「釋尊の懐に歸れ！」と云ふことが彼れの信條であつた。

彼れが直ちに佛說に就て研究して、釋尊の本懐が「法華經」にあることを悟り、且つ佛教の正統が、天台、傳教に傳へられて居ることを知るまでには、多年の靜思、冥想に浸つた。時には烈しく煩悶した、懐疑のどん底に沈んだこともあつた。心的葛藤の苦みは日蓮が深く體驗したところである。それらの境地を經て末法濁惡の世には、佛陀出世の本懐であるところの「法華經」を弘通しなければ、人々は永遠に救はれないと云ふ自覺に到達したのである。此の自覺は日蓮の私意から生じたのではなく

て、釋尊自ら『法華經』の前說『無量義經』や『法華經』方便品に於て斷言されたのである。そして其の法弟中、特に優れた本化上行菩薩を召出して、末法の世に於ける弘通を懇命されたのである。

日蓮が出現した時代は既に末法の世に入つて居た。正に『法華經』の弘通せらるべき時が來た。其の弘通せらるゝ地は、彌勒菩薩の『瑜珈論』に「東方に小國がある。其中唯々大乘の種性がある。」と云つて、印度以東に於ける小國だと豫言した。肇公が飜經の記に「佛日西に入つて、其の遺耀が將に東に及ばうとして居る。」と述べて居る。傳教は、それらに就て「代を語ると像の終り、末の始め、地を尋ぬると唐の東、羯の西。人を原ぬると五濁の生、鬪爭の時だ。」と云つた。要するに末法に入つて『法華經』が弘通せらるべき國は日本であることを示した。日蓮は當時何人よりも早く此の自覺に到達したのである。

かうした自覺によつて、日蓮は其の新宗教を開創した。そして此の立脚地から他宗のすべてが、佛陀の本懷でないことを佛說によつて確かめ、こゝに四箇格言の提唱となつたのである。それは感情的に念佛無間、禪天魔などと叫んだのではなく、一々經文に照らし、佛陀の正義に據つて、唱へたのである。此の一點をよく知らないと、日蓮を誤解することになるのだ。

日蓮の宗教は、理知本位で、合理的である。それは彼れの教判や三大秘法や一念三千の說に味到すれば端的にわかる。其の教判は、法然親鸞よりも周到で徹底的である。法然らは「教」と「機」の二つしか考案しなかつたが、日蓮は更らに「時」「國」「序」の上にも考察を加へた。社會的、民族的、歷史的に宗教上の機緣を考察した。そしてそれによつて『法華經』が弘通して、紛亂せる佛教を統一すべき所以を闡明した。

日蓮が唱へた三大秘法や一念三千の思想は到底こゝに簡單に述べることが出來ない。唯私は日蓮が、それによつて、人類の歸着點を定め、最善、最美、最眞の妙理を闡明して、而も理觀のみに囚はれずに事觀の一境を開展して、思想的にまた事功的に妙理に順應して活動すべきことを明示したことを深い共鳴を以て、認識する。私が日蓮の宗教を合理的だと云ふ所以はそこにある。此の重要な思想、哲理に味到しないで、漫然として日蓮の皮相を摑もうとするものは、結局、日蓮の皮相を撥撫するに留るであらう。私が法然、親鸞から說いて、最後に日蓮に言及する所以は、日蓮の合理的な思想が現代文化の行くべき方向を暗示して居るからである。世界人類の平和と光榮とを實現しやうとするものは、靜かに日蓮の思想そのものを研究するならば、そこに有力な暗示が得られよう。誤られたる日蓮觀を無意味に抱いて、日蓮の思想を閑却しやうとするのは私の與みし難い所である。

轉居

井上唖々

廿有三年舊棲の家を去らんとするに當り、感慨轉た切なるものあり、庭際の樹木數ふるに足らずと雖も、椿は重瓣にして紅白を絞り、萩釀れて雨に惱み、四季各々餘情あり、時に黃鳥、繡眼兒、四十雀の小禽樹間を縫ふて淸音を弄し、狂蝶痴蜂交々來つて花蜜を吸ふ、況んや柴門を推せば侯邸の後園に出づ可く、老樹欝蒼として天を摩し、芝生あり、池あり、池に石橋を架し、丘は丘に連り、登るに亭あり、祠あり、漫步觀賞共に可ならざるなし、これを繁華雜沓の巷、寸尺の餘地なく、眼に綠陰を想ふて得ざるに比し、淸福殆ど測り知る可からず、今去るに臨んで一作あり、

長留二十幾春秋、夢裡生涯往事悠
草木無情人有淚、蟬聲如雨喚離愁、

靑春より初老に至る迄、殆ど半生の波瀾は之を舊居に閱し盡す、卽ち祖母を喪ひ、弟を失ひ、近く父を亡ふ、妻を娶り二兒を設く、凡て舊居の事件なり、先考前田家に入りて世を終る迄凡そ廿三年、予も亦脛を嚙りつゝ膝下を去らず、深川に僑居せることあるも、舊居を退去せしには非ず、前田侯の本邸は本鄕本富士町に在り、維新前は廣袤十二萬坪、今は僅に二萬坪に過ぎず、十萬坪は擧げて政府に獻じ、政府は此に大學校を建つ、邸は繞らすに石塀あり、守るに巡査あり、門衞あり、防備頗る嚴にして盜難の憂を絕つと雖も、從つて四圍と隔離し、喬木森々、梟聲を聞くを以て、市井に位して猶山林に在るが如し、邸內に家職員の住宅あり、一棟二軒の長屋數宇道を隔てゝ相並び建つ、間數疊數殆ど差なし、俗にお小屋と稱ふ、八疊一間、六疊二間、三疊二間、廚の側に湯殿あり、これを舊藩に較するに、足輕の家に相當すと、建築は雪國の制に傚ひ、雨戶の上部に棧を作り、紙を張るは奇と云ふ可し、舊藩時代勤番侍はお作事御門より出入し、暮六を限とす、これより遲るゝ者は入る能はず、遲刻外泊重役に聞えては身の一大事となる、そこに寬大の手心ありて、他より半刻を遲くす、さるに依つて半刻遲きを加賀の暮六と稱へし

とか。今の通用門は午後十一時を以て閉づ、門番は隔日交替なり、邸内居住者は門限に遅るゝも鍵を外さしむるの權能あり、予はこの權能を最も横暴に、頻繁に使用して門番を顰蹙せしめたる第一人者なりし也、遅れて歸るの際門番を煩はすを厭ひ、乘り越えしこと往々あり、夜半門を叩けば、門番の老爺勞に堪へずして口に沸々を絶たず、予その無禮を叱すれば、老爺も亦反抗し此に格鬪となる、門を乘り超えて請願巡査に咎められ、老爺と格鬪して説諭せらる、予は遂に邸内の注意人物となれり。先考背て門限に遅るゝ者多きを嘆じ、門番に命じて一々姓名を記帳せしむ、予常にその筆頭たり、先考直に此制を撤す。時に門衛佯睡して起きず、大戸を亂打し、下駄を以て蹴るも反響なし、門外に佇立すること數十分に及ぶ、予憤然として車を遊廓に走らせ、歩を待合に枉ぐ、青年客氣銷磨し、寒夜老人の夢を破るを憐み、門を開くの代償として錢を贈り、おでん、すしを與ふ、老爺始めの佛頂面に似ず、忽ち破顏一笑して叩頭百拜す、これ舊藩三百石を食みたる侍なり。先考病沒の日より二箇月を經て舊居を去らざる可からず、これ侯家の規約なり、更に一兩月の猶豫を乞ひ、八月下旬居を東大久保に得たり、同じく支族前田男爵の有にして、義弟の監理する處なり、予と前田家との宿縁自ら淺からざるを想はずんばあらず。新宅は舊居に比して稍廣し、生れて四十五年門柱始めて我姓名を揭ぐ、自ら顧みて苦笑を禁ぜず、一日客室を備めんとし床間に中村敬宇先生の筆陶淵明歸去來辭中の園日涉成趣、門雖設常關の紙本の幅を掛け、聯に眾竹の圖を垂る。臨水愧游魚の扁額は咬菜軒の落欵あり、和氣動の額は梅亭の落欵あり、梅亭は前田利嗣侯の雅號にして、咬菜軒とは男爵安場保和なり、先考若松縣に、愛知縣にその恩顧を蒙ること深し、此額名古屋より東京に猿樂町に、東竹町に、千葉に、北條に、北條より更に東京に、飯田町に、森川町に、本富士町に、今又東大久保に、五十餘年を閱して汚損すること夥しく、近く大經師の修理を經て客室に異彩を放つ、眞鍮側の柱時計と共に我家古物の随一也、此額に對すれば先考に面するが如く懷舊哀慕の念に堪へず、男の愛婿後藤新平嘗て愛知病院に長たり、予幼時病に罹るや、その診察を受けしこと一再ならず、當年の凡醫今は子爵、轉た今昔の感なくんばあらず。室内漸く整備するに及び、更に橐駝師を屈ふて小庭を改造せしむ、蓋し前住の人花卉培養に意なく、泉石の妙を解せず、凡草蕪茂し、青苔剝落し、松檜枯れんと欲す。先づ兒の爲めに庭隅三坪を劃し、四目垣を結ふて、中に鷄舍を設けしむ、次にこの楓を移してかの躑躅を植え、杉に代ふるに櫟を以てし、徒枝を剪り、冗根を斷ち、植ゆるに輕く土を覆ひて水を灑ぐ、凡て植物の天性

に隨ふ。配合布置始めて宜しく面目一新す、此に於てか明窓に讀書す可く、淸庭に逍遙すべく、噫復た何ぞ貧を憂へんや。

砂丘の家より

河井醉茗

私の今住んでゐる所は相模の海岸である。海岸の風景といへば何處でも同じやうな、ありふれた單調な風景だらうと誰しもが思ふだらう、私も來るまでは然う思つてゐた。併し來てみると、風景は單調でも、自然の映射は決して單純ではない、たゞ單純でないといふばかりでなく、今の私が東京を去らうとした心持、境界のわからない、片づけることの出來ない、區劃を立てることの出來ないやうな心持に、こゝの自然は伴奏者となつて私を迎へてくれた。

海岸の風景は海のものとも限らなかつた、矢張陸のものは陸のものであつた。また平らな陸の風景は野のものとも限らなかつた、野のはてには海の香が交つてゐた。

砂丘の上には家が二軒しかない、私達はその一軒に住まつてゐる。

永い間、固い土と泥のかたまつた地面に住んでゐたのが、斯うして砂地の上の生活をしてみると、ちやうど海の空氣が柔かく感ずるやうに、地の觸感も柔かい。跫音に反應がないから、ゆつくりものを想ひながら歩いてゐると、歩いてゐることを忘れてしまふ。

芝の根を引拔いてみても、松の根を掘り出してみても、さら〳〵と砂を拂ふときれいになる。いくら掘つても砂はきれいだ。きれいな砂礫の外には石の碎片一つ出て來ない、小さな貝殼の出て來ることはあつても、塵埃らしいものは些ともない。都會の住宅地は掘ると何が出てくるか知れないけれど、きれいな砂の上に砂が積つて出來上つた丘には、砂礫の外に何ものもないのは當然だ。

柔かにきれいな砂の上を、子供等が跣歩いて踏みちらしても松葉掻くついでに熊手で均らすと、らくに筋目が附く。暇があると砂の上へ紋様を描く、曰く新式の唐草模様、曰く立體派の畫、曰く光琳の青海波など。

柔かにきれいなばかりでなく、砂のぬくみといふことは砂丘の上の家に幾晩も眠つてみてよく分つた。武藏野の冬の地面は霜柱や氷に閉ぢられて、身に泌みるほど冷めたかつたけれど、こゝでは蒲團が晝間からの暖かみを失なはない、砂も晝間の光と熱で暖かい。砂丘に松も草も生へなかつた頃から、光と熱はあつた、砂は太陽に最も親しんでゐた。今更でないやうなぬくみが地の底から通つてくるやうで、冬が來ても眠る時の冷たさも起きる時の冷たさもない、あたゝかな夢心地、それは砂地の賜物であつた。

さすがは海岸だと思はれるが、かういふ地には松の外に育たないかといふに然ふでもない。隣りには柿の木や櫻の木が十一月の末にもみぢしてゐる。道を歩いてみると雜草の少ないのは海岸らしいが、月見草がまだ咲いてゐる、黄色の花瓣は動かぬ蝶のやうだ。河原撫子もつい此間まで咲いてゐた。撫子も月見草も二千尺位の高原で盛んに野生の花が咲く、最も輕井澤あたりでは盛りは八月頃で、九月になつて避暑した人達が山を下ると同時に花も萎れてしまふ。月見草も、撫子も、そんな高原とまた海岸には咲くが平野には自生してゐない、高原では盛りが短かく、海岸では盛りが永い、それだけの相違でかういふ草花の生命は山にもあり、海にもあるのだ。

砂地で出來る野菜は甘藷か南瓜くらゐなものだらうと思つてゐたが、砂地で出來る大根もあれば菜ッ葉もある。夏は隱元、十六さゝげ、西瓜でも絲瓜でも、大抵の豆類と瓜類なら出來るさうだ。桑圃もあり麥畠もあり蕎麥畠もある、麥畠は何處の海岸でも海の近くまであるものだ。今はちやうど芽が出たばかりで青い絹絲のやうな麥の芽が日に夜に伸びて行く。

松原の下に葭の生へてゐるのは然もあるべきだが、薄も生へてゐる、薄は穗にも出る、青い時にはちよつと間違ひ易い、野原でもあり、海邊でもあるのだ。

まだよく名は知らないけれど、海岸には海岸特種の植物があつて、海草に似た草や、秋になるといふ紫の花のさく草などが、野薊の莖や野菜の莖にからまつて生へてゐる。ある選ばれたる植物が海岸に在ると同時に、又ある選ばれたる原野の草も海岸に生じてゐる。

砂地は水に乏しい、何處の海岸でも家々に水には不自由する。

井戸は一軒毎にあつても飲料水にならないといふ井戸が多い。而してまたさういふ海岸に飲料水には申分のない清澄な清水の湧く井戸が、數は少なくても必ずあることも事實だ。

此處へ來た時も第一に水の心配をした、果して一つある井戸は役に立たなかつた。家主ではすぐ堀つてくれる筈だつたのを、明日は、明日はで、いつの明日か分らなかつた。五つになる男の子が、水でやかましくいふのを聞きかぢつて、何うして東京の井戸を持つて來なかつたのかと童謠にでもなりさうなことを云つたりした。

直徑一尺ほどの土管が幾つともなく運ばれた翌朝、井戸屋は來てくれた。

何うして堀るのかと思ふと、初めに四五尺は少し廣く砂を堀つて、それからは狹い穴を一間ばかり堀り下げた。砂だから堀り下げるのに造作はない、二間餘りになるとそれだけの繼いだ土管を入れた。あとは機械で堀り出した。

機械といふと大仕掛のやうだが、長い竹の先へ鐵で拵へた水汲杓の深いやうなものを附けてあるだけだ。それで只一人の手で砂を堀つては上げ、堀つてはあげする。可なり時間と力を要する仕事だが無造作なことは極めて無造作だ。砂が堀れてゆくにつれて土管はそれ自らの重みで一寸二寸と沈んで行く、一つ入ると一つ繼ぐ、十幾つかの土管はさうして悉く砂の中へ埋れてしまつた。只地面に三尺許り出てゐるだけだ、それで井戸は堀れたのだ。

それから土管の中へまた細い鉛管を底へとゞくまで入れる、鉛管の中途には水槽ともいふべき水を吸ひためる小さな場所があり、そこで鉛管が繼がれてある。鉛管の中にはもう一つ細い鐵の棒が通してあつて、ポンプになつてゐる。

深さは何の位あるだらうと聞いてみると、ちやうど六間半あるさうだ。見てゐたから嘘ではない、その位は確かにあつたやうだ。東京で六間の井戸を堀るのは大仕事だが、砂丘を堀る井戸屋さんは、家主が大變なことのやうに云つたにも拘はらず、二人か三人來て二日で出來た。

いくら井戸が早く堀れても良い水が湧かなかつた日には仕樣がない、私はそれが氣になるので幾度も念を押してみたが、井戸屋は大丈夫良い水が湧きますともと、井戸を堀るよりも無造作に答へるので安心してゐた。

かういふやうに初め精出して水を汲み出してもらつたら、二三日中には澄んだ良い水になりますよといひながら、井戸屋はポンプを絶えず動かして、堀り立ての井戸からどし／＼水を汲み上げる。もし此れがたゞの土の上なら泥水の流れで大騷ぎだ

が、堀り返した砂の上だから、いくら汲み出しても、汲み出したゞけ皆吸ひ込む。そのうちに井戸屋の腕の方がだるくなつたと見えて止めてしまふ。

良い水が湧くとしても、水が切れるやうなことはなからうかと思つたが、井戸屋の話では此邊一帶の土地には馬入川の水脈があつて、決して水の切れるやうなことはないさうだ。

私は成程と思つた。水が切れることばかりではない、海岸の井戸だからと云つて、如何にきれいな砂礫層を透過してきたからと云つて、海の水では飲料水にはなるまい。矢張河を流れて來た水でなければならない、原野の水でなければならない。

此處から馬入川までは、一つの漁村を通つて行くのだが、海岸へ行く倍はある。海は近いのだ、けれども砂丘の下に湧く井戸の水は野を流れてゐる川から來るのだ。

馬入川の水と、海の水とではまだ一つ話がある。

砂丘は此邊での高所だけれど、八九月の颱風時季に大嵐が來て、海濤でも押し寄せてきたら何うだらうかと思つてゐた。海に近い方は砂丘も稍際立つて高くなつてゐるし、海までの間にはまだ幾つかの低い砂丘と、深い松林とがあつて、さう海濤だつて容易くは來られないとは思ふ。

ある時、土地の人が此處は地面が高いからいゝ、水の時は町へ船で通ふやうなこともあるがそれでも此處は平氣だと云つたので、私は海の水がそんなにも來るものかと吃驚した。

併し聞いてみると馬入川の水のことだつた。川が汎濫して町の方が大洪水になり、往來は船で通ひ、低地の家には軒まで浸水するやうなことがあつたさうだ。すると此の砂丘の家は町との交通を斷たれてしまうのだ。

砂丘の野に面した方は、傾斜が自然でさまで高いとは思はれないが、舊東海道の通じてゐる邊からみると餘程高くはなつてゐるやうだ、だから水は來ないのだらう。

海嘯の時は何うかと聞いてみると、一町足らず先の松林までは來たさうだ、それ以上來たことは知らないと云つてゐる。

してみると此の砂丘は、時として海の水に圍まれ、時として陸の水に圍まれるわけだ。

何處に佇んでゐても自然の脅威はある。それが爲に私の恐怖心に増減はない、たゞ海の恐怖か、河の恐怖か、それは來てみるまでは分らない。

海岸の雨と、平野の雨とは調子が異ふやうだ。海岸も場所に依つて異ふだらうが、此處の雨は大低夜中に降る、朝になると

さつぱりとあがつてゐる。

降り出したらきまつたやうに大降りになる。バラ〳〵と大粒の雨が屋根を打つ、風も添ふ、漁夫のしぐさを思はせるやうな荒々しい雨だ、歇むとなると又ぱつたりと歇んでしまふ、秋雨だからつていつまでもしと〳〵とは降つてゐない、執着のない雨が降る。

雨の後にも雨は殘らない、砂地だから直ぐ沁み込んで、砂がしと〳〵とおちついて濕つてゐるだけだ。水だまりなどは見たくても見られない、あんな大雨が何處へ降つたかと思はれるやうだ。

兎に角武蔵野のやうな雨は降らない、平野らしい雨は降らないけれど、山に近いので折々俄雨がやつてくる。

大山や足柄連山に雲がかゝつたかと思ふと、ハラ〳〵と雨が落ちてくる、直ぐ過ぎてしまふ。

稍北風の寒い朝、掃き寄せてある枯松葉、松の枯枝、松毬などを持つてきて焚火をすると、烟は風に運つて疎林の間を拔け、丘の彼方へ靡いてゆく。さういふ時に薄ぐもりの空からハラハラと時雨とも村雨とも云はれるやうな通り雨の落ちて來るのは好い感じだ。

「神樂岡のかなたに、十夜法會もをはりて、日さしよ、日ましに霽れゆけば――」と泣菫の時雨の詩を私は思ひ出した。野も山も冬枯色になつた寂しい京都の北山あたりに居る氣持になるのであつた。

砂丘の南は直ぐ低い畠地になつて、一町足らず先に松林がある。二三軒の別莊がある、夜は淋しさうな灯火が洩れてゐる。そこの松林はよく先が揃つてゐる、その先の揃つた松林と空と接してゐるのだが、空は果しなく明るい光を含んでゐる、海の空といふことはその明るさと光りで分る。

砂丘の東は矢張砂丘のつゞきで、隣りの家と、隣りの松林とがある、林を越して水蜜桃の畑が見える、辰巳風をよけてくれるのはその松林だ、風を除けてくれる磯馴松は、潮風に吹かれて悉く北に傾いてゐる。餘の傾き工合が何の松も同じ度だから、傾向といふ文字通りに見える、一本の松だつて傾向に反いてゐるものはない、すなほな松ばかりだ。

北は丘が次第下りになつて、畠に續いてゐる、畠の間には松原が斷續してゐる。その先に夜間灯火の影が彼方此方に見えるので家並のつゞいてゐることは分るが、晝間は所々に屋根が見えるだけで、町も村も見えない、見ないが北は幾つかの街道も通つてゐるし、西へ行くほど町になつてゐるのだ。而して東海

道線の汽車が街道に沿つて馳つてゐる。

相模の北は相模野臺地である。その平原を相模川が流れて來て南の海に注ぐのだ。川に沿ふて相模野もこゝまで流れてきてゐるのだ。原野ではないが野のつゞきには違ひない。相模野から吹いて來る風は砂丘の上を掠めて行くので北風は非常に寒い、決してあたゝかい海の風ではない、原野から吹いて來る風だが鋭さはいくらか緩和されて、海近くなつた風の呼吸は大いに柔かくなつてゐる。

北より西へかけて、平野は更に山を越し、就中大山は相模の重鎭を成してゐる。さがみねともいふ、ピラミツト型の雄大な山の姿は相模野を壓して聳え立つてゐる、大山の北には片瀬や高尾の方の連山が稍遠く連つてゐる、又大山の後ろには丹波山塔ケ岳などの嶺が足柄連山につゞいて、眞西に當る大磯の高麗山で山脈が隱されてゐる。高麗山の上には富士の頭だけが載せたやうに現はれてゐる、更に箱根、伊豆の連山は濱へ出なければ一目に見えない。

砂丘の上の私の家を圍んでゐる松の木は、皆下枝が折られてゐる。人の住まなかつた頃に漁師や百姓が柴にするので手のとゞく限り折つて行つたのださうだ。何の松も枝は上の方ばかりで茂つてゐるから展望には都合が好い。

私の書齋にしてゐる小さな室は西の方角に面してゐるので、窓を開けると山脈が一目に見える、書卓の前に坐つたまゝで、空に連なる山脈を見てゐると、自分の永い過去に於て、自然人たらんとした思ひ出の凡てを彼の山脈も默契してゐる。

山までの距離は何の位あるか確かなことは知らないが、ある時は遠いやうであり、ある時は近いやうである。遠い時は春のやうな靄が山脈の上に淡くただよつて、山の色は淡青色か淡紫色かを呈してゐる。近い時は秋の空がよく晴れて、山の森林帶と草本帶との區別がはつきりと見えるし、冬枯に近づいた草山の色は日に赭く反射してゐる。又雨に近い時は大山の色が濃い藍の一色に塗られたやうな色になり、それに雲がかゝると間もなく降つてくる。何んなに空が曇つてゐても大山に雲がかゝらなければ雨は降らない。

山脈は永遠そのものゝやうな相をしてゐる。山脈は寂しい、また靜かだ。私の見てゐる山脈も時としては寂靜に過るが時としては忘れてゐた人から話をしかけられるやうな、過ぎ去つた喜びの日を再現するやうな、人間の愛を喚び起さなければならないやうな親しさで迫つて來ることもある。

動かない山脈が動く心を誘ふものか、動く心が動かない山脈を誘ふものか、兎に角山に面してゐると動いて來る心持、これ

は毎も自分に取つて好もしい情感であつた。

さうして山を見てゐる時、突如として浪の音のひびいて來ることがある。

全く海岸といふことを忘れはてゝ、山の方にばかり對つてゐる時に、遽に波の音の聞えて來るほど、自由な、清新な氣持になり得る時は外にない。

海岸といふ感じを最も強く與へるものは波の音だ。海邊へ出てしまへば、いつもあり來りの海の風景に接して、見る度に驚異の感じも起らないが、家にゐて浪の音を聞いてゐると海はさま〴〵な意味で冥想を誘ふ。

新しい生命の寄せて來るひびき、海の力の追ひ進んでくるひびき、浪の音を聞いてゐると新しく生きやうとする力が通つてくるやうだ。

浪の音は日に幾度もかはる、殆ど聞えない時もあるが、何んな平穩な日和でも午後の三四時頃になると、しづかに寄せる浪音がザーザーと松原越しに響いてくる。雨のふる前、雨のあと、雨のあとは音が高い、風の吹き出す前も音は高い。南風の烈しい日には、そこの松原まで浪が來たかと思ふほど凄まじく響いてくる。

靜的な山脈を直視してゐること、動的な海の音に聞き入つてゐること、而して私は超越したい。

雲も亦空のやうに山の雲と海の雲が相交つて動いてゐる。

松林の上の明るい空に、海上の雲が淡すりとたなびく、横に、水平に、延びやかに流れてゐる。海の上の雲は何となく平和を語つてゐるやうだ。ひろ〴〵と、單調に、明るい光を含んでたなびいてゐる。而してなか〳〵動き出さない。

山の雲はそれと反對に、色には濃淡があり、險怪な形を現はし、群がり重なつては山のやうな形をしてゐる。山から出る雲、山にかへる雲、どちらもむく〳〵してゐるが、山から立ちのぼる雲の方が迅速に動いて、變幻極まりなき相をしてゐる。光の反射も強く、光の消えるのも早い。

山に近い雲と、海上の雲とは、まるで異つた映象を呈してゐるが、動き出して中空へ來ると何れが何れやら分らなくなつてしまふ。大空は自由だ、山の雲もない、海の雲もない、たゞ大空で思ふがまゝに消えたり、思ふがまゝに擴かつたりしてゐる。

夕雲の美くしさは、高尾邊から伊豆の端までつゞく山脈が西に連つてゐるから、山脈の雲の美だ、そしてまた海へ映る光の美だ。

殊に雲と空の美しいのは夕方雨あがりの時だ。洗はれたやうに清淨になつた大氣の下に、野も山も海も砂地も、松の葉も草の葉も、凡ての物象が透徹るやうに輝いて見え、天地は新しい光に創造されたかのやうで、海の女神、山の男神が雲の切れめから現はれてきさうに思はれる。

十、十一月は小鳥の來る時季だが、小鳥もまた海の鳥や野の鳥が交る交る來るやうだ。東京で、ふだん庭に來て鳴く鳥は雀ぐらゐしかない。郊外では偶に他の鳥の聲をきくが、それも春の鶯、秋の百舌鳥と云つたやうに極りきつた小鳥だ、鴉は市中でも鳴聲をきくが餘り小鳥の仲間でもなささうだ。

こゝには松の外に何の樹もないのだが、鳥は時々やつて來る。朝の晴れた時、夕方の雨の後などに囀つてゐる聲は何の鳥ともまだ私に分らないが、その中に雀も交つてゐる、澤山ではない少しだから雀の聲も珍らしい。秋は百舌鳥も來る、百舌鳥の聲ばかりは何處で聞いてもまぎれやうはない。

狩獵期に入ると朝早く鐵砲の音をきく、勿論小鳥がゐるからだらうと思ふが、何ういふ鳥を撃つのか、聞いてみたいとも思はないが種類は數あるのだらう。バタ／＼と羽の音して松の木から松の木へ飛び移る鳥を見ると羽が白い、白い羽の鳥は海邊でなければ居ない筈だ。

人里離れた砂丘の上へ、何を食べに來るのか知らないが、海の鳥や野の鳥が交る交る來てくれるのは嬉しいことだと思つてゐる。

春先にはまた何んな小鳥が飛ん來るだらう。

馬入の川口に須賀と云つて一寸大きな漁村がある。

村の大部分は漁師だが、百姓も住んでゐる、寺もあれば、小學校もあり、商賣屋も別荘もある。

料理屋もあり貸船屋もあるが、貸船屋は沖へ出る網船や遊船ばかりではない、川を遡る鮎漁の船も貸してくれる

魚の臭ひの沁み込んだ家並の間を通つてみると、林檎や蜜柑が店先に積まれてある。

須賀からボテふりの魚屋が來る、鯵の時は鯵ばかり、鯖の時は鯖ばかりで外の魚は一尾もない。濱で捕れたのを直ぐ持つてくるのだから鮮しいことは鮮しいが、變つた魚を食べることができない。

魚屋の來る村から八百屋のボテふりも來る、白菜の時は白菜ばかり、甘藷の時は甘藷ばかり、甘藷を五貫目も六貫目も縁先の砂の上へころがして、大まけにまけて行くこともある。

海邊の生活だからとて魚ばかり食べてゐられないが、青物も葱、菠薐草、大根、茶葉など大抵のものは持つてくるから心配はない。

馬入の川口は廣いけれど水は淺い。馬入川は相模では一番大きな河だが、ふだん水の少ない河で、汽車の鐵橋から見ても分る通り、河原が廣い。さすがに海へ注ぐ所では河原もなくなつてゐるやうだ。

海との境にも格別大きな入江もない、極く穩かに海に入つてゆく河ではあるが、それでも川口から出たばかりの濱邊にはいつでも白い波が立つてゐる。鹹水と淡水との境界だらうが、水はいつしよになつて躍つてゐる。

河と海とのいつしよになる所は、何となく興味があると見えて、よく子供が河と海との間へ行かうといふ、むつかしいことを覺えたものだが、ほんたうは何處から河で、何處から海だか分るもんではない。

川口の海にはよく魚が集つてくるとみえ、朝に晩に地引網を曳ひてゐる。網曳く漁師の掛聲が家まで聞える。

須賀は此の邊の海岸では一寸した船着場だから、いつも大きい船や小さい船が湊まつてゐる。石油發動汽船の寄泊してゐることもある。鰹船も多いやうだ。船底を修繕する爲に陸へ上げられた船もある。

網を曳いてゐない時には砂地に網が干してある、船も干してある。砂に引上げられた乾いた船は、何の生々した姿も持つてゐないが、海へ出ると生きて跳るやうになるのだ。かうして放心したやうに陸に休んでゐる時もなくてはなるまい。

波打ち際には小さな木の屑が落ちてゐる、竹の端が落ちてゐる、布屑、繩屑が落ちてゐる。皆波が打上げたのだ、かうして海は陸のものを陸に返してゐる。

貝殼の少ない濱邊だが、きれいな小石は落ちてゐる。海藻や魚の骨も交つてゐるけれど、一帶に砂地のきれいな濱邊だ。

海と河との界、そこにも矢張海邊と平野との入り交つた生活があつた。

私は現前する自然、海邊と平野の交錯をなるべくこじつけないやうに、ありのまゝに書いた。何故私が斯ういふ觀やうをするかといふに、前にもいつた通り、私が今さういふやうな心持に動かされてゐるからだ。

海に就いて、山に就いて、科學は吾等にさま〴〵なことを敎へるだらう、併し私は私の見た自然に直面して、そこから私の行つてゐる人間の魂に還つてゆかうと思ふ。

自然は一切の萬有を審判する神なりといふやうな、言ひふるされた言葉は、もはや近代人の上に權威はない。況して原始人の如く無條件に畏服することはゆるされない。自然は神であるかも知れぬが、また暴君であるかも知れぬ。近代人は自然に叛逆し、否定し、蹂躙しやうとさへ試みてゐる。けれども吾等は現在に於て、自然の實在を肯定しないわけにはゆかない。

都會を離れ、町を離れ、人聲一つ聞えない、人影一つ見えない松原に立つて、晴れた空に横たはる山脈を望んで、光の世界に居るやうな時、吾等を包む明るい寂しさも、暮れゆく海に波は光輝を失ひ、刻々吾等に迫つてくる暗い寂しさも、たゞ一人立つ人間の寂しさも、共に否むことの出來ない大いなる表現である。

私の自由をゆるし、私の放心をゆるし、私の錯雜をゆるし、私のわがまゝをゆるし、海の小鳥も來鳴き、野の小鳥も來鳴き、風は山よりも吹き、海よりも吹く砂丘の上の家よ。私は今此處に住まつてゐるより仕方はない。罪あつて流されたものゝ如く、罪なくして遜さかつたものゝ如く、人生より自然に一歩近づいて、更にまた一歩人間に近づいたやうに思はれる。而して私の感得したいと思ふ未知境は無限につゞいてゐる。

江戸時代の高級遊女

鳶魚

最近の歐洲は散娼を商業化する傾向になつて居る、此の商業化といふのは江戸時代の切見世と同意義のものらしい、公娼のない異國では其の邊より外に仕方もないのであらう。江戸の私娼の叢窠を岡場所といつた、切見世は岡場所の下等なので、露天に賣色する夜鷹より少々好いのに過ぎぬ。岡場所でも深川などは、公娼の吉原に對して餘り遜色のない體裁をして居たのに、切見世は或る路次の兩側に長屋建て列ね、各戸一室しかない間居の内に私娼が居る、嫖客があれば表の戸を閉ぢ、客が歸れば

戸を開ける、一ト切づゝの買色で泊つて往く客はない。吉原にも長屋といつて私娼の切見世と同様なのがあつた、江戸時代のみならず、今日でも公娼は私娼からの影響を常に受けて居る、其の影響の受け方の大きい時ほど吉原が繁昌する例なのも面白い。然るに切見世は一廓制の下に許可された公娼に近か附かうとする私娼の發意らしい、其の切見世を公娼が模擬して長屋を拵へるのだから愛嬌がある。けれども兩方に模擬する處があるので、私娼は一處に集つて賑に營業する所を眞似たが、公娼は又た簡便なのと廉賣なのとを望ましく思つたのである。斯ういふのは江戸末の形勢から、最近歐洲の散娼商業化を眺めて、異國の岡場所が遂に深川のやうになるのではないか、爲永春水の人情本を讀んで嬉しがる連中が、目色毛色の違つた人達にも出來る下地ではあるまいかとも考へた。

江戸時代の言葉で遊女といふのは公娼のことで、賣女といふのは私娼のことである、淨瑠璃にある君傾城、芝居でいふ傾城買ひ、其の傾城といふ言葉は、最高級の遊女に限つたので、一般の公娼には云はない例であつた。江戸で公娼私娼の別ちが附いたのは、元和三年三月、庄司甚右衛門が吉原町創開を許されてから後のことであり、最初の公娼は太夫、格子、端の三階級になつて居た、賣女に散茶といふ第三級を生じ、貞享元祿の際にうめ茶といふ第四級が出來たので、太夫格子散茶うめ茶局の五階級となり、局も五寸局、三寸局、なみ局と三分されたから、詳しく云へば七階級、享保になつて局の下に次といふのが增加して八階級になつた。云ふまでもなく最高級の遊女は太夫なので、江戸の吉原に此の最高級の遊女がなくなつたのは寶暦の末年と思はれる、それまで公娼の階級は八つであつた。淨瑠璃や歌舞伎の傾城は太夫を指して云つたので、江戸時代のみならず明治以後も太夫に比敵する程な勢力のものはない、東京には藝妓といふ贅澤な代物があるけれども、到底太夫との對抗は望まれぬ。歐洲では女優及び聲樂器樂乃至舞踊方面に、江戸の昔の太夫らしいのが居るやうにも思はれる、最近に商業化に傾いて居るのは勿論低級者流のことであつて、高級者とは關係のない話でもあり、又た切見世から發達して、太夫を出すやうになるものでもない。

揚卷きてう玉菊

坂田藤十郎の傾城買は當時に顯著なものであつたばかりでなく、演劇史の上に長く令聲を止める程な妙伎であつても、今日の見物からは想像もされぬ。現在の舞臺で見られる揚卷助六、其の揚卷は江戸町一丁目大上總屋治左衛門抱への第三級女であ

る、大盡舞の文句にも唄はれ、紀文奈良茂の兩成金が盛に豪奢を競ふ其の標的になつたきてうも、燈籠やら河東節やらで名高い渠の玉菊も、散茶であつて太夫でも格子でもなかつた。仙臺騷動へ出る高尾は、紛れもない太夫なのだけれども、舞臺で見る風俗は決して最高級の遊女でない、現存する脚本は大概寶暦以後のものと云つてよからう、さうでないのがあつても新しく手を入れてある、從つて舞臺の上に太夫の全盛であつた俤が傳はらぬ。太夫の衰亡は寶暦に突然逢着した運命ではなく、早く危機に瀕しながら辛くも持續して居たのである。寛永度には七十餘人あつた太夫が、新吉原になつては萬治三年の二十五人、寛文七年の十八人、延寶三年の五十人を絕頂として、元祿には二人にさへなつたが、寶永六年には四人になり、享保に入つては十人前後にもなつたが、寛保以來二三人に固定して了つたのである。

一體太夫といふ名は娼婦の內でも、舞伎に堪能な者があつて、舞臺に立つたからの唱呼なのだ、高級の遊女は必ず舞妓であつて、且つ賣色したのである、從つて自分の意に適はない嫖客を謝絕するのに自由であつた。然るに寛永六年十月、幕府が女舞女歌舞伎を禁じ、伎女等を江戶以外に追放したので、昨日迄も街頭靚裝して、公衆の前に善舞の譽れを得た嬌妓は忽に跡を絕ち、賣色だけの凡娼のみが取殘された。又た其の上に寛永九年に吉原町の夜の營業を停止された、寛永の末には青樓の軒に萬葎が生ひ茂つたといふが、如何にも繁昌すべき筈がない。晝間だけになつた吉原にも極めて少數な舞技の女があつても、舞臺を搆へて群衆を引寄せる譯に往かない、其處で僅に室內で酒間に演技して坐興を添へて居た。此の頃では細り片撥が流行し、遊女の技藝は漸く弊曲に移らうとした、けれども公娼の衰微に乘じて、私娼が景氣づいて來た、それが凡庸なものでなく、殊に丹前小唄の上手が多かつた、新しく流行した風呂屋女といふのは、江戶市內の風呂屋に居る髮洗女なのであつたが、今の神田雉子町にあつた紀伊國風呂の市野勝山采女、山方風呂の幾夜、追手風呂の淡路等は最も知られた唄ひ手であつた。

歌舞伎風の丹前勝山

夜の吉原が閉された後は、最寄り〳〵にある風呂屋が賑ひ、傾く夕日の影を其處に建てられた金屛風に受けて、湧くやうな絃歌の聲は、誰をも物珍らかな此の溫柔鄕へ誘つた。此の風呂屋も髮洗女も、明暦の大火の後に吉原町を山谷へ移轉させるために與へられた利益條件の一として、幕府の嚴令の下に明暦三年六月限り禁制されて了つた。それよりも五年以前の承應二年閏六月十六日に神田雉子町の風呂屋の前で御旗本御家人衆入交

の大喧嘩といふ椿事が起り、其處の紀伊國風呂山方風呂等が廢業しなければならぬことになつた。紀伊國風呂に居た勝山は其の年八月から、吉原の太夫になつて山本芳順の家に入り、采女も三浦屋から太夫として出た、此の勝山が有名な丹前勝山なのである。

彼は風呂屋に居た頃から、女歌舞伎好みの男裝で、玉緣(たまぶち)の編笠に裏附の袴、木太刀の大小をさし、丹前節の小唄をうたひながら大道を濶歩した。當時の武士の間には奴風(やつこふう)といふ一種の街つた樣式が流行し、衣服調度から言語動作まで特殊の趣向が好まれ、大名奴旗本奴と身分を忘れて寬濶を盡した。勝山は禁制に依つて女舞女歌舞伎が無くなつた時、誰も花やかな晴れやかな舞臺の上を想望して止まないのを目掛けて、歌舞伎風の男裝しかも奴風の步趨で、人心が漸く小唄に興じて來た機會に、例の丹前節を唄つて往來したから、絕望した舞臺の上の嬌色が、不時に目前に補はれるやうに思つて、勝山を一時に讙呼の中心にした。女歌舞伎で知られた阿國も、歌舞伎風の男裝で登場したのである、彼の演技を見物し其の聲名の盛なのに感じて落淚したといふ結城中納言秀康も、感心し過ぎてお馴染になり、梟を紛失させて額の眞中へ穴を拵へたといふ。さうならお國の賣り物は歌舞伎の外にもあつたと見へる、まして變な病氣をさへ進呈する程であつたのだ、其の後繼者たる寬永の女歌舞伎が繚業であるのは當然である。一體歌舞伎といふ文字は借用物で戰國傳來の異相異風好み、剛氣を衒ふ慶長度の若い武士の風俗をお國が模擬して時世の好尙を刺擊した、お國が標本にしたのは慶長年錄に京に無雙の大かぶき男のたてもの名護屋三左衛門と申者ありといふのが、最も手短なのであらう。それが寬永には身分の臭ひのを避けて、專ら輕快剛健を裝ふ奴風を生じた、是には多少反抗氣分もある。明暦に丹前と呼ばれ、萬治寬文に六方と云はれた風俗は、前二者の系統を繼いで、氣味を展轉したものであるのは云ふまでもない。嵐三右衛門の丹前六法、中村傳九郎の奴丹前等は、風呂屋女に通つた武士の風體を學ぶと共に勝山の趣向を奪つたもので、其の倂を十八番の𥳑當に殘しもした、それかあらぬか江戸の土佐掾の淨瑠璃などでは、歌舞伎風と丹前風とを全く混合して居る。

異風な男裝で賣つた勝山は、公娼の群に投じてから、白元結で伊達結ひ片𩬊が衆目を惹いた、是が後世にも勝山𩬊と云ひ囃される樣式であるのみか、道中の步趨にも島原式の內八文字でなく、奴風に外八文字に運び、草履にも好みがあつて、緋の二本鼻緖をすげさせたといふ、なほ遊女が緋縮緬の內衣(ふたの)すること も勝山の物數寄から始まつたと傳へもされる。勝山は物數寄で

當代に知られたので、得意の小唄は彼の同輩であつて三浦から出た幾夜の擅場であつたやうに云はれて居る。幾夜が吉原へ往つてから、俄に廓内の絃歌が變化した、忽に小唄の四天王を算へるやうになり、幾夜は其の隨一と目せられもした。

寛文の土手節

女舞女歌舞伎の禁制に依つて公娼は、一般公衆と隔絶され、風呂屋女も亦た法度の爲めに廓中に收容されては、彼等の演伎は勢ひ室内でなければならなくなり、時世の好尙が聲曲に向つたばかりでなく彼等としても聲曲を技能とすることが便利になつた。さうして小唄の流行が著しい中に京の島原の投節、大阪新町の籬節に對して、江戸の吉原の繼節が三名物と云はれ、山谷通ひ往來に風情を添へた土手節も興味ある流行になつた。此の頃の遊女は小唄に堪能なこと、三味線の巧みなこと、才氣のあることが、美貌以上の賞玩であつたのも、時世に聲曲の威力の盛なものを數へた。

『天下かゞやくお旗本おわかい衆のちよろ達の肩に鹿の子のだんだら筋、腰に浮世のぬめり筋』と唄はれて、紅裏の衣服に慣れた時に白裏をつけ、双刀の柄も白絲で卷かせ、萬事を白がつて、白木造りといふ心で大小の神祇組とも名乘つたか、渠の朗細の『よしや歎かじ、叶はぬ迎も定めなきこそ浮世なれ、よしや今宵はくもらば曇れ、迎も泪で見る月を』などの文句から取つてのよしや組か。御法を越した六法者の旗本奴は、市井の無頼が眞似をして町奴などゝいふのを、却つて自慢氣に同じ様に何組と稱して廓へ通ふ、中にも大小の神祇組とよしや組とは著名であつた、幡隨長兵衛を殺したので知られた水野十郎左衛門は、よしや組の一人で、山本芳順の抱へ小わたといふ遊女を連れ出し、白山の隱れ家へ忍ばせたことから、遂に切腹させられたが、此の小わたは太夫でなかつた、却つて町奴の唐犬五郎作は、同じ芳順の家の太夫丹波を盜み出して女房にした。旗本等は隨分吉原へ來て亂暴を働き、往返には盛に拔刀して喧嘩もしたが、財布は元氣のやうではなく至つて輕い、太夫を買つて豪遊する者は尠いのである。

吉原町草創當時は最高級の太夫どころは金一兩、第二級が銀三十匁、其の次が銀二十匁乃至十匁を一夜の價とした、浮世一分五厘といつて、一日五合積りの米代が銀一分五厘であつた時代に、三匁あれば一個月の米代が十分なのから考へて、最下級の遊女の價さへ庶民生活と何程の距離であつたらうか。落穂事跡考は餘程後までも町人等は吉原へ往かなかつたといひ、『悉く御家の武士、諸家の陪臣等、とかく武士たるものならでは通は

ざる事なりし」といつて居る。けれども新吉原になつて、萬治高尾の客の中に町人があつたのは大に注意すべきことだと思ふ。元吉原は勿論、新吉原になつても、廉價な女が居なかつた、廉價な女が居ないから、一般民衆が其處へ出入しなかつたといふよりも、大名旗本以下孰れも武士ばかりの歡樂郷であつたので御安直なのが居なかつたのである。武家の奉公人の最下級にある中間小者草履取の年給を規定した寛永十六年三月廿三日の法令には、二兩二分乃至二兩とある、これを最高級遊女の嫖價金一兩と對照して、其の距離を考へたい。武士も幕府の家來と諸大名の家來とあるが、彼等は唯だ資本に依つて太夫を買へただけでなく、其の威勢が世間を憚らず豪遊し得られたのでもある。資本はあつても武士と肩を並べて遊ぶには、其處は別な天地であつても、町人百姓は威勢がないから、自然引込む勘定になる、それが萬治になつては、假令尠い數にもせよ、町人の傾城買があつたといふことは、武士と町人との社會的地歩について著しい變化であつて、淫縱放逸な人達の身上に限つた閑話として抛棄し難い理由がある。

武士を驅除した法令

殆ど家庭を知らなかつたといつても宜しい武士等は、戰場の生活のみであつた、幕府の頭初に戰勝の意氣凄しく、俸祿も豐富に與へられたやうでも、戰場生活を基礎として計算された增給である。春日の局も云つたやうに、女が着物一枚新調するには、鎧一着の代金を要した。それは算盤の外に置かれたどころか、自分の伊達衣裝も金鍔鮫鞘も含まれては居ない、渠の眼當の不破は山の手風、名古屋は殿本風の標本とも見られる。近くは寄つて目にも見よると、武具馬具に華麗を盡して、己の威風を誇つた、戰國の餘習が太平の世に持て剰した勇氣を豪遊に振替ると共に、派手は其の儘に募つて往く。家光將軍は救濟金やら增俸やら、涙を流して旗本御家人の貧乏を綏和するのに勉めもした、夜の吉原を閉鎖させたのも德川三世の心配の餘りである。儉約令も屢々出したが不行儀の好色を禁じ、無用の浮費を止め遊觀の地に出入し、故なく集會し、市街を徘徊することを停めたゞけでは効果がない、遂に有司に命じて違犯者を申告させることにしたが、未だ成績は確實でない。寛永二十年六月には妻子のない者は一切任用しないと定めた、彼等は面白可笑しく嫖遊するのに興じて物狂はしい有樣、三千石五千石の殿樣でも妻を迎へるのを忘れて居るのが多かつた。幕府は女舞女歌舞伎を追放し、夜の吉原を閉鎖し、男色の美少年を抑損し、風呂屋女をも撲滅した、けれども旗本等の沈溺は資本の續く間

は止まぬ。

仙臺侯の狎妓かほる

仙臺侯伊達綱宗が、伽羅の下駄をはいて吉原へ通つたとか、落籍した高尾を中洲の三叉で提げ切りにしたとか、盛に訛傳されたので大名の傾城狂ひの第一人のやうに云はれて居るが、延寶度に遊女の腹から出た大名が二三人あると云はれたのでも、大名の太夫買ひ廓通ひが仙臺侯だけでないのが知れよう。陸奥守綱宗が御茶の水開鑿の幕命に依つて、工事を始めたのは萬治三年二月十日からで、牛込から和泉橋までの間を疏通するために毎日六千二百人の人夫を使用した、在國であつた綱宗が出府して、自身に現場へ監督に出掛けたのは、六月一日からで隱居させられたのは七月十八日なのだ。綱宗はお茶の水への往復に吉原で遊んだ、元吉原ならば今の和泉町高砂町であるが、此の時は新吉原で現在の場所なのに、仙臺家の江戸屋敷は今の新橋停車場の所にあつたのだから、此の間を往復されるのには道寄りとか通り掛りとかでないのは明白である。年の若い仙臺様は多數な人夫で盛に工事を捗ぶ、其の景氣に浮かれたのであらう、三浦屋の高尾を敵娼としたといふのは間違ひで、京町高島屋のかほるを買ひ、それを落籍したと傳へた方が事實らしい。餘り仰山な様子で吉原へ生入し、廓内の水賣りに銀錢を與へたので種々に風聞されもしたので、大老酒井忠清が異見を加へたが、綱宗は聞かずに吉原へ通つた、若し目立たないやうに通つたなら別に問題を惹き起すこともなかつたらう。大名の吉原通ひは珍しくもなつたらしい、新吉原に移轉しては場所が邊鄙で行程が長いのと、段々上品ぶつて來ると、財政難が増長するのとで大名の太夫買ひは延寶以後はなくなつた、それまでは忍びの體で姿を變して、通つた大名が澤山あつたのである。急に大名の跡を遊里に絶つやうになつたのは、綱吉將軍の初政に當つて峻烈な天和改革が行はれた爲めである、綱吉は越後家の内訌を裁判して、同家が徳川の一門であるのに拘はらず、忽に取潰したのみか、前代の遺老でも下馬將軍とさへ渾名された酒井雅樂頭忠淸を切腹させた、それを見て大名は新將軍の手際に戰慄した。そうして儉約政治を標榜した天和改革に着手し、旗本も町人も一齊に奢侈な事を見附け次第に處分したから、大名の廓通ひは幕府から睨められては大變だと一時に止んで了つたのである。江戸の人心を緊縮させた政治改革は吉宗將軍の享保改革、松平定信の寛政改革、水野越前守の天保改革以前に、天和改革があつたので、其の峻嚴苛酷なことは後の三改革の比でなかつた。

吉原ばかり月夜哉

天和改革以前に端(はし)といふ最下級の遊女の中に青暖簾と稱して一匁の廉賣店を出し、然らざるも五匁の嫖價であつた、第二級の格子は二十六匁と定められてゐた、當時の江戸の太夫は若干の價であつたか知らぬが、京阪では五十三匁であつた、寛永度の第一二級の嫖價に比べて、多少の下落を見せて居る、寛永度の直段を持續しても、爾後の物價から考へると安いのに、却つて下落を示したことは頗る考慮を要する。何故なれば元祿以降の嫖價は、時々に騰貴して低減したことはない、諸物價と忠實に隨伴したのに、寛文延寶の際のみ變態したのは不審に堪へぬ。中間の記錄がないので突然延寶の嫖價を見て、寛永を顧るので譯が分らないので、或は女舞女歌舞伎禁制で逸品が消滅した時に、殘物の凡娼の評價が低くなつたのを襲つた結果かも知れぬ。それから一方に廉賣の開始されたのは、段々町人其の他が入込んで來る、廓通ひが逐々擴張されて、廉價な嫖遊しか出來ない者までも、遊女を欲求するようになつて來る。得意滿面な豪遊階級のみの吉原でなく、少數者の歡樂から多數者の廉遊でも賑ふ色町になつて來るのを拒み難い。其の豪遊氣分を打破する第一着は、散茶といふ妓品を生じたことである、寛文八年に私窩主五十餘人、私娼五百餘人を吉原に收容し、江戸町二丁目の裏通りを割いて、新に堺町伏見町を開いた。此の新しく收容した私娼を散茶と渾名し、嫖價は金一分(一兩の四分の一)であつた、是は嚮に禁制された風呂屋女の遺類であつて、夜を専とする娼婦なのであつた。吉原町の公娼は新吉原へ移轉してから、夜間の營業禁止を解かれはしたが、日暮れを待たずに門戸を閉づる例であつて、客を迎へるは晝間だけのこと、晝來て夜へ遊び續ける客はあつても、夜來て朝歸る者はなかつた。高級遊女を主としての營業ならば、泊つて往く客はない、大名などが外泊するのは容易な話ではないのだ、大名でなくても身分の高い者が潜行する場合には長居はせぬ、又た夜中の他出などは用心が悪いと考へられた。延寶版の吉原失墜には吉原の遊ひは晝と夜と孰れが面白いかを爭論して居る、今日の人から見れば元祿度に男色女色の優劣を爭論したのと同様な奇怪を感じるだらう。此の散茶が年と共に繁昌して、魚油の煤烟が黒雲を捲き起す青樓が增加し、大名旗本の來ることが減つて、廉遊階級の吉原にならうとする。其角が『闇の夜も吉原ばかり月夜哉』と、散茶の世界になりかけた時代の色町を詠じた、渠の句は十牛と題して十句を列ねた中にあるので、十牛は本來禪家で悟入の境涯を譬へて圖畫にしたものなのを、其角が牛を妓夫に通はして洒落た句

作を試みたのだ。牛は散茶の附きもので、他の遊女には妓夫といふものがなかつた、妓夫は寛文八年以前の吉原にはなかつたのである、暗くない吉原の夜、散茶特有の妓夫、新しい流行を捉へて趣向を立てた、やがて吉原は夜のみの世界となり、妓夫も欠くべからざるものになつて、不夜城といひ、晝の吉原が忘れられるやうになるのは、まだ〳〵後年の事である。

天和改革以前には大名旗本等の歴々が來る、太夫は大名道具だと云はれて、民衆の便用すべきものとは考へられて居ない、町人が買ふのは僭上の沙汰だと信ぜられた。太夫は容色だけでは其の資格に不足であつた、聲曲のみならず、茶儀や香合や立花その他の雜藝を嗜み、和歌にも文章にも將た手蹟も善くなければならなかつた。八代集や源氏竹取を手放さないのや、無點の漢文の讀めたのが居た、評判記にも筆を持てない者は遊女でないと叱つてある。武家にも公家にも太夫だけの教育を受けた婦女はない、時代の最高教育を受けた者が、最高級の遊女である。若し今日の考へで太夫を醜業婦扱ひにしたら、大分な方角違ひである、性慾を滿足させる爲めに買はうとするならば、それこそ大恥を搔かなければなるまい。賣りもの買ひものだとはいへ、先方は相應に趣味もあり知識もある、之に對して飽くまでも殿樣たり旦那樣たる體面を保たなければならない、餓へ虎が肉を啖ふ忙しげな態度は見せられぬ、自然と大名氣分になれる仕組にもなつて居た、其の鷹揚な悠暢な處が、早く太夫の滅亡を見る理由でもあつた。

實作した高尾の手紙

いふしは波の上の御かいらせ、屋形の首尾は如何おはしまし候や、忘れねばこそ思いださず候かしくと書いた末に、

君は今駒形あたりほとゝぎす

といふ一句を添へた高尾の手紙、彼が仙臺樣に逆つたものと傳へられて居る。嫌はれたといふ仙臺樣も、此の文では大分男振りが好い、綱宗の買つた太夫は高島屋の薫であつたと辨じるまでもなく、萬治に渠の俳句があらうものか有るまいものか、小百年も若い口調である。それに屋形の首尾とは何事だ、遊んで歸つて内の樣子を憚るのは、若旦那などのことで、大名の當主が自邸に何の懸念があらう、贋作も甚だ拙劣な方である。しかし艶道通鑑に『松の位の女は、いとけなきより物よみ手習ふに心をよせ、敷島の道にも及ばずながら、古人の讀捨もあちはへ』と云つたのは、太夫の技藝が公衆向きでなくつて、彼が室内の名妓に極つてからの實況なので、閑雅な文藻と共に、上代樣(やう)とか定家樣とか近衛流とか、一派の筆道に堪能でもあつた。まして

江戸の太夫は京大阪のよりも手蹟が立派だとも云はれ、又それを誇りもした程に、『一紙の艶書を得ては定家爲頼の御筆よりも秘藏し、肌の守にかけ』(増補江戸咄)る有樣なのだから、手紙の上手な女は嫖客操縦に無限な利益があつた。元祿版の前句附若緑に、

わけもない　遊女が文を緋表具

といひ、元祿十二年には三都の遊女の自筆書翰集を五大力菩薩手鏡といふ名で出版した、公刊しない遊女の筆蹟を卷物にしたのは、今日も澤山現存して居る、此の賞玩は寛永以後打續いたのみか、太夫のなくなつた寳暦にも衰へずに、江戸の末まで行はれた。

萬治高尾は西鶴が高尾は流女古今の能書、文にして人を殺すと褒めた程の名文能書であつた、彼は勝山の同輩であつて三浦の太夫になつた禿女の教養を受けた女だといふ。その高尾が今日の作劇家のやうに、大名の生活も町人の生活も一處にして五十四郡の大守にお内の首尾を聞く筈がない、高尾のみならず此の時代の太夫は、十分大名に慣れて居たのである。

誰もいふことだが寛文版の小唄物まくりの挿畫に、『太夫さま』と標し、『かい手共』と標してあるのを何と見る、帽子を足に靴は頭にしたほどな顚倒とも思はれるが、意氣地張合の強弱で賣る遊女と買はれる遊女と分けもした時代である。賣る遊女は大名にせよ大盡にせよ買はれるのでない、其處に自由戀愛らしいものがある、ふられて男振りを下げもするが、持てゝは縹緻を上げる譯だ。制度法律に依つて夫婦が作られ、配遇された男女の間に殆ど戀愛がない、まして目かけ手掛けとなれば號令と服從との關係であつた武家政治の下に、榮華を誇る大名若しくは大盡は、高級な遊女ほど無遠慮に我儘をする、其の我儘が頗る珍重であつた。我儘氣隨であつた彼等から待遇される時大名や大盡は始めて相思相愛らしい人間味を請取れたのである。

延寳以後遊女の意氣が年毎に衰へ、借金と肺病との惱みが强くなつた。浮世草紙が長崎の衣裳を着せ、江戸の張りを持つた遊女と、大阪の新町の揚げ屋で遊びたいといふのは、過去の全盛を回顧した言葉で、新町の景氣は延寳以來變化がないにしても、輸入品の制限を二度もした後の丸山遊女が、寛永乃至萬治寛文度ほどに舶來織物を着飾れやう、江戸の太夫の意氣地張合にしても、金銀に貪着のない大名遊び、大盡遊びの殆ど無くなつた後は、餓虎に供する粱肉なので見れば、お話にならう筈もない。彼等の文藻や能書は昔の風雅の俤として、何時までも彼等のみならず相手の嫖客をも優美にする功能はあつた、又た何時までも彼等の與床しい嗜みとして繼續もされ、思出にもなつた

ので、高尾の手紙を僞造して俤へもする。それは江戸だけのことではなく、夕霧は長文の名人であつたといつて、演劇にも夕霧廓文章と外題したのがある、眉唾ものゝ夕霧正筆の手紙も大阪新町の吉田屋に殘りもした。

權八小紫は番狂はせ

それもなく昔の爲も、梅に三浦の小紫、粹なゆかりと唄はれる、渠の平井權八の八重梅といふ小唄を鈴ケ森の礫柱の上で、聲爽に聞かせて受刑したのは、延寶七年十一月三日であつた。權八は鳥取の池田家を脫藩して江戸へ來て、阿部豐後守正武(武州忍の城主)や鳥居左京亮忠常(信州高遠の城主)へ徒奉公をした、徒といふのは供先の警備を職掌とする輕い者で、年給金三兩一人扶持といふ御安直な侍なのに、三浦の太夫に馴染んだのだから、泥坊でもしなければ、追附かないのは當然過ぎる、天和改革前後には吉原へ入込む町人が增加すると共に、斯うした番狂はせが目立つた。西條高尾といふ幾代目かの太夫が、水戸家の御用町人西條吉右衞門に請出され、間もなく吉右衞門の贓罪が露顯して、一家滅亡したのも此の頃の話であらう。少々遲れては大名と町人との太夫爭闘があつた、是は階級的だから此の頃の人にも面白からう、松平周防守康官といへば、石見濱田の城主五萬石、小さなものでも天下の諸侯である、其の周防守が吉原江戸町の上林助右衞門の家の太夫對馬に馴染んで居た。對馬は其の頃才貌双絕の上に多藝で知られた女であつたが、對馬を仙臺の町人平三郎といふ者が、落籍して連れ歸ることになつたのを聞いても、小諸侯の手許では對馬を贖ふだけの金策が附かぬ。淺草片町の長園寺の住持は家來の子なので、苦しい事情を打開けて賴むと、それは御殘念であらう、私が何とか才覺いたしませうと、此の坊主が資金なしで對馬を取り出すことを請合つた。坊主は目明しの五郎兵衞(目明しといふのは八町堀の與力同心に使役される者)を語らつて、五郎兵衞を平三郎の宿所に遣り、其方は吉原町の傾城對馬を身請したといふが、町人の分際で怪しからぬ驕奢な事をする奴である、一體傾城の落籍は町奉行の許可を經ずにするとは御法度なのを知らないか、昨今驕奢の御法度嚴しく、石川六兵衞海保喜右衞門等の町人が罪科に行はれたのも目前の事だ、愈々其方が太夫を身請したのなら、早速罪科に行はなければならぬと脅喝させた。平三郎は吃驚仰天して、江戸の御作法を存せず、對馬を請出しましたが、何卒御宥免に預りたいと必死に賴んだ、すると五郎兵衞は左樣の次第ならば、對馬を此方へ渡し、其方一人で早く歸國するが宜しい、折角の賴みであるから、何とか取計らひ無事に濟して

遣はさうと云つた。欺かれるとは知らずに、何分御頼申すと女を渡して平三郎は仙臺へ歸つて了ふ、是で手もなく一文入らずで對馬を松平周防守の物にした、長興寺坊主は多分な禮金を周防守から貰ひながら、五郎兵衛には分配が尠かつたとやらで悶着を始め、遂に此の一件が露顯して、貞享二年四月に長興寺坊主は遠島になつたが、大名は有難いもので周防守康官には何の事もなかつた。斯うした大名が出て來ると、武門も武士もあつたものでないのみならず、大名といふものゝ相場が立たなくなる、お目出度い顏附が殿樣らしいと褒められる時世になるのも適當な經過はあるのであつた。

大近松から並木五瓶へ

天和改革後の吉原に大名が往かなくなり、旗本も尠くなつて武士の手から離れて、町人の物になつたが、大阪とは違つて通貨膨脹の馬鹿らしい景氣も、大賈巨商のない土地だけに著しい影響も見られず、成金なども數へる程しかない。江戸を中心に書いた浮世草紙で、我等の見たのも三四あるが、氣の毒なほど淋しい、到底大阪の著作と比較にならぬ、作者の文藻文才が劣つても居るのだが、實際の景況も上方のやうではなかつたに相違もない。此の頃を「晝は極樂の如く、夜は龍宮界の如し」といつては、江戸人だけの話草で、上方と比較しては、元祿の吉原が安閑たるものであつたのも止むを得ぬ、のみならず格式が崩れ、規模が立たなくなつたと歎息される程であつた、大名が來なくなれば大名道具の必要がなくなるのも不思議はない。少數者よりも多數者に依つて賑ふべき道程にある吉原は、大名向き武士向きの代物(しろもの)よりも、お手輕な散茶といふ夜の遊女の賣れ行きが好くもなる。其處へ享保の末、元文の初に掛けて、尾州侯の宗春卿と榊原式部太輔政岑(播州姫路十五萬石)が飛び込んで來たから、又た番狂はせが出來た。姫路侯は高尾、尾州家は春日野を買つた、高尾は太夫だが春日野は太夫でなかつたともいふ。吉田冠子が寶暦七年に作つた薩摩歌妓鑑(うたげいこかゞみ)は、例の小萬源五兵衛へ榊原の傾城買ひを書き込んだ淨瑠璃である、尾州侯は押込隱居になり、榊原は越後の高田へ國替へになる騷ぎを捲げた傾城買ひだけに、世間の評判も高く、落首落書も澤山あつた。薩摩歌＝薩摩歌妓鑑＝置土産今織上布＝春花五大力と、丸本から脚本へ系統を造り、大近松から並木五瓶まで持越す趣向の橋梁にもなつた。元祿二年には三十六軒あつた揚屋が十六軒になつて了つた、吉原通ひが夜ばかりになつたのは明和度だといふが、享保元文の際に原武太夫(御留守居與力)などは、晝間に廓へ出入するのに編笠を冠ぶる例を破つて、顏も露に廓へ往つたとい

ふ。太夫を買ふには揚屋でなければならぬ、揚屋が減少したのは太夫を買ふ者の減少したのである、編笠もなく往來したのも面體を知られて困るほどな身分でない上に、町人に似合はないものだけに、編笠が却つて武士を目立たゝせもする。旗本以下の原武太夫の連中が編笠を失敬したのは、只だ彼等の濶達であつたことのみを理由として見るべきことではあるまい。大名が出入しなくなつて五十餘年も過ぎた吉原は、全く町人共の世界になつて居る處へ、案外に大諸侯が二人も往つたから、廓だけが慌てたゞけでなく、世間も騒いだらう、幕府も目を剝いたらう、けれども眞に一時のことで、揚屋が出たやうなものなのだ。それから遙に後であつた、太夫は久しい以前に無くなつて居た天明八年三月に松前侯の若殿章廣が、松葉屋の瀨川を五百兩で落籍された話もある、だが其の前の瀨川は千五百兩で、越後屋の手代が引して了つた、斯うなると財力が問題であつて、遊女の階級は餘所にもなる。しかし太夫は大名旗本に對して、階級に依つて存在する譯のものであつた、延寶以後の吉原には太夫の需要がなくなつて、惰力だけで寶暦まで持續したのである。

太夫の産地

太夫は遠州以東から出ると云つたのは、萬治寛文以來のことで、舞臺に立つて天女のやうに思はれた太夫は、孰れも上方種であつた、又た吉原の京町は六條から移つて來た娼家を一所に營業させたのに由來する。京大阪とは違つて江戸の遊女は、殆ど武士のみが相手なのだから、溫柔な氣に富んだ上方産では向きが惡い、意地とか張合とかいふことが、主として町人の通ふ吉原になつても因襲的に喜ばれるのであつた。それ故に東國産の幼女を多年教養して、最高級遊女にするのが定例のやうになりもした。貞享元祿の吉原は町人の世界であつて、市井に住む無刀の人間も大名氣分を出さないでもないが、實行主義の傾向は鮮明になつて來る、僅に夜の吉原にならないだけが僥倖であつた、其の頃急に繁昌を增した山口三浦、此の二軒の娼家は盛に上方産を輸入し、粘力の強いのと面貌の美しいのとで賣つた。京上﨟とさへいふ、東國女とは比較にならぬ美しさ、義仲義經のみならず田舎武士が、京都の公卿の娘を見て二本棒になつたのは、必しも綺麗な女といふだけではあるまい、それこそ文化の違ひに依るので、雲の上人の家庭に養はれた其の優美な風情やら、高尚な技能やらに心醉したものであらう。だが精神氣魄に乏しい京女、綺麗なばかりで人形らしい彼等に滿足されなくなるのも是非がない、只だ久しく京女の賞玩は習慣になつて居たといふのが好からう。貞享四年作の吉原源氏五十四君にも、都

の粋が乘り移つたといつて弱い遊女を批難してある、同じ太夫でも上方產と東國產と立ち並んでは、上方產が何時も氣押されて了ふ。町人でも自分の馴染んだ太夫の引け色は嬉しくない、まして太夫には大名道具であつた因襲がある、しかし町人の世界になつての新傾向は實行主義なのだから、享保になつての細見にも、下りと肩書きした遊女が絶へなかつた、それは太夫よりも第三級以下に多い、下りの太夫は寶永頃から盛々たるものであつたらしい、のみならず寶暦の細見には、太夫九十匁、京下り太夫六十匁とある、下り太夫は三分の一安い、お氣の毒な相場附けをされるやうに成り果てゝ了つた。

　江戸の太夫は延寶の頃までも、頰に紅粉の粧ひを施さず、髮に油を附けなかつたといふ、それよりは多少遲れた土佐淨瑠璃の通俗傾城三國志に三都の太夫が出會つた模樣を述べて、江戸の小紫は洗ひ髮に一つ櫛、紅綸子の打掛けの下に地白を着て出で、京の花月は黃小袖に緋繻子を重ね、三つ笄二つ櫛といふ髮附き、大阪の梅が枝は二つ笄三つ櫛の兵庫髷とある、略々同時に江戸の太夫の態度を書いた三所世帶は『初會は戀をはなれてむつかしく、上方の仕掛とは各別にかはり、さのみ大臣を思ひつかする身振もせず、此つとめは緣次第といはぬばかりの貌附』といふのも、其の扮粧と釣り合つて居る。その頃の京の太夫は遊君傾城らしくない身持ちを專一とし、歌舞は太鼓女郎や幇間に委ねて、茶の湯とか連俳とか、濟し込んださうだが、大阪ではお品ぶらずに笑ひ聲で坐敷の賑ふやうにした、江戸では技藝に怠らぬ外に、太夫自身も程々に歌ひも舞ひもしたらしい。上方では目の張り涼しく骨薄く、小鼻の筋の通つた柳腰に絖肌、齒並の揃つた、指尖の細い、爪の薄い、足の拇指の反つた、髮際の濃くないなどゝいふ條件が、太夫選定の先決問題であつたけれども、江戸では其等に乾度拘泥したらしくもない。其の後は寶暦に近づく程、太夫の影が薄くなり、實行主義に適當な散茶の威力は廓内に段々加はつて來て、遊女の條件は漸く下劣な物欲しいものに成り行くのを免かれぬ。太夫格子がなくなり、散茶の進化した華魁（おいらん）の時代になつては、嫖價も江戸化して金何兩何分とか書かれた、散茶は全盛期の風呂屋女でなく、零落し切つた風呂屋女系の私娼で、武士といつても薄給者、町人にしても手代級の相手に墮ちて了つたものである。それは江戸が金遣ひの土地ゆへに銀目で嫖價を極めない。堺大阪を中心に盛に商業の取引をする上方では、尠い金貨では不便だから、多く融通されて居る丁銀で賣買する、それが銀遣ひになる譯なのだが女舞女歌舞伎を得意にした江戸發頭の名娼は、概して上方から來たのだ。それで吉原の公娼には金貨と丁銀と二樣に嫖價を書

く例をなした、遂に金貨でのみ嫖價を書かれるやうになつて了つたが、此の二様の嫖價は遊女に上方系＝太夫、江戸系＝散茶といふ二大系統のあつたことを示すのである。さうして其の一方の衰頽滅亡は、武門武士の身の上の淋しくなつた表徴であつて、又た民間の財力、町人等の勢威の伸張を忌憚なく發露したものと見られる。

證據は非避姙

最高級の遊女を知らない者、外國人は勿論だが、今日此の頃の若い日本人も、婦女を主婦型と娼婦型とに別けて居る、突込んで云へば此の大別は、性慾を中心にしたものらしい。果して家政向の實用女と享樂用の愛玩女といふ意味ならば、尠くとも相愛氣分になれる迄は肉交を許さない太夫などは、今日の同棲式男女の交渉よりも遙に面倒である。東京になつても囃された渠の『あなたもほんとに其の氣なら、私も迷つた甲斐がある、若しや當坐の花ならば、逢はぬ昔がましぢやもの』的の意氣があつて、しかも惚れ所の見附らない内は交渉を起さないのだとすれば、手輕に氣短に覿面な一時の享樂を、さうした婦女に求められまい、太夫も娼婦に違ひないが、それを享樂の相手とするには注文違ひである。さう嚴格にも云はれないかも知れぬが見ず轉乃至十二階下の型式でないと、代金次第で自分勝手に享樂用にするのは困難であらう。太夫でない華魁は第二級の撰手なのだが、イヤ四級五級の女でも、享樂といふことが性慾の滿足と同意義ならば宜しからうが、精神のない肉交で愚弄される場合が多い。町人の爲めに下落した太夫でも、精神のない肉交を避けやうとして勉めた、是非情交若しくは情交に近づかうとする、低級者が事後に獨身者を嘲笑するやうな心を持つて居ない、それを寧ろ恥辱とするだけの人柄はあつた。現在の娼婦型といふ言葉からは、何としても太夫は擯除さるべき實況にあつたことを主張したい、と共に情に厚い、ナサケの權化にならうとして居る、此のナサケについては別に說明したいから、爰では省略しやう。

江戸時代には先手を打つた避姙と、後手になつた墮胎と兩方行はれて居た、最高級にもせよ太夫が娼婦である以上、優先に此等の方法を採つたらうとは誰も思ふ。姙娠中と云ひ、分娩後と云ひ、彼等に取つて何程迷惑なことか知れぬ、何も近松の脚本に『女郎といふ者は苦界するものぢやに依て子のある事は[illegible]す』といふのを見て氣の附く程な間抜けもなからう。太夫ならば相手が大名でなくても相當な身分なのだから、太鼓腹を傍觀して居らぬ、落籍するか、さもないにせよ方法は必然講ぜられ

る、從つて最高級の遊女には其の邊の苦しい心配は先づ無い、しかし事情に依つて何時も其通りとばかりも往かぬ。寛文度の高尾が女兒を産んで、揚げ屋通ひに抱かせて連れて居たから、子持高尾と云はれた、それは高尾のみでなく、連れ廻らなかつたゞけで、子を産んだ者は幾人もある。吉原袖鑑(寛文版)を見ると對馬も御平産でおめでたいと云はれ、巴も過し秋平産し玉ふ、はな野も去年の初産よりちとあらび玉ふ、かをひは年子を孕む人にてうるさしと云はれて居る、二級どころまで子供を隨分産んで居るが、毎年續けて分娩する遊女のあつたのは意外にも感ぜられる。さうして同書に『近年遊女のはらむ事かたの如くの間夫內證にありと見ゆ、いにしへはなかりし事とぞ』と、遊女分娩の頻出を説明してある、古い處で遊女の分娩が話にもないのは、文獻の不足な爲めでなく、間夫を相手でないから、直ぐに善後策が適當に立てられた爲めであらう。相手に資力がない場合には、孰れの階級の遊女でも、嬰兒生活苦を激增する世間並の生活でないだけに、其の場合の遊女の苦痛は甚しい、けれども避姙等の方法を採らぬ。それは梅暦で見るやうな『女郎衆はマア十人が九人、めつたに小兒は産ねへから、通人は兎角おいらん達を引ずり込たがります』といふ下卑た奴は、同じ江戸時代でも未だ此の頃は居なかつた。それでも、女郎共の勤めの隙なく、偶々初對面の客に逢へば銀拾ふたより嬉しく、ふる事も仕掛も取つて置て、先へ氣を呑まれて、酒振もお定まりの外は出來かね、何卒機嫌を取つて今一日も賣りたき心入ればかり是では面白からず、又時節も女郎も昔に替る事もあるべし、江戸も京も夫々に色遊びの末なり』(槐久二世物語)と、當時に歎息された。歎息される遊女も文化文政や天保度の氣分ではない伸び〳〵した寛るやかなものであつたから、娘節用の素人女が『夫でもモウ女といふものは、子持になると色氣もなくなり、つまらぬものでありますねへ』と云つたやうな、忙しない煩はしい氣廻をしないとよりも、感じなければこそ、平氣で年子を産みながら全盛を唄はれもすれば、『おほきもの、三浦よしのが子』とも書かれて、何の忌避も貪着もせずに居られたのである。太夫は萬治延寶までのものだけれども、先年吉原土手の西方寺で萬治寛保間の過去帳を點檢し、又た大雲寺の元祿以降の記錄を見て、遊女の子供の夥しく書いてあるのに驚いた。元祿の太夫は傾く月とも殘つた花とも見るべきである、それでもナサケに活きる女だけに、無情なことを敢てする氣分にもなれず、又た無情なことをしたと云はれたら、半日も全盛では居られなかつた、久しく此の世界に避姙や墮胎のなかつたのも、昔の銀目で嫖價を書かれる遊女系の遺風を傳へた爲めであらう。

民衆との距離

吉原細見に嫖價を明記し初めたのは、元文六年からであるが太夫の嫖價は元祿の初に七十五匁、寶永享保には七十四匁、寶暦には八十二匁から九十匁になつた。此の嫖價から太夫と民衆との距離を測定することが、江戸時代の最高級遊女を說明する捷徑だと思ふ、さうして誰にも目安い元祿度で計算して見ませう。勿論嫖價だけで濟むものではない、當時太夫買つて遊ぶには何程の資金が入用であつたか、五ケの津餘情男には『身世歴々にして、たしかに二百貫目現銀にして商する人は、月に十度は行まじき所にあらず、銀慥(たしか)にしてから利走りして暮す人は、月に三度ばかりは尤なり』といひ、それ以上は身代を破ぶると戒めた。當時の預金利子は知らないが、法定利子は年三割(十兩一分といふ)であつた、二百貫目の利子は六十貫目になる、銀相場六十目を金一兩に換算すると六百兩である、確實な利廻りと云へば普通の貸附けではあるまい、暫く一割半と見て三百兩、三百兩の年收の者は毎月三日以上の太夫遊びすれば破產する。此の頃で通貨の一番多かつた正德三年に總額二千五百二十七萬二千九百四十三兩と云はれて居る、千兩(六十貫目)は金持であり、萬兩(六百貫)なら分限であるのも、此の通貨の總額に對して首背されやう。一割五分の利廻りでならば千兩持つても百五十兩にしかならぬ、未だ月に三度高級遊女を買ふ資格がない、若し年代の年給金五兩(三百匁)から勘定すれば、七十五匁の嫖價だけでも五つは拂へない、料理人の日給四匁からは十八日働いても七十二匁をしかならぬ、日雇人夫は二匁五分であるから七十五匁を得るには三十日掛る。此の計算が簡明に高級遊女と民庶との距離を敎へる。しかし江戸時代は慶應の末までも階級制度の世の中であつた、法制で築かれた四民の階級は、武士の地位が漸次に下低し、經濟狀態から押上げて往く町人の勢力は頻に遷進して止まなかつた。吉原が元祿度から町人の物になり、武士の形見の太夫が寶暦に消滅した、それが棊の場所柄だけに御遠慮のない處を暴露したのである。

妙な國策・妙な愛國者

水野廣德

○

日の丸の旗を掲げた海賊船が北海に現はれた。航行中の露國船舶を襲ふて、其の貨物を掠奪し、其の乘員を殺戮し、勇壯活潑なる大和魂をば、殘忍に、兇暴に、船名に因んで大に輝やかした。正に八幡の旗風に黃海、東海を荒らし廻はりたる倭寇を今様に見るの感がする。而して賊魁某は昂然として國策に殉したる愛國者を以て、高く自ら任じて居ると云ふことである。武器問題の某少佐と云ひ、此の海賊將軍と云ひ、國策に殉する愛國者の續出を見るは、日本の爲めに果して慶すべきであらうか。殺人强盜を以て國策とする國に生を享けた國民は果して光榮とすべきであらうか。妙な國策もあればあるもの、妙な愛國者もあればあるものである。國家の爲めとか、國策に殉すとかさへ言へば、人を殺そうと、盜みをしようと、國の利益にならうと、なるまいと、唯譯もなく無條件に讚美同情する所謂愛國者の尠くないには全く呆れざるを得ない。

西伯利亞にパルチザンあり、滿洲に馬賊あり、米國には汽車强盜あり、東京には砂利泥棒あり、更に或る國には朝に祿盜人あり、野に利權泥棒の多き世の中とて、海に海賊あるも深く怪しむに足らぬかも知れぬ。唯考へさるゝは賊魁某が國策に殉したと豪語せる點である。彼の所謂國策なるものは如何なることを意味するのであらうか。

昔は天網恢々疎にして洩らさずと言つたが、今は天網怪々密にして能く洩らすにも拘はらず、北海の海賊事件は事內より洩れて、あはれ國策に殉したる愛國者も一網打盡、今や霜凍ふる冷たき囹圄の中に繫がれて居る。定めし寢覺め勝ちなる寒床の夢に國策を恨んで居るであらう。事件は正に裁判進行中に屬し、眞相は尙ほ未だ判明しない。併しながら賊魁某の言として新聞紙の報ずる處に依れば、彼の行動には政府の高官や、陸軍要路者の了解默認乃至後援があると云ふことである。華府會議に使して國際正義と國際協調とを稱得し歸りたる現首相の統帥

せる政府の高官要路者が、事もあらうに海賊の後押しをやらうなどゝは夢にも信じたくない。左らばとて國策を云爲する賊魁某ともあるものが、まさか事實を捏造して罪を他人と國家とに嫁する卑怯未練の言を弄しようとも思はれない。と云つて如何に奇を好む新聞紙とて、苟くも國家の信義に關する重大事をば、勝手に、無責任に、彼等のペンの尖より搾り出そうとは尙ほ更以て想像せられない。

土耳其の怪傑ケマルパシヤがスミルナ市を奪回したる時、土耳其軍は同市に放火して二十萬とかの希臘人を燒殺したと云ふ悲慘なる報が傳へられ、世界は擧つて土耳其人の殘虐を攻擊した。然るに其後に至り放火したるは希臘人自身で、土耳其を陷ゐれんが爲めの惡意の宣傳と判つた。大學の博士までが飛び出して世間を騷がした萬有還銀とかも、手品の種子が判つて見れば何の事じや、瞞まされた世間こそ好い面の皮である。一時内外の視聽を聳だてしめた浦鹽武器問題も、罪を下級の一武官に負はしめて有邪無耶の裡に葬つて仕舞つた。世の中は何が本當で何が嘘やら薩つ張り判らない。

殊に事苟くも官憲に關係ある以上「事件無根」とか「事情調査中」とか云へば萬事解決する日本に於て、今度の海賊問題などを眞面目に考ふるは無用の閑事業かも知れない。

○

北海の海賊事件が單純なる私的暴徒の兇行でありとすれば問題は比較的簡單である。强盜殺人罪として國内法に據つて處分すれば夫で解決するであらう。併し夫でも尙ほ日本國と日本國民とは、法律上並に道德上に於て被害者と被害國とに對し、物質的並に精神的に謝意を表することが、國際間の慣例と禮儀とである。相手が如何に惡戯小僧とは云へ、自分の子供が他人の子供を殺傷したる以上、親としては先方に對して謝罪を爲し、我が子に對しては訓戒を加ふることが社會の常規である。然るに此の場合日本人は動もすれば子供を訓戒する代りに、「能く殺した、元氣者じや」と褒める傾がある。子供が良い氣になつて益亂暴を働くのは當り前である。武器問題の原少佐に對しては感謝狀や慰問狀やが机上に堆くなつたといふことである。今度の海賊に對しても「尼港の仇打をやつたのじや」と云へば「成る程〳〵感心な奴じや」と蔭で稱讚して居る人間が尠なからずある樣である。變な愛國者が續出するのも無理はない。破廉耻罪の前科者が國民の選良として堂々日比谷に乘り込む國に於て、强盜殺人の愛國者があるのも不思議ではないかも知れぬ。

併しながら海賊首魁の豪語する如く、新聞紙が歴々と名前を擧げて報する如く、事件の背後に官憲が關係せりとすれ

ば、事件は頗る面倒である。公人としては勿論、私人の資格を以てしてでもある。十年前サラゼブオの街上に墺國皇太子夫妻を射殺したる青年プリンチップの黑幕に、塞耳比の官吏と軍人とが居なかつたなら、事件はアレ程に重大化することなく、慘憺たる歐洲大戰も或は起らずに濟んだかも知れない。巴爾賓の驛頭に伊藤公を斃したる鮮人安重根の背後に韓廷の黑い手が潜んで居なかつたなら、朝鮮併合は或は行はれなかつたかも知れない。官憲の關係無くてさへ、東洋に野心を持ちし昔の獨逸は、支那婦人を凌辱したりと傳へらるゝ自國宣教師僅に二名の殺害に對する代償として膠州灣を强奪した。聯合國の横暴を憤ふる今の獨逸人は、傲慢なる佛蘭西兵一人殺したと云つては、聯合國の官吏を侮辱したと云つては、アノ貧乏世帶から血の出る樣な巨額の償金を度々絞ぼられ、屈辱的なる國家の謝罪を命ぜられて居る。猥りに外國人を殺傷したる結果の重大なるは國際の歷史に照らして明らかである。若し露國が以前の露國であつたなら、今回の海賊事件の如きも其の結果は頗る憂ふべきものであるであらう。尤も其の場合には、日本の國策も變更して愛國氣取りの海賊團も勇敢なる大和魂を發揮しなかつたであらうが。

今の露國は弱いから少々無理をやつても宜いと云ふ觀念が、日本の官吏や軍人の頭にあるのでは無いかと疑はれる。殊に一般人民中には、勞農露西亞が氣に食はぬ或る筋の惡宣傳に迷はされて、露西亞人と云へば惡魔の如く嫌ひ、親の仇の如く憎み、叩き殺しても燒き殺しても構はん位に思つて居るものがある。露西亞とて何時までも今日の混亂狀態を繼續するのではあるまい。又日本とて何時までも國境を接する露國と交際せぬ譯には行かぬであらう。今日日本國民が露國人に加ふる侮辱と惡意が大なれば大なる程、他日被むる復讐も亦大であるであらう。帝政が共和にならうと、資本主義が勞農主義に代らうと、露國人の民族的自負心と國家的意識とに變りはない。自國民が不法の待遇を受くれば、癪に障はるに極つて居る。不法の殺戮を被むれば、腹が立つに極つて居る。歐亞の北半に跨るアノ廣大なる國土と日本に二倍する人口とを有する大露西亞國は永久に日本の隣國である。徒に其の恨を買つて敵に廻はすは、決して日本の幸福では無いであらう。

○

以前の極東政府代表アントノフ氏は北海海賊事件を以て第二の尼港事件と稱し、露國は日本が樺太を占領せる故知に倣ひて、千島を占領する理由と權利とがあると云つたとのことである。尼港事件に對し勞農政府の辯ずる處に依れば、尼港を襲ひたるパルチザンは西比利亞各所に散在せる山賊的團體で、露國と

府の軍隊とは何等の關係が無い。殊に尼港は當時日本が恣まに軍事占領を行ひたる爲め露國政令の及ばざる地域である。日本の軍事占領地に於て如何なる事件が發生するとも、露國政府は其の責に任ずる理由がない。しかも露國は日本に對する信義を重んじ其後パルチザンの首魁十餘名を捕へて死刑に處したと云つて居る。之に反して日本はパルチザンを以て露國の正規軍隊と認め、其の責任を問はんが爲め、保障として北樺太の占領を斷行したとのことである。パルチザンなるものが果して露國政府の云ふ如く集散常なき山賊團體であるか、將た日本の認むる如き露國の正規軍隊であるかは爰に言ふべき場合でない。併しながら對露關係を離れて考ふる時、パルチザンが山賊であらうと、露國の正規軍であらうと、苟くも我が軍事占領地域内に於て、尼港慘劇の如き大失態を釀したる我が軍事官憲の對內責任は何としても免れることは出來ないのである。

加之、若しパルチザンを以て正規軍とすれば、尼港事件は純然たる戰鬪行爲で、我が駐屯軍は全滅全敗の汚辱を暴らしたものである。國軍の名譽を傷つけたる此の敗戰に對する責任は戰鬪當事者の負ふべきものか、或は上級作戰部の負ふべきものか、何れにしても責任者が無ければならぬ譯であると思ふ。然るに戰鬪當事者は何れも進級敍勳の榮典に浴して居る點より見れば、彼等は敗戰の責任者では無い樣に思はれる。しかも吾人寡聞の罪かは知らぬが、事後三年を經過したる今日尙ほ未だ一人の責任者の現はれたるを聞かない。のみならず國民の認めて責任者と信ずる人々は却つて論功の恩賞にさへ與り、恬として耻ぢないで居る。之をしも免れて耻無く、貪つて飽く無しと云ふのであらう。如何に軍紀の振肅を叫んで小過を責むること嚴酷を極め、歸營時刻に遲れたる可憐の兵士をして自殺せしむる迄も、何で眞の軍紀の嚴正を保つことが出來ようぞ、

一部の論者は尼港問題に關し對內的責任者を出すは、是れ自ら日本の失敗を認むるもので、對外交涉の根據を弱むるものであると說いて居る。斯くの如きは全然別物たる軍事問題と外交問題とを故意に混同したるもので、國民を愚弄瞞着するの甚だしきものである。樺太占領の口辭を作らんが爲め、故意に尼港に在る七百の同胞を犧牲に供したと邪推するものあるも偶然ではない。子守の女中が不注意に赤ん坊を道路の眞ん中に拋り出して置いた。自働車が來て赤ん坊を轢き殺したとする。自働車に對する談判を不利ならしむる恐ありとて、女中の不注意を責むることを怠りたるものが、尼港問題に對する我が當局の態度であつた。尤も最初より慰藉料を強請る積りで、女中をして故意に赤ん坊を自働車の前に拋り出さしめたとすれば、主人は女

中を咎める資格なきのみか、却つて褒美を與へねばならなかつたであらう。

パルチザンが正規軍であるか、或は山賊團體であるかに依つて、我が樺太占領の理由に輕重を生ずる譯である。即ちパルチザンが山賊であるならば、我が軍事占領地域たる尼港に於ける出來事に對する責任は全然日本に在る。之に反しパルチザンが正規の軍隊であるならば、尼港に於ける戰鬪行爲の繼續としてのみ、我が軍の樺太占領を正當化するに足りるであらう。之と等しく北海々賊事件に我が官憲の後援或は默契あるに於ては、是れ一種の國家的侵界行爲である、アントノフ氏の言へる如く露國は之が報復手段として、或は自己擁護の爲めとして、千島を占領するの理由と權利とを有するであらう。併しながら如何に我が官憲軍憲が野心に富み、陰謀を好み、帝國主義に捉はれ、侵略慾に燃ゆるとも、公人として將た個人として、不法兇惡なる海賊に關係があらうとは斷じて信じたくない。

最近の報に依れば露國は此の問題に關し、日本に對して抗議的質問を寄せたと云ふことである。吾人は國民の一人として我が政府が國際正義の見地に立つて、罪を罪とし、邪を邪とし、償ふべきは償ひ、謝すべきは謝し、公明正大なる態度に出でんことを望むものである。糊塗彌縫、一時を誤魔化さんとする如きは禍を他日に貽すもので、決して信を世界に繫ぐ所以ではない。

○

事件の眞相は嚴正公明なる裁判の決定を持つて判明するであらう。夫にしても賊魁某は何の據る處あつて、海賊の如き兇惡事件に政府高官の了解庇護あることを公言したのであらう?。若し自己の罪科を免れんが爲めに、或は自己の行爲を正義化せんが爲めに、無根の事實を捏造流布せるものとせば、彼は國家に殉ずる愛國者どころか、國家を陷ゐれんとする非國民と云ふべきである。若し又天に口無し人をして言はしむるものとせば、彼は野心深き陰謀家の傀儡となれる憫むべき熱血兒である。彼は警察の取調に對して「早く東京へ送つて與れ、東京には政府の高官達が僕の着京を待ち焦れて居るであらう」と言つたと云ふことである。殺人强盜を敢てした海賊の言としては、何と云ふ驚くべき放言であらう。

裏面に如何なる事狀が伏在したかは知らぬが、元の陸軍少佐原某は浦鹽武器問題の全責任をば一身に引き受けて潔よく罪に服した。彼の行爲には責むべきものあるも、彼の心事には諒まれるものあるも、責任に對する彼の態度と、彼の意志とは誠に男らしきものであつた。之に反して海賊首魁某の放言は、あまり

に輕率である。あまりに無責任である。大輝丸の甲板上で日本刀を振り上げ、「尼港の恨み思ひ知れ！」と、罪も科もなき無抵抗の鮮人を斬殺したる劍道の腕の冴へはあつたかも知らぬが、警察の白洲で「國策に殉ず」など〻傲語して、政府高官の名をサラケ出すなどは、あまりに腹の締りが無さ過ぎる。同じ誤れる愛國者にしても、原の方が數等段が上である。併しながら彼の告白に依つて官界軍界に巣食ふ野心家や陰謀家を一掃することを得ば、此の意味に於て彼も亦國家の功勞者である。惜しいことに彼も四百年ばかり生れ方が遲かつた。

今や國家の存立發展に必要なる國策の大本は國際正義でなければならぬ。然るに舊式なる政治家や愛國者は今尚ほ戰國策的の權道覇道に據らんとするものがある。權道や覇道やは時としては成功に導く捷路たることもあるが、一たび失敗すれば國家を窮地に陷ゐる〻危道である。故に堅實なる發達を遂げんと欲する國家の決して執るべき道ではない。併し世に泥棒の種子の絕へぬと等しく、何れの代にも、何れの國にも、此種の策士は**絕へないであらう。そこで彼等に望む處は責任觀念である。海**賊にまで「國策」を引つ張り出されては、國家の信用は幾つあつても足りはしない。

○

併しながら浦鹽武器問題の如く、國際不正事件が既に世界に暴露したる場合に於ては國民は飽く迄も當局の邪曲を糺斷して、國家の眞意を世界に聲明すべきである。武器問題の發生したる際國民の或る者は、否な國民の多くは、當の責任者たる軍憲を攻擊することを以て、國恥を暴露する非愛國行爲とさへ叫んだ。惟ふに彼等は國恥を隱蔽し、國信を損することを以て愛國と心得て居るものである。彼等は臭い物に蓋を爲し自ら淸しと欺いて滿足して居るものである。彼等は耳を掩ふて鈴を盜みながら、誰知るまじと聖人面を装はんとするものである。彼等は「町内で知らぬは亭主ばかりなり」の川柳を事實に現はして居るものである。尙ほ又彼等の或る者は、外國人さへ何も言はぬに日本人自ら騷ぎ立つるは愚の至りであるとも言つた。當時外國人が一般に沈默を守りたるは、日本國民の義憤に依り、武器密賣が決して日本國民の意思にあらざることを諒としたるが爲めである。若し日本國民が沈默して軍憲の行爲を是認する如き態度を執りたらんには、國際不信義に對する世界の攻擊は日**本に向つて集中せられたであらう。**

曾て英國の陸軍少將ダイヤーなるものが、印度に於て一千の土人を虐殺したことがある。事件は約半歲の久しき間固く秘密に包まれて英本國人さへも知らなかつた。然るに事遂に暴露す

るや、英國の輿論は一時に沸騰して、ダイヤーを非難するもの、擁護するもの、新聞紙上論戰の火花を散らした。斯くて遂にダイヤーを招還して議會の審問に附し、國民の前に、世界の前に、公々然として裁判することゝなつた。判決の當否に關しては別論とするも、其の處置の正々堂々たること、之を彼の臭い物に蓋をして萬事を暗より暗に葬らんとする日本の隱味晦主義に比すれば、正に雲泥の相違がある。蔽はれたる秘密を求めて摘發するの必要は無いであらうが、既に暴露せられたる不正に對しては、徹底的に糾問して世界の疑惑を解き、國家の信用を維持することが眞に國を愛するの道であると信ずる。

○

警察制度の善備せる東京の眞ん中に於てさへ尙ほ兇賊の跡を絕たない。況して交番一つ無き廣漠たる海上に於て海賊を働くことは頗る容易であるが如く考へられる。然るに事實に於ては海洋に於ける大規模の海賊なるものは、今日最早や殆んど絕無と云ふべきである。唯僅に帆船稼ぎの小海賊が沿岸航海の小舟を脅やかす位に過ぎない。彼の南支航路に於て往々行はるゝ、乘客に變裝したる支那海賊の汽船劫掠の如きは、海賊と呼ぶよりも寧ろ船內强盜と稱すべきである。

海賊に對して直接警備に任ずるものは水上警察船と軍艦とである。又間接豫防に當るものは國際海上法規である。然るに水上警察船や軍艦は、種々の關係上、廣漠たる海上を常住不斷に遊弋して海賊を監視することは出來ない。之を以て海賊に對する警戒は主として間接手段たる海上法規の豫防力に待たざるを得ない。海上法規は軍艦と其他の船舶とを明確に區別して居る。而して軍艦以外の船舶は戰時若くは非常特別の場合の外、一切の武器を裝載することを許されない。是れ海上に於て恣に他船を襲擊することを不可能ならしむる爲めである。而して之が取締は國際信義に立脚せる各國の責任に屬して居る。左れば何れの國に於ても銃砲火藥彈藥並に爆發物に關する法律が制定せられ、政府の許可なくして猥りに之を賣買所有することを禁じて居る。若し是等の武器彈藥等の賣買所有を自由ならしめなば、海上に於ける大小の掠奪は到る處に絕へぬであらう。

之を以て北海の海賊船大郁丸に裝載せる武器彈藥にして、官憲が情を知つて許可を與へたるものとすれば、日本政府は海上法規を犯して海賊を援助したりとの非難を免れない。又官憲の許可を受けざる密賣品とするも、尙ほ取締怠慢に依り外國人に損害を蒙らしめたる道德上の責任を免れぬであらう。左れば海賊船の所有したる武器の出所は內外に對して極めて重大なる問題である。最近の報に依れば小銃の出所は意外の邊にあるを發

見したるらしく、之に依つて陸軍官憲に對する世人の疑惑を解くを得ば、陸軍の爲め、國家の爲め、慶祝の至りである。併しながら小銃は學校にも交付せられて居る。唯彈藥と機關銃とは陸海軍以外に之を所有保管せるものは無い筈である。爰に尙ほ大なる疑問が軍憲の上に殘つて居る。

近時陸軍大臣が國防の國民化を說くは誠に同感の至りである。併しながら國防の國民化を成就する爲めには、先づ陸軍に對する國民の信望を高むることが第一問題である。國際不正事件の起る每に、國民をして陸軍の陰謀を疑はしむる如きは、軍の信用を內外に保つの道でない。陸軍にして此の國民の疑惑を解かざる間は到底陸軍と國民との融和は圖れぬであらう。

○

軍艦は自國の領海以外に在つては國家の主權を完全に保有して居る。故に外國領海內に在りと雖ども主權に伴ふ治外法權を有して居る。商船も亦平時公海に在つては不可侵權を持つて居る。日清戰爭終りを告げ、既に平和克復を宣言したるも、新領土臺灣は尙ほ未だ鎭定に至らなかつた。當時臺灣沿岸を警戒したる帝國軍艦八重山は、臺灣を脫出したる淸將劉名傳が潛伏し居れりとの嫌疑を以て、英船某號に停船を命じて之を臨檢した。然るに時既に平和克復後なりとの理由を以て、英國は英國商船に對する日本軍艦の違法を詰つて嚴重なる抗議を提起した。之が爲め時の八重山艦長並に艦隊司令官は責を負ふて遂に現役を退くの已むを得ざるに至つた。海上に於ける船舶の權利は斯くの如く重大なるものである。露國は今日我が國と國交斷絕の狀態にあるも、決して敵國ではない。軍艦と雖ども猥りに露國船舶に對して凌辱を加へ危害を與ふることは許されない。況して私船を以てして尼港の仇討など〻稱へ、强盜殺人を行ふ如きは、許すべからざる罪惡である。しかも之に對して快哉を呼ぶ我が國民のあるは大なる遺憾である。

今日吾人が籐椅子に寢轉んで葡萄酒の芳醇に醉ひつ〻、無事に、安泰に、世界旅行の出來るのも、又外國の貨物を迅速に、安價に輸入して文明生活に浴し得るのも、皆是れ海上法規に依つて保たれたる海上治安の賜である。若し此處に人類の幸福を阻害し、海洋の安全を脅威する海賊を庇護後援默認する如き國家ありとすれば、世界の公敵、人類の反逆者として嚴酷なる制裁を受けねばならぬであらう。

予の一生を支配する程の大いなる影響を與へし 人・事件及び思想

拜啓　嚴寒の候お障りも無之候哉。御多忙の處毎々御迷惑の儀と恐縮の至りに存じ候へ共、左の問題に對する御回答を得、之を『中央公論』二月號の誌上に掲げ、啻に一般讀書人にとつて興味饒きのみならず、年少子弟にとつて提撕啓發する所大なるべき有益なる讀物と致し度く存じ候へば、何卒一月十四日迄に到着するやう御送稿なし下され度伏して懇願仕り候　頓首

大正十二年一月十日

中央公論編輯局

予の一生を支配する程の大いなる影響を與へし **人・事件及び思想**

以下に掲載するは右の如き書簡に對する回答なり。こゝに謹んで御回答を賜りたる諸名士に謝す（編者しるす）

○

沖野岩三郎

（一）人　桂太郎、川上親晴、幸德秋水、大石誠之助、金川誠之、

（二）事件　明治四十三年六月三日、紀州新宮町に於て、突如檢事田村四郎作氏の率ゆる警官十三名の爲めに、嚴重なる家宅捜査を受けたる後、私は甲種注意人物として滿八ケ年間言語に絕した壓迫を受けた。私は幸德秋水氏と一面の識があつた。そして幸德氏の同主義者大石誠之助氏とは深く交つた。其の爲めに私は意外な嫌疑を受けたのであつた。時の總理大臣が桂太郎であつた事と、私を新宮の町から逐出さうとした時の和歌山縣知事川上親晴と、其の部下であつた新宮警察署長警部金川誠之の名は、死んでも忘られない人名となつて私の頭に刻みつけられたのである。

（三）思想　私は基督教の牧師であつて、自由意志論者であつた。

そして極端な程に自由を翹望した。しかし明治四十三年の事件があつて以來、私は言ひ知れない苦境に立つて悶え苦しんだ。最初は桂太郎と川上親晴と金川誠之との名前を考へても嘔吐を催す程彼等の處置に怨む所があつた。けれども年月を經るに從つて私には彼等の心持と其の處置に同情すべきものを發見した。此の事件に錯綜した出來事が私の頭にいつも一杯になつて居た。其の爲に殺された人、職を奪はれた人、自暴自棄に陷つた人、不思議に生命を助かつた人達の言行が、私を異常な境地へ導いて行つた。私は十年の苦學に優つた教育を受けた。其の結果、私はいつの間にか強い宿命論者になつて了つた。と、同時に私の心に貯へられてゐた感情的な反抗心は殆ど其の跡を斷つに到つた。私は自分の過去を顧みて、理性と論理に立脚しない感情的の反抗が、非常に私を禍してゐた事を知つた。そして私は上記の五人と私とが同時に此世に産れ合した爲めに私の思想が宿命論に變じた事の不思議さをいつも考へてゐる。

○　小村欣一

(一)人　私が影響を受けたのは一人の人ではない。先考杉浦重剛先生並に亡父壽太郎の奉公の忠誠及不屈不撓の精神並に經綸。故山座公使の大才。隠れたる宗教家富永半次郎氏の眞理窮明の努力。妻温子の誠實。知友たる思想家、作家諸氏及自由主義を奉ずる外務省の友人諸君。以上の諸人より來れる錯綜せる結晶である。

(二)事件　突發せる事件としては「ポウツマス」條約の際霞ケ關外務大臣官邸に住居して燒打に遇ひたる時の感銘。繼續せる出來事としては私の幼年時代から三十年に亘る父の貧窮生活及母の極端なる「ヒステリー」に因る不斷の苦痛。

(三)思想　平和思想及人道思想である。特に痛感するのは日本人が、國際的協力の眞價を理解せざる事。狹隘なる愛國心及猜疑心に惱むで居る事。偉大な理想や哲理の追窮に熱烈ならざる事。反省力少き事。生活に虛僞多く又眞の人間愛に生き居らざる事等である。又前記(一)人、(二)事件の事實の關係もあり資本主義に對する憎惡が根底に横ることは勿論である。

○　永田青嵐

(一)人　第一は僕の亡父であらう、亡父の僕に與へた感化の其一は「小局に於て愚者たるも大局に於て賢者たれ」と云ふ事である、則はち綫綜となるな、頼明を習へと云ふ意味である。

其二は勤王の思想である、之は亡父は頼山陽の晩年の弟子たる淡路の碩儒岡田鴨里翁に就て學んだ爲であらう、

歴史上の人物としては諸葛亮とエパミノンダスに共通する精神である、一、奮闘主義　二、忠誠　三、寡慾　四、理智を以て情熱を制する事、

（二）事件　之に相當する事件に遭遇せざれども最も責任を感じたる事件と云へば一は郷里の洲本中學校長たりし時と二は京都府警察部長として御大典の警衛事務を擔任したる事とである、之は「辭職を以て責任を免るゝ事能はず」と感じたるが爲である、

京都在職の經驗に於て僕は「人力を竭して天命を俟つ」と云ふ意味が或程度迄理解された、又室鳩巣が北野天滿宮に祈つたと云ふ意味も或程度迄理解された、併しまだ〱本統にはわからない。

（三）思想　「平凡は偉大なり」「常識は偉大なり」「偉大なる愚者たれ」と云ふのが僕の今日の主張である、

青雲の野心は尙相當にあると思ふけれども追々と其價値を輕視する樣になつて來た、近頃郷里の淡路に歸つて「海晴れて松風清き丘の上に正しき者の墓と呼ばれむ」と云ふ綿入の和歌を作つたのも其氣持である、

「爾現在に忠實なれ、然らば幸福なる將來は爾を迎へむ、」と云ふ事も亦今日に於ける僕の主張の一である、

○何れの答も多少問題の的を外れて居るかも知れませぬ

○　白鳥省吾

（一）人　ある信徒がその教祖に對するやうな偏愛、熱愛、さういふものを持ち得る人は或は幸福かも知れませんが、同時に不幸にも考へられます。私は幸か不幸か、小さい自我に執することの強いためか、まだそれほどの大きい影響を與へた人に觸れてゐません。藝術上から言へばホイツトマンの宇宙的意識から出發した民主的思想や、ポーの神秘感やが何等矛盾することなしに抱擁出來、共鳴もしますが、しかし、それらが自分の藝術上に考へ方なり感じ方に或る轉換を與へたものでなくして、自分の所有する本質との共鳴だと考へてゐます。影響といふ點から言へば寧ろ偉大なる思想家、藝術家のそれでなしに、ごく自分の生活そのものに直接な父兄とか、戀愛の對象であつた女性とかが存外、深い運命的な影響を與へてるやうに考へられます。

（二）事件　過去を顧みてこれといふ大きな所謂「事件」を思ひ起すことが出來ません。私の生れた明治廿三年以來、日本と

しては可なり大きな事件はあつたでせう。然し私といふ個人にはどれだけの影響を與へたらうか。それは社會の個人々々の禍福に非常に大きな關係あると思へず外的な事柄にしか考へられぬのは寧ろ意外な位です。そして或る立場から考へればそれが當然です。私の歩み來し路はごく平坦な見聞、經驗の堆積に過ぎません。そしてまた存外、平凡な一些事と思はれるものが、私の現在の境遇を形成するやうになつたかも知れませんが、それは深く靜かに自分の徑路の細目を考へた上でなければ應答出來ぬ程度の微妙さを感じます。

(三)思想　思想としてはウイリヤム・モリスの藝術的社會主義に共鳴することが多かつた。モリスの著書及び評傳は、藝術と生活との關係を明確にし、今後の私の行くべき路を指示してゐるやうに思はれます。それかと言つてモリスが實行運動を主として藝術の表現を棄てた所に私としての不滿はあります。藝術家にとつて藝術の表現は或る一部の人が考へてるやうな微温な「どうでもいゝ」ものでも、いつでも忘れ得る棄て得るものでもないと私は考へてゐます。

○　松崎天民

(一)人　人の好かりし父、賢くして涙もろかりし母を想ふ。新間に於ける德富蘇峰先生、小説に於ける田山花袋先生、皆、年少の頃、小生が志業の的となりし人――。然して今日までの小生はこの人々の影響を、最も深く受けて、今日までの小生を築きつゝありしやうに感ず。

(二)事件　一人の妻を亡ひしことと、更に一人の妻を娶りしこと――。世間、有觸れたる平凡事件のやうなれど、小生にとりては、一生涯の大事件なるやうに感ぜらる。斯る平凡事の體驗にも、人生の悲哀と苦惱は少からず。

小生獨自の文學は、やがて此の體驗に依りて完成さるべきを思つて、この月日にも感謝の念あり。

(三)思想　七歳にして、母の懷に抱かれ、宣教師ベテー氏に依りてキリスト教の洗禮を受けたる時、冷たき一滴の水、頭にヒヤリとせしこと、今もなほ記憶に鮮かなり。

小生が半生流轉にも、常にこの「冷たき水」の思ひ出ありて、救はれしやうに感ぜらる。年少の頃に吹込まれしキリスト教的心持――。これをしも思想と言ひ得べきや。(大正十二、一、十二夜)

○　小川未明

(一)人　子供の時分に、教を受けた教師や、何等か心に、今も

なつかしみを感ずるやうな人々、それ等から、いつとはなしに知らず感化を受けたことゝ思ひます。比較的順境に育つた私は、母、父、妻、恩師坪内逍遙先生から、正直と忍耐とやさしみと克己の精神を養はれたと思ふのであります。また、讀書の中に現はれて來る人物や、あの偉大なるトルストイがこの世界に生存してゐたといふことも私の一生を支配したでありませう。

(二)事件　文壇に出てから、十年間の不遇、貧困の時代は、私に戰鬪の精神を充分に養はしたと今も思つてゐます。そして、二人の子供の死は、私に、生活の刹那であること、また生活の遊戯でないことを實感せしめた。其他、日々新聞に現はれて來るやうな弱者の生活、そして、たび〲この世界に起つた戰爭、其等は私の人生觀を確實ならしめた。

(三)思想　私は、幼時、山陽の外史を讀んで、あの中に描かれた正義の觀念に深く感銘されるものがあつた。

次に、汎神教的ロマンチシズムの精神に内心の共鳴を感じた。

次に、クロポトキンの「麵麭の略取」は、ある時代の私の頭を熱せしめた。

○　山室軍平

(一)人　耶蘇基督

(二)事件　(一)十六歳の暮路傍に基督教を聞きたるが緣にて、其の集會に出席するやうになり、やがて所謂基督の救に與かりたる事。(二)十七歳の春活版棚の間に跪いて神に祈り、(當時自分は活版職工であつた故)生涯を平民傳道に獻ぐべきを誓ひたる事。(三)二十四歳の秋救世軍にめぐりあひ、之を日本に同化することを得ば自分が日頃の願望を事實に行ふべき團體はこれなるべしと信じ、乃ち身を投ずるに至りし事。

(三)思想　新約聖書を讀んで、神は父なる事、人は子なる事、したがつて萬民は兄弟なる事、基督は神と人との中保者、又救主なる事、「凡て人にせられんと思ふことは、人にも亦其の如くせよ」てふ黄金律の行はるゝ處に、黄金時代の來るべき事等を學び、之が實行と宣傳との爲に、身も心もうち込むに至りし次第なり。

○　河上肇

私の遭逢し得た一切の人、一切の事件、一切の思想が、私の一生を支配するのだらうと思ひますが、そん事を申してはお答になりますまい。それかと言つて、そのうちの一二を取り立てゝ簡單な御返事をすることは、自分にとつて好ましく感

ぜられませぬ。右惡からず。

○　大町桂月

(一)人　余は十二歳にして父を喪ひ、外叔父多賀宗義に鞠養せられたり。外叔父は砲兵の聯隊長に終りたるが、古武士肌の快男子也。痩我慢の强きこと、日本武士の例に洩れず。家は唯四壁、六升五合入りの大瓢と藤田東湖の瓢分歌の詩幅との外には、何物もなし。苦しくても苦しいと云ふな、痛くても痛いといふなといふ風に、余は古武士的に教育せられたり。余常に以爲へらく、この世に我を人間としたるは親也。我を男兒としたるは外叔父也。

(二)事件　外叔父の感化を受けて、軍人にと志したるが、近眼となりて陸軍士官學校に入るの資格を失へり。當時の失望云はむ方かなりき。その後政治家たらむことを志したるも、自ら其適材にあらざることを知りて、學者、教育者、文學者の間に彷徨せるが、外叔父の感化今もなほ腹中に磅礴す。然るに世上何人もそれを知るものなし。半生の間、唯一人『貴方は軍人でしよう』と云ひたる女性あり。余喜んで駄句つて曰く、

我を知る女ありけり春の川

(三)思想　余の青年時代は西洋崇拜の弊が極度に達したりき。―鹿鳴館の舞踏は言はずもがな、甚しきは、國語を廢して、英語を用ゐざるべからずと唱ふるものもあれば、歐米人と結婚して人種を改良せざるべからずと唱ふるものなどもありて、憤慨に堪へざりしに、杉浦重剛先生を中堅として、國粹保存論唱へ出されて、余は感激に堪へざりき。この感激は、死すとも消えざるべき也。

○　柳澤健

明けて漸く卅五歳といふ年齢に達し得たに過ぎない自分は未だその「一生」に付いて口を開く時機ではない氣がする。況んや本問に示されたものの如きは總て自分の今後の生涯の上に親しく反映し行くべきものであつて、今日これを語ることは徒らに影を説くに止まり眞には意味のないことのやうに感ぜられるのである。

たゞ今日までの所で言へば、自分の思想及び行爲の兩生活に亙つて一番深い影響を與へて呉れたものと言へば、個人的關係のうへでは何と言つても現實に愛したひとのこと、現實に失つた親しいひとのこと、―そうした「愛」と「死」とであつたことは言ふまでもない。自分の思想に常に多少なり情熱の炎が燃えて居り、同時に憂愁の影がひそんでゐるとすればそ

れは實にこれが爲めに他ならない。他方一般的關係のうへでは、矢張り日露戰爭と今回の世界大戰爭との二つを擧げなければならない。（日清戰爭は幼少の頃で覺えがない）日露戰爭當時得た熾んな忠君愛國熱と皇軍連勝に依つて日本國民たることを光榮とするその衿持とは、それが中學生時代の頭の柔らかかつた時代だけに、餘計心に深く殘されてゐたことは否認できない。然し、世界戰爭とその後の情勢の展開とは日露戰爭によつて涵養された自分のハートには一寸そぐはない別種の影響を與へて呉れたこともまた否認できない。自分の思想生活に於て、それとこれとの間には明らかに一段階が劃されてある氣がする。

なほ最近に於ける自分の個人的經驗のなかでは、過ぐる年の歐洲一巡が豫想以上に大きな「事件」として心に殘されてある。「人」としては目下の處自分を最も動かしてゐるのは戰前暗殺された佛國の偉人ジヤン●ジョレスであるが、それは彼の政治的意見とか行動とかといふ點ではなく、むしろ彼自身の哲學——言はゞ彼の人間それ自體の點である。自分の人間哲學の規範を强いて求むれば今の所は彼である。彼こそ自分のためには「一生」のうちで最も重要なる敎訓を與へて呉れるメエトルの一人となつて呉れることは確であらう。

○　巖谷小波

（一）人　杉浦重剛先生

（二）事件　自分は文學をやり度いと思ふのに、亡兄がなか〳〵許してくれない。その際亡兄の親友なる先生が私の爲に亡兄を說いてくれたので私が今日あるを得たのである。

（三）思想　先生は自由主義の敎育家である。其塾に三年餘厄介になつて居る間に、一種のスギウラニズムを感得したのである。

○　正宗白鳥

（一）人　特別に一人二人を取出して數上ぐべきほどの人は思當らず。すべての人の影響を少しづゝ受けてゐるのであらう。そのうちで祖母や父母、その他肉親家族の影響が比較的大きいであらう。私ばかりでない大抵の人がさうであらうと思ふ。

（二）事件　これも一つ二つを數上げがたし、知らず〳〵すべての事件の影響を受けてゐるであらう。

（三）思想　これも一つ二つを取出しがたし。文章に書く時にはある一つの思想や事件によつて一生の局面が轉換したやうなことを感じて、それを强調して書くこともあるが、それが果

して眞實であらうかと疑ふ。

○　長谷川天溪

(一)人　恩師たるケーベル博士、坪内博士、故大西博士から受けた影響は少からぬものと思つてゐます、

(二)事件　私の十一歳の時、父の死亡したこと、

(三)思想　クローチエの書が最も好く私の亂雜な思想を整理してくれたと思ひます。

○　村松梢風

過去三十有五年の生涯を回顧するに、未だ以て、予の一生を支配する程の影響を與へたるもの無之が如し。果して然るか？　或ひは又無限に有るやうな氣持もするなり。正直に言へば、何が一番影響して居るものやら我れ乍ら分らず。大人物必ずしも予を感化せず、大事件大思想が、必ずしも日常生活の問題以上に影響を與へしとも思はれない。戀をすれば女が尊く、藝に熱中すれば仕事の外に餘念無く、富貴榮耀に憬るゝ時は財寶以外に望みは無い。何れが予の生涯に重きをなすべきや、判じ難く、解き難し。たゞ時々の氣分に任せて生きて行くのみ。影響多岐複雜にして、一二を擧げて貴問に答へ難し。

○　谷本富

(一)人　恩師故外山正一先生。同獨逸人ドクトル・ハウスクネヒト先生。同故品川彌次郎先生。而して此處には又故乃木希典將軍をも算入すべきだらう？

(二)事件　抑々外山先生は自分が東京帝國大學文科大學で、心理學や社會學の教を受けた方だが、先生はどこをどう見られたのか、自分を大に愛撫し又推挽せられ、やがて自分を京都帝國大學文科大學教授に薦めて、海外へ留學させる樣にして下さつたのも、皆先生の鴻恩である。尤も大學卒業の際は、先生は九州大學の理想から自分を特に熊本の第五高等學校教授になる樣勸誘されたのだが、自分が專門の教育學を教へて貰つたハウスクネヒト先生の懇囑默し難く、山口高等學校に奉職する樣になつたのは、外山先生には多少氣まづい思をさせた樣で心苦しかつた。

(三)思想　蓋し外山先生は元來自分に教育學者たるよりは、寧ろ社會學專攻を望まれてゐたらしい。斯くて山口に赴任することとなつてからは、又品川子爵の知遇を辱ふし今松陰たれかしと頻に面命耳提を施された。而して子爵の手厚き紹介で、長州出身の諸元老にも亦知られた。若夫れ乃木將軍との

關係は、世間周知の事だから喋々しないが、只將軍も亦長州人なのは何かの因緣だらう！

○　中村吉藏

一生を支配する程の大影響を與へられたか何うか、さうした事は潜在意識の世界にまで沈下する能力が、人間に具備されてゐない限り容易に解らない事だと思ひますが、嚴格であつた祖父、溺愛してくれた祖母、正直眞法な父、意志力の强い母、さうした精神的感化や乃至血肉的傳統が、自分の生涯の基礎的なものとして作用しつゝある事は否めません、師、先輩、友人の影響や感化もそれ〴〵にある事とは信じますが、青年期に於けるキリスト教、壯年期に於ける近代劇――殊にイプセンの思想、又現代の社會思想などは、自分の內心のめざめに善い意味に於ても、惡い意味に於ても、大なる感化力となつて働いてゐるのは事實です

○　石川半山

（一）人　十八歳の時、大阪に於て、中江兆民先生に面會しました、其の翌年東京に於て、田口卯吉先生に面會しました、此の兩先生は、私の私淑した人で有ります

（二）事件　明治四十年の春、三月十七日に父を亡ひ、同二十四日に最愛の娘を亡ひました、之れは私に取て、此上も無い打擊で有りました、其の悲哀が病を成し、同年九月、私は將さに死せんとする程の大患に罹りました、爾來私の野心は乏しくなり、自分では何の企畫もせず、他人の事業を助くる事のみに從ふて居ります

（三）思想　青年時代漢學塾で、靖獻遺言を讀んで、大に感動しました、又吉田松陰の文にも感動しました、西洋の書を讀む様になつてから、露國の志士バクーニンの傳には感激しました、私は自由主義と愛國心とは、兩立し得る者と思ひます、伊太利の首相ムツソリニ氏でも、土耳其のケマル、パシアでも、自由主義者で愛國者で有ります、兆民先生も、鼎軒先生も、愛國者で自由主義者で有りました

○　近松秋江

予の一生を支配する程の大いなる影響を與へた人も、事件も、思想も、特に取り出でゝいふべき程顯著なるものなし。午併性來相應に感受性の敏感なる方なりしゆゑ其等の事柄が絶無なりといふに非ず。寧ろその過多なるに苦むなり。而して其等の影響を與へし人も、事件も、思想も、大抵消化されて予

の生涯を培養する助けとなりたりと信ず。特に取り出でゝいふべき顯著なる影響を與へし物なきは予の思想、人物、功業の低少なるを語るが如くなれども、又省みて必ずしも然らざるを思ふなり。

客觀的の評價は暫く別なれども、予にとりて幼年時代より始め、その時代々々に相應の感化、啓發、影響を與へし書籍（之は思想）は賴山陽の日本外史、孟子、德富蘇峯氏の雜著、竹越與三郎氏の「二千五百年史」福澤先生の「自叙傳」その他の雜著、坪内逍遙氏の雜著、雜談、德富蘆花氏の雜著小品、田中王堂氏の思想、高山樗牛氏の評論雜著、トルストイのチヤイルドフツド、ボイフツド等は省みて何等かの痕跡を予の胸に殘せり。

○　堀江歸一

（一）人　私の父と母とであります。父は明治年代に海軍に出仕し、志を伸さずして、一大尉を以つて自分の乘艦と共に死歿したこと、父の死後、私は母の手一ツに育てられたことは常に私の心に大なる感動を與へて居ります。父母以外の人に依つて私の受けて居る影響もありますが、何れも少なるものに過ぎません。

（二）事件　一生を支配する程、重大なる事件には今日まで未だ出會つた覺へを持ちません。

（三）思想　アダム、スミスの國富論とヘンリー、シツヂウヰツクの政治學要論とは私の青年時代に於ける思想に大なる影響を及ぼしまして、今日に至つても、尙ほ其れ等の支配を脫して居らないと考へられます。

○　大泉黒石

一科の博學者にならうとして遂に成りそこねた私の傳記は、既に充分に小説と戲作に明からにした通りである。その當時讀んだサリイやショウペンハウエルやハルトマンや老子や鴨長明や十返舍一九の絕望的運命論は、到頭この空想的社會改良志願者であり、浪曼的ドン・キホーテの私をして、一種の樂天的厭世家にしてしまつた。そして只それだけである。これからどんな風に變るかまだきまらぬ。（以上）

○　田中貢太郎

（一）人　田岡嶺雲、幸德秋水、大町桂月の三先生。

（二）事件　別になし。

（三）思想　老莊虛無の思想。そしてその理想的人物は陶淵明であるが、これは酒を飮む詩人と云ふことゝでなしに、その作情

の點に於てである。

○ 佐藤功一

御問合せに對して斯ういふ御答ではいけないのかは知れませんが、私の今日迄の生涯は甚だ平凡なもので、其の軌跡には間斷なく一高一低のゆるやかな波が描かれておりますが、此の描かれた曲線のうちには、何等かの影響に依つて急激な方向の變化を示し、そして私の行く道が今もなほ其の方向の示しつゝある通りになつて居るといふやうな事がありません。換言すれば私の一生を支配する程の大なる影響を與へし人、事件及び思想といふものを私の今日迄の生涯のうちには見出し得ないのです。私の進みの合成力（レザルタント）にはいつも多數の小さい分力（コムポーネント）だけが働いて合成力の方向を支配するやうな大きな分力が働いた事がないのです。

○ 高島米峰

（一）人　聖德太子

（二）事件　一、新佛教同志會の設立、二、鷄聲堂及び丙午出版社の創業

（三）思想　大乘佛教說する所の當相即道の思想

○ 德田秋聲

（一）人　色々の人から色々の影響を受けてゐるんでせうが、畢竟は受けてゐないと言つた方が私としては至當のやうです。一生を支配するほどの大きな影響を誰からも受けてゐません。

（二）事件　右同樣です。

（三）思想　老莊の思想などが性に合つてゐるやうですが、あゝいふ思想も、病人に藥を飲むより自然療法をしろと言ふと同じで、實生活の上にはさう役立たないものでせうし、絕對のものでもないでせう。やはり科學を信じようとするもので、科學で知りうるだけのことを知つた上でなければ、哲學や宗教へは行けないやうに思ひます。又さうした方が近路だと信じます。

○ 水野廣德

（一）人　浮沈轉變極りなき人間の一生を支配する程に大なる影響を與へたる人を私は今記憶しません、殊に英雄崇拜心の薄き私には人生の師として不斷に欽仰する人も心當りがありま

せん、若し強ゐて求むれば私の性格思想の或る部分を形作りたる孔子孟子であらうかと思ひます。尙ほ生活的には私に海軍出身を勸誘し現れたる一友人ぐらいであります。

(二)事件　私は今微かながら筆を以て世に立つて居ります。併し靑年時代は素より、海軍に入りて後までも斯樣な考は毛頭心に無かつたのであります。然るに日露戰爭中私は水雷艇の艇長として旅順に閉塞隊援護の任に就いた際、上官よりの半命令に依り初めて簡單な當時の戰況を書いたとがあります、之が動機となつて何時の間にか世間から筆を持たされて仕舞つたのであります、アノ時書いたツマラヌ一文章が私の一生に左程大なる影響を及ぼそうとは全く豫期しませんでした。

(三)思想　私などの樣な宗教も哲學も知らぬ者に纏つた思想と云ふ程のものはありません、唯少年時代より今日迄一貫せるものは自持的には獨立獨行と云ふ精神と對他的には人間平等と云ふ觀念であります、之は思想と云ふよりも寧ろ性格と云ふ方が適當かも知れません。私は日本人の多くが外國人の橫暴を憤つて國際的に人種平等を絶叫しながら、特權階級の我儘を惡んで國内的に人間平等を唱ふる者を社會主義とか危險思想とか非難する矛盾と不徹底とが不思議に思はれてなりません

○　室伏高信

(一)人　一生を支配するほどのこともないが「可成」りの影響を時々に與へた人は尾崎行雄、ギルヅメン、哲學者としてのベルグソン、社會思想家としてのラッセル、ラアテナウ、それから今ではシペングラアなぞ。

(三)思想　デモクラシイ、社會主義、無政府主義其他

○　米田實

(一)人　勝海舟

(二)事件　それ程の事件無し、唯だ、少時、貧窮學資なかりし爲め志を決して東上したこと、次で米國に行つたことは予の一生に重大影響を生じたには相違無し

(三)思想　プレトー、スピノザー、孔子等の著述若くは敎訓から、大分與へられたものがあつたやうに思ふ、併し之を正解して居るか否か別問題也、一生を支配する程のものがあつたとは申し難し

○　本間久雄

(一)人　德富蘇峰、坪内逍遙、島村抱月、綱島梁川、ウオルタア

ペエタア、エレン・ケイ、ウイリアム・モリス、これらの人々から過去において、現在において、私は多くの影響を受けてゐます。

(二)事件　特に申上げるほどの事件もありません。

(三)思想　上に擧げた人々の思想が雜然と私の中に同居してゐて、特にこれと云つて取出しにくいやうに思はれます。たゞし、現在ではウイリアム・モリスの生活美化の思想に最も多くの共鳴を感じてゐます。

○

高須芳次郎

(一)人　私の恩師坪内逍遙先生が私に歷史研究及び歷史文學の方面へ進むべき道筋を教示された事は、私の現在及び今後に大きい影響を附與されたと思ひ、逍遙先生に對し深い感恩の情を以て居ります。私が今日、民衆文化史及び社會學の方面に專心しやうと決したのは逍遙先生の指導に基づく所が多いのであります。

(二)事件　少年時代に早く父母弟妹に別れ、孤兒として生活した事は、私の生涯に大きい影響を與へて居ります。殊に十五歲の秋、不遇な父が淋しく世を去つたことは、私の心に强い影響を殘しました。何か獨自の道を空拳を以て開いてゆかねばならぬと云ふ感じが私の胸を揺り動かしました、それが情に脆い私に意志の力を揮ひ起させる動機となりました。

(三)思想　私は曾て日蓮聖人の遺文を拜讀して思想上深い影響を受け、それが尚今日も續いて居ります。佛教の實大乘方面を思想として最高のものだと感じたのは日蓮聖人の導きによります。最近私は自分の專攻學術(民衆文化史及び社會學)の關係から近世社會思潮についての史的考察を加へつゝある結果、ラツセル、カーペンターの思想から深い影響を受けました。

○

小野俊一

(一)人　(二)事件　全ての事がみな網の目の樣に連關してゐます。いろ／＼と過去・現在の自分を省てみましたが、御質問に與つた樣な人とか事件とかいふものは、少くも私の場合、特別に個々のものとしては何も思ひ當ることが出來ません。私はどこまでも、私といふ者の一生は、自分が生來持つてうまれた諸の素質と、其れをば既に今までにも或る程度まで發育させてくれ、また今後もだういふ風にか開展させてくれるだらう外的環境とによつての人間的表現であると考へてゐます。時代の雰圍氣といふ樣なことも勿論その外的環境の重大な要

素となつてをるのでありまして、プラスに働いてくれたとマイナスに作用してくれたとに拘らず、私の一生の表はれ方は今までの（さうしてまた今から私の死に至るまでの）外部からのActionsに負ふ所が大であり、其れ等の Actions に對して私といふものに獨特なプラズム的Reactionsが即ち自分の一生の生活でもあり、仕事でもあり、全部であると考へてゐます。もしも詳しく分析的にいふならば、例へば現在に於てゞも、私の今後の一生を支配する様な大きな影響を與へつゝある人々や事件は可成りにあることを知つてもゐ、また感じてもゐますけれど然し一個々々に切りはなして其れ等を考慮することは絶對に出來ないと思ひます。

（三）思想　我々の持つ理性といふものも其の大部分は傳統的に過去から承け繼がれて來たものであることを認めます。然し其の從來からの人間の理性に訴へて判斷してさへ世の中には今迄に『當然の理』であると考へられてゐたことに決して當然でなく非常な不合理であることが頗る多い。總ての道徳なり習慣なりを鵜呑みにする事なく一度は必ず疑ひもし吟味もして見て然る後正しいと思はれる所を目標とし、之れに反し不合理と思はれることにはどこまでも反抗して其れをば一刻も早く除かうと努力すること、我々がさういふ態度をとることによつてのみ今後の人類の進化は遂げられるのであると信ずる念、さういふ思想が斷えず私の行動を支配してゐます。それからまう一つは、抑々こんな姿をしてをる自分といふものが本來何であるかといふことを自ら究極まで考へつめることによつて、薄々乍らも自分の天命といふ様なことを直覺すると同時に、世の中には何も怖るゝに足るものはないといふ氣持にいつでもなり得ること、其の氣持によつて私の心は屢ゝ支配されてゐます。さうして私の保持する人生觀は本號にも其の續篇が掲げられる筈である『子孫崇拜論』の中に述べてゐる様なものであります。以上

○　上司小劍

（一）人　幸か不幸か、まださういふ人に出くはしません。

（二）事件　煙草の嫌ひな私、殊に日本の煙管といふものゝ形を憎む私の幼時、父はよく私の厭やがるのを知つて、煙管を私の前に突き付けつゝ、煙りを私の顔に吐きかけました。其の復讐に、私は父の知らない時を狙つて、煙管の吸ひ口へ便所の不浄物を塗り付けておきました。さうして様子を窺つてゐると、父はやがて煙管を取り上げ、ゆつたりと一服吸ひました。不浄の悪臭も、煙草のにほひに消されてわからないので

した。其の時の可笑しさ、一生を支配するといふほどでもありませんけれど、私の思想は、この滑稽事を源泉として湧き出してくるやうに思ひます。

(三)思想　クロポトキンの『パンの略取』を讀んで成るほどこんなものかと思ひました。

○　安部磯雄

(一)人　直接に私の生涯に影響を與へたのは京都同志社の創立者新島襄先生です。經典によりては基督から、著書によりてはトルストイから最も多く感化を受けて居ります。

(二)事件　同志社に學びしこと。同志社在學中死生の境を彷徨するといふ程の大病に罹りしこと。米國及び獨逸に於て暖き家庭に宿泊せしこと。

(三)思想　私は基督教によりて人類愛を幾分か修得することが出來、社會主義によりて人類愛の實行方法が明白に判つたやうな氣がします。故に私の心を支配して居る思想は基督教と社會主義であると斷言することを憚りません。

○　野口米次郎

(一)人　北米の詩人ウオーキン・ミラー。

(二)事件　十五歳の時初めて大洋を見て自然の大なることを知つたこと、十八歳の時米國に渡つて、彼地にも乞食多きことを見て、外人崇拜から目覺めたこと、千八百九十三年に米國より英國に渡り、文學の大事業であることを知つたこと、千八百九十四年に歸朝し、時は日露戰爭の終結前なりしを以て、所謂愛國心の如何なるものなるかを知つたこと。

(三)思想　この項は返答し難し。

○　堺利彦

(一)人　無し

(二)事件　無し

(三)思想　社會主義

○　松村介石

(一)人　現世の人では一、予の父。二、横河秋濤。三、押川方義。四、勝海舟。過去の人では一、リンコルン。二、ルーテル。三、ピツト。

(二)事件　一、基督教を信じた事。二、箱根山と鎌倉の海濱で祈禱して天の使命を自覺した事

(三)思想　カーライル、マヂニー、王陽明、横井小楠、より得

たるもの。

○ 加藤一夫

(一)人　耶蘇、トルストイ

(二)事件　今は全くその圏外に在るも、更に原始キリスト教の門をくゞつた事。

(三)思想　基督教思想の一部。
スティルネル、老子、アルツィバーセフ等の虚無思想。

○ 千葉龜雄

(一)人　一生を支配するといふ程の價値のある一生も半生も持たぬものですけれど、大いなる影響を與へて呉れた人々は、△第一に早く寡婦となつた嚴格な亡母、△活版小僧から私を拾ひ上げて、小學校と中學校へ通はして呉れた故人鈴木太郎作氏、△牛乳配達の境涯から「文庫」の記者へ採用して、勉强を許して呉れた山縣悌三郎氏と夫人(故)操氏、△雜誌「日本人」と「日本新聞」の末席記者に周旋して下すつて新聞記者の手本を教へられ、それからずつと直接間接に御世話になつて居る三宅雪嶺博士及び博士をめぐる古島一雄、井上藁村、長谷川萬次郎、丸山侃治、河東碧梧桐其他の政教社同人諸氏

(二)事件　これも故人になつた小學校の友達勢海明德といふ男これは子規に愛された靑年俳人で才子であつたが、思ひも掛けず、東京へ逃走をすゝめられ、結局苦學といふ名目で十年養育の仙臺の恩家を出で、臆病至極な自分が他人の意志一つに導かれて一人も知り人の無い東京へ出て來た事。

(三)思想　支那の帝國がたをれて共和國となり、更に大戰中ロシアのロマノフ朝がたをれ、戰後更にドイツのカイゼルが沒落した。その中に潜む汪然たる民主主義思想、それから更に躍進した産業革命を基調とする現代世界政治下の潜流思想、何れも無限のショックを與へられたものでした。

○ 河井醉茗

(一)人　母

(二)事件　私が十七歳の時、急な病氣で母を喪つたことです。

(三)思想　日本の古代から現代に至るまでの文藝に現はれた思想が矢張基調になつてゐます。

○ 笹川臨風

(一)人　幼時「高山操志」を愛讀して、藤田一正先生(幽谷)の祭高山生文を絶賞し、遂に之を暗誦するに至りて、幽谷先生を

敬慕し、延いて東湖先生に及び、其後西郷南洲翁の犧牲的精神を渇仰しました。歷史を專攻するに至つたのと、文章に多大の影響を受けたのは賴山陽先生の感化と思ひます。歷史上の人物としては織田信長を愛好して私淑する所が少からずあります。

(二)事件　一生を支配したかどうかは知れませんが、湖南事件は祖國を强大にせねばならぬと云ふ觀念を明白にしました。湖南事件とは大津に於ける露國皇太子の事變です。當時京都の高等中學に在學中でしたので、殆んど目のあたり此事件に遭遇しましたから、痛切に感じたのでした。

(三)思想　少年時代には王陽明の學說を喜んで、傳習錄や陽明全集や文集を讀んで居ましたので、思想上少からず其影響を受けました。其後は老莊思想に趨つたので、今でもその思想に支配されてゐるやうです。西洋物では、ショペンハウエルの「パレルガ」や「意志と現識としての世界」やラスキンの「セブン、ランプス」や「ストーンス、オブ、ヴェニス」やを愛讀したゝめに、それ等から多くの感化を得てゐます。

○　生方敏郎

その人一人の影響で何うといふほどの人にもあひませんが、その代り多くの人々から支配されて來た事はたしかです母、教師、友人、妻子等親しく接觸した人々です、古人の教へといふやうな意味合ひでしたらキリストですが、ただ感心させられただけの話で、少しもその教理を遵奉して實行したわけではありません、昔ながらのペーガンの生活に少しも變りはありません、事件もいろ〱ありましたが、そんなに目立つて大きな影響を與へたほどのものには會ひません、性質が頑固ですから、他の影響は割合に少ないやうな氣がします。

○　吉野作造

(一)人　好學の志向を起させし人としては、小學校時代の校長山內卯太郎、中學校時代の校長大槻文彦の兩先生に負ふ所多く、今の專門の學問に就き兎も角も略ぼ一定の見解を立てる樣になつた事に關しては、大學生時代に於ける小野塚博士の指導を感謝せざるを得ぬ。更に信仰の師として海老名彈正先生を戴いたこと、又友人として內ヶ崎作三郞、今井嘉幸、佐々木惣一、故小山東助の諸君を有つたことは、僕の一生に決定的の影響を與へたものである。

(二)事件　僕の生涯は今から振返つて見て我ながら極めて平凡

なるに緣くのである。因より悲喜兩面の雜多な事象に遭遇はしたが、一生を支配する程の痛切な影響を與へられたといふ覺へはない。强て探せば一つある。僕は生來極めて弱く、子供の時代には年中藥ばかり呑んで居つた。中學に入つてからも病氣缺席が頗る多かつたが、四年生の頃不圖した先輩の忠告が因となり、健康などは氣の持ち樣一つで如何樣にもなるものだと考ふる樣になり、夫れ以來見掛けに依らぬ健康體になつた。あの時の心氣一轉が無かつたら、今頃斯うして人並に活動して居られるかを思ふ時、之も矢張り僕に取つては重大事件と謂つてよからうと思ふ。而して先方では何れ程の積りで云つたのか知らぬが、不思議な響を當時の僕に與へたその忠告の主は木下淑夫君である。其後かけ違つて遇ふ機會も少いが僕は絕へず同君に感謝の意を有つて居る。

（三）思想　僕の今の思想の基底となつて居るものを今古の聖賢に求むるなら、嗚呼がましいがカントと云ひたい。但し之は之からも大に研究したいので、過去に於て僕の一生に多大の影響を與へた思想として擧示するには不適當のやうだ。そこで僕の思索生活に最も大なる影響を與へた具體的の事實はないかと反省してみると、大學生時代に聽いた海老名彈正先生の說敎が夫れであると思ふ。日曜毎の說敎に依て僕は信仰上に得る所も尠くなかつたが、先生が宗敎上の神秘的な問題を、科學的に殊に歷史的に、快刀亂麻をたつの槪を以て解いて行くのには敎へらるゝ所非常に多かつた。斯うした先生の態度に依て僕の學問上の物事の考方が著しい影響を受けて居ることは、今以て先生に感謝して居る。斯んな方面で感謝されては先生も御門違の感を催さるゝだらうが、今の僕の樣なヤクザ者が人格生成の上にも御厄介になつたとはどうしても云ひ切れぬからこの方は少し年取つてからの勘定に殘して置かうと思ふ。

想華

續伊太利遊記

柳澤健

羅馬の十日間

羅馬！　羅馬！　あゝ遂々自分は羅馬へ來たのだ。

ヴイア・トリトーネの旅舍アルベルゴ・マリーニの四階の大きな安樂椅子のなかに身を沈めながら、自分は幾度この言葉を口にしたことだらう。曾て『現代佛蘭西詩集』と題して公にしたことのある自分の譯詩集をば繙いたことのある人は、そのなかに翰林院の詩人アンリ・ド・レニエが『羅馬よりの書翰』といふ一篇の詩のあることを憶ひ出して吳れるに相違ない。その詩に現はれてゐたレニエの喜びが、今はそのまゝこの身の喜びとなつて自分の唇にと泛び出るのであつた。

私は今夜おまへに書き送る、この『永遠の都市』から……………

その英雄的な塵埃は私の裏革に觸れた。
私は大理石と月桂樹との匂ひを吸ふた。
そして私の指にはさんだペンは、
この響きのよく嚴めしい名、Romaと書きながら紙のうへで顫へる。
オテルは氣持がよくその主人もいい男だ。
彼は瑞西人らしいが、羅馬風の名を持つてゐる。
私の部屋は廣い、明日は六時に私を起す筈になつてゐる。
私が停車場に着いた時には既に暗くなつてゐた。
私は晩餐をした。　私の葉卷(シガー)はこの言葉を書くと同時位に燃え盡すだらう。
願はくは羅馬の一夜が私に快いものであつて吳れるやうに！
彼女(このまち)については僅かの街を見たばかりで何も知らない。
家並と、貝を吹いてゐる廣場と、
軟らかな噴水を投げてゐるトリトンの像と。
今私は窓越しに耳にする、
近くの寺院の鐘が空のなかにひゞくのを、
そして、私の心臟がこの胸のなかにひゞくのを。

私は怖い、私の周圍、暗影の眠つてゐるそのなかに、
青銅と黄金との幽靈なる羅馬がある！
私の魂は、聖らかな騷擾に充たされる。
羅馬はいつもかうだ、永い間彼女を待ち望んでゐた者にとつては。
そしてまた、この玻璃窓のうしろの方に羅馬があり、
感動に溢れ、神秘に充ち、美に煌いてゐるといふことを知り、
さては、日が窓を白く彩つたとき、
遂に羅馬のうへに曙が生れたのであるといふことは、
怖れの顫へさへも交へた歡喜で人々を抱き緊める…………
然し私の蠟燭は短かくなり、私の葉卷も冷たくなつた、
左樣なら、私の身の幸福を思ひやつてくれ！
待つといふことは心を熱くし、魂を一しほ炎とする。
羅馬！　私は御身を朱色の朝のなかで見やうとしてゐる。
更に私は、御身をわが睡眠のなかに所有しやうとして、
御身の光榮の燦いてゐる夜のなかにこれから這入りこまうとしてゐる。

御身の持つ七つの丘の名を七度口に繰りかへしながら。——

自分は、葉巻の代りにベルモットのやゝ苦いグラスを唇に當てながら、部屋の眞中に吊された燈燭(シャンドリエ)の柔らかな光を、まるで夢でも見てゐるやうな氣持で、うつとりと眺めた。フイレンツエから雜馬までの半日の汽車の旅のわづかの疲れが、リクールの淡い醉に交り合つて、快い痺れを身體のなかに起す。何時ともなく燈燭(シャンドリエ)の光から眼を閉ぢた自分は、遠い國のことでも思ひ出すやうに今日の午後汽車の窓から眺めたいろいろの景色のうへにと思ひをば移して行くとそうしたかずかずの景色のなかから、際立つて鮮かに浮び出したのは——あのカムパニアの夕陽とその夕陽のなかで見た雜馬の一瞬時の眺めであつた。

フイレンツエを出てからこのカムパニアの野にかゝるまでは、無味單調な山地が旅人の心を飽々させる。それが急に展けて、この一望限りないカムパニアの綠野に出たときの喜びは！ あゝ、この綠野の中央に雜馬の町が建てられてゐることを想ひ遣るときには、誰しも心のなかに雜馬の持つ地位地勢の秀れたことを今更らしく肯づかずにはゐられまい。そしてまた、あらゆる道が雜馬へ通ずるとなされた言葉のごとく、あらゆる心もまた雜馬をかこむこのカムパニアの野の明るさ、廣さ、豐かさを求めて集らうとしたことをも、肯づかずにはゐられまい。自分は車窓より貪ぼるがごとくにこの豐かなる曠野の景色を眺め入つた。その景色の美くしさは、歴史の數々の場面の幻さへも交へて旅人の眼を心をその上にもしつかと握むのであつた、自分は聲もなく、かうした野の姿に見惚れてゐるうちに、何時か夕陽は西の地平へと傾いて行つた。それは、まるで黃金いろの焰のなかに燃えしきる大きな金牌(メダル)であつた。眩ゆい光は、樹のすくない野一面に洪水のやうに漲つてゐた。時計を出して見ると、雜馬に着く時刻にはもう僅かしかない。町の端でも見える頃かと、尚更車窓にふかく凭りかゝつてそれと思はるゝ方角を眺めてゐるうちに、太陽は次第次第に地平に沒して、その純らかな黃金いろは急に眩ゆい赤紫色を帶びて來て、地平に積疊する雲層を不思議な光と色とで照し出した。もつれ合つた雲層の間からは、まるで水の淵でものぞむやうに深い碧空が奥知れぬ色で覗いてゐた。北方佛蘭西の邊では到底見ら

れないこの錯綜混迷した空の色と形との下だつた、思ひがけない方面に當つてちらとばかりに『永遠の都』の一部分が‖まぎれもなく聖(サン)ペドロ寺の圓頂さへも、車窓に映つて、直ぐと消えてしまつたのは！その時の自分の心の戰慄を感動を、自分は容易に言葉をもつて說きがたいのを感じる……………………

――その羅馬の中央に夜深くいまからうして安樂椅子に身を沈めてゐるのだ。あの赤紫色を帶びた黃金の光箭を町のうへに投げかけた夕陽も、程なく『窓を白く彩つて』『羅馬のうへに曙を生む』がために、天際にペガサスをば急がせてゐるのだ。さうだ、自分もまたこの朱色の朝のなかに羅馬の現はれるのを樂しみにして、詩人レニエに倣つて羅馬の持つ七つの岡の名を七度數へながら寢床のなかへとはいることにしやう。

カピトリノ、パラチノ、アヴエンチノ、エスキリノ、……………

日本の大使館のあるコルソ・ヴイツトリオ・エマヌエレの賑やかな通りをずつと歩いて行くと、テヴエレの河がはじめて眼にはいる。黃いろに濁つた河の流れはなかなかに早い。先程の驟雨のためかとも思つたが、さうではなくて何日でもこの河の色の青く澄むでゐることはないと言ふ。古くヴイルギリウスの詩句にも、この水のいろを歌つて永久の黃色としてあると言ふ。――その黃濁した流れに架してあるサン・アンジエロの橋と、その橋の正面に屹立してゐるサン・アンジエロの城砦(カステロ)と、この二つの古めかしい趣を持つた姿が今まで現代風の賑やかなエマヌエレの通りをば步いて來た旅人の心を、急に『過去』のなかへと轉移させる。『羅馬』のほんとうの面影が閃めく。

サン・アンジエロの城砦は、もともとは皇帝アドリアヌスの骨の爲めに建てられた墓所であつたに過ぎなかつたが、あとで羅馬がゴートの蠻族等に荒された時、それ等の者の手で今日見るやうな異樣な城砦に改變せられたのであるといふ。そして、それ以來はその內部も賑やかな埋骨の聖堂である代りに、慘虐な空氣に充ちみちた獄舍となつたといふ。

テヴエレ河畔のこの假初めな城砦にも、羅馬の全史が縫ひこまれてゐるのであつた。赭土色をしたこの奇異た外形をば持つた建物を、しばらく橋のうへに佇みながら仰ぎ見てから、軈て自分たちはその建物の左を折れる狭い通りへと辿つて行つた。

このサン・アンジエロの城砦から聖ペドロの寺院まではほんの僅かの道である。然しながらその道は狭くして汚い凹凸の烈しい石道であつた、恐らく昔のまゝの道であつた。兩側の家もまた賤しく汚れてゐた。その邊に動いてゐる人々も不安と貧しさとに眼を光らしてゐるのがすくなくはなかつた。かうした通りを超えて彼方に見えるのは、言ふまでもなく聖ペドロの壯大無比の大伽藍であつた！。この貧しさと豐かさとの烈しい對照は、またしても旅人の心を強く搖り動かさずには措かなかつた…………。

が、何は兎もあれ、聖ペドロ大伽藍とそのまへの廣場との展望をほしいまゝにしやう。人間の建てたもののうち最も壯大なるものを、そしてまた最も華麗なるものを、これから見て行かう。

廣場をかこむ無數の希臘風の列柱は、遠くから見ると如何にも輕やかに見える。その凉しげな感じに充ちた列柱を背景として、廣場の中央には埃及から運んで來た方尖塔(オベリスク)が聳えて居り、その兩側に隔つたところには二つの噴泉が豐かな水を高々と空中に押しあげては、瀧のごとくに落下せしめてゐる。その噴水の絶えまない變化とその音樂とは、列柱を兩翼とし巍然と聳えてゐる壯嚴なる伽藍の不動と沈默とに對して、かへつて言ひやうなき諧調をかたちづくつてゐる。それは――言はば、一は動ける建築であり一は動かざる音樂であるとも言ふことが能きる。その二つが相縋り相扶けて觀るものの心のうへに強く深い效果(エフフエ)を刻みこまうとする。

次第次第に地面は高くなつて、何時とはなしに人々はコリント風の柱につゝまれた壯麗な大伽藍の入口へと近附く。間近になつた列柱は遠くから見たやうな輕やかさをば失つて、その代りに深々とした大理石の森林をば現出する。人々は仰いで大きさと豐かさとの美に打たれる。

幕をくぐつてなかに足を踏み入れる。おゝ、何といふ華麗、何といふ豐滿、何といふ色彩の發姿！自分は、その眩ゆ

さ燦やかさにまつたく壓せられてしまつた。それは、豊麗なる宮殿でなくて何であらう。寺院といふ言葉が引き起す閑寂沈靜なる趣はこゝではまつたく見ることが能きなかつた。その華麗饒多なる姿はかの驕奢を以て鳴る路易十四世樣式の宮殿の絢爛なる美くしさに優るとも劣るものではなかつた。從つてまた、この『宮殿』に座す羅馬教皇が、僧侶といふよりも、むしろ『君王』であつたことも、今更らしく肯かるることでもあつた――。

然しながら自分が寺院の內部の華麗に驚ろいたのは、この聖ペドロに於て最も大きかつたとは言へ、決してそれが最初の經驗ではなかつた。自分は伊太利へ着き早々にミラノのイル・ドオーモを見たときから、この國の加特利寺院の內部の明るさ華やかさが、到底他の國の加特利寺院の內部の暗冥な影と較ぶべきではないことにひそかに氣付いたのであつた。佛蘭西に於ても、西班牙に於ても、さては獨逸に於ても、自分のいままでに見て來た寺院は、何れも暗影に充ち微光に煙つて、たゞ窓の彩玻璃と聖壇の燭臺との光りのみがこの昏い內部に洩れる唯一つの耀きであると言つてよかつた。殊に、その大きさと美くしさとに於いてこの聖ペドロに次ぐと言はれてゐる西班牙のセビラのカテドラルの內部を想ひ出して見ても、この華麗な色と光とに充ちた聖ペドロの內部とはこれが同じ加特利の寺院かと疑かられるまでに相違してゐた。そこの內部に充ちてゐたのは、薄明だ、黃昏の色だ、幽暗の影だ、まるで森林だ、そしてその森林のなかで繁葉を洩る日の光りを見るやうに、窓の彩玻璃越しの美くしい仄かな日の光を見ることが能きただけだ。神秘の幻がそこには香爐の煙とともに立ち罩めてゐた、それがこの聖ペドロのなかでは――それによつて代表せられると言つていい伊太利のほとんどあらゆる寺院のなかも――その幽暗のかげその神秘の幻を些かなりとも殘して居らない。すべては大氣の明るさのなかに置かれてゐる。否その大氣を更に燦かさうがために置かれてゐるとも言へる。さては、全部が彩玻璃でできて居り、日光でできてゐるとも言へる。さては、他の國の加特利寺院の內部は、內へ內へと沈潛して作られてゐるとしたならば、この國のそれは、外へ外へと表顯して作られてゐると言ふことも能きやう。

が、これが、たちまちこゝの國の人々と他の國々の人々との心持態度の相違となるか如何かに到つては、不幸にして加特利の精神を體識し得ない異國の自分などの到底言ひ得るところではなかつた――。

自分たちは無言のまゝ凝視しては感嘆し、眺め廻してはまた感嘆した。何と言つても、この宏壯華麗なる美に對しはは首を垂れないわけには行かなかつた。これを創り出した人間の頭腦の豐かさ、その創造力の深さは、恰かもすぐれた音樂の持つ美と力とに打たれると同じ思ひをさせた。否その湧噴する音樂の功果をば、かくも不斷持續の凝固したる姿態をもつて生み出すといふことは、音樂の持つ美と力とよりも一しほ確かで強いものであつた。

自分は『神』を思ひ起す代りに、こゝでは却つて『人間』を思ひ起した。人間の魂の廣さと深さとを思ひ起した。

……………細部を餘り詳しく見て行くことは總體(アンサンブル)として受けたこのすばらしい印象をかへつて亂すことになるかも知れない。——かうは思ひながらも、やはりその柱、聖壇、彫刻、天井、床の隅々までに燦いてゐる美くしさに牽き寄せられて、おのづと足を一歩一歩進めるのを禁めることが能きなかつた。

聖ペドロの寺院續きになつてゐるヴアテイカンの教皇廳、——その一部にこのシステイナの會堂(カペルラ)といふのがあることは言ふまでもなからう。自分がその會堂に足を踏み入れることの能きたのは、實に羅馬に着いて七日目に當る、ある風の強い晴れた日の午前のことであつた。このシステイナ會堂のミケランジエロを見ると言ふことは、羅馬に來るほどの旅人にとつては、例外なくそのプログラムのなかの最も重なるものとなつてゐると言つていい。日本にある自分の親しい友の一人なぞは、昨夏渡歐の途に上らうとしてゐた自分に贈るに、『システイナで親しくミケランジエロを見得る君の幸福のみはまつたく羨むに値する』とまでの言葉をもつてした。それなのに、自分はその羅馬の土地を踏みながら七日間といふものを、このシステイナを見ることなしに過して來たのだつた!

が、それは決して自分の怠慢でもまた特に心あつてのことでもなかつた。一週に二度ほど、それも時間を制限してしか開館されないといふことが、この會堂を見る機會をこんなにも遲れしめたのに他ならなかつた。それだけに自分の焦

燥熱望は日と倶に烈しかつた。そうした自分が、言はゞ念願が叶つたやうにこの會堂の入口に立つことが能きたときには、覺えずある戰慄が心の底まで走るのを感じないわけには行かなかつた。――

ミケランジエロ・ブオナツロテイ。おゝ、それは何といふ偉大な名、讃むべき名であることか！『天地創造』の神エホバをいと高き神としてあがむるならば、自分たちは『天地創造』の人ミケランジエロ・ブオナツロテイをそれが人たるの故をもつて尙更エホバにもまして祝福まれねばならぬ理由を見出す。しかも彼の創造せる世界の、力に滿ち情熱に溢れ怒に慄へ涙に傷み、さては憫れみと優しみとに悩める人間に充ちたるは、かのエホバが「土の塵を以て人を造り、生命を其鼻に嘘入れ」て創り成したといふ人間の世界の無表情無精力には比すべくもないと言つていい。彼は、たしかに神以上の仕事をなし遂げたのではないか！ 人の力が神以上のことさへも爲し得ることを明かにしたのではないか！

彼は人體を創つた。人間の魂を、その内部の聲を、肉をもつて現はし創り出した。彼のこの精神は明かに希臘精神から出てゐると言へる。然しながら希臘精神が恒に肉を求むるに女性にもあらず男性にもあらざる中性の美なるものを眼つてひとへに優雅典麗の趣を缺かすまいとつとめてゐたに反して、彼が肉に求めたるものは恒に男性の力と情熱とであつた。『單純なる人間！』――教皇ジユーリアス二世がこのシスティナの壁畫を仰見て、その粗野な構圖に覺えず不平の言葉を洩したときに、ミケランジエロの口から出た言葉はこれであつた。單純なる人間！彼はそこに優雅典麗の媚容を殊更に添へやうとはしなかつた。また、ラツフアエロやレオナルドやチチアノやが造つたやうな、美くしい空、星、花丘を描き添へることすらもしなかつた。彼は、たゞ力と情熱とのほかに何ものをも知ぬ直裸の人間を、――單純なる男性を創り出しただけであつた。然しながら、この單純のなかに、この力と情熱とのなかに、おのづと湧き出る優しさと溫かとさは觀るものの心のなかに何時知らず泌み通らずにはゐない。この強い力と烈しい情熱との間から自然と匂ひ出するこの優婉溫雅の感情ほど深い美くしさをもつて人の胸に迫るものはない。それは、美くしい空、星、花、丘さては優しげなる圓輪や媚態やのはるかはるか上にあるものだ。ミケランジエロの創り成した人間こそは、まこと人間以上の

人間、永遠なる人間、――エホバの創り給ふたる不完全なる人間を、完全なるものに改造せるものと、見做すべきではなくして何であらう。希臘を母として、更にその母よりも強く深き精神と肉體とを以つて生れ出でた子、熾んなる神と獸との心と姿相をもつて生れ出でた子――それが實にミケランジエロであつた。希臘が第一の世紀ならば、第二の世紀は彼に初まつたのだと言はなければならない。

この會堂のなかには、ほかにボツテイチエリの壁畫がある。またこれに近い部屋や廊やにラツフアエロの壁畫がありまたフラ・アンジユリコの壁畫がある。これ等の作家はそれぞれに自分の深い好愛のまとになつてゐることは言ふ迄でもなかつた。殊にこれ等の作家の持つ優しく愼みの深い心の世界はその甘美な色彩と線條の魅力と相俟つて自分の魂をこの上なく柔らかに愛撫して與れるのを感じる。然しながら、システイナのミケランジエロを見て來た眼で、これ等の作品を眺め廻したときに先づ胸に浮んで來た感じは、その弱々しさ、その脆さ、であつたと言つてよかつた。ミケランジエロが燦ゆい日光のなかに立つ立像であるとしたならば、それ等の作家の制作はその陰影に他ならなかつた。室内の立像、若くは月夜の影に他ならなかつた。……………

自分の心身のなかで何とも知られぬ異常なる力の眼覺め行くのをば覺えながら、この大いなる世界、システイナの台堂を後にして南國らしく陽の燃えさかる外へと出た。

羅馬に着いた三日目の午前に自分たちはかの有名なフオロオ・ロマノ(議政場)とコロツセオ(圓舞劇場)とを見に出かけた。

ピアツア・ヴエネチアの廣場のまへに小山のやうに聳えてゐるヴイツトリオ・エマヌエレの紀念建造物を左に、曲りくねつた石の道をしばらく行くと、程もなく眼のまへに深淵が開けたやうに、低くなつてゐる廢墟が現はれる。それは

何のことはない人の白骨が無慘にも散ばつてゐると變りはない。あちこちに倒れかけてゐる石柱、半分裂けてゐる石門飛び散つてゐる臺石、そのあたりを青々と染めてゐる草の葉と、そのうへにまるで鮮血のやうに眞紅にこぼれてゐるコクリコの花と、――それが、照りかゞやく五月の陽の光のもとにまざまざと展開してゐる。まるで散亂してゐる人か獸かの骨だ！

これを一目見たとき位人間の事業の空しさ果なさが烈しく自分の胸に來たことは無かつたと言つてよかつた。自分は、殉情な史的回顧の感情に身を委ねる代りに、茫漠たる幻滅の感情が惡感のごとく自分の心を走り過ぎるのを感じた。ほとんど立ち竦みたいまでの氣持に捉へられてしまつた。…………

ヴィア・デルレ・グラッツィエの通りにある入口からこの廢墟のなかに親しく足を踏み入れて、四周に立ち並ぶ大小無數の無慘なる石の列を眺め廻はしたときには、自分の心は、一しほに暗く果敢なき感情の波に揺らるるのみであつた。ケエザルが創建しアウグスタスが擴張したと言はれてゐるジュリアの殿堂、――それは自分たちの足許に累々たる石塊を殘してゐるのみではないか。大帝カルカラがその王子とともにバルテスの戰勝を紀念する爲めに建てたといふ凱旋門、――その誇耀と光榮とのモニュマンも、青草のなかに空しくその遺骸をとゞめてゐるのみではないか。ケエザルが呼號しアントーニオ、ブルータスが絶叫したターリアのあともコミチウムのあとも、幾つかの臺石を僅かの土の下から覗かしてゐるのみではなか。ヴエスタレスの宏壯なる邸宅のあとも、コンスタンチヌスの建てたといふ殿堂のあとも壞れた石柱、裂けた臺足のほかには何一つ殘してゐないではないか。

あゝ、これが人間の榮耀のあとなのだ、努力のあとなのだ、苦鬪と光榮のあとなのだ。自分は今更にかの支那の詩人がよく口にする『此皆一場夢』と言ふ言葉に思ひ當つた。悵然として人事流轉の姿に嘆息する支那人の心持は、おそらく老莊の教へや佛者の教へから育まれて來たのかも知れない。然しながらそれは孰れでもいい。たゞかうして無慘なる廢墟の中央に佇立した自分は、この荒涼の跡に面して、『羅馬興亡史』を書かうとする努力を眼覺めさせたといふギボンの決心よりも、萬事を空しとして徒らに長嘆息する支那の詩人の感情を、――恐らく『羅馬興亡史』を書く努力をすら

空しきものと見做すことと思はれるその支那の詩人の感情を、はるかにはるかに親しいものに感じられる。『……宮女如花滿春殿、只今惟有鷓鴣飛』――自分にはかうした李白の詩句なぞが思はず唇にのぼるのを禁めることが能きなかつた。――

出口に近くサンタ・フランチエスカ・ロマーナの寺院といふのがある。古くヴエヌスの殿堂であつたものを、基督教の寺院に改造したものであるといふ。あゝ、その改造もまた何時の日まで續かう、すべては亡び失せてしまうのではないか。五十歳にして逝くものを、よし百歳まで生き延びさしたとて、それが遂に何にならう。

『藝術(アルス)は長し(ロンガ)』の言葉も最早自分の心を牽き止める力は持つてゐない。硬い石のうへにあゝも深く刻み付けられたその美くしい藝術の姿でさへも、まつたく壞れ廢つてゐるのをば自分はいま眼のあたり見てゐるのだ。あらゆる人間の努力が、權勢が、――名聲が、戀が、藝術が、殘すところもなく等しく亡びへの途を辿りつゝあるのだ。『永遠』！　それは何といふ空しい綺語であつたことか。人間の作れるもののうへに若し『永遠』がありとすれば、それはたゞ永遠の亡びといふのに過ぎないではないか。

――暗然たる氣持でその出口を出ると、一帶の草原をへだてて眼のまへに今度はコロツセオの巨大なる屍が橫つてゐる！

このコロツセオも昔の形態が僅かに判斷せられるといふ位の程度に殘存してゐるだけであつて、到る所缺け壞れ裂けたまゝになつてゐる。野草は遠慮もなくそのはかない姿のうへに生え伸びてゐる。

一階は皇帝の席であつた、二階は元老院のひとたちの席であつた、三階は一般庶民の席であつた、といふやうなことも今はたゞ冷たく心を打つだけだ。猛獸と猛獸との鬪ひ、猛獸と人との鬪ひ、さては猛獸に追ひ廻はされてその餌食にならねばならなかつた基督教徒、かの凶暴なる皇帝ネロ、さては燥かしい碧空一杯にひろがつた羅馬市民の歡聲、――あゝ、すべてはこゝにあつたのだ、そしてすべては亡びてしまつたのだ。

急に雨がやつて來た。羅馬にはいつて屢々逢ふあらつぽい雨。自分たちはいそいでコロツセオの側に聳えてゐるコン

スタンチヌスの建てたといふ石の門の下に馳けこんだ。

雨の亂れてゐる廢墟のなかに、心はわけて佗しかつた。………………

カルカラ帝の浴場の廢墟を見てから、かのシャンキウイツチの『何所へ行く』で名高いカタコンベ（初代基督敎徒の棲つてゐた洞穴）まで出掛けやうとして羅馬の町のなかで雇つた馬車は、先に見た議政堂から圓舞劇場をば、道のすぐ左側に見ながら進む。やがて右側に高くまた低く岩石が亂立してゐるやうなこれもまた廢墟の一つが現はれる。馬車屋に聽くと、これこそかのモント・パラテイノだつた！

カタコムベを見てから羅馬の町に引返して來た時分は、もう色づいた夕陽の光が通りに射し初めた頃だつたので、このモント・パラテイノの廢墟を訪ねることはその翌くる日に延ばさねばならなかつた。議政堂を見、圓舞劇場を見、カルカラの浴場を見て來た自分にとつては、モント・パラテイノでまた同じやうな廢れた光景を見て同じやうな感慨に耽るといふことだけでは、さして乘氣のすることとは言へなかつたが、この廢墟の逍遙は別の意味で自分にとつてかねて深い興味の的となつてゐるのであつた。自分は日の翌けるのを樂しみにしてゐた。——

その翌くる日、自分の眼に親しく映じたモント・パラテイノの屍骨のごとき廢墟の有樣は玆にわざわざ書き記すまでもない。またその廢墟そのものに對する自分の佗しい感懷もまた、事新らしく書くまでもあるまい。それを自分が玆にわざわざ書き記さうとしてゐるのは、かねての興味の的となつてゐたところのものを親しく眺め深く肯づくことが能きたからに他ならない。

グリエルモ・フエレロ。この秀れた伊太利人——ある人は秀れた歐羅巴人とまで稱んでゐる——の名は豫ねてから聽くところが多かつた。眞摯にして獨創的なる羅馬史家として、また極めて廣汎にして同時に深遠なる文明史家として彼

の盛名は、古くから伊太利以外にも喧傳されてゐた。自分がこの人の著書として親しく讀んだものは過般の大戰中に書かれた『拉丁的特質と近代の世界』と題する佛蘭西で出版された一冊にとどまつてゐる。然しながらこの一冊が自分に與へた感銘は實に多きかつた。それ以來自分にはフェレロの名が、伊太利を思ふごとに必ず頭に浮んでくるほどであつた。

この著書のなかの『古代國家の頽廢と近代國家の進歩』と題した一篇並びに『近代的思潮のなかに於ける羅馬』と題した一篇は、羅馬史家としての彼の偉大を片鱗ながらに充分知ることが能きるものであつた。それ等の文章を特に自分は愛讀した。――モント・パラテイノのことを茲で殊更に言ひ出して來たのも、その文章のなかに見出される一章句からかねて受けてゐた強い感銘の結果に他ならないのであつた。

彼は普通の史家が口にするかの『羅馬の腐敗』の內容を討檢せんとするに當つて、讀者を先づこのモント・パラテイノ――羅馬の盛時宏壯豪華をもつて誇つた邸宅のあつたこの山上に連れ來り、その廢址を指示しながらに論じはじめるのである。

彼は言ふ、このパラテイノに於て最も大きいとされてゐるリヴイエの邸宅なるものは、アウグスタス帝時代に於ける最も富裕な家族の棲つてゐたところの跡であるが、今日これを見れば何のことはない二等國に於ける稍富んだブールジョアの家族の棲んでゐる邸宅位しかない。また同じパラテイノに殘つてゐるケエザルの宮殿の廢趾といふのは、ひどく荒れてゐるが、今日一々測量して建物全體の大きさを推測することは難かしくない。それで見ると近代の大建築とくらべて到底その大を誇ることなんぞ能きはしない。邸宅がこれだ。その中味も從つて同じに論じることが能きる。我々は從來羅馬の皇帝の饗宴なぞを驕奢極りないもののやうに考へてゐたが、若しネロやヘリオガバルやが今日巴里や倫敦やの大きなホテルの食堂にはいつて見たら何といふであらう！當時は人工的の燈火にも乏しかつたし、酒も僅かだつたし、茶なるものも珈琲なるものもココアなるものもまた今日無數に存在してゐるリクールなるものも全く當時は無かつたのだ。今日から考へると當時の有様は『贅澤』どころか、恐ろしくスパルタ風な質素な生活をしてゐたといふことに

なる。殊に當時の記錄を見ると、宮中の經費節約の法律さへ出てゐて、例へば休日などに催ほす饗宴は多くても二百Sesterces（今日の約五十法）を出てはならぬこと、カレンデスやイデスやノネスやの祭日ならば三百（約七十五法）まで、國民祭の大饗宴ならば一千（約二百五十法）までしか許されてゐないことを示してゐる、これが世界の皇帝の饗宴費なのだ。何といふ僅な貧しい『贅澤（ルクスリア）』さだ。

フェレロは、かうして、世の所謂『羅馬の腐敗』が、その『贅澤』が、今日から見れば殆んど問題にするに足りぬほどのものであることを說破して、一般の史家が羅馬の衰亡の原因をその頽廢、その驕奢に歸してゐることの正しく謬見であることを明かにしてゐる。

然らばフェレロの羅馬衰亡觀は何であるか？彼はこれに就いて次の如く言ふてゐる。

——羅馬の歷史を探ねるまへに、人は各人の家庭に共通する一つの小ドラマを考へて見ることを要する。そうすれば羅馬の歷史に現はれた現象がすぐに理解能きやう。即ちこゝにある人間がゐる。それがある社會的境遇の下に生れ、青壯年の時期を通じて努力した爲めに、相當財產を增すことが能きたとする。所が彼が富むに從つて、彼の需要彼の贅澤なるものが必然的に殖えて行くのは當然のことである。然しながら、ある時期ある點にいたると彼のかうした增進は停止することがある。殊に彼の活力及び彈力性が過去のものとなつてしまつた時には、その需要を無限に增加し若くは今までの習慣を長く續けて行くといふことは殆んど不可能になつてしまふ。然しながら續いて世に出て來た子等は、その父が長き疲勞と既に老熟した年齡とのあとに於いて辛ふじて得ることが能きた富裕をば生れながらにして享けてゐるが爲めに、その需要・贅澤の增加及び習慣の變移はめざましいまでに實現し繼續する。かくして新らしきジェネレーションは、古きジェネレーションを超えて更に杳かまで手を伸ばす。この新舊の差違、それから生れる種々の葛藤衝突、——これをぞ眼前我々が目睹し居る家庭悲劇ではないか、而してこの家庭悲劇こそ、實に羅馬興亡史のキイノートなのである！

から說いて來た彼は、所謂『羅馬の腐敗』の三大現象として通例史家が擧げてゐるところの『貪慾（アヴァリチア）』と『野心（アムビチオ）』と『奢侈（ルクスリア）』とを下以のごとく觀てゐるのである。

『アヴァリチアは、今日我々があらゆる社會のうへに見るところの、金錢を得やうとする活動力とその焦燥とを名付けたものに過ぎない。アムビチオは、あらゆる代價を拂つても已れの生れた境遇より更によりよき境遇に伸びんとする情熱であつて、多くの現代の識者が現代世相の病弊として擧げてゐるものに他ならない。ルクズリアにいたつては、現代の世界の端から端まで行き亘れる風潮であつて、今日富と奢侈と快樂とを增さんとするその熱望のはげしきことは、今更説くまでもないことである。…………これをもつて見れば、羅馬の三大病弊なるものは、現代のそれに較ぶればその程度に於て殆んど問題にならないと言つていい。――』

彼は所謂羅馬の腐敗をば新と舊との親と子との關係のなかに見た。更にこのなかから一層具體的な例を提示して言ふ。――

『新らしき富は阿弗利加から亞細亞から羅馬へと流れ込んで來た。從つて敏捷にして果敢なる徒は爭つてその富を已れの手に握るにいたつた。こゝに於て昨日まで社會の上層に畯然と晏坐したりし貴族も、この新らしき力の所有者の出現を見ては、已れを卑ふして握手せざるを得ない破目となつた。貴族とブールジョアとの提携はかくして成り立つた。こゝにいたつて取り殘された一般中流の者たちは、力を協せてこの專恣なる貴族とブールジョアとの同盟に當らざるを得ないことになつたのは必然のことであつた。此社會の階級の爭鬪、これこそ羅馬を衰頽せしめた主因であつたのだ！』

『羅馬の歴史は、實に人類そのものの歴史の縮圖だ』――から言つてゐるフエレロの言葉を事新らしく頭に浮べながら自分は、モント・パラテイノのドオムス・チベリアナの廢墟のあとを感慨深く歩いた。

ふと見ると、おゝ、廢れた石の屍ばかり見て來た眼には鮮やかすぎるほどの美くしい草花が、柔らかな芝生とともに眼のまへに現はれた。草花のなかには、日本でよく見られる苜蓿までもあつた。

自分の心は何ごとも忘れてしまつて、その鮮やかな草と麗はしい花とに牽き寄せられてしまつた、あゝ、如何に美くしく、如何に樂しく伸び榮つてゐることか。そこにつゝまれてゐる生命の爽やかさを、健やかさを、自分は今更に感じ

る。さうだ、この生命の擴がり、この生命の創り出すこの美くしいデコレーション、そして生命から生命へ、胸から胸へとひゞいてくる反響、――それが『永遠』のものでないとは如何して言へやう。『永遠』の持つ姿相でないとは如何して言へやう。

――物は滅びる。滅びるにまかせよ、さはれ、生命のみは永遠にかゞやいて存する！ 自分は言ふともなく心のなかでこれ等の言葉を洩した。……………

ナポリを中心にして

『乞食の杭のナープル、マカロニと音樂との生れ出でたナープル』――二行にも足りないこの詩人ミュッセの短句のなかに、わがナポリの町の姿をありありと見ることが能きると思ふ。自分は、はじめてここに着いて、停車場から一歩足を町のなかに踏み出した時から、既にこの詩句の持つ確かさを感じないではゐられなかつた。それから自分たちを乘せた馬車が凹凸のはげしい石道を、耳も聾するほどの響きを立てながら海岸のホテルへと馳けつて行く間も、または、ホテルに着いて晩餐の卓に就いた時も、さては、暮れ行く海岸の通りを遠くヴエスヴイオの噴煙をながめながら逍遙してゐる折も、この短かい詩句が兎もすれば唇にのぼるのを禁めることが能きなかつた。

先づ乞食の數の多さよ。それはまつたくナポリの町のあらゆる隅々に動いてゐた。大通りにも、裏通りにも、停車場まへにも海岸にも、人々のゐるところには何處として乞食の差伸べる手を見ない所とてはなかつた。ある者は敷石のうへに無雜作に寢てゐた。ある者は籠を手に提げて歩いてゐた。聽けば今もなほナポリの町の地下には窟が掘つたまゝになつてゐて、乞食の大半はそこを棲家として、たゞ日中物を貰ふ時だけそこを出て地上に現はれて來るといふ。そのなかには妻に紡がせ二人の暮しを立てさせそだけで、自分は夜となく晝となくその窟のなかに寢そべつてゐて、たゞ時に陽の光を浴びるために地上へ出て來るに過ぎない者さへゐるといふ。さうすれば、かうして町のなかで自分たちが見る乞食はそれでも、懶惰の程度がまだまだ尠いものと言はなければならないのであつた。

それにしても、この夥しい乞食を生むにいたつた懶惰と無知とは、一面ナポリの町が如何に自然から豐かに惠まれてゐるかを物語つてゐると同時に、他面この町が最早フイレンツエや羅馬並に『南歐』の町と呼ばれるよりもむしろ『亞弗利加』の町と呼ばれる方が適はしいことを示してゐるとも言へる。オランジユやシトローンの匂やかな黃色の果實がこのナポリの丘に豐かに成熟するやうに、この懶惰と無知との果實——乞食もまた、同じ豐かさでこの土地に成熟するのだ。その熱い眩ゆい太陽、その碧い燦めく海、その綠の野と丘と山と、その芳醇な果實と野菜と、——あゝよし乞食にまで成り下らずとも、誰がこの戀はしき自然の熱と光と眞中にあつて懶惰と無知の持つ安易と快味とを心から覺えないものがあらう。一時は乞食の夥しさに眉を顰めた自分ではあつたけれども、やがて、その乞食無しにナポリの町を思ふことは、オランジユやシトローンやを離れてこの町を思ふとその寂しさその空虛さに變りはないことを感じるにさへいたつた。…………

マカロニの美味もまたナポリから放しがたい記憶の一つである。殊に、サン・マルチニの丘のうへにあるホテルの明るい食堂で遠くナポリ灣を眺めながらに攝つたマカロニの味は、その麗はしい風景とともに何日までもの思い出であつた。自分たちの泊つてゐた海岸のホテルの食堂で出したマカロニも、停車場のリストランテで攝つたマカロニもまた、町なかの薄暗く騷々しい小さなリストランテなぞに這入つて口にしたマカロニも、確かに今までの伊太利の各地で攝つたものよりはうまかつた。

ボンペーへとナポリの町から自動車を馳つて行く道すがら、マカロニを產物としてゐる何とか言ふ村を通つたことも覺えてゐる。伊太利を通じてナポリ附近を最もすぐれたカマロニの產地としてゐるわけであるが、そのなかでもわけてその村はいい產地となつてゐると言ふ、そこを通つてボンペーに着き、更にそれからアマルフイまで長驅さしてそこにあるイブセンが『海の夫人』を書いたとかいふあるホテルの食堂で攝つたマカロニの味も永く忘れ得ないところであつた。そう言へば、カプリの瑠璃洞を見に行つてそのカプリの町で攝つたマカロニの味も、その折飮んだ美酒『カプリ』の味と倶に深い思ひ出の種となつた——

それからあのオランジュの味とその馨はしい匂ひは！　五月のはじめ頃とは言ひながら、南歐の陽の燦ゆい輝きを一口受けてゐる食堂のなかは、夕暮になつても容易に日中のほとぼりが冷めて來ない。そのなかで『カプリ』とか『フラスカテイ』とかの葡萄酒を唇に當てながら脂の勝つた肉でもつゝいてゐると、いい加減に顔も唇も手も汗ばむでくるのを感じるそうした折食後の熱つた脂じみた口のなかに、この漿液の多いかぐはしい匂ひの、到底ナポリ以外では見られないやうな見事なオランジュの大きな肉を押し入れる時位、眼の覺めるやうな快さ、爽かさを感じることはないと言つてよかつた。

あゝ、自分は、あのマカロニとあのオランジュのことを想ひ遣るにつけても、それを口にするためにもう一度ナポリの土地まで出掛けて見たいとまで思ふ…………

音樂のことは今更らしく言ふまでもあるまい。ナポリタン、ナポリの俗唄、——それは事新らしく書くにしては餘りに廣く人々に知れ亙つてゐる。たゞ自分たちがこゝに遣つて來た時には——後で知つたことではあるが、恰度かのエンリコ・カルーゾーがこの町にある別墅でその不治の病を養つてゐたといふことをたゞ一言書き添へて置かう。彼の故鄉である伊太利、その國のなかで最も音樂に富んだこのナポリの町に於て彼が、遂にその偉大なるヴィルチュオーズとしての最後の息を呼吸したといふことは、彼のためにもまたナポリの町のためにも什麽にか適はしいことであつたらう。——まつたくこの町は乞食に充ちてゐるやうに、唄とマンドリンとギターとの聲に充ちみちてゐるのだから。

ナポリの夏の夜位この町の持つてゐる特色がはつきりと判つて、旅人の眼を深く樂しませるものはないと言つてよい。

自分は思ひがけなく七月になつて再び佛蘭西からアルプを越えてこの國にはいり、ナポリの夏の夜の賑ひを親しく眼に見ることが能きた。『寒い國を訪ねるならばむしろその寒い時を選べ。熱い國を訪ねるならばむしろその熱い時を選

ペ――から言はれてゐる言葉の意味をその時ほどまことだとして心に強く氣づいたことはなかつた。それほどにこの熱國ナポリの夏の夜景は自分を心から悦ばしたのであつた。

自分がその時泊つたホテルも前に泊つたホテルと同じで海岸に添ふた眺めのいい場所にあつた。カプリの島がかすかに海上に浮んでゐるのも見えた。このホテルのすぐ近くには一つの古風た廢れきつた城砦が海中へと突き出でゐる。カステロ・デル・オヴオといふのだと聴かせられる。その城砦の下の方には小さな家が、――重にカツフエとか料理屋とかゞ一杯海岸に添ふて立ち並んでゐる。小さなボートやヨツトやもその邊の碧い海のうへに搖れ動いてゐる。

夜になると、日のなかはあんなに燦かしく賑やかであつたあたりの海あたりの陸がおしなべて暗く靜まりかへつてしまふなかに、この城砦の立つてゐる突堤だけは、その白晝よりも眩ゆくその白晝よりも賑やかな情景を呈しはじめるのである。

そろ〱歩く人の群のなかに交つて自分もまたその突堤の燈火の交錯し合ふた通りを歩いて行く。カツフエ、料理屋、生の貝類を皿のうへに並べレモンの液をかけて客にすゝめてゐる貝屋、赤い火をばたばた煽り立てながら小型の玉蜀黍を賣つてゐる露店、さては黃玉のやうに累々としてゐるレモンの果實を無雜作に轉がしてその漿液を水に交ぜて人に飮ましてゐる水屋、――さうした建物と露店とが入り交つて狹い通りを更にも狹めてゐる。あちらこちらにはマンドリンやらギターやらを手にして錢を乞ふてゐるものもある。その音樂に聽き惚れて人だかりのしてゐる場所などは、たやすくそこを通り抜けることも能きない。止むなくその一節（くぎり）の終るのをまつて、この人波をわけて通り抜けることさへもある。はだしの子供が玉蜀黍などを噛つて走りまはつてゐるのがある。葡萄酒の醉をあかあかと顏へ出して、料理屋の卓子に凭りかゝつたまゝ、節面白く船謡などを歌ひ出してゐるものがある。『ジヤン……』こんな名前で見知らぬ者を呼びかけてゐる黑い髮を髷に結ふたみだらな美くしいナポリテースもあつた…………

海はその柔らかな優しい唄でこの快活な喧騒な盛夏の叫びを一しほに煽り立ててゐるのであつた。烟火があちこちに上つては、その海のうへにもぱつとかゞやいては、消えて行く。

『快濶の友であるこの民』——自分はまたしても詩人ミュッセのかうした詩句の一節を覺えず唇に浮べないではゐられなかつた。——

かうした夜の賑はひは何時まで續くのであらう。自分がホテルに戻つて暫らく時經つてから（恐らく十二時か一時頃であつたらう）窓掛を動かして外を覗くと、海にかこまれてその華やかな饗宴はまだ酣とも言つていいほどであつた。

ナポリに着いた日の翌くる朝のことであつた。無論この日はナポリの町のなかで暮すつもりであつた。それが、朝になつて急にカプリの島を見に出かけることに心が變つた。

それはまつたく何とも言ひやうのない迄に美くしく晴れ渡つた朝であつた。その眩ゆい陽の光を受けてゐる海の色の深碧の美くしさもまた言ひやうがなかつた。風も波もなかつた。右手にナポリ灣を限つてゐる岬には、松林と白い別墅とが交互に點綴し合つたまゝこの美くしい陽と海との光を受けて、あだかも微睡むでもゐるやうに長閑に横つてゐた。ヴェスヴィオの噴煙が香煙のやうにゆるやかにのぼつてゐた。

こんなに靜かに美くしい日はこの土地でもめづらしい、それにあのカプリの瑯玕洞を見るには一寸波があつても難かしいのだから、こんな日を逃したらなかなか四五日の逗留に過ぎぬ旅では再び機會を捉むことは能きないかも知れない——かう言はれて見ると、慌ててナポリ見物の豫定を變へねばならなかつた。かくして自分たちは、ナポリからソレントを經てカプリへと赴く遊覽船メケリナ號の甲板の客となつたのであつた。

船は九時に陸を離れる。あたりがすべて海になつてしまふと、陽の燦めきは一しほに眼に眩ゆい。自分は稍眼を細くしながら、ナポリ灣一帶の風光を眺め渡したのであつた。

何にしても高く聳え立つヴェスヴィオの頂の噴煙が、限りのない碧空をばみだす唯一の白い色唯一の動く姿として何

よりもまづ先に眼につく。それを他にしては見渡す限り一片の雲翳もなかつた。そのヴェスヴィオの山が次第次第に海に向つて緩やかになるとともに、その傾斜の緑色の絨緞のなかに數々の建物が白いまた朱い蝶々のやうに點在しはじめる。海に近付くほどそれは密になつて來る。それが遂に海に臨んで一團の連續した密集體となり終る。それこそナポリの町である。

この町を胴體としてその右翼にも左翼にも岬は長々と曲浦を伸ばしてゐる。白い砂、青い樹林、そして白い朱い建物、――それが空と海との光のなかに眩ゆさうに照りかゞやいてゐる。小さな島が、大きな島が、現はれ、隱れ、また現はれる。ホロメスの詩の世界、ヴィルギリウスの詩の世界だ。それが眼のあたりに露はに展開して行く……

ソレント。あの詩人タッソオの悲劇的な生涯を知るものの忘れ得ない地名。その美くしい別墅の町ソレントに船は半時間ほど碇泊して再び動き出す。カプリの島はいよいよ近付く。正午近い太陽は、深碧の海上に一面に淡い銅色を流し出すその金色の波のひたひたする下に深碧の海がゆるやかに動いてゐるその美くしさは！ 自分の想像はたちまち、ニムフに走つた。あゝ、こんなにも碧く澄みこんなにも眩ゆく燦やく海の色と光とを見るならば、誰一人としてこのなかに麗はしい裸形の女性の游ぐ姿を想ひ浮べずにゐられるものがあらうか。自分は古代希臘人の持つた豐かな想像力よりも、むしろかうした海の色と光とがあのニムフの神々を創り出したことを今更に考へないではゐられなかつた。まつたくその海の色と光の戀はしきは、如何なる國の人々をも『希臘人』にさせないでは措かないところがあつた！

カプリの島は眼のまへに來た。岩山が突出してゐる島。古城の跡がその岩山のうへに見えてゐる島。岩山と岩山との間には橄欖樹と葡萄樹との入り交つた畑が散在してゐる島。カプリの町は、その畑を背にして海岸の岩のうへに建てられてゐた。

船は一寸こゝで停つてからこの島のかげになつてゐる瑯玕洞を指して再び動き出す。仰いで見るやうな逞ましい岩山が海から直立してゐる所をすれすれに船は進む。やがて小舟が蝟集してゐるほとりへ來た。洞にどこかと皆が口々に言ふうちに船は小舟を周圍に集めながら靜かに錨を卸した。船頭をも容れて二人しか乘れないと云ふ小さ

な舟に身を入れてから、漸くのことでその洞の入口が判つた位、その入口といふのは小さかつた。なるほどこれではほんの一寸した波があつても隱されてしまふ筈だ。海の表面からその入口のうへまでは一メートルあるかなしだつた。從つて小舟がその入口をはいる時には、船頭からはじめ自分たちは一勢に皆舟の底に寢てしまふ。舟の高さだけが辛ふじてはいるのだ。

一瞬。もう自分たちは不思議なる瑯玕洞の內部にある。自分はかの『卽興詩人』のなかに詳しく描かれて誰しも知らぬ人のないと言つていゝこの瑯玕洞の內部の美くしさをば今更にこゝに書き出さうとはしない。たゞ、暗い岩窟につゝまれたその碧玉色の不思議な麗はしさも、このナポリの麗はしい海が創り出した樂しい遊戯の一つであるに過ぎないこと、碧い海洋の上にではなくその下から燦くところの陽の光の美くしさをはじめてこゝで見ることが能きたといふこと、それと、思はずこの晶玉のやうに明るく碧い水の美に惑かされて手の先をそれに觸れて見てはげしい冷たさにおどかされたといふこと、――それだけを書いて置くに止めやう

……船は再びカプリの町のまへに來て停つた。陸上で晝餐を攝らせるために二時間近くこのまゝ待つてゐるといふ。

早速自分たちは艀で陸へとあがつた。

海に臨んだホテルのヴエランダで晝餐をすましてから、馬車を雇つて山上への徑を辿らせることにした、あたりには到るところに花が咲き充ちてゐた。綠りの葉がくれにはシトローンの實が仄かに黃ばんで累々と枝に成り下つてゐた。馬車の音をきゝつけて、子供たちが草花を手にして集つて來た。そして自分たちの膝にその花を投げては、お錢を呉れと言ひながら後から頻きく附いて來た。

カポ・リベリオ。――から呼ばれる山の中腹まで來た。自分たちは馬車から下りて、今は眼下になつたナポリ灣を見渡した。

ヴエスヴイオからナポリかけて正面一帶の風光は、あまりに晴れ渡つた空と陽の光との爲めに眞珠色に煙つて見える。その左翼をなしてゐる岬、――かのクーマやバイアスの古都を持つてゐるフラグラエの岬はその後方の海までも覗かせて

まるで浮彫の地圖のやうに眼のまへに横つてゐる。近くを見るとあちこちに緑りに埋まれて煌いてゐる別墅。草を刈つてゐる農夫。くねつた徑を重い大きな馬車をうしろにしてのろのろと歩いてゐる男。さうしたものを越えて、このカポ・リペリオの岩山と對立してゐるも一つの大きな岩山の頂には、廢れはてた古城が謎のやうに碧空のなかに浮き立つてゐる。

『ヴエデイ・ナポリ・エ・ポイ・ムオリ』(ナポリを見て死ね)――自分は言ふともなくこの言葉を口に出した。今まで手眞似計りで何一つ判るやうな言葉を口にしなかつたやうな自分の口から、かうした伊太利語が洩れたのを見て、年若い馬車の馭者は『おゝ!』と大袈裟な表情をしてから急に何やら早口の伊太利語で話しかけて來た。

自分は苦笑しながら再び手眞似にかへつて馬車を元來た方へと向けさせた。玩具でも置いたやうに小さな綺麗な姿を下の方に見せてゐた汽船から、間もなく出帆を合圖する汽笛がひゞいて來た。………………

『自然と詩と歴史とがこゝでは互にその偉大を競ふてゐる。こゝではあらゆる時代あらゆる偉業をたゞ一日のうちに抱くことができる』――これはド・スタール夫人の『コリンヌ』の女主人公が言つた言葉だ。

ある晴れた日の午後、ナポリから自動車を驅つてプーゾリ、クーマ、バイアスなどと言ふ古市を經巡つたときほど、自分はこの言葉を深く感じたことはなかつた。

これ等の町、その町をめぐる丘と海、それは何れもかゞやかしい自然の美につゝまれてゐた。また、それは何れもホメロスによりヴィルギリウスによりまたはホラチウスによつて歌はれ描かれ讃へられた所でもあつた。そしてまた、羅馬の歴史の頁のうへに永久に消し得ない人名が、事柄が、その町、その丘、その海のうへに刻み込まれてもゐるのであつた。まつたく『コリンヌ』の女主人公の言葉ほど端的にそのまことの姿相を示してゐるものはなかつた。――

先づ自分はアヴエルノの湖水を見た。古く火を噴いたあとだといふ。ホメロスの詩にあるエネアがくゞつたといふ地獄への入口はこゝだ。クーマの町やアポロの殿堂や、シビルの洞やは、この岸に近い高い丘のうへにある。何れも羅馬の歴史と結びついてゐる場所、また、ヴイルギリウスの『エネード』のなかに歌はれてゐる場所でもある。

プゾーリの猥雜な汚ない町を見た。漸次海へ海へと低下して行く町。古い家なぞは當時の二階目が今は階下にすらなほつてゐるといふ町。使徒ポーロのとゞまつてゐたといふ町。廢れた圓形劇場のあとが道からも見えた。

ヴイルギリウスの墓に近いといふ幸福の門といふ、ドミチアノ帝の時代に創られたといふ古い石門が割合に『時』に傷められずに立つてゐる下をくゞつた。土地は高くなつて、先程のアヴエルノの湖水は下の方になつた。古くクーマの町があつた所だ。

クーマ。これは實に希臘の光がはじめて、伊太利へも射して來た地點だ。羅馬の宮廷の美酒が醸された土地だ。さては『エネード』の詩篇に優艶な美くしさもて描き出されてゐる場所だ。が、今はたゞ耕地のなかに灰色の城跡がかゞやかしい陽を浴びたまゝうづくまつてゐるだけの所だ………………

やがてアヴエルノの湖水をふたゝび見て、バイアスの古い海港へと出る。ホラチウスによつて『この町の美くしきこと世界に比なし』と言はれた所だ。羅馬の海軍の根據地となつてゐた所だ。キケロやスキピオや、さてはマリウスやの名を知るものにとつて忘れることを得ない町だ。かのケーザルが時折羅馬から心を慰めるために海を見に遣つて來た町だ。さては暴帝ネロの歴史に纏はるアグリツパの墳墓もすぐ近くの海際に持つてゐる町だ。『コリンヌ』の女主人公の言葉にもあるやうに、血と涙とで洗はれてゐる土地、しかも絶えず花を咲かせ果實を結ばせてゐる土地だつた。——

かうした土地からナポリの町に戻つて來た時には、帽子から髮から鬚から手から足から總ては灰のやうに細かな砂塵のために眞白になつてゐた。それを拂ひ落させながらも自分はひそかに胸のなかに獨語した——あゝこの灰のやうな砂塵こそアヴエルノの噴砂、ヴエスヴイオの噴砂、さてはホメロスの、ヴイルギリウスの、ケエザルの、ポーロの、踏みにじつた砂、實にあらゆる時代とあらゆる偉業とのこもつた砂塵でなくて何であらう、と。さう考へて來ると、ホテルの

番人のぞんざいな掃き落し方さへその時の自分には咎める氣も起らないのであつた。……………

自分はいま、ポンペーの死市の眞中に立つて四周を見廻はしてゐる。燦やかしい陽は蒼穹のなかに燃えてゐた。薄い飛雲が掠めるやうに折々その陽の光を翳らすのは、すぐ横手に聳えてゐるヴエスヴイオの噴煙である。

靜かだ。何にも音はしない。明るい。明る過ぎるほどに明るい。

自分がいままで歩いて來た所は、そして、いま立つてゐる所も、無慘なる死屍の町ではないか。それは今更すこしの疑もないことだ。それなのに、自分の胸のなかには陰慘な氣持がほとんど湧いてゐないと言つてもよかつた。死屍の町にゐるやうな陰氣な暗欝な感情が豫期したやうには自分を打つて來ない。あの羅馬の議政場（フオロイ）や圓形劇場（コロツセ）やであんなにも烈しく感じた空虚で陰慘な感慨は、こゝではそう強く感じることが能きなかつた。自分はむしろ明るく花やかな氣持さへ覺えながら、この死屍の町を眺めて來たのであつた。

それは何故であつたらう。――自分は吾不知から獨語しながら、『ヴエツテイの家』といふのに近い町の角に立つて、今更らしく四周を見廻はしたのであつた。

それは一つには明るい陽の光と澄んだ碧空と山に近いこの爽やかな空氣のせいであるかも知れなかつた。この健やかで美くしい空の光と色とは、地上のあらゆるものを快活にする秘密な力を持つてゐると言つてよかつた。自分の心がその爲めに小躍りしてゐるのかも知れなかつた。それとも、死屍の町とは言ふものゝあの、羅馬の廢墟とは異つてほとんど完全な姿で殘つてゐるので、かうして眺めてゐるうちにもこの町の住民の姿がその邊に現はれて來はせぬかとまで疑はれて來るほどな爲めに、自分の眼には到底無慘なる死を遂げた町といふ陰慘なる感じが浮んで來ないのかも知れなかつた。

然しながらその最も強い理由は、やはりこの町の彼方此方に今もまざ／＼と見られる華やかな享樂的生活の姿から來てゐると言はなければならなかつた。まつたくそこには、藝術を樂しみ哲學を樂しみ酒を樂しみ女を樂しみ、さては美くしい空の下の自然を樂しんだ明るい快活な生活の姿が何一つ隱すところなく露はれてゐるのだつた。今日のわれ／＼の日常生活の慌しさ、苦しさ、忙しさに較べて見れば、あゝ、この廢市から想見せらるゝ當時の生活の、如何に長閑さと歡ばしさと華やかしさとに充ちみちてゐたことか。そうだ、あのノアイユ伯爵夫人がその詩のなかで誇りがにも歌つゐてる『人々は自分の死後も自分の著書を讀まうとすることだらう。そして苦痛と怨望とのために傷ける胸をそれによつて慰められやうとすることだらう。何故とならば、自分の死灰はこれ等の人々の生命よりもはるかに熱いのであるから――』といふ言葉のやうに、若しポンペーに言葉があつたならば彼女も亦誇りかにかう言ふに相違はあるまい、――『日々の生活に喘ぎ惱み疲れて樂しき笑ひと歡とを忘れたる近代の人々よ、來つてわが生活の殘したる跡を見よ、わが生活は化して冷たき死灰となつてはゐるけれども、その死灰も近代人の生活とくらぶれば、はるかに炎に近く熱く燃えてゐることを感ぜずにはゐられぬであらう――』と。

アポロの殿堂、ジョーヴの殿堂、大いなる圓舞劇場（アンフィテアトロ）、フオロオの浴場、スタビアナの浴場、ヴエツティの家、『悲劇詩人』（ポエタ・トラヂィコ）の家、さてはルパナーの娼家、――そう數へて來て一つとして當時の生活の明るさ華やかさを語る資料とならぬものはないと言つていゝけれども、それを今一々こゝで説いて行くことは、適はしい機會ではない、こゝにはたゞその一つか二つを簡單に書き記して置くにとゞめやう。

先づその浴場。フオロオとスタビアナとの二つの浴場がほゞ完き姿で殘つてゐるのであるが、工風を凝したその設備は、それが造られた目的と相俟つて、遠い日本から來た旅人の心をわけて牽くものがある。自分たちが日本にあつた日幾度、欧羅巴や亞米利加に遊んだ人々の口から、これ等の國の浴場の沒趣味と未進步の狀態にあることを耳にしたことであつたらう。そして、自分もまた親しくこの國の浴場を見た時には、この國の人々の沐浴を樂しみとする感情の、到底我等のそれに及ぶべきもないことを感じたのであつた。當時の自分はわが國人をもつてこの沐浴を享樂する能力を持

つ唯一の國民と見てもいゝとまでに思ひ詰ることを敢てしたのだつた。然しながら自分は西班牙の南地を歩いてアルハムブラの宮殿に『香草の室』と『快樂の室』とを見、さては巴里の美術館に於てアングルの名畫『土耳古風呂』を見た頃からすくなくもイスラムの國の人々の間にあつては沐浴の慰みと樂みとを感ずることはるかにわが國人を越えてゐるところのあることを知り得て、當時の思ひあがつた自分の感想に覺えず汗を感じたのであつた。それがこのポンペーの死市のなかにある二つの浴場を親しく眼にしたときに、この歐羅巴人までがわが國人を越えてはるかによく沐浴を樂しみ愛したところの歴史を持つてゐたことを知り、一しほに顔を赧くするのを禁め得なかつたのである。

これ等の浴場のなかは大きくも小さくも別れてゐる。ふたりだけではいるところもあれば、四人位ではいるところもあり、さては大勢そろつてはいるところもあつた。湯が湛えてゐる房室計りではなく、蒸氣を巧みに壁裏に通はして一帶がほんのりと溫かに罩めてゐるやうにした房室や、涼しい水のみを溢れさせた房室やもあつた。すべてそれ等は、身體の汗を取つてさつぱりとなる以上に、沐浴の與へるあらゆるサンジユエルな快感を味はやうとして考へ出されたものだと言つてよかつた。或は、人はこれに依つてわが元祿時代の艶めかしい、柳風呂のことでも思い出すかも知れないけれども、それとは較へものにならぬほどにこれは豐かな樂欲と多彩な技巧とに充ちたものであつた。彼等は實に、沐浴といふものが心と身體とのうへに與へるあらゆる秘密を最もよく感じまた最も巧みに用ゐることを知つてゐた國民であつたのだ。――

浴場に於て當時の人々の艶めかしい樂欲の生活を知ることの能きた自分は、數々の私の邸宅に於いては當時の人々の朗らかな淨樂の生活をば知ることが能きた氣がしたのであつた。

ポンペーの死市に見られる數多の邸宅は孰れもそろつて狹い窮屈な部屋から出來てゐることに氣が付いた。それとゝもに内庭なぞが水盤や噴泉なぞを持つて充分の廣さを有してゐることに氣が付いた。これは言ふまでもなく當時の人々が如何にもはろ〳〵した碧空の下の生活を樂しんでゐたかを物語る證左であると言つてよかつた。恐らく彼等は晴れた空にかゞやく黄金の光を樂しみながら、噴泉のひゞきをなかにして、詩を談じ哲學を論じ、または酒と女とを許して時

を過してゐたに相違なかつた、誰かも言つたやうにプラトーの對話篇そのまゝの明るく賑やかな饗宴の日を送つてゐたに相違なかつた。殊に自分はヴェッティの家の見事なる内庭のなかに立つて、その光景をありありと眼に見る思ひがしたのだつた。――

あゝ、ポンペーの死市。おまへは幾多の文人には美くしい想像を、幾多の考古學者には珍らしい資材を與へるのを惜まなかつた。そして茲にまた喘ぎ苦しみ悩むことをもつて止むを得ざる人生の姿であると觀してゐる現代の心重たき者の上にも反省を與へるのを惜しむまいとしてゐる。まつたくおまへはあらゆるものを溫め燃やす『熱い死灰』であつた!

ポンペーの死市をうしろにした自分たちの自動車はまつしぐらに街道を馳驅して行く、振りかへると、濃い煙のやうな埃が車の走り行くあとを朦々と立ち罩めてゐる。火山灰なのだ。ヴェスヴィオの降らした灰がまだそのまゝになつてゐるのだ。新らしいポンペーは、かうした火山灰の堆積したなかに建てられてゐる小さな貧しい村だ。寺院の圓頂（ドーム）だけが燦く日の下に悠やかに輝いてゐる唯一つのものであつた。

車は一歩一歩前面の巍峨たる山にと近づく。その頂きに近く赭色の廢れた古塔が隱見してゐる。その古塔のあるところまで車はこの高い山を登つて行くのだといふ。そしてずつと山のうしろに出るのだといふ。アマルフイ、――これから行かうとしてゐる場所はそのうしろに擴がつてゐる海の岸に當つてゐるわけなのだ。

靜かな山麓の村にかゝる。谿川が音を立てゝそのなかに流れてゐた。そこゝに遊んでゐた子供なぞは孰れもこつちを向いて笑ひながら手を動かしてゐる。なかには花を持つて來て車内に投げ込む子なぞもあつた。戸口に凭りかゝつた蓮葉らしい娘なぞは、子供と同じやうに手を動かしながら笑を送つてゐる。

もう山だ。相當いゝ道だとは言つても、幅の廣い自動車が通ると殆んど他が通れないまでになる。羊群をひきつれた

牧者なぞが立ち停つて車の通り過ぎるのを待つてゐる。羊の群がこはごはと一方に寄り固まつて顫へてゐるのは氣の毒でもあり愛らしくもあつた。歩一歩カムパニアの平原が眼の下に見えるやうになる。今通つて來た麓の小村やその白い道や橋や谿川やが小さく小さく見える。平坦な野は、ヴエスヴイオの山麓から右手に屹立してゐる山脈の間を廣々と擴がつてゐる。その靑い絨毯のうへに點々とこぼれてゐるのは家だ、赫いろの屋根を持つた家だ。

やがて何時しか自分たちとヴエスヴイオの峻嶺とは相比肩するやうになる。その峻嶺の肩越しに朧ろに碧く光つてゐるのは、あれはナポリの海だつた！

先ほど目じるしとなつてゐた古塔はやがて車のすぐ右手に現はれた。と同時に道は降りかけた。ヴエスヴイオもカムパニアの野もナポリの海も、一瞬のうちに隱れてしまつた、おゝ、氣が付けばあの燦かしい太陽までが今は密雲のなかに隱れてしまつた。風が肌に冷々とまつはつて來た。もう何處を見ても山が重疊してゐた。その頂きを雲霧がまた侘びしげに去來してゐるのだつた。

が、かうした山のなかにも人生はあつた。徑も見えないやうな山腹や谿間やにもいくつかの家は横つてゐた。道傍に立つて、わざわざ帽子を脱ぎこちらにお辭儀をする百姓なぞもあつた。道に添ふて五六軒並んでゐる小村では、戸口にぼんやり立つてゐる若い美くしい娘もあつた。先ほど車内に投げ込まれた花束を解いて、その一本を投げて遣ると、ふと、びつくりした顔をして間もなく微笑をこちらに投げて與れるのも面白かつた。

車は次第次第に山を降つて行く。風は次第次第に温かくなる。古い建物、古い壁の塀、それに古い橋、――古風な村が水に寄りかゝつてゐる繪のやうに美くしい姿が、思ひがけなく現はれたりする。シトローンの林がこれからそれへと色ばんだ黄金の實を匂はせて展がつてゐる。自分は何といふわけなしにあのゲエテの『ウイルヘルム・マイステル』のなかに描かれてゐるミニヨンの稚い姿が、かうした村ででも見ることが能きるやうな氣までするのであつた。

海だ！　シトローンの林にかこまれた山地は急にひらけた。ふたゝび晴れ亙つた空の光を受けたその海のいろの碧さ深さは、自分たちの瞳を射すやうに迫つて來た。凹凸をなした曲浦がその光の海を渦巻きに抱いてゐる。リヴイエ

ラ・イタリアーナ(伊太利のリヴイエラ)と呼ばれてゐる言葉をたちまちに自分は思ひ出した。まつたくそれは佛蘭西の南海岸のニスやカンヌやの邊りに似てゐる。しかし、それよりもこれはもつと明るくもつと碧かつた。

海岸のマジョリといふ町を過ぎると、岬一つ越したところにアマルフイの町がある。

アマルフイは中世に於ては大きな『海の町』としてかのピサ、ジエノアとも並び稱せられた土地であつたといふ。然しその熾んだつた炎はもうすつかり消えてしまつた。從つて、今日のアマルフイは、廢れた城砦のいくつかとサンタ・アンドレアの寺院とをその古い代の思ひ出として持つてゐるだけであるけれども、昔ながらの碧き海と奇らしき巖と溫かき太陽とは今も變らぬ美くしさもて數多い人々の心を牽き付ける土地となつてゐるのであつた。

カプチニの僧院をなほしてホテル・ド・リュンヌと名付けてゐる海へと突出た岬のうへに聳え立つ古風な旅館の食堂で時遲れた晝餐を攝ることゝした。この旅館はかのヘンリツク・イブセンが『海の夫人』を書いて所として、この人の伊太利語で認めた感謝狀といふのが食堂に掲げてある。ガルソンを呼んで『何處の部屋でか?』と尋ねると。『今客が這入つてゐますが、一寸留守ですからお目に掛けませう』と言つて、海に面したその部屋の前へ案內して扉の隙間から覗かせて與れる。寢室が別に附いてゐる細長い部屋で、窓越しに碧い海が光つてゐる。天井は素朴な弧形をなしてゐて如何にも寺院の房室らしい。眞中に置いた中型の卓子、――それも當時のまゝだといふ。矢張りかうしたものを眺めると、ある感動を受けることなしにはゐられなかつた。――

食事を濟して、しばらくテラスで燦かしい海景の展望をほしいまゝにしてから、また車中の人となつた。道は曲折を極めた海岸線に添ふて走つてゐる。晴れやかな陽と海とは絕えずあたりに笑みこぼれ、輝き渡つて、些かな暗影も憂愁もこの世のなかにはありさうでもなかつた。わけて海のうへは童話のなかにある海のやうに碧々と綺麗な色に燦いてゐた。小さな白いものがぴちぴちとその碧色のなかで光つて見えるのが、魚といふよりも眞白な人魚でもあるやうに見られるのだつた。水際に當つてシチリアの島影でも見えやせぬかと眼を遣つたけれども、柔らかい霧がほのぼのと立ち罩めてゐるだけであつた。が、かへつてその邊りから、サイレンの旋はしい唄聲が、微風につれてひゞいて來るやうた

氣さへせられるのであつた。………・……

道は海岸から離れた。オリーヴの林、シトローンの林、オランジユの林がそれからそれへと緩やかな丘をかざつて明るい日射のなかを車中までも匂ふてゐた。またしても花を投げる子供があつた。戸口に立つて見送る若い伊太利娘もあつた。

ソレント。あのカプリ島をたづねる時船が一寸泊つたそのソレントの町が、海を背にして眼の下に現はれた。海は言ふまでもなくナポリ灣であつた。赤屋根の別墅(ヴィラ)がオリーヴやオランジユやの綠の林のなかに點綴してゐる風景も今更ながら眼を樂しました。左岸の海には水色をしたカプリの島影も、微かに眺められた。右手の方ナポリの町は海霧につゝまれて見えなかつたが、ヴエスヴイオの煙を噴いてゐる姿と海上に浮ぶ白い帆の三つ四つは折柄西に傾きかけた陽の光を受けて、浮彫のやうにかつきりと見渡された。

ソレントからナポリまではもう二時間。流石に自動車にも乘り疲れた自分たちは、せめて五分でも十分でもいゝ、土のうへを歩くことにしやうと、車をうしろにソレントの町に向けて一歩一歩坂を下りはじめた、からまるやうな果實と草花との濃い匂ひのなかをば。……………

アツシジの初夏

――フランチエスコとクララの町――

羅馬からナポリへ、ナポリからシチリアの島へ、――そしてふたゝびナポリを過ぎて羅馬の町にと戻つて來た時は、もう五月も末に近かつた。急がしい旅に疲れた身は、石道のうへを烈しい響きを立てながら車馬の馳せ交る羅馬の町からも早く逃れたかつた。とうとう自分たちは、靜かなアツシジで二三日を送らう、そしてふたゝびフイレンツエに出て、そこから巴里行の汽車に乘りこむことにしやう、から話をきめたのであつた。

いよいよ羅馬を立つ。汽車は割に空いてゐた。柔和らしい品のいゝ老婦人が自分たちの前の席に坐つてゐる。手にし

てゐる本を見るともなく見ると、ヴアノン・リーの『ザ・スピリツト・オブ・ローム』だつた。旅で逢ふ英吉利人――わけて伊太利の旅で煩いまでに夥しく逢ふ英吉利人といふものを殆んど例外なしに一種の輕蔑と嫌惡なしでは見ることが能きない自分ではあつたけれども（あのピエル・ロチが、その著『埃及』のなかでトーマス・クックの世話になる英吉利のツーリストのことをあゝも皮肉に書いてゐるやうに！）この謹ましやかな老婦人だけは明かに例外であつた。オペラ・バツクのなかから櫻んぼなぞを取り出して自分たちに呉れやうとするのも優しい人柄を思はせた。これから一人してアツシジへ赴くとのこと。自分たちも同じだといふと、それではあのジヨツトやチマブエの壁畫でも見にか、と自分をも畫家と思ひ違ひての尋ねやうであつた。いや、それもあるけれど、それよりは日頃思慕してゐるサン・フランチエスコとサンタ・クララの跡を訪ねやうが爲めに、と答へると、その老婦人は、遠い東洋の異教の國から遣つて來た人達であるのにそれはまた如何して、と問ひたげな眼付で今更らしくこちらを見るのにも、素直な心が現はれてゐた。

汽車はフオリニオで乘換へになる。もうアツシジまでは間もない。アペニンの山脈が左手に當つて鈍い午後の光を受けて、遠く連つてゐるのが見える。右手はすぐに小山の續きになつてゐて、アツシジの町の建てられてゐるスパジオの山も、車窓に近く映りはじめた、と見ると、その山上には代赭いろをした古城が聳え、その下一帶山腹にかけて一團の家屋の密集してゐるのが眺められた。アツシジである。――

畫家の名に因んだオテル・ジヨツトといふのに泊ることにきめて、馬車のうへの人となる。停車場は野のなかに立つてゐるので、山の中腹にある町まで行くのはかなり遠い。綠色の濃い野菜畑のうへをオリーヴの樹があちこちに點綴して野なかの白い街道を、田舍風の緩い馬車に搖られながら歩一歩アツシジの町へと行く。後方をふり返つて見ると、今は低くなつた停車場の僅か西の方に當つて宏壯な堂宇が眼につく、御者に質ねると、それこそサンタ・マリア・デル・アンジエリの寺院――かのサンタ・クララが十八の歳の春、竊かに父の邸を逃れてサン・フランチエスコの許に走つたポルテイウンクーラの寺院といふのがすなはちそれであつた。當時はこの邊一帶は深い森林に埋められてゐて、そのなかにその小さな寺院が、恰かも暗い森のなかの一つの明るい花のやうにぽつちりと咲いてゐたといふ。サン・フランチエ

スコは苦しみの多い傳道の旅からこの森のなかの小さな貧しい寺院に戻つて來ては、他では得難い平和と慰藉とを得るのを常としたのだつた。が、今では、森林は取り拂はれてそのあとに葡萄園とオリーヴ畑とが擴がり、小さな貧しい寺院もかうした宏壯華麗を極めた伽藍に變つてしまつてゐる。自分は今更ながら八百年といふ長い時の距離を想ひ遣つた。その『時』はかうもすつかり森林や寺院やを變へてしまつたけれど、われわれの心に宿つてくるサン・フランチェスコとサンタ・クララとの面影だけは、さうした『時』の力を超えて、常に常に變らなかつた………

ホテルに着く。部屋の窓に立つとウムブリアの平野が一望のなかに收まる。アペニンの山脈は薄い靄色のなかに、呼べば將に答へんとするさまである。窓のすぐ下には、庭の低い樹の枝越しに聖ピエトロのモナステリオが中世風の素朴な敬虔な姿で聳え立つてゐる。その鐘樓の鐘の音がまつすぐに自分の部屋へとはいりこむ。小鳥の音もあちこちにきこえる。

しばらく休んでから外へ出る。先づ聖フランチェスコの寺院をたづねる。それは仄暗さと冷たさとに充ちてゐて、今まで伊太利の各地で眺めて來たあの宮殿にも紛ふ華麗な燦びやかな數多い寺院とはすつかり異つてゐた。が、この暗さ、冷たさ、幽かさこそは、まことに人をして『中世』の心臟のすぐ近くにあることをも感ぜしめた。神秘に充ちた、信仰の世界のなかにあることをも感ぜしめた。祭壇のうへの彩玻璃を透いてくるほのかな外光、そのすぐ下の微かに點つてゐる灯影、――光りと言つてはそれだけであつた。ジョットの壁畫の濃い黄金や紫や青も、朧ろげな夢の畫のやうにしか見えなかつた。

シモーネ・マルチニと言ふ人の描いたサンタ・クララの肖像が、この細やかな微光のなかにあつて自分の眼を牽き付けた。そこには、處女の清淨と威嚴とが、神にその身心を獻げきつた英雄的な大膽さと決心とが、ありありと畫布のうへに浮んでゐるのだつた。「僧庵の花のごとく脆く、痩せて、蒼白い」とせられた彼女の風貌が、憾みなく見事に描き出されてゐるのだつた。自分はしばらくそのまへに立ち續けた。――

サンタ・クララは十二世紀の末にアッシジの貴族の家に生れた。恰度サン・フランチェスコの生れた年よりも十二年ほ

ど遁れてゐた。狹い町のことであるから、彼女はフランチエスコ——即ちベルナルドーネの息子のことを、この騒蕩な生活のことを既に知つてゐたと言つていい。然るにこの放蕩兒に突然に心の轉機が遣つて來た。彼をきのふまであれ程強く緊捉してゐた地上の快樂の連鎖は、この烈しい轉機のまへにはばらばらに斷ち切られてしまつた。彼は、永遠の歡び永遠の生命のことを想ふて、裸のまゝにアッシジの町を去つてしまつた。數年ののちアッシジの町に戻つて來た彼は、まつたく天から降りて來た人のやうに見えた。（がその姿だけは地獄から攀ぢ登つて來た人のやうであつた！）彼ははじめて寺院に立つて教を說いた。その時彼女は十六歲に達してゐた。高貴な家柄に人となり、兩親の深い慈愛のなかに何一つ不自由もなく育つた彼女ではあつたけれども、物事に目醒めやうとする若く烈しい心は、このフランチエスコの異常なる生活とそれが持つ深い意味とに動かされぬわけには行かなかつた。彼女は遂に十八歲になつたある春の祭の夜、竊かに家を脫け出でて、ポルテイウンクーラの森のなかに走つたのであつた。

父の忿怒も母の惻願も遂にこの少女の緊い決心を動かすわけには行かなかつた。彼女はかくてフランチエスコによつて與へられたサン・ダミアノの寺院のなかに「貧しき貴女（ドンナ・ポヴェルエタ）」として平和と榮光とに充ちた一生を終ることとなつたのである。……………

思ふともなしにこの遠い中世の物語りを思ひ浮べてゐるうちに、自分までがその時代のなかに何時知らず滑りこむでしまつてゐることを感じた。動かない冷たく暗いこの寺院のなかの空氣は、自分の心を何時までもこの古い時代のなかに休ましてゐて呉れた。

——が、伴れのO氏の低く呼ぶ聲にわれに返つて、やがてふたりは外へと出た。

寺院のまへの草原を横ぎるとやがて白い道はスバジオの山のうしろへと出る。山上の古城ロッカ・マジオーレが、直ぐ右手の上に眺められた。左手は狹い谿の低地を隔てゝ隣山と向き合つてゐた。その低地にはキアジオの美くしい谷川が綠のなかを曲折して流れてゐる。更にそれに絡んで白い小徑があちこちに走つてゐた。所々に見える家からは夕餉の煙が仄白くのぼつてゐた。小鳥の聲が軟らかな明るい空氣のなかに充ちてゐた。ふたりの步いてゐる道には、橄欖の美

くしい密樹と白い花を持つた軟らかなアカシヤの樹とが續いてゐた。その木の下、青い芝生のうへには、本を讀むでゐる娘、編物をしてゐる娘が自分たちの通り過ぎる音に靜かに顏を擧げて見るのだつた。黑味がかつた美くしい眼、廣い額にふりかゝるブロンドの髮、通つた鼻筋と紅くしまつた脣と、――いづれも土地の娘に違ひなかつた。自分の連想はそれとなく十八歲のサンタ・クララにまで走つて行つた。

薔薇の花の咲き充ちた墓場が、道の突き當りにあつた。そこから引返して、更にアッシジの町のなかへと戻つて行つた。

不規則な、屈曲のはげしい、登り降りのしきりな町の通り。山腹に立てられたこの奇異な姿に充ちた町。平らかな眞直な道路をと思つてたどつて行くと急に曲る。急に坂になる。行き詰つてしまうのかと思ふと、人の家の軒下を行くやうな細々した道が上にか下にか必ずついてゐる。まるで迷路(ラビリンス)だ。これが大きな町ででもあれば、人は容易に自分の宿へも戻つて來ることが能きなくなるに違ひはなかつた。この昔ながらの通りは、自分の心を容易にまた十二世紀の古い時代に連れて行つた。あのベルナルドーネの息子の姿がその邊の曲り角から現はれやせぬか、――そんなことまで想ひ遣らるるのだつた。夜になると松明(たいまつ)をふりかざし、同じ年輩の青年たちに周圍を取りまかせながら、町を漫步したといふ若々しい享樂的な驕兒の面影が、この通りを背景としてありありと眼のまへに描き出される氣さへするのであつた。

家は家でまた岩石を無雜作に切り崩してそれで建てたと思はれるやうな、極めて素朴ながつちりとした建物であつた。何れも古風な半ば腐れたやうな重々しい木でできた大きな扉が立ててあつた。少女のクララが、ポルテイウンクーラの森に走るためにしのびやかに押して出た家の扉がまたこれに相違なかつた、――とも想ひ遣られた。その扉の横には無恰好と言つてもいいやうな四角な窓が飾りもなしに附いてゐた。その暗いなかから、時たま白い美くしい娘の面輪なぞが外を覗いてゐることがあつた。またしても、自分の心にはクララの面影がうつるのだつた。

もうそろそろ晩餐の時間でもあつた。ホテルへと戻りついてから、部屋の窓越しに外をながめると、周圍はまだ明るかつたが最早アペニンの山脈は薄薔薇いろの夕靄のなかに微かに息づいてゐた。ウムブリアの野は一面蒼白い黃金の揩

めきを見せて、恰かも深い海のやうに見える。あちこちと點在してゐる白い建物は、その海のうへに泛ふてゐる靡いてる白い帆のやうであつた。晩鐘(アンゼラス)の音はあちこちの寺々から響き渡つて、この海の面一帶にはるばると擴がつて行く。ポルテイウンクーラの寺院からひゞいて來る鐘の音はわけて朗らかに澄むで美くしかつた。自分も覺えず知らず胸に十字を描きながら片膝をつきたい心持にまで誘はれて行くのであつた。…………

食堂には十人足らずの客しか見えなかつた。いづれもかうした土地までわざわざ遣つて來た人々だけあつて、今迄ヴエネチヤでフイレンツエで、羅馬で、さてはナポリで逢つたやうなツーリスト（それは重に英吉利人であつた）とは何となく異つてゐるのがつくづく感じられた。鮮やかな穩やかなアトモスフエールがこの飾りのない食堂を溫くこめてゐるのが感じられた。

そのなかでもわけて自分の眼を惹いたのは、自分たちの席から稍離れた隅に近い所でつゝましやかに食事をとつてゐる一組の夫婦、――その妻に當る人であつた。その人は英吉利の上流社會なぞで見らるる優雅で端麗な美くしい面輪の持ち主であつた。其細長で恰悧に充ちた面立は、先ほど聖フランチエスコ寺のなかで見たマルチニの肖像畫と何處か似通てゐる所があるやうな氣さへもするのであつた。自分は時々ナイフを休めては、見るともなくそちらの方を眺め遣つた――

食堂から部屋へ戻つてくると、月が東からあかあかと照してゐた。山から野にかけての幽かなその月の光！　その月光のなかを小さな燈影が山の麓や野の彼方に燦々ときらめいてゐる。野の眞中に當つて黑く聳えてゐるのは、言ふまでもなくサンタ・マリアの寺院である。庭越しにすぐ眼のまへに聳えてゐるサン・ピエトロの寺院の尖塔のうへに付いてゐる黄金の十字架は、月の光のなかをこれも小さな燈影のやうにきらめいてゐる。おぼろの光のこもつたウムブリアの野もせから微かにひゞいてくるのは蛙の唄であつた。…………

部屋からテラスへと出て行つた。涼しい夜風と爽やかな月の光とはテラスのうへに充ちみちてゐた。そこへ思ひ掛なく先ほど食堂で見かけた夫妻が現はれてきた。主人は氣輕に自分の立つてゐる側へ遣つて來て『いい月夜ですね！』と口を切つた。その正しく美くしい齒切のいい發音から、左程英吉利の土地に親しんでゐない自分にも、その人が生粋の倫敦(ロンドナー)

子であることが判つた。何處から、何時こゝへ、といふやうな斯した場合に平素用ゐられる挨拶じみた言葉を交はし合つてから、際り無く話はそれからそれへと移つて行つた。美くしい夫人も側へ寄つて來て二人の話のなかに交つた。

『私は、サン・フランチエスコの上に熱い興味を持つてゐますが、妻はサンタ・クララが好きで頻りといろいろ調べてゐます』

その紳士はかう言ひながら美くしい夫人の方に眼を遣つた。自分は危く夫人がそのクララに似通ふやうに思はれると言はうとして流石に口を噤んだ。そんなこととは知らず夫人は主人の言葉を微笑で受けながら自分の方を向いて、

『サン・ダミアノの寺院へは未だおいでになりませんの？サンタ・クララの住つてゐた寺院へは？ 薄暗い小さな食堂とか寢臺とかはその當時のまゝだと申して居ります。ポルタ・ヌオヴァから十分位で歩いて參れますから是非行つて御覽なさいまし…………』

『えゝ、是非』自分は答へた。『それから、クララの家といふのは今殘つて居りますか知ら？』

『今日も妻と一緒にそれを探しに行つたのですが…………』と紳士は自分の方を向いて言つた。『もう今はその跡一面畑になつてしまつて、無論家は殘つてゐません。然しその跡だけは見て置きたいと思つて出掛けましたが、判らずじまひで、到々そのまゝ歸つてきました』

月の光はますます明るく、灰青いウムブリアの野はあだかも水のなかの國のやうに見える。アペニンの山脈は煙のやうに淡い。

『先月の今時は――』と紳士は月を仰いでから『恰度羅馬にゐて、月のなかをコルシウムを歩きましたつけ、あゝ何といふすばらしい光景だつたでせう！』

自分は自分でヴエネチアで滿月に逢つたことを話した。それからそれへと果しなく話は續いた…………

サンタ・マリアの寺院から靜かな點鐘が月光のなかを搖れてきた。もう十時であつた。

『また明日』。『お休みなさい』

それぞれ別れて部屋へ戻つたが、月の光はカーテン越しに眞白い寢臺のうへまでも明々と流れこんでゐる。床にはいつたとて如何してすぐに睡りに落つることは不能さう。

自分は窓近い長椅子(ソーファ)に凭りかゝつて、それとなき物思ひのなかに身をまかせた。何處の庭からか微かな噴泉の音がひゞいてくるだけで、夜は果てもなく靜かだつた。…………

〰〰〰〰〰〰〰〰

晴れ亘つた日だつた。アッシジに着いて三日目の午前だつた。眞夏のやうに強く鮮やく太陽の光と熱とのなかを、自分はカルチエリの森をさしてひとりで寂しい山道を辿りつゝあつた。

カルチエリの森、及びそのなかにある洞窟は、サン・フランチエスコの傳記を讀むだ者には忘れることのできない名前であつた。それはアッシジの町から歩いて一時間ほどの、スバジオの山腹に位してゐた。恰度山と山との峽になつてゐるので雨でも降ると恐ろしい激流がそこを流れ落ちる。フランチスコが棲つてゐたといふリヴオ・トルトの廢れた家もその激流の流れ行く側にあつた。フランチエスコは、このリヴオ・トルトから遠くないこのカルチエリ(牢獄といふ意味で、自然の洞窟に對して附けられたる名である)の靜寂を愛して、よく弟子たちを連れて些かの食物を用意してこの森林のなかの洞窟に來ては、數日の間祈禱と冥想とに時を送るのを常としてゐた。小鳥を集めて說教したと傳へられてゐるのもこの場所であつた。

アッシジの町のなかにはもはやフランチエスコの息吹をまざまざと感じられるやうな場所は殘つてゐなかつた。何せ八百年も經た今日のことであればそれも無理なかつた。然しながらこのカルチエリの森と洞窟とはよく十二世紀の昔からその姿態を變へないでゐるといふ。フランチエスコの瞑目合掌した部屋までが同じ形、同じ暗さ、同じ冷たさのまゝに殘つてゐるといふ。アッシジにわざわざ遣つて來ながら、それを見ないで去つてしまふといふことは如何にも心殘りで

あつた。熱い陽をさへぎる樹の蔭とてもない磽确な石塊のごろごろしてる山道を、自分は立ち停つては汗を拭き、また立ち停つては汗を拭きながらにかうしてそのカルチエリさして歩きつゞけてゐるのはその爲めであつた。

一歩一歩道は登りになつて、山腹にあるアッシジの町も今は下の方に見えるやうになつた。山頂にあるロッカ・マジオーレの赭い古城でさへも、自分と肩を並べるほどになつた。

自分は今更にこの山腹の小さな町を見返つた。そして『天』の創り出す運命の不思議さをば心の底から感ぜずにはゐられなかつた。

この小さな町、——當時にあつては伊太利の文化の中心とせられてゐたフイレンツェからも、ミラノからも、ヴェネチャからも、さては羅馬からも、影響らしい影響を享けることもなく、エトラスカン族の古い荒墟のなかにしよんぼりと孤り寂しく建つてゐたこの小さな町、その時代に取り殘されたやうな町のなかから、伊太利の中世紀を照らし出す『太陽』が生れ出でたといふことは、天の創り出した運命であると說明するほか、自分には適はしい言葉が考へられない。殊に當時の伊太利宗教史を繙く誰でもが知る通り、カラブリアの聖者ジオアキーノ・デイ・フイオーレが將に死せんとして、伊太利全土は再び擧げて反基督（アンチクリスト）の逆流のなかに溺れんとしつゝあつた時に、思ひがけなくこのアッシジの町から救ひの手が伸びて、それを未前に支へることの能きたといふこと、若しこの町なかりせば、伊太利は明かに『默示錄』の恐怖の淵に投げ込まれたに相違なかつたといふこと、——それを思ひ遣るならば、誰しも『天』の指す不思議なる運命に胸を打たれぬものはないと言つていいであらう。

殊にあの驕慢なる蕩兒ベルナルドーネの息子が、一朝轉心して、『貧』と『愛』と『服從』との唯一の友として（サバテイエの言葉のごとく）『基督に倣ひて』の著者トマス・ア・ケムピスのそれよりも遙かに眞實なる基督に倣ふた生涯を送つたといふ一事にいたつては、更に更に天の創れる『運命』の不思議さを感じるのを禁めることが能きない。彼のごとく多種多彩なる心の道程を辿れる聖者を、人は何處に見出すことが出來やう。——

サン・フランチエスコの一生を要約するならば、それは『生き、愛し、苦しむだ人間』の一生だつたと言へるであら

う。まつたく彼は何より先に先づ『人間』であた。彼には、僧侶らしきところ、神學者らしきところがまるで無かつたとも言つてよかつた。聖書をも充分には讀み、理解し、それを考へてゐなかつたとさへ言つてよかつた。彼が讀み、理解し、考へてゐたのは實にこの世であつた。この世の人間であつた。その魂であつた。あゝ、聖僧をもつて呼ばるる數多い人のなかにこのフランチエスコほど世間を知り、人間を知り、魂を知り得た人が何處にあるだらう。彼の偉大は實にこゝにある。そうして、八百年の長い歳月を隔つるにかゝはらず、また、その教義信仰の相違があるにかゝはらず、現代人の心を今に深く捉へて離さないのは、實にこゝにある、

……………汗を拭きつゞけながら石道のうへを辿つた一時間が漸くに終つた。綠りに燃えた森が爽やかな姿をもつて眼のまへにあらはれた。その森のなかに、寺とも見えぬ古びた建物が埋まつてゐる。――カルチエリの洞窟を寺となしたものであつた。

フランチエスカン風の貧しい僧服を身に纒ふた坊さんが、それからそれへと、小さな古びた薄暗い部屋を案内して見れる。それは洞窟の所々に木を置いた、といふに過ぎないやうな貧しく佗びしい建物であつた。サン・フランチエスコが寢たといふ固い木の床があつた。祈つたといふ小さな暗い部屋があつた。腰掛けてゐたといふ古びた黒いベンチがあつた。自分は故わかぬ溜息を洩しながら、それ等のものに眺め入つた。信仰にいたる道の苦艱、――それがまざまざと眼のまへに泛ぶ氣がした。

洞窟を出て、森のなかの徑をしばらく坊さんと連れ立つて歩いた。樫の若葉のうへに照る陽の光は若々しく朗かだつた。小鳥が枝から枝へ葉から葉へ啼きながら飛び廻つてゐた。地上にはまた小さな花が赤く白く咲きこぼれてゐるのだつた。

今日は恰度日曜日に當つてゐた。アッシジから遊山に來てゐる人々の聲が樹の葉越しに聽えて來た。やがて、酒の瓶(フィアスコ)を手にした人や鍋なんぞを運むでゐる人やの姿が徑の彼方に眺められた。綺麗な清水を汲みにとて水瓶を手にし

て泉(フォンタナ)へと馳けて行く子供などとも擦れ交つた。美くしい聲を張りあげて耳に快いこの國の民謡を口にしながら坂の小徑を上つてくる若い婦人連れにも逢つた。陽の光はあくまで明るく、森のなかをくぐる微風はあくまで涼しかつた。生きる樂しみが、この古い森のなかに揺れ動いてゐた…………

坊さんと別れて、自分はふたゝび先ほど來たアッシジへの石の道に出た。人通りの絶えてないその道の片隅に腰を卸し、宿から持つて來たサンドウイッチのつゝみを開いて、質素な晝飯を攝りはじめた。樹の枝が頭のうへに繁つてゐた。黄金と緑との影が入れ交つて、膝にのせた紙のうへに揺れるのを見ながら、礦水を飲み、桜實をすゝつた。涼しい風が、額に手に快かつた。『神の山、聖らかなる山、照り輝く山、豐かなる山、神のいと喜びて棲み給ふ山、』——自分はフランチエスコがヴエルナの山を眺めながらに言つたといふこの言葉を何とはなしに唇にしながら、眼のまへのスパジオの山を胸に抱くやうにして仰ぎ見た。——

雨を交へた風のなかをふたりはフイレンツエ指してこのアッシジを立たうとしてゐる。ペルージアも車窓から眺めるにとゞめやう。今夜は遲くフイレンツエに着く。そこで一兩日逗つて見殘したものを見ることにしやう。それからはいよいよピサ、ジエノアを經て佛蘭西指しての歸りの旅だ。——胸のなかでさうした旅の豫定を繰返してゐるうちに轟然たる響きを立てながら汽車はアッシジ停車場の構内に突進して來た…………

電光がスパジオの山の方からウムブリアの野面にぱつと閃き渡つた。アペニンの山も、密雲に閉(と)さされてもう見えなかつた。

時・論

法學博士 吉野作造

羅馬法王廳使節交換問題に就て

△ △ △

今私は一つには小野東京帝大助教授に讀んで戴く爲に、又一つには本問題に對する私の從來の態度を一層明にする爲に、且つは時事問題としての本件に關する多少の參考資料を讀者に提供する爲に、此の小論文を書きます。主たる目的が三つもあるので多少ごたごたするだらうと思ひますが、其邊は豫め讀者の寛恕を乞ひます。

其前に本論文を草するに至つた來歷を一言して置きます。我が政府では今度羅馬法王廳と使臣を交換することにし、之に必要なる費目を豫算に計上して議會の協贊を求むる手筈ださうです。之に對して東京帝國大學助教授小野清一郎君は、去年十二月上旬の東京朝日新聞紙上に於て反對意見を發表せられました。數日の後外務省の横山正幸君は同じく朝日紙上に其の駁論を寄せられましたが、小野君は更に之に對しても長文の論駁を試みられました。而して私は小野君の前後兩篇の論文の中には多少誤謬ではないかと考へた點もありまするし、又之が近く具體的の時事問題となるものとせば之に關する正しい見解と思ふ所を明にするは決して無用の冗辭でもないと考へましたので、自分の所見を匆卒起稿して朝日紙に寄せたのであります。之は十二月三十日同三十一日及一月三日のに出てゐます。然るに小野君は三たび長文の論駁を同じく朝日に投じて私の蒙を啓かれんと努めました。が不幸にして私は小野君の意見に十分承服することは出來ません。のみならず、同君の意見の中にはまだ色々の誤解もある樣に思ふのです。而して之等の點を明にするは、私自身の立場を一層はつきりさす所以たるのみならず、本問題に對する世上の見解を正す爲にも必要だと考へましたので、遂に又禿筆を呵して本論文を書くことにしたのです。本來ならば重ねて朝日紙に寄すべきであると思ひますが、段々議會の開

會も迫つて居る際、同じ問題で度々新聞に迷惑を掛けるも如何と考へ茲に論戰の舞臺を本誌に移す事にしました。本問題の究明に特別の興味を有せらるゝ讀者は、本論文を讀まるゝに方り、前記朝日紙をも參考とせられんことを希望します。

△　△　△

本論に入る前に小野君に一言して置きます。朝日に寄せた私のさきの論文を十二月三十日の「上」から一月三日の「中」に續き、更に遡つて十二月三十一日の「下」に及ばれたなら、私の大體の論旨はあなたの難ぜられた樣には解されなかつたらうと考へます。私は實はあの論文をば一氣呵成に全部を書き上げたのでしたが、何かの間違で「中」と「下」とがあべこべに載りました。若し之が誤解の因であつたとしますれば、それは私に取つて甚だ不幸な事でした。併し乍らあの位でも氣を落ち付けて讀めば大した誤解は起る筈はないかとも考へます。御面倒でも結論に急がないでも一度讀み直して見て下さいませんか。要するに私があの論文を認めた重なる動機は、小野君の法王使節授受問題を取扱はるゝ態度が餘りに仰々しく、而かも其の仰々しさを裏付ける爲に擧げらるゝ所の學術上の說明は、事實の觀察に於ても又論理の進め方に於ても、如何かと思はれる節がありましたので、其の點に關する疑を述べて近く起るべき本問題の究明に幾分資したいといふに在つたのです。繰り返す樣ですが、私の前の立論の大旨を摘まめば、畢竟次の樣になるのです。

（第一）法王廳との使節交換開始の結果直に羅馬教會が我國に急激の勢力發展を見るべしといふは勿論、假令之が盛になつたとて日本に取り由々しき大事なりと觀るのは、事實の認定を誤つたものではあるまいか。

（第二）姑く一歩を讓り、假りに之を頗る怖るべしとするも、そは教法禁止の理由にはならうが交通抑止の根據にはならぬ筋合ではなからうか。

（第三）羅馬教會の勢力を怖るべしとする考と其との交通を抑止すべしとの考とを論理的に連絡あらしむる爲には、公使授受の一事は其の當然の效果として羅馬教會に國家の凡ゆる資格を認むる事になるとの前提を許さなければならぬ次第だが、斯んな理屈は今日何處でも認められて居ないのではなからうか。

外にも些末の個條はありますが大要はこの三點に盡くると謂つてようございます。之に就てどうしても私と見る所を異にするといふのならなほ詳しく伺つて蒙を啓きませう。が、私の議

論の進め方そのものに矛盾撞着があると云はれては私に一寸其の意味が了解し兼ねるのです。

以上を以て誤解せられた私の立場に對する辯明は盡くると思ひます。之れ以外に復た冗辯を弄するの必要はない樣です。けれども本件は近く具體的の問題となるさうでもありますから、小野君の最後の御議論を眼頭におきつゝ、も少し說明の言葉を述べさして戴きませう。

△ △ △

念の爲に斷つておきますが、私は羅馬教會の政治的權力を將來の國際社會に於ても積極的に認むべしとする論者ではありません。所謂俗權に關する法王廳の主張を私は兼々理に於て排すべしと論じて居りますし、又其の歐洲諸國に於ける排國家的行動の數々に對しては心ひそかに憎惡の念をさへ懷いて居るものでございます。此のとは曾て、私の講義を聽かれたり又は永く私の論文などを讀まれた方の齊しく承認せらるゝ所だらうと思ひます。併し乍ら羅馬教會の社會的意義は固より決して玆處に盡くるのではありません。私は信仰の點からも實は天主教會には可なり强烈な反感を有つて居るものですが、一方にはまたその宗教的倫理的本質のうちに人生に對する重要なる使命の存するを許容するだけの雅量を惜おとしませぬ。「あらゆる手段を以て即ち或時は下層民に訴へ或時は帝室と握手し、或は勞働運動を利用しまた或は保守的市民階級と結んで飽くまでもその教會至上主義的世界統一の目的を遂せんとする團體」などと、丸で田舍の御役人が社會主義者を捉へた時の態度で罵倒さるゝ點に於て、小野君の教會觀は私共と根本的に相違して居るのではありますまいか。若しさういふのが天主教會の本體なら、何故に一刻も猶豫せずに之を國禁とせよと叫ばれないのでせうか。

私は天主教會の盛行をそんなに怖しいものとは思つて居りません。現に我國に於て今日の所斯の方面に於て格別の面倒は起つて居ないではありませんか、（德川初期の騷動は特別の理由があります。玆には問題を外れるを恐れて論及しません）。併しよくはつきりしては居ませんが、この點は小野君も一面に於て認めて居られる樣にも思はれます。何故なれば同君は、假令現在に於て危險なくとも國家百年の後を思へば寒心に堪へぬといふ樣なことを申されて居るからであります。

然らば問題は一轉して我々は、天主教會は將來に於て國家の禍となる（政治的に）素質を本來有つて居るのか否かを考へて見る必要があります。之は純粹に客觀的の事實問題たることに御注意を願ひたいと思ひます。而して之に對して小野君は積極

的の見解を立てゝ居られますが、其の理由として擧げらるる第一の根據は、法王側の熱心なる教權擴張の運動といふ事です。如何に法王が熱心だからとて日本が其の思ふ通りになるものでせうか。第二に擧ぐる所は、アメリカに居るラテン系アイルランド系の國民が頑として信仰を改めないといふ事實です。之が日本と何の係はりがあるのでせう。第三には、使節の派遣は天主教徒たる日本臣民の對教會服從關係を正式に承認するに等しく其結果教會の勢力はやがて日本政府の力でどうともならぬ事になると申されて居ります。斯の如きは日本人は西洋法教師のいふ通りになる馬鹿者揃だといふ豫斷の下に於てのみ成立し得る論理ですが、小野君も矢張り我々日本人を『模倣追隨これ事とす』る他愛もない輩と罵倒されて居られます。之は從來の專制政治家が無用の思想取締を敢行する時などに必ず據り處とした慣用的堡壘ですが、之を小野君の様な少壯有爲の進歩的學者から聽くのは私の甚だ意外とする所でありました。

天主教會の勢力消長が公使交換と如何の因果關係にあるかは別に後段に再論します。孰れにしても、此の教會が將來我國に於て如何の勢力を有するに至るかは、歐洲に於ける教會俗權の由來に關する歷史的背景を參考として斷定すべきものだと思ひます。所謂教會俗權の本質や限界等につき細目の詳細なる研究を竭した上でなければ、動もすると上すべりのした皮相的な見解に陷る恐れがある様に思はれます。斯く考へまして私も之から大に勉強しやうと思ひますが、此等の點に就ても今後小野君の親切なる垂教を得ば非常の幸です。序ながら御願しておきます。

△　△　△

私は日本では、現在でも又將來でも(公使授受が開けたとしても)天主教會の盛行を毫も恐るべしとは考へませんから(否私はさほど盛になるべしとも思つては居ないのです)、之を國禁とせよなどゝは決して申しませぬ。私が小野君に向つて何故禁止論を唱へられぬかと詰問しましたのは、畢竟同君の論理の進め方に矛盾がなからうかを懸念したからです。夫れ程國家の禍根たるの恐大なりとせば速に之を禁ずべきである、使臣交換を差し止めたつて何にもならぬではありませんか。此間の議論の筋をどうして小野君は立てられるのでせう。尤も小野君は最後の論文に於て、禁ずるの理由がある位なら使節の交換を不可とするは勿論でないかといふ様に申されて居りますが、酒を飲んで悪いときまつたからとて酒屋の主人と交際してはいかぬ共申されますまい。小野君の頭の中には、酒屋の主人と交際する事は酒を

飲まねばならぬ必要を當然の結果として伴ふと云つた樣な、ぎごちない先入の見がこびり付いて居るのではありますまいか。斯ういふ考方の事實に於て誤なる事は私の先きの論文に於ても指摘した所ですが、少くとも觀念上だけでも、此の二つの論點を別々に考察されては如何でせう。氣を落ち付けて問題の冷靜な學術的闡明に其の銳敏なる頭腦を集中されん事を望ひます。

小野君自身は何と云はるゝか分らぬが、假りに同君の擧示せらるゝ前提が正しいとして、さて之から引き出さるべき最も顯著な結論は、天主教國禁論であるべき筈です。玆處まで來なければ論理は徹底しません。始めから是れだと仰やるのなら、私も其の積りで應酬しますが、此點に關する小野君の態度は十分はつきりして居ない樣ですから、私も今は之に觸れずに置きます。

猶ほ小野君の擧げらるゝ樣の前提から來る結論には、禁止論の外公使授受必要論もあり得ることは私の先きの論文にも詳しく述べましたが、此點に就て小野君は、基督教國には必要あらんも日本にはないと斷定されました。之は自ら使節交換の實際的必要如何といふ問題に繫りますから、後段に別に述べます。

△　△　△

冷靜に判斷して、小野君と私との見解の著しい相違は、主として使臣交換の法律上並に政治上の効果如何といふ點に在らうかと考へます。小野君は公使交換の直接必然の効果は、國家對等の團體としての天主教會の公認であるとなし、又其の立法權裁判權、監督任命權、徵稅權等の公式承認であると爲されます。成る程獨立國家と同じ樣な或種の待遇を認むることは事實です。けれども（一）獨立國家と同じい凡ゆる特權を完全に承認するのでないことと及び（二）法王廳側の言ひ分通りの特權を其儘無條件で通すものでもないことは、今日何人も疑はぬ所でありませう。別の言葉で申せば、法王廳が認容を受くる國家類似の特權には一定の限界があるのです。而して其の如何なるものなりやは、天主教會が歷史的に所謂既得權を有つて居る國に於けると否らざるものとに依り大體二樣の區別あることは、固より小野君の熟知せらるゝ所でありませう。從つて假りに日本が法王廳と一種の國際交通を開いたとしても、日本政府の彼に認めねばならぬ特權の何種のものなるやは、諄々しい說明をきくまでもない事だと思ひます。況んや更に之を限縮せんとせば條約に依て勝手に定め得べきに於てをや。條約締結に就ても、日本が一般歐洲諸國と異り如何に自由なる境遇に在るやを說くは、苟くも法王廳の事を云々する程の人に取つては無用の饒辯

であります。使臣交換の西洋諸國に於ける効果の解釋に就ても、私は不幸にして小野君に同ずることは出來ませんが、彼を以て直に我を推すのはいさゝか粗雜速斷の嫌がないでせうか。

併し孰れにしても、使臣交換は法王廳に國家類似の一地位を認むるものたることは疑を容れません。而して之は少くとも西洋に於ては使臣交換に由て始めて賦與せられたる資格ではなく、教會が歷史的に固有する所なのであることは特に注意を要すると思ひます。斯ういふ特別の地位を固守することは、多數の天主教徒を國民として有する諸國の屢々迷惑とした所でありますが、又他方には妙な行懸りから時として之等諸國が却つて之を希望したといふ來歷もあることを閑却してはなりません。法王の態度は驕慢だとは云ひますものゝ、今日彼を伊太利國の單純なる一市民たらしむべしと眞面目に論ずるものは殆んど無いではありませんか。又若し伊國政府が法王廳を國內の一宗教組合としてその完全なる支配權の下に置かうとしたら、列強は必ずや猛然起つて之に反對するでせう。斯んな議論立ては法王の事を論ずる程の者の夙うの昔に承知の事ですからいゝ加減に切り上げて置きませう。兎に角妙な行掛りで、法王廳はともかくも何れの國家にも屬せざる獨自超絕の一團體をなして居るのです。法理上之をどう說明するかは知りませんが、事實は極めて明白であります。而して實は斯んな者は本來無い方がいゝので從て之を無視するは固より各國家の勝手でありますが、若し何等かの實際的必要あつて是非とも之と交涉せねばならぬ場合が起つたとすれば、之に國家類似の或る地位を認めねばならぬのは已むを得ないではありませんか。法王廳は元來使臣交換の有無に拘らず斯う云ふ地位を固有して居る者なのです。

△　△　△

さうすると問題は、我が日本は昨今に至り新に法王廳と一種の國際的交通に入るの必要を發生せるのかといふに進んで參ります。日本には澤山の天主教徒も居ります。併し之は將來に於ても政治的に恐るべきものとは決して成らぬと信じまするので、本來ならば何も改めて法王廳に使臣を派遣せねばならぬ程の必要は（外の理由から多少あるとしても）差當りないと謂つてもいゝのです。然るに昨今に至つて急に斯んな問題の起つた所を以て觀ると、其の原因として何等か新事態の發生したものと觀ねばなりますまい。斯う云ふ立場から私には多分こゝだらうと思ふ狙い處はあります。

尤も此點に關し私はまだ當局の說明は聽いて居ませんから、之に就て兎角の批評は出來ませんが、世間のあゝだらうからだ

らうと揣摩する理由の中には隨分調子外れのものもある樣に思ひます。最も滑稽なのは、不和的態度を假粧せんとする魂膽に出づるとの說明でせうが、之は法王廳の國際的地位に全然盲目なる當推量に過ぎぬと思ひます。之に就ても小野君の反省を冀うておきます。又之は我國の外交政策中多年の懸案だつたと說く人もありますが其の眞僞は姑く別論として、單に從來の計劃の引續きとして之が昨今具體的問題となつたと觀る可らざるは具眼者の齊しく疑はぬ所でありませう。其外一方には歐米諸國の所爲に追隨するに過ぎぬと難ずる者があるかと思へば、他方には西洋諸國中法王廳と使臣を交換せるは四個國に過ぎぬなどゝ途方もないことを書いてるのも見受けます。使臣交換問題を論議する基礎的事實の初步の攻明すらが、今日我國の論壇に於てなほ甚だ不十分なのではないかと思はれてなりません。

西洋では、近頃まで法王廳を無視して居つたものまで急に公使を送るなど、俄に彼に秋波を寄せる態度に出でゝ居りますが、日本の今次の使臣公換開始の動機が全然その追隨模倣でないことは、略ぼ想像されます。之に就てもいふべき事はありますが問題外だから他日の論究に讓つて置きます。

私の見解では一つの重要なる理由は矢張り南洋諸島の統治問題に關係すると思ふのです。我國は南洋諸島の委任統治を引受くる事に因て、始めて日本臣民ならぬ多數の天主敎徒を其の支配下に有することゝなりました。委任の條件として島民の信仰は尊重せねばならず、而して彼等の信仰生活と我國の統治方針とを恒に一致せしむる爲には、少くとも日本人たる法敎師の常駐を便とするは申す迄もありません。併しこの事は我國の自由にはならぬのです。又日本內地に於けるが如く我國だけで相當に之を處置するの便宜もありません。そこで問題が起るのです。いづれにしても斯の如きが少くとも最近に起つた新事態の一つであることは疑を容れぬと思ふのです。

假りに之等の土民が外國人たる法敎師を中心として一團を成し我國の統治の妨害をしたとします。そんなものはドシ／＼抑えつけて會釋する所ある可らずといへば夫れ迄ですが、苟くも忍耐して多少の文化的成績を擧げやうとすれば、先づ法敎師を然るべく始末するの外はありません。此場合法敎師の國籍により其所屬本國の政府に訴へたらどうかとの考もありませうが、實は夫れでは更に埒が明かぬのです。之を埒明けやうとすれば、其の之を欲すると欲せざるとに拘らず、どうしても法王廳を相手に交涉するより外に解決の途はありません。若し夫れ更に一步を進め法敎師の任命を永遠に日本人に獨占せんとの希望に至つては、法王廳と特殊の國際的交涉に入らずしては到底達せ

らるゝの見込はないと信じます。斯う云ふ當面の必要をば所謂否認論者はどう片付ける積りなのでせうか。

南洋諸島の統治位は腕力でやつて退けろといふ論者とは、私は議論を鬪はすべき共通の基礎を有つて居りません。委任統治の文化的成績を專ら冀ふ人々に對つてのみ、私は私の公使交換是認論にも相當の理由あるを認められんことを要請します。小野君などは多分大義名分の爲めには道の小利益の如き顧みるに足らず、と主張せらるゝのでせうが、其の所謂大義名分が士毫針小棒大の幻覺に過ぎぬのではないかを疑ふのです。私は前々から申す通り使臣の交換を非常に強く主張するのではありません。小野君の憂うるが如き性質のものなら無論否認論に無條件の贊成を表します。けれども私は之を事實の誤認に基く一幻覺に過ぎぬと信じて居りますから、少しでも便益あるものならやつたら宜からうと云ふ結論を主張する譯なのです。使臣交換に依て失ふ所は十壹萬數千圓の外何の實害もないといふ考は今以て少しも變つては居りません。

私の立論の本旨は、小野君憂ふる所の如き重大なる事態にも拘らず使臣の交換は之を敢行せざる可らざる緊急の必要ありと强說するに在るのではなく、却て私の說く樣な公使派遣の僅微な論據をだに覆す丈けの否認的理由は實在しないと云ふことを明白にしたいのです。使臣交換の積極的理由に關することの上の論議を敢て避けはしませんが、先決問題は寧ろ小野君の事實の觀察と論理の進め方に關する私の疑問が如何疎明せらるゝかに在るのです。而して私がこの點を斯くも諄々しく追究する所以は、法王廳と天主教會との內外兩面の地位が餘りに誤解されて居た樣であり、又斯かる誤解は若干の意味に於て我國外交の實際方針を累する虞あるべしと考へたからであります。幻想的大義名分論に拘泥して時務を誤らんとせる例は、過般の對チタ政廳會議の問題でも繰り返し經驗しました。火事と見て驅け付けた蒸汽喞筒が、現場の郡部に在るを見て空しく引き返したといつた樣な醜態を私共は此上演じたくはないと思ふのです。大義名分論で空疎な境界線を作つても、火は市部と郡部との境界もなく自由に飛んで行きます。在來の法理的概念から法王廳を如何觀べきかの形式論は、何處の國家の支配にも屬せざる彼の事實上の特殊地位に一毫の增減も爲し得ないではありませんか。この事實に基いて刻々の問題をどう取扱ふべきかは、蓋し政界活機の存する所膠柱の見を以て淺薄なる斷定を許さぬ問題であると思ふのであります。

終りにヴアチカンを重要な一外交中心點と觀るは宮廷外交時代の考だといふ小野君の說について一言しておきます。宮廷單

獨の力で國民を動かすことの出來なくなつた今日ですから、所謂宮廷外交を陳腐呼ばゝりするは一應聞えますけれども、法王の場合は、之等の通例と異り彼の一言に世界民衆の幾割かを現實に動かす力があるのです。だから怖しいと小野君も云つて居るではありませんか。然らば天主教民の向背に無關心で居れない國々が、ヴアチカンの一擧一動を雲烟過眼し得ないのは固より當然でありませう。學者の議論は一々事實を透視して周匝たるを要します。通り一片の通俗的標語に輕々しく附和雷同してはいけません。小野君程の明徹の士にこんな理窟は分らぬ筈はありませんから、世人は或は小野君立論の眞の動機を以て、偏狹なる感情の滿足に在りと爲す者なしとも限りません。も少し冷靜に御考へにならないと飛んだ誤解を招かれはしないかと懸念されます。

呉々も申添えて置きます。私は公使派遣を非常に強く主張するものではありません。たゞ之を否とする議論の根據には誤解と幻覺との外格別のものもなささうな氣が致しますので、使臣を交換して若干の便益ありとせば何も躊躇する必要もなからうと云ふまでの事です。どうか此邊の理窟をよく御考へ下さい。後から思ひつかれた理窟でもようございますが、何なり私のこの考を覆す様な新論據が提出されますなら、何時でも間違と分つた見解は改めませう。私は如何にせば自分の立場を正しいと人々に印象せしめ得べきやを念頭において議論する様な考は毫頭ありません。何處までも眞理の闡明に忠實ならんとする態度を失はずいつでも喜んで反對側論者の垂敎に傾聽したいと思ひます。(一月十二日識)

小題小言

◎羅馬法皇廳使節交換問題に就ては別項の一論文に於ても可なり詳細に論じたが、近頃更に佛教徒諸氏の間に起つた反對運動の主張を見るに、本問題の純政治的事項たる所以を十分理解して居ない者が多い様だ。中外日報に現れた石川舜台といふ人の說には、佛教側の管長がやつと勅任待遇を與へられて居るに過ぎぬのに天主教の代表者が國家元首と同列の榮位を與へらるゝのは不公平だとか、我々よりも劣等な西洋の法敎師が我々の上に傲然と座はるのは心外に堪へぬといふ様な言葉があつたが、元老株の石川師の如き人の口より斯うした意見を吐かれては流石の佛教界もさぞ迷惑の事だらうと察せらるゝ。感情論は別と

して多少筋立つた反對意見と觀るべきものには二つある樣だ。一つは使臣交換の結果天主教會にのみ特別の保護を與ふるは不公平だといふ說で、他は天主教會の如き排他的唯我獨尊的宗教團體を公然の賓客として待つは怪しからぬといふ說である。併し乍ら思へ。使臣交換は何故に直に特別の保護を意味すと解せねばならぬのか。金持と交際したからとて金を貰ふとは限らない。權門に出入する事を得意がるやうなさもしい心を持つて居る者に非る限り、他人が世俗的にどんな待遇を受け樣が構はぬではないか。況んや使臣交換は毫も天主教會を特遇するの意に出づるのに非るをや。若し夫れ天主教會の排他的性質を理由として之と交際す可らずといふは、押し詰めれば民主國たる米佛諸國とも交通を絕てといふ議論になる。必要ありて米佛諸國と國交を締して差支なくんば、同じく法王廳と國交を開いて必要なる國務を捌いたとてそこに何の妨げがあらう。

要は法王廳と新に國交を開くの必要ありや否やに歸する。その所謂必要は純粹に政治問題だ。而して何等かの必要ありて國交を開く以上、相手方を待つに國家同等の禮を以てするは致し方がない。法王廳そのものが本來國家同等の獨立團體だからである。日本の政府が特に偏頗の取扱をして特別の優遇を與ふるのではない。尤も宗教團體は何處までも國內の一組合として國權の支配下に置くべしとの說には一理ある。從て天主教會に限り我國は西洋諸國の如く國家並に之を取扱ふを欲せずといふ主張も正しいと思ふ。たゞ此の理論を飽くまで徹さうとすれば法王廳と直接交渉を開いて問題の疏通をはかる途は全然ない。彼と直接交渉すべき格別の難問もなかつた時代は之でもよいが、新に何かさうした問題が起つたとすれば、嫌でも應でも使臣交換といふことにならなければならぬではないか。茲に純政治問題たるの性質が存するのである。而して之に依て天主教會の景氣が一寸よくなる樣に考ふるのは實は俗人の淺見に過ぎぬ。法王の代表者が堂々と外交團の一員として貴紳の間に往來したとて、天主教そのものゝ宗教的勢力には何の加ふる所もあるまい。米國大使が宮廷政府から格別の尊敬を表されたとて、我々は米國民主々義の我國に於ける流行を少しも心配しないではないか。

本問題を現實の必要の有無といふ純政治的見地から議論するのなら多少傾聽するの價値もあるが、今までの樣の騷ぎ方では、花柳病豫防といふ公共的口實の下に醜業者が廢娼論に對抗せんとすると一般、偏狹なる一利己的運動としか受取れない。


カルピス
あたゝかい
滋強飲料
顧問 三宅驥一理學博士
販賣所 酒店・食料品店・藥店
製造元 ラクトー株式會社



一等國

田中純

いよ〳〵鎌倉ときまると、進一はほつと、安堵に似たものを覺へた。

さうだ。何をぐず〳〵、二晩も三晩も、考へたりなぞしてたんだらう。さう思ふと、この頃、あてもなく、溫泉案內や旅行案內をくりひろげて、自分の決まらない心にいら〳〵してたことが、ひどく莫迦げて感じられた。

が、實は、初め、進一は、もつと遠い旅をもくろんでゐたのである。父親が生きて居る間に、一度、洋行もして置きたい、とは、素より彼の長い間の心願ではあつたが、洋行は一寸駄目にしても、せめて、この夏のひま時に、北海道か九州あたりまででも出かけて見たいと、もう去年の秋頃から考へてゐたのだ。それが、さて、夏になつて見ると、さうにもしてゐられない事情が、つぎ〳〵に起つて來てゐた。その一つは、梅雨明け頃から起つた父親のリウマチスの再發で、今一つは、彼の緣談が、漸くまとまりかけたことだつた。

「何うした。行く先はもうきまつたかね」

もとの病室で、今、進一の書齋になつてゐる部屋に、ノックもなく入つて來た父親が、いやににや／＼して訊くのだ。

「ええ。だけど、僕、もう止さうかと思つてます」

その冷かすやうなにや／＼笑ひが、一寸癪にも障つて、進一は、多少むかつぱらで答へた。

「何を。旅行をかい？」

「ええ」

「行つて來たら好いぢやないか。折角思ひ立つたものだから。なに、家の方は大丈夫だよ。診察はもう俺が出來るし、それに今は患者も少いしするから、大丈夫。二三日でも好い、行つて來るが好いぢやないか」

「さうですね。ぢやあ、二三日、何處かで息抜きして來ますかな」

「うむ、それこそ、海へなりと山へなりと。そのうち、呑氣な一人旅なんぞ出來なくなるからな」

さう言はれて見ると、進一は、今の時が惜しい氣もした。今のうちに、思ひきり、若者らしい樂しみを樂しんで置きたいやうな氣持が、何時になくむら／＼と起つて來た。

「ぢやあ、鎌倉にしませうか」

「鎌倉？　うむ、好いぢやらう。あそこなら、ホテルとも顏なじみだし、第一、箱根なんかより書生らしくて好い」

「では、さうします。ホテルで二三日遊んで來ます」

一人になつた時、進一の心には、もう、長い旅のもくろみなど、跡型もなくなつてゐた。それは、隨分長い間の夢想ではあつたが、結局夢想家である進一に取つて、夢想以上のものではなかつたのだ。實際、旅慣れない彼に取つては、一人旅の樂しさを思ふことは、同時に、その辛さを思ふことだつた。而も、その辛さを思ふことによつて、わけもなく

毀される彼の夢想でもあつたのだ。だから、今、いよ〳〵鎌介ときまつて、例の長旅の計畫を、別にきまり悪い思ひをしなくて來て得た時、彼はわれにもなく、ほつとしないではゐられなかつたのだ。

「うむ、鎌倉ならばね、以前、父と一緒に度々ホテルに泊つたこともあるし、海水浴も出來るし、テニスをやつても好いし……………」

彼は、飴色のカアテンにさす烈しい光りを、兩手で、目の前に遮りながら、なが〳〵と寢そべつた長椅子の上で、また、とりとめのない空想に耽りはじめた。

翌日の土曜日は、彼の診察日に當つてゐた。その日は恰度、父親が、もう長い間つとめてゐる或る高貴な家の、一週一度の御用勤めの日に當つてゐたので、午前中は駄目だつたが、午後、父がお勤めから歸つて來ると、診察を父親に讓つて、彼は鎌倉に出かけた。

「そのうち、俺も出かけやうかと思つてるからね、支配人にさう言つといて吳れ。もうしばらく行かないから、あの支配人も代つてるかも知れないが」

診察室の前で別れる時、父親がそんなふうに言つた。

「ええ、さう言つときませう」

玄關からすぐ、今、父親が乘つて歸つたばかりの俥に乘つた。書生や看護婦たちが、玄關に立つてゐた。

「ぢやあ、行つて來るから」

俥が動き出すと、彼は、久しぶりだと云ふ氣がした。鎌倉にさへも、もう三四年ぶりだつた。

「これが獨身時代の最後だな」

さう思ふと、あの、少年時代靑年時代の夢をはぐくんだ土地に、三日でも四日でも過すことが、全然無意味でもない氣がした。それに、これまでは何時も、父親のお供ばかりしてゐた自分が、今、一人前の紳士として出かけるのだと云ふことが、彼の子供らしい自尊心に媚びもした。

ホテルに着いたのは、まだ日盛りだつた。旱魃の噂が、ちらほらと人の口に上るほどの暑さが、路上に、熱氣の渦を卷いてゐた。ホテルは、珍らしい混み方だつた。

「何うも、かう云ふ季節のことでございますから、前々から御申し込みがございませんと………」

彼が帳場へ近づくと、そこに立つてゐたボーイの一人が、もうそんなことを言ひかけたが、恰度通りかゝつたボーイ長が、見知りごしの彼を見つけると、すぐ、腕を取るやうにして、彼を案内してくれた。

「恰度好いところでございました。これが、今一汽車おくれますと、もう何うにも御都合が出來ないのでございましたが」

ボーイ長は、その廣い肩を、氣取つた調子で左右に振りながら、暗い長い廊下を、先に立つて步いて行つた。

「隨分こんでると見へるな」

「へえ、なにしろ、このお暑さでございますからな」

案内された部屋は、二階の奥の、一番はづれになつてゐた。何處か荒廢の跡の見へるやうな、あまり狹くはない部屋だつた。

「何うも、まことに具合の悪い部屋で、平常は使はないことにしとるのでございますが、なにしろ、只今空いてるのはこの部屋だけでございますので」

西日をまともに受ける窓の日除けを、ギイ〱とゼンマイ仕掛けでおろしながら、ボーイ長が言つてゐた。

「いや、これで結構だよ。ほんの二三日なんだから」

上衣を脱ると、進一は、買ひこんで來たハバナに火をつけながら、ひどく紳士になつたやうな氣持で答へた。

「明日の晩あたりになりますと、これで、幾らかお發ちになる方もあるだらうと思ひますが」

漸く日除をおろしてしまうと、ボーイ長は、彼の方へ近づいて來たが、入浴のこと、ティーのことなど、さしむきの用件を聞き訊すと、何故だか、

「相済みません」と言つて、すぐ、廊下の外に出て行つた。

夕食を濟ませると、進一は、海岸の方へ降りて行つた。平常酒を嗜まない彼は、久しぶりに飲んだ、食卓の一ぱいのコクテルで、すつかり快くなつてゐた。しつとりと、露を帶びた芝生にも、手を觸れて見たいやうな氣持だつた。芝生を渉ると、彼は、左手の丘の方から、海岸へ降りて行つたが、その間、そこにもこゝにも、今夜のダンスを待つてゐるらしい幾組かの男女の姿が、薄闇の中に、白く浮いてゐた。

はづれの露臺まで出ると、間近な下の砂濱に、海濱博覽會のさはめきが見渡された。湖風にばた〱と、赤い旗などをはためかした幾つかのテントの間を、無數の人の肩が、流れたり淀んだりしてゐるのが、はだかの明るい電燈で、は

つきり照し出されてゐた。小屋がけの餘興の鐘太皷の音まで、はつきりと聞き取れた。

「相變らず、大變だな」

進一は、この避暑地の莫迦げたほどな賑ひを眺めながら、しばらくぼんやり立つてゐた。今はもうみな電燈になつてゐるが、その昔、アセチリン燈であつた頃の、瓦斯の甘酸つぱい臭ひが、今も、彼の鼻に感ぜられる氣がした。彼が、何となく渇くやうな戀心で、そのくせ何と云ふ目的もなく、さうした人ごみを歩き廻つた頃のことなどが、遠い昔のことのやうに思ひ出された。

もう土用に入つてゐたが、海はまだ、星を映すほどに、しつとりと靜まりかへつてゐる。

「好いな」

進一は、口の中で呟いて、くるりと向き返ると、恰度、兵式體操のやうな格好で、大股に、コンクリイトの上をづしり／＼と歩き出したが、しばらくすると、何か朗詠でもするやうに、間のびたセンチメンタルな聲で　口づさみ始めた。

「星月夜、鎌倉山の………」

が、もと／＼、記憶力のあまり強くない彼は、すぐ行きつまつてしまつた。

「何だつたつけな。この句は？」

彼は、すばらしい名文句を思ひ出したやうに思つた。

「蝸牛の何かにあつたのかな」

彼は、そばのベンチに腰をおろしたが、ふと、思ひがけないことを思ひついた。

「原、原、原のセリフだよ。白鳥座の時のセリフだよ」

彼は、ぷつと輕く笑ひを噴き出した。鎌倉には今、原がゐるんぢやないか。――彼は、今迄それをすつかり忘れてゐたことが不思議だつた。そして、今夜にも一つ會つて見やうかと思ひ始めた。

それは、今から恰度六七年前、まだ原や進一が、高等學校から大學へ移つたばかりの頃だつたが、何時の間にか、彼等の間に、小さいグループが出來上つたことがある。初めは、別にこれと云ふ目的があつて集つたのではなかつたが、たゞその中の二三の者が、特に文學や芝居が好きだつたと云ふために、自からさうした色彩を帶びるやうにもなつたのだつた。が、それには、その當時、文壇一方の重鎭として、しつきりなく飜譯や創作を發表してゐた林鴎水の影響を、輕く見るわけには行かない。實際、一方に古くからの醫學博士として、醫界に重要な位置を占めながら、而も他方文壇に於て、殆んど何人も及ばない業蹟を殘しつゝあつた彼は、ともすればたゞ一介の一醫商に終るべく運命づけられやうとする彼等醫學生たちに取つて、どれほど大きい刺戟だつたか知れない。彼等は、寄ると觸ると、さうした方面の噂をした。そして、いよ〳〵その熱が嵩じた時、新進作家の門川などとも語らつて興したのが、彼等の白鳥座だつたのである。進一は、初めから、その仲間の一人だつた。もと〳〵、あまり文學などに趣味は持たなかつたのだが、祖父の代からの眼科醫を、厭でも父から受け嗣がなければならない彼として、その心持の張りのなさから、自然に、かうした仲間を求めることにもなつたのだつた。だから、白鳥座が興つた時、父から多少の資金をねだり取るぐらゐなことはしたけれども、彼自身、舞臺に立つやうなことは決してなかつた。事實、立たうとしたつて、さうした能力が全然自分にないことを、彼はよく知つてゐた。彼が爲したことゝ云へば、ゴーソン・クレイグあたりからの暗示で、簡單な舞臺のプランを立てたくらゐに過ぎなかつた。が、そこへ行くと、原は、何と云つても、この一座の立役者だつた。眉目秀麗とま

では行かなくても、相當な美男で、少しばかりその氣取りがあつて、格幅がよくて、それに、何よりも、楚に深刻味のある皺涸れ聲で、その上に、頭もからだも器用な、秀才肌の彼は、公演の度に、何時も難役を買つては出てゐたが、妙に玄人筋の評判がよかつた。一座は、有樂座の三回の公演でつぶれてしまつた。もと／＼お坊ちやまたちのお道樂と見られても仕方のない企てであつたのだから、入りはなし、かかりは多いし、かうした運命は初めから解つてゐたのだが、それでも、三回まで續け得られたのは、殆んど原一人の力だと言つてよかつた。實際、誰もが、彼の藝を惜んだし、彼のために、可なりな總見さへ出來たほどだつた。

「君の方の原と云ふ人、あの人はうまかつたですなア。今、何うしてゐます?」

今でも、その當時學生だつた人たちから、よくさう訊かれるのである。

「うむ。原の奴に會つて見よう」

さう思ふと、進一は、ベンチから立ち上つたが、時計を出して、もう九時を廻つてることを確めると、すた／＼と松林の小徑の方へ歩き出した。

何時の間にか、正面のダンス場の方に、浮き立つやうなジヤツヅが、響いてゐた。

「オイ、井上」

さう言つて、進一が呼び止められたのは、彼が芝生から上つて、明るいダンス場の片隅を、サルウンの方へ通り拔けやうとした時だつた。

「やあ」

思ひがけなく、そこに、原文雄が、頭に鮮かな櫛目を入れて立つてゐた。

「何時來たんだ」

「うむ。今日、先刻」

「ホテル？」

「うむ。實は今、これから、君のところを訪ねて見やうかと思つてたんだ」

「さうか。それは、會つて、恰度よかつた」

「御機嫌よう」

そこへ、原の妻君が、何處からか立つて來てゐた。

「やあ、何うも、しばらく」

早くから原と戀仲で、彼の學生時分から同棲してゐた彼女は、自分から買つて、白鳥座の端役をつとめたものだつたが、その小柄な、丸ぽちやの、くり／＼眼の、西洋人形のやうな柄が、飜譯劇の小間使ひにでもなると、すつかり柄にはまるのだつた。だから、原も、それを好いことにして、家では「ナターシヤ」などと彼女を呼んでゐたものだつたが、今、さうした面影は何處にもなかつた。それは、何う見ても、ゆつたりと落ち着いた、貴婦人だつた。

「兎に角、僕たちのテイブルへ坐らないか。こゝに立つててもなんだから」

原が、一寸、氣忙しさうに促した。見ると、あまり廣くない舞踏場は、踊り手でぎつしりとつまつてゐた。酒場のボーイ服とも見られる夏のタキシイドも二三あつたが、男は大抵、白の背廣だつた。が、女の方は、紫紅とり／＼で、肩

も露はなデコルテ風のものもあれば、白い瀟洒な洋裝もあれば、帶の胸高な和服もあつた。それらが一組づゝ、急調な樂音に乘つて、小さく揺れながら、大きな緩い渦卷きを作つてゐる。その渦卷きが、やゝもすると、進一等の立つてゐる入口のところまで、流れて來るのだ。

「ゐらつしやいましな」

妻君も、それをはゞかるやうに言つて、彼等の小卓の方へ行つた。

彼等の席は、すぐそばの、入口に近い一隅にあつた。

「何うも、君、盛んなもんだね」

席につくと、進一は、心から驚いたやうに言つた。

「うむ。尤も、こゝは夏場だけなんだがね」

原が、田舍者でも扱ふやうに、氣取つた調子で應じた。

「君たちも踊るのかい？」

彼は、妻君の方へも目をやつて言つた。

「うむ。ちよい〳〵來るには來るんだがね」

原が答へるのを、妻君が引き取るやうに、

「井上さんは、遊ばしませんの？」

「いや、僕なんか、見るのも今日が始めてなんです」

進一は、ちよつと顏を赧めて答へた。が、それは、本統は、嘘だつた。二三年前、まだ彼が大學を出て、父を手傳ひ

始めたばかりの頃、恰度、アイリスのダンスか何かある晩に、或る患家から、帝國ホテルの食堂に招かれたことがある。食事が済むと、彼は、ダンス場の方に招じられたが、間もなく、そのむつとするやうな晴れがましさに堪へ切れなくて、逃げ出して來たことを、彼は今思ひ出してゐた。

「しかし、ダンスもなか〳〵悪くないもんだぜ」

「うむ、さうだらうね。愉快なもんだらうね」

「なにしろ、鎌倉ぢやあね、ほかに刺戟はないし、ダンスでもしなくちあ」

恰度その時、ボウルでは拍手が盛んに起つてゐた。もう何度目かのアンコールらしく、樂座のマニラ人たちは、彼等に特有な變に愛嬌のある笑顔で、にや〳〵と迷惑さうに見下してゐたが、人々の復座する樣子もないのを見ると、また思ひ切つたやうに賑かな音を立て始めた。

「あなた、踊りませうか」

先刻から、じり〳〵してゐたらしい妻君が、原の二の腕を掴むやうにして促した。

「あゝ、踊らう」

言ひながら、原も立ち上つたが、

「ぢやあ、一寸、失敬」

進一に輕く會釋すると、二人で抱き合つて、靜かに渦卷きの中へ吸ひ取られて行つた。

しばらく、進一は、ぼんやりと眺めてゐた。眺めてゐるうちに、何故だか、或る雪降りの感じが彼の頭に上つて來た。一つ一つの雪片が、くる〳〵と小さく渦を卷きながら、互にぶつかりもしないで、靜かに地の上に吸ひ取られる。さう

した心持が、しきりに思ひ出されるのだ、か、見て居るうちに、一組一組がそれぐに違つたかたちで踊つて居ることなども、次第に、彼の目について來た。それに、不思議にも、誰も彼も、恐ろしく生眞面目な顔をして踊つてゐた。

一踊り濟むと、妻君だけがにこくしながら、席に歸つて來た。

「うまいんですね、あなた方は」

進一は、お世辭でなくさう言つた。踊りのことなど、彼にはまるで解らなかつたが、彼等の靜かな上品な踊りつぷりは、兎に角、群を拔いてるやうに思へた。

「いえ、まだ始めたばつかりで、駄目なんでございますよ」

そこへ原が歸つて來たが、いきなり、

「おい、田川がゐるよ」と言つた。

「田川？　何處にゐるんだ」

「うん、あそこに。今、こつちへ來るだらう。僕たちが踊つてるとね、奴、にやく笑ひながら見てやがる」

「先生も踊るのかい？」

「うむ。なかく盛んらしいぜ。なにしろ、先生も今ぢやあすつかり賣れつ子になつたからね」

間もなく、向ふの鉢植ゑの棕葉の蔭から、田川の青白い顔がこちらに近づいて來た。

「やあ、しばらく。珍らしいね」

彼の出世を思はせる、何處か大様な調子で挨拶したが、すぐ席につくと、ぷつと金口の煙を吹き出して、

「奥さん、すばらしく巧くなりましたね」と言つた。

「駄目ですよ。ちつともお稽古しないんですから」

「いや、なか〱。僕んとこの連れの女なんか、みんな、何處の奥さんだつて聞いてましたよ」

「誰だい、あの連中」すぐ、原が聞きとがめた。「あれかい、新橋の女つてのは」

「うむ、まあ、そんなところだね」

田川が、にや〱して答へた。

「なか〱綺麗ぢやないか。一寸、藝者とは思へないね」

「どなたのこと？」

隠語の解らないらしい妻君は、これが癖の、原の二の腕をギユツと掴んで訊いた。

「なに、例の田川の女の話だよ。そこに來てるんだよ」

「あら、何處に？　どの人？」

進一も、妻君と一緒に、その女を見定めやうとしたが、恰度、檜葉の蔭になつてゐて、見へなかつた。

「兎に角、當時いよ〱お盛んらしいね」

原が、冷かすやうに言つた。

「いや、何うも、浮名もうけばかりでね。つまらないよ」

「誰だい。あの、君たちのテイブルのもう一人の男は？」

「あれが君、西山厚さ。例の西山家の養子の」

「女は？」

「影さ」

「やつぱり新橋かい？」

「うむ。ところがね」田川は、顔をちか〴〵と寄せて、聲をひそめて言つた。「先生の妻君が、今日、變な男と一緒に、ホテルに來てたんだよ」

「へえ、何うして」

原が、促すやうに聞いた。

「なに、先生はね、今、箱根に行つてる人になつてるんだ。だから、妻君、安心して男と一緒に出かけて來たらしいんだがね、先生がゐるもんだから、ティー・ダンスを濟すと二人で東京へ歸つて行つちやつたよ」

「まあ」

「男影女影がぶつかつたわけだね」

「うむ。しかし、まあ、影の集會所みたいなところだからね」

「影つてなに？」

今度は、田川の二の腕をギュッと摑んで、妻君が訊いた。

「影？　影はシヤドウ」

田川が澄して答へた。

「シヤドウが何うしたの？」

「影の形にそう如く…………」

「つまり、情婦(ミストレス)さ」

その時またバンドが起(おこ)つた。サキスホーンを入れた、ゆるいメロディーのワルツだつた。

「奥さん、お願ひしませうか」

立ち上つた田川が、一寸ネクタイに手を當てて、小腰をかゞめて言つた。

「え、何うぞ」

二人はまた、くる〱と舞ひながら、渦巻きの中へ消へて行つた。

「何うだい、近頃、商賣の方は」

二人きりになると、原がすぐ、話しをそつちに持つて行かうとした。

「駄目だよ。相變らず親爺(おやぢ)の脛(すね)をかぢつてるやうなものだからね」

「しかし、呑氣で好いぢやないか」

「いや、駄目だよ。ちつとも面白味がなくつて」

「いや、好いさ。さうして呑氣に遊んでるうちに、親が金を蓄(た)めといて呉れるんだから」

進一は、ちよつと、無い腹をさぐられるやうな、それで、圖星(づぼし)をさゝれたやうな、變に厭(いや)な氣がしたが、それを口に出すことは出來なかつた。

「しかし、君の方はうまく行つてるんだらう?」

「うむ、近頃まあ多少面白くなつて來たんだがね」

「院長が洋行してるんだつたね」

「あゝ。だから、今は僕一人さ。しかし、一人でやつてると、隨分うるさいよ。なにしろ、かう云ふ小さい町だし、患者がみんな別莊住ひの連中だからね。うつかり踊りにも來られないのさ。あんまり繁々來るとね、あの御醫者さん、踊りにばかり行つてると云ふことになるしね。それに、貴婦人連中にはみな變な僻みがあつてね。一晩に、一人の奥さんと二度も踊らうものなら、忽ち、お互ひに變な噂の立てつこをするんだからね」

「お惚氣かい？」

進一は、柄にもなく下等な半疊が口を衝いて出たのではつとしたが、原は平氣で言ひ續けた。

「いや、さうなんだよ。あゝ云ふブルジョアは、殊に醫者なんかに對すると、實に變な心理を持つてるからね」

「さうかね、そんなものかね」

「そりやあ、君なんか眼科だからそんなこともないのだらうが、僕のとこなんか、殆んど皆呼吸器病だからね。それだけに變にうるさいんだよ」

「つまり、生命の問題に近くゐればゐるほど、醫者と患者との關係が變にセンシチヴになるのかも知れないな」

「それもあるさ。しかし、大體、かう云ふところの人間達は、我儘なんだよ。病的に我儘なんだよ」

原は、だん〳〵雄辯になつて來るやうだつた。何かしら、抑へに抑へて來たものに、今、その捌け口を與へてゐるやうにも見へた。

「例へばね、内科のちよつとしたことで皮下注射でもするやうなことがあるだらう。するとね、内科の醫者では痛いからつてんでね、わざ〳〵東京から外科醫を呼ぶんだよ。而もさうして、小さい事を大袈裟にして、醫者に手數をかければかけるほど、ます〳〵得意になつてるんだからね」

「仕末におへないね」

恰度そこへ給仕女が通りかゝつたので、原は二三の飲みものを注文したが、すぐまた笑ひながら、言ひ出した。

「そりやあね、君、二日でも三日でも、こんなところへ來て見てゐたまへ、隨分滑稽なことがあるぜ。この頃の貴婦人の心理狀態なんて、何處まで病的だか底が知れないからね。ね、あそこに一人、若い毛唐が踊つてるだらう。そら、髮の黑い、ちよつと好い男で、麻の葉模樣の帶をしめた奧さんと踊つてる奴が」

「うむ」

進一は、その男を、もう古く見た憶へがある氣がしたが、思ひ出せなかつた。

「あの男がね、君、近頃、貴婦人達に大騷ぎされてるんだよ」

「日本の奧さんがかい？」

「無論」

進一は、何か知ら、心臟をギユツと摑まれたやうな氣がしたが、默つてゐた。

「毛唐同志ではね、流石にあんな男を對手にする女もないんだがね。なに、横濱のちよつとした商館の小僧上りなんだ。隨分古くから日本にゐるんだが、そいつを、こないだ、或る有名な實業家の妻君がちよいと騷ぎ始めたんだよ。するとね、また、物好きな妻君があつてね、あの人があんなに騷いでる男ならちよつと取つてやれと云ふ氣になつてね、これがまた騷ぎ始めたんだ。さうなるとね、女と云ふものは實に變な動物だからね、急にみんながマイヤアさんマイヤアさんで騷ぎ始めてね、當時、まるで引つ張り凧さ」

さう言つて、原は、輕く笑つた。

「へえ、そんなことがあるかね」
進一も誘ひこまれて、思はず苦笑したが、彼の初心な心は苦り切つてゐた。それは、何うにも說明の出來ない苦い感情だつた。
「見給へ」原は、しかし、また冴へ冴へした顏に歸つて言ひ續けた。「あの、今一緖に踊つてる女ね、あれが、その、先瓶をつけた女なんだがね、この次ぎには屹度、この先生と踊るから」
原は、その靑白い美しい鼻を突き出して、恰度、彼等の前を踊り過ぎて行つた一人の小柄な女を指した。どてどての化粧ではあつたが、その四十に近いことは、隱せてゐなかつた。
「これがその敵手だね」
「うむ」
「おしろいの化物みたいぢやないか」
その聲が餘り高かつたので、原は、ちよつと、手で制するやうにしたが、すぐ、得意さうな顏になつて、
「何うだい、珍な光景だらう」
「うむ、珍は珍だが、しかし………」彼は、何か、得體の知れない不快な氣持が、むかむかとこみ上げて來る氣がしたが、それは口に出さないで「しかし、さう云ふ妻君たちの亭主は何うしてるんだい。知つてるのかい？」
「知つてるだらうさ。ちよいちよい一緖にホテルにも來るんだし」
「しかし、知つてて默つてるとすれば………」
「いや。かう云ふ社會では、それが開けてるとでも言ふんだらうが、そんなこと、割りに平氣なんだよ。なに、亭主は

享主で、三人も四人も、妾だのなんだの持つてるんだから、その點、まア同罪だからね。それに、かう云ふ富豪の間ではね、お互ひの家と家との經濟關係が變に入り組んでるからね、ちよつと離婚が困難だと云ふ事情もあるんだ」
「しかし、それにしても………」
恰度その時、バンドがぱたりと止んで、人々がどや〳〵と席に歸つて來た。幾度も幾度ものアンコールで、流石にみんな疲れてゐるやうではあつたが、誰も彼も嬉々としてゐた。滿場に興が乘り切つてゐることが、進一の素人眼にも察しられた。
「や、何うも有難うございました」
妻君を送つて來た田川が、流れるやうな汗を拭きながら、これだけは他人行儀に、慇懃な挨拶をした。
「いえ、私こそ」
妻君も、やけに扇を使ひながら、輕く頭をさげたが、すぐ、原の方へ向いて、
「ねえ、あなた、明日、陵川月洲がこゝへ踊りに來るんですつてさ」
「さうかい？」
原も、ひどく興味をそゝられたやうに、田川に訊き返した。
「うむ。僕のところへはさう言つて來てるんだがね。多分來るだらう」
「へえ、それは愉快だね。兎に角、世界的名優の本場仕込みのダンスだからね」
「うむ、そいつア見物だね」
進一も、それには、膝を乘り出さないではゐられなかつた。實際、陵川月洲と云へば、その頃の日本での最大の人氣

者だつた。房州の僻村に生れた一介の青年が、アメリカに渡つて十年。今、世界的な活動役者として故國に歸つて來たのだ。それは、彼の演じた最初の出世役が、同胞を侮辱するやうな役柄であつたと云ふことで、或る人たちから國賊呼はりはされてゐたけれども、そして、進一自身、それを不快に思はないではなかつたが、しかし、兎に角、彼が、世界的な唯一人の日本人になつて吳れたと云ふことが、進一は勿論、誰にも、有難いことに思へてゐるのだつた。

「君、ぢやあ、月洲を知つてるんだね」

進一は、田川が急にえらくなつたやうな氣がして訊いた。

「あツ、ぢやあ、君、こないだの新聞を讀まなかつたんだね」と、原が、意外だと云ふ顏つきで言つた。「君、田川は今度、月洲の作者として一緒にアメリカに行くことになつてるんだよ」

「へえ、そいつア」

進一は、二の句がつげない氣がした。怠け者で、貧乏で、氣の弱かつた以前の彼を知つてゐるだけに、さうした異常な出世が信じられない氣がした。

「うん、別に、月洲の座附きと云ふのでもないんだがね、誘はれたのを好い機に、ちよつと勉強して來やうかと思つてるんだ。なに、ヤンキイなんか、甘いもんだからね」

田川は、こゝにも「世界的」がゐるぞと云つたやうな顏をして言つた。

「で、いよ〳〵何時お發ちになりますの」と、妻君が訊いた。

「さあ。最初に演るものだけはこつちで書いて行かうと思つてますからね、多分、この秋になるだらうと思ふんです。都合によつて、陸川君夫婦だけ、先に發つて貰ふかと思つてるんです」

「へえ、そりやあ素的だね」

進一は、青白い田川の顔を見つめながら、さう言つて感嘆したが、自分の言葉の子供つぽいのに氣がつくと、思はず顏が赧らんで來るのだつた。

たうとうその晩、ボウルが果てるまで、進一は小卓に就いてゐた。人々は幾度か、立つては踊り、立つては踊りした。そして、その度に、割れるやうな拍手が起つた。

「ワンステップ、暑いわねえ」

席に歸つて來た妻君は、何時の間にか、帶の下から滲み出すほど汗だくになつてゐたが、それでも、申し込む男、申し込む男を對手にして、しつきりなく踊り續けた。

「おい、君のその新橋の先生を僕に紹介したまへ」

「あゝ、踊つてやつて吳れ給へ。まだ、拙いんだよ」

さう言つて、原が、田川の席へ立つて行つたりした。

進一は、たゞ、ぼんやり坐つて眺めてゐるだけだつたが、それでも、席を立つ氣はしなかつた。自分にも踊れさうな氣が、次第にして來もするのだ。

「ね、あの人、あんなのが本統に上手なんですよ」たまに休んでゐる時など、妻君が、そんな風に言つて說明して吳れた。「大きいステップで、すツすツと、靜かに樂しさうに踊つてるでせう。あんなのが、本統に上品な踊りつて言ふの

ね。あの、からだを小さく揺つて踊るのが一等いけないんですよ」
「この人は巧いんですか」
恰度、進一の前を、洋裝の小柄な日本婦人と一緒に踊り抜けやうとする、先刻の西洋人を指して訊いた。
「あゝ、マイヤア？ さうね。達者には達者だわね。でも、下品だわね」
妻君は、多少反感を含んだ眼をして言つた。
「奥さんたちが、大變ださうぢやありませんか」
「あら、誰にお聞きんなつたの？ 原？ ええ、そりや、大變なのよ。御覧なさい、あの人、嬉しさうに踊つてるから」
「僕、先刻から見てるんですがね。しかし、努めたもんぢやありませんか。いろ〳〵な婦人たちに、まんべんなく申込んで行くところなんざア」
「ええ、そりや、あれでなか〳〵するいんだから」
言ひながら、妻君もずるさうに笑つたが、化粧室にでも行くらしく、そゝくさと立ち上つて行つた。
進一は、何か、虚なものを心に感じてゐた。それは、はらわたを掻き出された後のやうな、妙に力ぬけのした心持だつた。彼は間もなくみんなと別れて、自分のベッドにもぐりこんだが、寢つくまでその虚な感じは去らなかつた。
翌晩も、進一は、ダンス場の方へ降りて行つた。何年ぶりかの海水浴で、すつかり疲れてしまつた彼は、食後、自分の部屋でうと〳〵してゐたので、降りて行つた時には、プログラムも、もう可なり進んでゐるらしかつた。ダンス場の

入口に立つと、休んでゐた原が、すぐ手招いてくれた。彼は、昨日と同じ席についてゐた。

「何してたんだ。出て來ないから、よつぽど、君の部屋に呼びに行かうかと思つてた」

「あゝ、さう。いや、晝間あんまり泳ぎ過ぎたんでね、しばらくうと〳〵してたんだ」

「相變らず、呑氣だね」

「だけど、踊りもしない人間が、ダンス場に來てたつてしやうがないからね」

原は、何故だか、ちよつと不快さうに口をつぐんだが、すぐ、意味ありさうに、ダンス場の中ごろを指した。そこには、餘り背高くはないが、格幅の好い、夏のタキシイドの偉丈夫が、特別に長いステップを踏みながら、悠々と、王者のやうに踊つてゐた。

「月洲かい?」

原は、輕く頷いたが、その男から眼を放さなかつた。見ると、席にゐる誰もが、日本人も西洋人も、女も男も、たゞその男をのみ見つめてゐる。上手なのか下手なのか、進一には解らなかつた。が、こち〳〵するほど、人々の踊り廻つてる中を、彼はただ一人、恰度、無人の野を行くやうに、ボウル一ぱいに踊つてゐることだけは、彼の眼にも解つた。

「やつぱり、大きいね」

しばらくして、原が、感に堪へたやうに言つた。

「うまいんだらうね」

「巧拙よりも、態度だよ。存在の大小の問題だよ。君、この中に、これだけ澤山の人間が踊つてるが、一人として、あれだけ自ら信じて踊つてる奴はゐないぢやないか」

原は、何かに激したやうに言つた。
「うむ。それは、僕にも解るね」
「やつぱり、君、人格だよ。人格の表現だよ」
間もなく、バンドが止むと、人々がぞろ〲と席に歸つて來た。
「何うも、有難うございました」
流暢な日本語で言つて、人々の後から、原の妻君を送つて來たのは、昨夜の若い西洋人だつた。進一は、ちよつと、おやツと云ふ氣がした。が、原は、長い知己ででもあるかのやうに、如才なく立ち上つて、椅子をすゝめた。
「え、有難う」と言つたが、椅子には腰をおろさないで、「今日は、大變暑いです」
「まだしばらくこちらにゐますか」
「ええ、夏一ぱい。横濱は、非常に暑いですから」
そんなことを話すと、三人に一人づゝ、輕い會釋をして、向ふの隅の方へ行つた。
「ねえ、あなた」西洋人が去ると、妻君はまた、原の二の腕をギユツと摑むやうにしたが、少しばかり顔を赧らめて、蓮葉な調子で言つた。「波山の奥さんね、私がマイヤアと踊つてると、ちつと怖い顔して、私を睨めつけてるのよ」
進一は、多少ヒヤリとした。原も、流石に、ちよつと不快な眼つきをしたが、すぐ、氣を取り直したやうに、
「マイヤア、巧いかい？」
「ええ、巧いわね。くるりと廻る時なんか、そりや奇麗。何だか、からだが、ふわりと浮き上るやうだわよ」
「ちやあ、やつぱり巧いんだね」

「巧い人と踊ると、ほんとに氣持が好いわね」

が、原は、默つて、またぢつと、向ふの大きいテイブルを見つめてゐた。そこには、例の陵川月洲が、如何にも主賓らしく、人々の視線を感じてゐるもゝの迫らない擬態で、どつしりと腰をおろしてゐた。そして、それを取り卷いた七八人の和洋の婦人たちのあでやかな姿の中に、田川の靑白い顏も浮んでゐた。進一は、何となく、偉大な、紀念的な光景を見てゐる氣がした。そして、妙に、胸がこみ上げて來るのを感じた。

ひまを見て、田川が、彼等の席にやつて來てゐた。彼も、何時の間に調へたのか、白いタキシイドなんか着こんでゐた。

「熱心に見物してるね」

田川が、多少冷かすやうに、進一に言つた。

「うむ。なか〱面白いよ。インタアナショナル・エピソウヅがあるからね」

「實際、ダンス場つて云ふものは、たゞ見てるだけでも面白いもんだね」と、原が言つた。

「これまで、日本には、かう云ふものがちよつとなかつたからね」

「ことによると、自分で踊るよりは、人のを見てる方が面白いかも知れないな」

「見てるうちに、君の方の商賣種が取れるからだらう」

原がさう言つたので、みんな輕く笑つた。

「實際、いろんな小說の種があるんだらうね」と、進一が言つた。
「いや、こんな場所には割りにないね。あつても、何うも素人つぽくつて、通俗的で、駄目だよ」
「西洋の小說には、これで、可なりダンス場の場面が出て來るやうだね」
進一は、自分の貧しい知識の中から、二三のものを思ひ浮べながら言つた。
「うむ、可なり多いやうだね。なにしろ、それが社交の中心になつてるんだからね」
「たしか、アンナ・カレニナにもさう云ふ場面があつたね」と、原が言つた。
「あゝ、あつたやうだつたね。しかし、あんなのに比べると、何うも、日本人の情事はスケイルが小さくて駄目だね。こせ／＼して、國內的で、いけないよ。だからまア、自然、大藝術も出ないわけなんだらうが」
「所謂、インタアナショナル・エピソウヅの要素が少なすぎるわけかね」
原は、さう言つて、柄にもなく弱々しい苦笑をもらしたが、すぐ、話頭を變へやうとするやうに、
「君、あのドレッスは誰だい？　月洲の妻君と踊つてる」
「あれが君、神谷伯さ。外交官の」
「あれは？　今、月洲と踊つてる若い西洋人」
「××の大使の娘だがね、大した月洲崇拜でね、あゝして、何處へでもくつついて歩いてるのさ」
「しかし、ちよつと愉快だらうな。あゝして、世界的に濶步してるのも」
實際、月洲は、先刻から、紹介される女、紹介される女を對手にして、恰度、小學教師が子供をあしらふやうに、ぐい／＼と、勝手に、場內を引き廻して踊つてゐるのだつた。

「うむ。しかし、日本からももうそろ〳〵、本統に世界的な人間が三人や四人出て來ても好いんだな。軍艦や兵隊の數でばかり一等國ぢやあ、しようがないからね」

田川が、何か、氣を負つたやうに言つた。

「しかし、日本人も、近頃、よつぽど一等國的にはなつたやうだね」

「うむ、まア、孤立的だつたのが、世界的な心持に變つて來たんだね」

「實際、ダンス場なんぞぢやあ、もう、内外人の差別が殆んどなくなつて來てるからね」

「だから、もう一息だよ」田川は、椅子から立ち上りながら、結論を下すやうに言つた。「つまり、もう、氣魄の問題だよ。度胸の問題だよ。日本人に一等國的氣魄が出來れば、それで好いんだよ」

「だから、せい〳〵、政府で、ダンスの奬勵でもするんだな」

「さうなると、さしむき君なんか、勳章ものだぜ」

みんなが笑ふのをきつかけに、田川は向ふへ立つて行つた。

その夜、進一が、自分の寢床に入つたのは、もう十二時に近かつたが、何時になく、容易に寢つかれなかつた。昨日からのいろ〳〵な見聞が、きれ〴〵に彼の頭に上つては消へて行つた。それは、彼がかつて夢想さへしなかつた、異常な華やかな世界だつたやうに思へた。彼は、新時代の戸口に立つてゐたやうに思つた。しかし、彼自身、その扉を叩いて見る氣はしなかつた。そこが、彼に取つて住み好い世界だとは、何うしても思へなかつたからだ。

それから一ケ月ばかり經つた頃、進一はまた、鎌倉行きの終列車に乘つてゐた。もう、暑さも可なり衰へてゐたし、別に用事もなかつたのだが、今一度、海にも入つて見たいと思ひ立つと、急に出かけたくなつたのだつた。終列車ながら、可なり混んでゐる客車の中では、東京への勤め人らしい人々が、あちらにもこちらにも一團を作つて、互ひに聲高に話し合つてゐた。

恰度、汽車が、大森のあたりを、高い響きを立てて走つてゐる時だつた。持ちこんだ新聞から眼を上げた進一は、ふと、彼の筋向ひの窓に、一人の西洋人らしい男が、半身をのめり出してゐるのに氣がついた。進一は、ちよつと、おやつと思つた。可なり醉つてゐるらしい男は、その長いからだをぐたりと窓にもたせかけて、せなかを波打たせてゐるのだ。

進一は、「苦しいんだな」と、思つた。が、同時に、ふつと、或る微笑がこみ上げて來るのを感じた。

「西洋人でも、醉へば苦しいんだな」

その、ごく當然なことが、一瞬間、不思議な光景に見へたことに、進一は、輕い驚きを感じたのだつた。が、その時、進一の隣席にゐた勤め人らしい二人づれからも、不遠慮な失笑の聲が漏れた。進一は、何故ともなくはつとした。が、それと殆んど同時に、男のからだが、ふらふらと前後に二三度搖れたかと思ふと、くるりとこちらに向いて、そのまゝ、折れるやうに、がたりと坐席の上に腰が落ちたのだつた。その瞬間、進一は、再び、おやつと思つた。相貌が變るほど、蒼白に汗ばんで、髮を搔き亂してはゐたが、それは、まがひやうのない、あの、美男のマイヤアだつた。

進一は、何となく、見てはならないものを見た氣がして、すぐ、膝の上に眼を落した。が、女たちは、また、不遠慮に、人々の視線が集るほど聲高に、噴き出してしまつた。それには、流石に、男も氣附いたらしかつた。彼は、緩く頭

さうに顔を擧げて、二三度、あたりを見廻してゐたが、やがて、ふいと立ち上ると、とたんに、がたりと腕時計を床の上に落したまゝ、大きく左右に搖れながら、すぐそばの便所の中に入つてしまつた。がちやりと、中から懸金を落す音が聞へると、今度は、近くの男たちまでが、床の上の小さい金時計を見つめながら、低い笑ひを立てた。

やがて、汽車が、神奈川驛を掠めて過ぎた。隣席の女たちを始め、横濱に降りるらしい四五人の乘客が、立ち上つて身づくろいを始めたが、まだ、男の便所から出て來るけはいもしなかつた。進一は、そつと足元の時計を取り上げた。そして、男が出て來たら渡してやらうと思つてゐたが、横濱を過ぎても、まだ、出て來なかつた。たうとう待ちあぐんで、進一は、時計を、男の坐席の上に置いて置いたが、大船近くなるまで、時計は、寂しい坐席の上で、その冴へた光りを放つてゐた。

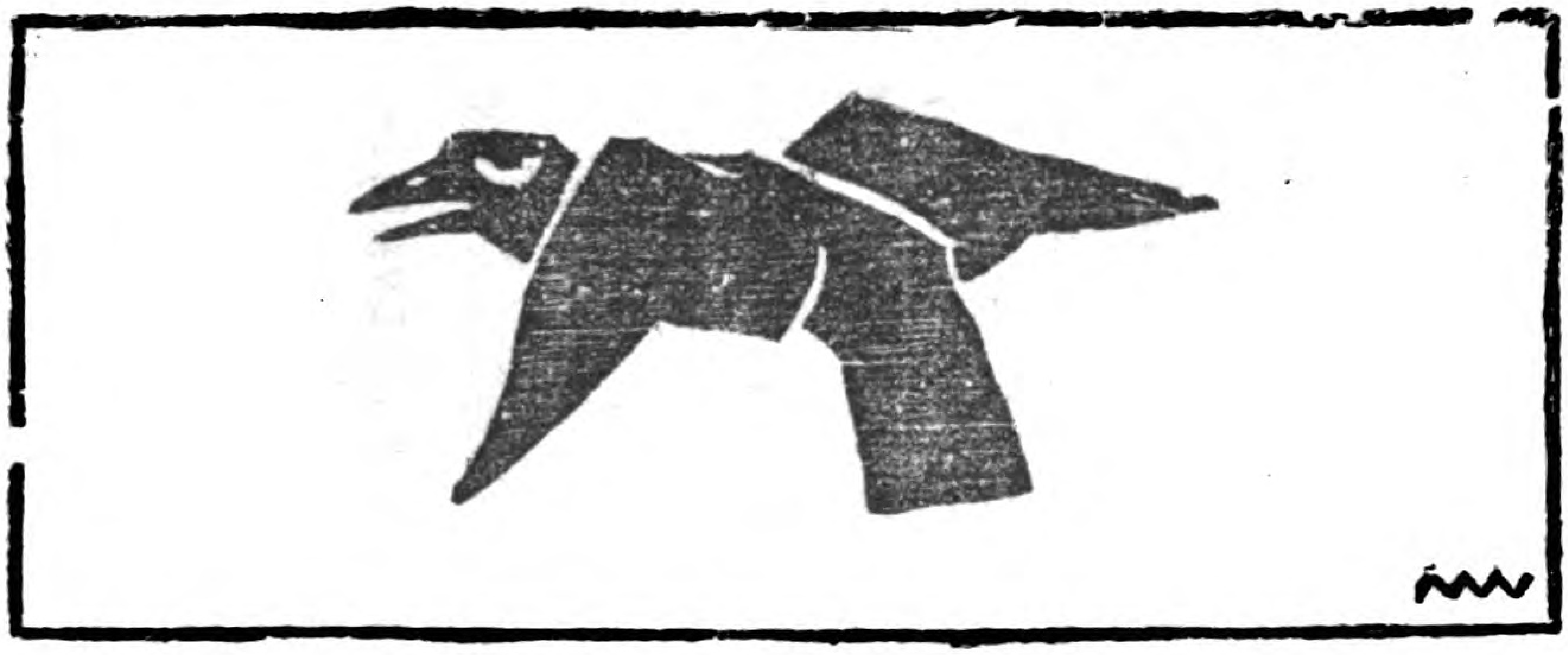
人々は、もう、話し疲れたらしく、大抵、寢こんでゐた。進一も、それに誘はれて、同じやうに眼をつぶつて見たが、その男のことが、何となく氣がゝりで、輕い眠りさへ催して來なかつた。

男が、漸く、顏色を多少恢復して、客席に現れたのは、汽車が、大船近くの急カアヴにさしかゝつた頃だつた。彼は、何の不審もなささうに、坐席の上の時計を拾ひ上げて、自分の腕に卷きつけたが、すぐ、帽子を取つて、下車の用意を始めた。

間もなく、汽車が鎌倉驛に着いた。夏場は殊に不足勝ちな俥を失はないために、進一は、最先に坐席から立ち上つて、出口の方へ行きかけたが、通りがけに、ふつと、便所の方へ眼をやつた。見ると、なかば明け放された扉の中には、男の吐き出したらしい汚物と、それを拭き取らうとしたらしい英字新聞の紙片とが、大きな掌の痕をさへ殘して、雜然と、狹い床の上に散亂してゐた。

「ふふツ、一等國か」

がらんとしたプラツトフオウムに立つた進一は、思はずさう口の中で呟いたが、ふうツと腹一ぱいの呼吸を吹き出すと、小走りに、出口の方へ走り出した。



黄漠奇聞

— A Fantazia —

砂漠は多くの不思議を藏してゐる
——或るアラビヤ人の言葉——

稻垣足穗

或る暑い日、蜥蜴色の背廣の胸に、大きなルビーを光らして、籐椅子に腰を下したA君——この間、アラビヤの旅行から歸つて來た、私の空想好きな友だちは、あちらから持つて歸つて來たといふ、まるでArab's tentの舞臺に出る人物が使つてゐさうな、古風な面白い格好をした石のパイプに、香りのいゝ粉煙草をつめて、プツと一息、うす紫の煙を吐くと、次のやうな話を初めた。

1

赤い太陽が砂から昇つて、又砂のなかへ赤く沈む。風が砂の小山を造つては、又それを平らかにして過ぎ去る。それは遠い世界の涯から持つて來た多くのこと

をさゝやくが、人間には判らない言葉である。そこには只死んだやうな無言の寂寞がひとりで君臨してゐる。バブルクンドの都といふのは、ちやうどこんな砂漠のまんなかに在つた。神々の都であるサアダスリオンを模して建設されたといふこの都は、蜘蛛の巣の形に王宮を取り卷いた、整然とした六角形の道路から出來上つてゐて、しかもそれらのすべては、その中央に槍の穗先のやうな尖塔を立てつらねた王宮は勿論の事、バビロンの幾何模樣を見るやうに、出來るだけ多くの直線を用ひ、その美を發揮するやうに設計された家屋から、街路の敷石から、これらの廣い都を一帶に、ぐるつと輪に圍んだ高い城壁に至るまで、目も眩ゆい純白の大理石を以て造られてゐた。その街の辻々には、いくつかの神像に飾られた大水盆があり、絶えずにふき上つてゐる噴水は、少さい虹を中空に描いてゐる。それをめぐつて、紅い夾竹桃の花が色鮮かに咲き誇つてゐる下には、常に青い布を頭に卷いた市民が群れつどふて、その間を、遠い國々から來た隊商の群が、夢見勝な瞳をあちらこちらに注ぎながら、商品を高く積みこんだ駱駝を引きつれて通りぬける。毛皮や、絹や、寶石細工や、刺繍や、香料などに充ちたきらびやかな店の前を、うすい着物をまとつた女が、甕を肩にのせて歌ひながら通り、下を向けば顏も映るやうなつる〳〵した石甃の上に、貴族の馬車がカラ〳〵と音を立てる。砂の果に落ちる入日が、街中を燃え立つやうな紅ゐに染めて、紫色の夜の幕が靜かに落ちて來ると、家々の窓からは、花のやうな燈影が匂ひこぼれる。灯は夾竹桃を照らし水盆に映じて、こゝに又一しほの情趣をそへる。人々はそのまはりに集つて、カルタを取つたり、香ばしいバツシの酒を飲んだり、賑やかな六弦琴を奏ひたりして、半夜すぎるまでも笑ひさゞめく。…………

砂漠の赤い雲の襲も、黒い砂の龍卷もこゝばかりは避けて通るやうである。ライオンの襲撃を受ける惧れもなく、盜族におびやかされる心配もない。この大理石の都は眞に樂園そのものであつた。で、遠くから砂の上をたどつて來た

旅人が、丘の上から、全く自分の眼の下に、うはさに聞くその通りの美しいバブルクンドが存在してゐるのを見て、これは神の國へ來たのではないかと、驚きの瞳を見張るといふのは尤もの事である。そして、彼が城門をくゞつて、やはり夢でも幻でもないその街の實在を確め得た時、人間の力でどうしてこんなにまでの結構が造られたのだらうかと、眉をよせてしばらく呆然とした疑惑に囚はれるといふのも、又成程とうなづかれる。が、それと共に、城門の外に駱駝を休ませてゐるキヤラバンの誰かれが、衛兵の影のない時に聲をひそめて「神々はどうして人間の王にかくまでの榮華を許し給ふのであらう？　王様はなか〳〵慈悲深い英明な方だと聞くが、あの何者にも增つて怖ろしい星を祭られぬと云ふ。それに、星は何故王を罰し給はぬのだらうか？」と、さゝやく事があるといふのもこれ又無理ならぬ話であつた。

けれども、そんな賞讃や疑惑の如何にかゝはりなく、白いバブルクンドは、超然と、神々の都のやうに輝いてゐた。市は日に〳〵賑やかさを加へ、王威はいよ〳〵昇る。都の眞中には、それを圍んだ街よりは更に一さう眞白く眩ゆい塔や棟や圓屋根がつらなつて、その上には、濃い青地に燦爛たる金色の新月を染め出した旗が、ひら〳〵と砂漠の風に翻つてゐる。そして、赤い衣に青い頭のキヤラバンの群が、駱駝の背に長い砂上の旅を重ねて、八方からこの宏壯善美の「憧れの都」へと集つた。

2

さて、この壯麗無比な、自然が蓄へたすべての美を集めて、それに人間の頭にあるあらゆる智識と才能とを加へて造り上げた都の王宮に住んでゐるのは、眞に市民を思ひ、都に意をよせる武力と學識の兩道に秀でた王であつたが、城外の取沙汰にも聞えるやうに、他の國王たちが何者よりも怖れ、その機嫌を取るためには、どんな務めをも辭せないといふ星を

祭らなかつた。と云ふより、王に取つてそんなものは全く存在しないかのやうに思はれた。

ほど遠からぬ昔、未だ少さい蠻族の頭に過ぎなかつたこの王が、眞夜中に、北方から精英な三千の騎士を從へて、當時は竹籔に包まれたさゝやかな小都であつたこのバブルクンドを襲ひ、一擧に王城を乘取つて廣間に闖入した時、王はその王座の隣りに立つてゐた神像を、どんな敵でも必ずその前にひざまづき、この度、他の神と取り變へねばならぬ運命に立ち至つた理由を告げて、叮重に始末をつけるのが規則になつてゐる、その緑色の神像を、子供が毬を蹴るやうな調子に座から突き落して、三つに壞してしまつた。その上にひどい嘲罵を加へてその一つ目の神を笑ひ、そんなものを後生大事に崇拜してゐた城主の愚を憐れんで「こんな滑稽な玩具いじりをやつてるからこそ、俺のやうな者に滅ぼされるのだ！」と云つた。が、この時、そのあまりな振舞に、見るに見かねた侍從のカアノスが、走りよつてさへ切つた。

「それはいけません！　陛下！」

「どうして!?」

王は侍從をにらんだ。

「たとひ土くれでも、貴いイルリエールの像です！………」

カアノスは續けて叫んだが、王は容赦もなく、さらにその破片を蹴つて、石段から落し、柱の根元に當てゝ砕いてしまつた！

そこへ、ガチヤ〳〵と鎧と楯の音を立てた血氣の一團が侵入して來て、劍をふり廻した王と一緒に、天蓋を突き倒し、椅子をころばして、もつとひどい亂暴をやり初めた。………

さて、話はそれから七日ばかり經つた後の事である。新らしい都の占領と共に起つた忙しい仕事の大たいを片づけた

王が、廣間で、一面に蘭が咲き亂れた美しい中庭を見ながら、打ちくつろいだ氣持で、參謀武官のスラゴラインドと立話をしてゐる時、先程から機會をうかゞつてゐた侍從が、二人の言葉の止切れたのをきつかけに、バブルクンド奪掠の夜になされた、氣がゝりな狼藉の一つについて、王の注意をうながした。

「イルリエールがどうしたと云ふのだ？」

王は向きなほつて、極めて上機嫌な反問を入れた。

「どうしたのではありません。陛下！」

と、切つて息をのむと、カアノスは說きさとすやうに諄々と云ひ初めた。

「陛下、陛下は今まで小さい君主であらせられた故に、差支へなかつたのです。けれども、バブルクンドを占領して、こゝに君臨されると云ふからには、星をおろそかにされてはなりません。神々は陛下に惠を垂れて、かくも容易に、この城を陷し入らしめ給ふたのに相違ございません。それには勿論、陛下の並びなき策略と、勇敢な騎兵隊の働きによるのも明らかな事でせうが、なほ、その上に、神々の御加護があつたのも否み難い事實です。それは星が特に、陛下を選み給ふた故でなくて何でせう？………イルリエールは、たとひ吾々の信奉する者でなくとも、吾々には相當の禮を持て對する必要があります。こんな場合、他の國王は新らしい祭壇を設けて、自分の星と一緒に祭る事にしてゐます」

カアノスはなほ云ひつゞけやうとしたが、王はスラゴラインドと顏を見合して、笑ひ出した。

「セムの部下にそんな馬鹿がまじつてゐたか！　星の力で城を奪つたと？　たはけてはいけない、カアノス！　城を取つたのはそんな迷信に凝るひまに、戰術の研究をしたからだ。反つて、お前の云ふ、星とかいふくだらないものを信

じて、その祭司とかいふ山師たちに、用もない國費を使ふ事こそ、城を失ふ元ではないか？　カアノス！　お前は、以前にそんな事を云はなかつた。お前は前々どほり俺のそばで、築城や市政についていゝ智慧を借してくれゝばいゝのだ。それに今さら星の事を云ひ出すなんて……一體どうしたのだ？　お前はこのなかで、一番齢を取つてゐる。そのせいかも知れぬ。それとも俺が、あまりに速くこゝを奪つたので、氣がどうかしたのか？　さあ、こゝに並んでゐる者を見渡してごらん。皆んな若い！　槍や楯は大空の星よりも眩ゆく煌いてゐる！　吾々にはそんな取越苦勞の必要がない！すべては計畫通りに運んだまでゞはないか？、吾々があの地下室で最後の作戰方法を決めた時、お前は石卓をどんとたゝきつけ『陛下、これでは半夜のうちにバブルクンドを陷し入れる事が出來ます！』と、さう目を輝せて云つたではないか？　今それが出來たのだ、何が奇蹟だ！　誰だつてあまりに思ひどほりに事が成就した時は、そんな事を考へろものだ。だが、それは欺かれ易い人間の心に、自分からかけた催眠術だ。神々も星も皆んなそんなだまかしだ！　星がバブルクンドを占領させた？　さう、その星はこの座に居る。こゝにも、あそこにも、これもその一つではないか？」

　こんどは反對に、カアノスに向つて說教をならべた王は、その指先を、廣間に居た部下の面々に向けて、終りにカアノスの鼻先にまで突きつけて、大きな笑ひ聲をあげた。

「けれども陛下！」

　侍従はなほも眞面目に追ひすがつた。

「聰明な陛下の頭腦は、取越苦勞にも時として、眞理をふくめてゐるといふ事を、お認めにはなりませんか？　如何にも、私は今まで、星について一言も口には出しませんでした。しかし、私は星を知らなかつたのではありません。イ

サラは少さいお城で、云はゞ陛下の御修業の時代でした。その頃は――いや、今後とても吾々は築城や戰術や政治の研究をおこたつてはなりません。けれども陛下！ 星は遂に陛下に、蘭の花咲くこの美しいバブルクンドをお與へになつたのです。若し此上に陛下が星を顧みられなかつたら、神々もよもや見逃し給ふ事はございますまい。陛下のために、この新らしい都の永遠なる榮えのために、私は敢て申し上げます。全智にして全能である星は、すべての國々を興し又すべての國々を滅ぼし給ひます。いづれの國々も星の祭を第一におかぬものはありません。英明並びない陛下が、この最も普通な一事のために、折角の美しいバブルクンドを失はれるやうな事があつては、殘念と云つてもおろかな話ではありませんか？ カン族もライオンの群も、陛下の軍隊の前には物の數でなく、如何に複雜な外交とても陛下の大臣に取つては、何のかゝはる事でもありません。けれども陛下！ 天上の星ばかりは人力を以て如何ともする事が出來ないのです。吾々は大きな國家が星のために、滅亡した怖ろしい實例を澤山知つてゐるではありませんか？」

カアノスの額からは汗が瀧のやうに流れた。

「何？ 星のために國が滅んだ實例だと？」

ほゝ笑みながらうなづいてゐた王は、ふと注意を引いたやうに、眉をよせて問ひ反した。

「仰せのとほりです。――カルダットは比肩する者もない強國でした。王は人々から神のやうに崇はれ、都は神の國のやうに榮えてゐました。けれども、星を祭らなかつたために、いや、星の祭司の長を殺したゝめに、神々の怒りにふれて、あの大きな市街が一夜のうちに、地中へ陷沒してしまひました」

「いや、それは何も神のためだとは云はれまい。學者の話によると、地下に出來た空虛へ、土が落ちこむ事もあると云ふ。何にもないハロの野に、火を吐く山が三日間で出來上つたさうだ」

「それなら、あの美しい蛇紋岩のセクの主都もやはり同じやうな理由で、怖ろしい波のために、跡方もなく洗はれてしまつたと申します。星でなければ、何者がよくこんな技を爲し得ませう?」

「いや、それだつて」

落ちついた口調で王は云つた。

「海底の土崩れによつて起つたのかも知れぬ。何も都とは限らず、立木一つもないヤン河の下流にある荒地さへ海になつたではないか? それや全く自然に起る事で、不思議でも何でもない」

「けれども陛下! その時、物凄い笑ひ聲がいづこからともなく起つたと申します。地上の榮枯を意のまゝに投ひ給ふ星が、果敢ない人間の努力をお笑ひになつたのでなくて何でせう?」

カアノスは髭をふるはせた。

「それや知らぬ。俺も聞かないから。だが、土崩れや波の音がそんなやうに聞えたのではないか? そりや有勝ちの事だ。學者もさう云つてゐる。やれ空が二つに裂けたの、やれ眞靑な火柱が立つたの、そんなとはうもない事を云ひふらして人を惑はす星の祭司や巫女より、俺は學者の方を信用するのだ。全く彼等は、云つたとほりの事を目の前に見せてくれる。鋭い劒の先も通らぬ楯や、どうしても登られない城壁の造り方を知らせてくれる。――そりや、お前の云ふやうに、カルダツトやセクが滅亡したのは星のためかも知れぬ。が、俺には自然のためだと解釋する方が都合がいゝ。考へ方は各々の自由にあるから。それにしても、俺は先祖から傳つてゐる七色の光を放つといふ石を持つてゐるが、俺はついぞその光を見た事がない。思ふに、それは北方の蠻族の信仰で、この世界には只東から太陽と月がのぼるといふより以上の不思議はない。他は皆んな人間が勝手に作るので、全く吾々の努力次第で七色のダイヤもこしらへれば、如

何なる鋼も通らぬ鎧も出來る。それから、あの四時春の光に包まれたアメンテープ大王の樂園も可能なのだ。只、吾々は非常を忘れてはならぬ。お前の注意はおそらくそこを差すのであらう？　さう、俺は全くそんな何の迷信や、馬鹿げた儀禮にも煩はされない、ほんとうの文化を建設したい。星とやらに、罪もない子供や獸の命を捧げる間には、このバブルクンドを、學術と工藝のかね備つた美しい市街にするための努力をつくしてみたい！」

王とカアノスの對話は、とう／＼こんなところにまで進んで、まはりの人々も次第に近くへ集つて、互に興味ある面持で二人の顏を見比べてゐた。或る者には侍從のくどさが少し氣にかゝつたが、やはり王の顏には好ましい笑がたゝへられてゐた。言葉はしばらく止切れて、一同は息を呑んだ。が、カアノスは又しても同じ事を云ひ出した。

「けれども陛下！　陛下の仰せられるすべての事も、やはり星の支配の下に置かれてゐるものなのです」

「成程！」王はうなづいた。

「だが、俺は目に見えぬ者は信ぜられない。お前は何か、その神なり星なりが、ほんとうに存在するといふ證據でも持つてゐるのか？」

「如何にも！」

カアノスは首を縱に振つた。

「何！　持つてゐる？」

王は目を光らせた。一同はもつとそば近くへつめ寄つた。

「この間！」

カアノスは息をついだ。

「この間、イサラの町でゝ南方から來た星の祭司からその話を聞きました」

カアノスは唾をのんで續けた。

「ゼリコンの王が、城門の前で自分の王冠を星に捧げたのです。そして、それを星が嘉みし給ふたのです。衞兵たちが嚴重にあたりを守つてゐたが、小犬の影一つもないのに、その寶石をちりばめた黄金の冠が、いつの間にか、煙のやうに消えて無くなつたと、さう祭司が申しました」

「それで星が取つたと云ふのか？」

「さうです。誰がこの不可思議を以て人間拔と解する者があるでせう」

「馬鹿な！……」

王はあたりの部下を顧みてふき出した。

「子供か誰かが持つて行つたのだらう？」

「いゝえ陛下！」

カアノスは大ぎやうな身振をして否定した。

「何人も神聖な星の祭司の眼を欺く事は出來ません」

「さうか、その他にはどんな事がある」

王は冷淡に云つた。

「モビの砂漠から來たアラビヤ人が、神々の都の事を語りました」

「神々の都だつて？」

王は問ひ反した。

「さうです、この砂漠の北の涯に高さが知れないといふ絶壁が屏風のやうに立てつらなつてゐます……」

「お前はそれを見たのか？」

王は皮肉な横槍を入れた。

「いゝえ、私は見ません。けれども見て來た者の話によると、眞青な空へ高くそゝり立つてゐる、その赤い岩の頂上の方を仰ぐと、おぼえず目がくらむさうです。そして、その上まで登つた者は誰もありません」

「うんその上に銀の砂漠があると云ふポルタニイズの壁の事だらう」

王は受け入れて、こんどは輕くうなづいてみせた。

「左樣、そのポルタニイズの壁へ、その男が蛋白石を取りによじ登つたのです。程よい頃に歸らうとしたが、ふとその上が見たくなつて、眞立の絶壁をなほもはひ登つて、頂上に近い岩のすき間から、そつと向ふをのぞいたのです。陛下！そこには、正しく日光に燦めく銀の眞砂の原が、涯も知らずに擴がつてゐるといふのです。そして、その眞中に不思議な美しい大理石の市街があつて、蜘蛛の巣のやうな形に配置された圓屋根や尖塔がキラ〳〵と、目も眩ゆく輝いてゐるのです……」

「そして……」

王は續きを待つやうに乘り出して

「だが、どうしてそれが神々の都だと判つたのか？」

「その眞白い輝きを一目見た時、世の常ならぬ崇高と怖れが彼の身内を通りすぎたさうです。そして、その都の中央に、

背地に黄金の三日月を浮き出させた細長い三角旗が、ヒラ〱と風もないのに翻つてゐたと申します。陛下！　この話を聞いた星の祭司が、紫の衣をまとつて、鐵筆を持つて記されたドヽノの本を調べたところによると、それはいとも貴い神々の一人、地上のすべての美と榮華を支へるシンの標で、その白い大理石の都こそ、今を去る六千年の昔にマアナ・ユウド・スウシヤイが眠りについた時、ペガナに會合した神々に依て建設された、サアダスリオンに相違ないと申したさうです。いやほんとうに、その青い旗を見た瞬間に、岩の間から市街の云ひ知れぬ美しさに、うつとりと見入つてゐたアラビヤ人は、思はずひれ伏すやうに岩に額をくつゝけてしまつたさうです」

「うん、三日月の旗に大理石の都か……」

ひとり言のやうに王はつぶやいて

「それで、彼は何故そこへ行つてみなかつたのだ？」

と、幾分か熱心に問ひ反した。

「それは畏れ多い事です」

カアノスは王の顔色が動き出したのに力を得て云つた。

「人間が神の都に近づくのは許されぬ事です。彼は、そのまゝ踵を反したと思つたら、落ちたやうに、その絶壁を下つてゐたさうです」

「何か迷景でも見たのぢやないのかな？」

王は考へなほしながら批評的に出た。

「どうして陛下！　砂漠を家にするアラビヤ人が、何で幻に欺かれませう？　その上、彼は敬虔な男です。話を聞いた

時、私はその聲のふるへと目の耀きでそれを確めました。しかも陛下！　彼はアラビヤ人の常として、何の信仰を抱いてゐる者でもありません」

「よろしい、わかつた！」

王は態度を改めてさへ切つた。

「で、その男は今どこに居るのか？」

「イサラの門の外で一ケ月ほど前に聞いたのですが……」

考へながらカアノスは思ひついて、

「さう、一月のうちには、パブルクンドへ行くと申してゐました。多分、今夜あたり涼しい竹籔のかげに、天幕を張つてゐるかも知れません。荒い縞の赤い衣をまとつた髯だらけの男でした。背の高い三十がらみの男です。名は確かウグノと申したやうです。その天幕にはパッシの葉の模様が描かれてありました。衛兵を二三人出してお探しになればすぐに見つかるでせう」

王の心がよほどその一事に引かれてゐるので、カアノスは勇んで云ひ續けた。が、王は只腕を組くで何か沈思に耽けるやうに見えた。唯物主義者のこの王は、話を聞いて自己の信念に疑ひを生じたのか、いやさうではない。この時、王の胸底には、さらに無暴なる星へ向つての反逆の萌芽が生れつゝあつたのである。そして、しばらくして口を開いたセム王は、カアノスを初め、居流れてゐた大臣や將軍の面々に向つて、次のやうな決心を述べた。

「俺もそんな大理石の都を建てよう！」

第一の言葉はかうである。

「それから、バブルクンドの旗標を、シン神とやらの新月の吹き流しに決定しよう！」

これを聞いて一座の面々は、互に顔を見合せた。彼等は同じく精悍無類な北方の流星王の部下として、生死の大事をたはむれに思つてゐる者共であつたが、ひとしくその民族の習慣は持つてゐた。そして、今、王の口から洩れた、人間の手によつて神々の市街を造つてみよう、しかも、その神の標旗を取つて自分の國旗に使用しようとは、又あまりと云つても怖ろしい話ではないか？　人々には二の句がつげなかつたが、王は事もなげに云つた。

「白い大理石だといふのが第一氣に入つた。又、蜘蛛の巣に配置された街區とは何と巧妙な着想だらう？　俺はそのアラビヤ人を呼んで、早速その工事に取りかゝらう。この美しいカシリナ砂漠のオアシスを占領して、そんな仕事をやらないのは間違つてゐる。さうぢやないか？　スラゴラインド！　砂から日が上る時、又沈む時、その燃えるやうな眞紅な朱盆や、金色の矢に差しつらぬかれた雲や、それから又、曙や暮方の云ひ知れぬ空の色彩を映して、紅に、紫に、黄に、又青に、クレオ姫の裳のやうに美しい色合を織り出して行く大理石の市街が、そして又、眞晝の空の濃青を受けてくつきり浮き出した白い都が、どんな壯麗を以て吾々の魂を奪ふだらう？……」

王は想像に醉つて、詩を讀むやうに、かたはらの參謀武官を顧みて云ひ續けたが、さて、その次には相談するやうに

「その男の見たものが幻でなかつたら、それと同一のものは、吾々の手に依つても出來る筈だ。そんな都が二つもこの地上に存在する程結構な事はない。神々のサアダスリオンと、吾々のバブルクンドと、どちらが立派であるか、公平な判斷を砂漠の旅人を待つて聞かうではないか？　いや、何とも愉快な計畫が浮んだものだ……」

王は、もう大理石の市街建築といふ事に有頂天になつて、じつとしてをられないやうに、廣間中を歩き廻つた。自分の話によつて、王宮の空氣を、とんでもない事にしてしまつたカアノスは、途方にくれてうろ／＼してゐたが、それで

も思ひ切つてもう一度

「陛下！……」

と云ひかけたが

「いや！　もういゝ！」

興奮した王に忽ち止められてしまつた。

「吾々がその神になるのだ！　そして、大理石の街に住むのだ！　無駄事を云つてゐるひまはない。骰子の目はもう出た！　市民に早速その事を知らしてやらう」

3

もう何人も王の意志をさへ切る事は出來なかつた。街路を埋めた戰勝祝賀の蘇鐵の葉が、取り除かれると共に、その辻々には測量技師が三脚架を立てゝ、眼鏡をのぞいたり、糸を引いたり、コンパスを廻し初めた。王座に召し出されたアラビヤ人の手には、莫大な黄金が握らされて、彼は早速砂漠の南方へ、三萬の奴隷を集めるために出發した。ほど遠からぬコンの谷間から、白い大理石が切り出されて、數千頭の象が日毎にそれをバブルクンドに運んだ。街を圍んだ竹籔の外には、天幕の波頭が海のやうにつらなつて、槌と鑿の音が、大きな反響を造つて遠い地平線へ傳はつて行つた。赤褐色の古い家や壁はどし／＼壞され、損じた敷石は片つぱしからはがされて、鏡のやうな白い石と取り變へられて行つた。王宮の廣いドームの下には、澤山な建築家や學者や技師が、計算をしたり、圖を引いたり、模型を造つたりして忙しく働いてゐた。王自身がその監督の任に當つて、朝から晩まで、その間を歩き廻つて仕事をはげました。計畫は風の

やうに運んだ。市民はそれを見て只怖れ訝かしんだ。しかし、古い赤ちやけた市街がづん〳〵と、華麗目もうばふやうな大理石の門や塔になつて行くので、こんどは自分たちの目を疑つた。その上に、この新らしい王政は、かつて見られない懇切をきはめたものであつた。彼等はそのうちに、そのえらい君主を戴いた事を喜ぶやうになつた。勿論、なかには、人間の分際でこんな都を建てる事や、新月の旗を使用する事について、異議をさしはさむ者もないではなかつた。が、飛ぶ鳥も落す王の威勢の相手になれる筈がない。王も又一さいに無頓着に仕事を進めた。それが人々の氣に入つた。事實、王は何事の上にも卓越した腕を持つてゐるやうに見えた。人々はもう王と神とを引き合ひにして考へなくなつた。このすばらしい力と不思議な才能を持つた王に從つてゐるうちは、星についての心配は全く無用の事にさへ思はれた。王の無神論はやがて市民のすべてを感化した。それと入り替りに、王が神のやうな人、その次には神とひとしき人、或るひは神々の一人ではなからうかとさへ思はれかけた。この間に、空前の大事業は加速度を以て進行して、大理石の大バブルクンド市は、遂に見事な完成を告げる事になつた。詳しくは云はなかつたが、それは豫定より遙かに早く、王自身もその意外におどろいたくらゐ、わづか三年と二ケ月といふ短時日のうちに出來上つたのである。

4

その日、市街から程遠からぬ砂山の上に登つて、共の出來榮を見るためにふり反つた時、王の双眼は引きつけたやうに張つてしまつた。と同時に、そのまはりに居た廷臣たちも、又ひとしくそのまぶたが開いて、ふさがらなくなつた。まことに、紺青の大空にかゝる太陽の光を受けて、目もまばゆく輝く、純白の圓柱や、方形や、三稜形や、圓錐や、弧形が、そこに造り出したおどろくべき綜合の美！　わけても、一きは高く中空にそびえた尖塔の上に、熱風を受けてき

らめきながら翻つてゐる新月の旗標！　それは全く、この世のものかと怪しまれるばかりに、壯嚴端麗な光景を打ち擴げてゐるのであつた。そして、それから何といふ奇蹟が起つた事であらう。砂漠にめづらしくも、一陣の冷風がさつと吹いて、それは爽快な急雨をもたらした。そして、程なくして止んだ時、水にぬれて、一さう色つや〻かに、ほとんどすき通るばかりになつた、大理石の圓屋根や高塔の上に、色も鮮やかな大きな虹の橋が懸け渡されたではないか！　そして、音に高いマガバドラの見神者が、法悅の心境もかくやと思はれるこの光景に、夢見心持の王と家來とが、うつとりと動きもやらずに見守つてゐるうちに、あたりは早くも夜のとばりに包まれてしまつたと云ふ。……

　工事の大たいが終つた日にすら、こんな事が起つたほどであるから、神々に寄せてゐた市民の崇ひと怖れとが、今はもうセム王の身一つに向つて注がれ出したのは當然である。そして、この新らしい市街の辻々には、まことに何人の拜親も許したサアダスリオンの結構と、その完成者である王の德を賞めたゝへるために、砂漠の遠近から集つて來た群集に充ち溢れて、全く動きもとれず、パブルクンドの城門の內外には、文字通り黑い堤が築かれるといふ有樣であつた。そして、丘の上や、高い窓から見下すと、赤、白、黃、靑、紫、いろんな衣がまじり合つて、奇妙な更紗模樣のやうに見えるそれらの群集は、王宮の前の廣場に、押し反しひしめいて、さはめきながら、槍の穗先のやうに中空に突立つてゐる高塔や、宏壯をきはめた樓の上の金銀をちりばめた唐草の彫刻を仰いで、天上界にも來た心地で、いつまでも去らうとしなかつた。

　かうして、夜と晝とを編みこんだ時の矢車は、さらにぐる〳〵とめぐつた。が、王威と都の隆盛はいや增しに加はるばかりである。殘された街の部分的な仕事が片づいて行くと共に、物好きな王は、又さま〴〵た新らしい計畫に手をつけた。白い大理石の美を一さう華やかに引き立てるために、街中を紅い夾竹桃の花で飾る事にした。これは又空前と云

つてもいゝ成功を得た。構造裝飾共におもむきを變へた、七つの大遊宴場が城中に出來たのもこの頃である。それから又、脊やみの神や、沈默の神や、立ちのぼる煙の神や、猫を打つ神や、犬をなだめる神や、薪を灰に化する神や、そんないろんな大小無數の神像が、宮廷の廊下、露臺、階段、廣間、庭園、街の辻、城門の左右、およそ目にとまる隨所にすゑつけられた。そして、城のなかの美しい女神の口からは香油がこぼれ、又、時刻を知らし、街角に坐つてゐる奇妙な三つ目の神は、子供と旅人のために傍にあるボタンをおす事によつて、甘い果實を吐き出し、羽根をひろげた巨大なその一つは、駱駝と馬のために、たえず水をふき上げて水盆を滿した。又、王はベガナの饗宴にならつて、城中に召使ふ千に越える小さな奴隷に、金銀の刺繍をほどこした紫の衣をまとはせた。これらの、各自の胸に神々の名を寶玉で綴つた給仕人たちは、王や大臣や貴賓の前に出て、琥珀色のハフラの酒をつぐひまに、巾廣い蛇紋石の階段の下に寢そべつてゐる、ライオンや豹に肉をやり、又、庭園に下りて、深綠色の梢や芝生の上に、中空に七色の綾を織り出した噴水や咲きみだれた花と一緒に、怪しいまで極彩色の翼をひろげてゐる、おびたゞしいインコや、鸚鵡や、鳩や、斑の鳥や、孔雀に餌をまいてやる。夜、廣間といふ廣間、廻廊といふ廻廊を、燃え上らんばかりに煌々とかゞやかせた燈火と、二重三重にそれを照り反した圓柱や壁にある、金銀の裝飾のために、王宮全體が光りの海に見える時、そこから、にぎやかな笛や、琴や、太鼓の音が街の方にまで傳はつて來る。それがあたりを包んだ濃い紫色の空氣に一ぱいひろがつて、遠いところから次々に送られて來るせいか、そこに云ひ知れぬ不思議と蠱惑をこめて、さうでなくとも、この奇怪な格好をした圓屋根と尖塔を立てつらねた都の上をめぐる、爛爛たる星座によつて高揚された、物くるはしいバブルクンドの夜の市民の心を、もつとかるく浮き立たせ、一さうに強い、世の常ならぬ歡樂に對する憧れにさそつて行くのである。……

5

諸國の美望と驚異は、今はバブルクンド一つに向つて集注された。この間まで、日輪を落す國と知られたゼリコンは勿論の事、北方の險しい岩山に巣をかまへゐる、鬼か人かと疑はれた、狂暴なキブ王の率ゆる青騎士隊も、ひとへにこの美しい都を襲撃する機會をうかゞつてゐたが、いづれの間諜の口によつても傳へられる、バブルクンドの王は、決して耽美逸樂の日夜を送つてゐるのでなく、その下には常に精鋭な幾萬の軍隊が、金色の楯と銀の槍先をきらめかし、貴いシン神の旗標をひるがへして、守を固めてゐるといふ報告には、全く何の手出しをする術もなかつた。そして、彼等は、まるで旋風のやうに起つたその不思議な王朝が、どうしてそんなにまで、榮えてゐるかといふ事に思ひめぐらすと、疑惑と共に、或るおのゝきを感じないではをられなかつた。何故なら、人間拔として、如何なる力を盡しても、たとひ、千載に一人しか現はれぬといふ天才の力を待つても、それほどまで萬全に、大きな都の經營がつゞけられるものだとは、思はれなかつたからである。これに比べると、古今を通じて、あんなにえらい帝王はなかつたと傳へられる、アメンテーブ王朝の盛時でも、まるで物の數ではなかつた。勿論、テーブも、自然と人智のあらゆる美を選り集めて建てた都であつたが、それはいくばくもなく、內部から起つた反亂のために、轉覆されてしまつたではないか？　けれどもバブルクンドにはそんな微塵の氣勢もない。王には勿論、人間らしい失策が砂一粒もあるのでなく、まことに神の智慧と力との所有者と察せられた。そして、最初こそ怪しみ訝かしんでゐた他國の王たちも、しまひには、市民と同じやうに、やはりバブルクンドは人々にうはさされるやうに、ほんとうの神々の都ではあるまいか？　こんな不思議な國がこの地上に存在するのは、到底、吾々には考へられない事だ。と、思ひこむやうになつた。そして、あの豪膽不敵をも

つて音にひゞいた暴帝ゴロメさへも、バブルクンドには兜をぬぎ、その神の貴く美しい王朝と近づきになる事を光榮に思つて、數多くの寶石や金塊と一緒に、蝶のやうにきやしやで、紅海の貝がらのやうに美麗な、イクタリオン、アサーリア、オクサラといふ三人の舞姫に、澤山な奴隷をつけ足して、セム王に貽つたのである。人々はバブルクンド王朝の他には、何者にも捧げ物をする必要を認めなかつた。

6

しかし、この頃、或るかすかな怖れが、バブルクンドの市民たちの心の上にかぶさつて來た。それは、完全のなかに住むやうに造られてゐない人間に加へられる、永遠そのものゝ壓迫である。それは、あまりに調和されたもののなかで、人間が感ずる倦怠と不安である。そして、このかすかなるものは、刻々にその見えない翼をひろげて、或る不吉な運命が、この都の上に落ちかゝつて來るといふ豫感をさへ起さしめた。そして、最初、市街が建つと共に消えて行つた、王と神との間に關した疑念が（それはまだ極く少數の心の底に保存されてゐた）又、だん／＼と、タラの洞の妖婆の神託のやうに、人々の心を次から次へ傳はり出して、都のあまりに壯麗な事が、そして、此上どうなる事かと案ぜられる日増しの盛運が、その何と云ふこともない不安を、いよ／＼つのらせた。「吾々がこんな結構な都に住むのは、許されない事ではなからうか？　何だか、かうしてゐるのは尋常事と思へぬ。只、星に賴り神につかへる吾々に、こんな榮譽が與へられてゐるのは、間ちがひぢやなからうか？」その不安が、こんなはつきりした意識になつて、市民たちの胸に感ぜられて來た時、王の胸にも又、同じやうな疑ひが浮んだ。

「人間の力で、こんなに完全に物事が出來るものか知ら？　今までにこんな事があつたか知ら？　俺はイサラの城も一

夜に奪ひ取つた。あの高い城壁も、俺の部下は安々と蜘蛛のやうに乗りこえた。それから……これやあまり思ひ出したくないが、俺がまだアーギミニス王の武官をつとめてゐた頃、一夜の闇にまぎれて、隊商の天幕を襲つて、寶玉類を盜んだ事がある。あの時だつて、俺は、しつかり自信があつて、豫定通りにやつたものゝ、それでも思ひがけぬ邪魔が入つて、ずいぶん手こづゝたものだ。だが、こゝを占領してから、どうもすべての經過が普通でなさすぎるやうだ。さう云へば、バブルクンドに於ける七日目の夜に、カアノスと星の問答をやつたが、俺は興にまかして、あんな出たらめを云ひ放つたものゝ、事實はどうだ！　全く俺の言葉通り、いや、俺の妄想よりもつと大きく立派に運ばれてしまつたではないか!?　俺はこんなに安々と物事を爲し遂げたためしは、未だ何の上にも經驗した事がない。いや、それも俺に運が向いて來たので……それとも、初めから俺自身にそんな力がそなはつてゐたのを、自分では氣付かなかつたのであらうか？」

王はかう考へつゞけて、此までに自分の手によつて爲し遂げた、いろんな事業を數へあげてみた。王は自分でも認めるとほり、實に神變不測とでも云ふべき策略縱横な戰爭の名手で、その數へ切れぬ回數の戰ひのうちには、只一つの失敗も見出されないのであつた。

「これや、やはり俺の力を少さく見てゐたのかなあ」

王はその刹那、ちよつと得意になつた。が、しかし、又よく思ひ反してみると、その誇りは只小さい城塞を陷したり、伏兵を發見したり、野營へ不意打を食はせる智慧と力で、そんな事にかけては勿論自分は卓越してゐると思ふが、そして又、それに關する天才的なえらさは何人の追從も許さないと斷言する事が出來るが、さて、こんなに壯大無類な大理石の都市を建設して、しかもそれを治めて行く力量があつたかといふ問題になると、やはりそこに何等かの空虚を見つけ

ないではをられなかつた。

「けれども……」

王はもう一度考へなほした。

「人間にはずいぶん自分では氣のつかない隠れた才能が潜んでゐるといふことだ。あのテーブ三世だつて、ゼリコン王だつて、何も初めから、あんな大きな國にしやうとは思つてゐなかつたらう?」

王はその事を今の自分の場合に當てはめてみた。が、それとこれとは全く根本的にちがつてゐた。で、王はその次に、昔から自分の知つてゐる限りのえらい國王や英雄のやつた仕事、人々が呼んで神の技だと讃へてゐる、それらの大きな事業を思ひ出して、自分の事と一緒に引き合してみた。が、やはりそのいづれも、今自分がやつてゐるやうに立派なものは、一つとして見當らないのであつた。

「すると一たいどうなるのだらう? をかしい事もあるものだ! 元々いやしい生れの俺は、あのラッグの大盃をグッとあふる愉快と、うまい羊の股の肉をしやぶる甘さと、少數の騎士によつて、大軍を惑はす快よさの他には何事も知らなかつた。その俺がどうだ? こんな雄大な大理石の都と城を造つた。そして世にも稀な一世の大王者と、この土の上に存在する、あらゆる國々から讃へられるやうになつたではないか? 俺はもうラッグの酒なんかに見向きもしない。薄荷の入つた涼しいラゴムと琥珀色の香ばしいハフラの他には、どんな盃も手に取る氣がしない。その上に、まるで書物といふものを手にした事のない俺が、ゼリコンの詩人のやうに、ギゼタスの紅い花びらに秘めた謎も讀めるし、昔のサクラハンの學者のやうに、少人の清らかな瞳のうちに、永劫とやらの輝きも認める事が出來る。そして、哲學とか、形而上學とか云ふ天地創設の幽玄な原理を、實體とやら、觀念とやら、現象とやら、流轉とやら、假幻とやら、こみ入つ

た考へ方にも並ならぬ興味をおぼえるし、バビロンの本にある、弧線と直線と角との組み合せの面白さも判るやうになつた。これや一たいどうしたわけだらう？　都を建てたのは、技師と學者だが、その主任となつて指圖をしたのは此の俺だ。今から考へてみれば、俺があの時、腕を組んでぐる〳〵と廣間を歩き廻つてゐると、身におぼえもつかぬ創見が次から次へ雲のやうに湧き起つて來て、學者たちをたまげさしたものだ。街々の角に彫像を飾つたのも、夾竹桃を植えたのも俺だ。それに俺は、そんな事を未だ誰にも敎つた事がないぞ。又敎はらうともしないぞ。ついうつかりとしてゐたもの〻、何だか他の者のやつた仕事のやうに思へてならぬ。幾度考へなほしても、こんな藝術的な大事業が俺に出來さうにもない。それに皆んなは俺を此上もなく崇め奉る。これでい〻のか？　これが巡り合せといふものだらうか？いや〳〵物のはづみで、こんなにまで整ふといふ事はありさうにない。すると、そこにはやはり人間技でないものが働いてゐるのだらうか？　それは一たい何者だらう？　星かな？　神かな？　それに俺はその星を認めぬと云つたぞ。そして、あの綠色のイルリエールの像を足蹴にして壞してしまつたぞ」

ギヨツとして王はあたりを見廻した。いつの間にか傾いた太陽が、廻廊に立ち竝んでゐる圓柱を斜に赤く照らして、その影を長く石甃の上に引き延してゐた。紫水晶の砂時計の砂はすでに滴りつくして、階段の上の三つ目の神像にもたれて、子供の奴隷がすや〳〵と居眠りをしてゐた。で、王はもうそれ以上考へる事を止して、その方へコツ〳〵と上つて行つた。

7

が、これと同じ時刻に、王宮の前の廣場に駱駝を休ませ、棕櫚の葉かげに身をよせて、夕日に赤く照らされた櫓の方

を見上げながら、ひそ〳〵と語つてゐた二人の旅人のさゝやきはなほもつゞけられた。
「そこがをかしいと思ふのぢや。こゝが若しほんとうの神々の都であるなら、街の人が一人も星を祭らぬといふ法はないではないか？」
頭に青い布を卷いた髯の長い男が、他の一人をふり反りながら、ジロリと眼を白く光らせた。
「しかし、こゝの王樣は神々の御一人だと云ふではないか？」
黄いろい布を腰にまとつた一人がさへ切つた。
「王樣の事は知らない。王樣は神々の御一人かも知れぬ。だが、吾々が寶石や更紗を商ふ街の人々は神ではない。辻を曲る娘にたはむれたり、夜中にこつそり青い灯をつけて、博奕を打つたりするのは神々にはなさらぬ事ぢや。それに、それらの人がまるで忘れたやうに、神々について一言も口に出さぬといふのが、腑に落ちかねるではないか？ 若しこゝにほんとうの神の生れ變りが住み給ふて、あの青い吹き流しが、いとも貴いシンの御標であつたら、街の角のどこかに、神々の愛しなさる白い山羊の姿が一つぐらゐは見えてもよい筈だと、わしは思ふ――」
「それならお前は、どこか他に、ほんとうの神々の都があるとでも云ふのか？」
「さうだ。この砂漠の遠い北の方に、高い絶壁が立てつらなつてゐて、昔から未だ誰もその上へは、登つた者がない。そこは世界の涯になつてゐると傳へられるし、又、怖ろしい魔界だと云ふ風說もある。が、聖なる星の使ひの語るところによると、その上には銀の砂漠があつてそこに眞正の神々の都があるさうだ。そして、それはサアダスリオンと云ふので、このバブルクンドとは違ふと云つてゐる」
「わしが聞いたアラビヤ人は、そのサアダスリオンはもうすでに無くなつて、こゝへ遷都し給ふたのであると云つた

か……」

「いや、わしはどうしてもサアグスリオンに、ほんとうの神々の都があるやうに思へてならぬ」

「しかし、北方から來たそのアラビヤ人に聞くと、サアダスリオンよりもこの都の方が美しいさうだ。わしも又、こんな立派な城や街は、人間技では出來るものではないと思ふ」

「さあそこぢやて」

一人は息を呑んだ。

「サアダスリオンが綺麗だと云ふ者もあれば、バブルクンドの方が一さう勝つてゐると云ひふらす者もある。何にせよ、神々の都が地の上に二つも現はれるといふのは今までには無い事じや。けれども、只、その外觀だけでもつて、どうのかうのと決めるのは、賢い者のやる事ではないと思ふ。——聖なる星の使ひの長の話によると、サアダスリオンの旗の三日月は、こゝにあるものより一さうきらびやに輝いて、その上、遠い砂の上から望むと、都のまんなかゝら中空へかけて高く、神々しい七色の光の矢がさして、それを見ると、思はずひれ伏してしまふさうだ。が、わしはそれでいづれがどうと云ふのではない。それは怖ろしい事ぢや。只、その判決を時の力に待つのだ。すべてをしろしめす神々は、又すべてを御心のまゝに運び給ふであらう。それはあさはかな人間の頭には測り知れぬ事ぢや。何しろ、わしは、この都の隆盛はほんとうの治り方でないといふ氣がしてならぬ……」

彼はさう云つて、急に思ひ出したやうに、額に手をやつて口をつぐんだ。

「つまり、どちらかゞうそなのだね」

しばらくして、黄色の布をつけた方が小聲で問ね反した。

「さうぢや、サアダスリオンとバブルクンドと、いづれが正しいものか、今しばらくの時を待つばかりぢや」

「そして、若しこの都がいつはりものであつたら、どうなるのだらう？」

「怖ろしい運命が、この白い大理石の市街の上に落ちるだらう」

嚴かな口調で靑い頭の男が云つた。

「何？　怖ろしい運命！」

一人はおどろしいやうに、聲を高めて聞き反した。

「さうだ。怖ろしいすべての滅びが、このバブルクンドに來るだらう。聖なる星の使ひの長の言葉によると、神々を欺き、星の名をかたり、星に逆いて榮えた國のためしは無いのぢや」

「おゝ、そして、その怖ろしい報ひが來ると云ふのか……」

黃いろい布の男はひとり言のやうにつぶやいて、赤い夕空のなかに立ち並んだ尖塔を見やつて吐息をもらした。

「この間、眞夜中に砂漠を通つて來た隊商は、頭の上の星が、一面その座を亂して輝き、何者とも知れずにその間を、アローアローと、渡のやうに呼び交してゐる聲を聞いたと云ふ。一行の老人の話によると、あのハジムール國の王子が失はれた夜と、同じ空であつたと云ふ。又、今朝、市場で逢つた若い男は、昨晩セムの丘から、北方に當つて、不吉な靑い星が、おびたゞしく流れるのを見たさうぢや。それに、昔、この城下に、目まひがするくらゐ一面に咲き匂つてゐた蘭の花が、一つもなくなつたのも、不思議と云へば不思議な事ぢやないかの……」

そこまで來て、髯の長い男はさらに低く聲を落して、しはぶきしながらつけ足した。

「何にせよ、變つた事がなければよいが……」

二人は申し合はしたやうに、だん〲と暗くなつて來る、砂漠の空に目を注いだ。槍をキラ〲光らした衛兵が、その前を行きすぎた。

8

こんな事はもう、市民や衛兵の間にまでも語り交されてゐた。とは云ふものゝ、いつでもその通りだと云ふのではない。云はゞ、それは朝夕に、遠い砂の涯に浮ぶ、あるかないかの雲のたゞずまひのやうに、ふとしたはづみに、人々の心をかすめる事で、うはさとても、只、夕方に辻の廣場の椰子の葉を渡る風のそよぎのやうに、かすかなもので、表立つて云ひ出す者なんか勿論一人もゐなかつた。それが公になるためには、未だバブルクンドはあまりに幸福な燦爛たる夢をたゝへて、市民を醉はしてゐた。いや全く或る瞬間には、そんな心配は王都の結構なるあまりに起る、ほんの杞憂にすぎないやうにも思はれた。そして、眞青な大空へ悠然とそゝり立つた眩ゆい大理石の輝きには、何のそんな忌はしい兆しも起りさうに見えなかつた。が、しかし、この時はすでに、マアマの高い絶頂をゆるぎ出した宿命の岩は、もう止める事の出來ない加速度をもつて、險しい斜面を、眞黒なムングの海に向つてころがつてゐた。そして、或る朝、眠から醒めた大理石の市街がうす紫の衣を脱ぎすてゝ、桃色の朝日のなかに平和な姿を浮彫に現はした時、心のなかにかすかに根ざしてゐた豫感が當つて、ハッと互に、人々が顏を見合はせたやうな事が、誰の口からともなく街中に傳へられた。

9

その前の宵である。王は宮殿の居室に面した高い櫓の上に出て、折から砂漠の彼方から忍びやかに滑つて來る夜のカーテンに、だん／＼と包まれて行く、永遠の都の全景を心高らかに眺め渡してゐた。ちやうど砂に沈んだばかりの夕陽に、しばらく燃え立つ紅ゐと金色に染つてゐた市街は、束の間にその色あせて、こんどは淡い黄色に變つた。そして、又、瞬ぐうちに樺色、紫、青……夕空の千變萬化を映して刻々に變轉するたそがれ時の大理石の都は、いつもながら膽を奪ふばかりに奇觀壯麗をきはむるのに、この夕は又一しほの微妙さを加へて、それはどんな名匠の筆にも成り難く、如何なる詩人の想像にも及び難いまでに、變幻自在に移りめぐつて、空にある夕榮の雲の高殿と、地上にあるこの都と、互にその美と怪とを競ひ、どちらがどちらの眞似をしてゐるのか、見きはめるのも六つかしいほどであつた。そして、高い櫓の上に、黄金造りの冠をキラ／＼光らせて立つてゐる、緋色の衣をつけたセム王の姿は、正しくこの天上界と地上とのすべての美の主宰者である、ヨーハナの神そのものゝ化身であるかのやうに見えた。この瞬時こそ、あの宮廷の詩人が歌つた「天上の星にも增つて輝くベブルクンドの權勢よ！」といふ言葉も、まだなか／＼に云ひ足りないと云ふのもおろかな事であつた。

王は言葉もなく、この人間の言葉を持つてしては、到底云ひ表はす術もない、壯絕なしばらくの間を、只、醉つたやうに見守つてゐたが、さて、ふと、その赤い西の空にかゝつてゐる、さはやかな三日月の姿に目をとゞめた。云ひ知れぬ色に澄んだ青が、カシミヤの絹織物の綾にも似た紅ゐのなかに、ぽーつと紫を染め出して、柔らかに溶け入つた中間に浮彫のやうにひつかけられたその黄金の弓は、又一段王の感興をそゝつて、王はまたゝきもせずその方に瞳をこらしてゐたが、やがて、輕い悦を浮べた顏をふり向けて、傍に坐つてゐた寵愛のイクタリオンに、指さし示した。

「お前の眉にも似かよふではないか？」

から云つて王は笑つたが、イクタリオンは消え入りたげな媚を浮べて、孔雀の大きな羽うちはで王の肩を打つた。で王はさらに聲高くカラ〳〵と笑つた。が、さて、この時、ふと横にそらした瞳に映つたのは、次の櫓の上に立つてゐる青い旗である。晝間は强烈な日光を受けて、熱風の裡に燦爛と輝きひるがへつてゐた新月の吹き流しも、夕が來て風が落ちると共に、ばつたりとだらしなく、矢に射落された鷲のやうに、長い竿の先からぶら下つて、吹くともない風に、身悶えするやうにゆれてゐるばかりである。そして、あの西空にある新月は、いや增すさはやかな光を放つて、これは又何と超然として冷やゝかに、腹立たしくもその黒い旗を見下してゐる事ぞ！　王の顏色はサツと不興氣に變つた。そして、突然立ち上るなり、聲も荒々しくその三日月を指さしてどなつた。

「惡魔！　惡魔！　あれはバブルクンドの光輝を落すために現はれた惡魔の化身である！　弓を引け！　バブルクンドの聖なる旗標に侮蔑を與へるあの不敬者を一放しの下に射落せ!!!」

あたりを顧みて王は叫んだ。が、この突然な、常軌を逸した有樣を見ては、何人も只おどろき怖れて顏を見合すばかりである。

「早く！　何故ためらう!!!」

王は目をいからして叫びつゞけた。

「卑怯者！　高が知れたシンの如きに臆する者はこの城中に居なかつた筈だ！　誰か、速に弓を引け！……」

一同は茫然とこの狂態を見守るばかりである。いらだつた王は、腰から劍をすらりと引き拔いて、おどろいて袖をとらへたイクタリオンと侍從長をふり放して、たじろぐ人々の前を櫓の端に驅けつけるなり、劍を中空の三日月に向つてハツシと投げつけた！　刄は青い夕闇のなかにきらめいて、劍はクル〳〵と廻りながら、空高く舞ひ上つたが、不思議

にも、その中途から突き反されたやうにもどつて來て、アッと云ふ間に、折から弓に矢を番へてそれへ驅け出した、小姓のサアンの胸に當つた。と同時に、サアンの身體はうつ伏せに石甃の上に倒れて、赤い血が夜目にもしるく白い大理石の上にほとばしつた。

集つて來た警衛の武士の手によつて、矢は矢つぎ早に三日月に向つて射られた。が、しかし、いづれも只虚空に空しい弧線を引いて落ちるばかりで、そして、三日月は、もはや、遠い地平線に、その果敢ない武士のたはむれを、あざ笑ふかのやうに、又この世にもない王の怒りから、靜かに逃れやうとするかのやうに、悠々と沈んで行くではないか!?……

10

しかし、このうはさは市民たちに取つて、事實として信ぜられぬ事であつた。耳にした當座こそ、一やうにショックをおぼえたものゝ、又、考へなほしてみると、事柄はあまりにとりとめもない。あの神の智慧を持つた王が、月に向つて劍を投げつけたなどゝ云ふのは、たとひ冗談にしてもありさうな事ではなかつた。そして、人々はそれを根も葉もない流言として葬らうとした。

その次の日である。學者の長をつとめてゐたバアガスは、突然、王の前に呼び出された。そして、只ならぬ王の氣色を讀んで、その前にひれ伏した時、王の口からこんな嚴命を申し渡された。

「大空に輝く三日月と同じ光を放つ物を造り、それを八方から眺め得るやうに、檣の上の旗にはめこんでもらいたい!」

バアガスはおどろいて王の顏を見上げた。——曲りくねつた階段から出來た迷宮も、數百人の力も開き得ない扉も、彼に取つては六つかしい仕事ではなかつた。しかし、大空の月と同じものを造り、しかもそれを旗のなかへ入れようと

は、何といふ不合理な命令だ！　これがあの日頃から科學に充分な理解を抱いて、時にはおどろくべき意見を呈して、研究を助けてくれる王の口から出た言葉だらうか？　バアガスは冗談ではないかと疑つた。けれども、王はどこまでも眞面目であつた。バアガスは見當を失つた。が、王はその返答を待つてゐる。そこでバアガスは、一段と前へ進み出るなり、おそる〳〵口を切つた。

「陛下！　吾々は駝鳥のやうに速やかな車を發明しました。それはフエキニ人の巧妙な獵の道具を元にしたのです。又太陽のやうに明るい水銀ランプを持て、夜の廣間を晝の如くに照らしました。それはバビロンの化學と光學の原理を應用したのです。けれども陛下！　申すまでもなく、これらはなほ人工の上の事柄です。それを持てたゞちに生きてゐる鳥の速さ、天上にある太陽の光輝と比較する事は出來ません。バブルクンドの標旗の月が、天上にあるそれよりもきらびやかに輝くといふのは詩人のたとへです。科學の言葉には、いさゝかの誇張も形容も入れてはなりません。その嚴密な規則によつてこそ、吾々は驚くべき考案の數々を完成せしめる事が出來るのです。そして、若しこんな言葉が許されるならば、この大理石の都とても、なほ朝夕に天上に出沒する雲の高殿の美に比ぶれば、遙かに遜色がある事を陛下は御承知でございませう。けれども陛下、この市街は、古來から人力によつて達し得たものゝ最高を代表してゐます。何人かよくこの百萬分の一だにも爲し得ませう。四邊の國王は等しく神々の都とまで讃嘆してゐるではありませんか！　そして、陛下はその完成者なのです。しかも陛下！　なほこの上に、新月の實物を造るといふのは、陛下、それは不可能かと存じます。けれども陛下、それは陛下の力の不足を意味する事ではありません。自然と人工の間に横はる根本的の差異によるのです」

「判つた！」

そこまで辛抱して聞いてゐた王は、とう〳〵うるさゝうに手をふつた。

「お前はシンの神を怖れてゐるのか⁉」

改まつて向きなほつた王の目は氣色ばんでゐた。

「いゝえどうして！　陛下、私はシンを信じません。只、この世界を司る風と火と水との三つの力を認めるだけです」

パアガスはあはてゝ云ひ譯をした。

「では、どうして月が造られぬと云ふのか⁉　お前はかつて南方から來た星の祭司の前で、シンの存在を否定して、この世界は只風と火と水の三原素によつて運行されるもので、その力を人工に依て自由に利用する時、シン神はおろか、たとひマアナ・ユウド・スウシャイの奇蹟とても何程の事があらう。我が圓屋根の下はそのまゝ、百神去來してその技を競ふシツシュの殿堂たり得るとまで揚言したではないか！」

「それは……」

パアガスは行き詰つた。

「さあ、そして」

王の言葉は迫つた。

「吾々はこの都によつてシンを笑つた。しかも、憎らしくも美しい新月が月の初めに、その都を西の空から見下してせゝら笑つてゐたのだ。――何と踏みつけられた話だ！　幸ひにして市民は氣付かないものゝ、一朝それに目をつけて、その大空の月と、櫓の竿に死んだ蝙蝠の如くひゝかゝつた旗を見比べた時、バブルクンドの名聲は忽ちに地に落ちてせアダスリオンとの對立は破られ、王朝の失脚は火を見るよりも明らかな事實である。王宮の射手は總出を排て、昨夜、

三日月に向つて數百本の矢を放つたが、いづれも力弱くしてとゞかなかつた。この上は、吾々はその月の光輝を奪ふものを櫓の上に押し立てゝ應戰をしなければならぬ。そして、バブルクンドの權勢をいや增しに保たねばならぬ」

王は說きさとすやうに、せつかちに云ひつゞけた。バアガスには反す言葉がなかつた。いや、いろんな事が胸のうちで縺れてゐたが、その時、ほとんど眞青になつて痙攣してゐる王の顏を見ては、それが口に出なかつた。そして口

「吾々は出來るだけの力を盡してやつて見ませう」

と、答へて、そのまゝあたふたと引き退つた。

11

さて、ドームの下の圓卓をかこんで、有名な學者が卄名ばかり額を合せた。立ち上つたバアガスは續けて云つた。

「諸君、今述べたやうな次第なのだ。亂暴と云はふか、荒妄と申さうか、どうも今度の仰せばかりには、わしもたまげてしまつた。だが命ぜられた以上、吾々はどこまでも完成しなければならぬ義務がある。と云つて、一たい何から手をつけていゝものか、第一に六つかしいのは、あの細い一つのかぎ形を、八方から眺め得るやうにしなければならぬ事だが、これやまるで正三角形を逃れといふやうな問題、いや、それも、調べやうにも考へるにも、足の踏み場のない遙かな虛空に存在するもので、全く途方にくれてしまふ。カツサン！　三日月と云ふものは、横から見ると、一たいどんな格好をしてゐるものなのだ？」

パアガスは、褐色の長い衣をまとつた天文學者の方に首を向けて問ねた。

「さあ？　あんな形に大空が切り拔かれるのだとも云ふし、あんな金色のものが張りつけられるのだとも云ふ。又、イ

ラロメオンといふ怪牛の爪を、二つ繼ぎ合したものだと云ふ說もある。鐵の糸で綴じた古い本にはさう書いてあるが、お伽話に類する。ゴブラインドが、バビロンの都にある精巧な望遠鏡を用ひて觀測したところによると、水管を立ち割つたやうなものが、横にたれ下つてゐたさうだ」

「うん、その他にもつとくはしい研究はないのか？」

「今分では、この他に何の意見も提唱されてゐない。何しろ神様だと云ふので――」

「アパス！　君の幾何學ではどんな意見だ？」

パアガスは、こんどは數學者に向つて問つた。

「さあ……」

アパスも當惑顔をした。

「シンの標だからと云ふのか？」

「全く、どの本もそれには觸れてゐないので」

彼は苦笑をもらした。

「困つたものだな。しかし、一たいあの構成材料は何だらう？　黄金だらうか、あのすきとほつた輝きはキブ山の金に似てゐるが、ぎら〳〵したキブの金には、とてもあのやうな優しい光は出せぬ。……」

「シンは東方に持山があるさうだ。そこで採つた金かも知れぬ」

建築係りの學者がそばから口を出した。

「それやどこなのだ？」

「何でもヤン河の上流にある、ゴーグといふところださうだ」
「何？　ゴーグ？　カアン、君は知つてるかね？」
「ゴーグ？　聞いたことがない」
地理學者のカアンは首を傾けた。
「わしの思ふに、シンなんか要するに空想の産物で、そんな土地なんか實在するものではない、早い話があの神々の都だつて、わしは氣紛れなアラビヤ人の見た夢にすぎぬと思ふが……」
「いや、そんな事は後まはしだ。吾々は早く三日月を製造する義務があるのだ！」
バアガスはせつかちに叫んだ。彼等は日が暮れるまで、そこでどうして月を造らうかと云ふ事について、いろんな相談をつゞけた。

12

次の朝、未だ日が上らぬ頃から、王廷の一隅にあるドームと、それに隣りした廣大な工場の内外は、月を製造すると云ふ空前の仕事のために、物々しい活動を初めた工人や技師によつて混雜を呈してゐた。
キブ山から、領土にあるすべての鑛脈から、そして又、もつと遠方に發見された丘や谷から、キラ〳〵と光を放つさま〴〵な種類の石が運ばれて、それは工場の前を埋めた。建物の内部には、その中央に新らしい爐がもうけられて、青い焔がゴーゴーと燃え上つてゐる。一隅には數十人の木工が鑿や鉋を忙しく使つて、實驗室の方から廻される設計圖にしたがつて、大小無數の三日月の雛形を急いでゐる。それは粘土工の手に移つて、砂のなかに押しこまれて鑄型に取ら

れる。そのなかへ、爐にかけられた壺のなかでどろ〳〵になつた鑛石の熔液が流しこまれる。從事する者はいづれも烈しい光とむせ反る煙を防ぐために、黑曜色の眼鏡のついた赤い頭巾で顏をおほふてゐる。バアガスがその監督に當つて、あちらこちらに忙しく驅づり廻つてゐる。片方のドームの下では、カツサンやカアンが手分けをして、鑛石の細片を玻璃管に入れて、焰にかけたり、金槌で打つたり、藥品にとかしたり、又、複雜な化學方程式をくり反し書いては、調合の研究に血まなこになつてゐる。

鑄型は幾回も造り變へられ、鑄造の度も重なつて三十回にも及んだ時、鏡のやうに磨きのかゝつた人造の三日月が三箇出來上つた。バアガスは、その黃金の月をいくつか組合して、東西南北から各一つしか目に入らぬやうにするつもりであつた。が、しかし、その部分々々の美しい出來榮を見ても、又その完成を豫測しても、王に命ぜられた事と引き合して考へた時、バアガスは重い吐息をつかずにはをられなかつた。彼はその由を告げねばならぬことを知つてゐた。けれども、近頃、にはかに短心になつて、怪しきさまにまで見える王に、若しそんな答へを聞かせやうものなら……さう考へると、又、或る不安をおぼえてためらはずにはをられなかつた。

13

やがて一月は過ぎて、西の夕空には又美しい黃金の弓が浮んだ。

偶然にもそれは、廻廊を出らうとした王の瞳に止つた。王はつか〳〵と欄干のかたへ驅けよつた。けれども劍を投げやうとはしなかつた。そのあまりに淸楚な姿が、王の心をうつとりと引きつけたのである。で、王は兩腕をくんだまゝ我を忘れたやうに、しばらく見守つてゐたが、そのうちに何事かの沈思に耽るやうに見えた。あの月をあそこから拔き取

る事は出來ないものだらうか？……そして、旗のなかに縫ひつけられないだらうか？……王は、そんな及びもつかぬ子供じみた望みを、それもあまりに美くしく優婉な、この宵の月故に起したのであるが、それにしても又、堪へ難いあの一月前のいまどほろしさが、むら／＼と心中に燃え上つて來た。

「バアガスを呼べ！」

王は突然、から叱るやうに後をふり向いてどなつた。

石造りの圓屋根の下で、青い煙にむせんで、數多の工人の指圖をしながら、三日月の製造に懸命の努力をつゞけてゐたバアガスは、今しも新らしい細粉を眼鏡にかけやうとした時、王の前へ出るやうに傳へられた。

「バアガス、もう一月にもなる。おまえたちはもう月を造つたであらう!?」

王はその顔を見るなりに云つた。

「お前の學識と才能は、俺も早くから信じてゐる。三日月は出來たか？　八方から眺め得る旗標の月は!?……」

王は默つてゐる老いた學者に云ひ迫つた。逃れぬところと覺悟したバアガスは、身を限りもない苦惱の淵深くへ投ずる思ひで口を切つた。

「陛下！　お憐れみを下さい。吾々は君の命によつて、日夜研究をつゞけてゐます。只今はすでにその第六十三回目の鑄造に取りかゝりました。それは目も眩ゆい光を放つに至るでせう。けれども陛下！　それが如何に完成されやうと、なほ今宵の紫いろの中空にかゝる、あの匂はしい姿に比べるべくもありません。私は今それを明らかに知りました。そして此上は、全く如何なる科學力と頭腦に賴つても、努心は遂に秘めた吐息を砂漠の風に向つて洩すに等しく終るでせう。陛下！　ひとへに寛大な慈悲をたれ給ふて、吾々の胸中を御了察下さい……」

そして、バアガスは身もあらぬ心地に王の顏をうかゞつた。が、王は何とも答へない。

「陛下！ひとへに御了察を下さい！」

バアカスの聲はふるへた。

「あれが一つ出來ないのか？　バブルクンドはシンのためにこんな侮辱を受けてゐるのに、俺はどうする事も出來ないのか！」

王は、今しも彼方の高塔の向ふにかくれて行く三日月を見て、低い聲でつぶやいた。その月は赤く不吉めいた光を放つて、何かの事變を豫想させた。

その刹那である。王の目は異樣に光つて、その右手にはすらりと拔かれた劍がきらめいた。ハツと眞青になつて身を退かせたバアガスめがけて、王は劍をふり上げた。

「卑怯者！　お前はシンのまはし者であらう⁉」

その言葉にはもう常人のひびきはなかつた。そして、間髮も容れず狂人の劍の刄は、バアガスの肩に落ちたのである。

14

王はさらにその大命を數學者のアバスに命じた。バアガスの運命を知つてゐる彼は、身を縮ませる思ひで新らたなる三日月の製造に從事した。先に鑄造されたものは彼の手によつてさらに幾囘となく鎔なほされ、廻轉仕掛になつた圓錐形の臺の上に取りつけられた。それは、やつとその次に新月が現はれた宵の間に合つた。しかし、實驗室で、その巧妙な出來榮に手を打つて賞讃した王も、やがて、塔の上へ運び出されたのを見てはひどく表情を變へた。あの虚空に悠然

とおどそかにかゝる匂はしき姿に比べて、それは何と又間の抜けた光であつたらう、螺旋仕掛でクル〳〵と廻るこの月は、何と拙劣な子供欺しだ！　王の顔にはだん〳〵と險惡な雲がかゝつて來た。そして次の朝、數學者のアバスはすでに冷たい骸であつた。

王はその次に建築家を呼び出して命を下した。そして、彼の上にも一月の後には、先の二人と同じ運命が落ちた。平和と歡樂に充ち溢れてゐたバブルクンド王宮も、かうして新月の頃になると、戰慄と恐怖の呪ひの宮と變つた。そして、三日月が出る度に現はれる王の發作は、その細い月がだん〳〵と大きくなるにしたがつて薄らぎ、やがて滿月となり、夜もすがらその青い光が、大理石の市街を水底の都のやうに照す時には、以前の王といさゝかのちがひも見出されなかつた。が、その月が又かけ初めて、闇となり、そして、又再び西の空に細い鎌形となつて現はれた時には、さらに幾層倍の險惡を加へてよみがへつてゐた。そして、月の盈缺の重なると共に進行した、この奇怪な物狂ひの容體は、とうとう滿月の頃になつても、なほ王をいらだゝせて、王宮中を驅けめぐらせ、金屬製の器物を見ると、忽ちシンの片割だと叫んで、手荒しく投げつけたり、劍をふり廻して向はせるまでになつた。

いつしかこの事は街に傳はつてゐた。晝は群青を映じた檣にひらめく吹き流しを仰ぎ、夜は赤い燈影のもれる高い窓を眺めて、市民たちは、一やうに物に憑かれたやうに落ち付かぬ心持で、ひそ〳〵と取沙汰を交した。その間には、宮中にはすでに十三人の有名な學者と、三百人の奴隷の血が流れたといふ事が聞えた。輪をかけるやうに、日毎に城門からくりこんで來た旅人も、今はその數がずつと減つてしまつた。大空一面に散らばつた星屑に飾られた夜も、もう市民を以前のやうな、安らかな心地で眠らせなかつた。北天のスルブからクリシン座にかけて、血のやうな色をした彗星が現はれたとか、辻々にある石の神像が、眞夜中にづしん〳〵と地響をあげて、都のまはりをめぐり歩いたとか、ポルタ

ニイズの絶壁の方角に、眞黑い煙が一すじ雲のやうに立ちのぼるのが見えたとか、そんな不穩な流言が巷の角々に起り、王宮のなかで、わけもなく物におびえたやうに、吠えつゞけるライオンの聲が、日夜、寂れた街區に響き渡つて、云ひ知れぬ怖れが、もう何の憚るところもなく、黑い大蝙蝠と一緒に、家並から家並をかすめて飛び交してゐた。

15

そんな底知れぬ不安な氣持で、市民たちがバブルクンドの都から、西空に浮んだ三日月を眺めた 最後の宵の事である。

こつそりと、東の方から忍んで來る夜の脚が、未だこの街の敷石の縫目の細い條もわからなくしない頃、市民たちは、王城の方で起つた、時ならぬけたゝましい銅鑼とラッパの響に、驚いて街上に飛び出した。と同時に、王宮の西門から、キラ〳〵と輝く槍と楯を持つた、眞紅色のよそほひをした騎兵の一隊が驅け出して、城門を拔けて一散に、西の方へ進んで行くのを見た。あつけに取られた人々が、何事と考へるいとまなく、城門や屋根や塔に登つて、瞳を張つてその行方を見守つてゐるうちに、騎士の一隊は鳥のやうに速く砂上を横切つて、刻々に縮まり、その砂煙のかたまりはとうとう芥子粒ほどの大きさになつて、赤と青のうすい光が入りまじつてたゞようてゐる、遙かな丘の向ふへ消えて行つた。……

その一隊の先頭には王が立つてゐた。それはバブルクンドの王でなく、再び復活した、狂恣たぐひなき北方の流星といふ仇名を取つた昔日のシッズであつた。王は今宵、王朝の唯一の仇敵である三日月に向つて、精英な龍騎兵の突撃を開始したのである。王は眞先に劍をかざして、血走つた目で中空の月をにらんでゐる。疾走によつて起る風は、その兇

の後でピユーピユーと叫る。それくらゐ馬は速く驅けてゐるのである。それに從つて三角形の編成を持て進んでゐる三百の騎士も、どこをどう走つてゐるのか判らなかつた。只、耳に王の叫びを聞き、手にしつかりと手綱を握つて息をこらしてゐるだけである。そのやうにそれらの部下は、突貫に神のやうな手腕を持つたシツズの一令の下に、只一騎の如く走つてゐる。かゞめてしつかりと馬の胴をおさへた兩脚の下には、只蹄に蹴ちらかされる砂が飛び散り、丘を登り、斜面を下り、まつしぐらに進んでゐる事をのみ知つてゐる。かうして、騎兵隊はだん〴〵と月に近づいた。が、月もそれと共に退いて、もう地平線に近く落ちかゝつた。王はいらだつてさらに鋭く叫ぶと共に、兩方の拍車で强く馬の腹を蹴つた。一同はそれにならつて、三百の馬は一せいに狂ひいなゝくと、一隊はさらに速く、矢のやうに、又電光のやうに突進した。千二百の鐵蹄はすさまじい勢にサボテンの群を蹴り飛ばして、その前には、うすら明りの空を、鋸の齒のやうな影でさへ切つた岩山が現はれた。三日月は赤く染つて、その險しい峯の一つに隱れやうとしてゐる。必死となつた騎士はその月をめがけて、一せいに弓を取り上げた。馬の蹄は石に當つて火花を飛ばし、崖を躍り越えて頂上の方へ驅け上つた。そして、今や月はその向ふ側の深い谷間へ下りやうとする、一髮も容れないこの瞬間、ふり上げられた王の劍は、岩角に馬の足がつまづいたはづみに、その手をすべつた。

「それ！　エリゴン!!!」

王は叫んだ。

次に從つたエリゴンは、見上ぐるばかりの斜面を、人間技ともおぼえぬ速さで驅け上るなり、手にした長槍を、落ちかゝつた月にサツト差し出すなり、上に向つてそれをはねた！　ねらひは誤またずに、三日月は穗先に引つかけられて、クル〳〵と大弧を描きながら廻ると、カチン！　と、音を立てゝ遠からぬ岩の上に落ちた。

——エリゴンの乘馬は、そのはづみに、激しい惰性をとゞめかねて、絕壁の端からキリ〳〵と獨樂のやうに舞ひ落ちた。が、いち早く身をひるがへしたエリゴンは、危いところで、その切岸に踏み止つた

馬上に立上つた王は、滿足げに大きく兜をふつた。一同もそれに合して、一せいに槍をさし上げた。山上に殘つたサッアイライトにきらめくその穗先！　繰り反される萬歲の聲！　それは山もゆるがすばかりに、山彥を造つて深い谷底の方へひゞいて行つた。……

打ち落された月が、馬背にゆはひつけられた、青銅の箱に納められると、一隊はくつわを反して山を下り、凱歌にまかして元來た道に引き反した。

16

あたりは眞暗になつて、頭の上には青い星がきらめいてゐる。そのなかに只蹄にはね反される砂と、鎧と楯と槍のすれ合ふ音が響いた。疲れたのか誰も默々として、ひたすらに路を急いだ。そして、時はすでに半夜近くにまでなつた。がどうしたのか、東方の空には、まだ赤い灯のうつりさへも見當らない。王は小高い丘に驅け上つて、星明りに四方を隅もなく見渡した。が、やはりいづこも同じ星屑を持て充されて、只、徒らに頭の上で、シューと星が流れるばかりである。不思議な心持で、一隊はとう〳〵終夜東に急いだ。そのうちに夜が明けた。けれども、やはり、いづこに目をやつても、踏み殘して來た蹄の趾は、いつの間にか風が持ち去つたのか、それともあらぬ方角に迷ひこんだのか、只、人趾微塵もとゞめぬ茫漠たる砂原がうつるばかりである。

「どうしたのだらう？」王は訝しさうに首を傾けた。昨夕はわづかに傾いた月が、山に隱れるまでの時間に到りつくし

た距離が、こんなに手間取るわけがない。さりとて、道を間ちがへたものとも思はれぬ。が、この時、王はふと、夢中で考へるひまがなかつた、月を落したあの前夜の岩山の事に思ひ當つた。「はて、あれは一たいどこだつたらう？」長年砂漠の戰爭に從事して、その地理に詳しい王も、バブルクンドの近くにそんな山がある事を知らなかつた。「こいつは少しをかしいぞ！」王の頭のなかはもつれて來た。「近くばかりでない。西の方には絕對に山なんか無かつた筈だ。いつか俺の部下が、三百里あまりも進んだと云ふが、それでもなほ先は、砂山つゞきであつたといふ事だ。すると、やはり方角を取りちがへたのかな？」と、考へなほしてみたが、月が沈んだところだから、どうしても西としか思へぬ。王の頭の奥からこゝに、かすかな記憶が呼び起された。と云ふのは、砂漠の西の涯には、メドといふ怪物が住むゴクザナといふ山があつて、その向ふが深い谷に終つてゐるといふ言ひ傳へであつた。「他に山がないとすると、あそこはゴクザナだつたらうか？」馬首を涯しもない砂原の彼方へ進めながら、王は考へつゞけた。「ではバブルクンドから一たいどれほどの道程だらう？　たしかに、さう、千里はなければならぬ。すると、その千里を昨夕のあの一刻に乘り切つたのだらうか？」輕い身ぶるひが身中を通りすぎて、王は思はずあたりを見廻した。が、すぐさまにその考へを押し除けた。「そんな馬鹿な話はない。何かの聞きまちがひだ。とかく豫言者や巫女なんていふ奴は出たらめの問屋だから……」けれども、王の顔色は少し青ざめて、胸さはぎがし出した。が、王は努めて豪放をよそほひながら、大きな聲を出した。

「きつと大迂回をやつたのだ。もうすぐにバブルクンドは見える筈だから」

そして、手綱を引いて馬の脚を早めた。

しかし、一隊はその日も一日中、燃えるやうな熱砂の上を走りつゞけた。次の日も、又その次の日も、やはりあてもない砂上をさまよつた。元より突然に編成された騎兵の一隊に、そんな用意のあらう筈がない。まづ馬が倒れた。それ

から人が倒れた。食糧はない。そして又反逆、誰も見てゐない淋しい砂の上では、世にも怖ろしい慘虐がくり反し行はれた。……

かうして、槍は落し、兜は失ひ、美しい龍騎兵の眞紅の服の色もあせてボロ〳〵になり、馬三匹、人間七人となつた一隊が、夕方のうすら明りのむかふに、ほの白いものを見つけて、胸をおどらせて近づいたのは、もう二月も經過した後であつた。

17

その白いものは果して大理石であつた。が、そこはバブルクンドではなかつた。仮てバブルクンドであつたところであつた。――輪奐をきはめた高塔と圓屋根と城壁は、すでに數千年の風雨にさらされたやうに、朽ち倒れ消滅して、只、半ば砂に埋もれた礎と圓柱の斷片のみが、壓するやうな寂寞のうちに、墓石の如くつらなつてゐるだけであつた。あまりの有様に、王と殘つた部下とは、只茫然と顔を見合すばかりであつたが、やがて、かすかに名殘をとゞめてゐる、心當りの路をたどつて、王宮の位置にまで足を運んだ。そして、そこに砂におほはれた階段の一部と、廻廊の彫刻と、見つけた。ひざまづいて、果敢ない望みに、物狂はしく砂をかきのけてゐた王は、やがて、思ひ當つたやうに立上つてよろ〳〵と、倒れさうになつた馬に近づいて、その背から青銅の箱を取り卸した。しかし、王の腕はその重量に堪へなかつた。箱はその手からすべり落ちた。そのはづみに蓋は開いて、そのなかに、三日月の形に殘つてゐた赤い月が、形を毀して、バラ〳〵と、白い石甃の上にこぼれた。と、同時に、怪しや一むれの黄いろい烟が、パツと立ちのぼつて、瞬くうちに砂はなくなつた！………

「おゝ」低いうめき聲をあげて、王は右手に西の方を指さした。――その美しいうす紫の中空には、かつて櫓の上から見たのと同じ三日月が、悠然と、黄金の弓に似たさはやかな姿を、かゝげてゐるのであつた。……

その夜、怖ろしい、すべてのものを埋め盡す大旋風が起つた。物凄い雷鳴と稲妻をともなつた、その眞黒い巨大な死の風の脚は、果然として、バブルクンドの廢墟に迫つて來た。

ピカピカツ！

中空の闇を斜めにつんさいて、鋭い紫色の火の矢が走ると、

パシツ!!!………

天地も砕け散るやうた響を立てゝ、眞青な火柱が立つた！　火花が一面に亂れ飛んで、地を劃つて、眞紅の焔の翼が擴がつた！

凄まじく砂が卷き上つて、堀り反された大理石の礎や柱は、雷光に照らされて、飄々と虚空に舞ひ上つた。

轟々と鳴りはためく、世界終滅の雷電と暴風の呻の間に

ガラガラガラ！　ガラガラガラガラ……………

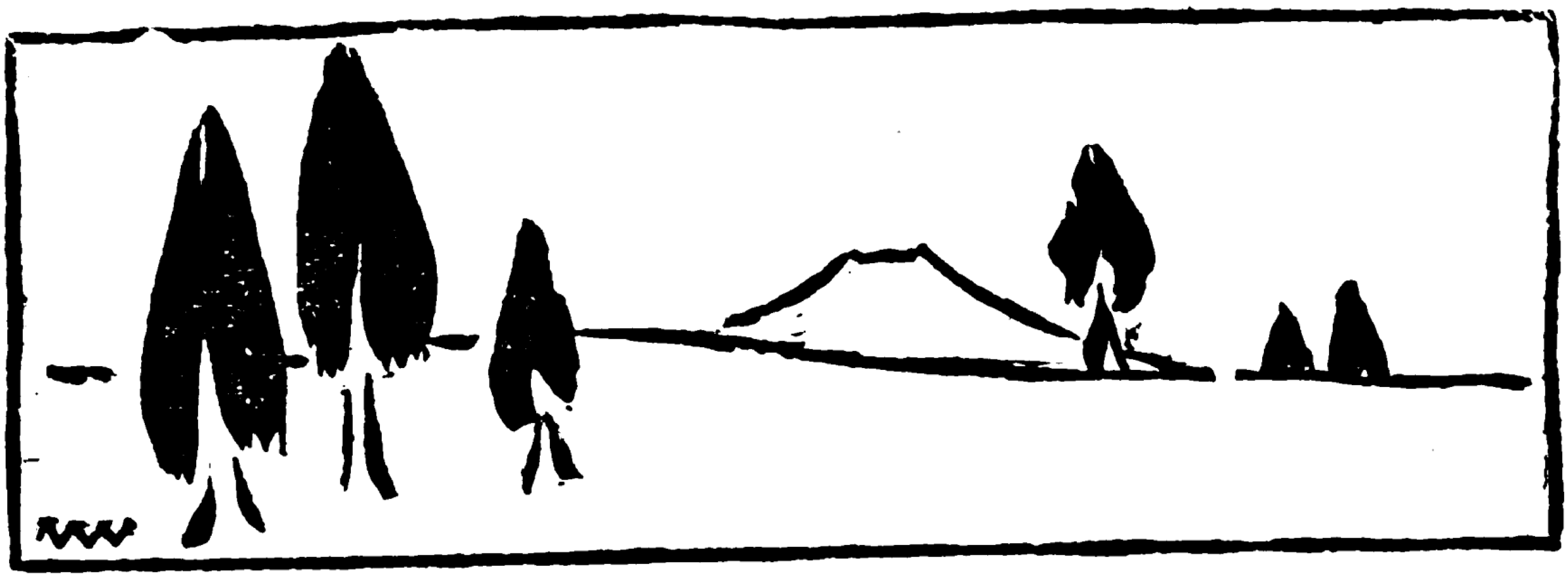
と、山崩れのやうな笑ひ聲が聞えた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

嵐は去つて、砂漠には又元の靜けさが來た　その一夜に數千年の時が流れた。夜が明けた時、もはや、そこには、白

い大理石の小さな一片すらも見出されない。風が砂の山を造り、又それを壞して、數百回ともなく過ぎて行つた後である。そんな一つの丘の上を、早くからキャンプをたゝんだ、ダンセニイ大尉と、私が加はつてゐる、カラチの群商の群が、駱駝の影を、桃色の朝日に照らされた砂上に長く引きながら、靜々と、その日の旅に出發を初めた。

晴朗な星座の下に張つた天幕のなかに、私が眠つたその夜もすがら、カシリナ砂漠の砂を吹く風のさゝやきに傳へられた、それは太古の物語であつた。



死滅する村

小川未明

村の人達の中で、幾人、東の空を昇る太陽を手を合はせて拜んだ者があつたか知れなかつた。

その時、町の教會へ行つてゐる娘が、太陽を拜むことなんかは、野蠻だと言つて嗤つた。村の人々は、町へ行くたびに、よく塔の如く頂きの尖つて、青空に聳える三角形の建物を見た時に、こゝに集る若い男女は、外國人からいろ〳〵の新しき智識を授かるのだと思つた。

古い傳統的の考へから、コスモポリタンの思想には、たとへ心の一部では共鳴しても遙かに信じ切れないある蟠りを村の人々は、基督教に對して持つてゐた。それで、智識をば尊敬しても、感情から彼等に深くは馴染まなかつた。

この村の一人の娘が、太陽を拜むことを野蠻だと言つて嗤つた時、年寄りは、顏の色を變へたのであつた。

「何が野蠻なんだ。お前達はじめ、お天道様のご恩を受けてゐるくせに、有難いとは思

はねえのか」

娘の言つたことを聞いた、其の老人はから言つて娘に詰問したのである。

すると、娘は、ます〳〵笑つた。

「太陽は、火の珠なんですよ。決して神様やなんかではありません。私達の住んでゐる地球のやうなものが燃えてゐるのです。この私達の地球もずつと前には、やはり太陽のやうに燃えてゐたのです。それを拜むなんて野蠻ぢやなくつて？先生がおつしやつたわ。硝子で天井を張つて、其の上で火をどん〳〵燃やしたと同じことだつて」

年寄は、ちやうど火のやうに眞赤になつて怒つた。

「なんだ。硝子で家根を葺いて、上で火を燃やせば、お天道様なんていらないつて？　外國から來た宣教師が言つたつて？　何、馬鹿をぬかしやがるだ。それで、穀物ができると思ふか。」

この老人の口から、この話が廣くもないこの村中に、いつとなしに廣まつた時、村の人々は智識については何うであつても、この年寄りの言ふことを正しいとした。そして、毎朝、家の戸口に立つて、東の空を仰いで太陽を拜む者は、それがために信仰を換へなかつた。

「なにを小癪な、あの阿魔が言ひやがるか」

少し年をとつた大者は、町の教會へ行く、其の小娘の村では一番ハイカラらしく見られた後姿を指して冷笑つた。

そればかりでない。其後町へ行つて、あの尖つた三角形の建物を見る時に、あすこで、外國の宣教師がそんなことを教へて、小娘達を徒らに年寄に反抗させる、つまらぬ生意氣を教へてゐるのかと、曾ては虔心で教會堂を眺めた眼にさへ、一種毒々しい目付で睨むやうにさしたのであつた。が、しかし、其の小娘も、この宣教師について旅へ行つてしま

ひ、年月が經つにつれて村人には、もはやこの種の新しい智識に對する反感も失せてしまつた。

ちやうど、其頃であつた。村には、青年によつて、新しい事件が醸された。

大工の伜であつたが、父親について仕事をしてゐるのでなかつた。「お前さんに、あんないゝ伜があるとは知らなかつた。なんで、家に置いて手助けをさせなさらん」と、途で遇つた人が、大工に向つてたづねた程、伜は、早くから親の傍から離れて、旅で流浪して來た。

「うちの伜にも困ります。親の言ふことは聞きません」と、人の好い大工は、眩しさうな目付をして相手の顔を見て、もう大分髮のうすくなつた頭を右手でつるりと撫でた。

南風の吹く日であつた。村の中の寺で、その伜が、旅で見たいろ〳〵の珍らしい話をするから、村の男達に集つてくれいといふのであつた。

村の男達は、大工の伜が、どんな話をするだらうといふ好奇心に驅られて、其の時刻に寺へと出かけた。中には、伜の顔をはじめて見るやうな人もあつた。また、ずつと子供の時分の伜を知つてゐるだけの人もあつた。

伜の他に、旅から來た友達だといふ二三の若者も加はつた。

その話といふのは、決して、面白い、またをかしい話でもなかつた。その中の脊の低い黑い色の洋服を着てゐた小柄の男は、工女の話をした。

毎年、至る處の村々へ勸誘員が入り込んで來て、金錢で親達を誘惑して、其の手から娘を奪つて行く。そして、其の娘がどんな風になつて行くかといふことと。工場で、負傷した時のこと、病氣した時のこと、そして、何故にかうしたあるまじき事實が社會に存在するかについて語つた、また、他の一人の青年は、各地の小作人と地主との事情を報告した。

最後に、大工の悴が起つた。彼の頭は、髮の毛が蓬のやうに延びてゐた。もう、日が暗くなつたので、ランプの他に處々蠟燭などを點けてゐた。

春であつたが、北國は、まだうす寒かつた。殊に、ガランとした御堂の中は、空氣は暗くなると共に底氣味の惡い程冷たかつた。しかし、人々は、唾を呑込んで、火影に搖れる、今起つた大工の悴の顏に見入つて默つてゐた。

「みなさん、私達の村は、亡びかゝつてゐるのに氣付きませんか。少し學問のある者や、またどうか、かうか暮しのつきさうな者は、みんな長い間、住み慣れた村を見捨て、もつと景氣の好さゝうな旅へと移轉するぢやありませんか。それは何のためですか？

みなさん、私達の村の中で、あの大きな屋敷を構へた金持や、地主の二三軒を除いて、明日の生活の心配なしに暮らし得るものがありますか。夏は、夏で働いて、冬は、冬で仕事や、內職や、夜業までして、それでも暮らして行けないとはどういふわけでせうか？

みなさん、昔は、恐らく、こんなことはなかつたでせう。もつと、私達の家々にも餘裕があつたのです。「これからは、一日ましに長閑になります。花は咲きます。鳥も鳴きます。さま〴〵の草が芽を出します。自然は、このやうに公平です。地の上に住む、すべての生物に慈愛の眼を向けるのです。しかし、私達人間は、お互に、同じやうに、この自然にさへ對して樂しむことができないのではありませんか。

みなさん、なぜそのことについて考へないのですか。昔は、もつと樂であつたものを。世の中が文明になつたにもかゝはらず、ます〳〵生活は、反對に苦しくなつて行く。なぜその矛盾については考へないのですか？

そればかりならいゝが、このお互に困つてゐる者同志が、嫉妬したり、反目したり、中傷し合つたりして、少しでも、

地主や、金持の愛顧に預かりたいとしてゐる。そんな無智なことがありますか。
「みなさん！　今は、目が醒めなければならない時なのです。それでなければ、私達の村は、もう亡びてしまふのです……」
かう、彼は言つた。みんなは默つて聞いてゐた。そして、毎日、生活の苦しいのは知つてゐたが、誰も、いまゝで自分達の村が亡びてしまふといふやうなことは考へなかつた。
　今日のことは、すべて、この村の人々にとつては、空前といつていゝ衝撃であつた。
暗い、星晴のした大空の下を、道を歩るいて歸つて行く彼等は、口々に只溜息と共に心の動揺を僅かに短かい言葉で洩らすばかりであつた。
　秋は、いつもよりか早く、この寒村に襲來した。もう、大工の伜は、とつくにこの地には止つてゐなかつたが、主義の宣傳からして、ある地方で收監されたといふやうな噂が村に傳はつたのであつた。
　人々は、あの髮の毛の延びた青年の面影を空に描いた。そして、一種悲壯な感じを身に覺えたのであつた。なぜなら青年の言つたことは、前に、太陽を火の塊りだと言ひ、そして、太陽を拜む者を嗤つた娘の言つたことゝと違つて、何か魂に感ずる何ものかゞあつたからだ。
「さうだ。一年中休みなしに働いてゐて食つていけないといふのは、間違つてゐることだ。どうしたつて、働いてゐる俺達にばかり、罪があるとは思へないこつた」
　村の年寄にもかういふ疑問が起つた。
「大工のうちの伜も、とう〳〵牢へ入つたといふぢやねえか」

「お上の御尊者だといふことを聞いてゐたが、滿更言ふことが間違つてゐるとは思へねえだ。から暮し向きが苦しくつちや、お前、今年のやうな不作が、來年もつゞいて見ねえ、なんで一揆が起らねえことがあるもんけい」

「それは、さうとあの伜なんかの仲間は、金持の金をみんな困つてゐるもんに分けてやるつて、いふんぢやねえかい」

「さうかな。俺、あとで聞いたこつたが、あの伜めが歸つてゐた間は、地主さん家では、火でも付けられねかつて、毎晩、嚴重に見張をさしたさうだぜ」

「村の者が見張をしたけい」

「なんでも、町から頼まれたさうだ」

「捕まつて牢へ行つたと聞かしたら、安心さしやつたらうの?」

「だが、また牢から出てくべえの、そして、俺達の村がこんなに困つてゐると知つたら、いつ大風の吹く時に、火を付けまいものでもねえ。今年のやうに不作でも、半分も自分のものになんねえのだからな」

この貧しい村は、やがて秋から、雪の降る冬に入つて行つた。そして、冬になると一層空は暗く、生活は陰氣になつたのであつた。

村には、數十軒の家があつた。大抵どの家も貧しかつた。貧しいうちにもいろ〳〵あつた。そして小作の傍いろ〳〵の副業をする者もあつた。また、借地もなく、自から耕やす土地を有たずに、たゞ他人に頼まれて、今日は、あちらの家へ行き、明日は、こちらの家へ來て、力役をして僅かに糊口を繋ぐ者もあつた。

大工の伜が言つたやうに、灰色の空の下に固まつた、この貧しい村が、いつか廢滅に歸するか知れなかつたけれど、そして、其の一軒、一軒の生活は異つてゐたけれど、中にはまた思はぬやうな成功を夢見てゐる者がないでもなかつ

た。そして、それも、畢竟、破滅に向つて急ぐ前の一つの現象であつたかも知れない。

「なあに、俺の事業が成功をすれや、この村の者は、みんな俺がいゝ給金を出して使つてやるぞ」と、其の男は、言つた。

村の人達は、中には、其時を心のうちで期待する者もあつた。また、ある者は、

「そんな山師が、昔から當つたためしはない」と、言つて、冷笑つた。

どうやら、其の男の言つたことも、今では立消えになりさうな氣がせられた。それればかりでなく、この秋頃から、その男の姿を見たものがなかつた。

十歳ばかりになる男の子が、獨り、ぼんやりとして、雪道の上に立つてゐた。子供の目付きは、遠くの鬱陶しい雲のかゝつた森を見ると、自から瞼が垂れ下るやうな、限りない悲しさに鎖されるのであつた。

「正治や、お父さんは何うした？　まだ留守かな」と、言つて、うしろから來た男が、大きな荒つぽい掌で、小さな頭を撫でたのであつた。

子供は、びつくりして、うしろを振向いた。すると、頭から黑のモヂリを被つた、大きな皺の寄つた顔が眼に映つた。その顔は子供には親しいものであつた。

「うん、まだ歸らない」と、子供は、答へた。

「いつ歸つて來るか、まだ分んねえのか」と、その年取つた男は聞いた。

「いつ歸つて來るんだやら……もう歸つて來ないつて、お母さんが言つた」と、子供の顔は、暗くなつた。

すると、その男は、聲を立て笑つた。

「馬鹿、なんで歸つて來ねえことがあるもんか。きつと待つてゐると歸つて來るだ。ぢきに春になるだもの」と、其の男は、言つた。

男は、あちらへ歩いて行つた。男の言つた言葉は、別に、この子供を慰める氣ではなかつたらしいが、むしろ自身に向つて言つたやうにも思はれたが、もうぢきに春になるといふことは、どんなにこの子供に、活々とした氣持を呼び起したらう。

子供の眼は、遙かに輝いた。彼の心は、もう、花の咲いた大野原の中に躍つてゐた。そして、さやかな流れを飛び越えて、蝶の後を追つてゐた。

ある夜、正治の家に泊つた男があつた。男は、黒い石のやうなものを紙に包んだのを持つてゐた。夜遲くなるまで、其の男と正治の父親とは話をしてゐた。ちやうどうす紅い花瓣のやうな蛾が、幾つも外から飛び込んで來て、ランプの蓋に、張り付けたやうに止まつてゐた。二人は、ひそ〳〵と眞面目に、小聲で話をしてゐると思ふと、大きな聲を立て愉快さうに笑つた。そして、最後には、酒を飲みはじめた。正治の母親は、幾度となく暗い道を歩るいて、酒屋へ行つて來たか知れなかつた。

「F河の上流ださうだ。まるで、黒光りのする洞穴の中へ入つたやうに、兩側に石炭がある。それは、無限にあるさうだ。其處を通行したものはあつたが、いまゝで誰も、石だとばかり思つて、石炭だと知つたものがなかつた。會社を組織して堀出しても、また大堅堀權を富豪に讓つても、どちらにしても大したものだ……」

父親は、正治の母親に語つた。

其後、父親は、すべての仕事を捨て、其の方に力をいれた。そして、家を空けることが多かつた。

東京から、いよ〳〵技師を迎へるといふまでには、どんなにいろ〳〵のことがあつたらう。

「技師さへ請合つてくれゝや。其の横濱の會社といふのは、全く買取る腹は充分あるんです。兎に角、技師を寄來すのですから……まあ、うんと技師の機嫌を取つて置く必要がありますね」

石炭を紙に包んで持つて來た男は、この日も父親といつしよに、技師の乘つてゐる汽車が、町の停車場に着く時刻を待ちながら言つた。

「人力車のきかない處は、三里、まあこれが背ですね。どうしても技師に歩るいてもらはなければならぬ」と、正治の父親は、頭を傾けながら言つた。

「仕方がありません。技師なんていうものは、平常山道を歩きつけてゐるから、さう苦にもいたしますまい」と、石炭の話を持つて來た男が言つた。

「F河の上流へは、私は、まだ行つて見ないが、此間途中まで行つたけれど、なか〳〵險阻な道でありませんか」と、父親は、思ひ出したやうに答へた。

「まあ、歸る時には、一等の旅館へ泊めて、懇ろにしてやるんですね」

「さうしなければならない」

「昨夜の旅費は、いつたい、どちらで持つのでせうね」と、この顏の淺黑い男が言つた。

「どういふことになつてゐるか、聞いて見るのですね。まあ、起るか、倒れるか、やりかゝつたことですから、物にしなければなりません。私は、二百五十圓だけ、借りて來ました」と、正治の父親は、相手に打開けた。

「私共も、今年の作は、投出してしまつて、春からこの方にかゝつてゐます。それで、會社が買はなくても、脈が深い

といふ保證が付けば、資金の出し手は、いくらもあります。株を募集してもいゝのです。そして、鑿堀をはじむれば、どん〳〵金を堀出すやうなものです」と、色の淺黑い男は、白い前齒を露はして笑つた。

「ぜひ、さうしなけれやならん。この村の者もみんな困りきつてゐる。小作をしても、出稼をしても、親子四人の者が食つて行けないのです。石炭でも堀れるやうになれば、みんな其方に使つてやります」と、正治の父親は、肩を聳かして言つた。

「もうかれこれ、三時半になりますぜ。汽車は四時五十分に着くでせう。もうそろ〳〵出かけませう」と、相手の男は帶の間から、時計を出して見ながら言つた。

日暮方、二人はぶつ〳〵と言ひながら、町の方から歸つて來た。技師はその汽車で來なかつたのだ。

「あゝ言つて、書いて來たものを來ない譯はあるまい」

「だつて、そんなやうな人は、汽車から降りなかつたやうだ。私は、プラットホームから目を他へ放さずに、出る人をぢつと見守つてゐた」

「ぢや、やはり來なかつたのかなあ」

二人は、しばらく落膽したやうに、また憤慨したやうに見られたのであつた。

技師は、其の日より二三日遲れて來た。そして、F河の上流へ視察に行つたのである。技師は、横濱に歸つた。返答をこちらでは期待してゐた。すると、手紙が來た。

一、土地不便にして、石炭を目的地に運び出すに容易ならざること、二、品質不良なるものが、良好なるものより多きこと、三、鑛脈の淺きこと。

是等の個條を擧げて、兎に角、買收の意志なしと言つて斷つて來た。

みんなは落膽した。しかし、春から夏にかけて騒いだ、勞力を空しくしてしまふ決斷は付かなかつた。正治の父親は石炭を持つて來た、色の淺黑い男と諸方に活動をはじめたのであつた。そのうちに、冬となつた。

日に、幾回となく、橇はこの部落を横切つて、あちらへと行くので、家の前を橇を曳いて行く男の掛聲が起つた。

「ホイショ、ソレ、ヨイコラ」

橇は、雪の上を滑つて行つた。中には、この寒空に、素裸になつて、太い綱を肩にかけて、前こゞみになつて曳いて行く男もあつた。その男の體の皮膚の色は赤銅色をしてゐた。刺すやうな、冷たい風が吹いたけれど、男の體は汗で濡れてゐた。そして、手拭で鉢卷をした額際からは、大粒な汗の雫が滴つてゐた。

「ホイショ、ヤレコラ」

呻くやうに、また吼えるやうに、赤銅色の男は、後に鐵のやうな腕を廻はして、太い綱を握つて、雪の山を上つたり下つたりした。家根の上から、また、木の上から落された雪は、いくつかの丘を平野の間に造つてゐたのであつた。そして、その坂を下る時に、橇は波を切つて進む蒸汽のやうに、雪を左右に刎ね飛ばした。

赤銅色の男は、人間とは思はれなかつたやうに、野獸を思はせた。橇の上に乘つてゐる人は、黑い外套を眼深に被つて、其の眼は、茫漠とした、雪の押默つた平野を見ようともせずに、ぢつと前を見詰てゐた。さながら、喪心した人のやうに、憂愁を帶びた眼は、物を見るのでなく、空虚を睨んでゐたのであつた。

其の人は、どこへ、かうして橇に乘つて行くか知らなかつた。たゞ、橇の過ぎた跡は、雪の上が研ぎ澄されたやうにちやうど鏡の面のやうに光つてゐた。雲切れのした空が、その上に映るかとさへ思はれたのであつた。

正治は、父が、橇に乘つて、どこからか歸つて來はしないかと、戸口に立つて、あてなく待つてゐたが、つひに父は歸らなかつた。そのうちに、冬も、だん／＼終りに近づいたのであつた。

雪と、雨まぢりの霙とが降るやうになつた。木の枝の上に溜つてゐた雪が、水氣を含んで人の知らぬ間に、野原の中では、枝から滑り落ちてゐた。廂からは、音を立て、大きな雪の塊まりが落ちた。日のうすく射した日には、その奇態な灰色の影が、窓の障子の面に映つたりした。

暖氣が加はると、一體に、雪の上はきしんだ。そして、旅人の草鞋の音が、家の中にゐても、はつきりと耳につくやうになつた。

もう、春が來るのだ。毎日、南の方が明るくなつて、國境の山を越えて、なまあたゝかな風が吹いた。「今年は、どうだらう？　自分達の上に、仕合せがあるだらうか？」と、みんなは、さう心の中で思ふのであつた。

「お父さんは、歸つて來なさらないか知らん」と、正治は、毎日、晩方になると思つた。

「春になると、歸つて來る」と、いつか、村の男が言つた。その言葉を正治は、信じてゐるのだ。

母と子は、さびしくランプの下で夕飯を終つた。そして、寢に就く前に、いろ／＼とたよりない空想に時を過すのであつた。

一頃のやうに、吹雪もしなければ、かうして起きてゐても、いくらかは暖かになつたやうだ。ランプの火影さへ、なんとなく嬉しさうに鳴つて燃えてゐた。

しかし、それは、空想だつた。隣家では、黍を挽いてゐる臼の音がしてゐる。米ばかりを食べられないので、あゝして黍の粉を造つて、それを粥にして食べるのであつた。

「お母さん、こんどのあの足音は、お父さんらしいね」と、正治は、外を通る足音に耳を澄ましながら、母に言つた。

母は、ぼんやりとして、沈んだ顔付をして何か考へてゐるらしかつた。それで、口の中で、かすかに返事をしたばかりであつた。

草鞋の音は、遠くから、だん〴〵近づいて來た。そして、すぐ家の戸口で、ピシヤ、ピシヤと一際音高く鳴つた。この時、正治の胸は轟いた。今にも、其の足が、戸口に跳り込むやうな氣がしたからだ。

しかし、折角近づいた足音は、また、遠ざかつてしまつた。正治は、捕へた小鳥を、手の中から逃がしてしまつたやうに、がつかりしたのである。

それからは、來る足音も、來る足音も、みんな前を空しく通り過ぎて、行つてしまつた。外は、全く暗くなつた。足音は杜絶えた。そして、あたりはしんとしてしまつた。外の雪の上が靜かに、冷たくなつたやうに、空氣は刃金のやうに冷たかつた。この時、まだ隣家では、粉を挽く臼の音がしてゐたのであつた。

隣家の主人は、雪が降つて、外の仕事がなくなつてから、行商をして歩いてゐた。

主人は、箱の中に、幾何の蠟燭と紙や筆などを收めてゐた。そして、町に遠い、部落から、部落を廻はつてゐた。性質の好い五十に近い男であつたが、昔のやうに快活に笑ふことも少なくなつた。末の娘が、もう長い間床に就いてゐた。そのことはどんなに彼の心を傷めたか知れなかつた。

娘は、まだ十二か十三の年頃であつたが、長い間床に就いてゐて、髮の毛は拔けてうすくなつてゐた。そして、骨と皮ばかりに瘦せてゐたけれど、頰の色だけが、巴旦杏の熟したやうに、いつ見ても美しかつた。仰向いて、兩手を胸のあたりに組んで、大きな黑い眼を見張つて、天井張を見詰てゐる樣子は、どうしても蠟細工の人形を思はせずには措か

ながつた。

醫者は、町から十日目毎に、見舞つて來る位のものであつた。醫者の來たことは、其家の前に、黒い橇が止まつてゐるので分つた。

「歩るいて來てくんなされやいゝものを、橇になんか乘つて來なさるので、金がかゝつて困ります。それも助かるものならいゝのですけれど、雪の消える時分までは、請合はれないとお醫者さんはおつしやるのです」と、隣家の主人は、鼻を詰らして見舞を言つた人に言つたのであつた。

主人にすれば、毎日、三里、四里の道を歩るいてゐるので、醫者が町から、十四五町足らずの處を橇に乘つて來るのは贅澤に感じたのも無理はなかつた。そして、主人が行商をして得る一日の利益といふものも、橇に拂ふ代金には足らなかつたのであつた。

しと〳〵と降つてゐた霙は、いつしか乾いた雪に變つた。ぽたり、ぽたりと雪の降るのを見ると、まだ春は、遠い處にあつた。

正治は、あちらから頭巾を目深に被つて、杖をついて歩るいて來る、もう年寄りに近い女を見た。

「また、あの小母さんがやつて來た」と、彼は口のうちで言ひながら、急いで、家の內に入つて、そのことを母親に告げた。

母親は、暗い顏付をした。そして、何となく當惑したやうな樣子に見られた。この時、戸口で雪を拂ふつゝましやかな音がして、頭巾を被つた女は家の內に入つて來た。

「まだ、お歸へんなさいませんか」と、女は、言つた。多く言葉も交へないうちに、はや女はその顏に心の不機嫌を現

はしてゐた。

「どうしたんですか、まだたよりがありませんか」と、正治の母親に、女の顔をも見ずに、代目になつて、言譯けらしく言つたのである。

「たよりもないつて、まさか、死になされたのでもありますまい。もう金を返して下さる期限の來てゐることは、何處にゐらしても分る筈ですのに」と、頭巾を被つた女は言つた。

「左樣でございますとも」

「まだ、先月の利息も、もらはないのです。今日は、利息だけでも頂いて行かなければ、私だつて、他に、金の入るところはなし、暮らしていけません。この雪の中、町からこゝまで、かうやつてたび〳〵やつて來るのは、容易でありません。先達は、歸りに二度も轉びました。いくら相手が女だといつて、いつも來るたびに、いゝ加減なことを言はれては約束もなんにもあつたものでありません」と、頭巾を被つた女は、怨み言を述べ立てた。

母親は、首垂れて聞いてゐた。そして、相手の言ひ終るのを待つて、

「いゝえ、決して、そんな譯ではありませんが、山の方が思はしくいかなかつたもので、ご迷惑をかけましたやうな譯で、しかし、もう、今日にも歸つて來るかと、そればかり待つてゐるのでございます」と、母親は言つた。

頭巾を被つた女は、色白の顏を半分あらはしてゐた。

「私は、何も山をあてにしてお貸し申した譯でなし、期日までに返してもらへばいゝのです。別に、有り餘る金があつて、人樣にお貸しするのではなし、獨り者の暮らしに、少しばかり死んだ夫から讓られた金を賴りにしてゐますものを、利息も、もらへなくては、私は、どうしてこの先き暮らしていかれますか。今日は先月分の利息だけでもいたゞか

なければ、歸られません」

正治の母親は、町から、雪道を歩るいてやつて來た、この女に同情せずにはゐられなかつた。

この頭巾を被つた女は、ある軍人の未亡人であつた。その軍人は、生前は、この女房を虐待したのである。軍人は、酒飲みで、その上一通りでない癇癪持であつて、ちよつとしたことにも腹を立て、ひどく女房を叱つた。だから、女房は、心に思つたことも主人の前では言へなかつた。たゞ何か言つて叱られることを怖れたからだ。それで、人形のやうに默つて服從してゐた。軍人は、戰爭のはじまつた時に召集された。そして、戰死を遂げたのであつた。そのために、未亡人は、下賜金があつた。彼女は、後の半世をこの金を賴りに生活すべく殘された。

正治の父親は、ある人の紹介で、この未亡人から、いつかの二百五十圓を借受けた。未亡人は、その金を銀行へ預けて置いたのでは、思ふやうに利子が取れなかつたから、常にいゝ借り手があつたらばと思つてゐたので、ついその金を正治の父親に貸したのであつた。

頭巾を被つた女は、三日にあげず、町から金の催促にやつて來た。正治は、その姿を雪の上に見出すと、また、あの女がやつて來て、母親を苦しめるのかと小さな燃えるやうな瞳で睨んだ。

ある時、頭巾を被つた女は、正治の家に來て土間へ杖を投げ出して、自分は土の上に坐つて泣いた。

「私みたいな不幸な女があらうか。夫には死に別れ、他に賴る者はなし、全くの獨り身なのに、僅かばかりの金を無くしてしまつたら、この先どうして暮らして行かう?」

女は、ほんたうに、身も、世もないやうに慟哭した。

「けつして、私共は、あなたからお借り申した金は倒しはいたしません。どうか、さういつてお腹を立てずに下さいま

し」と、正治の母親も泣いたのであつた。

頭巾を被つた女は、とぼ〳〵と町の方へ雪道を歩るいて歸つて行つた。其時、村は、もう晩方近くなつて、餌を欲しがつてゐる烏が家々の附近に降りて啼いてゐた。

「大工の悴が、歸つた樣子はないかね」

ある日、巡査が村に入つて來て、其の近所の人を捉へて聞いてゐた。

「知りませんね」と、其の人は答へた。

巡査が男と立話をしてゐるので、何か珍らしいことでも起つたのかと、人々が、雪道を歩いて其の傍に寄つて來た。

「なあ、大工の家の悴は、歸へんないだらうな。お前は知んねえか」と、巡査に、最初訊ねられた男は、他の男を顧みて言つた。

「歸へんねえだらう。俺、見やしねえもの」と、其の男は答へた。

「あんな者が村にあると、平和を亂していかん」と、巡査は言つて、去つてしまつた。

その後で、村の人々は、立つて巡査の後姿を見送りながら話をしてゐた。

「この頃、大工さあを見ねえが、どうしたらうな」と、其の悴の父親のことを噂してゐた。

「さうだな。ちつとも顏を見ねえなあ、信州へ出稼するつて、いつか言つてゐたから、行たんでねえか」

「旅は、景氣がいゝかなあ」

「お前、こつちにゐては、仕事なんかあらう筈がねえだもの」

「いつか、大工の悴が言つたが、俺達の村は亡なつてしまふかも知んねえぞ。春になれや仕事が忙しくたるだが、いく

ら働いても食つていけんには、仕方がねえからな」

「去年は、絹糸が安かつたから、俺、桑を作つて、手間代だけ食込んぢまつた。年貢が下らないし、桑園を借りたつて肥料には金がかゝるし、それに去年なんか、桑の出來は好かつたが、糸が下落したとかで、桑の價まで下つてしまふ。こんな馬鹿々々しいことはありやしない」

みんなは、口々に生活の苦しくなつて行くことをつぶやきながら散つてしまつた。しかし、もう春が近づいてゐることは分つた。雪はだん／＼に低く、消えつゝあつた。今迄、圃も、田も、また小さな林も、みんな幾尺となく積つた雪の下になつてゐたのが、少し雪が少なくなると、だん／＼下から木の枝などがあらはれて來た。路傍の柳の木の枝にも、赤い芽の色が、日にまし鮮かになつて行つた。

河水は、轟々と音を立て流れるやうになつた。小鳥は、群をなして、晩方の雲切れのした、飴色の空を遠く飛んで行くのが見られた。春は、また、すべての草や、木や、人間を暖めるべく、この寒村にやつて來た。

しかし、村の人達は、このなつかしい春に深い惠みと喜びとを感ずるにつけ、いつか大工の悴が言つたやうに、苦しみなしに、春に對して笑ふことができるだらうか？ と、疑はないであらうか。

冬の間、死んだやうに、默り込んでゐた村にも、其處、此處に、笑ひ聲が聞えるやうになつた。もう雪は、そんなに降らなかつた。

「人が死んでゐる」

かういふ聲が、村の道の上で聞かれた。そして、あちらの村端の方へ、澤山人が駈け出して行つた。

「どこの者だ」

村の人は、道でない、雪の野原の中へ入つて行つた。其處に、黒いものが倒れてゐたからだ。いつの間にか、野原の中は、人の群で黒くなつた。

「久三郎ぢやねえか」

「久三郎だ」

村の人々は、かう言つた。

この男は、四五年前、妻を失つた。息子は昨年の春、鐵道省に勤めてゐて、汽罐車に觸れて死んだ。其れ以來、獨り寂しい生活を送つてゐた。無口の久三郎は、郵便配達夫になつた。しばらく、其の職をつとめてゐたが、二月ばかり前に、山の麓に親類があると言つて、家を閉めて出かけた。留守の間、雪は其の小さな家根に小山のやうに積つた。

「久三郎は、何をしてゐるだらう」と、近所の人々は、其の家根を見ながら噂をしてゐた。

「この雪ぢや、家が潰れてしまふに」と、人々は、言つた。そして、二人、三人、近所の人々が、久三郎の家根の雪を降してやつたのであつた。

屍は、半分腐爛してゐた。眼や、鼻のあたりを烏が啄いた痕があつた。

「狐にでも、だまされて、こんな野原の中に來て、吹雪倒れをしたのではなからうか」と、一人が言つた。

「何、こゝまで來て死ぬ奴もねえもんだ。腹が減つてのめつたんだらう」と、他の一人が言つた。

「何にしても、可哀さうなことをしたな」

「女房が死んでから、鬱いでゐたものなあ」

「また、春にでもなれば、いゝことがあつたらうに」

各自に、村人は、屍を取卷いて話をした。子供等は、もう、春が來るので元氣であつた。何か、珍らしい、面白いことでもあるやうに傍に寄つて來て、わい／＼言つてゐた。

この日も、雲切れがして、入日の西の方の空は、なつかしげに明るく、飴色がかつてゐた。梢は、黑く、光澤を帶んで、すが／＼しさうに、暮れて行く空の下で、脊伸をしてゐた。足許の雪が、だん／＼消えて、一日ましに幹があらはれて來るからだ。

烏は、頻りに啼いてゐた。村からは、靑い煙が上つてゐた。やがて、人々は、共の屍を家の方へ運んで行つた。野原の中は、二たび寂寞に返つた。そして、この暮方の一瞬間、雪のはてしない野原と、物悲しさうな空とが落合つた處で抱合ふやうに接吻した。それから、だん／＼暗くなつて行つた。

夜になると、相變らず、嵐の音が凄まじかつた。

――一九二三、一作――

父の葬式

葛西善藏

いよ／＼明日は父の遺骨を携へて歸郷といふ段になつて、私たちは服裝のことで烏渡當惑を感じた。父の遺物となつた紋付の夏羽織と、何平といふのか知らないが藍縞の袴もあることはあるのだが、いづれもひどく時代を喰つたものだつた。弟も前年細君の父の遺物に贈られた、一族のことで同じ丸に三つ柏の紋の付いた絽の羽織を持つてゐるが、それはまた丈がかなり短かゝつた。

『追而葬式の儀は一切簡略致し――と葉書で通知もしてあるんだから、いつそ何も彼も略式といふことにしてふだんのまゝでやつちまはうぢやないか。折角大事なお經にでもかゝらうといふやうな場合に、集つた人に滑稽な感じを與へても困るからね』と、その前の晩父が昨年の十一月郷里から持つて來た行李から羽織や袴を出して見て、私は笑ひながら云つたりした。

『そんなものではないですよ。これで結構間に合ひますとも。その場に臨んで見ると、こゝで思つてるやうなものぢやないですよ』と、義兄は私たちを勵ますやうに云つた。

『それではひとつ豫習をして見るかな。……どうかね、滑稽ぢやないかね？……お前も羽織を着て並んで見ろ』と、私は少し酒を飲んでゐた勢ひで、父の羽織や袴をつけて、斯う弟に云つたりした。

『何で滑稽だなんて。斯んな阿呆らしいことばかし云つてる人見たことはない……』と、私とは十近くも違ふ姉は、さすがにムツとした樣子を見せて云つた。

『まあ兎に角先方へ行つた上で、集つた人たちの樣子に依つて第一公式にするか、第二公式にするか、まあさういふことにしようぢやありませんか』と、弟も笑ひながら云つた

朝落合の火葬場から持つて來たばかしの遺骨の前で、姉夫婦、弟夫婦、私と悴――これだけの人數で、さびしい最後の通夜をした。東京には親戚と云つて一軒もなし、また私の知人と云つても、特に父の病死を通知して悔みを受けていゝといふほどの關係の人は、ほとんど無いと云つてよかつた。ほんの弟の勤めさきの關係者二三、それに近所の人たちが悔みを云ひに來て呉れたきりだつた。危篤の電報を石ノ卷に居る義兄へだけ打つたが、それは七月十一日の晩で、十二日の午後姉夫婦が驅けつけ、十三日の朝父は息を引取つた。葬式の通知も郷里の伯母、叔父、弟の細君の實家、私の妻の實家、これだけへ來る十八日正二時弘前市の菩提寺で簡單な燒香式を營む旨を書き送つた。

十七日午後一時上野發の本線廻りの急行で、私と弟だけで送つて行くことになつた。姉夫婦は義兄の知合ひの家へ一晩泊つて、博覽會を見物して歸るつもりで私たちより一足さきに出かけた。私たちは時間に俥で牛込の家を出た。暑い日であつた。メリンスの風呂敷包みの骨壺入りの箱を膝に載せて、弟の俥は先きに立つた。留守は弟の細君と、私の十四の悴と、知合ひから來て貰つた婆さんと、昨年の十一月父が出て來て二三日して産れた弟の男の赤んぼとの四人であつた。出て行く私たちより留守する者たちのさびしさが思ひやられた。

昨年の八月義母に死なれて、父は身邊一切のことを自分の手で處理して十一月に出て來て弟たちと一緒に暮すことになつたのだが、やう〳〵半年餘り過されたゞけで、義母の一周忌も待たず骨になつて送られることになつたのだつた。實の母が死んですぐその年に義母が來たのだが、それからざつと二十年の間私たちは大部分旅で暮して來て、父とも親しく半年と一緒に暮した憶えもなく過して來たやうな譯で、やう〳〵これから一緒に暮せる時が來た、せめて二三年は生きて貰つて好きな酒だけでも飮ませたいと思つた甲斐もなく、父自身にしても私たちの子供等の上に深い未練を殘して行つた。永年の持病の脚氣が死因だつた。鎌倉へも二度來た。二度目はこの三月で、私の部屋借りの寺へ二晩泊つて上機嫌で酒を飮んで弟にお作されて歸つて行つたが、それが私との飮み納めだつた。私は弟からの電話でこの八日に出て來たが、それから六日目の十三日に父は死んだのだつた。

『やつぱし死にゝ出て來たやうなものだつたね。あゝなると幾らかそんなことがわかるものかも知れないな。それにしても東京へ出て來て死んで東れてよかつた。田舍にゐられたんだとなか〳〵面倒だからね。斯う簡單には片附けられはしないよ。……さう〳〵、昨年のおふくろの時も、丁度この汽車で僕等は歸つたんだよ』

『さうでしたね。あの時も隨分暑かつた』

『さうだつたなあ……』

ヘンに目立つやうな眞四角な風呂敷包みを三等車の網棚に載せて、その下の窓際に腰かけながら、私たちは斯う呟き合つたりした。不憫なほど窶れ切つた父の死際の面影が眼に刻まれてはゐたが、汽車に乘り込んで私たちは稍ホツとした氣持になつた。もうあとは簡單に葬つて來さへすればいゝのだ――がさすがに食堂へ行つて酒を飮んで來る氣にもなれず、睡つて置きたいと思ひながら睡れもしなかつた。

『おやぢはもうどの邊まで往つたらうか。生きてるうち脚に不自由したので、死んでから大いに駈け廻つてゐるんぢやないかな』

『いや、まだ引導も渡されてないんだから、どこへも往きやしないでせうよ。お寺で吾々の行くのを待つてるでせうよ』

『まあさうだらうな。それにしてもなか〱いゝおやぢだつたね。子供等には隨分厄介をかけられ通したが、子供等にはちつともかけてゐない。死んだ後にだつて何一つ面倒なことつて殘してないし、實に簡單明瞭な往生ぢやないか。僕なんかにはちよつと眞似が出來さうにないね。考へて見るとおやぢ一代の苦勞なんてたいへんなものだつたらうよ。唯これで、第一公式なんていふことなしに、ボカ〱と濟まして來られるんだと申し分ないがなあ……』

『大抵大丈夫でせうよ。ほかに來る人つてもないんだから、このまゝだつて構やしませんよ。また着るとしても、ほんのお經の間だけでせう』

『何しろ簡單なもんだな。葬式といふ奴も斯うなると却つて愛嬌があつていゝさ。また死ぬといふことも、考へて見ると鳥渡滑稽な感じのものぢやないか。先の母の死んだ時は、まだ子供の時分だつたせいか、隨分怖かつたがね、今度のおやぢの場合は、ひどくいぢらしく不憫な氣はされたが、また死ぬといふことが何となく滑稽なやうな氣もしたね。すつかり赤んぼ見たいになつて、佛面になつちまつてるのに、まだ未練らしく唇なんか動かしたりして、それが如何にも死んで行くのが情けないと云つた風ぢやないか。あんなおやぢがなあと思ふと、氣の毒でもあり、また、もうよくわかりましたからおとなしく目をお瞑りなさいと、僕は可笑しくなつたが、この上また葬式まで僕等にかゝつて滑稽化されたんでは、おやぢの佛も浮ばれないんぢやないか知ら』

『いや、おやぢは僕等の行屆かないことだつて何だつて、みんなわかつて呉れてますよ。往生が好過ぎるんで、滑稽にも感じられたんでせう。年だつて六十五といふと、そんなに不足といふ方でもないんだし……』

『さう云ふとそんなものだがな……』

青森へは七時に着いた。やはりいゝ天氣であつた。汽船との連絡の待合室で顔を洗ひ、そこの疊を敷いた部屋ではいつて朝の辨當をたべた。乘替への奧羽線の出るのは九時だつた。

『それではいよ〳〵第一公式で繰出しますか？』

『まあ袴だけにして置かうよ。餘り改つた風なぞして鐵道員に發見されて罰金でも取られたら、それこそたいへんだからね』

私たちはまだ斯んな冗談など云ひ合つたりしてゐたが、やがて時間が來て青森を發車すると同時に、私たちの氣持もだん〳〵引緊つて來た。一昨日は落合の火葬場の歸り、戸山ケ原で私は打倒れさうになつたが、今朝は氣分もはつきりしてゐた。三つ目のN驛は妻の村であつた。窓から顔を出して見ると、プラットホームの乘客の間に脊丈の高い妻の父の羽織袴の姿が見え、紋付着た妻も、袴をつけた私の二人の娘たちも見えた。四人は前の方の車に乘つた。妻の祖母と總領の嫁さんとは私たちの窓の外へ來て悔みを云つた。次ぎのK驛では五里ばかし支線を乘つて來る伯母をプラットホームに捜したが、見えなかつた。次ぎが弘前であつた。

弟の細君の實家――と云つても私の家の分家に當るのだが――お母さん、妹さん、兄さんなど大勢改札口の外で、改つた仕度で迎ひに出てゐて呉れた。自働車をやつてゐるので、長兄自身大型の乘合を運轉して、昔のまゝの狹い通りや、空濠の土手の上を通つたりして、何十年にも變りのない片側が寺ばかしの陰氣な町の菩提寺へと乘付けた。伯母はもう

一汽車前の汽車で來てゐて、茶の間で和尚さんと茶を飲んでゐた。たつた一人殘つた父の姉なのだが、伯母は二ケ月程前博覽會見物に上京して、父のどこやら元氣の衰えたのを氣にしながらも、斯う遠くに離れてはお互ひに何事があつても往つたり來たりは出來ないだらうから——斯う云つて別れたのだが、やつぱしさう云ふことになつた。

「どこで死ぬのも同じことだから、お前たちの傍で死んで來て、これほどのことはない。お前たちもお互ひに仕合せだつた……」私たちが挨拶すると、伯母はちよつと目をしばたたきながら云つた。

六つ七つの時祖母につれられて來た時分と、庫裡の樣子などほとんど變つてゐないやうに見えた。お彼岸に雪解けのわるい路を途中花屋に寄つたりして祖母につれられて來て、この部屋で痘痕の和尚から茶を出された——その和尚の弟子が今五十幾つかになつて後を繼いでる譯だつた。自分も十五六年前までは暑中休暇で村に歸つてゐると、五里程汽車に乘つてお盆の墓參りに來たものだが、其後は一度も訪ねてなかつた。父も不幸な沒落後ほとんど三十年ぶりで、生れ故鄕の土に眠むるべく、遙々と送られて來たのだつた。途中自働車の中から、昔のまゝの軒庇しを出した家並みの通りの中に、何年にも同じ古びさに見える自分等の生れた家がちらと眺められて、自分は氣づかないやうな風をしてゐたがちよつと悲しい氣持を誘はれたりした。

本堂の傍に、斯うした持込みの場合の便宜のために、別に式壇が設けられてあつて、造花など一通り飾られてあつた。そこへ位牌堂から先祖の位牌が持出されて、父の遺骨が置かれた。思ひがけなかつた古い親戚の人たちもぽつ／＼集つて來た。村からは叔父と、叔母の息子とが汽車で來た。父の妹の息子で陸軍の看護長をしてゐるといふ從弟とは十七八年ぶりで會つた。九十二だと云ふが血色と云ひ肉附きと云ひ、どこにも老衰の兆しの見えないやうな親戚の老人は、父の子供の時分からのお師匠さんでもあつた。分家の長兄もいつか運轉手の服裝を改めて座につき、仕出し屋から運ばれた

簡單な精進料理のお膳が二十人前程並んで、お銚子が出されたりして、稍〻なかなかのお葬式めいた氣持になつて來た。それからお經が始まり、更に式場が本堂前に移されて引導を渡され、燒香が濟んですぐ裏の墓地まで、私の娘たちは造花など持たされて形ばかしの行列をつくり、そこの先祖の墓石の下に埋められた。お團子だとか大根の刻んだのだとかは妻が用意して來てあつた。それから後に殘つた人たちだけ最初の席に返つて、今度は百ケ日の供養のお經を讀んで貰つた。それからまた、丁度パラ〳〵落ちて來た雨の中を、墓まで往復した。これで百ケ日の法事まですつかり濟んだと云ふ譯であつた。

『その代り三年忌には、どうかしたいと思ひますね。その時にはいつしよの佛樣もだいぶあるやうだから。今度は斯んなことでおやぢに勘辨して貰はう』と、私は父とは從妹の、分家のお母さんに云つた。

『ほんとにさう思ひますか？ほんとにさうしておあげなさいよ。あなたのとことわたしのとこ位ゐのものですよ、本家分家があんな粗末な位牌堂に同居してるなんて。NのにしてもSのにしてもあんなに立派でせうが……』お母さんは感慨めいた調子で云つた。同姓間の家運の移り變りが、寺へ來て見ると明瞭であつた。

最後まで殘つた私と弟、妻の父、妻と娘たちとの六人は、停車場まで自動車で送られ、待合室で彼女たちと別れて、彼女たちとは反對の方角の二つ目の驛のOと云ふ溫泉場へ下りた。

『やれ〳〵、ご苦勞だつた。これでまあどうやら無事に濟んだと云ふ譯だね。それでは今夜はひとつゆつくりと、おやぢの香典で慰勞會をさして貰はうぢやないか』

連日の汗を旅館の溫泉に流して、夕暮れの溪川の音を座敷から聽いて、延びた鬚をこすりながら、私はホツとした氣持になつて云つた。

『まあこれで、順序通りには行つたし、思つたよりも立派に出來た方ですよ。第一公式なんかの滑稽は構はないとしても、金の方でボロが出やしないかとビク〳〵だつたが、それもどうやら間に合つたんだし、大事な人たちは來て呉れたし、まあ結構な方でせう』會計や事務一切を任されて來た弟の窶れた顔にも、初めて安心の色が浮んだ。

『戒名は何とか云つたな？……白雲院道屋外容居士か……成程ね、やつぱしおやぢらしい戒名を附けて呉れたね』

『さうですね。それに如何に商賣でも、あゝだしぬけに持込まれたんでは、坊さんも戒名には困つたでせうよ。それで斯う云つた漠然としたところを附けて呉れたんぢやないでせうか』

『いやどうしてなか〳〵、よくおやぢの面目をつかんでるよ。外容居士もう今頃はどの邊まで往つてるか……』

いつまでも盡きないおやぢの話で、私たちは遲くまで酒を飲んだ。明日はこの村の登記所へ私たちは一寸した用事があつた。私たちの村はもう一つ先きの驛なのだが、父が村に僅かばかし遺して行つて呉れた畑などの名義の書き替へは、やはりこゝの登記所で濟まさねばならなかつた。それだけが今度の殘務だつた。

『登記所の方が濟んだら、明日はどうしませうか』

『さうねえ、斯んな場合はどこへも寄らないものだと云ふから、また引直して來るまでも一先づ歸らうか。來た時と方面を變へて、奥羽線で一直線に歸らうぢやないか。葬式を出した後といふものは隨分さびしいものなんだらうが、斯うしたところに引かゝつて居ると、さつぱりヘンな氣持のものだね。遠くまで吾々で送つて來たといふよりも、遠くへまで片附けにやつて來たといふ方が、どうも適切のやうな氣もするね……』

この邊一帶に襲はれてゐると云ふ螟蛾を捕へる大篝火が、對岸の河原に焚かれて、焔が紅く川波に映つてゐた。さうしたものを眺めたりして、私たちはいつまでしても醉の發して來ない盃を重ねてゐた。――十二年一月――

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町　東京堂
同　神田區裏神保町　上田屋
同　京橋區銀座三丁目　東海堂
同　京橋區元數寄屋町　北隆館
同　日本橋區本石町　至誠堂
同　本鄕區春木町　盛春堂
大阪市北區梅田町　盛文館
同　北區東梅田町　立盛堂
京都市七條停車場前　共盛社
同　四條西洞院　前田大誠社
名古屋市富澤町　中京堂
朝鮮京城本町二丁目　日韓書房

◉定價　金八拾錢郵税金貳錢五厘（海外郵税貳拾八錢）
但支那を除く

冊數／國別	内國	外國
六冊	金四圓八拾錢	金六圓四拾八錢
十二冊	金九圓六拾錢	金拾貳圓九拾六錢
以上郵税共		

▲但し新年號春秋二期附錄號増刊號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は内國は金拾參圓六拾錢外國は金拾八圓參拾六錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし

送金注意

一誌代郵税　は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一振替貯金　口座は東京三十四番なり
一郵券代用　は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割増にて代用せらるゝを拒まず
一代金引替　小包の取扱は一切謝絶す
一集金郵便　御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
一金一圓迄　金六錢
一金五圓迄　金七錢（集金委託料及送料共）
一金拾圓迄　金八錢
但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌發送せず
一中央公論及婦人公論　代金取り纏め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ
一受領證請求　は必ず返信料を要す

大正十二年一月二十五日印刷納本
大正十二年二月一日發行　（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木酉三

發行所　東京市本鄕區本鄕三丁目六番地　中央公論社
電話　小石川一四四
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING CO., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Enterrd at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.